群書類從 第拾輯

東京

續群書類從完成會

群書類從第拾輯目次

和歌部

卷第百四十六
拾遺抄……花山院……一
卷第百四十七
後葉和歌集……三一
卷第百四十八
續詞花和歌集……藤原清輔……六一
卷第百四十九
玄玉和歌集……一一四
卷第百五十
現存和歌六帖……一四四
卷第百五十一
秋風抄……小野春雄……一七七
卷第百五十二
雲葉和歌集……一九三
卷第百五十三
新和歌集……冷泉爲氏……二三三
卷第百五十四
續門葉和歌集……二七三
卷第百五十五
續現葉和歌集……三二一
卷第百五十六
臨永和歌集……三五六
卷第百五十七
藤葉和歌集……三八九
卷第百五十八
玄々集……能因……四一六
今撰和歌集……四二三
柳風和歌抄……四三三
卷第百五十九
新撰和歌……紀貫之……四四〇
金玉集……柿本末成……四四八
三十六人撰……藤原公任……四五一
後六々撰……藤原範兼……四五五

新三十六人撰……………………………………四五九
卷第百六十
爲家卿千首 中院禪門千首 貞應二年八月 ……………四六九
卷第百六十一
詠千首和歌……………………………藤原師兼…四八九
卷第百六十二
詠千首和歌……………………………宗良親王…五二八

群書類從第拾輯目次終

群書類従巻第百四十六

和歌部一

拾遺抄巻第一 顯昭法橋注本作二拾遺和歌抄一

花山院御撰

撿挍保己一集

春部

平定文か家に歌合し侍けるに　壬生忠岑

春たつといふはかりにや三吉野の山もかすみて今朝はみゆ覧

承平(朱雀)四年中宮(穩子五十)の賀し侍ける屏風に　紀文幹

はる霞たてるをみれはあら玉の年は山よりこゆる成けり

題不知　平祐擧

春たちてあしたの原の雪みれはまたふる年のこゝちこそすれ

延喜御時月なみの御屏風に　素性法師

あら玉のとしたちかへるあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ

定文か家の歌合に　躬恒

はるたちてなをふる雪は梅花さくほともなく散かとそみる

天暦(村上)十年二月廿九日内裏に歌合せさせ給ひけるに　中務集朝忠

うくひすの聲なかりせは雪きえぬ山里いかて春をしらまし

恒佐右大臣家の屏風に　紀貫之

野へみれは若菜つみけりむへしこそ垣ねの草も春めきにけれ

題不知　中納言阿倍廣庭

集雑春 いにしとしねこして植しわか宿の若木の梅ははな咲にけり

延喜御時の屏風に　躬恒

降雪に色はまかひぬ梅のはなかにこそにたるものなかりけれ

同御時歌中に　貫之

梅かえにふりかゝりてそ白雪も花のたよりにおらるへらなる

冷泉院(六十三代)御時の屏風の繪にむめの花ある家に客人きたるかたかきたる所に　平兼盛

我宿の梅のたちえやみえつらん思ひの外に君かきませる

題よみ人しらす

梅花よそなから見むわきも子かとかむ計りの香にもこそしめ

桃園にすみ侍ける前齋院の屏風に　よみ人しらす 集貫之

白たへの妹か衣に梅花いろをもかをもわきそかねつる

題よみ人しらす 集元良

あさまたきおきてそみつる梅花よのまの風のうしろめたさに

齋院の屏風に　三常

香をとめて誰おらさらむ梅のはなあやなし霞立なかくしそ

題よみ人しらす
ふく風をなにいとひけむ梅花ちりくる時そかはまさりける　集みつね
延喜御時御屛風水のほとりに梅のはな咲たるかたかける所に
大和守藤原永平朝臣　集よみ人しらす
袖たれていさわか園に鶯のこつたひちらす梅のはな見む
題よみ人しらす
梅のはなまた散れとも行水の底にうつれる影そみえける　集つらゆき
忠峯
つみたむることのかたきは鶯の聲きくの　する集　へのわかな成けり
入道式部卿みこの子日し侍けるに
大中臣能宣
子日する野へに小松の無りせは千代のためしに何をひかまし
子にまかりをくれて侍けるに東山にこもり侍りて
中務
千とせまてかきれる松もけふよりは君にひかれて萬代やへむ
天暦九年二月廿九日内裏歌合に
よみ人しらす
さけはちるさかれは戀し山櫻おもひたえせぬはなのうへかな
題不知
咲さかすよそにても見む山さくら嶺のしら雲たちなかくしそ
菅家萬葉集に
よしの山きえせぬ雪と見えつるはみれつゝき咲さくらなり皃
定文か家の歌合に
忠岑
淺みとり野への霞はつゝめともこほれてにほふはな櫻かな
承平四年中宮の賀の屛風に田作所に
よみ人しらす　集齋宮内侍
春はなをわれにてしりぬ花さかり心のとけき人はあらしな
春の田を人にまかせて我はたゝ花に心をつくるころかな
題不知
在原元方
はるたて　くれ集　は山田の氷うちとけて人の心にまかすへらなり
宰相中將敦忠の朝臣の家の屛風にあれたる宿に人きて花みたるかたかけりける所に
貫之
あたなれと櫻のみこそ古郷の昔なからのものにはありけれ
齋院の屛風に春山路を行人かける所に
伊勢　は集
散ちらすきかまほしきを故郷の花みてかへる人もあらなむ
題よみ人しらす
さくらかり雨はふりきぬ同しくはぬるとも花の蔭にかくれん
天暦の御時麗景殿女御と中將更衣と歌合し侍けるに
清原元輔
春かすみたちなへたてそ花さかり見てたにあかぬ山の櫻を
題よみ人しらす
櫻色にわかみのうちは　はふかく集　なりぬらん心にしみてはなをおしめは
三常
はな見にはむれてゆけとも青柳の糸のもとにはくる人もなし
元輔
青柳の花たの糸をよりあはせて絕すもなくかうくひすの聲
讀人不知
とふ人もあらしとおもひし山里に花の便にひとめ見るかな
つけやらむまにも散なは櫻はないつはり人に我やなりなむ
朝ことに我はく宿の庭さくら花ちる程は手もふれてみむ

天暦御時の御屏風の歌　藤原清正

散ぬへき花みる時は菅のねの長き春日もみしかゝりけり

あれはてゝ人もはへらぬ所に櫻花咲て侍を見て　惠慶法師

あさち原主なき宿の櫻はな心やすくも風にちるらむ　や集

権中納言義懐か家に櫻花おしむ心讀侍けるに　藤原長能

みにかへてあやなく花を惜む哉いけらは後のはるもこそあれ

亭子院歌合に　貫之

櫻ちる木のした風はさむからて空にしられぬ雪そふりける

題讀人不知

足曳の山路にちれる櫻花きえせぬ春の雪かとそ見る　集貫之

北宮の着裳屏風歌

春ふかく成ぬとおもふを櫻はなちるこのもとはまた雪そふる

天暦御時歌合に　命婦少貳

あし曳の山かくれなる櫻はな散のこれりと風にしらすな　る

やまとにくたり侍けるに井出といふ所に山ふきのいとをしう咲きて侍を見侍て　惠慶法師

山吹の花の盛にゐてにきて此さと人になりぬへきかな

天暦の御時歌合に　源順

春ふかみ井手のかは浪立かへり見て社ゆかめ山吹のはな

題讀人不知

澤水にかはつ鳴なり山ふきのうつろふ色やそこにみゆらむ　かけ集

亭子院歌合に　坂上是則

わか宿の八重山吹はひとえたに散のこらなむ春のかたみに

花の色をうつしとゝめよ鏡山はるより後の影や見ゆると

題よみ人しらす

年のうちはみな春なから暮ななん花みてたにもうきよ過さむ

延喜の御時御屏風に　貫之

春かすみたちわかれ行山みちは花こそぬさとちりまかひけれ

おなし御時の月令の御屏風の歌　よみ人しらす集貫之

風ふけはかたもさためす散はなをいつかたへ行春とかは見む

三月ふたつ有としのつこもりの日　躬恒

花もみな散ぬる宿は行春の古郷とこそなりぬへらなれ

常よりも長閑かりつる春なれと今日の暮るはあかすそ有ける

定爲法印筆。拾遺集跋云。抄歌春五十七首。而此本有二五十五首一。以二彼本及柳原業光卿筆拾遺集一。皆注二抄寫于歌上傍一。算合得二所脱二首一以附レ此。

天暦御時御屏風に　たゝ見

春くれは先そ打みるいそのかみめつらしけなき山田なれとも

屏風に　よしのふ

ちりそむる花を見すてゝ歸らめやおほつかなしと妹は待とも

拾遺抄巻第二

夏部

冷泉院東宮におはしましける時百首歌たてまつりける中に　源重之

花の色にそめし袂のおしけれは衣かへうきけふにも有かな
夏のはしめに　盛明親王
はな散といとひしものを夏衣たつやをそきと風をまつかな
山里のかきねの卯花に鶯のなき侍けるに　判官代平公誠
うの花を散にし梅にまかへてや夏の垣ねにうくひすのなく
屏風に　源　順
我宿の垣ねや春をへたつらん夏きにけりとみゆるうの花
延喜御時月次の御屏風に　三　常
神まつる卯月に咲るうの花は白くもきねかしらけたるかな
題よみ人しらす
うの花の咲るさかり(かきね集)はみちのくの雛の嶋のなみかとそ見る
初聲のきかまほしさに時鳥よふかくのみもおきあかすかな(めをもさましつるかな集)
夏山をまかるとて　久米廣縄
家にいきて何をかたらむ足引の山ほとゝきす一こゑもかな
女四の親王の屏風に　坂上是則
山かつと人はいへとも郭公まつ初こゑは我のみそきく
寛和(花山)二年内裏歌合に　中納言藤原道綱母(いつ集)
みやこ人ねて待らめやほとゝきす今そ山邊を鳴てすくなる
兼　盛
深山いてゝ夜半にや來つる時鳥あか月かけて聲の聞ゆる
忠　見
さよふけてねさめさりせは時鳥人つてにこそ聞へかりけれ
題よみ人しらす
山里に宿らさりせはほとゝきす聞人もなき音をやなかまし

敦忠朝臣の家の屏風の繪に山里にほとときすのかたかける所に　貫　之
この里にいかなる人か家ゐして山時鳥たえすきくらむ
北宮の裳着の屏風に　公忠朝臣
ゆきやらて山路くらしつ郭公今一こゑのきかまほしさに
屏風に　大中臣能宣
きのふまてよそに思ひしあやめ草けふ我宿のつまと見る哉
題不知　延喜御製
足引の山ほとゝきすけふとてやあやめの草のねにたてゝ鳴
讀人しらす
たか袖に思ひよそへて時鳥はなたち花のえたになくらむ
天暦御時御屏風に淀のわたりすくる人ある所にほとゝきすかける所に　忠　見
いつかたに鳴て行らむ子規淀のわたりのまた夜ふかきに
小野宮大臣(實頼)家の屏風にわたりしたる所にほとゝきすをきゝたるかたある所に　貫　之
かのかたにはやこきよせよ時鳥みちになきつと人にかたらむ
題よみ人しらす
五月雨はいこそねられね郭公よふかくなかむ聲を待とて
延喜御時月なみの屏風に　貫　之
五月山この下やみにともす火は鹿のたちとのしるへ成けり
九條右大臣(師輔)賀屏風に　兼　盛
あやしくも鹿の立との見えぬ哉小倉の山にわれやきぬらん
西宮左大臣(高明)家屏風に　讀人不知(集顯)
ほとゝきすまつにつけてやともしする人も山邊によを明す覽
東宮(三條院)にさふらひける御繪にくらはし山をかける

に時鳥のとひわたる所に人々の歌つかふまつりけるな
かに　　藤原實方朝臣

五月やみくらはし山の子規おほつかなくも鳴わたるかな

題よみ人しらす

時鳥なくやさ月のみしか夜もひとりしぬれはあかしかねつゝ（も集）

此歌柿本人丸か集にいれり

中　務

夏のよは浦島のこかはこなれやはかなく明てくやしかる覽

月なみの御屛風にたひ人木のかけにやすむ

よみ人しらす（集みつね）

行すゑはまた遠けれと夏山のこのした蔭は立うかりけり

河原院のいつみのもとにてすゝみ侍けるに

惠慶法師

松かけのいはゐの水を結ひあけて夏なき年と思ひける哉

題よみ人しらす

そこ清み流るゝ川のせを（さやかにも集）はやみはらふるとを神はきかなむ

藤原長能

さはへなす荒ふる神もをしなへてけふはなこしの祓へ成けり

右大將定國か四十の賀に内裏より屛風調して給けるに

忠　峯

おほあらきの森のした草茂りあひて深くも夏の成にけるかな

拾遺抄巻第三

秋　部

あきのはしめによみ侍ける　　安法法師

なつ衣またひとへなるうたゝねに心してふけ秋のはつ風

延喜御時の御屛風に　　貫　之

荻のはのそよく音こそ秋風の人にしらるゝはしめなりけれ

河原院にてあれたる宿にあきのきたるこゝろ人々のよ
み侍けるに　　惠慶法師

八重葎しけれる宿のさひしきに人こそみえれ秋はきにけり

題不知　　安貴王

秋たちていくかもあられとこのねぬる朝けの風は袂すゝしも

延喜御時屛風歌　　凡河内躬恒

彦ほしの妻まつよひの秋風にわれさへあやな人そ戀しき

題不知　　貫　之

秋風に夜のふけ行は天川かはへ（せ集）に波のたちゐこそまて

湯原王

彦星のおもひますらんことよりも見る我くるし夜の更ゆけは

柿本人麿

年にありて一夜妹にあふ彦星もわれに増りて思ふらんやは

延喜御時月なみの屛風歌　　貫　之

七夕にぬきてかしつるから衣いとゝなみたに袖やぬるらむ

右衛門督源清蔭家屛風に

ひとゝせに一夜と思へと織女のあひ見ん秋のかきりなき哉

修理大夫懐平家屛風にたなはたまつりのかたかける所
に　　惠慶法師

いたつらに過る月日を七夕の逢よのかすとおもはましかは

七夕庚申にあたりて侍けるとし　　元　輔

いとゝしくいもねさるらんと思ふ哉けふの今夜に逢へる棚機

天祿(円融)四年五月廿一日仁和寺の帝の一品宮(資子)にわたらせ給ひて亂碁とらせ給けるまけわさを七月七日にかの宮より内の大盤所にしてたてまつらせられける扇にはりて侍けるうすものにをりつけて侍ける

中　務

(集雜秋)天川かはへすゝしき七夕にあふきの風をなをやかさまし

題よみ人しらす

我思ふ(いのる集)をはひとつそ天の川そらにしりてもたかへさらなん

あひみてもあはても歎く織女の(は集)いつか心ののとけかるへき

秋風のうち吹をにたかさこの尾上の鹿のなかぬ日そなき

能　宣

紅葉せぬときはの山にすむ鹿はをのれ鳴てや秋をしるらん

讀人しらす

君こすはたれに見せまし我宿の垣ねに咲る朝かほの花

手もたゆくうへしもしるく女郎花いろゆへ君か宿りぬるかな

小野宮(實賴)のおほいまうちきみ

口なしの色をそたのむ女郎花はなにめてつと人にかたるな

をみなへし咲て侍ける家に人々まてきて前栽のあたりにたゝすみ侍て

能　宣

女郎花にはふあたりにむつるれはあやなく露やこゝろ置らん

嵯峨野に前栽堀にまかりて

長　能

日くらしにみれともあかす女郎花のへにや今夜旅ねしなまし

八月はかりに鴈の聲をまつ心のうたよみ侍けるに

惠　慶

荻のはもやゝうち戰く程なるをなとかり金のをとなかるらん

題よみ人しらす　(集貫之)

(集雜秋)こてふにもにたるものかな花薄戀しき人に見すへかりけり

亭子院の御前に前栽うへさせ玉ひてこれよめとおほせとありけれは

伊　勢

うへたてゝ君かしめゆふ花なれは玉と見えてや露も置らむ

家の前栽に鈴虫をはなちはへりて

貫　之

いつこにも草の枕を鈴虫はこゝをたひとも思はさらなむ

屏風に

秋くれははたをるむしの有なへに唐錦にもみゆる野へかな

少將に侍ける時駒むかへにまかり侍て

左衛門督高遠

あふ坂の關の岩かとふみならし山たち出るきりはらの駒

延喜の御時月令の御屏風に駒迎のかたある處に

貫　之

あふ坂の關の清水に影みえていまやひく覽望月のこま

屏風に八月十五夜に池ある家に遊ひしたるかたある所に

源　順

水のおもにてる月なみをかそふれはこよひそ秋の最中成ける

延喜御時に八月十五日夜後涼殿のはさまにて藏人所のをのことも月宴し侍けるに

藤原信從(集經臣)

こゝにたに光さやけき秋の月雲のうへこそ思ひやらるれ

同御時屏風に

躬　恒

いつこにか今宵の月のみえさらむあかぬは人のこゝろなり皃

屏風に

(の集)兼　盛

夜もすからみてをあかさん秋の月こよひは空に雲なからなむ

陽成院の御時の御屏風にこたかゝりしたる所に

かりにのみ人のみゆれは女郎花はなの袂そつゆけかりける　貫之

題よみ人しらす

こてすくす（る集）秋はなけれと初鴈の聞たひことにめつらしきかな　躬恒

長月の九日ことにつむ菊のはなもかひ（の集）なく老にけるかな

東山に紅葉見にまかりて又の日つとめてまかりかへる
とてよみ侍ける　惠慶法師

昨日よりけふはまされる紅葉はのあすの色をはみてや止なん

竹生嶋に詣侍て紅葉の色おもしろく水にかけうかひて
侍ければ　法橋觀教

みつ海に秋の山邊をうつしてははたはり廣き錦とやみむ

題よみ人しらす

秋きりのたゝまくおしき山路かな紅葉のにしき落（をり集）つもりつゝ

延喜御時の中宮の御屏風に　つらゆき

散ぬへき山のもみちをあき霧のやすくもみせす立かくすらん

たいしらす　僧正遍昭

秋山のあらしの聲をきく時はこのはなられとわれは（ものそ集）かなしき　貫之

あきのよに雨と聞えて降つる（もの）は風にみたるゝ（したかふ集）もみちなりけり

こゝろもて散んたにこそ惜からめなとか紅葉に風のふくらん

あらしの山のふもとをまかりけるに紅葉のいたくちり
侍ければ　右衞門督公任朝臣

朝またき嵐の山の寒ければちる紅葉は（もみちのにしき集）をきぬ人そなき

二條右大臣（道兼）の粟田の山庄の障子のゑにたひ人の紅
葉ある所にやとりたるかたある所に　惠慶法師

いまよりは紅葉のもとに宿から（りせ集）しおしむに旅の日數へぬへし

題よみ人しらす

とふ人もいまはあらしの山風に人まつ虫のこゑそ悲しき

暮秋源重之か消息し侍ける返事　兼盛

くれて行あきのかたみに置ものは我もとゆひの霜にそ有ける

此巻亦二首脱。所㆓以補㆒如㆓春部㆒。

題しらす　みつね

露けくて我衣手はぬれぬともおりてをゆかむ秋はきのはな

亭子院御屏風に　伊勢

うつろはんをたにおしき秋萩におれぬはかりもをける露かな

拾遺抄巻第四

冬部

殘紅葉を見侍て　遍昭

から錦えたに一むらのこれるは秋のかたみやたゝ（を集）ぬなるへし

百首歌中に　重之

あしのはに隱れて住し我宿のこや（つのくに集）もあらはに冬はきにけり

屏風に　貫之

足曳の山かきくもりしくるれと紅葉（は集）はいとゝてり増りけり　兼盛

しくれゆへかつく袂をよそ人はもみちをはらふ袖かとやみん

しくれして侍ける日　貫之

かきくらししくるゝ空をなかめつゝ思ひこそやれ神並の杜

又は神無月しくるゝ空をともいふ

寛和二年清涼殿御障子の繪に網代をかけるに

よみ人しらす

網代木にかけつゝあらふ唐錦日をへてよするもみち成けり

屏風繪に　兼盛

ふしつけし淀の渡をけさみれはとけむこ(せ集)もなく氷しにけり

題よみ人しらす

冬さむみこほらぬ水はなけれとも吉野の瀧は絶るよ(せ集)もなし

一條大臣の家の障子に　清原元輔

高砂の松にすむ鶴ふゆくれはおのへの霜やをきまさるらん

題しらす　友則

ゆふされはさほのかはらの河霧に友まとはせる千鳥なくなり

讀人しらす

夜をさむみねさめて聞は鳰鳥(をし集)の浦山しくもみなるなる哉　貫之

おもひかねいもかり行は冬のよの河風さむみ千鳥なくなり

なかれくる紅葉を(は集)みれは唐にしきたきの糸してをれる也けり　よみ人しらす

水鳥のした安からぬおもひにはあたりの水もこほらさりけり

平定文家歌合に

霜の上に降はつ雪のあさ氷とけすも物をおもふころかな

初雪を見侍て　源景明

都には(て)めつらしとみる初雪を(は集)よしのゝ山にふりやしぬらん

をんなをかたらひ侍けるかとし頃になりけれとことの

はへりけれは雪ふり侍ける日　元輔

ふる程もはかなく見ゆる淡雪のうらやましくも打とくるかな

山あゐに雪のふりかゝりて侍けるを見はへりて　伊勢

足引の山あゐにふれる白ゆきはすれる衣のこゝちこそすれ

題不知　兼盛

山里はゆき降つみて道もなしけふこむ人を哀とはみむ

彈正尹親王妹更衣(集たゝみ)

としふれは越の白山おいにけりおほくの冬の雪積りつゝ

入道攝政(兼家)家の屏風に　兼盛

見渡せは松のは白きよしの山いくよをつめる(つもれる集)雪にかあるらん

屏風の繪にこしの山のかたかきて侍けるに

藤原輔尹朝臣

われひとり越の山路にこしかとも雪降にける跡をこそみれ(みるかな集)

題よみ人しらす

あし曳の山路もしらすしらかしの枝にも葉にも雪のふれゝは

此謌柿本人丸か集に出たり或本には三方沙彌のよめるともいへり

水の上とおもひしものを冬のよの氷は袖のものにさりける(そあ集)

右衛門督公任朝臣

霜をかぬ袖たにさゆる冬のよは鴨のうは毛を思ひこそやれ

よみ人しらす

ふゆの池の上は氷にとちたる(られて)をいかてか月の底に見ゆらん(いる集)

冬月を見侍てよみ侍ける　　惠慶法師
天の原そらさへさえや渡るらんこほりとみゆる冬のよの月
冷泉院御時の屏風に　　兼盛
ひとしれす春を社まてはらふへき人なき宿にふれる白雪
延喜御時の御屏風に佛名したるかたあるところに　　貫之
としのうちに積れるつみはかき暮し降白雪とともに消なむ
屏風繪に佛名のあしたに梅の木のもとにて導師とある
しとわかれ（に集）おしみたるかたある所に　　大中臣能宣
雪ふかき山路へなにしかへるらん春待花のかけにとまらて
しはすのつこもりの夜よみ侍ける　　兼盛
かそふれはわか身に積るとし月をおくりむかふと何いそく覽
村上の御時百首歌めしけるなかに　　重之
ゆきつもるをのか年をはしらすして春をはあすと聞そ嬉しき

拾遺抄卷第五

賀　部

天暦御時齋宮のくたり侍ける時長奉送使にてをくり侍
てかへらんとするに女房さか月さしてわかれおしみけ
るに　　中納言藤原（しるら集）朝忠朝臣
萬代のはしめとけふを祈置ていま行末は神そかそへん
はしめて平野祭におとこ使たてし時うたふへき歌とて
よませたりし　　大中臣能宣
千早振ひらの丶松の枝しけみ千代も八千代も色はかはらし

贈皇后（懐子）のうふやの七夜に兵部卿致平親王の雉たて
まつるとてよませ侍ける　　清原元輔
朝またききりふの岡に立雉子は千代のひつきのはしめ成けり
ある藤氏の鶴葺屋に（山集）　　能宣
二葉より賴もしき哉春日の丶木高き松の種とおもへは
君かへむ八百萬よをかそふれはかつ〳〵けふそ七日なりける
參議誠信朝臣元服し侍ける夜　　源順
老ぬれはおなしことこそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ
三善佐忠かうふりし侍けるに　　能宣
ゆひ初るはつ元結のこ紫ころもの色にうつれとそおもふ
天暦のみかと四十にならせ給けるとし山階寺に金泥壽
命經四十卷をかき供養たてまつりて御卷數をそへてた
てまつらせたりけるにすはまをつくりて鶴をたて丶御
卷數をくはせたりけり其洲濱の臺の敷もの丶あしてに
あまたのうたをかけりける中　　平兼盛
山階のやまの岩根に松をうへてときはかきはに樂しかるらし（いのりつるかな集）
承平四年中宮の賀し侍ける時の屏風に　　齋宮内侍
色かへぬ松と竹との末のよを何れ久しと君のみそみむ
おなし賀に竹のつえのうたつくりて侍に　　大中臣賴基
一ふしに千世をこめたる杖なれはつくともつきし君か齡は
小野の宮のおほいまうちきみの五十賀し侍けるときの
屏風に　　元輔
君か代を何にたとへむさ丶れ石の巖とならん程もあかれは

わか宿にさける櫻の花さかり千とせみるともあかしとそ思ふ

おなし大臣の七十賀し侍けるに竹の杖の歌をつくりて侍けるに　能宣

君かためけふきる竹の杖なれはまたつきもせぬよゝそ籠れる（もつきせぬ集）

元輔

くらゐ山峯まてつける杖なれと今萬代の坂のためにそ（は、なり集）

一條攝政(伊尹)の中將に侍ける時ちゝの右大臣(師輔)の賀し侍ける屏風の繪に松はらに紅葉のちりまてきたるかた侍ける所に　小野好古

吹風によその紅葉は散くれとときはのかけは長閑かり皃（君かときはのかけそのどけき集）

右大將保忠か妻の賀し侍けるに　源公忠朝臣

萬代もなをこそあかれ君かため思ふ心のかきりなけれは

五條尚侍の賀を淸貫かし侍ける屏風に　伊勢

おほ空にむれたるたつのさしなから思ふ心のありけ成かな

春ののゝ若なならても君かためとしの數をもつまんとそ思ふ

康保(村上)三年三月に内裏に花宴ありけるに　九條右大臣(師輔)

櫻はなこよひかさしにさしなからかくて千年の春をこそへめ

題讀人しらす

かつ見つゝ千年の春をすくすともいつかは花の色にあくへき

亭子院歌合に（こせに）　躬恒

みちよへてなるてふ桃のことしより花咲はるに逢そしにける（にけるかな集）

康保三年正月二日内裏にて子日せさせ給ひけるに殿上人々和歌つかうまつりけるに　右兵衛佐藤原信賢

珍しき千代の子日のためしとはまつ今日をこそ引へかりけれ（はじめの子日に集）

小野宮大臣後院にて子日し侍けるに人々うたよみ侍けるに　三條太政大臣(頼忠)

ゆく末も子の日の松のためしには君か齢をひかむとそおもふ（ちとせ集）

題讀人しらす

みな月のなこしの祓する人は千年の命のふといふなり

承平四年中宮賀し侍ける時屏風に　藤原伊衡朝臣

御祓して思ふ事をそ祈つる八百萬代の神のまに〳〵

天曆の御時前栽の宴をせさせ給けるに　小野宮大臣

萬代にかはらぬ花の色なれはいつれのあきか君かみさらん

三條太政大臣家に歌よみともして歌よませ侍けるに草むらの松虫といふことを題にて　兼盛

千年とそ草むらことに聞ゆなるこや松虫の聲には有らん

光右大臣家に前栽合し侍けるまけわさ内舍人たち花のすけなりかし侍とてすはまに千鳥のかたをつくりて侍けるによませ侍ける　貫之

たか年の數とかはみる行かひて千とり鳴なる濱の眞砂を（かへりん集）

鏡てうせさせ侍けるうらにつるのかたをいつけさせ侍てよみ侍ける　伊勢

千とせとも何か祈らむ浦にすむ鶴のうへをそ見るへかりける（たつ集）

題よみ人しらす

君か代は天のは衣まれにきてなつともつきぬ巖ならなむ

拾遺抄卷第六

別　部

はるものへまかりける人のあか月に出立侍ける所にて
とまり侍ける人のよみ侍ける　　よみ人しらす
春かすみ立わかつきをみるからにこゝろそ空に成ぬへらなる
題しらす
櫻花つゆにぬれたる顔みれはなきて別し人そ戀しき
ちるはなは道みえぬまて埋まなんわかるゝ人の立やとまると
春ものへまかりける人にあひしりて侍ける人々のまて
きて餞し侍ける所にかはらけ取て侍けるほとに鴈のな
き侍けれは讀侍ける　　曾禰好忠
鴈金のかへるを聞は別ちの雲井はるかにおもふはかりそ
天暦の御時命婦少貳か豐前國へ夏ころ下り侍けるに大
盤所にて餞給にかつけ物給とて　　御製
なつ衣たち別るへき今宵こそひとへにおしき思ひ添ぬれ
題よみ人しらす
わするなよ別路に生る葛のはに（の集）秋風ふかは今かへりこん　　紀貫之
時しもあれ秋しも君かわかるれはいとゝ袂そ露けかりける
天暦十一年九月十五日齋宮くたり侍けるに　　御製
君か代を長月とたに思ひせは（はす集）いかに別のかなしからまし
題よみ人しらす
わかれてふをは誰かはしめけん苦しき物としらすや有けむ
別てはあはむあはしそ定なきこの夕暮やかきりなるらむ
ものへまかりける人の送り關山まてし侍てかへりはへ
るとてよみ侍ける　　貫之
わかれ行けふはまとひぬ逢坂はかへりこむ日の名にや有らん（こそ有けれ集）
題よみ人しらす
別ちは（か集）戀しき人のふみなれや（か集）やらてのみ社みまくほしけれ
旅ゆけは袖こそぬるれもる山の雫にのみはおほせさらなむ
みなもとのよしたねか參河の守（介集）にまかりけるにとまり
侍けるむすめにはゝのよみて遣しける
諸ともにゆかぬみかはの八橋を戀しとのみやおもひわたらん
しなのゝ國にまかりける人によみてつかはしける　　貫之
月影をあかすみるとも更科の山のふもとに長居すな君
伊勢よりのほり侍けるに忍ひてものいひ侍けるをんな
のあつまにまかりくたりけるかあふさかの關にまかり
あひたりけれはよみてつかはしける　　大中臣能宣
行末のいのちもしらぬわかれちはけふ逢坂やかきり成らん
天暦御時に御めのと備後か出羽國にまかりくたりける
に餞給けるに藤壷より裝束遣しけるにそへられたりけ
る　　よみ人しらす
行人をとゝめかたみの唐衣たつより袖のつゆけかるらん
この備後のめのとの餞に殿上の人とも女房も歌よみ侍
ける中に　　御乳母少納言
おしむとも（こも）かたしや我か（わかれ集）心たゝ涙をたにもえやはとゝむる　　女藏人參河

あつま路の草葉をわけん人よりもをくるゝ袖そ先は露けき

共政朝臣肥後守になりてくたり侍ける時女備前かまかりくたりけるに櫛御衣なと給ふとて　天暦御製

わかるれは心をのみそつくし櫛さして逢へきほとをしられは

大江爲基參河國へまかりくたりける時にあふきなと調してたれかともなくてさしをかせ侍ける　衛門赤染時用之女

おしむともなきもの故にしかすかの渡りと聞はたゝならぬ哉

みちのくの守これのふか女のくたり侍けるに彈正宮のみこの内方の香藥つかはしはへりけるに　戒秀法師元輔子

龜山にはいくゝすりのみ有ければとゝめむかたもなき別かな

師にて橘のきむよりかくたり侍けるにとしたれかまゝ母の典侍に馬のはなむけに裝束てうしてつかはしける　貫之

あまたには縫重ねゝと唐衣おもふこゝろは千重にそ有ける

みなもとのひろかすかものへまかりけるに裝束調して給とて　太皇太后宮御歌

旅人の露はらふへき唐衣またきも袖のぬれにけるかな

藤原のまさたゝか豐前の守にはへりけるときためよりかおほつかなしとてくたり侍けるに馬のはなむけし侍けるに　きよたゝ

思ふ人ある方へ行わかれちをおしむ心そかつはわりなき

肥後守にて清原元輔かくたりはへるに源滿仲朝臣の餞し侍けるにかはらけとりて　もとすけ

いかはかり思ふらんとか思らんおいてわかるゝとほき道をは

返し　みつなか

君はよし行末とをしとまる身のまつ程いかゝあらんとすらむ

前日向守に侍ける人のつくしへまかり侍ける人にいひつかはしける　橘頼平

むかしみしいきの松原ことはゝわすれぬ人もありとこたへよ

題不知　右衛門源兼澄女

命をそいかならんとは思ひこしいきて別るゝ世にこそ有けれ

君をのみ戀つゝ旅の草枕露しけからぬあか月そなき

人の國へまかり侍けるにあまのしほたれ侍けるを見侍て　惠慶法師

故郷をこふる袂もかはかぬにまた鹽たるゝあまも有けり

みちのくのかみにてまかりくたりけるときに三條太政大臣の餞給ける時によみ侍ける　藤原爲長雅正男

武隈の松をみつゝやなくさめん君か千年のかけにならひて

みちのくのしらかはのせきこえ侍けるによみ侍ける　兼盛

たよりあらはいかて都へつけやらんけふ白川の關はこえぬと

なかされはへりて後女のもとにいひにおこせて侍ける　贈太政大臣

君か住やとのこすゑを行々もかくるゝ迄にかへりみしはや

拾遺抄巻第七

戀部上

天暦御時歌合に　　壬生忠見

戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか

題不知　　兼盛

しのふれと色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまて

題不知　　貫之

色ならはうつるはかりも染てまし思ふ心や（を集）しる人のなき

讀人しらす

あふことをまつにて年を（の集）へぬる哉身は住のえにおひぬものゆへ

大甞會のみそきにものみはへりける所にわらはの侍けるを見侍て又のあしたつかはしける　　寛祐法師

あまたみしとよの御祓の諸人の君しも物を思はするかな

たいよみ人しらす

命をは逢にかふとか聞しかとわれやためしにあはぬしにせん

人しれぬ心のほと（うも集）をみせたらは今まてつらき人はあらしな

天暦御時歌合　　右衛門督藤原朝忠

あふことの絶てしなくは中々に人をも身をも恨さらまし

をんなのもとに男のつかはしける　　よみ人しらす

人しれぬ泪に袖はくちにけりあふよもあらは何につゝまむ

返し

君はたゝ袖計をやくたすらん逢には身をもかふとこそきけ

題しらす

いかにせん命は限り有物を戀は忘れす人はつれなし

こひてへは（こい集）おなしなにこそ思らめいかて我身を人にしらせん

をんなのもとにつかはしける　　小野宮おほいまうちきみ

人しれぬ思ひは年もへにけれと我のみしるはかひなけ（か點）りけり

題よみ人しらす

歎あまり終に色にそ出ぬへきいはぬに人の（を集）知はこそあらめ

いかてかと思ふ心の有時はおほめくさへそうれしかりける

をんなのもとにつかはしける　　大中臣輔親（集能宣）

いかて〱こふる心をなくさめて後のよ迄のものもおもは（は集）し

題しらす　　みなもとのつれもと

あはれとし（も集）君たにいはゝ戀わひてしなむ命もおしからなくに

讀人しらす

逢みてはしにせぬ身とそ成ぬへき頼むるにたにのふる命を

柿本人丸

千早振かみのいかきも越ぬへし今は我身のおしけくもなし

大宰監大伴百世

戀しなん後はなにせむいける日の爲こそ人の（は集）みまくほしけれ

ひとまろ

戀つゝもけふは暮しつ霞立明日の春日をいかてくらさん

よみ人しらす

わひつゝも昨日はかりは過してきけふや我よ（み集）のかきり成らん

身をつめは露をあはれと思ふ哉曉ことにいかてをくらむ

勝觀法師

しのふれはくるしかりけり花薄あきのさかりに成やしなまし

讀人しらす

よそにても有にし物を花すゝきほのかにみてそ人は戀しき
あふことの（は集）かたわれ月の雲隠おほろけにやは人のこひしき
逢みてもありにし物をいつのまにならひて人の戀しかる覽
はしめてをんなのもとにまかりて又のあしたにつかはしける　大中臣能宣
あふことを待し月日の程よりもけふの暮こそ久しかりけれ
權中納言藤原敦忠
逢みての後の心にくらふれはむかしはものも思はさりけり
題よみ人しらす
あひみても猶なくさまぬ心哉いく千夜ねてか戀は（の）さむらし（へき集）
我戀はなを逢みてもなくさますいやまさり成心地のみして
人麿
朝ねかみ我はけつらしうつくしき人の手枕ふれに（て集）しものを
よみ人しらす
かくはかり戀しき物としらませはよそにみるへく有ける物を
夢をたにいかてかたみに見てし哉あはてぬるよの慰めにせん
天暦御時歌合　讀人しらす（集忠見）
夢よりもはかなき物は陽炎のほのかにみえし影にそ有ける
能宣（集したかふ）
ゆめのことなとかよるしも君をみん暮る待まも定めなきよを
讀人不知
戀しさを何につけてか慰めむ夢たにみえすぬるよなけれは
題しらす　藤原のありとき
うつゝにも夢にも人によるしあへはくれ行はかり嬉きはなし
逢ことのなけきのもとを尋ぬれは獨れよりそおひ始めける
入道攝政のまかりたりけるに門をゝそくあけゝれは立わつらひぬといひ入て侍けるに　右大將道綱母
歎つゝひとりぬるよの明るまはいかに久しき物とかはしる
題よみ人しらす
たゝくとて宿の妻戸を明たれは人もこすゑのくゐな成けり
坂上郎女
衣たに中に有しはうとかりき逢ぬよをさへへたてつる哉
人丸
黑髪に白かみましり生るまてかゝる戀にはいまたあはさるに（を集）
よみ人しらす
湊入の蘆わけ小舟さはりおほく戀しき（みわかおもふ集）人にあはぬ頃哉
忍はむに忍れぬへき戀ならはつらきにつけてやみもしなまし
五月五日にある女のもとにいひつかはしける　三　常
いつかとも思はぬ澤のあやめ草唯つく〳〵とれこそなかるれ
題しらす
生れとも駒もすさめぬあやめ草かりにも人のこぬかわひしき
よみ人しらす
しのゝめに鳴こそ渡れ郭公もの思ふやとはしるくや有らん
水な月の土さへさけて照日にも我袖ひめや妹にあ（そあ集）はすして
人丸
佗ぬれは常はゆゝしき七夕も浦山れぬる物にさりける
おもひきや我待人はよそなから棚機つめの逢をみんとは
けふさへやよそにみるへき彦星のたちならす覽天のかは浪
三百六十首中　曾禰好忠
足引の山より出る月待と人にはいひて君をこそまて
わかせこかきまさぬ宵の秋風はこぬ人より（も集）はうらめしき哉

題よみ人しらす

逢みてはいくひさゝにもあらねとも年月のこと思ほゆる哉　（集人丸）

人丸

賴めつゝこぬよあまたに成ぬれはまたしと思ふそ待に増れる

貫之

もゝはかき羽かく鳴も我ことくあしたわひしき數は増らし

おとこの思ひ侍らさりけれは女のつかはしける

よみ人しらす

ありへむと思ひもかけぬ世中になか（は集）〳〵みなそ歎かさりける

たいしらす　（集人麿）

ゆふけとふうらにもよく有今宵さへ（たに集）こさらん人をいつか賴ん（まつへき集）

萬葉集の和し侍けるに　源順

思ふらん心のうちをしらぬ身はしぬ計りにもあらしとそ思ふ

題よみ人しらす

いきしなむその心にかなひせはふたゝひ物はおもはさらまし

おこなひすとて山寺にこもり侍けるおとこのをんなの

もとにいひつかはしける

人にたに知れて入し奧山の戀しさいかて尋來つらん

冬ひえの山にのほりて春まてをとつれ侍らさりける人

のもとに　（集藤原のきよた・かむすめ）

なかめやる山邊はいとゝ霞つゝ覺束なさのまさるはるかな

たえて年頃になり侍にける女のもとへまかりてつとめ

て雪のふり侍けれは　源景明

みよしのゝ雪にこもれる山人もふる道とめてねをやなくらん

をむなのもとに男のふみつかはしけれと返事もせす侍

けれは　讀人しらず

山ひこもこたへぬ山の呼子鳥われ獨のみなきや渡らん

題しらす

やまひこは君にもにたる心かなわか聲せれはをとつれもせす

あし曳の山したとよみ行水の時そともなく戀わたるかな

旅におもひをのふといふ心をよみ侍ける

石上乙丸

足引の山こえくれて宿からはいもたち待ていねさらむかも

山邊赤人

我せこをならしの山の呼子鳥君よひかへせ夜の更ぬまに（こき集）

よみ人しらす

はるかなる程にも通ふ心かなさりとて人のしらし（ぬ集）物ゆへ

とをき所に思ひ侍ける人をおき侍て　つれもと

雲ゐなる人をはるかに戀る（おもふに集）身は我心さへ空にこそなれ

たいよみ人しらす

やほか行濱の眞砂とわか戀といつれまされりおきつ嶋守

みちをまかり侍てよみはへりける　をとまろ

よそに有て雲井にみゆる妹かいへに早くいたらんあゆめ黒駒

題よみ人しらす

わかことく物思ふ人はいにしへも今行末もあらしとそおもふ

拾遺抄卷第八

戀部下

をんなのもとにつかはしける　藤原惟成
人しれす落る泪の積りつゝかすかくはかり成にけるかな
題よみ人しらす（しほ集）
君こふる涙のかゝる冬のよは心とけたるいやはれらるゝ
女のもとにつかはしける　大中臣能宣
あさ氷とくるまもなき君によりなとてそほつる袂なるらん
題讀人しらす
うしと思ふ物から人の戀しきはいつこを忍ふこゝろなるらん
戀侘ぬれをたになかむ聲立ていつこなるらん音なしの里
しのひてけさうし侍ける人につかはしける　清原元輔
音なしの河とそつゐに成にける（なかれいつ集）いはて物思ふ人のなみたは
題よみ人しらす
風寒み聲よはり行虫よりもいはて物思ふ我そまされる
天暦御時承香殿のまへをうへのわたらせ給てことかたにおはしましければ奏せさせて侍ける　徽子女御
かつみつゝかけ離れ行水の面にかく數ならぬ身をいかにせん
たいよみ人しらす
袂より落る涙はみちのくの衣河とそいふへかりける　紀貫之
なみた川おつる水上早ければせきそかれつる袖のしからみ

萬葉集和せるなかに　源順
泪かは底のみくつと成はてゝ戀しきせゝに流れこそすれ
題よみ人しらす
手枕のすきまの風もさむかりき身はならはしの物にさりける（そあ集）
五月夏至日けさうして久しく成侍ける女今夜をはうたかひなく思ひたゆみてものいひ侍ける程にしたしきさまに成侍りにければをんなのいみしう恨みわひて後にはさらにあはしといひ侍ければ　能宣
あす知ぬ命なりとも（我み集）恨みをかん此世にのみはやましと思へは（てのみ集）
題よみ人しらす　集人丸
わかことや雲の中にも思ふらん雨も泪もふりにこそふれ
おほとものかたみ
いそのかみ降とも雨に障らめや逢むと妹にいひてし物を
讀人しらす（集元良）
侘ぬれは今はたおなし難波なる身をつくしても逢むとそ思ふ
坂上郎女
汐みては入ぬる磯の草なれや見る日すくなく戀らくのおほき（らく集）
よみ人しらす
志賀のあまの釣に燈せる漁火のほのかに妹をみるよしも哉
しるや君しらすはいかにつらからむ我かく計おもふこゝろを
戀するはくるしき物としらすへく人を我身にしはしなさはや
あめふれはえまてこすと申たりける男の又の夜もまてこすなりにければ　東宮女藏人左近
ふらぬよの心をしらて大空の雨をつらしとおもひけるかな
題よみ人しらす

たらちれのおやの諌しうたゝれは物思ふ時のわさにさりける（そあ集）

をんなのもとにつかはしける　能　宣

言の葉も霜にはあへす枯にけりこや秋はつるしるし成らん

題よみ人しらす

すきたてる宿をそ人は尋けるまつはかひなき世にこそ有けれ（こゝろのまつはかひなかりけり集）

思ふとていとしも人にむつれ劔しかならひてそみれは戀しき（こそ）（なれさらの集）

わするゝかいさゝは我も忘れなん人にしたかふ心とならは

をんなの元につかはしける　平忠依

逢とは心にもあらて程ふともさやはちきりしわすれはてねと

題よみ人しらす

あふみなる打出の濱のうち出て恨やせまし人のこゝろを

津の國のいく田の浦のいく度かつらき心をわれにみすらん（池集）

あしれはふうきは上こそつれなけれ下はえならす思ふ心を

數ならぬ身は心たになから南思ひ知すはうらみさるへく（も集）

恨みての後さへ人のつらからはいかにいひてかねをは泣まし

小野宮のおほいまうち君のもとにつかはしける　閑院大君

君を猶恨みつるかな蜑の刈もに住むしのなを忘れつゝ

題よみ人しらす

思はすは難面きをもつらからし頼めは人を恨みつるかな

つらけれと恨むる限り有けれは物はいはれてれ社なかるれ

かきりなく思ふ心の深けれはつらきも知ぬ物にそ有ける

恨みぬも疑はしくそおもほゆる頼む心のなきかと思へは（あり）（そあ集）

わたつ海の深き心はをきなから恨みられぬる物にさりける

女のもとにまかりけるをもとのめのせいし侍けれはいひつかはしける　源景明

風をいたみ思はぬ方に泊するあまの小舟もかくやわふらん

題よみ人しらす

つらしとはおもふ物から戀しきは心にもあらぬ心なりけり（我にかなは集）

わりなしやしゐても頼む心哉つらしとかつは思ふものから

ものいひ侍りける女のゝちにつれなく侍てさらにあひ侍らさりけれは　一條攝政

哀ともいふへき人はおもほえて身の徒に成ぬへきかな

題よみ人しらす

世中のうきもつらきも忍ふれは思ひ知すと人や見るらん

さも社は逢みるとのかたからめ忘れすとたにいふ人のなき　伊勢

よみ人しらす（集つらゆき）

大かたに我身ひとつのうきからになへての世をも恨みつる哉

心をはつらき物そといひなから戀らしと思ふかほそ戀しき（おきて集）

わか袖のぬるゝを人のとかめすはねをたに安く鳴へき物を

おやにをくれて侍けるころおとこのとひ侍らさりけれは　伊勢

なき人もあるかつらきを思ふにも色わかれぬは泪成けり（哀集）

屏風にみくまのゝかたをかける所に　兼盛

さしなから人の心を三熊野の浦の濱木綿いくへ成らむ

たいしらす　右近少將季縄女

忘らるゝ身をは思はす誓ひてし人の命のおしくも有哉

をんなをうらみてさらにまてこしとちかことをたてゝ後につかはしける　藤原實方

何せんに命をかけて誓ひけんいかはやと思ふおりも有皃

題よみ人しらす
ひたふるに死は何かはさも有はあれ生てかひなく物思ふ身は
思ひ増人しなけれはます鏡うつれる影とれをのみそ鳴
國用かむすめを藤原知光かまかりさりてのちかゝみを
返しつかはすとて書つけ侍ける　をんな集元　しられし集
かけたえて覺束なさのます鏡見すは我身のうさもまさらし
題よみ人しらず
夢にさへ人のつれなくみえつれはねても覺ても物を社思へ
逢ことは夢のうちにも嬉しくてね覺の戀そ佗しかりける
わすれしよ夢と契しことの葉はうつゝにつらき心なりけり
今はとはしといひ侍りけるをんなのもとに
源臣城集よみ人しらす
忘れなん今はとはしと思ひつゝぬる夜しもこそ夢に見えけれ
たいよみ人しらす
むは玉の妹か黒髪こよひもやわかなき床になひきてぬらん
萬葉集を和せるうた　源　順
獨ぬる宿には月のみえさらは戀しきことの數はまさらし
月のあかく侍ける夜人まち侍ける人のよみ侍ける
よみ人しらす集人丸
ことならはやみにそあらまし秋のよのなそ月影の人頼めなる
月あかき夜をんなのもとにつかはしける
源信明朝臣
戀しさはおなし心にあらすとも今宵の月を君みさらめや
返し　中　務
さやかにもみるへき月を我はたゝ泪にくもるおりそ多かる
月を見侍ていなかなるおとこをおもひいてゝつかはし
ける
中宮内侍馬
今宵君いかなるさとの月をみて都に誰を思ひ出らん
京におもふ人をゝき侍てはるかなる所にまかり侍ける
道に月のあかき夜　讀人しらす
都にてみしにかはらぬ月影をなくさめにても明す頃哉
たいしらす　貫　之
てる月も影みな底に移りけり似たる物なき戀もする哉
善祐かなかされ侍ける時ある女のつかはしける
讀人しらす
なく泪よはみな海に成ならんおなし渚に流れよるかと へく集
題しらす
捨はてむ命を今は頼まれよ逢へきことの此よなられは
うみたてまつりたりけるみこのかくれ侍にける又のと
し郭公を聞侍て　伊　勢
集哀 しての山越て來つらん時鳥戀しき人のうへかたらなん
いせかもとにこのことをとふらひにつかはすとて
平定文
思ふよりいふはをろかに成ぬれは譬へていはむことのはそなき
中將兼輔朝臣めなくなり侍てのとしのしはすに貫之か
もとにまかりてものかたりし侍けるついてにむかしの
人のうへなといひいて侍けれは　貫　之
集哀 こふるまにとしの暮なはなき人のわかれやいとゝ遠く成なん
むすめにまかりをくれて［むイ］　中　務
同 忘られてしはしまとろん程もかないつかは君を夢ならてみん
孫にをくれ侍て

同 うきなから消せぬ物は身なり鳧浦山しきは水のあはかな

題よみ人しらす

同 世中をかくいひ〳〵の果々はいかにやいかにならむとすらん

拾遺抄巻第九

雑部上

わかなを御覧して　圓融院御製

集春 春日野におほくのとしはつみつれと老せぬ物は若な成けり

む月に人々まてきて侍ける又のあしたに公任朝臣のかりつかはしける　中務卿具平親王

集雑春 あかさりし君か匂ひの戀しさに梅のはなをそ今朝は折つる

なかされてまかりくたりける時に家の梅のはなを見はへりて　贈太政大臣

同 こちふかは匂ひをこせよ梅花あるしなしとて春をわするな

延喜御時屏風畫に寺にまてたる所に　貫之

同 思ふと有てこそゆけ春霞みちさまたけに立渡るらん　なかくしそ集

故一條のおほいまうち君(爲光)の家の屏風に　能宣

同 田子の浦に霞のふかくみゆる哉もしほの煙立やそふらむ

正月叙位侍ける頃人々まかりあつまりて子日の歌よまむといひ侍けるに六位にて(りなまし集)よみ侍ける

同 松ならはひく人けふはあらましに袖の緑そかひなかりける

人にものいひ侍と聞ておとこのとはす侍けれは　中宮内侍(少將)

同 春日野の荻のやけ原あさるとも見えぬなき名をおほすなる哉

女のもとになつなの花にさして遣しける　長能

同 雪を埋み垣れにつめるからなつなゝつさはまくのほしき君哉

天暦御時大盤所のまへのつほに鶯を梅のえたにつくりすへてたてられたりけるを見侍て　一條攝政

同 はなの色はあかすみるとも鶯のねくらの枝にてなゝふれそも

康保三年二月廿一日梅のはなのもとに御倚子立させ給て宴せさせ給けるに殿上のおのことも和歌つかうまつりけるに　源博雅朝臣(集覚信)

同 折て見るかひも有哉梅花いま九重に匂ひまさりて

内裏御遊ありける時　宰相藤原伊衡

同 かさしてはしらかにまかふ梅花今はいつれをぬかむとすらん

はる花山に亭子法皇御幸ありてとくかへらせ給ひけれは　僧正遍昭

同 まてといはゝいともかしこし花の山しはしと鳴ん鳥の音も哉

北白河山庄にはないと面白くさきて侍けるに人々まてきたりけれは　左衞門督公任朝臣

同 春きてそ人も問ける山里は花こそ宿のあるし成けれ

上總よりのほりまてきてのころ賴光か家にて人々さけのみ侍けるに　長能

同 あつまちのゝ路のゆきまを分てきて哀都の花をみる哉

はるものへまかりける道につほ裝束して侍ける女とも野邊にはへりけるをみてなにわさするとゝひ侍けれはところほるなりといひ侍けれは　賀朝法師

同 春のゝにところもとむといひつるはふたりぬ計みてたりや君

同
春の野にほる〳〵みれとなかり覓よにところせき人の爲には
　をんなの返し
　中納言敦忠まかりかくれて後ひえの西坂本の山庄に人
　人まかりて花見侍けるに　一條攝政
集哀
いにしへは散をや人のおしみ劔はなこそ今はむかしこふらし
　櫻花さきて侍ける處にもろともにみ侍ける人の後のは
　るほかに侍けるにその花をゝりてつかはしける　集よみ人しらす
集雜春
諸共におりし春のみ戀しくて獨見まうき櫻花哉
　小野宮おほいまうちきみの家にて池邊のさくらはなを
　見侍て　元輔
同
さくら花そこなる影そおしまるゝしつめる人の春かと思へは
　延喜御時月令御屏風に　三常
同
櫻花わか宿にのみ有とみはなきものゝさは思はさらまし
　ある人のもとにつかはしける　御導師淨藏
同
霞たつ山のあなたの櫻花おもひやりてやはるを暮さん
　延喜御時南殿のさくらのちりつもりたるを見はへりて
　公忠朝臣
同
殿守のとものみやつこ心あらは此春はかりあさきよめすな
　たいよみ人しらす
集春
岩間をもわけくる瀧の水をいかて散つむ花のせきとゝむ覧
　三月うるふ月侍けるとし山ふきをみ侍て　菅原輔昭
集雜春
はる風は長閑けかるへし八重よりも重れて匂へ山吹の花
　比叡山にすみはへりけるころ人のたきものをこひて侍
　けれは侍けるまゝにすこしを梅のはなの散のこりたる
　えたにつけてつかはすとて　如覺法師
同　すき集
春たちて散はてにける梅花たゝかはかりそ枝にのこれる
　延喜御時ふちつほにて藤の宴せさせたまひけるに殿上
　のをのこよく歌つかうまつりけるに　藏人藤原國章
同
藤のはな都のうちは（宮のうちには集）紫の雲かとのみそあやまたれける
　源重之
集夏
夏にこそ咲かゝりけれ藤のはなまつにとのみも思ひける哉
　延喜御時飛香舍にて藤花宴ありけるに人々和歌つかう
　まつりけるに　小野宮おほいまうちきみ
同
うすくこく亂れて咲る藤の花ひとしき色はあらしとそおもふ
　郭公をきゝ侍てよみはへりける　大伴坂上郎女
同
時鳥いたくなゝきそ獨ゐていのねられぬに聞はくるしも
　坂上大孃に遣しける　大伴田村大孃（集大伴像見）
集雜春
故郷のならしの岡の時鳥ことつてやりしいかにつけきや（き集）
　たいしらす　輔親
同
あし曳の山郭公さとなれてたそかれ時になのりすらしも
　躬恒
同
徒においぬへらなりおほあらきの森の下なる草にはあられと
集雜秋
あひみすてひと日も君にならはれは七夕よりも我そ増れる
　みつれたゝみれにとひ侍ける　伊衡朝臣
白露はうへより置をいかなれは萩の下葉のまつもみつらん
　こたふ　みつね
さを鹿のしからみふする萩（秋萩は集）なれは下葉や上に成かへるらん

秋はきは先さすえより移ふを露のわくとは思はさらなん　忠峯
嵯峨野にすみ侍ける房の前栽をたんなともの見にまて
きたりけれは　遍昭
集雜秋 こゝにしも何匂ふらん女郎花人のものいひさかにくきよに　躬恒集よみ人しらす
題不知
同 秋のゝのはなの色々とりすへてわか衣手にうつしてし哉
あきはらへしに唐崎にまかりて舟のまかりけるを見て　惠慶法師
同 おく山にたてらましかは渚漕ふなきも今は紅葉しなまし
たいしらす　三　常
同 紅葉々の流るゝ時は竹川のふちの綠も色かはり見　るらん集
亭子院大ゐ川に御幸ありて行幸もありぬへき所なりと
おほせたまふにとのよし奏せむとて　小一條太政大臣忠平
同 小倉山みねの紅葉々心あらは今一度の御幸またなん
そのゝち延喜の帝かの所にみゆき有ける日あまたのう
たよませ給ひけるに　貫之
大井河々邊の松にことはむかゝる御幸や有しむかしも
延喜御時月なみ御屏風歌　躬恒
雜秋 かりてほす山田の稻をかそへつゝ多くの年をつみてける哉（ほしわひてまもるかりいほにいくよへぬらむ集）
たいよみ人しらす
同 かのみゆるいけ邊に立るそか菊のしけみさ枝の色のこてらさ　てこ集
權中納言義懷入道の後むすめを齋院にやしなひ給ける
かもとより東院に侍けるあれのもとに十月はかりにつ
かはしける
同 山かつの垣ほわたりをいかにそとしもかれ〳〵に問人もなし
内裏御屏風に　元輔
同 月影のたな上川に清けれは網代にひをのよるもみえけり
藏人所に侍ける人のひをのつかひにてまかるとて京に
侍なから音もし侍らさりけるに　修理葛原眞行妹
同 いかて猶網代のひをにことはん何によりてかわれをとはぬと
ものれたみしけるをんなをはなれてのちうつろひたる
菊をつかはすとて　よみ人しらす
同か集 老のよにうき事きかぬ菊たにも移ふ色は有けりとみよ
天曆御時伊勢か集めしけれはたてまつるとて　中務
同 しくれつゝ降にし宿の言のはゝかきあつむれとたまらさり見　こ集
御返し　御製
同 むかしより名高き宿のとの葉はこのもとにこそ落積るてへ
なみにあたりて侍ける人のもとにまかりてはへりける
に女さかつきに日かけをいれていたし侍けれは　能宣
同 有明の心地こそすれさか月に日かけも添ていてぬと思へは（の　り集）
恒佐大臣家の屏風に臨時祭のかたかきたる所に　貫之
同 足引の山ゐにすれる衣をは神につかふるしるしとそみる　おもふ集
まつりのつかひにまかり出ける人のもとよりすりはか

ますりにつかはしたりけるをゝそしとせめ侍ければ
東宮女藏人左近

同 かきりなくとくとはすれと足曳の山ゐの水は猶そこほれる

題不知　貫之

同 獨ねはくるしき物とこりよとや旅なるよしも雪のふるらん

法師にならんとしける比雪のふり侍ければ
少將高光

集哀 世中にふるそはかなき白雪のかつは消ぬるものとしる〳〵

しはすの晦日に年の暮はへるをゝなけき侍てよみ侍ける　つらゆき

集雜秋 むは玉の我黒かみに年暮て鏡のかけにふれるしら雪

延喜廿年二月亭子院春日御幸ありける時國のつかさ和歌廿首よみてたてまつりける中に　大和守藤原忠房

集神樂歌 めつらしきけふの春日の八乙女を神もあはれと忍はさらめや

冷泉院御時大嘗會近江國和歌　元輔（集兼盛）

同 とゝこほるとも（こき集）あらしな近江なるをものゝ濱の天のひつきは

延喜御時御屏風　貫之

集賀 松をのみときはと思ふによとゝもに流て水も（なかすいつみ集）緑なりけり

題よみ人しらす

集神樂 住吉のきしもせさらむ物ゆへにねたくや人にまつといはれん

此うた住吉明神御佗宣云々

すみよしに詣て讀侍ける　安法々師

同 あまくたるあらひと神の相生を思へは久し住吉の松
惠慶法師

同 我とはゝ神よのこともかたら南（こたへ集）むかしをしれるすみよしの松

天暦御時爲平親王着袴時　小野好古

集雜賀 もゝ敷に千年のことはおほかれとけふの君はためつらしき哉

菅原みちまさかかうふりし侍ける夜母のよみ侍ける

久かたの月の桂も折はかり家の風をもふかせてしかな

或人賀し侍けるに　權中納言敦忠

集雜賀 千とせふる霜のつるをは置なから久しき物は君にそ有ける

清和女七親王の八十賀重明親王のし侍けるときの屏風に竹に雪のふりかゝりたりける所　つらゆき

同 白雪は降かくせとも千世迄に竹のみとりはかはらさりけり

たいしらす

なかれくる瀧の白糸絶すしていくらの玉のをとかなるらん

屏風に　伊勢

集雜賀 はる〳〵と雲ゐをさして行舟のゆく末遠くおもほゆる哉

天暦十一年九月七日齋宮くたり侍けるに内より御硯箱調て給すとて　御製

思ふをなるといふなる鈴鹿山こえてうれしきさかひとそ聞

圓融院御時齋宮のくたり侍ける時母の齋宮ともにくたり侍けるに鈴鹿山にて　齋宮女御

世にふれは又も越けり鈴か山むかしの今になるにや有らん

題不知　平定文

集雜賀 ひきよせは只にはよらて春駒のつなひき（する集）よりそなは立ときく
伊勢（たにも集）

集雜戀 我こそはにくゝもあらめわか宿の花みになとか君かきませぬ

たいよみ人しらす

集雜賀
花の木はまかき近くは植てみしみれは物おもふとまさりけり

灌佛のわらはを見はへりて

同
唐衣たつより落る水ならてわか袖ぬらすものや何なり

修理大夫惟正朝臣家にかたゝかへにまかりたりけるにつとめてまかりかへるとて出したりける枕にかきつけ侍ける　少將義孝

同
つらからは人にかたらん敷妙の枕かはらて一夜ねにきと

内に候ける人をちきりをきたりける夜をそくまてきける程に丑みつと奏し侍けるをきゝ侍て女のいひつかはしける　讀人しらす

同
ひとこゝろうしみついまはたのましよ

といへりければ　良峯宗貞

同
ゆめにみゆやとねそすきにける

權中納言敦忠か兵衞佐に侍ける時忍ひていひ契りて侍ける事のよにきこえ侍ければ　左近

集雜戀
人しれす契りしとは柏木のもりやしにけんよにふりにけり

たいよみ人しらす

同
ぬれ衣をいかゝきさらんよの人のあめの下にしすまん限りは

つゝむと侍けるをんなの返事をせすのみ侍ければ一條のおほいまうちきみいはみかたといひつかはしたりければ　をんな

同
岩見潟何かはつらきつらからは恨みかてらにきてもみよかし

女のもとにまかりたりけるにとくいり侍にければつとめていひつかはしける　源景明

集旋頭歌
梓弓思はすにして入にしをひきとゝめてそふすへかりける

男もたりける女をせちにけさうし侍てつかはしける　よみ人しらす

集雜戀
ありとてもいくよかはふる唐國の虎伏のへに身をやなけてん

たいしらす

同
いつことも所さためぬ白雲のかゝらぬ山はあらしとそ思ふ

女のもとにふみつかはしたりけるにあたなる人の返しはせすといひて侍ければ　よしのふ

同
あたなりとあたにはいかゝ定むらん人の心を人はしるやは

題よみ人しらす

集雜賀
いかてかは尋ね來つらん蓬生の人も通はぬわか宿のみち

東三條にまかりいてゝあめのふりける日　承香殿女御

同
雨ならてもる人もなきわか宿をあさちか原とみるそ悲しき

春日祭の使つかふまつりてまかりかへりてすなはち女の許につかはしける　一條攝政

同
くれはとく行てかたらんあふ事の遠ちの里の住うかりしも

あつまより男の登り侍てさき〳〵ものいひ侍ける女のもとにまかりたりけるにいかていそきのほりつるそととひ侍ければ　讀人しらす

同
愚にも思はましかは吾妻路のふせやといひしのへにねなまし

とし月をへてけさうし侍ける女のつれなく侍ければまかりてさらに今はよにあらしといひ侍てのちひさしうをとつれ侍らさりければこの男のいもうとのさきもか

同
心ありてとふにはあらす世中に有やなしやのきかまほしきに（そ集）
だらひなとし侍ければいひつかはしける

かたらひ侍ける人のひさしふなとつれ侍らさりければ
たかんなつかはすとて　よみ人しらす

同
君とはて幾世へぬらん色かへぬ竹の古根のおひかはるまで

ある男のもとに松をむすひてつかはしたりければ

集戀二
なにせんに結び置けん（そめ集）岩しろの松は久しき物としる〳〵

一條攝政いまた下臈に侍ける時承香殿の御方に侍ける
をんな忍ひてものいひ侍けるにさらになとひそといひ
侍ければほとへて契りし事ありしかといひつかはした
れば　本院侍從

集雜戀
それならぬをも有しをわすれねといひし計を耳にとめ劒

ものへまかりけるにはまつらにかひのはへりけるを見
はへりて　坂上郎女

同
我せこをこふるもくるし暇あらは拾ひてゆかん戀わすれ貝

やんとなき所に候ける女の許に秋忍ひてまからむとい
ひて侍ければ

同
秋萩の花もうへをかぬ宿なればしかたちよらん所たになし

大納言朝光朝臣下らうに侍ける時忍ひてをんなの許に
まかりてあか月まかりかへらしとし侍ければ
東宮女藏人左近

集雜賀
岩橋のよるの契も絶ぬへしあくるわひしきかつらきの神

紀郎女にをくりける　大伴家持

集雜戀
久方のあめのふる日を只ひとり山邊にをれは物うかりけり

延喜御時御屏風歌　貫　之

同
何れをかしるしともみむ三輪の山有としあるは杉にそ有ける

いなりにまてあひてけさう（と思は集）し侍ける女のと人にあひ侍
にければいひつかはしける　藤原長能

同
我といへは稻荷の神もつらき哉人の爲とは祈らさり（を集）しに

稻荷のほくらにをんなの手にてかきて侍ける　讀人しらす

同
瀧の水かへりてすまはいなり山七日のほれるしるしと思はん

つゝみのたけといふ所をよみ侍ける　紀　輔　時

集物名
かゝり火の所さためすみえつるは流つゝみのたけはなりけり

くまのくらといふ山寺に安居に賀縁法しの籠りて侍け
るに住持の法しに歌よめといひ侍ければ
身を捨て山に入にし我なればくまのくらはむともおほえす

あらふれのみやしろ　藤原相見
くきも葉も皆みとりなるふか芹はあらふれのみや白くみゆ覽

さはかのみゆ
あかすしてわかれし人の住里はさはかのみゆる山のあなたか

いぬか日のみゆ
鳥の子はまた雛なから立ていぬかひのみゆるはすもり成へし（けり集）

よとかは　貫　之
足引の山邊にをれは白雲のいかにせよとかはるゝ（とき集）よもなき

やまと　元　輔
ふる道に我やまとはむ古への野中の草はしけりあひにけり

なとりのこほり　重　之
仇なりなとりのこほりにおりゐるはしたより解る事を知ぬか

さくなむさ　　　　如　覺

紫のいろにはさくなむさしのゝ草のゆかりと人もこそみれ

かにひのはな　　　い　せ

わたつみのおきなかにひの離れ出て・もゆとみゆるは天つ星かも　あまのいさりか集

をみなへしといふことを句の上に置てよみ侍ける　　貫　之

集雜秋古今物名　小倉山みれ立ならし鳴鹿のへにけん年秋集をしる人そなき

かやくきのす　　　相　見

集物名　何とかやくきのすかたはおもほへてあやしく花の名社忘るれ

つくみ　　　よみ人しらす集大伴黒主

わか心あやしやあたに春くれは花につくみとなと成にけむ　てなり集

日くらし　　　貫　之

杣人はみやきひくらし足引の山のやま彦盛集よひとよむ也

三　常集貫之

松のねは秋のしらへに聞ゆ也たかくせめあけて風そひくらし

とちところたちはな　　相　見

おもふとち所もかへすゝみへ南たちはなれなは戀しかるへし

さはやけ　　　集よみ人しらす

春風のけさはやけれは鶯のはなのころもゝほころひにけり

かのとゝいふことを　　惠慶法師

小男鹿のともまとはせる聲す也つまや戀しき秋の山邊に

つゝみやき　　　すけ見

わきも子か身をすて集なけしより猿澤の池のつゝみやきみは戀しき

うるかいり

このいへはうるかいりてもみてし哉主なからもかはんとそ思

あしかなへ

津國の難波わたりに作る田はあしかなへかもえこそ見わかれ　こ集

いかるかにけ　　　躬　恒

とそとも聞たにわかすわりなくも人の怒るかにけやしなまし

四十九日　　　相　見

秋風のよもの山よりをのかしゝふくに散ぬる紅葉かなしな

拾遺抄巻第十

雜部下

月を見侍て　　　中務卿具平親王

よにふるに物思ふとしもなけれとも月にいく度詠めしつらん

小野宮おほいまうちきみの家屏風に　　貫　之

思ふ事ありとはなしに久方の月夜となれはねられさりけり

めにまかりをくれて侍けるころ　　大江爲基

なかむるに物思ふことのなくさむは月はうき世の外よりや行

法師にならむと思侍けるころ　　少將高光

かくはかりへかたく見ゆる世中にうらやましくも澄る月かな

冷泉院東宮におはしましける時月まつ心殿上のをのこ

ともよみ侍けるに　　藤原仲文藏人

晨明の月の光をまつほとにわかよのいたく更にけるかな

玄上宰相のめの月のあかき夜かとのまへをまかりわた

るとてせうそくいひいれて侍けれは　　伊　勢

雲ゐにてあひかたらはぬ月たにもわか宿過て行時は見すなし集

屏風の繪　　　貫　之

常よりもてり增る哉山のはの紅葉をわけていつる月影
たいしらす　　三　常
久かたの天つ空なる月なれといつれの里にかけなかるらん
三條のおほいまうちきみ後院にすみ侍ける時歌よみと
もあつめて歌よませ侍けるに水上秋月と云題を
菅原文時
水の面に月の沈むをみさりせは我身のみとや思ひはてまし
除目のつとめて命婦左近かりつかはしける
元　輔
年ことにたえぬ泪や積りつゝいとゝ深くはみを沈むらん
權中納言敦忠か西坂本の家の瀧の巖にかきつけ侍ける
伊　勢
音羽川せき入て落す瀧つせに人の心の見えもするかな
中　務
君かくる宿に絶せぬ瀧の糸はへてみまほしき物にさりける
たいよみ人しらす
もかり船いまそ渚にきよすなるみきはのたつの聲さはく也
躬　恒
大空を詠めそ暮す吹風の音はすれともめにしみえねは
ある所に春秋いつれまさりたりととひはへりければ
貫　之
春秋に思ひ亂てわきかねつ時につけつゝ見ゆる心は
草あはせし侍ける所にて　惠慶法師
たれなくてなき物草は生にけりまくてふ事はあらしとそ思ふ
なそ／＼かたりし侍ける所にて　曾禰好忠
我ことはえも岩代の結ひ松千年をふとも誰かとくへき
野宮にて齋宮の庚申し侍けるに松風入夜琴といふ題を
讀侍ける　　齋宮女御
ことの音に峯の松風かよふ也いつれのをよりしらへ初けん
松風の音に亂るゝことの音をひけは子日の心地こそすれ
五條内侍のかみの屏風に海に松のひたれる所を
伊　勢
海にのみひたれる松の深みとりいくしほとかは知へかるらん
天曆御時名有所々のかたを屏風にかゝせて人々に歌た
てまつらせ給ける中に　　忠　峯
尾上なる松の梢はうちなびき浪のこゑにそ風もふきける
延喜御時御屏風に　　つらゆき
雨降と吹松風は聞ゆれと池のみきはゝまさらさりけり
つかさ給はらてなけき侍ころさうしを人のかゝせ侍け
るおくに書つけ侍ける
いたつらに世にふる物と高砂の松も我をや友とみるらむ
大江の爲基か許にうりにまてきたりける鏡のしきにか
きて侍ける　　よみ人しらす
けふのみと見るに涙のます鏡なれにし影を人にかたるな
小一條左大臣まかりかくれてのちかひ侍ける鶴のなき
侍けるをきゝて　　小野宮おほいまうち君
をくれゐて鳴なるよりはあしたつのなとか齡を讓らさりけん
或所に説經しける法師の從僧の小法師原のゐて侍ける
にすたれのうちより花おりてといひ侍ければ
從僧小法師 集淨玄法師

いなおらし露に袂のぬれたらは物思ひけりと人も社見れ
山里にまかりけるあか月に日くらしのなき侍ければ
右大將濟時
朝朗日くらしの聲聞ゆなりこやあけくれと人のいふらん
屛風のゑに法師のふれにのりてはへりける所に
中納言道綱母
わたつみはあまの舟こそ有ときけ乘たかへても漕てたる哉
たいよみ人しらす　集つらゆき
なのみして山は三笠もなかりけり朝日夕日のさすをいふかも
天暦の御時屛風に長柄橋のはしらのわつかにのこりた
るところに
藤原清正
あしまより見ゆるなからの橋柱むかしの跡のしるし成けり
あかしの浦を船にのりてまかりけるほとによみ侍ける
源爲宣　集爲憲
よとゝもに明石の浦の松原は浪をのみ社よるところらめ
橘たゝもとか人のめにしのひてものいひ侍ける頃遠所
まかるとてその女のもとにつかはしける
わするなよ程は雲井になりぬ共空行月のめくりあふ迄
題不知
貫之
年月はむかしにあらすなりぬれと戀しきをはかはらさりけり
難波にはらへしにある女のまかりたるにむかしむつま
しふしりて侍ける男のあやしのさまにてあしをかりて
あひて侍ければさりけなくていひ遣しける
よみ人しらす
あしからしとてこそ人に別れけめ何か難波のうらにしもすむ（よからんとてぞ　わかれけん　はすみうき集）
返し
おとこ
君なくてあしかりけりと思ふにはいとゝ難波の浦そすみうき（も集）
源重之か母近江に侍けるに孫のあつまよりまかりのほ
りていそくことありてなんこのたひえあはてまかりぬ
るといひてはへりければ
祖母
親のおやと思はましかは問てまし我子のこにはあらぬ成へし
天暦御時一條攝政藏人頭にて候ける時に帶をかけて碁
をあそはしけるまけたてまつりてかすおほくなりにけ
れは帶かへし給はすとて
御製
白浪のうちや返すと思ふよに濱の眞砂の數そつもれる
内侍馬か家に中納言實資わらはに侍ける時小弓いにま
かりたりけるにものかゝぬさう紙をかけものにして侍
ければ
小野宮大いまうち君
いつしかとあけてみたれは濱千鳥あとあることに跡のなき哉
題よみ人しらす
なきなのみ龍田の山の麓にはよにも嵐の風もふかなむ
たかおにまかりかよふ法師にある女のなたちて侍けれ
は少將しけもときゝつけてまことかととひにつかはし
たりければ
八條大君
なきなのみ高尾の山といひ立る人はあたこの峯にや有らん
みたけにとしおいて詣侍て
元輔
いにしへものほりやしけん芳野山やまより高きよはひなる人
雨ふる日大原河をわたり侍けるにひるのあしにつきて
侍ければ
禪慶法師　集惠慶法師
世中にあやしき物は雨ふれと大原川のひるにさりける（そ有ける集）
みちのくにの名取のこほりくろつかといふ所に重之か
いもうとあまたすむときゝ侍ていひつかはしける

陸奥のあたちの原の黒塚にをにこもれると聞はまことか（りいふ集）　平兼盛

三條のおほいまうち君の家のかへのゑに旅人の盜人に
あひて侍けるかたをかきて侍ける　藤原爲頼

ぬす人の龍田の山に入にけりおなしかさしの名をやなかさん（にやけかれ集）

同繪に白馬引處に　惠慶法師

難波江の蘆のはな毛のましれるは津の國かひの駒にや有らん（集）

仲文

かはやなき糸はみとりに有物をいつれかあけのころも成らん

かうふりやなきを見侍て

能宣かもとに車のかもこひにつかはしたりけるになし
といひ侍けれは　仲文

鹿をさして馬といふ人有けれはかもをもおしと思ふなるへし

かへし　能宣

なしといへは惜むかもとや思らん鹿や馬とそいふへかりける

大隅守に櫻嶋忠信か侍ける時に郡司にかしらしろきお
きなの侍けるをめしかむかへんとし侍けるにおきなの
よみ侍ける

老はてゝ雪の山をはいたゝけと霜とみるまて身はひえにける（にを集）

神明寺の邊に無常所まうけて侍けるかおもしろく見え
けれは　元輔

おしからぬ命や更にのひぬらんをはりの煙しむるのへにて

つかさたまはらさりける人のとひにつかはしたりけれ
は（人集）　源景明

わひしとはうき世中にいけらしと思ふとさへかなはさりけり

二條の大いまうち君の右近のつかひのをさ清忠をめし
て歌よませ侍けるに身のゝそみ侍けるかゝなはす侍け
れは　佐伯清忠

かきりなき泪の露にむすほれて人のしもとは成にや有らん

むすめにまかりをくれて又の年の春櫻花さかりに家の
さくらを見ていさゝか思ひをのふといふ題を
小野宮大いまうちきみ

（集哀）櫻はな長閑けかり㒵なき人を戀る泪そまつは落ける

兼盛

（同）面影に色のみ殘るさくら花幾よの春を戀んとすらん

元輔

（同）はなの色も宿も昔の春なからかはれる物は露にさりける（そ有集）

能宣

（同）櫻花にほふものから露けきはこのめもゝのそ思ひしるらし

この事をきゝ侍て　源千古

（同）君まさはまつそおらまし櫻花風のたよりに聞そかなしき

天暦御時中宮かくれ給ひてのち又のとしのあき前栽に
つゆのをきたるをかせのふきなひかすを御覽して
御製

（同）おき風になひく草はの露よりも消にし人を何にたとへん

冬おやの喪にあひて侍ける孝子のもとにつかはしける（法師集）
三常

（集雜秋）紅葉々やたもと成らん神な月しくるゝことに色のまさるは（れ集）

さる澤の池に采女のみなけて侍けるをみて
人丸

（集哀）わきも子かねくたれかみを猿澤の池の玉もとみるそかなしき

同
題よみ人しらす

心にもあらて憂世にすみ染のころもの袖のぬれぬ日そなき

同
服ぬき侍とて　貫之

ふち衣はらへて捨る泪かはきしよりまさるみつそなかるゝ

同
一條太政大臣の服ぬくとて　道信朝臣

かきりあれはけふぬき捨つ藤衣はてなき物は泪なりけり

としのふかなかされ侍ける時なかさるゝ人は重服の裝束してなむまかると聞てはゝの許よりそのきぬしてつかはすにむすひつけてつかはしける

同
ひとならてむれのちふさをほむらにてやく墨染の衣きよきみ

思ひける女にをくれて歎けるころよみ侍ける　大江爲基

同
藤衣あひみるへしと思ひせはまつにかゝりてなくさめてまし

同
うら山しいかなる人かとこふりてあひ思ふ人に別れさるらん

たいよみ人しらす

同
うつくしと思ひしいもを夢にみておきてさくるになきそ悲しき

兵衛の佐のふかたまかりかくれて侍けるにおやの許につかはしける　堀川のおほいまうちきみ

同
こゝにたにつれ〳〵となく郭公ましてこゝゐの森はいかにそ

順か子なくなりて　元輔

同
思ひやるこゝゐの森の雫にはよそなる人の袖もぬれけり

子にまかりをくれてよみ侍ける　重之

同
なよ竹の我子のよをはしらすしておほしたてつと思ひける哉

めなくなりてのち子もうせ侍にける人をとふらひにつかはしたりければ　讀人不知

同
いかにせん忍の草もつみ侘ぬかたみとみえし子たになければ

此卷亦十五首脱算合如前

返し（小野宮大いまうち君いつしかさの下）

とゝめても何にかはせん濱千鳥ふりぬる跡はなみに消つゝ

以下十四首疑らくはよみ人しらすいかにせんの下にあるへし

朝かほのはなを人のもとにつかはすとて　藤原道信朝臣

あさかほを何はかなしと思けん人をも花はさこそみるらめ

昔見侍し人々おほくなくなりたることをなけくをみ侍て　藤原爲頼

同
世中にあらましかはと思人なきかおほくも成にける哉

返し　右衛門督公任

同
常ならぬ世は憂身こそ悲しけれその數にたにいらしと思へは

子ふたり侍ける人のひとりは春まかりかくれいまひとりは秋なくなりにけるを人のとふらひて侍ければ　よみ人しらす

同
春は花秋はもみちとちりはてゝ立かへるへきこのもともなし

世中心ほそくおほえてつねならぬ心ちし侍ければ公忠朝臣のもとによみてつかはしけるこのあひたやまひおもくなりにけり　紀貫之

同
手に結ふ水にやとれる月影の有かなき〔か〕のよに社有けれ

このうたよみ侍てほとなくなくなりにけるとなん家の集にかきて侍る

同　題しらす　よみ人しらす

とりへ山たにゝ煙のもえたゝははかなくみえし我としら南

同　沙彌滿誓

よの中を何にたとへん朝ほらけこき行船の跡のしら浪

忠連南山の房のゑに死人を法師の見侍てなきたろかた

なかきたろをみて　源相方朝臣

同

契あれはかはれなれとも逢ぬるを我をは誰かとはんとすらん

題しらす　よみ人しらす

同

山寺の入相のかれの聲ことにけふもくれぬと聞そかなしき

法師にならむとていてける時に家にかきつけて侍ける

慶滋保胤

同

憂世をはそむかはけふもそむきなん明日も有とは賴へき身か

題しらす　よみ人しらす

同

世中に牛の車のなかりせは思ひの家をいかて出まし

爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍て又の日これかれもろ

ともにかへり侍にけるついてにをのにまかりて侍ける

に花のおもしろかりけれは　春宮大夫道綱母

同

薪こるとは昨日につきにしをいさをのゝえはこゝにくたさん

をこなひし侍ける人のくるしくおほえ侍けれはえおき

侍らさりける夜のゆめにおかしけなる法師のつきおと

ろかしてよみ侍ける

同

朝ことにはらふちりたに有物を今幾世とてたゆむなる覽

市門にかきつけて侍ける　空也上人

同

一たひも南無阿彌陀佛といふ人の蓮のうへにのほらぬはなし

定爲法印筆拾遺集跋

算合抄之證本

抄歌五百九十四首　上二百卅五首　下三百五十九首

其中

戀上　中納言師氏

思つゝへにける年をしるへにてなれぬる物は心なりけり

或本無入後撰云々

題しらす　赤染衛門

わか宿の松はしるしもなかり兒すき村ならはたつねきなまし

此二首集不見歌也

五百九十二首集抄無相違

拾遺抄歌

春　五十七　夏　三十二　秋　四十九　冬　卅二

賀　卅一　別　三十四　戀上　七十五一首集不見或本無之

戀下　七十五一首集不見　雜上　百廿二　雜下　八十六

已上五百九十四首

拾遺抄十卷後世稀傳保己一嘗得公任卿眞蹟一轉之本不耐喜躍謄寫挿架疑其尾有脫闕也屋代弘賢日者得拾遺集古本比挍而藏家其一是定爲法印所筆一則柳原業光卿手書而二本並標注抄歌詳矣弘賢乃採而參訂定爲本注每卷歌數而終書云惣計五百九十四首更計之實得五百九十三首明知其爲筆誤也今據此本於春秋及戀上雜下四卷内得其所脫漏廿一首始全然復其舊焉不亦慊乎袋草紙曰抄歌五百八十六首或云四首即清輔朝臣所見本異耳又曰花山院御撰而世多爲公任卿撰今試以集中所載作者之官位推其時此書之撰即在長德二年後數經刊修且稍有所增加至長保三年乃改爲拾遺集廿卷也玩讀兩書其題書之辭俱似不出人臣之手也爲花山法皇製作者得其實歟姑書俟識者黜竄爾

群書類從卷第百四十七

和歌部二

後葉和歌集

いそのかみふるき人のことわさをたつね。かはたけのなかれ久しき世々をきくに。ひしりのみかと〔の〕かしこきおほん時。ひとの心をわきまへ國のまつりことをしろしめす事。敷しまのやまと歌になんありける。しかあるをときくたり人〔の〕をろそかになりにけるより。なにはつによせて君をそへたてまつるあとならひかたく。よし野山をかけて人をしたふおもひ〔いよく イ〕いと〻まれになりにけり。いまそかきくのいろなる〔なに、かイ〕はひとたひすみて。むかしのにほひまて〔さらにのこりイ〕より。ならの葉の名におへるみやふた〻ひひらけて。いにしへの風あらたにつたはれる代にあひて。すたれたる道をいたみ。ふるきあとをこふるともから。かみつかたのすへらきにつかへまつるよろこひをいたかすといふことなし。かくてのちよつのうみ波をすまして。むなしきふれなかれにあそはしむるうちに。さま〳〵の集にいらさる歌とも撰ひたてまつるへきみことありて。言のはの花といへる集をあらたにえらひ出されにけり。山かつのしつのかきねに風のつてにちれるをよろこひて。おり〳〵ひらきて春のつれ〳〵をなくさめ。〔しは〳〵もてあそひて〕秋のあはれをそふるに。いにしへの人をつられ入られたるは。冨士の根のけふりよりもたかくして。つくはねのこのもかのもにましり。いまの代の歌をえらひ載られたるは。夕つく夜おほろけならぬはとられぬにやとみえなから。秋山のしかすかにおほゆるも。ところ〳〵ましはれる歌に〔をたまつはきあらためらるへ〕かきあらため。えらふへ〔きイ〕きみことありとは〔はイナシ〕。花す〻きほのかにきこえわたりしかとも。かりかれのつられあつめたりし人も。夕のそらの雲にまとり。しきのはれかきなをされ〔れイナシ〕んことも。在明の月のさやかにもききさためねは。木のもとにのこれることのはもくちはてぬへく。いは間によとむ水のこ〻ろもかきなかすかたなくて。おいの身のしもをいた〻けるかよは〔かなしみイ〕ひをわすれて。ことのはのかせにたくはん事を思ひあまりし〔にイ〕。かの集の中に。和歌の浦波こ〻ろよりぬへく〔てイ〕。もしの關路のめと〻まるをは。わたくしのもてあそひ物にあらむとて思ひうるにまかせてかき出したり。此ほかのうたの春の水と〻こほりすくなく。秋のかせ〔になイ〕〔の〕き〻ところあるをはかされてさためをかれんそさへにもやとて。き〻をよふにしたかひてつられ入たり。又かのふるきか中に。心ふかくことはたくみなるかおほく〔はイ〕ましはりてみゆる〔をイ〕と。池水のもらさすみなれさほとりえらふへけれとも。ちかき〔よ〻の〕撰集ふるきにゆつりてとられぬほとの集にいれ

るをは。まさきのかつらくりかへし。月草のうつしあへかたけれは心にはそめなからとらすなんなりぬる。いやしくもふるき歌の跡をわかひ。のこれることのはをあつめて後葉和歌集となつけて。わかちてはたまきとせり。抑柿本のつたへあらす。梨壺のつゆにしうるは〔す〕して。もとあらの萩のもとあら〳〵みたりしことも。ふるから小野のふりはてにたれは。わすれ水わすれのみゆきつき〔ヽイ〕くれは。とりあやまりおほからむこと。いにしへにはぢ。いまにおそれ思へとも。はゝかりの關のはゝかりなから。水莖のかきなかしつる事になむなりける。夏草のかりのすさひにはあれとも。おほあらきのもりいつることもあらは〔もイ〕。あさけりしけきつまとのみ〔やイ〕なりはて〔へりイ〕ぬへきことならむかし。

後葉和歌集巻第一　春上

ふるとしに春たつ日　延久第三親王輔仁

年のうちに春たちくれは一とせにふたゝひまたる鶯のこゑ

春たつ心をよめる　源俊頼朝臣

はるのくるあしたの原を見わたせは霞もけふそ立はしめける

新院〔の〕百首の歌めしけるに　待賢門院堀川

雪ふかき岩のかけみちあとたゆるよしのゝ里も春はきにけり

堀川院御時百首の歌たてまつりけるに霞をよめる　隆源法師

あつさ弓はるのしるしにいつしかとまつたなひくは霞也けり

寛和二年内裏歌合に　藤原惟成

きのふかも霰ふりしかしからきの外山の霞はるめきにけり

天徳四年内裏歌合に　平兼盛

ふるさとは春めきにけりみ吉野のみかきかはらを霞こめたり

同歌合にうくひすをよめる　源順

こほりたにとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬ鶯のこゑ

百首の御歌の中に　新院(崇德)御製

鶯の鳴へき程になりぬれはさもあらぬ鳥も耳にこそたて

題不知　道命法師

たまさかに我まちえたる鶯のはつ音をあやな人や聞らむ

承暦二年内裏歌合後番の歌　藤原顯綱朝臣

春たては雪の下水うちとけて谷のうくひす今そなくなる

鷹司殿〔の〕七十賀の屏風に子日したるところを　赤染衛門

萬代のためしに君かひかるれはれの日の松もうらやみやせむ

堀川院の御時たてまつりける百首〔歌〕の中に　東宮大夫公實

ねのひして二葉の松を千世なから君かやとにもうつしつる哉

承暦二年内裏の後番の歌合に人にかはりて　前皇后宮美作

ふたは成子の日の小松ひきそへて花さく代をは君そみるへき

若菜の歌とてよめる　讀人不知

昨日社やくとはみしか春日野にいつしか今日そ若菜つみける

〔若菜の歌とてよめる　讀人不知

春日野は雪もけぬらん春雨〔春雪をイ〕のはれは今日こそ若菜つみてめ〕

百首の歌の中にはるのこゝろをよめる　曾禰好忠

雪さえはゑくの若菜もつむへきに春さへはれぬみ山へのさと
大藏卿匡房
道たゆといとひし物を山さとにきゆるはおしき去年の雪かな
屏風の繪に內宴かける處を　平　兼　盛
あたらしき年のはしめにあひくれと此春はかり嬉しきはなし
梅の歌とて　大納言師頼
いまよりは梅さく宿は心せむまたぬにきます人もありけり
源　時　綱
吹くれはかをなつかしみ梅の花ちらさぬ程のはる風もかな
源俊頼朝臣
梅かゝはをのか垣根をあくかれてまやのあたりにひま求む也
[イ本詞書なし]
〔たゝよしの卿の家の歌合に　右兵衛督公行
梅の花匂を道のしるへにてあるしも知らぬ宿に來にけり〕
百首歌たてまつりける中に　小　大　進
うつりかにあた名たちえの梅花なをこりすまに袖やふれまし
むめの歌よませたまひける　新院御製
吹風にゝほふのみかは梅花うす紅のいろもめつらし[なつかしイ]
屏風の繪に梅花をみて人とゝまれり　平　兼　盛
花の木をうへしもしるく春くれは我宿すきてゆく人そなき
天德四年內裏歌合に[よりイ]　讀人不知
さほひめの糸そめかくる青柳を吹なみたりそ[イナシ]春の山かせ
忠義公(兼通)の家歌合に　讀人不知
谷かせのふきあけにたてる玉柳枝の糸にもみえぬはる哉
百首のうたたてまつりけるに　藤原顯廣朝臣
紫のねはふよこのゝつほすみれ眞袖につまん色もむつまし[はつかしイ]
よふこ鳥をよめる　讀人不知

我せこか衣たつ田の山中にうらかなしくもよふことり哉
かへるかりの歌とて　贈左大臣 永實[母イ]
ふる鄕の花のにほひやまさるらむしつ心なくかへるかり金
源　忠　季
中々に散をみしとや思ふらん花のさかりにかへるかりかね
春駒をよめる　俊惠法師
まこも草つのくみいつる[わたイ]澤へには繫かぬ駒もはなれさりけり
春の歌の中に　藤原清輔
みこもりに蘆のわかは[やイ]ももえぬらむ玉江の沼をあさる春駒
〔題不知　僧都覺雅
萠え出る草葉のみかはおかさはら駒の氣色も春めきにけり
春雨をよめる　讀人不知
山里の花まつほとの春雨に心ほそくて日をもふるかな
中納言家成の家歌合に山さむくして花おそしといふ
ことを　藤原基俊朝臣
み吉野は山井のつらゝむすへはや花の下ひもおそく解くらむ
百首御歌の中に　新院御製
あさ夕に花まつ頃はおもひ寝の夢のうちにそ咲きはしめける
同歌たてまつりけるによめる　待賢門院堀川
いつかたに花咲きぬらんと思ふよりよもの山へに散る心かな
遠山花を尋ぬといふことを　新院御製〕
尋ねつる花のあたりになりにけり匂ふにしるし春の山かせ
關白前太政大臣(忠通)
かへるさのいそかぬ程の道ならはしつかに峯の花はみてまし
ところ／＼に花をたつぬといふことをよませたまひけ
る　[堀イ]白河院御製

春くれは花の木末にさそはれていたらぬさとのなかりつる哉

遠き山のさくらといふことを　前齋院出雲

九重にたつしら雲とみえつるは大内山のさくら成けり

京極前太政大臣(師實)家歌合　一宮紀伊

朝またき霞なこめそ山さくら尋ね行まのよそめにもみむ

大藏卿匡房

しら雲とみゆるにしるしみよしのゝ吉野の山の花さかりかも

康資王母

紅のうす花さくらにほはすはみなしら雲とみてや過まし

中納言女王

山櫻にほふあたりははる霞風をはよそに立へたて南

花御覽して　院(鳥羽)御製

心あらは匂ひをそへよ櫻花のちの春をはいつかまつへき

題不知　藤原元眞

櫻花ちらさて千世もみてしかなあかぬ心はさてもありやと

屏風の歌〔に〕　平兼盛

ひとゝせは春なからにも暮なゝん花のさかりをあく迄もみむ

關白前太政大臣家の歌合〔に〕さくらをよめる

源俊頼朝臣

心あらは風もや人をうらみましおるは櫻のおしからぬかは

百首の歌たてまつりけるに　左近衞中將教長

ふる郷にとふ人あらは山さくらちりなん後をまてとこたへよ

後葉和歌集卷第二　春下

院の北おもてにて人々歌つかうまつりけるに風なくして花ちるといふことをよめる　贈左大臣〔太政イ〕

うつろへはをのか心とちる花をさのみは風におほせさらなむ

天德四年内裏歌合〔に〕　大中臣能宣朝臣

櫻花かせにしちらぬ物ならは思ふことなき春にそあらまし

承暦二年内裏後番歌合　東宮大夫公實

山櫻おしむにとまる物ならは花は春ともかきらさらまし

京極前太政大臣家歌合　周防内侍

やまさくらおしむ心のいくたひか散木のもとに行かへるらん

新院のくらゐにおはしましける時うへのをのこともに歌よませさせたまひけるに　右兵衞督公行

あらし吹志賀の山への櫻はなちれは雲井にさゝなみそたつ

題不知　よみ人しらす

おしめともかせにみたれてちる花を〔むすひと・めよイ〕くる人とめよ青柳のいと

承暦二年内裏歌合　修理大夫顯季

たつねこぬさきにはちらて櫻花みるおりにしも雪とふるらん

太皇太后宮賀茂のいつきと聞えける時人々まいりて鞠つかうまつりけるにすゝりのはこのふたに雪をいれて出され侍りけるしきかみに書つけはへりける

攝津

さくら花散しく庭をはらはれはきえせぬ雪と成にけるかな

落花滿庭といふことを　花園左大臣(有仁)

庭もせにつもれる雪とみえなからかほるそ花のしるし成ける

花のちるをみて　源俊頼朝臣

身にかへておしむにとまる花ならはけふや我世の限ならまし

老人花をおしむといふことを　藤原範永朝臣

散花もあはれとみすやいそのかみふりはつるまておしむ心を

落花をよめる　藤原隆資[經イ]

櫻花又みんこともさためなきよはひそ風よこゝろしてふけ

上達部花みんとて觀音院より雲林院を見侍りてかへりけるあひだに齋院に車たてて物みてかへるとてしめの[うちの]花ははなにもあらぬなるへしと申ける返事に　堀川左大臣(俊房)

風をいたみまつ山へをも尋[そイ]つるしめゆふ花はちらしとそ思ふ[思てイ]

三月の十日のほとにはなの[そイ]ゝこりすくなく成をみて

ちるまゝに春の過るをみる時は花なきさとに住へかりける

三月のつこもりに實方朝臣のもとにいひつかはしける　藤原道信朝臣

ちり殘る花もやあるとうちむれてみ山かくれを尋てしかな

春の歌のなかに　待賢門院兵衛

花の色に光さしそふ春のよそ木の間の月はみるへかりける

題しらす　延久第三親王

心してみるへかりけりはるの月ことそともなくむかし戀らる

つゝしの歌とてよめる　よみ人しらす

わきもこかしたもの色の紅に花さきにけるいはつゝし哉

堀河院御時百首の歌たてまつりけるに　源俊頼朝臣

風ふけは浪おりかけてかへり見きしにはうへし山ふきの花

藤原基俊

山ふきの花咲に見かはつ鳴井手のわたりを今やとはまし

[欵冬をよめる]　よみ人しらす

やまふきの花のちるをやおしむらんかみなひ川にかはつ鳴也

藤のうたよみけるに

たこのうらにけふもとまりぬふち波の紫ふかき色のあかれは

新院位におはしましける時牡丹をよませ給ひける　關白前太政大臣

咲しよりちりはつるまて見し程に花のもとにて廿日へにけり

大中臣能宣朝臣

敷花にせきとめらるゝ山川のふかくもはるの成にけるかな

百首の歌たてまつりける中に　藤原清輔

大かたの春のくるゝはおしきかと花なきやとの人にとはゝや

老人惜春と云ことをよめる　橘俊成

老てこそ春のおしさは增りけれ今いくたひもあはしと思へは

三月盡の心をよめる　藤原定成朝臣

いくかへりけふに我身のあひぬらむ惜むは春の過るのみかは

源俊頼朝臣

春こそは限りもあらめみよし野に霞はのこれかたみともみん

大納言成通朝臣

さのみやは又こむ春をまちへけむと思ふにいとゝ惜きけふ哉

後葉和歌集巻第三　夏

堀川院御時百首歌たてまつりけるに　太皇太后宮肥後

あかさりし花になれたるから衣心のほかにかふるけふ哉

隆源法師

春とても花の袂にあらぬ身は衣かへうきことのなきかな

題しらす　[覺因イ]懷圓法師

花ちるとなけきし程に山里のやかてこくらく成にける哉

天德四年內裏歌合〔に〕　平 兼盛
あらしのみ寒き深山のうの花はきえせぬ雪とあやまたれつる〔つ、イ〕
山里のうのはなを　〔まさかた〕
としをへてかよひ馴にし山里のかとゝ〔こと・ふイ〕つはかり咲ろうのはな
ほとゝきすをまつこゝろを　周防内侍
むかしにもあらぬ我身に郭公まつこゝろこそかはらさりけれ
關白前太政大臣家にてほとゝきすの歌讀侍けるに
藤原忠兼
ほとゝきす鳴ねならては世中に待こともなき我身也けり
堀川院御時百首歌たてまつりけるに　藤原基俊
一こゑのきかまほしさに郭公思はぬ山にたひねをそする
前齋宮〔院イ〕河内
夜をかされまつをはしらて時鳥いかなる里に鳴ふかすらん
中院右大臣家歌合〔に〕　中納言師時
きゝつやと人も社とへほとゝきすかたるはかりの一こゑも哉
天德四年內裏歌合〔に〕　坂上望城
ほのかにそ鳴わたるなる時鳥み山をいつるけさの古こゑ
題不知　大〔中イ〕納言公敎
待ほともぬる夜もなきをほとゝきす鳴音は夢の心地社すれ
承曆二年內裏歌合　藤原伊家
ほとゝきす曉かけて鳴こゑをまたぬねさめの人やきくらむ
六條左〔右イ〕大臣家歌合　藤原國房
人つてにきかぬはかりそ時鳥名殘戀しき夜半の一こゑ
通家朝臣家歌合によめる　眞暹法師
さつきやみ花橘にふく風はたかさとまてかにほひ行らん
百首の歌の中によめる　前齋宮〔院イ〕河内
なつかしき花橘のにほひ〔ふイ〕哉思ひよそふる袖はなけれと
題しらす　待賢門院堀川
こやの池に生ろあやめの長きねはひくしら糸の心ち社すれ
百首の歌たてまつりける中に
五月雨の日をふる里の庭のおもは水草もとらぬ池かとそみる
郁芳門院菖蒲根合によめる　中納言通俊
もしほやくあまの浦人うちたえていとひやすらん五月雨の空
五月雨をよめる　源 仲延〔正イ〕
五月雨はしつのをころも朽ぬへし我身の爲にさゝめかるまに
寬和二年內裏歌合〔に〕　大貳高遠
鳴聲もきこえぬものゝ悲しきは忍ひにもゆる螢なりけり
百首歌中にともしをよめる　修理大夫顯季
さつきやみさ山かみねにともす火は雲の絶間の星かとそ見る
閏六月七日に　太皇太后宮大貳
つれよりも歎きやすらむ七夕はあはまし暮をよそになかめて
太政大臣家歌合夏風をよめる　內大臣（實能）
夕されはしのゝをさゝをふく風のまたきに秋の氣色成かな
題しらす　曾禰好忠
そま川の筏のとこのうき枕なつはすゝしきふしと成けり
新院にて人々歌つかうまつりけるに泉邊避暑〔泉の邊にす、むこイ〕といふこ
とをよめる　〔藤原公保朝臣〕
むすふ手もすゝしかりけりみな月の岩間の水に秋やかよへる
題不知　相 模
下紅葉ひとはつゝちる木のもとに秋とおほゆるせみの聲かな
よみ人しらす
いさきよく池の心やすみぬらんにこりにしまぬ花さきに見

はちすの露をみて
うらやましはちすはにゐるしら露をうき世に宿る我身とも哉
長保元年入道前太政大臣家歌合〔に〕 源道濟
待ほとに夏のよいたく更ぬれはおしみもあへす山のはの月
家歌合〔に〕瞿麥をよめる 修理大夫顯季
種まきしわかなてしこの花さかりいく朝露におきてみつらん〔るイ〕
百首歌の中によめる
水無月の河そひ柳うちなひきなこしのはらへせぬ人そなき

後葉和歌集巻第四 秋上

秋たつ日 讀人しらす
秋きぬと聞つるからに風の音のけさうちつけに涼しかるらん
題しらす 太皇太后宮攝津〔丹後イ〕
荻のはにそよともすれは待人におとろかれぬる秋のはつ風
七月七日式部大輔資業か家にてよめる 橘元任
おきのはにすかく糸をもさゝかには織女にとやけさは引らん
承暦二年内裏歌合に 藤原顯綱朝臣
織女に心をかすと思はれとくれ行そらは嬉しかりけり
題しらす 加賀左衞門
いかなれはとたえそめけむ天川あふせにわたす鵲のはし〔たまはしイ〕
修理大夫顯季
天川たなはたいそきわたさなん淺瀬たとれは夜のふけ行に
寛和二年内裏歌合 大中臣能宣朝臣
おほつかなかはりやしにし天河年にひとたひわたるせなれは
堀川右大臣
七夕はいかにさためて契りけんあふこと難きこゝろなかさを
〔百首歌たてまつりける中に〕 待賢門院堀川
織女のあふせたえせぬ天河いかなる秋かわたりそめけん
かされてもあかぬ思ひやまさる覽けさ立かへるあまのは衣
題しらす 源道濟
獨ゐてなかむる宿のおきのはに風こそわたれ秋の夕くれ
和泉式部
秋ふくはいか成色のかせなれは身にしむはかりあはれ成らむ
霧をよみ侍りける 源兼昌
夕霧に木末も見えすはつせ山入會のかねのをとはかりして
兼房朝臣家歌合〔に〕 法祐法師
あさきりにみきはまとひぬ龍田河いつれの程かわたり成覽
題しらす 三條院御製
あしひきの山のあなたにすむ人はまたてや秋の月をみるらむ
月待心をよめる 大江嘉言
秋のよの月まちかねて思ひやる心幾たひ山をこゆらむ
京極前太政大臣家歌合〔に〕 源賴綱朝臣〔藤原イ〕
秋のよは月に心のひまそなき出るをまつと入をなけくと〔をしむイ〕
寛和二年内裏歌合〔に〕 花山院御製
秋のよの月に心のあくかれて雲ゐに物をおもふころ哉
題しらす 中院右大臣
いかなれはおなし空なる月影の秋しもことに照まさるらむ
關白前太政大臣家歌合〔に〕 藤原重基
秋のよの月の光のもる山は木の下陰もさやけかりけり

月浮水といふ事を〔月のまへの山水イ〕
秋山の清水はくましにこりなはやとれる月のくもりもそする　藤原忠宣〔兼イ〕
左京大夫顯輔家歌合〔に〕　藤原道經
秋のよもあまの河瀬やこほるらん月の光のさえわたる哉
中納言家成家歌合〔に〕　藤原範兼
天川雲の波なき秋のよはなかるゝ月のかけそのとけき
題しらす　坂上明兼
とりとむる物にしあらは山のはにいれてそみまし秋のよの月
ひえの山念佛にのほりて月をみてよめる　良暹法師
天津風雲ふきはらふたかねにて入までみつる秋のよの月
堀川院御時百首歌たてまつりけるに　源俊頼朝臣
木からしの雲吹はらふ高根よりさえても月のすみのほる哉
爲忠朝臣家にて人々百首の歌よみける中に　藤原親隆朝臣
秋風におはな波よる野へにきてほのめく月の影を社みれ
月を御覽して　三條院御製
秋に又あはんあはしもしらぬ身は今夜はかりの月をたに見む
題不知　天台座主明快
ありしにもあらすなり行世中にかはらぬものは秋のよの月
和泉式部
鳴虫のひとつこゑにもきこえぬはこゝろ〱に物やかなしき
八月廿日頃に虫のこゑを聞て　赤染衛門
續古秋在明の月は袂になかれつゝ〔涙イ〕かなしきころのむしの聲かな
題しらす　永源法師
やへ葎しけれる宿は夜もすから虫のねきくそとりところなる
曾禰好忠
秋のよの草むらことにをく露はよる鳴虫のなみた成へし〔けりイ〕
天祿四年女四宮歌合〔に〕　橘匡〔正〕通
秋風に露を泪と鳴虫の思ふこゝろをたれにとはまし
三條太政大臣(頼忠)家にて叢中虫と云心をよめる
あき深く成行よはの虫のねは〔のイ〕きく人さへそ露けかりける
神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍りけるにくれの虫のこゝろをよめる〔待賢門院兵衛〕
まくすはらなひく夕の秋風にうらみかほなるまつむしの聲
百首歌中にかりを讀る　藤原顯仲朝臣
春秋と行てはかへるかり金はいつこ〔くイ〕かつゐの栖なるらむ
待賢門院堀川
水の面にかきなかしたる玉札はとわたる鴈のかけにそ有ける
承暦二年内裏歌合に秋〔鹿イ〕をよめる　藤原正家朝臣
夕暮は小野のはき原吹風にさびしくもあるか鹿のなくなる
春宮大夫公實
續拾秋霧ふかき山のおのへにたつ鹿は聲はかりにや友をしるらむ
野亭鳴鹿といふ事を　源俊頼朝臣
さを鹿の鳴ねはのへに聞ゆれとなみたは床のものにそ有ける
永承五年宮歌合　出羽弁
聞人のなとやすからぬ鹿のねそ我つまを社戀てなくらめ
中納言家成家歌合　藤原道經
夜や寒きつまやまとへる秋山の霧のあなたに男鹿鳴なり
題しらす　藤原基俊
宮城野のはきやをしかのつまならん花さきしより聲い色なる
關白前太政大臣九條の家に皇嘉門院御幸ありて歌よま

せさせ給ひけるに　皇嘉門院治部卿
さよ更てをしか鳴也みやき野の萩の下葉の露や寒けき
題しらす　藤原伊家
秋はきをくさのまくらに結ふよはちかくも鹿の聲をきくかな
百首の秋の歌中に　藤原清輔
我宿のもとあらの萩の花さかりたゝ一むらの錦とそ見る
秋の野を過侍けるに　よみ人しらす
ぬれ衣はあやなわれきつ女郎花わくる袂に露こほれつゝ
をみなへしの歌とてよめる　藤原兼綱
心からあたなる風にうちなひき今朝は露けきをみなへし哉
石山より出侍けるに音羽山の麓にてよめる
よみ人しらす
をみなへし色めきたてる秋のゝにまたほに出ぬ花薄かな
蘭をよめる　隆源法師
ぬしや誰きる人なしにふちはかまみれは野毎にほころひに鳧
白河院鳥羽にて前栽合せさせ給ひけるに　敦輔王
萩のはにことゝふ人もなき物を來る秋ことにそよとこたふる
加茂のいつきと聞えける頃本院のすいかきに朝かほの
さきかゝりたるをみて　禖子内親王
神かきにかゝるとならは蕣のゆふかくるまてにほはさらめや
ほうりんへまうてけるにさかのゝ花のおもしろく咲て
侍りけれは　赤染衛門
秋のゝの花みる程の心をはゆくとやいはんとまるとやいはむ
百首の歌の中に　大納言師頼
秋のゝを心のまゝに分行はをのかいろ〳〵さけるはなかな

後葉和歌集巻第五　秋下

題不知　藤原顯綱
萩の葉に露吹むすふ木からしの音そ夜寒になりまさるなる
讀人しらす
夕露もさむけく成ぬ神なひの森の木のはやうつるひぬらん
百首歌めしけるに　待賢門院堀川
龍田姫もろこしまてもかよへはや秋の木末のからにしきなる
〔題不知　堀川右大臣
ひれもすに山のもみちを見る程に身にもそはぬか秋の心は〕
寛治元年太皇太后宮歌合　大藏卿匡房
夕されは何かいそかむ紅葉はの下てる山はよるもこえなむ
修理大夫顯季家歌合　讀人不知
色深き神なひ山のもみちはをいくしほまてか時雨そめけん
爲忠朝臣常磐の家に住侍けるころ九月九日或人のもと
よりをくり侍ける
花さかぬ常磐の里にいかにして今日こゝぬかの菊をつむらむ
かへし　藤原爲忠朝臣
年ふれとにほひかはらぬ花なれは菊もときはの物としらなん
九月十三日夜月の常よりもあかく侍けれは爲忠朝臣の
もとにいひをくり侍ける　大納言道成〔成通イ〕
昔よりいひをくことをあたならすこよひの月におもひぬる哉
堀川院御時百首歌たてまつりける　藤原仲實朝臣
長月の在明の月のほの〴〵にはれかく鳴のこゑきこゆなり

菊花薫袖といふことを　　堀川右大臣
きくの花おるうつりかにこよひしも袖に心を人やをくらむ

關白前のおほいまうちきみの家に歌合しけるに殘のきくをよめる
霜かゝるはしめとみすは白菊のうつろふ色をなけかさらまし

雲居寺膽西上人歌合し侍ける　　源顯國朝臣
しら菊もやへにほひけり此里にうつろひぬへき心地こそすれ

題しらす　　道命法師
ことし又さくへき花のあらはこそ移ふきくにめかれをもせめ

曾禰好忠
草かれのう〔冬イ〕へまてみよとはつ〔つゆイ〕霜のをきてのこせる白きくの花

關白前太政大臣家にて殘菊をよめる　　前中納言師俊〔頼イ〕
露むすふ霜夜のかすの重なれはたえてや菊のうつろひぬらん
〔藤原爲實〕
をく霜のなからましかは菊の花うつろふ色をけさは見ましや

中納言家成家の歌合〔に〕　　大納言伊通
をく霜にあらそひかれて神なひの三室の山はもみちしにけり〔このはちるらしイ〕

落葉をよめる　　讀人しらす
さほ山のはゝその紅葉ちるまゝに聲よはりゆく木からしの風

雨後の落葉といふことを　　源俊頼朝臣
なこりなく時雨の空は晴ぬれとまたふる物は木葉なりけり

落葉隨風といふことを　　贈左大臣母
色ふかき深山かくれの紅葉々をあらしの風のたよりにそみる

橘資成法師になりて普門寺に籠りぬと聞てまかりたりけるに木葉のおつるをみて　　藤原盛房
見るまゝにあはれさまさるすみか哉世を秋風にこのは散つゝ

題しらす　　曾禰好忠
山里はゆきゝのみちもみえぬまて秋のこのはに埋もれにけり

月のあかき夜もみちの散をみて　　平兼盛
あれはてゝ月もとまらぬわか宿に秋のこのはを風そふきける

百首歌たてまつりける中に秋の歌とて〔よめる〕　　藤原季通朝臣
いつこにも秋はかはらぬ物なれとなを山里はかなしかりけり

山〔里イ〕家にて歌合し侍けるに松風をよめる　　藤原爲業
夕されは松風さひし山里の秋のあはれをとふ人もかな

承暦二年歌合にもみちをよめる　　大藏卿匡房
たつた山散紅葉はをきてみれは秋はふもとにかへるなりけり

家歌合落葉をよめる　　中納言家成
いとゝしく秋くれぬとや色々の木のはもゝとにかへる成らむ

百首歌中に　　右衛門督公祐〔能イ〕
夜をかされ聲よはり行虫の音に秋のくれぬる程をしる哉

九月に閏月侍けるつこもりに　　藤原爲忠朝臣
長月の日數をそふることしさへあかても秋のおしまるゝ哉

後葉和歌集巻第六　冬

はしめの冬の心をよめる　　春宮大夫公實
きのふ社あきはくれしかいつのまに岩間の水のうす氷るらむ

藤原顯仲朝臣
大あらきの杜のもみちは散はてゝ下草かるゝ冬は來に覓

源重之

寒からはよるはきてねよみやまとり今はこのはにあらし吹也

關白前太政大臣家歌合に時雨をよめる　源兼昌

夕つく日入さの山のたかねよりはるかにめくるはつしくれ哉

治部卿雅兼

ゆふされは散しく庭のならの葉に時雨をとなふ太山へのさと

源定信

音にさへ袂をぬらす時雨哉眞木の板屋のよはのねさめに

一條院御時皇后宮十月はかりよふかにてしくれしける
に歌よめと仰られけれはよみて奉りける歌　馬内侍

ねさめしてたれか聞らん此頃の木のはにかゝるよはの時雨を

おもふこと侍りける頃夜もすからなかめあかして　赤染衛門

神無月あり明の月のしくるゝを又われならぬ人やみるらむ

旅宿のしくれを　瞻西上人

いほりさすならの木陰にもる月のくもるとみれは〔すイ〕時雨ふる也

家の歌合に落葉をよめる　前太宰大貳資通

木末にてあかさりしかは紅葉はの散しく庭をはらはてそみる

中納言家成家歌合に　僧都覺雅

紅葉はのちりしく色はかはられとこ末の秋はなをそ戀しき

十月九日冷泉院の釣殿にて神無月といふことをかみに
おきて歌よませ給ひけるに　少將藤原高光

神無月風に紅葉のちるときはそこはかとなく物そかなしき

落葉埋水といふことを　惟宗隆賴朝臣

今更になのかすみかなたゝしとて木のはの下になしそ鳴なる

題しらす　よみ人しらす

秋は猶木の下陰もくらかりき月はふゆ社みるへかりけれ

左京大夫顯輔家歌合〔に〕　〔[illegible]イ〕小少將

冬のよの空さえわたる月かけや天川瀬のこほりなるらん

關白前太政大臣家歌合〔に〕　源定信

霜かれの菊なかりせはいとゝしく冬のまかきは淋しからまし

天暦御時御屏風に網代にもみちおほくよれるところを　平兼盛

み山には嵐やいたくふきつらむあしろもたはに紅葉つもれる

百首歌中にあしろをよめる　藤原仲實朝臣

風吹は田上川のあしろ木に峯のもみちもひをへてそよる

〔題不知　近衞院御製

このねぬる夜のまの風や冴つらむ筧の水の今朝はこほれる〕

堀川院御時百首の歌たてまつりける中に　大藏卿匡房

山ふかみやく炭かまの煙こそやかて雪けのくもと成けれ

前大貳資通家歌合〔に〕　〔雅イ〕中原賓定

初雪のふれるあしたの家居こそうとき人にはみせまほしけれ

題しらす　大藏卿匡房

おく山の岩かけもみちちりはてゝ朽葉かうへに雪そつもれる

京極前太政大臣家歌合〔に〕　中納言通俊

なしなへて山のしら雪つもれ共しるきはこし〔ふイ〕の高ね也けり

源俊賴朝臣

ふる雪に谷のかけはしうつもれて木末そ冬の山ち也ける

新院位におはしましける時雪中眺望と云事をよませ給

ひけるに　關白前太政大臣

紅にみえし梢も雪ふれはしらゆふかくる神なひのもり

百首の歌たてまつりけるに冬の歌とてよめる　藤原清輔

きゆるをは宮古の人はおしむらむけさ山里にはらふしら雪

題しらす　關白前太政大臣

をちこちのたつきもしらぬ明くれにいかて千鳥の浦つたふ覽

新院位におはしましける時藏人にて侍けるに歌たてまつりける　平時信

水鳥のうきねのとこにつらゝゐて心の外に夜かれしにけり

題しらす　讀人しらす

きくをこそ花のかきりと思ひしかかきねの梅は冬そ咲ける

入道前太政大臣(道長)大饗し侍ける屏風に佛名かきたるところを　藤原輔尹朝臣

人しれすつくれるつみを暮て行年とゝもにもつくしてし哉

歳暮をよめる　曾禰好忠

たまゝつる年のをはりに成にけり今日にや又も逢んとすらむ

關白前太政大臣家歌合[に]　源仲房

年暮ぬ明日は雪けの空はれていつしか霞たゝんとすらん

後葉和歌集巻第七　賀

新院位におはしましける時上達部うへのをのこ共をめしておほんみあそひなとありて松契遐齢云事をよませ給ひけるに[はイ]　關白前太政大臣

千とせまてかきらぬ松[のイ]とみとり哉こや君か代のためし成らん

一條左大臣(雅信)家の障子に住吉をかきたるところをよめる　大中臣能宣朝臣

過きにし程をはすてつ今年より千世はかそへん住吉の松

入道攝政家屏風に　平兼盛

めもはるに難波の浦にしける蘆の多くのよをは君そ[にこそ思ふイ]かそへん

[賀の]つえのふくろにあしてにてぬはれける歌

なよ竹のよなかき杖をつきて社やを萬代の數はかそへめ

正月一日子うみたる人にむつきつかはすとて　伊勢大輔

めつらしくけふたち初る鶴の子は千世のむつきを重ぬへき哉

人の子三人かうふりせさせける又の日いひつかはしける　清原元輔

松嶋の磯にむれゐる蘆たつのをのかさま〲見えし千世かな

關白前太政大臣の九條の家にて皇嘉門院いはひの歌よませさせたまひけるに　藤原季經

君か代をいくよろつ世か三[さイ]笠山神こそさしてそらにしるらめ

鳥羽にて新院竹はるかなるとしの友といふ事をよませ給ひけるに今上またみこにおはしけるときよませたまひける　御製

幾年とかきらさりける呉竹や君かよはひのためし成らん

おなし心をつかふまつりける　藤原重家朝臣

千年まて君みるへしとしり顔に竹もよなかくおひにけるかな

美福門院帥

色かへぬ竹のみとりや君か代におなしときはのためし成らん

入道前太政大臣家歌合[に水邊松をよめる]　大江嘉言

君か代のためしにたてる松かけに幾たひ水のすまんとすらん

河原院歌合〔に〕松臨池といふことを　惠慶法師

たれにかと池の心も思ふらむそこにうつれる松のちとせを

承暦二年内裏歌合〔に〕　大藏卿匡房

八百萬こゝらの神のとしなみによろひろまもる君か御代かな

長元八年宇治前太政大臣家歌合〔に〕　能因法師

きみか代は白雲かゝるつくはれの峯のつゝきの海となるまて

京極前太政大臣家歌合〔に〕　一宮紀伊

萬代をまつのおやまのかけしけみ君をそ祈るときはかきはに

中納言家成朝臣家歌合〔に〕　少輔内侍

高砂の尾上の松にふく風は萬代とこそかれてきこゆれ

僧都覺雅

君か代はちよもすきなん稲荷山祈るしるしのあらむかきりは

神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍けるに寄菊祝のこゝろを

よめる　顯仲卿女〔妻イ〕

きみか代を長月にしも咲そめて久しく匂ふしらきくの花

上東門院御屏風に十二月のつこもりかける處を

前大納言公任

ひとゝせを暮ぬと何か思ふへきつきせぬ春の千世をまつには

後葉和歌集卷第八　別

實方朝臣みちのくにくたり侍けるにしたくらつかはす

とて　前大納言公任

東路のこのしたくらくなりゆかはみやこの月を戀さらめやは

大納言經信大宰帥にて下り侍けるに川尻にまかり逢て

よめる　津守國基

六とせにそ君はきまさむ住吉のまつへき身こそいたく老ぬれ

修理大夫顯季大宰大貳にて下らんとし侍りけるに

權僧正永縁

立わかれはるかにいきの松なれは戀しかるへき千世のかけ哉

經信卿に具して俊頼朝臣筑紫へまかりけるに

皇太后宮甲斐

くれはまつそなたをのみそ眺むへきいてん日毎に思をこせよ

道濟筑前守にてくたり侍けるに　能因法師

ならはれはかりの別も侘しきにうとくそすこし成へかりける

さたのふの〔みのゝくに〕〔へ〕くたる事侍りけるにあふき

をつかはすとて　三親王

東路のみのゝを山のあらしにもあふきの風を思ひわするな

齋宮のくたり侍ける供にまかりける女にいひつかはし

ける　藤原道信〔經イ〕

かへりこん程をもしらすかなしきはよを長月のわかれ也けり

ひこのめのとくたるにせし〔餞イ〕給ふ〔とて〕人々歌よみ侍け

るに　少將藤原高光

たひを行くさの枕の露けくはをくるゝ人のなみたとをしれ

弟子に侍けるわらはの親に具して人の國にまかりける

にかりさうそくつかはすとて　法橋有禪

わかれちの草葉をわけむ旅衣立よりかれてぬるゝそてかな

僧正源泉比叡の山にのほりて古ことゝも〔申イ〕かたらひて我

も人もかくやんことなくなりたることなとましてかへ

りくたりけるに　天台座主源心

いつか又あふさか山と思ふにもせきもあへぬはなみた成けり

人のもとのすみかをあくかるゝ事有てはりまなるとこ
ろにあらむとてまかるよしまし〔中イ〕けれは
待賢門院長門
はりまちや須磨の關守身なりせはあかぬ別はゆるさゝらまし
人のもとに日來侍りてかへりける夜あるしによみてた
まひける
僧都清〔濟イ〕胤
二つなき心を君にとゝめをきて我さへわれにわかれぬる哉
題不知
源師資〔賢イ〕朝臣
わかれ行そら社なけれすか原や伏見のさとの春の明ほの
百首の歌たてまつりけるにわかれの心を
待賢門院堀川
行人もおしむなみたもとゝめかれ忘るなとたにえ社いはれね
藤原顯廣朝臣
暁と聞て出つる別ちをやかてくらすはなみたなりけり

後葉和歌集巻第九　旅

陸奥守に侍ける時中納言資仲大宰大貳に成にけりとき
きてよみて都にをくり侍ける
橘爲仲朝臣
きなれたる我たにしほる旅ころもとをくて君か思ひたつらん
任はてゝのほり侍けるにたけくまの松のもとにて
ふる郷へ我は歸りぬたけくまのまつとは誰につけよとか思ふ
播磨守に侍ける時三月はかりに船〔通イ〕よりのほりけるにや
まち〔といふところ〕に參議爲盛の朝臣しほゆあみて侍
と聞てつかはしける
平忠盛朝臣
なかゐすなみやこの花も咲ぬ覽われは〔もイ〕何ゆへいそくつなて〔ふイ〕そ
なかされて侍ける時はりまにて月を見侍りて
帥前内大臣
みやこにてなかめし月を見る時は旅の空ともおほえさりけり
修行してみちのくにゝまかりけるに白河關にて月のあ
かく侍けれはせき屋のはしらに書付侍りける
西行法師
しら河の關やを月のもる〔けはイ〕からに人のこゝろはとまる〔むイ〕也けり
藤原頼任朝臣美濃守〔彼イ〕にてくたり侍けるともにまかりて
其後年月〔を〕へて後國のかみになりて垂井と云〔處に〕
水を見てよめる
藤原隆經朝臣
昔見したるひの水はかはられとうつれる影そ年をへにける
武藏國にまかりけるに二むらの山にて紅葉を見侍て
橘能元
いくらともみえぬ紅葉のにしき哉なと二むらの山といふ〔ひけイ〕らん
修行し侍ける時大峯に日ころに成てよめる
大僧正行尊
山路にて我をのゝえはくたしてんうき世中にこりはてぬれは
海路のこゝろをよめる
藤原顯廣朝臣
秋つしまこきはなれ行浦ふれはいくへか春の霞へたつる
新院位におはしましける時海上遠望といふ事をよませ
給ひけるに
關白前太政大臣
和田の原こきいてゝみれは久かたの雲ゐにまかふおきつ白浪
百首の御歌中に
新院御製
海士のすむ濵のもくつをとりしきて心とまると妹しるらめや
同歌たてまつりけるに
待賢門院堀川
道すから心も空に詠やる宮古のやまの〔くイ〕おもかくれする

後葉和歌集巻第十　物名

うくひす　　讀人不知
さかつきにうくひすきぬる桃のはな散ても水になかれ社すれ

くゐな　　待賢門院堀川
見渡せは川瀬の井くゐなみたちてしからみかくる程そ遙けき

きり〳〵す
秋はきり〳〵すきぬれは雪ふりてはるゝまもなき太山への里

たるなむし　　兵　衛
君かためむれてきたるなむしろ田の鶴の毛衣ちよをかされて

にはさくら
山邊にはさくらんものをふる郷の花まつ程はゆきてたつねむ

もちつゝしのはな　　左近衛中将敎長
人ことに弓はもちつゝしのはなし何をかりこのやにはかまし

したに　　近衛院御製
露けきは秋のくさはと思ひしをにたることなきそての上哉

からはき
つらからはきしへの松の涙をいたみれに顯れて泣むとそ思ふ

をみなへし　　俊頼朝臣
ちる花をみなへしもちてゆく秋の戀しき時のかたみとやせむ

つき　すゝむし　もみち　　顯廣朝臣
峯つゝきやまへはなれすすむしかもみちたとる也秋の夕暮

十五夜月　　左近衛中将敎長
五月雨をくるしうこやのつきはしもうきぬ〔巾イ〕難波のえ社通はれ

くらけを海の月といふよし人のましけるを聞て　　祭主親定母〔女イ〕
深くすむちいろの底もみるへきにくらけにみゆるうみの月哉

しかやはた
あさましくうちとけかたき心哉しかやはたのむ人はあるへき

おものたな　　左京大夫顯輔
池のおものたなひきわたる浮草ははらはぬ庭と見えもする哉

かゝけのはこ　　小大進
霜ふれはな〔枯ぬるイ〕へて殘らぬ冬草もいはほかかけのはこそしほれね

からにしき　　清　輔
むつ言もつきて明ぬと聞からにしきのはねかきうらめしき哉

とくさ　むくのは　　俊　頼
程もなくとくさむくのはなりにけり虫の聲々よはり行まて

くるみのから
老のくるみのから〔くイ〕ふのみ覺ゆるはおもてに波のたゝむなり皃

後葉和歌集巻第十一・戀一

題不知　　讀人不知
たしか鳴秋のゝはらのしの薄忍ひもあへぬこひもするかな

大中臣能宣朝臣
御垣もる衛士のたく火のよるはもえひるは消つゝ物を社思へ

平　兼盛
谷川のいはまをわけてゆく水の音にのみやはきゝわたるへき

讀人しらす
大井かはくたすいかたのみなれさほ見馴ぬ人も戀しかりけり

關白前太政大臣〔忠通〕

あやしくも我みやま木のもゆる哉思ひは人につけてし物を

中納言家成家歌合に　藤原基俊

夜もすから戀のけふりにむせひつゝふしのね高くもゆる頃哉

百首歌中に　曾禰好忠

かた岡の雪まにねさす若草のはつかに見えし人そ戀しき

左近衛中將敎長

河のせにおふる玉ものうちなひき君にこゝろはよりにし物を

新院にておもへともいはぬ戀といふ心をよめる

戀すとはなみたの色に見えぬらむ君故かくといはぬはかりを

百首御歌　新院(崇德)御製

愚にそことのはならはなりぬへきいはてや君に袖をみせまし

中院右大臣(雅定)

つゝめともなみたに袖のあらはれて戀すと人にしられぬる哉

中院の右のおほひまうちきみの家の歌合に　太政大臣

色なきはぬれきぬそともいひなしきけふや涙と人にしられむ

贈左大臣(長實)家歌合に　藤原爲忠朝臣

つゝめともふかく思ひしそめつれは涙そいろにまつは出ける

忍ふる戀のこゝろをよませたまひける　近衛院御製

戀しともいはゝ心のゆくへきにくるしや人めつゝむおもひは

關白前太政大臣家歌合に　藤原基俊

よそながらしらせてし哉みかりのゝましろの鷹のこゐの心を

源光雅

玉藻かるたなしまの浦のあまたにもいとかく袖はぬるゝ物かは

關白家信濃

夜とゝもに袖のみぬれて衣河戀こそわたれあふせなけれは

民部卿顯賴

逢事を身にかふはかり歎くともつれなき物は命なり鳧

左京大夫顯輔家歌合に

人しれす袖をそしほるかすならぬ身をしる雨の音はたてれと

關白家參河

人しれぬねをのみなけは衣河そてのしからみせかぬまそなき

よみ人しらす

題しらす　源賴政

思へともいはて忍ふのすり衣こゝろのうちにみたれぬるかな

堀河院百首歌中に　中納言國信

うちたえて詠たにせす戀すてふ氣色を人にみせしとそ思ふ

題しらす　隆惠法師

かくとたにいはてはかなく戀しなは聽てしられぬ身とや成南

題しらす　平兼盛

見ぬ人の戀しき事はをのつから我のみならす君もしるらん

百首歌中に　大藏卿匡房

思ひかねけふたて初るにしきゝのちつかもまたて逢よしも哉

はしめたる戀のこゝろを　源明賢朝臣

歎き餘りしらせ初つる言のはも思ふはかりはいはれさりけり

題しらす　近衛院御製

さゝれ石の巖とならむ程までも君をはこひむ逢すたにあらは

平兼盛

さゝれ石のうへもこもらす「ねイ」さゝ水の淺ましくのみ見ゆる君哉

關白前のおほいまうちきみの九條の家に皇嘉門院御幸
ありける時人々に歌よませたまひけるに

あふ事は人のためとも思はぬをあやなく身にもかへつへき哉

ますかゝみ見し面かけの身にそひて心は君にうつりぬるかな
賴仁法師
しのふれは苦しかりけり青つゝら戀する名をもたちぬへき哉
治部卿雅兼
寄雲戀
むれにみつ戀の煙や雲ならん心のそらのはるゝよもなき
三井寺を過けるにわらはのあそひありきけるとみてい
はせ侍りける　〔戒イ〕式命法師
あふさかのせきのこなたに春霞たちやすらふとしらせつる〔てレイ〕哉
みあれのころ女に　賀茂成助
ちはやふる神のおまへのもろは草又あふ名社しらまほしけれ
題しらす　讀人も
ことならはよひの螢となりにしかもゆる思ひをみえ渡るへく
國信卿家歌合〔に〕　基俊
〔しれぬイ〕人も又戀にはまけしと思へともうつせみのよそ悲しかりける
〔寄紅葉戀を〕　僧都覺雅
こかるれとしろ人もなきわか戀やみ山かくれの紅葉成らん
三のみこ
山風のさそふもみちのかすしらす亂れにけらし戀のこゝろは
題しらす　よみ人しらす
雪つもるみ山のつらゝ年をへてとけもやすると待かひそなき

後葉和歌集卷第十二　戀二

承曆二年内裏歌合〔に〕　藤原伊家
わか戀は夢ちにのみそなくさむるつれなき人も逢とみつれは

新院位におはしましけるときうへのおのこともに寐覺
戀といふことをよませさせ給ひける〔に〕
右衞門督公能
慰むるかたもなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせは
題しらす　よみ人しらす
年をへてもゆてふふしの山よりもあはぬ思ひは我そまされる
わひぬれはしゐて忘れんと思へとも心よはきはなみた成けり
思はしと思へはいとゝ戀しきはいつれかわれかこゝろ成らむ
顯輔卿家歌合〔に〕　大納言成通
よそなから哀といはんことよりも人傳ならていとへとそ思ふ
つれなきをんなに　〔成助〕賀茂のなりすけ
いかはかり人のつらさを恨みまし我身のとかと思ひなさすは
關白前太政大臣家歌合〔に〕　藤原親隆朝臣
かせ吹はもしほの煙かたよりになひくを人のこゝろともかな
百首御歌中に　新院御製
戀しなは鳥とも成て君か〔まイナシ〕すまむ宿の木末にねくらさためん
おなし歌たてまつりけるに　左京大夫顯輔
年ふとも猶いはしろのむすひ松とはぬものゆへ人もこそしれ
家成卿家歌合〔に〕　藤原雅親
たのめてあはぬ戀のこゝろを　藤原親隆朝臣
夜とゝもにむすほゝれたる我戀や野中にたてる岩代の松
こひしなて心つくしに今まてもたのむれはこそいきの松はら
百首歌中に　藤原季通朝臣
今はたゝをそふる袖もくちはてゝ心のまゝにおつるなみたか
藤原清輔
中々に思ひたえなむと思ふ社戀しきよりもくるしかりけれ

前齋院安藝

戀をのみすまの浦はにしほたれて燒ともそてをくたす比哉

歌合に　關白前太政大臣

あさりするよさのあま人こよひさへ逢事なみに袖ぬらせとや

百首歌中に　修理大夫顯季

わか戀はよしの丶山のおくなれや思ひいれともあふ人もなし

題しらす　よみ人しらす

我戀はふたみかはれる玉くしけいかにすれともあふ方もなし

隆縁法師

身の程を思ひしりぬることのみやつれなき人のなさけ成らん

家成卿家歌合〔に〕　高階通憲

君こふる泪はうみと成ぬれとみるめはかたきそてのうら哉

題しらす　源俊頼朝臣

あやしきも嬉かりけりおとしむる其言のはにか丶ると思へは

藤原憲縄〔かねつねイ〕

たのめつ丶こぬ物ゆへにまつしまや雄嶋のあまの袖ぬらす覽

源　頼政

人しれぬ涙のかはのはやきせはあふより外のしからみそなき

後忠卿家歌合〔に〕　藤原顯綱朝臣

紅のこそめの衣うへにきん戀のなみたのいろやか丶ると

修理大夫顯季家にて寄月戀と云事を讀けるに　藤原爲忠朝臣

よひのまにほのかに人を見る月のあかて入にし影そ戀しき

寄月戀のこ丶ろをよめる　藤原道經

秋のよの月の光そおほろなる戀のけふりや空にたつらん

百首歌中に　待賢門院兵衛

君にさはつらしと見えん人もかな戀はくるしき物としらせん

題しらす　和泉式部

〔タイ〕冬くれは物思ふことそまさりける我ならさらむ人にとは丶や

淨藏法師

わかためにつらき人をはをきなから何の罪なき世をや恨〔みむイ〕むる

曾禰好忠

はりまなるしかまにそむるあなかちに人を戀しと思ふ頃哉

藤原惟成

命あらはあふよもあらむ世中になとしぬはかり思ふ心そ

讀人しらす

戀しさのつらさにまさる物ならは今まてかくは歎かさらまし

後葉和歌集卷第十三　戀三

百首よませたまひける中に　新院御製

戀々てたのむるけふのくれはとりあやにくに待ほとそ久しき

題しらす　道命法師

程もなくくると思ひし冬の日の心もとなきおりも有鳧

大藏卿匡房

みちしはの露ふみ分てこし程にあふよの袖もぬれにける哉

藤原道經

我戀はあひそめてこそまさりけれしかまのかちの色ならね共

關白前太政大臣

あされかみわかつけと〔そむイ〕もる手枕のたはとな人に語りきかせそ

顯輔卿〔家〕歌合〔に〕　大藏卿行宗

しのひつまおき行けさの霜の上にあとふみつくな人も社しれ

女のもとより夜ふかくかへりてあしたにいひつかはしける　〔實方〕されかた朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあられともまたよをこめてをきにける哉

後朝のこゝろを　新院御製

しのゝめの明行空に歸るとておつるなみたや道しはのつゆ

藤原惟成

在明のそらかきくもりしくれつゝきつる衣のひるよしもかな

堀川院御時百首歌たてまつりける〔中〕に　藤原顯仲朝臣

かへりつるけさの袂は露といひてくれ待そてを何にかこたん

左京大夫顯輔朝臣家歌合〔に〕　藤原顯廣朝臣

心をはとゝめてこそは歸りつれあやしや何の暮を待らん

後朝につかはしける　堀川右大臣

ふゆの日をはるよりなかくなす物は戀つゝくらす心成鳬

題不知　藤原基俊

風にちる花たちはなに〔をこしイ〕袖そめて我思ふいもか手枕にせむ

〔好忠〕曾禰のよしたゝ

きたりともぬる間もあらし秋〔夏イ〕のよの在明の月もかたふきに鳬

〔逢契不來戀をイ〕誰契不來といふことを　關白前おほいまうち君〔はかたみイ〕

こぬ人をうらみもはてし契をきし其ことのはも情ならすや

〔なをイ〕題不知　藤原兼綱女

みても又あかぬ涙をそふれはいつをか袖のかはくまにせん

〔坂上イ〕藤原明兼

せきとむる岩まの水もをのつから下には通ふものとこそきけ

をんなをあひかたらひける〔ころ〕〔彼イ〕よしありて津の國になからといふ所にまかりて後女のもとへいひつかはしける　兼盛

忘るなとなからへゆけと身にそひて戀しき事はをくれさり鳬

弟子なりけるわらはのおやに具して人の國へあからさまにとてまかりけるか久しくみえ侍らさりけれはたよりにつけていひつかはしける　最嚴法師

み狩のゝ暫しのこゐはさも有はあれそりはてぬるかやかたをの鷹

題しらす　よみ人しらす

たのめすは夢にも人をみるへきに待にはい社ねられさりけれ

冬夜寄衣戀をよめる　僧都覺雅

から衣君はきまさぬ冬のよにかさぬる物はうらみ也けり

題しらす　藤原親隆朝臣

しほれつる袖はかりとそ思ひしに名をさへ戀にくたきつる哉

題しらす　よみ人しらす

我はかりこひんこと社かたからめなをさりにたに思ひ出すや

中納言家成攝津國の山庄にて旅宿戀といふことをよめる　隆縁法師

わひつゝもおなし都はなくさめき旅ねそ戀のかきり成ける

月のあかゝりける夜まちたりける〔まうてきたりけるおとこのイ〕よたちなからかへりにけれはあしたにいひつかはしける　和泉式部

なみたさへ出にしかたをなかめつゝ心にもあらぬ月をみる哉

三井寺に侍りけるわらはを京にいてはかならす告よとちきりたりけるに出たりとはきゝけれと音信さりけれは　僧都覺雅

影みえぬ君は雨夜の月なれや出ても人にしられさりけり
雪のあした人のま〔う〕てきてかくならひてこすはいかかおもふへきといひけれは　馬内侍
わすれなはこしちの雪の跡たえてきゆるためしに成ぬ計そ

後葉和歌集卷第十四　戀四

秋たちける日男のはしめて夜かれ侍りけれは　一宮紀伊
つれよりも露けかりけるこよひ哉是や秋たつはしめ成覽
おとこにわすられてなけきける比は月はかり前栽のつゆを夜もすからなかめてよめる　赤染衛門
もろ共におきゐる露のなかりせは誰とか秋のよをあかさまし
おとこのたえ〳〵に成ける比いかゝととひたる人の返事に　高階章行朝臣女
思ひやれかけひの水のたえ〳〵になり行程のこゝろほそさを
かよひける女の人に物いふときゝて　元輔
うきなからさすかに物の悲しきは今をかきりと思ふ也けり
程なくたえにけるおとこのもとへいひつかはしける　相摸
ありふるもくるしかりけりなかゝらぬ人の心を命ともかな
題しらす　讀人も
つらしとて我さへ人を忘れなはさりとてなかの絶やはつへき　源雅光〔のみかはイ〕
紅になみたの色は成にけりかはるは人のこゝろなりけり

たえたる男のもとへ五月五日に〔つかはしける〕　よみ人しらす
身のうきにあやめのおふる物ならはけふ計にも尋ねきなまし
百首歌中に　待賢門院堀川
うき人をしのふへしとは思ひきや我心さへなとかはるらん
中納言通俊たえ侍にけれはいひつかはしける　讀人しらす
さりとてはたれにかいはん今そ只〔はイ〕人を忘るゝことをゝしへよ
かへし　中納言通俊
またしらぬ事をはいかゝ敎ふへき人を忘るゝ身にしあられは
題しらす　讀人も
今よりはとへともいはし我はたゝ人を忘るゝことをしるへき　和泉式部
幾かへりつらしと人をみくまのゝ恨めしなから戀わたるらん
題不知　よみ人しらす
わすらるゝ人めはかりを歎きにて戀しき事のなからましかは
人しれす戀に我身はしつめともみるめにうくはなみた成覽
弟子なりけるわらはの大僧正行尊かもとへまかりにけれはいひつかはしける　律師仁祐
鶯は木つたふ花の枝にても〔にかはりてイ〕谷のふるすをおもひわするな
かへしわらはまかりて　大僧正行尊
うくひすは花のみやこも旅なれは谷のふるすを忘れやはする
雨中戀のこゝろを　よみ人しらす
雨ふれは庭にたまゐるうたかたの〔たくひや人のかけたにもせすイ〕うき影たにもみえす成ぬる
ほり河の院御時藏人にて侍けるに贈皇后宮の御方に侍ける女を忍ひてかたらひけるをこと人に物いふときゝ

てしらきくの花にさしてつかはしける

源家時

霜をかぬ人の心はうつろひておもかはりせぬしらきくの花

かへし女にかはりて

春宮大夫公實

白菊のかはらぬ色もたのまれすうつろはてやむ秋しなけれは

關白前太政大臣家歌合[一]

藤原基俊

あさちふにけさをく霜の寒けきにかれにし人のなそや戀しき

中納言家成絶てをとせさりけるかきくことのあれはえ
なんいはぬといはせたりけるかへりことに

皇嘉門院出雲

夜をかされ霜と〻もにしおきゐれはありし計の夢たにもみす

夢にをとする[よするイ]戀といふことを

僧都覺雅

ゆめに社あはてもあらめ唐衣きなれしうら[そてイ]はいか〻かへさん

中納言惟仲ひさしくありてをとつれて侍りけるに

成忠卿母

夢とのみ思ひ成にし世中を何今さらにおとろかすらむ

後葉和歌集巻第十五 哀傷

むすめの思ひに侍ける人に月のあか〻りける夜いひつ
かはしける

堀川右大臣(賴宗)

其こと〻思はぬたにもある物を何こ〻ちして月をみるらむ

一條攝政身まかりにける頃よめる

少將藤原義孝

ゆふまくれ木しけき庭を眺めつ〻木のはと〻もにおつる涙か

天暦帝かくれさせたまひて七月七日御いみはて〻後ち
りちりにまかり出けるに女房のなかによし[申イ]をくりける

清原元輔

けふよりは天川霧たちわかれいかなる袖[そらイ]にあはんとすらん

かへし

讀人しらす

たなはたは後の秋をもたのむらん心ほそきはわか身成けり

七月七日に白河院かくれさせたまひけるによめる

平忠盛

又もこん秋をまつへきたなはたの別る〻たにもいか〻悲しき

郁芳門院かくれさせたまひて又のとし藤原としのふか
もとよりうかりしに秋はつきぬと思ひしをことしも虫
の音こそなかるれと申てをくりける返事に

康資王母

虫のねは此秋しもそ鳴まさるわかれのとをくなる心ちして

この歌の本歌金葉集康資王母といへるいかなるにか

近衛院かくれ[させ]たまひにける頃藏人に侍ける時な
れつかうまつりけることを思ひ出て彼院にはへりける
土佐内侍かもとに申いれける

寂然法師

いかはかり心のやみにまよふらむ月かくれにし雲の上人

いつれの御時にかみかとかくれさせたまひけるにおほ
んみわさの夜雨のをやまさりけれは誰ともなくて人々
の中にさしをかせたりける歌

よみ人しらす

世中のうきなけきには大空の雲もなみたをおしまさりけり

待賢門院かくれさせたまひて又のとし朝覲の行幸あり
ける日後院のたいはん所より行幸に參りける人に申つ
かはしける

たれもみなけふのみゆきと急きつ〻消にし道はとふ人もなし

堀川院御時つかうまつりけるにりやうあんになりにけれはこもりゐて歎き侍りけるに人々御ふくぬくよしききてよみ侍りける　神祇伯顯仲

紅のなみたはかゝる袖なれとまた墨染の色はかはらす

むすめにをくれて服きるとて　民部卿顯頼

あさましや君にきすへきすみ染の衣のそてをわかしほるかな

おもひに侍ける五月はかりに

さみたれの空も雲まはある物を心のやみにはるゝまもなき

後冷泉院御時藏人にて侍りけるに帝かくれさせたまひにけれはよめる　藤原有信朝臣

なみたのみたもとにかゝる世中に身さへくちぬる心ち社すれ

おとこにをくれ侍りてよめる　讀人しらす

おりおりのつらさをなにし〔にイ〕歎きけむ有てなき〔やかてイ〕世も有ける物を

めなくなり侍りて山寺にこもりける比かたゝかへに都に出てあかつきにかへるとて　左京大夫顯輔

いつのまに身を山かつになしはてゝ都を旅と思ふなるらん

法務寛信身まかりにける比弟子なる法師服きるとてよめる　讀人しらす

松のうへに思ひしか〔ものをイ〕ともふち衣我身にかゝる春もありけり

父の思ひにはへりける年五月五日人のもとにつかはしける

おもひやれけふはあやめのねをそへて泪のかゝるふちの袂を

したしき人の山さとに侍りけるか五月五日にはかにはかなく成けるときゝて　待賢門院長門

いかならむけふしもうきをあやめ草思ひやるたにね社茂けれ

子なくなりて後かの家にまかりてよめる　祝部成仲

思ひかれぬしなきやとをたつぬれは只あき風の音のみそする

律師暹豪身まかりて後横川の坊におはし〔くれイ〕とゝまりたりけるわらはのしを戀て雪のふりける日後〔彼イ〕墓にまかりてよめる

ふる雪に涙もいとゝくらしつゝそこはかとなくまよひぬる哉

子の思ひに侍りけるころ人のとひて侍けれは　前齋院安藝

人しれす物思ふこともありしかとこの事はかり悲しきはなし

これをきゝておなし思ひにつきせ〔えイ〕すおほしけれは　爲忠朝臣母

かなしさは我身ひとつと思ひしに又このうさもたくひ有鳬

人の四十九日の誦經文に書付ける　よみ人しらす

人をとふかれの聲こそ哀なれいつかわか身にならんとす覧

念增法師都にて身まかりにけるころ山の坊はなのさかりなるをみて　天台座主勝範

花よりもさきにちりける身をしらて待けん物を今やさくらと

やまひおもく成侍にけれは三井寺にまかりて京の坊にうへ置たる梅を花さきぬらむみはやと申けれはおりにつかはしてみせけれは　大僧正行尊

この世には又もみるまし梅の花ちりちりになることそ悲しき

やまひおもくなり侍る比雪のふるをみて　良暹法師

おほつかなまたみぬ道をしての山雪かき分て越んとすらん

後葉和歌集卷第十六　雜一

うちにまかりける道にたこの水ひきけるを見てかくなんと申ければ入道前太政大臣見にまかりたりけるに水も見えさりければいかにとたつね侍りけるをきゝて七月七日なりければよめる　菅原爲言

ひく水もけふたなはたにかしてける〔りイ〕天川原にふなゐするとて

左京大輔顯輔近江〔守〕にはへりける時讀てたまはせける　關白前太政大臣

思ひかれそなたの空をなかむれはたゝ山のはにかゝるしら雲

入道前太政大臣(道長)の家にして大饗し侍ける屏風に野の行幸かきたるところを　祭主輔親

御狩する野への冬草風になひきはるけくみゆるしめのうち哉　藤原輔尹朝臣

鳥やかへるましろの鷹をひきすへて君か御狩にあはせつる哉　〔兼盛〕かねもり

大饗屏風に

ひきつれて大みや人のきませれは春おもしろくおもほゆる哉　大藏卿匡房

百首歌の中に

むもれ木のしたはくつれといにしへの花の心は變らさりけり

新院位におはしましける時きさいの宮の御かたにて藤のはな年ひさしといふことをかんたちめうへのおのこともよませさせたまひけるに　大納言師頼

春日山きたのふち波さきしより榮ゆへしとはかれてしりにき

齋院〔の〕長官にて年比まかりわたりて少將に成てつかひし侍りけるとしよめる　大藏長房

年をへてかけしあふひはかはられとけふのあふひは珍しき哉

九條前齋院より祭の比あふひやあるとたつねられて侍りければつかはすとて　源　忠宗

しめゆひしそのかみならは葵草よそのかさしを尋ねさらまし

忍ひけるおとこのいかゝ思ひけん五月五日のあしたにあけてのちけふあらはしぬるなんうれしきといひたりけるかへりことに　和泉式部

あやめ草かりにもくらん物ゆへにねやの妻戸や人のみゆらん

院の位におはしましける時ある所のきくをめしてうへさせたまひけるに花の枝にむすひつけられたりける　よみ人しらす

こゝのへに移ろひぬとも菊の花もとのまかきを忘れさらなむ

五節たてまつりけるところにたき物かうはしくあはすとてたうのみれにこひにつかはしたりけれはたちはなの枝にみをとりすてゝいれてつかはすとて　如覺法師

すゑの代に成のみ行は橘のむかしの香には有へくもあらす

こゝろさしふかゝらぬおとこのはなあさきにかりきぬせさせけるつかはすとて　小大君

人こゝろうす花染のかりころもさてたにあらて色やかはらむ

しのひけるおとこのなりけるきぬをかしかましとてをしのけゝれは　いつみ式部

音せぬはくるしき物を身にちかくなるとていとふ人も有けり

中納言家成家歌合〔に〕　藤原基俊

山のはにますみのかゝみかけたりとみゆるは月の出る也兒

月のあかく侍りける夜人々まてきてあそひけるに月の

入て興つきにけれは歸なんとしけるによめる
大中臣よしのふ
月は入人は出なはとまりゐて獨やわれかそらをなかめん
一條院御時殿上人あまた月見ありきける〔を見て〕
讀人不知
うらやまし雲のうへ人打むれてをのか物とや月をみるらん
新院位におはしましける時月のあかく侍りける夜女房
につけてたてまつらせける　太政大臣
澄のほる月の光にさそはれて雲のうへまて行こゝろ哉
題しらす
との守のとものみやつこあけぬとて今宵の月に朝きよめすな
〔世をそむき給ひて六條院いけに月のうつりて侍りけ
るを　小一條院
池水にやとれる月はそれなから詠むる人のかけそかはれる〕
神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍りけるに寄月述懷のこゝ
ろを　左京大夫顯輔
難波江の蘆間にやとる月みれは我身ひとつもしつまさりけり
家の歌合〔に〕　藤原爲忠朝臣
夜もすからふしのたかねに雲きえて清見か關にすめる月かけ
京極前太政大臣家歌合〔に〕　大藏卿匡房
古の人あらませはとひてましこよひはかりの月はみきやと
題しらす　内大臣(實能)
あふ坂の關の杉むらしたはれて月のもるにそまかせたりける
父の信濃守にてくたりける共にまかりのほりたりける
くまもなく信太の森のしたはれてちゝ〔千枝のかすイ〕にかけさへみゆる月哉
比顯輔卿の家に歌合しけるによめる　藤原爲眞〔實イ〕
名に高きをはすて山はみしかとも今宵はかりの月はなかりき

月おもしろかりける夜新院御舟にたてまつりて月のま
へにこゝろさしをいふと云事を讀せたまひける
左近衞中將敎長
三日月の又在明になりぬるやうき世にめくるためし成覽
題不知　源頼光朝臣
いつるより入まて月を眺むるは物思ふとき〔をりイ〕のわさにそ有ける
はりま路や須磨の關やの板庇月もれとてやまはらなるらむ
〔中納言師頼
あれたる宿に月のもりて侍りけるをみて　覺暹法師
板間より月のもるをもみつる哉宿はあらしてむすへかりけり
河原院歌合〔に〕月影漏宿といふことを　よみ人しらす
雨ならぬ年のふるにもわか宿は月もるはかりあれにける哉
題不知　待賢門院堀川
あた人はしくるゝ夜半の月なれやすむとてえ社頼むましけれ
百首歌たてまつりける中に
すむかひもなき世中の思ひ出はうき雲かけぬ山のはの月
題しらす　藤原顯仲朝臣
思ひ出て袂そほちぬ時〔をりイ〕そなきむかしをしるはなみた也けり
小野宮の右大臣(實資)の家にまかりてむかし〔の〕ことな
と云てよめる　清原元輔
老て後わかれをしのふ涙こそこゝら人めをつゝまさりけれ
比叡の山に年の暮ぬることをよみける中に　成尋法師
かすならぬ身にさへ年のつもる哉老は人をもきらはさりけり
百首うたのなかに　左近衞中將敎長
立歸るとしの行衞をたつぬれは哀わか身につもるなりけり
題不知　相　撲

住吉の入江[ほそイ]にさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらしな
屏風に鶴のおほく飛たるかた侍りけるに　三御子
雲井よりむれてをりゐる蘆田鶴はいつれか浦のしるへ成らん
人のかもを籠にいれてかひけるかいとおしきをゆるさんと侍りけるをきゝ侍さりけれは夕くれに　源頼家朝臣
今宵猶入江の鴨ははなちてん[あしまのとこにつま]も社まて
みしま江の春のこゝろをよめる
春霞かすめるかたや津の國のほのみしま江のわたり成覧
堀川院の御時うへのおのことも御前にめして歌よませたまひけるに　源俊頼朝臣
須磨のうらにやくしほかまの煙こそ春よりさきの[にしられぬイ]霞成けれ
同御時百首歌奉ける中に
波たてる松のしつえをくもてにて霞わたれる天のはしたて
丹後守に侍りける時眺望の心をよめる　藤原爲忠朝臣
たとふへきかたこそなけれ松かえに雪ふりかゝる天のはし立
中納言家成布引の瀧にまかり[て]歌よみけるに　[藤原隆季朝臣]
雲ゐよりつらぬきかくる白玉をたれ布引のたきといひけん
ところ〳〵の名をよみ[侍]ける中に龍門をよめる　隆縁法師
けふ爰に我こさりせはたちぬはぬきぬきし人の跡をみましや
廣澤　藤原公重朝臣
ひろさはの池のかゝみにうつしもてくもらぬ月の影をみる哉[こそみれ]
室八嶋　藤原顯方
たえすたつむろのやしまの煙哉いかにつきせぬ思ひ成らん
宮城野　左近衛中將敎長
うれしくそたつね來にけるみやきのゝ萩の錦は今さかりなり
嵯峨なりける所にまかりてかの家[のイ]に障子に書つけゝる
をしか鳴この山さとのさかなれは悲しかりける秋のゆふくれ

後葉和歌集巻第十七　雜二

世中はかなき頃人[々イ]と歌よみけるに　小大君
あるはなくなきは數そふよの中に哀いつまてあらんとすらん
百首歌中に　權僧正永緣
なかきよの夢の中にてみる夢はいつれうつゝといかて定めむ
女とものさはにわかなつむをみてよめる　源俊頼朝臣
しつのめかゑくつむ澤の薄こほりいつまてふへき我身なる覧
花のちるを見侍りて　藤原實方
散花にまたもや逢んおほつかなその春まてとしらぬ身なれは
人のもとにまかりたりけるにさくらの花おもしろく咲て侍りけれはあしたにいひをくり侍りける　天台座主源心
ちらぬまに今一たひも見てし哉花にさきたつ身とも社なれ
百首歌中に无常をよめる　藤原季通朝臣
いとひても猶おしまるゝ我身哉ふたゝひくへき此世ならねは
[題不知]　近衛院御製
虫の音のよはるのみかは過る秋を惜む我身そまつきえぬへき
秋のゝを過侍りけるに尾花の風になひくをみて[光イ]　源親元
花薄招かはこゝにとまりなむいつれのゝへもつゐのすみかそ
無常のうたとてよめる　讀人しらす
朝かほの花にやとれる露の世ははかなきうへに猶そはかなき

よの中はかなくおほえさせたまひける頃　花山院御製
かくしつゝ今はとならむ時に社くやしき事のかひもなからめ
入相のかれの聲をきゝて　いつみ式部
夕くれは物そ悲しきかれのをとあすも聞へき身に〔こはしイ〕しあられは
夏のよすゝむとておほえけることを　神祇伯顯仲女
このよたに月待ほとはくるしきに哀いかなるや〔寝にイ〕みにまよはん
題不知　緣忍法師
山のはに影かたふきてくやしきははかなく過し月日也けり
源季政
うき身そと思ひなからの橋はしら今まてよにもたてる成覽
〔世をいとふ心侍りてよめる〕　よみ人しらす
はかなさはけふ〔せイ〕ともしらぬ世中にさりともとのみいつを待覽
をこなひなんとてこもり侍けるに　前大納言公任
今はとて入なん時そおもほゆる山へをふかみとふ人もなし
みやこにすみわひて近江の田上といふ所にまかりて　俊頼朝臣
あし火たく山のすみかは世中をあくかれいつる門出なり兒
法師にならんとおもひけるころ月を見侍りて　藤原爲經
在明の月よりほかに誰をかは山路の友にちきりをくへき
前大納言公任世をそむきて長谷にこもり〔帝イ〕侍けるころあらしはけしくきこえけれは又のあしたにましをくりける　中納言定頼
ふるさとのいた間のかせに夢さめて濱〔谷イ〕の嵐を思ひこそやれ
かへし　前大納言公任
山さとの谷のあらしの寒きにはこのもとを社思ひやりつれ
あはたにて
〔法師になりてよかはにすみ侍けるころ　うへのとはせ給たりけるに〕　如覺法師
うき世をはみれの霞やへたつらむ猶山さとはすみよかりけり
世をそむきてふかき山にすみける人の宮古に侍りけるをんなこのもとへつかはしける　讀人しらす
九重のうちのみつれに戀しくて雲のやへたつ山はすみうし
かへし
秋きりのへたつる山の深けれはおほつかなさになれて社ふれ
すみあらし侍けるところに秋きたりて　前大納言公任
とはぬまのおほつかなさを思ひやる山には霧のへたてすも哉
攝津國にこもり侍りて前大納言公任の許にいひつかはしける　〔能因法師〕
時しもあれ秋ふるさとをきて見れは庭はのへとも成にける哉
ひたふるに山田守身と成ぬれは我のみ人をおとろかすかな
世中はかなく覺え侍りける頃かつらなるところにこもりゐ侍りけるを人のもとより今はすみつきぬらんと申〔侍〕ける〔に〕　讀人しらす
たつぬへき人もあらしに紅葉ちるかつらの里は月のみそすむ
伊勢國に外宮の神主とも歌よみ侍りけるに　度會俊忠
思ひやれあれたる宿のさひしきに松ふく風の秋の夕暮
大原にすみ侍りける頃としつなの朝臣のもとより炭はやきならひたりやとまうしたりけるかへりことに　亘暹法師
おほはらやまたすみかまもならはれは我宿のみそ煙たえたる
藤原隆資かもとにいひをくり侍りける
雪ふるとよそにのみゝし大はらは我世のはての住家也けり
下らうにこえられ侍りける頃ほり川の關白のもとに侍

けろ人につかはしける

年をへてほしをいたゝくくろかみの人よりしもに成にける哉　大中臣能宣

新院位におはしましける時うへのおのこともをめして述懷の歌よませさせたまひけるに白河院になれつかうまつりける事をおもひ〔いて〕てよめる　大納言成通

しら河のなかれをたのむ心をは誰かはくみてそらにしるへき

宇治前太政大臣花見にまかるときゝて　ほり川右大臣

身をしらて人をうらむる心社ちる花よりもはかなかりけれ

花のいみしうさきたる比人のもとよりたれをまつとておしむ心そといひ侍りけるによめる

さらてたに戀しき物を昔みし花ちるさとに人のまつ哉

賀茂に人のまうてゝ後〔後イ〕やしろのつかさなりひ〔ら〕かもとをたつれけるになきよしこたえければ歸りて後ありなからかくれけるよしいふときゝて　なりひらか女

山さとの岩井の水はみくさゐてみえけん物をすまぬ氣色は

おほやけのかしこまりに侍りけるを僧正深覺まうしゆるし侍りければそのよろこひにさつき五日まかりてよめる　平致經

君ひかす成なましかはあやめ草いかなるれをか袖にかけまし

かしこまりにはへりけるさ月の比なんなのもとにいひつかはしける　藤原ともさと

さ月とて軒にあやめもふかさりきれはかり社は袖にかけしか

物へまかりけるみちに人のさうふをひきけるを〔見て〕なかき根やあるとこはせけるをおしみければ　周防内侍

いかてかくれを惜む覽あやめ草うきには聲もたてつへきよに

帥前内大臣なかされ侍りける時をくれすくせんとしたまひければ宣旨〔ミイ〕かきりありてみやこにとゝまりて　高内侍

よるの鶴みやこのうちにこめられて子をこひつゝも鳴明す哉

百首歌中に　大藏卿匡房

まとろまて物思ふ宿の長き夜そ鳥のれはかり嬉しきはなし

〔かれ〳〵〕になりにけるをとこの許より神無月の頃おとつれて侍りければはゝの返事にて　讀人不知

おもはれぬ空のけしきを見るからに我もしくるゝ神無月哉」

左京大夫顯輔撰集うけたまはりて歌こひ侍りけるかへりことに　太政大臣

思ひやれ心の水のあさければかきなかすへきことのはもなし

新院位におはしましける時中宮のおほんかたにてこゆみのおほんあそひありけるにかけ物にさうしのかたつくりたるか物のかゝぬ出されたりけるに書つけられたりける　關白前太政大臣

これをみて思ひも出よ濱千鳥あとなきあとをたつれけりとは

かへし　右兵衛督公行

濱ちとり跡なきあとを思ひ出てたつれ覓とも今日社はしれ

むすめのさうしかゝせけるおくにかきつけゝる〔女イ〕　源義國妻

このもとにかき集めたる言のはをはゝその杜の形見とはみよ

後葉和歌集卷第十八　雜三

百首歌よませたまひけるに　新院御製

しきしまや　やまとの歌の　つたはりを
きけははるかに　ひさかたの　あまつ神代に
はしまりて　みそもしあまり　ひともしは

いつもの神の　やくもより　おこりたるとそ〔けりイ〕
しるすなる　それより後は　もゝくさの
ことのはしけき〔くイ〕　ちり〳〵に　かせにつけつゝ
きこえしと〔ふれイ〕　ゝかきためしに　ほりかはの
なかれをくみて　さゝなみの　よりくる人に
あたうへく〔つらイ〕　つたなきことは〔はイ〕　はまちとり
あとを末まて　とゝめしと　思ひなからも
つのくにの　なにはのうらの　なにとなく
ふれのさすかに　このことを〔かイ〕　忍ひならひし
なこりにて　よの人きゝは　はつかしの〔すイ〕
もりもやせむと　おもへとも　心にもあらて
かきつられつる

おなしく歌たてまつりけるに　左近衛中將敎長

あつさゆみ　はるたちぬとや　みよし野の
山にかすみの　たなひけは　このめも今や
はりぬらん　いつしかとのみ　はなまつと
このもかのもに　たちましり　家路わするゝ
かひもなく　咲はかつちる　はかなさを
哀いつまて　なけきつゝ　わか身のうへに
なりはてむ　ことをはしらて　なつくれは
しけき梢に　なくせみの　むなしきからと
あきはなる　かくはつれなき　よなれとも
くまなき月を　なかむれは　物思ふことも
忘られて　心ひとつそ　ほこらしき〔れさイ〕
さてのつもりは　おいらくの　身にせめくるは
しら露の　しもとしなれは　ふゆの夜に
むら〳〵見ゆる　草のうへは　みなしろたへに
なりにけり　これをはよそに　おもひこし
わかしら髪も　いまはたゝ　くろき筋なき
〔たきのいとの　くる〳〵きみに　つかふとて
おもひはなれぬ　憂世なりけり〕

〔以下舊本闕今以宮内省圖書寮古寫本補訂之〕

あつまよりまかりのほりて俊頼朝臣の許へいひつかはしける　源仲正

あつま路のやへのかすみを分け來ても君かあはれはなほへたてたるこゝろこそすれ

かへし　俊頼朝臣

かきたえしさののつきはしふみ見れはへたてたる霞もはれてむかへるかこと

堀川院の御時百首歌奉りけるに　藤原仲實

ひま過くる駒よりもときかけろふのよをたまきはるいそちの春におひにける哉

源俊頼朝臣

あすか川うき瀬につもる白雪の波立ち來れはたのもしけなき世にもふるかな

題不知　讀人不知

昔よりいかに契りをむすひてか年たけくまにいろもかはらて二もとある松

さわらひをよめる　俊頼朝臣

春來れと折る人もなき早蕨はいつかほとろとならむとすらむ

三月三日桃花をよめる　經信卿母

山賤のそのふに咲ける桃の花すけりやこれを植へて見けるよ

春の歌の中に　小大進

桃の花物言はすとか聞きしかは誰すきあふとたはれしもせし

三月盡の心を　關白前太政大臣

行く春の姿に見えぬものなれはひきたにえこそ留めさりけれ

題不知　後頼朝臣

雪の色を盗みて咲ける卯の花はさえてや人にうたかはるらむ

百首歌爲忠朝臣のときはの家にてよみけるに　源仲正

駒弱み行きそわつらふ時鳥なくかた山によりによられて

堀川院の御時歌たてまつりけるに　基俊

あたし野の心も知らぬ秋風にあはれにたよるをみなへし哉

後頼朝臣

秋の田にもみち散りける山里をこともをろかに思ひける哉

きくのうつろふを見て　大僧正行尊

白菊の花こゝろにも見ゆるかなうつろふへしや一夜はかりに

題不知　後頼朝臣

風吹は檜のうら葉のそよ／＼といひ合せつゝいつち行らむ

讀人不知

玉すたれいとのたえまに人を見てすける心はおもひかけてき

新院御製

瀬をはやみ岩にせかるゝ谷河のわれても末にあはむとそ思ふ

基俊

呉竹のあなあさましの世の中やありしやふしの限なるらむ

三の御子の家にて戀の心をよめる

床近しあなかま夜半のきり／＼す夢にも人にあひもこそすれ

題不知　後頼朝臣

戀しともさのみはいかゝ書きやらむ筆の思はむ事もやさしく

小大進

わか戀はかたし／＼のからす貝あふや／＼と心さはかす

後朝の心をよめる　平實重

しのゝめの空しらすして寢たる夜を鳥のねたくも驚かす哉

題不知　和泉式部

竹の葉に霰ふるらしさら／＼にひとりはぬへき心ちこそせね

つゝみける男の同しならぬよしうらみける返事に

おのか身のおのか心にかなはぬを思はゝものを思ひ知りなむ

後葉和歌集卷第十九　雜四

大嘗會の歌　平兼盛

かゝみ山やま彥高くよはふなりよのさかふへき影そ見ゆらむ

主基方御屛風に　藤原家經

うちむれてたかくら山につむ物はあらたなき世のとみ草の花

これは後冷泉院御時のみのゝ國のうたなり

悠基方御屛風歌稻多く刈りつめるを人見たるところに　左京大夫顯輔

いたくらの山田につめる稻を見て治まれる世の程を知るかな

藤原永範

治まれる時にあふみのやすかはは幾度御代にあはむとすらむ

これは近衞先帝の御時近江國辰日音聲野洲河

よるのこひの心をしもつけ歌とて　三御子

下野やなすのあをかれなゝはかりなゝよかはりてあはぬ君哉

かひ歌にあひてあはぬ心を

かひかれのかひもなく又あひも見すさやの中山さやは思ひし

春日の祭をよめる　後頼朝臣

きさらきの初花なれや春日山みれとよむまていたゝきまつる

世にしつみ侍りける頃春日の祭にへい立つとてみてくらに書きつけ侍りける　左京大夫顯輔

かれはつる藤の末葉のかなしきはたゝ春の日を賴むはかりそ

神まつりをよめる

さかきとる夏の山邊や遠からむゆふかけてしも祭る神かな

題不知　源よりされ

けふ見れはかけて歸らぬ人そなき葬そ神のしるしなりける

百首歌中に　　肥　後

諸人のかさすあふひはちはやふる神に頼みをかくるなりけり

神祇の心をよめる　　小大進

石清水なかれの末もはる〲とのとかなる世にすむそ嬉しき

宇治前太政大臣家に歌合し侍りけるにかちかたの人々

住吉にまうてゝ歌よみ侍りけるに　　式部大輔資業

住吉の岸にひたれる松よりも神のしるしそあらはれにける

はらからになかたかひて年久しくなりて奉幣のつかひにくたりて昔住みける家を見けれは荒れはてゝ柱はかりたてりけるを見て書きつけゝる　　津守有基

住よしと思ひし宿も荒れにけり神のしるしを待つとせしまに

題不知　　讀人不知

かくてのみ世にありあけの月ならは雲隱してよあまくたる神

稲荷にこもりて祈り申す事侍りける法師の夢に社のうちよりいひ出し給ひける

長き世のくるしき事を思へかしなに歎くらむかりのやとりを

或人云この歌みわの明神の御歌とも語り傳へたり

後葉和歌集巻第二十　雜五

百首御歌の中に心經の心をよませ給ひける　　新院御製

おしなへてむなしととける法なくは色に心やそみはてなまし

法華經の意を歌によみ侍りける方便品の心を　　讀人不知

いにしへの野中の清水よにいつるもとの心は今こそは聞け

一品經供養しけるところに人にかはりて同品のこゝろを　　藤原基俊

心さしたゝ一えたの花なれとつゐにはみなる物とこそ聞け

比叡の山に法華經の歌よみける中に信解品のこゝろを　　仁せう法師

破れける草のいほりをいかにして露かりそめと思はさりけむ

同品の心を　　朝日尼

憬れしこを思ふ道におりたちてちるに穢るゝ身とそなりぬる

提婆品のこゝろを　　近衞院御製

うき世をは嶺のたきゝとこりはてゝ法の心をくみし谷河

安樂行品願成佛道の心を　　關白前太政大臣

よそになと佛の道を思ひけむ我心こそしるへなりけれ

　　左京大夫顯輔

いかてわか心の月をあらはして闇にまとへる人を照さむ

本ノマヽ 受記品こゝろを　　藤原顯廣朝臣

たき木つきよはの煙とのほりしや鷲の高嶺にかへるしらくも

　　讀人不知

雲はるゝわしの高根は遠けれといつくも月の影はすむなり

普賢經の心をよませ給ひける　　近衞院御製

夜半にをく露の如くの罪なれはつとめて消ゆる物にそ有ける

依他の八のたとひを人々よみけるにこの夜は鏡の如しといふ事をよめる　　信永法師

はかなしと思ふ心はますかゝみ影をこのよにたとへてそ見る

百首歌中に　　待賢門院堀川

長き世にまとふさはりの雲はれて月のみ顔を見るよしもかな

天王寺にて人々歌よみける中に　　源ちかふさ

入日さす山の霞を見てもなほ心にかゝるむらさきの雲

法輪にかきつけ侍りける　　讀人不知

月は入り朝日まつまの大空は星の光をたのむはかりそ

右後葉和歌集以古寫一本挍合
以宮内省圖書寮古寫本補訂了

和歌部三

續詞花和歌集卷第一春上

春たつ日よみ侍ける　源俊頼朝臣
いつしかと今朝は氷もとけにけりいかてみきはに春をしる覽
新院(崇德)御歌
打なひきけふ立春のわか水はたかいた井にか結ひ初らむ
三百六十首歌中に　曾禰好忠
なる瀧の岩まの氷いかならしはるのはつかせ夜半に吹也
堀川院(七十三)御時百首歌たてまつりけるに　中納言國信
三室山谷にや春の立ぬらん雪の下水岩たゝくなり
むかし月のついたち比雪のふれりけるに山里に侍りける人のもとにつかはしける　肥後
山里の柴のとほそは雪とちて年のあくるもしらすや有らん
三百六十首歌中に　曾禰好忠
峯の日やけさはうらゝにさしつ覽軒のたるひの下の玉水
承保(白河)四年内裏に子日せさせ給けるに　大納言經信
れのひするみ垣のうちの小松原千代をはほかの物とやはみる
東三條院(詮子)四十御賀御屛風に子日を　源道濟
姫小松おほかるのへにれのひして心に千代をまかせつる哉
題しらす　小辨
數しらすひけるれの日の小松かな一本にたに千代はこもれり
雪中子日といふことをよめる　新少將
珍敷ためしにひかむ雪降はれの日の松も花咲にけり
題しらす　能因法師
御狩野にまた降雪はきえれともきゝすの聲は春めきにけり
新院人々に百首歌めしけるに　前左京大夫敎長
わかなつむ袖かとそみる春日のゝとふ火のゝへの雪のむら消
小野宮の大おほいまうちきみ(實賴)の賀屛風に　大中臣能宣朝臣
あたらしき春くることに古鄕の霞のゝへにわかなをそつむ
むつ月の七日みかはかもとよりわかなをつかはすとてみためになむ野へにいてゝなといへりける返事に　美濃
我も又君かためにそ思ひつるかたみに摘は若なゝりけり
新院御時うへの人々に歌よませさせ給けるにはしめてうくひすをきく心を　八條入道太政大臣(實行)
けふそ聞太山かくれのふるすより梢にうつる鶯のこゑ
春のはしめつかた山中に侍ころ人のもとへいひつかはしける　心覺法師母
山里は人そ音せぬうくひすの初れはかりはうたて聞けり
やまさとなるころみやこの人鶯いかに鳴らむなといひ

て侍けれは　前左京大夫敎長

鶯はみな都へと出はてゝ初音そきゝし春の山さと

題しらす　大納言道綱母

わかやとの柳のいとはほそく共くる鶯のたえすもあらなん

源　季　遠

春風にかすみの衣ほころひてたえまにみゆる青柳の糸

承暦(白河)二年内裏歌合に　藤原孝善

谷川の音はへたてすまかれふくきひの中山霞こむれと

津の國といふ所にて人々うたよみけるに霞隔行舟とい
ふことを　隆縁法師

あさ霞鹽ち遥に立にけりおきのかたほのみえす成行

春駒をよめる　藤原盛經

とりつなく人もなきのゝ春駒は霞にのみやたなひかるらん

内裏御屏風に　平　兼　文

日比へて待しもしろく我宿の梅のこすゑに春そきにける

侍所前にいとちいさきむめのはな咲けるをみて　清原元輔

去年かうへし梅たに春をしろものを雪に埋て年をふる哉

三井寺やけにけれは修行にまかり出ける道に梅花侍り
けるをみて房の梅を思ひ出てよみ侍ける　前大僧正行尊

わか宿のつまに匂ひし梅かえも誰かゝきれの花と成らむ

題しらす　よみ人も

春のよはいやはれらるゝ梅の花あかぬ匂ひにおとろかれつゝ

祐盛法師

梅かえの花吹かくるはる風はいとひなからもなつかしきかな

藤原資隆

袖にみな垣ねのむめはしみにけり花にはとまるかやなかるらん

山家梅をよめる　津守國基

なつかしき香のみこそすれ山里は梅のにほはぬ宿しなけれは

屏風の繪に梅花さきたる山さとのかすかなるに女ひと
りなかめてゐたる所に　藤原道信朝臣

みる人もなき山里の花のいろはなかく〱風そおしむへらなる

水邊の梅花をよめる　心覺法師

梅かえの下行水も心あらは花ちる程はなかれさらなむ

むめのはなの水にうきてなかるゝをみて　大江嘉言

なかれくる水の心もしらなくにうきても花のともに行哉

歸鴈を　意尊法師

玉章をかけし時にやかりかれを春かへりこと契りをきけむ

新院人々に百首歌めしけるに　藤原季通朝臣

なかむれは涙そ落る鴈かれのまたこむ秋は我やなからん

苗代をよめる　小左近

花みるとなはしろ水にまかせつゝうちすてゝけり春の小山田

堀河院御時百首歌たてまつりけるに　修理大夫顯季

雉子鳴いはたのをのゝつほすみれしめさすはかり成にける哉

續詞花和歌集巻第二春下

白川院(七十二)御時花多春をちきると云ことを人々よま
せ給けるに　大納言經信

百鋪やみかきか原のさくら花春したえすはにほはさらめや

山花始開といふことをよませ給ける　御製（二條）

いつしかとまち〳〵て又山さくら今朝より散んとをしそ思ふ

京極家に白河院みゆきせさせ給て又日人々に歌よませ
させ給けるに　京極前太政大臣（師實）

櫻花おほくの春にあひぬれときのふ今日をやためしにはせん

高倉一宮（祐子）歌合歌　式部大輔資業

君かすむ宿にゝほへるさくら花春くる人のかさし成けり

藤原兼房朝臣

のとかにもみゆる攖のにほひ哉宿のけしきや風もしるらん

中納言女王

山さくら匂ふあたりのはる霞風をはよそに立へたてなむ

治部卿通俊

春風は吹ともちるな櫻花春の心よわれになしつゝ

藤原顯綱朝臣

花ゆへにかゝらぬ山そなかりける心は春の霞ならねと

題しらす　藤原爲業

いつれともわかれぬ物は白雲の立田の山のさくら成けり

右大辨雅頼

霞にも雲にも誰かまかふらんたくひもみえぬ峯の櫻を

鞍馬の住僧にて侍けるものゝ大門の花盛に見にまかり
てよみける

山さくらみれはかすみのとめつれは麓の花をおりて社みれ

遠尋山花といふことを人々によませさせ給けるに
新院御歌

たつねつる花のあたりに成にけり匂ふにしるし春の山風

かへるさをいそかぬ程の道ならはのとかに峯の花はみてまし

法性寺入道前太政大臣（忠通）

面影に花のすかたをさきたてゝいくへ越きぬみねのしら雲

藤原顯廣朝臣

新院御時春情在花と云ことをうへの人々によませさせ
給けるに　右大臣（公能）

梓弓春のこゝろにいるものはたかまと山のさくらなりけり

花陰浮水と云事を　前太宰帥資仲

水にうつるかけのなかるゝ物ならはすゑ汲人も花はみてまし

鳥羽院（七十四）白河花御覽しにみゆき有ける日よみ侍け
る　花園左大臣（有仁）

かけ清き花のかゝみとみゆる哉長閑にすめる白川の水

徳大寺左大臣（實能）

萬代の花のためしやけふならんむかしもかゝる春しなけれは

題しらす　藤原顯方

淺茅原あれのみまさる故郷に匂ひかはらぬ花さくらかな

賢智法師

哀にも春を忘れす匂ふかなあたなる花の心とおもふに

源雅重朝臣

よしの山ことしを花のきはと見ていくよの春をすくしきぬ覽

雲林院のうすさくらみにまかれりけるにみなくちはて
てかたえの殘れるにいとおかしくさけりけるをよみ侍
ける　良暹法師

尋つる花も我身もをとろへて後の春ともえこそ契られ

尙齒會といふことして人々歌よみけるに
藤原隆資

櫻花またみむこともさためなきよはひそ風も心してふけ

藤原時房

花ゆへに過にし春をかそふれはあはれやそちに成にける哉

題しらす　新院御製

としふれとかはらぬ物は春毎にはなにそめてし心なりけり

橘　榮職

世中は思ひてもなしと思へとも花に心のとまりぬるかな

仁和寺にあひしれる人のもとにまかれりける時ともとする僧たち三四人具して花見ありきけるに上西門院の藏人ともあそひける所にまかりいたりてしは〳〵み侍りて歸けるを今しはしいかにかゝる花を見すてゝはなとあなかちにとゝめけれはいひつかはしける

顯昭法師

わりなしやほかにも花のなくは社一木かもとに日をも暮さめ

あやしのものゝ櫻のはなをもちてまかりけるをこひ侍けれとおしみけれは　律師實源

情なきしつか心にいかにして花をはおしむ物としりけん

中納言隆家雲林院の花み侍けるにおかしかりけるえたをおりてみせにつかはしたりけれは　小野宮右大臣(實資)

おりふしの行衞も今はしらぬ身に春こそかゝる花はみえしか

花みにまかるときく人に　藤原實方朝臣

春くれと春にしられぬ埋木は花みる人をよそにこそきけ

上達部上の人々雲林院のはなみけるに齋院女房のもとよりしめのうちのはなはかひなき花とせうそこ侍れは　堀川右大臣(頼宗)

風をいたみまつ山へをそ尋つるしめゆふ花はちらしと思へは

小野宮のおほきおほいまうち君月林寺に花見侍ける日よめる　前大貳高遠

山風にちらて待ける櫻花けふそこほれてにほふへらなる

清原元輔

たかためかあすは殘さむ山櫻こほれて匂へけふのかたみに

かくれさせ給はんことちかく成て勝光明院の花のちるを御覽してもの心ほそくおほしめされけれはよみて徳大寺の大いまうちきみにたまはせける　鳥羽院(七十四)御歌

心あらは長閑にゝほへ櫻花のちの春をはいつかみるへき

新院御時うへの人々に歌よませさせ給けるにつかうまつれりける　右兵衞督公行

嵐ふくしかの山へのさくら花ちれは雲ゐにさゝ浪そ立

たいしらす　大藏卿匡房

天河雲のしからみたえにけり花ちりつもるをはつせの山

僧都覺樹

嶺にちる櫻は谷の埋木に又咲はなと成にけるかな

太政大臣(伊通)

しら雲と峯にはみえて櫻花ちれは麓の雪とこそなれ

新院人々に百首歌めしけるに　藤原季通朝臣

よしの山花はなかはに散にけりたに〳〵かゝる峯のしら雲

水上落花をよめる　源頼政

吉野川みなとの浪による花やあをれか嶺にきゆる白雲

新院人々に百首歌めしけるに　前左京大夫教長

櫻花いかなる風にさそはれて惜む人をはしらぬ成らん

さくらはな木のもとことに吹ためてたのか物とや風のちる覧　兵衛

題しらす　仁和寺宮

はかなさを恨もはてし櫻花うき世はたれも心ならねは

藤原爲業

又もこむ春もみるへき花なれと散は限りの心地こそすれ

賀茂政平

誰ためにちらさしと思ふ花なれはしぬ計りにはおしき成らん

源信宗朝臣

こりすまにちるおり花をみつる哉過にし春のおなし思ひを

隨風尋花といふことを　中納言定頼

吹風をいとひもはてし散殘る花のしるへとけふは成けり

尋殘花心をよめる　靜嚴法師

ちりぬとて尋さりせは山櫻あたはかくれの花をみましや

百首御歌中に　新院

山吹の花のゆかりにあやなくも井ての里人むつましきかな

水邊款冬をよめる　藤原範綱

よしの川きしの山吹咲ぬれは水にそ深き色はみえける

麗景殿女御大盤所より女房の藤花を山吹にさして給はせたりけれは　祭主輔親

ふた心ありける人のおる花はひとつ色にもさかすそ有ける

月前藤花といへることをよめる　藤原爲業

ふち波のかけなる水の月みれはうす紫の雲そかゝれる

梨壺に侍ける比かたはらのさうしより藤花をうちこしたりけれは　大中臣能宣朝臣

おほつかな末の松山いかならんまかきの嶋をこゆる藤なみ

山里にて藤花をみてよめる　源道濟

山高み松にかゝれる藤のはな空よりおつる浪かとそみる

藤花をよみ侍りける　俊惠法師

梢よりこえて落くる藤浪のゐせきは松のしつえ成けり

三百六十首歌中に　曾禰好忠

春ふかく成にけりとは住の江の岸の藤なみおるにてそしる

題しらす　藤原實清朝臣

はなゝらて心慰む方もなき人こそせめて春はおしけれ

やよひのつこもりに　六條宮

命あらは又も逢みむ春なれと忍ひかたくて暮すけふかな

源雅光

くれはつる春の行衛を尋れは人のこゝろにとまる成けり

續詞花和歌集巻第三　夏

新院人々に百首歌めしけるに　前參議親隆

ぬきかふる花の袂のうつりかのかほるや春の名殘成らん

題しらす　惠慶法師

我やとの外面にたてる楢のはのしけみにすゝむ夏はきにけり

うつきのついたちに山寺にもゝのはなさけりけるを見て　僧都源信

山里のもゝの花やゝ咲にけり都は今やうつきなる覧

卯花のかきねにうくひすのなくをよめる　藤原尙忠

うの花の色こそ梅にまかふともかを忘れてや鶯の鳴

鳥羽殿五番歌合に　左近中將信通
過ゆかは散もこそすれ卯花の枝さしかはすたの〻ほそ道
見て過る人しなけれは卯花のさける垣ねや白河の關　藤原季通朝臣
題しらす　源盛清
卯花を音なし川の泪かとてれたくもおらて過にける哉
年をへてかよひなれたる山里のかと〻ふはかり咲ろ卯花　源相方朝臣
よみ人不知
久堅の月の影ともみつる哉かつらの里にさける卯花
あふひをよみ侍ける　大宮小侍從
いかなれはその神山のあふひ草年はふれともふたは成らん
左京大夫道雅西八條家の障子の繪に山里に郭公まてる
人ある所を　藤原範永朝臣
今朝きなけさやまかみれの郭公やとにもうすき衣かたしく
新院御時人々に歌よませ給けるに人傳に郭公をきくと
いふことを　法性寺入道前太政大臣
郭公聞つと語る人ことにいくたひとひつあかぬあまりに
題しらす　藤原成範朝臣
夜もすから待をはしらて郭公いつれの山のかひに鳴らむ
源師賢朝臣
珍らしく鳴てすくなりほと〻きすいつくもこれや初音成らん
藤原隆資
初聲を聞そめしより郭公ならしの岡にいくよきぬらん
後朱雀院御時むめつほの女御御方の人々ほそとのにう
への人々と物かたりして侍るに經信卿しはしかくてま
ち給へとて一品宮の御方へまいりにける程にほと〻き
すの鳴けれは　小左近
きかましや山郭公一こゑもまてとたのむる人なかりせは
夢聞郭公といへることを　太政大臣
郭公初れ聞つるうれしさは夢もうつ〻にかはらさりけり
新院御時郭公の歌よませ給けるに　前大藏卿行宗
ほと〻きす雲の上にてきく時も猶空にこそ鳴わたりけれ
鳥羽殿五番歌合に　源家俊朝臣
ほと〻きす鳴一聲にあくかれてしらぬ雲ゐに行心かな
郁芳門院根合に郭公を人にかはりてよめる　藤原基俊
二聲となとかきなかぬ郭公さこそみしかき夏のよならめ
題しらす　右衛門督公保
暮毎になとかき鳴ぬほと〻きす待心にはよかれやはする
法性寺入道前太政大臣
郭公なへて聞する聲ならはその人かすのうちにいれなん
源道濟
年ことにめつらしけれと郭公むかしの聲もかはらさりけり
藤原永實
待かねてまとろめは又きなくなり人くるしめのほと〻きす哉
藤原敦頁母
郭公又も鳴とまたれつる聞夜しもこそれられさりけれ
前大納言成通
ほと〻きす一聲鳴て明ぬれはあやなくよはのうらめしき哉
中院入道右大臣（雅定）
夏の夜はあくるもしらす郭公鳴て過ぬる空をなかめて

勝超法師
なくこゑはたかまの山のほとゝきすとをちの里の人も聞らん

住吉にまうてゝ侍りけるにほとゝきすの鳴けるをきゝて
大僧正覺忠
すみのえになき渡るなり郭公待にかひある心ちこそすれ

八條の山庄にて人々ほとゝきすの歌よみけるに
源頼實
いなり山こえてやきつる郭公ゆふかけてこそ鳴渡るなれ

曉月聞郭公といへることを
藤原仲實朝臣
郭公有明の月に鳴こゑを更行月のつとにかもせむ

曉郭公を
藤原顯廣朝臣
忍ひ妻おき行空のほとゝきす名殘おほくも鳴わたる哉

郭公聲稀といふことをよみける
藤原忠清
たまさかにあふ坂山の郭公なにかかたらふたえまかちなる

後三條内大いまうち君(公教)身まかりてのちかの家にて人々はな橘を題にて歌よみけるによめる
源通清
いにしへを忍ふにしけるつまにしも花橘のにほふなるかな

新院人々に百首歌めしけるに
兵衛
五月雨の晴せぬ比そかつまたの池もむかしのけしき成ける

通宗朝臣家にて五月雨をよめる
橘成元
五月雨はみつのゝ原もなかりけりいつれかよとの渡り成らん

郁芳門院の根合に五月雨をよみ侍ける
六條右大臣(顯房)
五月雨にかさとり山はこえゆかし花いろ衣かへりもそする

あやめをよませ給ける
堀川院御歌
玉藻かる池の汀の菖蒲草ひくへき程に成にけるかな

新院人々に百首歌めしけるに
堀河
やとことに妻にひかるゝあやめ草たかよとのにかれはとまる覽

五月五日
僧都實圓
たなはたの心ちこそすれあやめ草年に一たひ妻にみゆれは

六條右大臣家歌合にほたるをよめる
よみ人しらす
五月やみ澤への草はしけゝれとかくれぬものは螢なりけり

晩螢を
仁和寺宮
釣簾の外に宵のともしひ消やらてほのめくかけは螢也けり

ともしをよめる
藤原忠兼
ともしすと山の雫にそほちつゝ尾上によをも明しつる哉

堀河院御時百首歌たてまつりけるに
大藏卿匡房
ともしするみやきか原の下露にしのふもちすりかはくまそなき

水上夏月をよめる
心覺法師
夏かはの岩せにやとる月かけや冬にしられぬ氷なるらん

夏月を
仁和寺宮
夏の夜はたゝときのまもなかむれはやかて有明の月を社みれ

雲隔遠望といへることを
源俊頼朝臣
とをちには夕立すらし久かたのあまのかく山雲かくれ行

新院御時水草隔舟といふことをよませさせ給けるによみ侍ける
法性寺入道前太政大臣
夏ふかく玉江にしける蘆のはのそよくや舟の通ふなるらん

三百六十首歌中に
曾禰好忠
荻のはに風のそゝふく夏しもそ秋ならなくに哀なりける

二條の太き太后の宮にて樹陰翫泉心をよみ侍ける
贈佐大臣(長實)

松かれに岩もる清水結ふよは我身ひとつの秋はきにけり
水邊納涼をよめる　藤原道經
夕されは玉ゐる數もみえねともせきのをかはの音そすゝしき
八條入道太政大臣(實行)右兵衛督に侍けるとき歌合し侍りけるに夏風をよみ侍ける　德大寺左大臣
ゆふされは篠のをさゝを吹かせのまたきに秋のけしき成かな
みな月の比ほひ二條の太き太后宮待草花歌人々によませ給けるに　美濃
藤はかまはやほころひて匂ひなむ秋の初風吹たゝすとも
秋花夏開といへる事を　藤原經衡
あき萩は夏のゝへにそ咲にけるなかてや鹿のしからみにせん
新院人に百首歌めしけるに　藤原季通朝臣
けふくれはあさのたちえにゆふかけて夏みな月の御祓をそする

續詞花和歌集卷第四　秋上

法性寺入道前太政大臣家にて山家早秋のこゝろをよみ侍ける　前治部卿雅兼
山里はいとゝ哀そまさりけるいくかもあらぬ秋のけしきに
題しらす　源道濟
なつ衣またかへなくに荻のはの末うちなひく秋風そ吹
三百六十首歌中に　曾禰好忠
朝ほらけ荻のうはゝの露みれはやゝはた寒しあきの初かせ
堀川院御時百首歌たてまつりけるに　修理大夫顯季
露むすふ秋にははやく成にけり淺茅か花のうつろふみれは
七夕の心をよみ侍りける　宇治入道前太政大臣(賴通)
ちきりけむ程はしられと棚機の絶せぬけふのあまの川浪
　藤原範綱
天川まれに逢せと思ひしは流れてたえぬ契り成けり
　よみ人不知
けふさへや袖はぬるらんたなはたの暮待ほとの天の羽衣
七日のゆふさりつかた内おまへに候にこよひのこゝろの歌よめとおほせこと有けれはつかうまつれる　三河内侍
雲井にてなかむるおりも天河ほし合の空ははるけかりけり
すみよしよりのほり侍りけるに七日あまのかはといふところにとまりてふれをたなはたにかしたてまつるとてよみける　津守國基
たなはたは思ひしらなんあまの川いそく渡りに舟をかしつる
宇治へまうて侍けるに田に水ひきあへるかおかしかりつるよしかたり侍りけるをおとゝ聞侍りてふつきの七日見にまかれりけるにみつひくものもなかりけれはかむかへ申けるによめる　菅原爲言
ひく水もけふ七夕にかしてけりあまの河せにふなゐすなとて
七夕にかせるきぬの露にかへりたりけれは　平實重
たなはたにぬきてかしつる花染の衣は露にかへす成けり
八日よみ侍ける　上西門院冷泉
程もなくほしあひの空の明ぬれはかされもあへし天の羽衣
　八條入道太政大臣北方
露けさを思ひこそやれひこほしのけさ立かへる天のは衣
　仁和寺宮

たなはたのかへるあしたのうき雲やあかぬ思ひのけふり成覽
天河おなしせよりはわたれともかへさは袖やぬれまさるらん
藤原顯方
堀川院御時百首歌たてまつりけるに　大納言公實
山のはに横きる雲の絶まよりもりくる月のめつらしき哉
月をよませ給ける　三條院御歌
あし引の山のあなたに住人はまたてや秋の月をみるらん
大納言公通
秋風は夜さむなりとも月影に雲の衣はきせしとそ思
藤原道綱
秋のよは天川せや氷るらん月の光のさえ渡るかな
前左京大夫敦長
いつとても月にあくよはなけれ共秋としなれはわすられさり覽
和泉式部
たのめたる人はなけれと秋のよは月みてぬへき心ちこそすれ
百首御歌中に　御製
雲はみな峯のあらしにはらはせてさやけく月のすみのほるかな
八月許月あかきよ山寺に侍りて京なる人につかはしける　源道濟
よそなから君やみるらん思ひつゝ今宵の月にねてあかしつる
繪にひとり月みたる人あるところに　六條宮
獨ゐて月をなかむる秋のよはなにことをかは思ひ殘さむ
法性寺入道前太政大臣連夜見月心人々によませ侍りけるに　藤原行盛朝臣
よひのまのかたはれ月とみしものをなかめそあかす有明の空
源雅光
大堅の月のさかりに成ぬれは中々ひろそまとろまれける
題しらす　新院紀伊
たくひなくおほゆる物は秋のよのうす雲かゝる在明の月
前大納言成通
たくひなくつらしとそ思ふ秋のよの月を殘して明る東雲
大江嘉言
秋の夜の空すみ渡る月みれは行ともなくてかたふきにけり
惠慶法師
月の入山のあなたのさと人と今宵はかりは身をやなさまし
屏風の繪に月のよ山路をゆく人ある所に　源道濟
あきのよの月に山ちをこえ行はまたなもしらぬ鳥そ鳴成
高倉一宮(祐子)のくさあはせのかちわさのとし侍けるに
をはすて山に月をのそむ人ある所に　藤原家經朝臣
久かたの月は一つをゝはすての山からことにみゆる成けり
水上月を　越後
月影のやとれる程は水の面に我心さへうつりぬるかな
題しらす　よみ人も
水や空そらや水ともみえ分すかよひてすめる秋のよの月
新院人々に百首歌めしけるに　藤原顯廣朝臣
石はしる水のしら玉數見えて清瀧川にすめる月かけ
百首の御歌中に　御製
よとゝもにちりたえせぬさひえにも移れる月はくもらさり覽

關路月といふことをよみ侍りける　左京大夫顯輔
あふ坂の關にしみつのなかりせはいかてか月の影をとめまし
前中納言師俊
播磨ちやすまのせきやの板ひさし月もれとてやまはら成らん
月閑中友といふことを　仁和寺宮
とふ人に思ひよそへてみる月のくもるはかへる心ちこそすれ
古鄕月をよみける　俊惠法師
故鄕のいた井のしみつみくさゐて月さへすます成にける哉
承曆二年內裏歌合に　大藏卿匡房
おほつかなこや有明の空ならむ夜ともみえすてらす月影
新院御時上のを〔こ脫歟〕ともに歌よませさせ給ける
に　右兵衛督公行
秋のよはひるにかはらぬ月なれはあくるも鳥の音にて社しれ
京極前太政大臣家歌合に　讃岐
秋のよはいとゝなかくそ成ぬへき明るもしらぬ月の光に
題しらす　増基法師
天の原遙にひとりなかむれは袂に月の出にけるかな
僧都最度
身のほともしられぬ物は秋のよの月になかむる心なりけり
大納言經信母
みる人の心は空にあくかれて月のかけのみすめる宿かな
藤原道經
秋のよの月に心をなくさめてうき身に年のつもりぬる哉
平經盛朝臣
さもこそは浮世にめくる月ならめ眺むるからに物そかなしき
九月十三夜德大寺のおほいまうち君の仁和寺堂に人きたり歌よみけるに　八條入道太政大臣
山のはにかゝ（かくイ）れは月のおしき哉わかよの秋もふけぬと思へは
月照草花といへることを　隆緣法師
いはれのゝちくさの花にみたれたる露もくもらぬ秋のよの月
題しらす　法性寺入道前太政大臣
風ふけは玉ちる萩の下露にはかなくやとるのへの月かな
白河院御時上のをのこともに旅中聞鴈といふことをよ
ませさせ給ひけるに　大藏卿匡房
夜を寒み伊せの濱おき分行はころもかりかね聞ゆなる哉
百首御歌中に　新院
鴈かれのかきつられたる玉すさをたえ〳〵にけつ今朝の朝霧
堀川
水のおもにかきなかしたる玉章はとわたる鴈の影にそ有ける
高倉一宮歌合に　さかみ
露むすふはきの下葉やみたる覽秋のゝはらにをしか鳴なり
藤原經衡
つまこふる鹿の心は秋萩の下葉をみてや色に成らん
旅宿鹿といふことを人にかはりて　仁和寺宮
宮城のゝ小萩か原にとまるよは鹿に宿かる心ちこそすれ
法性寺入道前太政大臣家にて鹿をところの名によ
せてよませ給けるに　源雅光
心からあたしのゝへにたつ鹿は妻さたまらぬ音をや鳴らん
題しらす　三宮
秋のよはおなしをかへに鳴しかの更行まゝにちかく成かな
大納言經信
秋ふかみ山かたそひに家ゐして鹿の音さやに聞はかなしき

惠慶法師

秋の夜のね覺かちなる山さとはまくらつとへに鹿のみそ鳴

新院人々に百首歌めしけるに　藤原季通朝臣

身のうさを思ふれさめの鹿の音は我さへ聲もおしまれぬ哉

白河院御時題をさくりて殿上の人々にうたよませさせ
給けるに朝霧をつかうまつりける　治部卿通俊

山里は霧立こめて人もなしあさたつ鹿のをとはかりして

住けるやまさとをたちてほかにしはし侍りてかへれる
に前栽とものいたうおれふしたりけるをみて　小辨

宿かれていくかもあらぬに鹿の鳴秋のゝ原に成にける哉

西山にすみける比さかのゝ花ともをおりて人のもとへ
つかはすとて　靜蓮法師

しかのねや心ならねは殘るらむさらてはのへをみなみする哉

かへし　西行法師

鹿のたつ野へのにしきのきりはらは殘りおほかる心ち社すれ

藏人所のをのことも前栽ほりにさかのへまかれりける
に　大中臣能宣朝臣

とし毎に大宮人のくるのへはさかのことゝや花もみるらん

續詞花和歌集巻第五　秋下

二條のおほき太后宮にて待草花心をよめる　修理大夫顯季

思ふとち露うちはらひみにゆかむ花のゝ萩のはやはさかなん

近對草花といふことをよめる　藤原伊家

あき山のふもとをしむろいへゐには末のゝ萩そまかき成ける

齋宮の野宮にて人々はきの歌よみ侍けるに　大藏卿匡房

秋の野の萩のにしきをきて見れは袖打ふらん道たにもなし

雨中野花といふことを　修理大夫顯季

雨ふれは思ひこそやれ露をたにおもけに見らしまのゝむら萩

雨夜思萩心を　藤原長能

濡々も明はまつみむ宮城野のもとあらのこ萩しほれしぬらん

法性寺入道前太政大臣家にて女郎花風にしたかふ
といふことをよみ侍りける　前治部卿雅兼

をみなへしなひくとみれは秋風の吹くるすゑもなつかしき哉

新院人々に百首歌めしけるに　前參議親隆

いそのかみふるからのへの女郎花なをいにしへのすかた成覧

堀河院の御時百首歌たてまつりけるに　肥後

みし人もあれ行宿の女郎花ひとり露けき秋のゆふ暮

題しらす　中納言經忠

なつかしくおほゆる物を女郎花いかに心を露のをくらむ

思野花といへることを　藤原資隆

ぬきかけしぬしはしられと紫の色むつましきふちはかまかな

藤原伊家

今はしもほに出ぬらん東路のいはたのをのゝしのゝをすゝき

房のまへなるすゝきを女のたちよりてみけれはよ
みける　よみ人不知

我宿にうつして後は花薄のへにならひて人なまねきそ
題しらす　藤原時房
雉子啼かたのゝみのゝ花すゝきかりそめにくる人なまねきそ
藤原孝清
われのみと思はし今は花すゝき行かふ人をまねく成けり
さかのにはな見にまかりて　道命法師
花すゝきまねくはさかとしりなからとゝまる物は心なりけり
野華隨風といへることをよみける　前齋院尾張
さためなき秋のゝかせになひきつゝかたみにまねく花薄かな
鳥羽殿前栽合に　前大藏卿行宗
花すゝきまねかさりせはいかにして秋のゝ風の方をしらまし
修理大夫顯季
秋風になひく薄としりなからいくたひのへに立とまる覽
前大藏卿行宗
物ことに秋のけしきはしるけれとまつ身にしむは荻の上風
題しらす
身のほとを思ひつゝくる夕暮に荻の上葉に風わたる也
堀河院御時百首歌たてまつりけるに　春宮大夫師頼
さらぬたに秋のね覺は有物をけしきことなるおきのうは風
題しらす　大貳三位
亂れたる名をのみそたつかるかやのをく白露をぬれ衣にきて
花山院歌合時露をよみ侍ける　和泉式部
玉かとてとれはきえぬる白露をゝきなから社みるへかりけれ
新院人々に百首歌めしけるに　堀川
はかなさをわか身のうへによそふれは袂にかくる秋のゆふ露
八月許に人のもとへつかはしける　藤原長能
日くらしの鳴夕暮そうかりけるいつも盡せぬ思ひなれとも
法性寺入道前太政大臣近衛の家の前栽にむしともをは
なちて侍けるをむしはなくやときゝにつかはしたりけ
れはかへりまうてきてなき侍よしを申けるにいかゝき
きつると侍りけれは　參河
年をへてきゝならせとも鈴虫の聲はふりせすめつらしきかな
三百六十首歌中に　曾禰好忠
虫のねそ草むらことに亂るなる我もこのよはなかぬはかりそ
野宮歌合にむしをよみける　但馬
淺茅生の露ふき結ふ木枯にみたれても鳴むしのこゑかな
三條おほき大いまうちきみ(賴忠)人々に歌よませけるに
草村のよるのむしをよみける　紀時文
秋ふかく成行よはのむしのねは聞人さへそ露けかりける
遠聞擣衣心をよめる　大藏卿匡房
ころもうつをちの里人きりふかみあるかなきかの聲聞ゆなり
僧都濟圓
秋の夜をね覺て聞は風寒みとをちの里に衣うつなり
堀川院御時百首歌たてまつりけるに　源俊頼朝臣
松かせの音たに秋はさひしきに衣うつなり玉川の里
題しらす　藤原爲業
住よしのこたかき松を吹風の音にそ秋は空にしらるゝ
堀川院御時百首歌たてまつりけるに　大納言公實
ふもとをは宇治の河霧立こめて雲ゐにみゆる朝日山かな
百首御歌中に　新院
秋の田のほなみもみえぬ夕霧にあせつたひして鶉なく也
題しらす　前大藏卿行宗

霧はれぬ山田の庵の夕されはいなはの風のをとのみそする
刑部卿範兼

をのつからをとなふ物は庭の面にあさちなみよる秋の夕風
源道濟

いにしへは身にしむ秋もなかりしを老ては物そ悲しかりける
秋のよのなかき心をよみ侍ける
藤原公重朝臣

つく〳〵とあけこそやられ秋のよは窓うつ雨の音はかりして
題しらす
大貳三位

遙なるもろこしまてもゆく物は秋のね覺の心成けり
ときはといふところにすみける比九月九日人のもとより花さかぬときはにはけふのきくもいかにつむらむなといひをくりて侍けれは
藤原爲忠朝臣

年ふれと匂ひかはらぬ花なれはきくはときはの物としらすや
籬菊如雪といへることを
前大僧正行慶

ゆきならは籬にのみはつもらしと思ひとくにそしらきくの花
題しらす
藤原孝善

かさせとも老もかくれす中々にしらかにまかふ白菊の花
鳥羽院御時菊めしけるに奉るとてむすひつけはへりける
花園左大臣北方

九重にうつろひぬとも菊のはなもとの籬を思ひわするな
殘菊をよみける
前大僧正行慶

人ならはつらからましを白菊のうつろふまゝになつかしき哉
上東門院菊合に
辨乳母

うすくこくうつろふ色もなく霜にみなしら菊とみえわたる哉
堀川院御時百首歌たてまつりけるに
藤原仲實朝臣

長月の時雨の雨やそめつらん正木のうはゝ紅葉しにけり
宇治入道前太政大臣もみち見侍けるに
小辨

君みると心しけりな龍田姫もみちのにしき色をつくせり
ものへゆくみちにさほやまのもみちのおもしろかりけるを見侍るをくれぬといそかしけれは
大中臣能宣朝臣

みぬときは思ひたにやるさほ山の紅葉のかけにけふや暮さん
紅葉をよめる
藤原長能

いつくにか駒をとゝめむもみちはの色なるものは心成けり
左京大夫顯輔

山姫にちへのにしきをたむけても散紅葉葉をいかてとゝめん
宗延法師

あらしふくかみかき山の麓にはもみちやぬさと散まかふ覽
落葉隨風といへることを
齋院中將

紅にやしほ染たるもみちはをおろす嵐のねにかへすかな
北白河にて人々もみちをよみけるに　よみ人しらす

なかれくる紅葉の色の深けれは淺きせもなししら河の水
障子繪にあれたる宿にもみち隙なくちりたる所をよめる
源俊賴朝臣

古郷は散紅葉葉にうつもれて軒のしのふに秋風そふく
齋宮の野宮に侍けるにさひしきたひれに何事をかおもふなと人のいへりけれは
辨乳母

木のはちる嶺のあらしに夢さめてなにことをかは思ひ殘さん
なか月ふたつありけるとしよみ侍ける
源兼昌

長月のふたつ有とは行秋をおしみとめたるむちこそすれ

九月盡日源頼賓か西山の家にて人々歌よみけるに

藤原範永朝臣

けふしもあれ小倉の山の麓にてまたき暮ぬる秋の空哉

九月つこもりにすゝきのかせになひくに露のこほるゝを見て

心覺法師母

とゝまらて暮行秋のつらけれはまねく薄の袖も露けし

前中納言師俊

草のははにはかなくきゆる露をしもかたみにをきて秋のゆく覧

よみ人しらす

秋はたゝけふのみと思ふ涙こそ一夜さきたつ時雨成けれ

刑部卿範兼

萩の葉にあすもふくへき風なれと秋の哀はこよひはかりそ

續詞花和歌集卷第六　冬

十月一日秋のなこりなきこゝろを人々よみけるに

源　涼　國

おしめとものへの草木は枯はてゝ露たに秋はとまらさりけり

冬のはしめによみける

津守國基

いつのまに空のけしきのかはるらんはけしきけさの木枯の風

白河院御時殿上の人々大井にまかりてあそひけるに紅葉浮水といふことをよみ侍ける

大納言經信

嵐ふく山のあなたの紅葉はをとなせの瀧におとしてそみる

治部卿通俊

紅葉はの散ぬる時は大ゐ川をとなせそ冬の木すゑ成ける

新院人々に百首歌めしけるに

藤原顯廣朝臣

まはらなる眞木の板屋に音はしてもらぬ時雨はこのは成けり

十月はかりによみ侍ける

馬　内　侍

ねさめして誰かきくらむ此ころの木葉にかゝるよはの時雨を

法性寺入道前太政大臣家にてしくれをよみ侍ける

源　定　信

音にさへ袂をぬらす時雨かな眞木のいたやのよはのねさめに

題しらす

僧都覺雅

秋はてゝとふ人もなき山里にをとはふ物はしくれ成けり

長閑寺にて山家冬の心を人々よみけるに

藤原宗國

しかの音も人もをとせぬ山里は秋より後そいとゝさひしき

山さとに侍りける人に十月許つかはしける

源頼定女

都たにさひしさまさる木からしに峯の松風思ひこそやれ

宇治にてよみ侍ける

中納言定頼

朝ほらけうちの河霧たえ〳〵にあらはれわたるせゝの網木

月照寒草といふことをよませ給ける

新院御歌

をみなへし月の光に思ひ出てをのかさかりの秋や戀しき

永承四年内裏歌合に

大中臣永輔朝臣

秋のみといかなる人かいひそめし月は冬こそ見るへかりけれ

冬の月をよみける

春宮大夫師頼

冬のよの雲吹はらふ木からしや月みる人の心なるらむ

前中宮亮季行

ふゆのよは衣手さむし大空の月のひかりやさえ渡るらん

曉千鳥をよめる

平忠盛朝臣

有明の月のてしほやみちぬらん磯つたひして千とり鳴也

題しらす　能因法師

夕されはしほ風こしてみちのくの野田の玉川ちとり鳴なり

藤原長能

川霧は汀をこめて立にけりいつく成らん千鳥なく也

紫式部

水鳥をみつのうへとやよそにみむ我もうきたるよを過しつゝ

仁和寺宮

谷河のふしきにねふるをしかもはつらゝのとこや寒けかる覧

百首御歌中に　新院

このころのをしのうきねそ哀なるうはけの霜よしたの氷よ

冬夜鶴のなくをきゝて　藤原道信朝臣

小夜更て聲さへ寒きあしたつはいくへの霜かをき増るらん

竹の葉にをける霜のとけて露のやうにておつるを見て　赤染衛門

たけのはに結へる霜のとけぬれはもとの露とも成にける哉

冬のころいとはけしくみゆる夜人のもとよりことなしひにこよひはまいりくへきかといひをこせて侍りけれはつかはしける　馬内侍

さゝのはに霰降よのさむけきにひとりはねなん物とやは思

百首御歌中に　御製

冬のよのさゆるにしるしみよしのゝ山の初雪今そふるらし

行路初雪をよみ侍ける　八條入道太政大臣

よな〳〵の旅ねの床に風寒てはつ雪ふれりさやの中山

京極前太政大臣家歌合に　藤原正家朝臣

旅人のしはすり衣うちはらひ拂もあへすけさのはつ雪

藤原顯綱朝臣

外山には柴の下葉も散はてゝをちの高ねに雪降にけり

治部卿道俊

をしなへて山のしら雪つもれともしるきはこしの高ね成けり

源俊頼朝臣

降雪に谷のかけはしうつもれて梢そ冬は山ちなりける

題しらす　隆縁法師

箸鷹のとかへる山に雪ふれはをのれさへこそしらふ成けれ

大納言經信

み山路にけさやいてつる旅人のかさ白妙に雪つもりつゝ

白河院御歌

跡もなく雪ふりつもる山路をは我ひとり行心ちこそすれ

大納言經信

みやまちを越行人はさむからし降しら雪をまくりてにして

旅のやとりのゆきをよめる　修理大夫顯季

松かれにおはなかりしき夜もすからかたしく袖に雪は降つゝ

後冷泉院御時雪ふれるあした皇后宮の御方にわたらせ給つるにすゝきに雪のふりかゝれるをおかしからせ給て御ともなる殿上人しておらせて下野にとらせよとおほせられけれは　下野

ゆきふれは咲ぬえたなくみゆれともおりからまさる花薄哉

題しらす　藤原公重朝臣

降雪に賤のふせやも埋れてけふりはかりそしるしなりける

坂上明兼

呉竹のおれふす音のなかりせは夜ふかき雪をいかてしらまし

大納言經信

朝戸明てみるそさひしき片岡のならのかれはに降るしら雪
藤原資隆
霜かれのまかきのうちに雪ふれは菊より後の花も有けり
源頼家朝臣
山家待春心をよみける
山さとに朝けの煙たな引を春にさき立霞と思はむ
天台座主明快
としのうちにさける梅をよめる
やま里のかきれの梅は咲にけりかはかりこそは春もにほはめ
藤原顯方
鶯の鳴ぬはかりそ梅花にほひは春にかはらさりけり
新院人々に百首歌めしけるに　藤原實清朝臣
暮て行としのすかたはみえねとも身につもりてそ顯れにける
歳暮のこゝろをよめる　前律師俊宗
一とせははかなき夢の心ちして暮ぬるけふそおとろかれぬる
さかみ
あはれにも暮行としの日數かなかへらんをはよのまと思へは

續詞花和歌集巻第七　賀

一條院御時冬の賀茂祭に藏人にて舞人して侍けるを返立に入道攝政おまへにさふらはせ給て祝歌つかうまつれとせめおほせられけれは申ける　源兼隆
よひのまに君をし祈りをきつれはまた夜深くもおもほゆる哉
前二條關白宇治入道前太政大臣(教通)の八十賀し侍けるとき杖の歌とてよませ侍けるによめる
藤原經衡
やちよまて契れる杖は百年にちかつく君か齢とそおもふ
貞元元年(圓融)初て齋宮侍從のくりやにおはしますに庚申夜人々まいりてあそひし歌よみけるに
源順
神代より色もかはらぬたけがはのよゝをは君にかぞへ渡らん
津の國わたりなることろ〔こころ歟〕にあからさまに侍けるころ故一品宮よりおほひかひめしたりけるをそのわたりのはわろかりけれは遠き所へたつれにやれりけるほとひさしくありてたてまつるとて　兵衛
君か代のなか井の浦によるかひはひろふ程さへ久しかりけり
知足院入道前太政大臣(忠實)わらはに侍りける時づくりたるとりたてまつるとてかきつけたりける
康資王母
身につもるとしに萬代とりそへてけふわか君にたてまつる哉
いはひのうたとてよみ侍ける　太政大臣
君か世は天のかこ山てらす日のてらむ限りは盡しとそ思
六十八
後一條院御いかのひよみ侍ける　入道前太政大臣(道長)
いかにいかゝ數へやるへき八千歳の餘り久しき君か御代をは
大貳國章かこむませて侍けるいかの日つかはしけるわりこの歌繪にかき侍ける　清原元輔
住のえに濱の眞砂のこけふりていはほとならん程をこそ思へ
小野宮右大臣うちつゝき子うませて侍けるに
年毎に祈りしくれはおもなれてめつらしけなき千世と社思へ
人のこうませて侍ける七夜によめる
千とせをは松とかめとにまかせつゝ八百萬世はいはて思はむ
女御御許にはじめて人々に歌よませ侍けるに藤花久匂

といふことをよめる　大江維光
咲初る若むらさきの藤のはな匂ひは千代の春もかはらし
新院御時藤爲松花といふことをうへのをのこともによませ給けるに　大納言公通
松かえにかゝれる藤か君か代は千世へて咲ける花かとそみる
大炊御門内裏のかたはらなる家にわたりてはしめて歌よみけるに鶴遐年をちきるこゝろをよみ侍ける　大炊御門右大臣
千とせともかきらぬ鶴の聲すなり雲ゐの近き宿のしるしに
みのゝかみにて神拜しけるにいつぬきかはをみ侍て　藤原基貞朝臣
鶴の住いつぬきかはをきてみれは千年をふへき流れ也けり
題しらす　權僧正永縁
松の上に住あしたつは君か代の千世をかさぬるしるし成けり
東三條院四十御賀の御屛風に人の家に雪ふるところに　源道濟
松のうへに降しら雪のかつ消て千世はかくれぬ物にそ有ける
周防守にてくにゝ侍ける時岩におひたる松をいはこめにとりて人のもてきたりけるに　清原元輔
萬代に千年をそへてみつるかないはほなからにひける小松に
人の家にうへける松のにはかにかれけるをほかひて人人歌よみけるに
ことはりや緑の松のかれぬるも君によはひをゆつりてしかは
題しらす　源道濟
千年ふる常磐の松もあまたゝひ君か御代にはおひかはりなむ
長保(一條)五年五月入道前太政大臣家歌合に池邊松をよめる　藤原長能
君か代のちとせの松のふかみとりさはかぬ水に影そみえける
源兼澄
すみわたる水の色たに有物を松さへちよをそふる宿哉
京極前太政大臣家歌合に　藤原顯綱朝臣
君か代は長井の濵のさゝれ石のいはれの山となりのほるまて
泉石歷幾年といふことを　前大宰大貳實政
さゝれ石も苔むすはかり成にけり幾千世すめるいつみなる覽
人の裳き侍ける所にて　清原元輔
玉もよるいはほの程に成にけりなからの浦の濵の眞砂は
中納言家成すみよしにまうてゝ人に歌よませけるに　家明卿
きみかため千世のためしにさせとてや波もおるらん住吉の松
二條のおほき太后宮にて月照松と云事を　源忠季
はかへせぬ松のこまよりもる月は君か千とせの影にそ有ける
賀陽院のきたのつほに秋の花ともうへられたりけるにこそはなたれける松むしのなくをおかしとて歌よめとおとゝの申侍けれは　肥後
千々の秋にあふへき宿の花園をすみかにしたる松むしのこゑ
新院御時法金剛院に御幸ありて歌よませ給けるに菊契千秋といふことをよみ侍ける　花園左大臣
八重きくの匂ふにしるし君か代は千年の秋をかさぬへしとは
阿波國司彼國の墨銘に山下松煙と云銘をつくり初ける日よめる　良暹法師
君か代にたてしそむれは山下の松の煙はいつかたゆへき

一院大甞會御屏風にかゝみ山のもとに月見たる人ある
所に　藤原永範朝臣
くもりなき鏡の山の月をみてあきらけきよを空にしる哉
今上大甞會歌ちきかの浦をよめる　前参議俊憲
君か世の數にはたらしかきりなきちさかの浦の眞砂なりとも
上東門院入道前太政大臣の六十賀せさせ給ける時院に
たてまつり給ける　入道前太政大臣
かそへしる君なかりせはおく山の谷の松とやとしをつまゝし

續詞花和歌集巻第八　神祇

上西門院かものいつきと聞えけるかはらせ給てからさ
きにはらへし給ける御ともにまいれりけるに女房のも
とへつかはしける　八條入道太政大臣
昨日までみたらし川にせしみそきしかのうら浪立そかはれる
そのかみ齋院におなしく侍ける人のいまの齋院に侍る
もとへみそきの日いひつかはしける　少將乳母
御祓するかもの河なみ立かへりはやくみしせに袖はぬれきや
祭のつかひに侍ける時神たちにて齋院の女房につかは
しける　藤原實方朝臣
千早振いつきの宮のたひねにはあふひそ草のまくら成ける
題しらす　源頼實
けふみれはかけてかへらぬ人そなきあふひや神のしるし成覧
夏神樂をよめる　多忠節
ゆふしては波にまかひぬ川社さかきそ神のしるし成ける
堀河院御時百首歌たてまつりけるに　河内
榊とる庭火の前にふる雪をおもしろしとや神もみるらん
神樂の心を　藤原政時
朝倉のこゑこそ空に聞〔ゆ歟〕になれあまの岩戸も今や明らむ
おもふこと侍ける比かもにまうてゝよみ侍ける　大納言道綱母
ゆふ襷むすほゝれつゝなけくことたえなは神のとくと思はむ
かたをかのやしろにかきつけたりける歌　よみ人不知
かたをかと人はいへとも我はたゝ高き山ともたのまるゝかな
たゝすのやしろのはしらに女のてにてかきつけたりけ
る歌
千早振神にまかせてこゝろみむ種もなき名はおふやおひすや
後三條院すみよしにみゆき給て人々歌たてまつりける
に　治部卿伊房
いにしへもけふのみゆきの爲とてやあまくたりけむ住吉の神
中納言家成すみよしにまうてゝ人々歌よみけるに　参議隆季
神代よりつもりのうらにみゆきしてへにけむ年の限しられす
すみよしをはなれてとしへて奉幣使にてくたれりける
にむかしすみけるか家のあれたるを見てよみ侍ける　津守有基
住よしと思ひし宿はあれにけり神のしるしをまつとせしまに
一條院の一品宮(大歟)天王寺にまうて給けるに御ともの
人々すみよしにまいりて歌よみけるに　藤原道經

すみよしの濱松かえに風ふけは浪のしらゆふかけぬまそなき

新院人々に百首歌めしけるに　藤原顯廣朝臣

いくかへり浪のしらゆふかけつらん神さひにけり住吉のまつ

廣田社にて社頭紅葉をよみける　源　忠季

神のますもりの下てる紅葉々の色もてはやすあけの玉かき

白川院熊野へまうてさせ給ける御ともに侍りてしほやの明神のおまへにて人々うたよみけるによみ侍ける

德大寺左大臣

立のほる鹽やの煙うらかせになひくを神の心ともかな

後三條内大臣

おもふ事くみてかなふる神なれはしほやに跡をたるゝ成けり

かし井の宮の杉をよみ侍ける　讀人不知

千はやふるかしゐのみやのあや杉は神のみそきに立る成けり

題しらす　大僧正覺忠

光をはやはらけなからいかなれはあらふる神と跡をたるらん

惠慶法師

たきせとは思はさらなむわたつみの波の心は神もしるらん

待賢門院后宮と申ける時女房のきぬのうせたりけるをあるつほねなる女房あやしきさまにいはれけるきたのの宮にこもり侍ける御前のはしらにかきつけゝる

思ひいつやなき名をたつはうかりきとあら人かみも有し昔を

此のゝち程なくあらはれにけりとなん申

やまとのかたよりくまのへまうてけるにかすかへまいるへきよしの夢をみたりけれとのちにまいらむと思ひてすきにけるに還向はそのわたりにてあやしのけす女にかすかのつかせ給ておほせられける

人しれす今や〳〵とちはやふる神さふるまて君をこそまて

御返しに申ける　堀　河

三笠山さしもあらしと思ひしを天くたりぬるけふこそはしれ

つくるとも又もやけなんすか原やむれのいたまのあはぬ限は

ある人この歌は一條院御時内裏のやけたりけるをつくられけるあひた御殿のうら板にむしのくへりける北野の御歌となん申

續詞花和歌集巻第九　哀傷

後一條院御時中宮うせさせ給にける後おまへの花のちるを見てよみ侍ける　左大辨經頼

花よりも昔の人そこひらるゝいつれの春もあはしと思へは

ぬしなき家のさくらをみて　藤原範永朝臣

うへをきし人のかたみとみぬたにも宿の櫻はたれかおしまぬ

題しらす　道命法師

思ひきやよははかなしと云なから君かかたみに花をみむとは

二條院かくれさせ給ひて又のとし彼院のはなをみてよめる　源　道濟

櫻花みるにもかなしなか〳〵にことしの春は咲すそあらまし

前坊かくれさせ給ひて御はてすきて人々行わかれけるあしたひたちの乳母もとにつかはしける

前大僧正行尊

思ひきや春のみや人なのみして花よりさきにちらんものとは

かへし

花よりもちり〳〵になる身をしらで千歳の春とたのみける哉　常陸乳母

やよひのころほひ人におくれてなげきける人にやりける　成尋法師

花さくらまた盛にて散にけむなげきのもとを思ひこそやれ

服に侍ける時かすみによせてむかしを思心をよみ侍ける　賀茂成助

朝な〳〵野への霞をながめつゝけぶりになりし人をこそ思へ

おほいまうち君かくれ侍りて又のとし鶯のなくをきゝてよみ侍ける　花園左大臣北方

こその春鳴つくしつと思ひしによをうくひすのね社かはられ

子にをくれて侍ける比かへる鴈をきゝてよみ侍ける　大夫典侍

古郷へ鴈そ行なるかなしきは又もかへらぬわかれ成けり

おさなきこのうせにけるかうへをきたりけるさうふをみ侍て　賀陽院木綿四手

あやめ草たれしのへとかうへをきて蓬のもとの露と消けむ

故一品宮かくれさせたまひての比五月五日人のもとへつかはしける　兵衛

けふくれとあやめもしらぬ袂かな昔を戀るねのみかゝりて

みな月の比ほひ東山に人の四十九日のわざしける所にまかれりけるにほとゝきすのいたく鳴ければ　平實重

かなしさのはてと聞てや郭公かぎりのこゑを爰にしも鳴

近衛院のみわざのよ藏人にて侍りしことをおもひてまいりておかみたてまつりてかへるとてものにかきてみさゝきのかたはらにたてける　能因法師

思ひきや虫のねしげき淺茅生に君をみすてゝかへるべしとは

小野宮太きおほいまうち君みまかりて後かの家にて人人歌よみけるに　清原元輔

君なくてゆく〳〵しげる庭草に鳴むしよりも我ぞかなしき

郁芳門院かくれさせ給て次年藤原知信がもとより秋はつきぬとおもひしに今しも虫のねにそながるゝなと申て侍けるかへしに　康資王母

むしのねはこの秋しもぞ鳴まさる別のとをくなる心ちして

赤染むすめにをくれて侍けるのちあきのころ彼家にまかれりけるになき人のすみけるかたのせむさい色々にさけりけるを見ていひいれ侍ける　藤原義忠朝臣

うへをきし人は露よりあだなれど花ぞむかしの秋にかはらぬ

近衛院かくれさせ給にけるころうへさせ給たりける菊を見て　大僧正覺忠

よはひをは君にゆづらでしら菊のひとりをくれて露けかる覽

一條院をいはかげにおさめたてまつりて侍けるを物へまかりけるにかしこをすくとてみさゝぎにまいりておかみたてまつりけるにかなしき心しければかへりて人にいひつかはしける　式部大輔資業

いはかげの霧をけふりにまがへつゝその夕暮の心地せしかな

一條院うせさせ給へりける比月をみてよみ侍ける　承香殿女御

大かたにさやけからぬか月かげは涙くもらぬ人にとはゞや

源爲善朝臣身まかりにける又の年月を見て

命あれはことしの秋も月はみつわかれし人にあふよなきかな

あひ具したりける女なくなれりけるとき月をみてよみ
侍ける　藤原有信朝臣

もろともに有明の月をみし物をいかなるやみに君まとふらん

子にをくれてなけき侍りける比こゝゐの庄といふ所よ
りくたものたてまつりけるにあをきかへてのはをし
たりけるをみて　よみ人しらす

色かへてときはなからに有物はこゝゐのもりのなけき成けり

この思ひに侍ける人のもとへとふらひにつかはすとて　仁和寺一宮母

人しれぬこゝゐのもりの夕霧にぬるらん袖を思ひこそやれ

修理のかみ忠能身まかりてのち秋のゆふへ思ひいつる
ことや侍けむよみ侍りける　藤原長成朝臣母

いにしへをこふる涙もひまそなき露をきそふる秋の夕暮

播磨守顯保朝臣身まかりにける時かの朝臣のすみける
女のもとにつかはされける　新院御歌

聞にたに露ところせき古郷の淺茅かうへを思ひこそやれ

女にをくれて侍けるころ　祝部成仲

秋風のみにしむはかり悲しきは妻なきとこのね覺成けり

待賢門院かくれさせ給て五十日はてゝも女房たちはゆ
きちらてはへるにやはたの行幸ときこゆる日雪のふれ
るにとき／＼まいる人もみえさりけれは三條の內の大
いまうち君の別當といひけるとき院の大盤所よりとて
この家にさしをかせ侍ける　堀川

誰もみなけふのみゆきにさそはれて消にし跡をとふ人そなき

齊信卿のわさのよゝみける　高階經章朝臣

しるしらぬ世に有人のはてみれはたゝひとゝきの煙なりけり

人をとかくしけるを見て　僧都懷壽

はかなさを哀とそみる大空のけふりとなるも人のうへかは

道信朝臣身まかりにける葬送りのあしたに　藤原賴孝

思ひ侘きのふの空をなかむれはそれよとみゆる雲たにもなし

なき人のわさしける導師にて諷誦文よみけるに歌の侍
けれは高座よりおるとていひける　慶範法師

うちならす鐘の音にや長きよも明ぬなりとは思ひしる覽

村上のみかとかくれ給にける御忌のほとにれいならぬ
こと侍りてよみ侍ける　齊宮女御

をくれてもこえける物をしての山さき立ことをなに恨みけむ

子にをくれてよみ侍ける　高丘賴言

人のうへときゝこし物をしての山わかこの道に迷ひぬる哉

子なくなりて侍ける比おなし思ひ成ける人につかはし
ける　橘則光朝臣

かたらはやこのよの夢のはかなさを君はかりこそ思ひ合せめ

おやにをくれて侍をとはさりける人の叉おやなくなり
にけれはいひつかはしける　權僧正永緣

我身にてならはさりせは歎くらん人の思ひをいかてしらまし

母の思ひにてよめる　顯昭法師

たらちねやとまりて我をおしまゝしかはるにかはる命也せは

待賢門院かくれさせ給て四十九日のみわさはてゝまい
りこもれる人々まかてあへりけるに兵衛におほせこと
ありける　新院御歌

限りありて人はかた／＼別るとも淚をたにもとゝめましかは

返し　　兵衛
ちり〳〵に別るゝけふの悲しさに泪しもこそとまらさりけれ
子なくなりて侍けるに元輔かとふらへりけるかへりことに　　源順
朽はてゝなきこのもとは君かとふ言のはみるもまつそ悲しき
身まかりにける女のせうそことも侍りけるをみてよめる　　大納言公通
かきつめしことのはのみそ水茎の流れてとまるかたみ成ける
やむことなき人にゆめはかりにていとゐたうしのひけれは又みあはて過ける程に此人身まかりにけれは
源重之
思ひいてのかなしき物は人しれぬ心のうちのわかれなりけり
もの申けるをんな身まかりて三七日許になりけるにかの家につかはしける　　大蔵卿匡房
かはるらん月日もしらす歎くまにあはれはつかに過にける哉
かたらひけるわらはおもはすにてうとく成にけるなくなり侍にけるを人のもとよりとふらへりけれは
静嚴法師
かなしさを是よりけにや思はましかれてならはぬ別れ成せは
能因身まかりにけるに女のもとへいひつかはしける
藤原兼房朝臣
ありし世はしはしもみてはなかりしを哀と計いひてやみぬる
ふくに侍けるときあるよ人のきたれりけるかすみそめのけさをわすれてとりにつかはしたりけれはやるとて
天台座主勝範
墨染の色はいつれもかはらぬをぬれぬや君か衣なるらん

後三條院かくれさせ給へりけるころよみ侍ける
藤原顯綱朝臣
かはくよもなき墨染の袂かなくちなは何をかたみにもせむ
美福門院の御ふくにて侍けるを宣旨にて程なくぬき侍とてよめる　　大納言雅通
心さしふかくそめてしふち衣きつゝひかすのあさくも有かな
をむなのふくにてよみ侍ける　　民部卿長家
きしよりもぬくそかなしき君か為そめし衣の色と思へは
下﨟にこえられてこもれりける比又あひ具せる女身まかりにけるをやむことなき所よりとはせ給へりける御かへりことに申侍ける　　右兵衛督公行
をしなへて常なきよとはしり乍ら浮身のとかになしそ果つる
をんなにをくれて侍る比肥後かとひて侍けるに
藤原基俊
思ひやれむなしき床を打はらひ昔を忍ふ袖の雫を
あひしれりけるおとこの身まかりにけるをいかにおもふらんなと人のとひ侍けれは　　中宮内侍
めのまへにかはるはうきに慰めつさらぬ別そかなしかりける
はりまのかみに侍ける時杢権頭兼任をくにゝとゝめをけりけるくだるたひにはいつしかいてきけるを身まかりにける後まかりくたりてよめる　　藤原兼房朝臣
いつしかと思ひ顔なるけしきにてまつこし人のみえぬたひ哉
土御門前齋院かくれ給てほとへてかの院にまいりて侍けるに堀河院前齋院あひつきてすみ給けれはなにこともかはらぬさまには侍れとむかしおもひいてられ侍けれは女房のもとへいひつかはしける　　中院入道右大臣

ありすかはおなしなかれと思へ共昔のかけのみえは社あらめ

はゝのはかにまかりてそとはにかきつけゝる　新院上野

はかなくてやみにし跡の形身にも是をそゝとはみるへかりける

贈皇后宮かくれ給にけるあとに御ものゝくともとりおさめけるにつれにつかはせ給ける硯のはこにかみにかきてをかせ給へりける歌

胸にみつ思ひをたにもはれすして煙とならむことそかなしき

日ころなやみけるをんなにはかにたえいりてしにけれは父母願をたてゝわかいのちにめしかへよと泰山府君に申けるほとにいきいてゝこのむすめのよみける

しての山こゆへきかたもおもほえす親に先たつ道をしられは

大貳高遠身まかりにける跡に子息の夢に蛇道になんおちたるとてよみけるうた

おく山の行衞もしらぬ谷底に哀いく世をすきんとすらん

木幡僧正靜圓身まかりて後上東門院の御夢にかの人の歌とてあまた侍ける中に

あたにして消ぬる身とや思ふらん蓮の上の露そわかみは

あるをんな物いふおとこの身まかりにけるをわつらひける比とはさりしことをくやしくおもひてねたりけるゆめにかのおとこのよみける

思ひ出てのちに哀といふよりも限のおりそとはゝとはまし

藤原定通身まかりてのちとしへて人の夢に月あかきよ殿上になむ侍とてよみける

古郷をわかれし秋をかそふれはやとせになりぬ有明の月

續詞花和歌集卷第十　釋敎

人々行願寺にて勸學會をこなひて序品の入於深山といふ文をよみけるに　藤原仲實朝臣

鳥の音もきこえぬ山に來れともまことの道は猶遠き哉

未嘗睡眠のこゝろをよめる　源季廣

むかしよりまとろむこともなき物をいかて浮世を夢とみる覽

譬喩品　權僧正永縁

心をはみつの車にかけしかとひとつそのりのためしにはひく

藥草喩品終歸於空といふ心を　仁昭法師

草もかれ木も朽はてゝ空しきはもとのふるにかへる成けり

弟子品　近衞院御歌

年ふれとかけてそしらぬ衣手に逢はかりなきたまもたりとは

提婆品　僧都覺雅

千年まて結ひし水も夢はかりわかみのためと思ひやはせし

寂然法師

何となく涙の玉やこほれけむみねのこのみをひろふ袂に

壽量品　朝日尼

あかなくに雲かくれぬとみし月の鷲の嶺にはすまぬよそなき

勸嚴品　覺然法師

よそにては匂ひにあかぬ花なれは散このもとを尋てそくる

懺法をこなひけるついてに人々思惟此經といふことをよみけるに　藤原家經朝臣

思ひ出て心のやみしはれぬれは雲かくれにし月もみえけり

左京のかみ顯輔和歌曼陀羅といふものかきて供養しける日法華經の歌人々によませけるに無量義經をよめる

さま〳〵になかるゝ法の水なれとその水上はひとつなりけり

普賢經の我心自空罪福無主といふ事をよめる　寂然法師

かつまたの池の心はむなしくて氷も水も名のみ成けり

心經のこゝろをよめる　大宮小侍從

色にのみそめし心のくやしきをむなしとゝける法そうれしき

寶篋印陀羅尼經を供養して極樂へまいるへき心を人々よみけるに　よみ人不知

けふひらくたからのはこのをして社西へ行へきしるし成けれ

維摩經に此身如水泡といふことを　前大納言公任

爰にきえかしこに結ふ水の泡のうき世にめくる程そはかなき

この身いなつまのことし

稲妻の照す程にはいつるいきのいるを待まもかはらさりけり

此身如夢　赤染衞門

夢や夢うつゝや夢とわかぬかないつれの世にかさめむとす覽

淨名居士　新院御歌〔こ歟〕

汲てとふ人なかりせはいかにして山井の水のそらをしらまし

櫻炭經のこゝろを　如覺法師

たのむより月のねすみのさはくまに草葉にかゝる露の命を

極化鹿苑　新院御歌

耳近く鹿のそのにてとく法にかつ〳〵かりのよをはいてにき

先昭（照歟）高山

朝日さすみねのつゝきはめくめ共また霜ふかし谷のかけ草

法身如來のこゝろを　花山院御歌

思へともたとひはかりはなき物を我さとりてやしらはしる覽

題しらす　山口重如女

極樂の蓮のはなのうへにこそ露の我みはをかまほしけれ

人のもとにて佛供養しけるあいた雨のもりて袂にかゝりけれは禮盤よりおるとてよみ侍ける　瞻西上人

いにしへを尋てもきく今もみるもろもろやはのりのかたき成けり

天王寺の龜井を御覽して　上東門院

濁りなき龜ゐの水を結ひあけて心のちりをすゝきつる哉

天王寺にまうてゝ舍利おかみたてまつるとてよみける　瞻西上人

薪つき煙もすみてさりにけるこれやのこりとみるそ悲しき

かまくらの涅槃會にまいりてよめる　成尋法師

かなしさとたきゝつきけむその人そ昔に今もかはらさりける

瞻西上人釋迦講をこなひけるに人々さゝけ物に歌をそへてをくりけるにひとへをやるとて　神祇伯顯仲

夏衣のりのためにとぬきつれは今日はすゝしき身とそ成ぬる

雪中古寺といふことをよめる　覺延法師

ゆきふれはちかひたのもし初せ山かれたる木にも花咲にけり

智縁聖人はゝきの大山に參りけるいてなむとしけるあか月の夢にみえけるうた

山ふかく年ふる我もある物をいつちか月の出て行らむ

肥後涅槃經よみける比夢に十餘歳はかりなりけるわらはのかみにかきてとらせける

春風に池の氷もとけにけり花吹ちらす春のよの空

夢のうちに返しける　肥後

谷河のなかれしきよくすみぬれは隈なく月の影もうかひぬ

まつしき女のきよ水にとし比まいりける御前になくなくふせりけるゆめに御帳のうちよりちいさきそうのいてゝよみかけゝる

梅の木のかれたる枝に鳥のゐて花さけ〳〵となくそわりなき

中比ある僧の夢にいときよけなる僧三人いきあひてよみける歌一人は

あはれなり一人僧ひはくれかたになりぬれと又一人僧西へゆくへき人のなきかな

續詞花和歌集卷第十一　戀上

女のもとにつかはしける　藤原惟成

うらわかみ荻のしたはにをく露をさもほのめかす風のなき哉

題しらす　隆恵法師

しらせはやしけき人めを忍ふ草下葉に結ふ露はかりたに

内裏百首歌に忍ふる戀をよみ侍ける　源通能朝臣

いさゝらはほのめかしてむと計も心にのみそいひあはせつる

題しらす　三宮

いかにせむ心を人にそめなから色に出しとしのふ比かな

賢知法師

いつしかと色にいてしと思へ共みゆらん物をたへぬけしきは

物申ける女のはらからなりける人につかはしける　能因法師

色にこそいつとなけれと紫の一もとゆへにおもひそめてき

人しれす心さし侍りなからえしもいひいてゝすきける女のまきものをかゝせ侍りけるおくにかきつけ侍ける　藤原伊行

あちきなしさてしもやまし思ふこといひ出て社身をも恨みめ

内裏百首歌に忍戀をよめる　藤原重家朝臣

つらからむ時社あらめあちきなくいはて心をくたくへしやは

女の許に初て遣しける　賀茂成助

思ふこといひたにいてゝ戀しなは誰ゆへとかは君かきかまし

題しらす　源明賢朝臣

歎くあまりしらせそめつる言のはも思ふ計はいはれさりけり

藤原季經朝臣

思ひあまり色に出ぬる言の葉はちるとも何かくるしかるへき

堀川

おもふともいはゝなへてに成ぬへし心のうちを人にみせはや

藤原賴保

しろらめや今こそ人を水の面に物思ふ橋をわたしそめつる

内裏百首歌にはしめの戀のこゝろをよめる　源雅重朝臣

我戀は岩まをくゝる山水のもらすにつけて袖そぬれける

獨ゐたるをみてこふといふことをよませ給ける　御製

人はみなさよ更ぬとて入にしを曉までに月みしやたれ

女のかみをうちやりてねたるを見つるにやらんとて人のこひければ　藤原經衡

いとゝしくみたれて物を思ふ哉ねくたれ髪をみつるけさより

一院山にのほらせおはしましたりける御ともにはへりけるにそうとものを具してもの誦せさせけるわらはの心

にかゝりておほえけれは房を尋ていひつかはしける　參議隆季
君ゆへに思ひ入ぬるみ山への たにの心はふかきとをしれ
殊外に思へりける女に　平　兼盛
谷ふかみ燒炭かまの煙たに峯の雲とはならぬものかは
戀の心を雲に寄てよみ侍ける　德大寺左大臣
一めみし人は誰ともしら雲のうはの空なる戀もする哉
女の琴ひきけるをきゝてよませ給ける　御　製
ことのれにかよひそめにし心かな松ふく風にあらぬ身なれと
人の女のおさなきをかたらふにまた手もかゝすとてか
へりこともせさりけれは擧周朝臣にかはりて　赤染衞門
和歌の浦の鹽まにあそふ濱千鳥ふみすさふらん跡なおしみそ
女のもとにつかはせる文を返したりけれは　よみ人しらす
とゝろきの橋も渡りてこゝろみきまた踏かへす人はなかりき
題しらす　藤原雅親
よとゝもにむすほゝれたる我戀や野中にたてる岩代の松
　源　親房
物をこそ忍へはいはね岩代のもりにのみもる我なみた哉
雨ふる日しのひたる人のもとに　堀河右大臣
人しれす物思ふ比の袖みれは雨ともしらすなみたともなし
堀川中宮の內侍に物いふほとあめのふりかゝりけれは　少將藤原義孝
わひぬれはつれなしかほはつくれ共袂にかゝる雨のわひしさ
題しらす　大納言雅通
よとゝもに人めをつゝむ身なれともおちゝる物は淚なりけり
　馬　內侍
人とはゝいかゝこたへむ泪たに心してやは袖をぬらさぬ
　前治部卿雅兼
かゝりける淚と人もしるはかりしほらし袖よくちはてねたゝ
　隆緣法師
日數へはいかにせよとて我戀の昨日にけふはまさるなるらん
　神祇伯顯仲
物おもふといはぬはかりは忍ふともいかゝはすへき袖の雫を
內裏百首歌に忍戀のこゝろをよめる　藤原重家朝臣
玉藻刈いせをの蜑の袖ならはぬるとも人はとかめさらまし
新院人々に百首うためしけるに　堀　川
荒磯の岩に碎る涙なれや難面人にかくるこゝろは
たはといふ人にものいふときくおとこの又ふみをゝこせけれは　皇嘉門院近江
いかなれはおほえの山をこえなからしかの浦波思ひかくらむ
人に物かたりしてあかしたるあしたによるの名殘のなみたになといへりけれは　下　野
何ゆへに夜の泪とかけつらんわかぬれきぬになりもこそすれ
堀河院御時艷書歌殿上人々にめしてうたよむ女房とものもとへつかはしけるに　民部卿忠敎
つらさには思ひたえなんと思へともかなはぬ物は泪なりけり
返し　肥　後
うけひかぬあまのを舟のつなて繩たゆとて何か苦しかるへき
新院人々に百首歌めしけるに　堀　川

逢事のなけきのつもるくるしさをおへかし人のこりはつる迄
せうそこつかはしける女を人にときゝてふつきの七日
つかはしける　源　雅光
よとゝもに戀わたれとも天川あふせは雲のよそにこそきけ
戀のこゝろをよめる　藤原顯方
わか戀は年ふるかひもなかりけりうらやましきは宇治の橋守
藤原爲具
はかなしや思へはかりの世中に戀をのみしてあかしくらすよ
加賀左衞門
筑波山なとつく〳〵と我身しも戀することのふもとなりけむ
朝光大將の五節所にてみ侍りける人につかはしける
前大納言公任
天津空豐のあかりにみし人のなを俤のしゐて戀しき
入道一品宮なる女の五節のわらはにて侍けるを見て後
につかはしける　平經章朝臣
雲の上にひかけかさしゝかひもなく山井の氷とけてやみにし
返し　女
ゆきすりに山ゐの氷とけたらはかはす日影もまはゆからまし
ある所にあはちといひける女のせうそこすれとかへり
ことをいはさりけれは　左京大夫顯輔
いかにせむとふひも今はたてわひぬ聲もかよはぬあはち嶋山
題しらす　藤原季通朝臣
歎きあまるうき身そ今はなつかしき君ゆへ物を思ふと思へは
百首御歌中に　新院
戀しなは鳥とも成て君かすむ宿の梢にねくらさためん
題しらす　左京大夫顯輔
いはれ共したはいとなし鴬とりのうきたる戀と思はさら南
大納言公實
鳴海潟しほちにあそふかも鳥のうきれは我もおとりやはする
大宰帥俊忠
我戀は海士のかるもにみたれつゝかはく時なき浪のした草
花園左大臣
便あらは蜑の釣舟ことつてむ人をみるめにもとめわひぬと
源　賴政
せきかぬる涙の川の早きせは逢よりほかのしからみそなき
よみ人不知
瀧つせは音にそたゝし戀すれは枕におつる涙なりけり
よな〳〵の枕の下にたつ波はとこの浦よりよする成へし
藤原惟規
たのめとや否とやいかにいな舟のしはしと待し程はへにけり
藤原賴保
いかならむ言の葉にかは靡くへき戀しといふはかひなかりけり
平　兼盛
ことのはゝ色やはみゆるこ紫深きこゝろはれそめてそしる
藤原行宗
今見てむかくいひ〳〵て戀しなは身にかふはかり思ひけりとは
藤原長方
戀しなむ同し浮名をいかにしてあふにかへつと人にいはれん
十月はかり人にかはりて女のもとへつかはしける
霜かれの野へにあさ吹風の音の身にしむはかり物をこそ思へ
こゝろかけたりけるわらはのふみをかりて侍けるつか
はすとて　天台座主忠尋

ふみわけてかゝるはかりに成にけり物思ふ人の宿のにはくさ

寄草花戀のこゝろを　藤原爲眞

あたなりといはれのゝへの女郎花なと我にしもなひかさる覽

法性寺入道前太政大臣戀の心をはなによせて人々によませ侍りけるに　源雅光

吹かせにたえぬ梢の花よりもとゝめかたきは涙なりけり

題しらす　華山院御歌

夜もすから消かへりつる我身かな涙の露にむすほゝれつゝ

信宗法師

つれなさを思ひしらすはなけれとも我とはいかゝ人を忘れむ

續詞花和歌集巻第十二　戀中

題しらす　源實基朝臣

思はむと頼めなからに難面きはつらきにまさる物にそ有ける

藤原親佐

たのめすは今は命も絶なましいけるや人のなさけ成らん

小辨

なをさりの空たのめたにせさりせは中々今はこひもしなまし

ふみをかくす戀のこゝろをよめる　藤原爲眞

こひしれとかきてもあらん玉章を人めにつゝむ程そわりなき

戀をふちのはなによせてよみけるに　祝部成仲

藤浪のよるとたのめし言のはを松にかゝりてひをくらすかな

新院人々に百首歌めしけるに　大炊御門右大臣

さよ衣露のへたてはなけれ共身を分てこそいらまほしけれ

題しらす　讃岐

明ぬれとまたきぬ／＼になりやらて人の袖さへぬらしつる哉

藤原長能

わかくさのいもかきなれの夏ころもかされもあへす明る東雲

さかみ

人のいてにける跡をなかめて

人もゆき月も入ぬる明ほのゝ名殘の空そなかめられける

後の朝の戀のこゝろをよめる　高松院衛門佐

戀しさは逢につけてそまさりける昨日はけさの心地やはせし

仁和寺宮にて人々後朝戀心をよみけるにわらはにかはりてよませ給ける　宮

かへりつるその曉に又ねして夢にこそみれあかぬ名殘を

新院人々に百首歌めしけるに　堀河

なかゝらむ心もしらす黒髮の亂てけさは物をこそおもへ

こゝろならす人にしたしくなりて　和泉式部

これも又さそなむかしの契りそと思ふ物からあさましきかな

題しらす　法性寺入道前太政大臣

朝ねかみわかつけそむる手枕のたはとな人にかたりきかせそ

たひなるところにて物いへりける女のもとへあさかほにつけてつかはしける　大藏卿匡房

草枕ねくたれかみをかきつけしそのあさかほの忘られぬ哉

三條式部卿宮のものゝたうひける女を忍ひてあひしれりけるきこえなはひむなかるへしとてあひかたく侍けれは　藤原正家朝臣

宮城のゝもとあらの萩の盛にはひとりのみやは行てみるらん

ひるなりともたちなからなと申ける女をよるをまてといひける女に　津守國基

逢ことをひろはなきさにあさりかれあまの釣舟よるを社まて

侍りける人々のこひの歌よみけるに人にかはり給て　仁和寺宮

逢みても思ふはかりはいはれぬに色に出ぬる袖そうれしき

題しらす　新少將

こりすまに幾度とこを拂ふらんたのめてこぬは今宵のみかは

大輔

たのめつゝまてとこすゑのうす紅葉こやかれそむる初成らん

俊惠法師

わきもこをかた待よひの秋かせは荻の上葉をよきてふかなむ

大宮小侍從

待宵に更行かねのこゑきけはあかぬ別れの鳥はものかは

讃岐

一夜とてよかれし床のさ莚にやかてもちりの積りぬる哉

藤原範綱

あかすのみ夢の枕をかはすよのさむる別にゝる物そなき

僧都覺雅

夢にこそあはてもあらめから衣きなれし裏はいかゝかへさむ

はやうみ侍りける女内わたりにありときゝて五節のころつかはしける　藤原惟成

けふかさす神のいかきのたまひかけ昔のあとを尋てそくる

むつましくなりて又つれなかりける人をおとろかすとて　讀人しらす

逢みてし人ともさらに思はれは今いひそむる心ちこそすれ

もと見たりける女に程へてわりなくしてあひてあしたにつかはしける　藤原實方朝臣

いそのかみふるきみちとは知なからまとふ計そけさは戀しき

三百六十首歌中に　曾禰好忠

あれはありとなけしのよそにみし人を秋風吹はそれそ戀しき

もの申ける女おやにくして遠き所へまかりにけるか春になりてかへりまうてくへきいかゝおもふと申をくりて侍けるかへりことに　平經盛朝臣

思ひやれ雪のした草むすほゝれとくる春まつ程の心を

かたのゝわたりにかよふ女に物申けるか常はかしこにのみ侍けるか京に上りて侍ける又くたるとて此たひは程なく歸りくへきよし申けるに遣しける

中原師尙

いさしらすかりにときけと逢事の又かたのにやならんとす覽

かたらひける人のいつちともしらせてうせにけるほとにあからさまに人のくにへまかるとてそのしんそくなる人にもしあり所きこえはつてよとてせうそこをあつけてくたりける後たよりにつけてかの人に見せよとおほしくて又つかはしける　顯昭法師

武藏のゝ草のゆかりをかき分てふみをきてこし跡をたにみよ

ふみかよはす人内わたりにもらすときゝてつかはしける　大貳三位

露たにももらさしとおもふ言のはを嶺の嵐にまかすへしやは

題しらす　よみ人も

いかはかりとはぬ人めを歎かまし忍はぬ中のかゝらましかは

忘るなといふにつけてそ頼まれぬさはさる事の有かと思へは

つれにとちきれる人のさもあらさりけれは　越後

味氣なくとはぬにしもそ頼まるゝ思はぬ事をせぬかと思へは

冬夜戀　僧都覺雅

唐衣きみかきまさぬ冬のよにかさぬる物はうらみ成けり

百首御歌中に　新　院

から衣かされしよはの手枕につけくるしはをかたみとそ見る

題しらす　大納言公實

わきもこにあはぬよさむや蓮葉のうきはかしたの鴛の獨れ

藤原惟規

思ひやれつらゝひまなき裏の池につかはぬをしの夜の浮ねを

源　重之

霜の上にけさふる雪のさむけれはかさねて人をつらしとそ思

參川内侍

おもひやれ秋のよすからね覺してなけきあかせる袖の雫を

齋院帥

あた人にあひそめかはをわたらすは心つくして思ひせましや

忍ひてあひかたらふ女のつねはこゝろさしなしとえん
し侍けれは　前中宮亮季行

君にのみしたの思ひはかはしまの水の心はあさからなくに

堀河院御時けさうふみの歌とも殿上人によませて歌よ
む女房とものもとへつかはしけるを大納言公實は康資
王母の許へつかはせりけるに又周防内侍のもとへもや
りけりとき丶てそれみたる歌をおくれりける返事に

大納言公實

滿鹽に末葉をあらふなかれ蘆の君をそ思ふうきみしつみて

女のもとにやれりける文をた丶にかへしたりけれは

源顯國朝臣

さはりおほみあはぬたえまの玉章を返すにしるし恨けりとは

おとこのもとへやるふみを人にみすらんなといひて

女

涙河せゝの玉藻もかきつめし人のみくつに成もこそすれ

堀河院御時百首歌たてまつりけるに　藤原仲實朝臣

ひくまのゝかやかしたなる思ひ草またふた心なしとしらすや

題しらす　大納言經信母

をのつからさ社はあれと思ふまにまことに人のとはす成ぬる

よみ人しらす

かりそめにふしみのゝへの草枕露かゝりきと人にかたるな

權僧正靜圓

見し程の夢ならませは中々にしはしはれたる心ちしなまし

因幡内侍

かたるなよ夢はかりなるあふ事を思ひあはする人もこそあれ

和泉式部

夢にたにみてあかしつる曉のこひこそ戀の限なりけれ

津守國基

たまさかにあひみしよはの曉のわかれかたさのまたに忘れぬ

藤原爲忠朝臣

よひのまにほのかに人をみか月のあかて入にし影そ戀しき

人と物かたりして侍ける程に又ひとの來りけれはたれ
もたれもかへりにけるあしたにいひつかはしける

和泉式部

半天にひとり有明の月をみて殘るくまなく身をそ知ぬる

房よりにしにちかとなりなる人のもとに侍わらはに忍
ひて物申ける比月のあかき夜いひつかはしける

よかれせすうら山しくそ西へ行月は人めもつゝまさりけり　律師延眞

女にかはりてよめる　藤原成親

かれにけるをさゝかふしをかそふれは哀すくなきよゝの數哉

堀河院御時百首歌たてまつりけるに　藤原基俊

吳竹のあなあさましの世中やありしやふしの限なる覽

はゝかることありて又もあひかたかりける女のことを
やますけうらにてとひけるかつゝかさりけれはそれに
むすひくしてつかはしける　藤原親重

思ひあまり山すけうらに物とへははなれ〳〵になるそ悲しき

いくかされどいふふることをいへる人に　和泉式部

とへと思ふ心そたへぬわするゝをかつみくまの浦の濱ゆふ　源仲綱

題しらす

心さへ我にもあらす成にけりこひはすかたのかはるのみかは　二條大宮衞門佐

戀わたる歎きにもゆるけふりこそ身を浮雲とはては成けれ　慶基法師

なか〳〵につらくはさても有へきを二たひ物を思はするかな　よみ人不知

いかにせむ人のみるめもはつかしの森の雫にぬるゝ袂を　右近權中將宗家

世中もうきなはとまる物なれは身をなけつ共かひやなからむ

續詞花和歌集卷第十三　戀下

題しらす　藤原惟成

忍ひにし心のかきりつきにしをあやしや何の物は思ふそ　齋院小式部

かれてより思ひしことのたかはぬは程なく人のつらき成けり　參議爲通

契りしも諸共にこそ契りしかわすれはともに忘れましかは　宰相

忘らるゝ我身のうさはわすられてわするゝ人のわすられぬ哉　小大君

君はかく忘れ貝こそひろひけれうらなき物はわかこゝろかな　參河

人しれす袖をそしほる數ならぬ身をしる雨の音はたてれと　神祇伯顯仲

中々にたのむはかりの言のはを契らさりせはうらみさらまし

かたらふ人のひさしくをとせぬに　大貳三位

うたかひし命はかりはありなから契りしなかのたえも行哉

題しらす　藤原實方朝臣

契こし言の違ふそたのもしきつらさもかくやかはると思へは　相摸

春の野のきゝすなりとも我はかりかりにあやうき物は思はし

女のつゝむことあれはいまはえなむあふましきといへ
りけれはつかはしける　藤原頼輔

あふことを今はかきりと思ふには命もともにたえぬへきかな

もの申女のうらめしきことありけれはいまはとはしと

おもふにさすかかなしくおほえ侍けれはつかはしける

藤原親重

たえなむと思ふ心はたれなれは人やりならす戀しかる覽

女をうらみ侍ていまはまうてこしなと申て侍けるかな
をわすれかたくおほえけれはつかはしける

藤原家通朝臣

つらしとは思ふ物からふし柴のしはしもこりぬ心なになり

丹後守に侍ける比物いふ女のもとに又人いくと聞てつ
かはしける

藤原兼房朝臣

まことにや人のくるにはたえにけむいくのゝ里の夏ひきの糸

新院人々に百首歌めしけるに

堀川

さゝかにのいかさまにかは恨むへきかき絶ぬるも人の咎かは

帥宮おはせてのちよみ侍りける

和泉式部

ねさめする身を吹とをす風の音をむかしは耳のよそに聞けん

題しらす

從一位宗子

長きよのね覺はいつもせしかともまた袖はしほらさりしか

鳥　子

有しおりつらさを我にならはせて俄に物をおもはする哉

藤原敦兼母(女イ)

ことの葉も絶果ぬれはつらかりし空たのめさへ戀しかりけり

越　後

今はたゝ人をわするゝ心こそ君にならひてしらまほしけれ

和泉式部道貞にわすられて程なく帥宮へまいるときゝ
て

赤染衛門

うつろはてしはしゝの田の杜をみよかへりもそする葛の裏風

かへし

和泉式部

秋風はすこく吹ともくすのはのうらみかほにはみえしとそ思

月のよ女のもとへまかれるに人のあるけしきなりけれ
はかへりていひつかはしける

平忠盛朝臣

人心あさみとりなる大空に何とて月のすみ渡るらん

備中守仲實朝臣國へ具してまかれりけるにおもひうす
くなりてつれはひとりのみ侍けるに月のあかきよなか
めあかしてあしたにつかはしける

遊女とく

數ならぬ身にも心のありかほにひとりも月をなかめつる哉

しなのなりける女をいひかたらへりけるおとこ京にゐ
てのほりてこと女をかたらひてとはす成にけれは女の
いひつかはしける

しなのなるよもさらしなと思ひしを我をは捨の山のはそうき

題しらす

藤原爲親

身のうさも人のつらさを思ふにもひとかたならすぬるゝ袖哉

よみ人不知

我からとわれも我身を知なからつらきはつらき物にそ有ける

赤染衛門わつらひけるころ人のとふらひにきたりける
をうたかはしくや思ひけむいひ侍ける

大江匡衡朝臣

かりにくる人にとこよをみせけれはよを秋かせに思ひなる哉

内にたてまつり給ける

齋宮女御

里わかすとひわたるめるかりかねを雲ゐに聞は我身成けり

題しらす

藤原顯方

うきせにもうれしきせにもさきに立涙はおなし泪成けり

藤原基俊

なみよする磯への蘆のおれふして人のうきにはれ袖なかるれ

皇后宮權大夫師時
さゝ浪やしかの浦なみ恨みしと思ふはかひもなきさ成けり
かきたえてをとせぬ人に　和泉式部
恨むへき心はかりは有ものをなきになしてもとはぬ君哉
題しらす　よみ人も
うき人を恨みむこともけふはかりあすを待へき我身なられは
證蓮法師
なをさりの文もかよはす成にこそかき絶ぬとは思ひしらるれ
三條院みこの宮と申ける時久しくおほせことなかりければ
安法々師女
よのつれの秋風ならは荻の葉にそよとはかりの音はしてまし
あひかたらふ人のまきるゝことゝもありてなんえまいりこぬわすれぬるとや思ふといへりけれは
意尊法師母
忘れすといふにつけてそ中々にとはぬ日數のつもるとはしる
題しらす　西院皇后宮
わすれてもあるへき物を中々にとふにつらさを思ひ出つる
たえてのちこひといへることをよめる
藤原爲忠朝臣
今更にいひな出しそかつまたの池のつゝみはむかしきれにき
久しくをとせぬおとこのもとよりことをかりて侍けるつかはすとて　安藝
うき身をは何につけてか思ひ出む尋ることのなからましかは
ことひく女にもの申わたりけるをきくこと侍りけれはとはすなりにけるに女のもとよりことをさへやわすれぬるなといへりけれは　藤原尹明

人に又つまなれにけることなれはうき例にはひくとしらすや
わすれにけるおとこのおもひいてゝまうきかよひけるか又たえにけれは　二條大宮別當
今更に何かは袖をぬらさまし野中のしみつ思ひ出すは
たえて久しくなりにけるおとこのおもひ出ていまはあたなることは侍らしなと申けるに　土御門齋院中將
年ふれとうきみは更にかはられはつらさもおなしつらさ成覽
かれ〳〵になりにける人のもとへむつきの比ほひつかはしける　關白家辨
忘れにし人を忘れぬ心こそかはれるとしもかはらさりけれ
とき〳〵まうてきかよふ人のむまをうしなひてもしそこにまうてきてや侍と尋けれは　馬内侍
あくかれて行衞もしらぬ春駒はおも影ならてみゆるよもなし
むすめのもとにかよふおとこのかりにまかるになんとてたちをこひにをこせたりけれはつかはすとて結ひつけゝる　赤染衛門
かりにそといはぬさきより頼れすたちとまるへき心ならねは
忠盛朝臣あなかちにいはせけれは心よはく成にける後かれ〳〵になり侍けれはいひつかはしける　平敎盛朝臣母
ならはれは人の心もつらからすくやしきにこそ袖はぬれけれ
題しらす　權中納言實國
うきなからつらさは事の數ならす戀しきに社ねはなかれけれ
辨乳母
戀しさはつらさにかへてやみにしを何の殘りてかくは悲しき
俊惠法師

思ひかれ猶こひちにそかへりぬる恨みは末もとをらさりけり

前律師俊宗

人心つらきも今は物なれてうらめしとたにいはれさりけり

左大臣家卿

身のうさを思ひもしらてありふれは難面名さへ立ぬへき哉

かさしふたはといふさうしをともに物いひけるおとこのふたはにつきてかさしをはたえにけれはかさしにかはりてみあれの日あふひにかきてつかはしける

小大進

思ひきやふたはにかけし葵草よそのかさしにならん物とは

女のふかき山にもいらまほしきよしいひたりけるに

民部卿齊信

山よりもふかき所を尋ねはわか心にそ人はいるへき

おとこにわすられてなけき侍ける比霜のふれるあしたに人のもとへつかはしける

和泉式部

けさはしも思はむ人はとひてまし妻なきねやの上はいかにと

かたらひけるわらはをえてしはしとはす侍けるにかのわらはのふみをおこせて侍けるかうす墨にかきたりけれは

僧都覺基

うす墨にかくにてしりぬ君はさはみえぬをよしと思ふ成へし

たゝならすなれる女をわすれてこと人にうつりけるおとこのもとへかの女にかはりてつかはしける

平實重

筏士のこのせはかりをすこせかし心のひかむかたは有とも

さうふのねのなかきを入道前大きおほいまうちきみのつかはしたりけれは

高松北方

長しともしらすやねのみなかれつゝ心のうきに生るあやめは

五月五日人につかはしける

よみ人しらす

身のうきにあやめのおふる物ならはけふ計にも人はきなまし

四條宰相をとしころいひわたりけるあるましきさまにのみおもへりける心さしにまけてしたしくなりにけるをはたおもふ心やありけむをともせて四五日はかりありて五月五日なかきねをやるとて

藤原能通朝臣

みしまえにおりたちしよりあやめ草又こと澤のねをもみぬ哉

ありしよりをもくわつらひてなむとてかへりこともいはさりけれはゆきとふらんと思ふをおほやけことさしあひて二三日はかりありてまかれりけれははや身まかりにけりとをとつれはへらはたてまつるへきよしにてかきをきたまへるとてありしさうふのねにむすひつけたる文をとりいてたるにかけりける歌

おり立し三嶋の水やあせにけむ生しあやめのねもかれにけり

續詞花和歌集巻第十四　別

源道濟筑前守にてくたり侍けるにつかはしける

能因法師

ならはねはかりの別も悲しきをうとくそ少しなるへかりける

平兼盛駿河守になりてくたりけるに

清原元輔

しらさりつたこのうら浪袖ひちておいの別にくちん物とは

大貳高遠くたり侍けるにつかはしける

小野宮右大臣

行めくりあひみまほしき別には命もともにおしまるゝ哉
修行に出立けるに人々まうてきあひていつのほとにかかへりきたり侍へきなと申侍けれは　前大僧正行尊
歸りこむ日數はいつといひたかしさためなきよは人たのめ也
公資朝臣さかみの守にてくたりけるにつかはしける　能因法師
古郷を思ひ出つゝ秋風に清見か關をこえんとすらむ
隆家帥くたり侍けるにあふき給はすとて　枇杷殿皇后宮
涼しさはいきの松原まさるともそふるあふきの風な忘れそ
修理のかみ顯季はりまのすけにてくたりける時河しりまてをくりにまかりて舟こきはなるゝ程はかりにかすみわたれりけるをみてよめる　津守國基
嶋かくれこき行までもみるへきにまたきへたつる春の霞か
人の法會をこなふ導師に越前國にまかりてのほりなむとする時あるしわかれをしみけるに　天台座主源心
なからへてあるへき身とし思はれは忘るなとたにえ社契られ
つくしなりけるおとこ京へのほるとてかとての所より女のもとにのほるへき心ちなむせぬなといへりけるかへりことに　女
あはれとし思はむ人はわかれしを心は身よりほかの物かは
とをくまかれりける人に餞すとて　賀茂政平
歸りこむ程を待こそ久しけれ行すゑとをき旅の別は
題しらす　神祇伯顯仲
かへりきてみるへき身とし思はれは今日の別のあはれ成かな　僧都覺雅
心をも君をも宿にとゝめ置て泪とゝもに出るたひかな　源重之
ころも川みなれし人の別には袂まてこそ波は立けれ
十月はかり女のものへまかりけるに　橘則長
逢事を何にいのらむかみな月おりわひしくも別ぬる哉
あひしれりけるわらはのみちのくにへまかりなんとしけるに月のあかきよ人々わかれおしみて歌よみけるに　實叡法師
思ひ出よ今よひの月の光をは誰も雲ゐのよそになるとも
ものへゆきける人のぬさこひけるやるとて　よみ人不知
ぬさはなしこれをたむけのつとにせよけつれは神も靡とそ聞
筑前守にてくたれるに資通大貳いつとせはてゝのほりけるにいひつかはしける　藤原經衡
行人をとゝめまほしくおもふかな我も戀しき宮こなれとも
返し　前大貳資通
年へたる人の心を思ひやれ君たにこふる花のみやこを
河内にくたりてひころ侍ける人のほらむとする時君をおきてかへるそらなきよしなといへりける返しに　山口重如
心をは君にたくふる旅なれは我もとゝまる心地やはする
いよのくにゝ侍るころ守のゝほりける時よめる　能因法師
ことしけき都なりともさよ更て浦になくたつおもひおこせよ
春比ちゝ仲正あつまのかたにすまむとてまかりけるに人々餞して花下惜別心をよみ侍けるによめる

思へたゝかけに隱れぬ人たにも留らぬ花はおしくやはあらぬ　源頼行

みちのくにのすけにてまかりける時範永朝臣許につかはしける　高階經重朝臣

行すゑにあふくま川のなかりせはいかにかせましけふの別を　藤原範永朝臣

かへし

君にまたあふくま川を待へきに殘りすくなき我そ悲しき

源惟盛としころ侍る物にてことなとをしへけるを土佐國へまかりける時なくりにかはしりまてきたれりけるにことの双調には滄海波曲といふことのあるをそのあひたのことなと申てかたみにも思へなといひてよみ侍ける　前中納言師長

をしへをくかたみのことを忍はなん身はあを海の波に流れぬ

はなれにけるおとこのとをきほとへ行をいかゝ思ふといひたる人に　和泉式部

別てもおなしみやこに有しかはいとこのたひの心ちやはせし

をはりのくにゝ京よりくたれりけるおとこかたらひつきにけるをのほりなむとしける時あすのゝほりはかならす侍へきにやと尋侍けるにしぬはかりおほゆれはあすはいくへき心ちせぬよしを申て侍けれは　傀儡あこ丸

しぬはかりまことになけく道ならは命と共にのひよとそ思ふ

二條大后宮の式部にいひわたるをつれなくてすくる程にまめなる人につきてあつまの方へゆきけるかあはつといふ所よりかへる人につけてくすのはのかへらむをまてなといへりけれはくにへをひていひつかはしける

あはつのゝくすのすゑはのかへるまて有やはつへき露の命は　左京大夫顯輔

續詞花和歌集巻第十五　旅

みちの國のすけにてまかりくたりけるにいひつかはしける　橘爲仲朝臣

わかれしはきのふはかりと思へともみちにて年の暮にける哉　源盛家朝臣

題しらす

東路を思ひ立しは遠けれと尋きにけりしら川の關　御形宣旨

都にて越路の空をなかめつゝ雲ゐといひしほとにきにけり

津の國なるところにしほゆあみにまかれりける頃中納言國信せうそこして侍けるに　肥後

草枕さゝかきうすくあしのやはところせきまて露そをきける

しほゆあみにまかれりけるところちかくともなりける人又まかり侍てかくときゝてたひれのところはうらうらなりともみやこ戀しきことはおなしくやなとやうにいへりけるかへりことに　源頼政

君かすむうら戀しくそ我はおもふ忍ふ都も誰かゆへ（はイ）そよ

新院人々に百首歌めしけるに　堀川

忍ふへき都ならねとしかすかの渡りもやらす哀なるかな

みまさかのすけにて侍ける時國にて月をみてよみける　左京大夫顯輔

過つらん都のこともとふへきに雲のよそにもわたる月哉

月前旅宿といふことを
あたらよをいせの濱荻おりしきていもこひしらにみつる月哉　藤原基俊
あかしに人々まかりて月の歌よみけるに
登蓮法師
故郷を思ひやりつゝなかむれは心ひとつにくもる月かけ
堀河院御時百首歌たてまつりけるに　大藏卿匡房
月かけにあかしの浦をこき行は千鳥しはなく明ぬ此よは
紀伊守にて國にはへりける時源則重おほやけの御かし
こまりにて土佐國に侍をとふらひにまかれりけるに月
のあかく侍けるによみける　高階經重朝臣
はるはるとやへのしほちをかきわけて思はぬ方の月をみる哉
旅宿待月心を　源頼家朝臣
おほつかな有明の月のいてかねしいかなる山のふもと成らむ
題しらす　藤原範永朝臣
有明の月もし水に宿りけり今よひはこえし逢坂の關
みのをにこもらせ給ていて給けるあかつきに月のおも
しろかりけれは　仁和寺宮
木のまもる有明の月のをくらすはひとりや山の嶺を出まし
新院人々に百首うためしけるに旅の心を　堀川
みちすから心も空になかめやる都の山の雲かくれぬる
題しらす　式部大輔資業
ふなてしていくかに成ぬ古郷は山みゆはかりけふそきにける
屏風歌　大江嘉言
山みれは近くきぬるをふるさとはいつともしらて待や渡らん
みちのくにのすけにてまかりける時しなのゝみさかを
こゆとて　橘爲仲朝臣
よそにのみ聞しみさかはしら雲のうへ迄のほるかけち成けり
題しらす　權僧正永縁
白雲のかゝる旅ねもならはぬに深き山ちに日は暮にけり
よみ人不知
今よりはしのたの杜に宿りせしちえの雫は雨に増れり
備中介にてくたり侍ける時道にてよめる　橘道時
しなか鳥ゐなの渡りに旅ねしてきひのなか山いつかこゆへき
ことありてあつまの方へまかりける道に京よりあはれ
なることゝも申をくれりける消息の返事に　法眼靜賢
戀しくはきてもみよとて相坂の關のし水にかけはとめてき
をはりのなるみのさとゝいふところにとまれりけるに
よめる
昔にもあらすなるみの里にきて都戀しき旅ねをそする
都はなれて遠き所へつかはされける道にて　藤原脩範朝臣
日をへつゝ行にはるけき道なれはすゑを都と思はましかは
すみよしのへにやとりてよめる　源俊頼朝臣
住吉のしきつの浦に旅ねして松の葉風にめをさましつる
あかしにかれこれまかりてあそひける時海邊旅宿のこ
ころをよみける　登蓮法師
みさこゐるいその松かれ枕にてしほかせさむみあかしつる哉
海路時雨をよみける　藤原顯廣朝臣
袖ぬらすをしまか磯の泊りかな松風寒みしくれふるなり

なにはわたりにまかれりけるに　中納言定頼
おきつかせよはに吹らし難波かた曉かけてなこのたつなり〔なみたつなり〕
ものへゆくみちにふれにてよるきけはなみい音いと哀
に侍ければ　肥後
小夜更てあしのすゑこす浦風に哀うちそふ波の音かな
天王寺へまいり侍ける時暮かゝる程になにはな過とて
よみ侍ける　前大僧正行尊
夕されに難波わたりな見渡せはたゝうすすみのあして成けり
題しらす　山口重如
行末もみえぬふなちの悲しきは波のなかにそいる心ちする
たこにてよみ侍ける　赤染衛門
思ふ事なくてそみましよさのうみのあまのはしたて都成せは
遠江へまかりけるときみのゝかみ義通朝臣國に有と聞
てまかりよれりけるにあるしなとしてなにことにてい
つこへまかるそなと申ければよみける　能因法師
さすらふる身はいつこともなかりけり濱名の橋の渡りへそ行
しなのゝかみにて侍けるよとせはてゝのほりけるみの
のくにの野かみといふ所にやとれるにかの國のかみ知
房朝臣せうそこしてさけなとなくれりける返事に　藤原永實
ことの葉の露のなさけのみえぬれはうれしき旅の草枕かな
返し　藤原知房朝臣
いかてかは露のなさけもなかさらんのかみの里の草の枕に
野近き所によるとまりてむしのいたく鳴ければ　赤染衛門
一夜たにあかしかねぬる秋のゝになくなくすくす虫そ悲しき
秋比嵯野へまうて給けるみちにて　仁和寺宮
あきのよは旅のね覺そあはれなるなかのかやれの虫の聲こゑ
かうやへまうて侍けるみちにて　前仁和寺宮
定なき浮世中と知ぬれといつくも旅の心ちこそすれ
百首御歌中に　新院
はかなくもこれなたひねと思ふ哉いつくもかりの宿と社きけ
松かれの枕もなにかあたならん玉のゆかとてつねのとこかは

續詞花和歌集卷第十六　雜上

皇嘉門院中宮と申ける時宮女房と内の御方の女房と歌
合有へしとていとみあへるあひた歌よみつゝいひかは
しけるに我御方の女房にかはらせ給て宮の御方にさし
なかせさせ給ける　新院御歌
久方のあまのかこやまいつるひもわかゝたにこそ光さすらめ
清輔四位して侍ける時よろこひいひにつかはすとて　藤原重家朝臣
武藏のゝわか紫の衣手はゆかりまてこそうれしかりけれ
後一條院春日行幸侍けるにみこしにたてまつらせ給て
まいらせ給けるに一條院御時このみゆきはゝしまれり
けることなおほしめしいてゝ　上東門院
みかさ山さしてきにけりいそのかみふるき御幸の跡な尋ねて
右大將兼長春日祭の上卿にてくたり侍けるともに藤原
範綱ないとおかしうしたてゝしのふすりのかりきぬな

ときせたりけるゆへあるやうにみえければ又日範綱かもとにたれともなくてさしをかせける

昨日見し忍ふもちすり誰ならん心の程そかきりしられぬ　左京大夫顯輔

平忠盛朝臣六波羅家を新院女房達見にまかれりける時つまとにかきつけ侍ける　仁和寺一宮母

音羽川せきれぬやとの池水も人の心はみえける物を

京極前太政大臣家歌合に康資王母のほとときすの歌になくわたりこそとまりなりけれとよめるかおかしくおほえければいひつかはしける　源頼綱朝臣

年へぬるふなきのくちも郭公啼わたるにそゆられよりける

後拾遺えらひける比康資王母に歌こへりけるをつかはしたりければこれをなむかりにすへきなといひてつかはしける　治部卿通俊

年をへて君かかきつむ藻鹽草たまもをかれる心ちこそすれ

後拾遺のいてきたりける時二條大きおほいきさきの宮にたてまつれりけるなをすへきことありて申いてける時におほせことにてよみてつかはしける　攝　津

尋つゝかきあつめすは言のはもをのかちり／＼朽やしなまし

金葉集のはしめていてきたりける時みかはかしもに侍けるを撰集の歌人まいれとめしければまいれりけるにかみのきれにかきてたまはせたりける　從一位宗子

むかしよりいかなる家の風なれはちる言のはの絶せさるらん

返し　參　河

家の風ふくともなしにことの葉の思ひのほかにいかて散らむ

二條大后宮くすたまのれうに人のもとにはなむすひにつかはしたりけるをおかしくむすひてたてまつれりければいひつかはしける　攝　津

白露のいかにむすへる花なれは匂ひもことに見ゆる成らん

卯月の十日比に宇治の前大きおほいまうち君のもとにとのゐとて侍るに經衡とひと所にねてとのゐものをとりたかへてふくろにいれたりければとりかへにつかはすとて　橘　俊　成

夏きてはかそふはかりに成ぬるをたちなくれたる衣かへかな

俊綱朝臣の伏見の家にて山家眺望といふことをよみける　藤原國房

山賤の野飼の駒もかへるめりはつせにくさをしかひかけつゝ

堀河院御時百首歌たてまつりけるに　修理大夫顯季

梓弓いるのゝ草のふかければ朝行人の袖そ露けき

〔夏歟〕反草をよみける　源俊頼朝臣

しほみては野嶋かさきのさゆりはに浪こす風の吹ぬまそなき

堀河院御時百首歌たてまつりけるに　修理大夫顯季

玉藻刈いらこか崎のいはれ松いく夜までにか年のへぬらん

二月はかりみかはの國の花その山といふ所にてかりし侍とて　よみ人不知

春霞花園山をあさたては櫻かりとや人はみるらん

春ころ僧正行尊くまのよりいてたりと聞てつかはしける　僧都公圓

ほの／＼と霞立けむわかの浦の春のけしきはいかゝみてこし

遙望漁舟心をよめる　皇后宮權大夫師時

浪まよりあるかなきかにみゆるかな嶋つたひゆく蜑の釣舟　藤原基俊

さゝ浪やひらの山風はやからし波まにきゆるあまのつり舟　藤原公重朝臣

ながらの橋をよみ侍ける　道命法師

きゝわたるながらの橋は跡たえて朽せぬ名のみとまる成けり

何事もかはり行める世中にむかしながらの橋柱かな　藤原顯方

室の八嶋を　大藏卿經忠

たえす立むろの八嶋の煙かないかにつきせぬ思ひ成らむ

題しらす　藤原基俊

しら雲にまかひやせまし吉野山おちくる瀧の音せさりせは

雨後山水と云ことを　源俊重

芳野川空や村雨降ぬらし岩まにたきつをとゝよむなり

水風驚夢心をよめる　大納言經信

瀧つせの岩ま吹こすかせの音に夢みる程もねられさりけり

暮望旅客といふ事を　藤原公經朝臣

夕日さす淺茅か原のたひ人はあはれいつこを宿にかるらん

題しらす

ゆふひさすをちの山里見わたせは心ほそくもたつけふりかな

大齋院御あしなやませ給をすきのゆにてゆてさせ給へきよし申けれはゆてさせ給へとしるしも見えさりければ　齋院宰相

足引のやまひもやますみゆる哉しるしの杉とたれかいひけん

返し　齋院

しるしありとすきにし方は聞物は我このみわのやまぬ成へし

八十賀し侍けるに大僧正觀修かはらけとりていはひの歌よみて侍けるかへしに　天台座主覺慶

祝ふともかひやながらの奥山にやそちの冬にあへるからきは

上東門院内へまいり給ける時御屏風の為に人の家に松竹なとあるにすたれのまへにふえふくおとこ有所　民部卿齊信

笛竹のよふかき聲そ聞ゆ成峯の松かせ吹やそふ覽

檜に松の木の下に人々ゐてことひきたるかたかけるを　中納言定頼

ひくひとはこと〳〵なれと松風にかよふ調はかはらさりけり

人のもとにまかれりけるにあないしてとはかりやすらひける程にあつまのをとのきこえけれはいひける　藤原範綱

たけくまの松の風にや通ふらんあつまのことのねこそ聞ゆれ

人の紙をこへりけるをいさゝかつかはすとて　藤原實方朝臣

いさや又ちゝの社も知ぬ身はこやそなるらんすくなみのかみ

かへし　よみ人しらす

ひろまへにまさぬ心の程よりはおほなほひなる神とこそみれ

うらにものかゝむとておほくかきあつむなるふみたまへと人のこひければ　藤原經衡

やくとしもかきあつめれはも鹽草あまたもみえぬ浦とします南

祭主輔親内に侍むすめのもとへ扇調してつかはしけるをうらやましくやおもひけむおとゝむすめの十一二はかりなるかすゝりのはこにかきていれたりける

ともすれは思ひのあつき方にこそ風をもまつは扇きやりけれ

これをみてかたはらにかきつけゝる　祭主輔親

ひとりには塵をもすへし一人をは風にもあてしと思ふ成へし
ゆかしくおほされける人女房のつほれに忍ひてかたゝかへにまいれるときかせ給てたいめむせむなとおほしめしけるをあかつき出にけれは　　大齋院
逢みむと思ひしことをたかふれはつらき方にもさためつる哉
山なるそうのさとへ出むにはかならすをとせむとちきりたりけるいてたりときけとも音せさりけれは
　　祝部成仲
里なるゝ山ほとゝきすいかなれは待宿にしも音せさるらん
雨中待客心を　　大中臣輔以
人を待あらましことにめもさめて聞あかしつる五月雨の空
大納言公實許にて人々對水待月こゝろをよみけるに　　源俊頼朝臣
山のはを玉江の水にうつしもて月をも波のしたにまつ哉
樵路月と云ことを　　仁和寺宮
松風の音もさひしき曉に月にうたひてすくるやま人
山月初出といふ題をよみける　　前參議親經
相坂のすきま今こそしらむめれをとはの山に月やいつらん
題しらす　　法性寺入道前太政大臣
あかなくにいりぬる跡のさひしきに月みむ人は有明を見よ
晨月をよめる　　左京大夫顯輔
みむろ山嶺に朝日のうつろへは立田の川に月そ殘れる
頼綱朝臣津の國のはつかといふ所に侍ときやらむとてよめりける　　大藏卿匡房
秋はつるはつかの山のさひしきに有明の月を誰かみる覽
三井寺にまかりて日比侍てかへりなむとしける時人々わかれおしみて歌よみけるに　　刑部卿範兼
月をなとまたれのみすと思ひ劔けに山のはゝいてうかりけり
大原にすみ侍ける比爲業まうてこむとのみ申て見えさりけるたま〱まうて來りけるに月おかしき所とてほかにやとれりけれはいひつかはしける　　寂超法師
まちてたる雲ゐの月も宿られはおほろのし水すむかひそなき
八月十五夜頼基僧都まうてこむと申てをともせさりけれはつかはしける　　眞覺法師
君待と月をなかめて明ぬれはたのめてこぬもうれしかりけり
大教院一品宮中院にわたり給へりける程月あかきよ春宮大夫師頼頭辨と申ける時まいれりけるかほとなくいて侍けれはいひつかはしける　　前齋院出雲
池水にやとれる月はのとけきを影もとゝめぬ雲のうへ人
月前待客といふことを　　前大僧正行慶
こすもあらむ晝に變らぬ月なれはよにかくれてと契りし物を
山寺に侍ける比月を見て　　源道濟
昔みし人はこれともなか〱に契らぬ月そ忘れさりける
としころ修行に人々ありきてかへりまうてきて侍に人人月前懷舊といふことを　　登蓮法師
もろともにみし人いかに成にけむ月は昔にかはらさりけり
月前述懷心を　　仁和寺宮
なかめして過にし〔したりける歟〕方を思ふまに嶺よりみねに月はうつりぬ
殿上のくりけり比月を見て　　藤原隆信
なにことをおもふともなき人たにも月みるたひに詠やはせぬ

續詞花和歌集卷第十七　雜中

山寺に侍けるとき五節たてまつる人のたきものかうはしくあはすとてそらたき物すこしとこへるにたちはなのなりたるえたにみをとりすてゝいれかへてやりける

如覺法師

末のよになりもて行は立花も昔のかにはにるへくもなし

圓融院のみかとおりさせ給てひころありてまいれりけるに山吹の花をたまはせたりけれは　藤原實方朝臣

八重なから色もかはらぬ山吹のなとこゝのへに咲す成にし

筑後守爲通とところなさけなくあたり侍けるいつとせはてゝのほりけるにいひやりける　頁勢法師

君はしも忘れしかしな中々につらきにまさるかたみなけれは

津守國基身まかりにけれはすみよしにもすますなりにけるをあからさまにまかり下りける(れろイ)にもとみし物ともむかしのけしきにもあらさりけれは

津守景基

人心あらす成行すみよしの松のけしきはかはらさりけり

よきすゝきありときこしめして新院よりめしけれはたてまつるとてむすひつけゝる　前大藏卿行宗

花すゝき秋のすゑはに成ぬれはことそともなく露そこほるゝ

此のちほとなく身まかりにけりとなん申

やことなき所の御前のすゝきむすはれたりけるをその人のむすへるなめりひむなきことしたりとてかしこまりけれは人につけて申ける　よみ人しらす

花すゝき忍ひつゝこそ結ひしかあやなくほにも出にける哉

むすめのもとへしのひてかよひけるおとこのせうそこして侍けるに

清原元輔

むすひけむ露をもしらす花すゝき秋をさためてほには出なん

物いふ人のもとにわかなをかりて人のいれりけるをあいなくえむしけれは　大江嘉言

すゝくへきかたなき物は春のゝに我つみならぬ若菜なりけり

題しらす　よみ人も

袖の上に泪の川はなかるれとなきなはえこそすゝかさりけり

なきなのみ世には立田の山水の清きをすむといふにや有らんかれにけるおとこのいまかたらふときこゆる女のもとへもとの女のいひつかはしける

たのむなよ思ふにさこそ契らめ我にもいひしことのはそゝは

かたらふおとこのもとの人いみしくはらたつときくにたかうなをやるとていまの人のよませ侍けるに

和泉式部

かはらしや竹の古れはひとよたにこれにとまれる節は有やは

一院くらゐにおはしましける時右のおほいまうちきみ右衞門督ときこえける比ものいふ女房侍けるをうへめすなりとききゝてかの女のもとへ人にかはりてつかはしける　前中宮亮季行

みかきもり衞士の煙の立のほり雲ゐになると聞はまことか

女のもとにまかれりけるにかみあらふほとなりとてあはさりけれは　二條關白前太政大臣

今よりはゆふかけてこむ千早ふるかみあらはるゝ處成けり

和泉式部か家につれにかたゝかへにまかりけるにいたしたる枕をあしたにかへすとてかきつけゝる

たひことにかるもうるさし草枕手まくらならはかへさゝらまし　大江公資朝臣

義孝少將修理のかみこれたかゝ家にかたゝかへにまかれりけるにいたしたるまくらにかけりける歌

つらからは人にかたらむ敷妙の枕かはして一夜ねにきと

これか返しのあかすおほえけれは又人にこれかゝへしせよといひ侍けれはよめる　よみ人不知

かたるともたかなはたゝしなかゝらぬ心の程や人にしられむ

源氏の物語を人にかりて返しやるとて　藤原顯綱朝臣

いかはかり袖のぬれけむむさしのゝ若紫の露のきえかた

ほかに侍けるほとにとものまうてきてかくれしことなとうらみつかはして侍けれは　賀茂政平母

山里の岩もる水にみくさゐてみえけむ物をすまぬけしきは

修行のところより三宮にたてまつりける　前大僧正行尊

やま里は我か心にまかせたるかけひの水そたえす音する

物おもひける比くらまにこもりて　藤原爲信女

たれはかり尋てきなん山里に入にし人はありやなしやと

なにはわたりにあひしれる人を尋ぬるになしといひ侍けれは　能因法師

難波江に人を尋てきつれともたまもかりにといてにけらしな

藤原孝清和泉守にてくたるとてすみよしをすきけるにつかはしける　津守國基

すみよしの岸の白浪打すくるたよりにたにもとはぬ君哉

前中宮上總くまのへまいりけるに還向にすみよしによろへきよし申てまうてこてすきにけれはつかはしける　津守景基

としふとも忘られしかし住吉の松にとまらて過るつらさは

前大納言公任なかたにゝすみける比十二月はかりいひつかはしける　中納言定頼

故郷のいたまの風にね覺つゝ谷の嵐をおもひこそやれ

返し　前大納言公任

谷風の身にしむことにふる郷のこのもとをこそ思ひやりつれ

ひむかし山のへんにぬしなき宿にまかりてよみける　源道濟

君なくてまたいくとせにならね共嶺の松風こゑそかはれる

はやうすみける山さとにゆきて　能因法師

松風のふくをとのみそひくらしに昔の聲はかはらさりけり

あまになりてすゑのよに思ひかけぬ所にて人にたいめんしてむかしのものかたりなとしけるほとことをひきならしけるをきゝていひいたしける　三條大宮式部

聞馴し昔のことをひきかけてしらふるからにねこそなかるれ

圓宗寺にてよみ給ける　三宮

いにしへの影やみゆると人しれす池のみくさのはらはるゝ哉

三宮かくれ給て七條のいつみに左おほいまうち君まかり侍て歌よみけるに　越後

ありし世にすみも替らぬ水の面になき風のみそ移りさりける

かはらの院にて人々むかしをこふる心をよみけるに　平兼盛

石まより出る泉そむせふなるむかしをこふる聲にや有らん

金葉集のおりにいてきたりける歌ともを俊頼朝臣かく

れてのちかきあつめてをくとておくにかきける
新少将
あさりせし君もなきさに鹽たれて玉ものくつをかきそ集むる
圓融院かくれさせ給にける春あはたにて人々歌よみ侍
けるに　　藤原實方朝臣
此春はいさやまと〔里歟〕に暮してむ花の都はをるに露けし
あるしうせたるところの花をみて　　道命法師
庭櫻きみかおしみしほとはかりしのひしもせし花のこゝろは
待賢門院おはしまさてのち法金剛院にてほとゝきすの
啼けるをきゝ給て　　仁和寺宮
故郷をけふみにこすはほとゝきす誰と昔をこひてなかまし
近衛院に侍けるにかくれさせ給にければ皇后宮にまい
れりけるにことにふれてむかしのみこひしくおほえけ
ればふつきの七日土佐内侍のもとへつかはしける
皇后宮備前
天川ほしあひの空はかはられとなれし雲ゐの秋そ戀しき
匡衡朝臣うせて後石山へまうてける道に山かけなる草
の露にあさひのさしたるを見て　　赤染衛門
朝日さす山した露のきゆるまもみしほとよりは久しかりけり
一條院かくれさせ給てほとへて夢に見たてまつりてよ
み侍りける　　大江匡衡朝臣
夜もすから昔のことをみつる哉かたるやうつゝ有し世や夢
上東門院にまいりて一條院に匡衡か御書をしへたてま
つりし程のことなと昔物かたり啓してまかり出にける
あしたにたてまつりける　　赤染衛門
いとゝしく又ぬれそひし袂かな昔をかけておちし涙に

かへし　　院
うつゝとも思ひわかれて過す哉みしよの夢を何語りけん
大納言公實身まかりてとしへてよみ侍ける
華園左大臣北方
かそふれは昔語に成にけり別はいまの心ちすれとも
近衛院御時ところゝゐつかうまつりけるかくれさせ
給にければ當今御時又ところゐにめされて侍けるに太政大
臣のもとへいひつかはしける　　大僧正覺忠
うきまゝに空をなかめし名殘には雲ゐの月を猶もみる哉
後冷泉院おはしまさてのち九月十三夜四條宮にまいり
て式部命婦と夜ひとよむかしのことなと申て
藤原清家朝臣
夜もすから思ひやいつるいにしへにかはらぬ空の月を詠めて
返し　　式部命婦
雲の上の月の光はかはられとむかしの影はなをそ戀しき
九月十三夜月おもしろく侍けるを前師季仲ともろとも
に見侍てほとなくかの人となき所へなかされにければ
いひつかはしける　　藤原基俊
みるたひに昔の事のおほゆれはまたそのまゝに月もなかめす
玄範聖人
いく雲ゐへたつる山のあなたにて都のことをおもひ出らむ
思ふことありけるころよふけつるまて月をみて
赤染衛門
物思はぬ人もやこよひなかむらんねられ〔れカ〕ぬまゝに月をみる哉
題しらす　　源頼光朝臣
出るより入まて月をなかむるは物思ふおりのわさにそ有ける

行宮見月傷心色といふことを　前大貳高遠
思ひやる心も空になりにけりひとり有明の月を詠て
長恨歌の心を　藤原爲忠朝臣
まほろしのつてに聞こそ悲しけれ契りしことは夢ならね共
陵園妾のこゝろをよめる　登蓮法師
松の戸をさしてかへりし夕よりあけるめもなく物をこそ思へ
ことありてあふみなるところにこもりゐ侍りける時よめる　大江公資朝臣
ことしけき世中よりも足引の山のへにこそ水は清けれ
遠きくにへつかはされける時人のもとへいひつかはしける　前左京大夫敎長
おち瀧つ水の泡とは流るれとうきにきえせぬ身をいかにせん
おなしみちにてのりかへにかけなる馬の侍けるをたつねけれはあしをやみてさかりて侍よし申けるをきゝて
日の光てらしすてたるうきみにはかけさへそはす成にける哉
おほやけの御かしこまりにて下野國につかはされける時むろのやしまを見て　藤原成範朝臣
わかために有ける物を東路の室のやしまにたえぬ思ひは
なかされたるものとも程へてみなめしかへしけるに一人なをゆるされさりけれは内わたりの女房のもとへをくりける　前左兵衛督惟方
このせにもしつむと聞は涓川なかれしよりも袖そぬれける
よの中にこもりゐ侍けるとき　知足院入道前太政大臣
さほ河の流れひさしき身なれともうき世にあひて沈みぬる哉
ぬす人にあへりける又の日人のかいねりのきぬをゝくりて侍けれは　清原元輔
淺からす思ひそめてし衣かはかゝるせにこそ袖もぬれけれ
くまのへまいりける女をとなし川よりかへされたてまつりてなく〳〵よみ侍ける
音なしの川のなかれは淺けれとつみの深きにえこそわたられ
このゝちことなくまいりにけりとそ申
從一位宗子やまひおもくなりて久まいりて心ほそきことなと申て侍ける御かへりに　近衛院御歌
うき雲のかゝる程たにわひしきにかくれなはてそ有明の月
わつらふ比寂昭聖人をむかへて戒うけなとしけるにはとなくかへりにけれはつかはしける　小大君
長きよのやみにまとへる我をゝきて雲かくれぬる空の月哉
長月のつこもりにわつらひてたのもしけなくおほせけれは久とはぬ人につかはしける　藤原基俊
秋はつる枯野の虫のこゑたえはありやなしやと人のとへかし
わつらふ事ありて雲林院なる所にまかれりけるに人のとふらへりけれはよめる　良暹法師
此世をは雲のはやしに旅れして煙とならん夕をそまつ
返し　よみ人不知
けふりにとよそふる旅のかとてには心ほそくや思ひ立らん
やまひにわつらひける比雪の消のこれるをみて　中納言定賴
こかくれに殘れる雪の下消て日を待ほとの心ちこそすれ

續詞花和歌集卷第十八　雜下

あかためしにいせになれりけるをしゝ申とてよきにそ

うしたまへなといひて前大僧正行尊許につかはしける

いかにせむ伊せの濱荻みかくれて思はぬ磯の波にくちなは　源俊重

かへし　前大僧正行尊

しらすやはいせのはまおきおれふして君か方にとなひく心を

清輔殿上申けるをあるへきやうにて月日へにける程にしむそくなるものとそうへゆるされぬときゝてむらさきのひともとのくちぬるよしをそうせよとおほしくて女房許へ申つかはしたりける御返事に　御製

紫のおなし草葉にをく露のその一もとをへたてやはせん

としころ大内裏をあつかりてまもり侍けるにみゆきあるときははたかくるゝもほいなくいへりうへゆるされむと申けるをかなはさりけれは大内に行幸なれりけるころ女房許へ申ける　源頼政

人しれぬ大内山の山もりはこかくれてのみ月を見る哉

光覺法師維摩會の講師の請にたひ〳〵もれにけることを法性寺入道前太政大臣に申たりけるかへりことにしめちのはらと侍けるをつきのとしも又人のたまはりにけれはたてまつりける　藤原基俊

契りをきしさせもか露を命にて哀ことしの秋もいぬめり

竪義請申ける僧の中文のおくにかきてたてまつりける

春の日の光もしらて雪ふかき谷の松こそとしおいにけれ

む月の朔日雪のふりけるに　藤原範永朝臣

春の立しるしはみえてしら雪の降のみ増る身とそ成ぬる

題しらす　源仲正

いかにして春のはしめに思ふ共かすめて空のけしきをもみん

新院御時うへのおのこともにあまたの題をよませさせ給けるにおもひをのふる心を　右兵衞督公行

春日山松にたのみをかくるかな藤のすゑはの數ならね共

四月にさけるさくらを見て　法橋忠命

散果て又咲花も有けれは人にをくるゝ身をもうらみし

人々おもひをのふる歌よみけるに　藤原實綱朝臣

人はみな花咲春にあふものを我のみ秋の心なるかな

身のしつめることをおもひて五月雨のころ人につかはしける　大僧正寛曉

五月雨のひまなき杜の雫には宿もあるしも朽にける哉

のそむことなくて山さとに侍ける秋ころもみち見に人人まうてきて歌よみけるに　よみ人しらす

埋木とおほゆる人のすみかにも花こそさかれはゝもみちけり

下﨟にこえられてなけきける比頼輔卿許へつかはしける　右兵衞督公行

心のみむすほゝれたる露の身は霜となりての後やきえ南

題しらす　源仲正

思ひ出もなきよは何のをしけれは殘りすくなき身を歎くらん

源國能

埋木は昔は花も咲にけむ思ひてもなき我身なりけり

身のゝそみなくてよの中にありへんこともかたくおほえ侍ける比よみ侍ける　賀茂成保

墨染に思ひ立ぬる衣手をまたきあらふはなみた成けり

法性寺大きおほいまうち君石山のてらにまうてゝ侍ける時人々に歌よませけるに六位にてのそみならす侍け

ろ比よめる
おいにける渚の松の深みとりしつめる影をよそにやは見る　源　爲憲
題しらす　橘　敦隆
秋の露わかもとゆひにむすはねとしもと成行あされかみ哉
年比あひ具せりける女にをくれて山里に侍けるをよき
日ことさらにとく京に出たつにあかつきあけ侍ぬとい
そかし侍けれは　左京大夫顯輔
いつのまに身を山賤になしはてゝ都を旅と思ふ成らん
うれふること侍けるころ　源俊頼朝臣
さらぬたにかはかぬ袖そ淸みかたしはしなかけそ波のせき守
世中をなけきける比人のとへりけれは　三條大宮式部
捨果てなきになしぬる憂身をは世に有とてや人のとふらん
修行にありき侍ける時たよりにつけてめのとのもとへ
つかはしける　前大僧正行尊
哀とてはくゝみたてしいにしへはよをそむけとは思はさり劔
世中はかなくきこゆるころさかみかもとへつかはしけ
る　藤原兼房朝臣
あはれ共誰かは我を思ひ出むあるよをたにもとふ人そなき
山寺にて都のかたをなかめて　道命法師
都をはうしとて山に入しかとそなたにむきて日を暮す哉
ひえのやまにて故郷こふる心をよみける　源　道濟
あるときはうきこととしけき古郷をこふるや何のこゝろ成覽
あからさまにひえの山にのほりて侍けるにかへりなむ
としけるおりわらはの手本かきてと申けれはかきてと
らすとておくに　靜敎法師
浮雲の跡もさためぬ身なれ共山のうへこそ立うかりけれ
傀儡にかはりて　能因法師
いつことも定ぬ物は身なりけり人の心を宿とするまに
甲斐守にて國に侍けるころ朝光大將のもとに侍ける人
のもとへいひつかはしける　源師綱朝臣
さすらふる身をいつこにと人とはゝはるけき山のかひにとをいへ
題しらす　大藏卿匡房
さすらふるみはさためたる方もなし浮たる舟の波にまかせて
源雅重朝臣
我か身はさそふ水まつ浮草の跡たえぬともたれか尋ねむ
藤原顯廣朝臣
うき身をは我心さへふりすてゝ山のあなたに宿もとむ也
津のくにとしへて侍けるおり赤染衛門許へいひつかは
しける　大江爲基
有はてぬ身たに心にかなはすて思ひの外によにもふるかな
少將井尼大原よりいてたりとき　て　和泉式部
世をそむくかたはいつくに有ぬへし大原山は住よかりきや
返し　少將井尼
思ふ事おほはら山のすみかまはいとゝなけきの數をこそつめ
題しらす　よみ人も
世を捨てふかき山には入しかと涙の出るおりそおほかる
あひしれりける人入道すとて戒師むかへむれうに馬を
かり侍けれはつかはすとてよめる　賀茂政平
よをそむくまことの道にひく駒はのりのためにと思ふ成けり
かしらおろして後子にはかまをきすとて法性寺入道前

太政大臣にさしぬき申侍とてよめる　源定信
身をすてゝ苔の衣はきたれ共此よはえこそ忘れさりけれ
衛門宣旨よをそむきぬときゝてつかはしける　清原元輔
ます鏡二たひよにやくもるとてちりを出ぬと聞はまことか
兵部卿宮(致平)入道して侍りける比女三宮のもとへ　齋宮女御
みな人のそむきはてぬる世中にふるの社のみをいかにせん
よをそむきぬときゝてはらからの許よりけさをゝくる
とて夢の心ちするよしなと申つかはせりける返事に　兵衛
長きよの覺ぬれふりにみしことは夢なりけりとけさそ驚く
御くしおろさせ給てのち御佛名のあしたつくり花を公
任卿もとへつかはすとて　花山院御歌
程もなくさめにし夢のうちなれはむかしにゝたる花の色哉
よをそむきてのち花を見て　寂然法師
この春そ思ひもかへす櫻花むなしき色にそめし心を
おとこのよをむなしとしりなからきみにさはりてそむ
かぬことゝいひたりける返事に　赤染衛門
我もなし人もむなしと思ひなは何か此世のさはり成へき
世中はかなくきこゆるころ北白川にまかりてもみちの
ちりのこれりけるをみて　前大納言公任
けふこすはみすやあらまし山里のもみちも人も常ならぬよに
新院人々に百首歌めしけるに　前參議親隆
あたになく草葉の露の消ぬるを哀よそにや人のみる覽
題しらす　治部卿
かつきえてはかなきよとは知なからなを降雪や我身なるらん
見し人は昔かたりに成にけりいかて殘れる我身成らん　源頼家朝臣
道命法師
みる人はみななく成ぬわれをたれ哀とたにもいはむとすらむ
とものなくなれりけるにあとなる人のもとへいひつか
はしける　賀茂成保
誰とてもとまりはつへき身ならねとまつは先立人そかなしき
きたのみやかくれ給つる比　如覺法師
世中はかくこそみゆれつく〴〵と思へはかりのやとり成けり
新院人々に百首歌めしけるに　藤原顯廣朝臣
世中を思ひつられてなかむれはむなしき空にきゆるしら雲
兵衛
いつまてとのとかに物を思らん時のまをたにしらぬ命を
よのなかはかなくきこゆるころつれなきこゝろを人々
よみけるに　心覺法師
はかなさをおとろかぬにそ深きよのねふりの程は思しらるゝ
題しらす　花山院御歌
長きよのはしめをはりもしらぬまにいくその事を夢とみつ覽
權僧正永縁
なかきよの夢のうちにてみる夢はいつれうつゝと如何定めむ
前參議俊憲
あすもありと思ふ心にはかられてけふをむなしく暮しつる哉
新院人々に百首歌めしけるに　兵衛
西とのみ心はかりはすゝめともいかなる方にゆかむとすらん
題しらす　大江嘉言

たとふへき方こそなけれよの中を夢もむなしな覺ぬ限は
藤原頼輔
ね覺して思ひとくこそ悲しけれうき世の夢もいつまてかみむ
小大君
あるはなくなきは數そふ世中に哀いつ迄いはんとすらむ
大齋院
いつれの日いつれの山の麓にてむせふ煙とならむとすらん

續詞花和歌集巻第十九　物名

さくなむさ　少將藤原義孝
櫻はな山にさくなむ里のにはまさると聞をみぬかわひしさ
野宮歌合にしほにをよめる　日　向
高砂の山のをしかは年をへておなしおにこそ立ならしけれ
はしはみ　堀川右大臣
あやしくも風にをるてふさくなきのはしはみよりも長くみゆ覽
つくくし　よみ人不知
雲かゝる浦にこきつくつくし舟いつこかけふのとまり成らむ
くるみのから　源俊頼朝臣
おいのくるみのからくのみ覺ゆるはおもてに涙のたゝむ成けり
たちまのくになるいつしの宮といふやしろにてなのりそといふものを題にて人の歌よめといひけれは　源重之
千早ふるいつしの宮の神のこま夢なのりそやたゝりもそする
かきのから　大貳三位
さかきはゝ紅葉もせしを神かきのから紅にみえわたるかな
おものたな　少大進
月のおものたなかみ川に宿るこそひをのよるみる形見成けれ
とりはゝき　藤原敎長母
秋の野に誰をさそはむ行歸りひとりはゝきのみるかひもなし
ふりつゝみ　肥後
池もふりつゝみくつれて水もなしむへかつまたに鳥のゐさらん
すたれかは　中納言定頼
跡たえてとふへき人もおもほえす誰かはけさの雪ま分こむ
みつのみ　僧都有慶
いなり山しるしの杉の年ふりてみつのみやしろ神さひにけり
さつきやみといふ五文字を句のかみにをきてよめる　肥後
さゝのはの露は暫も消とまるやよやはかなき身をいかにせん

聯歌

上東門院后宮と申ける時うへの御つほねにおはしますに道信朝臣山吹華をもちてとをるにかたちのはしに見えけれは花をさしいるとて歌の本をいへりけれはおくに侍をかれとれと宮のおほせことありけれはとるとてすゑをいひける　伊勢大輔
くちなしにちしほやちしほ染てけりこはえもいはぬ花の色哉
つまとをならしてをとつれけれはしらすかほにて女のうたのかみをいひけれはしもをつけゝる　藤原實方朝臣
誰そ此なるとの浦に音するはとまりもとむる蜑の釣ふね
河内守爲政くにゝ侍けるに雪のふれるあした山口重如

まうてきたりけるに連歌せよと申けれはまへに侍ける
さふらひのすゑはつけける
雪ふれはあしけにみゆる生駒山いつ夏かけにならむとすらん
内にていみしくしみける夜道信朝臣かくいひけれはすゑをつけける　　藤原實方朝臣
あしのかみひさよりしものさゆる哉こしのわたりに雪や降覽
あやしけなるきくの花をみて源頼茂朝臣の歌のもとをいひけれはすゑを　　源　頼　成
菊の花すまひ草にそにたりけるとりたかへてや人のうへ劔
日吉社の禮拜講といふことに定誓律師かはらけとりて歌のなからをいへりけれはすゑを　　壽圓法師
もとゝりのなかにかくせる玉なれはかみの光もけふや增らん
夕くれにからすのいなりの方へとひ行をみて頼綱朝臣の歌のもとをいひけれは　　藤原信綱
いなり山ねきを尋て行鳥ははふりによはの露やおつらん
藤原盛房越前のあすはの宮にまいりて又日かへるとてかくいへりけれはすゑをともなるさふらひつけゝる
昨日きてけふこそ歸れあすはより三日のはら行心ちこそすれ
民部卿長家許に不斷經よみける夜番に侍けるに火をけにひもなかりけるをみて慶暹律師の歌のもとをいへりけれは　　永源法師
このとのは火桶に火こそなかりけれかの水かめに水はあれ共
堀川院御時中宮の御方にうへわたらせ給て藏人永實をめしてこそに侍けるたき物のひをけをめしにつかはしたりけれはゑかきたるきりひをけをとらすとて周防内侍歌のすゑをいへりけれはとるとて　藤原永實
花やさきもみちやすらんおほつかな霞こめたるきりひをけ哉
かりしけるにとりのたてるあとにかひこの有けるをみてともに侍るものゝ歌のかみをいへりけれはすゑを付たりける　　源　義　光
ほろ〳〵と鳴てやきしの立つらんかひこも我も歸るましとて
大内のおほかきのやふれたるをみて琳賢法師のいへりけるすゑをつけゝる　　心也法師
大垣はされはかりこそ殘りけれ方なしとてもいへはあらしな
前中宮の越後あみたかうをこなひけるに僧とものゐたる所に雪のふりいりけるをみて歌のかみをいひいてたりけれはすゑを　　相圓法師
極樂に行かゝるともみゆる哉空より花のふる心ちして
法性寺入道前太政大臣の歌はもとを申てのへりけれは　　源　俊　重
かり衣はいくのかたちしおほつかな我せこに社問へかりけれ
くまのゝみちにてある山ふしの歌のすゑをいひたりけれはもとをつきける　　平忠盛朝臣
見わたせはきりへの山も霞つゝあきつの里も春めきに皃
新院の御時御方達のところにて人々におほみき給てよもすからあそはせ給けるに左京大夫顯輔にたひことに人々さけをすゝめけれはゑひてなにとなくいへりけることを歌にとりなしてすゑをいひける　　前左京大夫敎長
あさなへの心ちこそすれちはやふるつくまの神の祭なれと
道風か手本をかりけるなかに櫻のはなのありけるをみて人の歌のもとをいひかけたりけれは

讀人しらす
櫻花みちかせふかはいかゝせむ散さぬてをそまつならふへき

續詞花和歌集卷第二十 戲咲

百首御歌中に　新院
れの日すと春の野毎に尋れは松にひかるゝ心ちこそすれ

中原致時か家ちかとなりに侍けるに紅梅のさけりける
をうなしておりにつかはしたりけるをさいなみて木に
なむゆひつけゝるときゝていひつかはしける
惟宗經泰
梅のかを袖にうつすとする程に花ぬすむてふなはつきにけり

題しらす　賀茂重保
あやなくも風のぬすめる梅のかにおらぬ袖さへ疑はれぬる

花のもとによりふしてよめる　道命法師
あやしくも花のあたりにふせるかなおらは咎むる人や有とて

題しらす　仁和寺宮
朝ねかみみたれてなひく玉柳たれとふしきのすかた成らん

源仲正
さよふけてぬすまはれなく郭公聞あらはしつ老のね覺に

仁和寺宮
草の庵の軒にあやめをふきたれはひとひさしさす心ち社すれ

江侍従
夏のうちははたかくれてもあらすしており立にける虫の聲哉

とくさのはのおちたるに露のをけるをみて
小大君
しなのゝやとくさにをける白露はみかける玉とみゆる成けり

題しらす　法性寺入道前太政大臣
九重にたゝめる玉のみえしよりかたふく月のねりのほる哉

新院人々に百首歌めしけるに　小大進
こま〳〵とかく玉章にことよせてくる初鴈の數そよまるゝ

山にかたわきて花をつくりけるにかたきのかたにをみ
なへしをつくりたりけるを人々おかしかりけれはねた
くてよみてむすひつけゝる　僧都親教
草も木も佛になるといふなれと女郎花こそうたかはれけれ

とし比御導師にて侍に人の申侍けれは
教源律師
のふしにておほくの年はへぬれ共またこそふれね女郎花には

ともの山里に侍ける許へまかれるにもみちのちりかゝ
りけれは　江侍従
紅葉々を尋るたひにあられともにしきをのみも身にきつる哉

題しらす　大僧正覺忠
逢ことはかたをとりする山烏今はかくとそれはなかれける

源親房
しろらめやあはてひさしの槇柱ひとま〳〵に思ひ立とは

ものへまうてける女房三人ありけるかみすみにたちて
ものいふをみていひやりける　法橋忠命
打みれはかなへの足にゝたる哉はけむねすみに成やしなまし

返し　女房
打みれはなへにもにたる鏡かなつくまの數にいれやしなまし

まつり見ける女車よりかはほりをおとしたりけるをと

りてかきつけてつかはしける　藤原道信朝臣

いとむけに鳥なきしまにあられ共かはほりにこそ思つきぬれ

人のたはふれをしてかたみにのりなとして後ひさしくをともせぬに女のもとよりはる駒のゝるをくるしと思ふにやなといへりけるかへしに　右衛門督公保

くるしとも思はれはこそ春駒のゝれと心はなをはやるらめ

あひくしたる女もいとはしきさまに申ければ人のくにへまかりて年月さそらへけるもはたことなることもなかりければ京へかへりきてもとのところにはさるへきこともやあらむとつゝましくてまつむまのくらをつかはしてまいりきてなん侍これをきたまはれと申けるをはしたなくいひて返したりければ　よみ人不知

春駒の野かひし程にあくかれてくらもをかれす成にける哉

久しくをともせぬ人に　大輔

契りしはやふれにけりな板庇ことの外にもまはらなる哉

新院人々に百首歌めしけるに　小大進

きてかへる物ともしらて夏衣ひとへ心はすかされにけり

題しらす　源俊頼朝臣

色々に君かきせたるぬれ衣はいつはりしてやぬひかされけん

さかみ

思はしや苦しやなそやと思へ共いさや詫しやむつかしのよや

六波羅といふ寺の講の導師にまかれりけるに高座にのほるに聴聞の女房のあしをつみければよみける　良喜法師

人のあしをつむにて知ぬわか方へふみをこせよと思ふ成へし

あひしれる女おとこにかみきられたりときゝてつかはしける　大藏胤材

千早振神もなしとかいふなるをゆふはかりたに殘らすや君

惠慶法師はりまの講師になりてくたるに　權僧正尋禪

打はへて舍人のねやにいる人は播磨かちにやあらむとすらん

人のせうそこしたりける返事を物かきけるふてのつゐてに朱にてかきてやれりければをしかへしてまつのけふりの色のくれなゐなるよしをいへりける返事に　玄範聖人

墨の色のくれなゐ深くみえけるは筆を染つゝかけはなるらん

題しらす　源親房

すまの浦にあみくりおろすうけ舟の打かたふきてよを歎かな

こふしの花を人につかはすとて　よみ人不知

時しあれはこふしの花も開けゝり君か握れる手のかゝれかし

ほそちをゝけりけるかゆふたちのしけるまきれにうせにければよめる　少將藤原義孝

ぬす人はほそちをみても雨ふれはほしうりとてや取かくす覽

鯛といふいをに梅花をかさして人のをこせたりけるかのつきたりければ　赤染衛門

春ことに櫻たいとそ聞しかと梅をかさせるかそつきにける

人のおほゐひを尋たるになきほとにてあるまゝに十九やるとて　大中臣能宣朝臣

世の人は海の翁といふめれとまたはたちにもたらすそ有ける

くらまの別當のしたしき人のもとよりめつけといふものこのほとおほかた見えれはえたてまつらすといへりけるに　辨乳母

いと惜や鞍馬のめつけいかなれはふつとみえすと云にか有覽

内裏御屏風にかみかふりしたるほうしのはらへしたる所に　　大中臣能宣朝臣

物しらぬをはり法師のはらへをはかしら包めるかみのみやきく

くまのゝ大鳥の王子のほくらにかきつけたりける歌

大鳥のはくゝみ給ふかひこにてかへらんまゝにとはさらめやは

此歌ある人意尊法師か歌とも申

太神宮にまいりけるによめる　　増基法師

音にきくかみの心をとる〳〵とすゝかの山をならしつる哉

たゝすのやしろにまいれりける女房のともなるめのわらはの御前にてしとをしたりけれはあつかりのさいなみのゝしるをきゝて　　女　房

千早振たゝすの神のみまへにてしとすることのかくれなき哉

筑前守にて國に侍に日のいたくてりけれはあめのいのりにかまとの明神にかゝみたてまつりけるにそへたりける　　藤原經衡

雨ふれといのるしるしのみえたらは水かゝみとも思ふへき哉

おやを海へおとしいれたるきこへある人の七月十五日おやのために盆供そなふるをみて　　道命法師

わたつ海に親をゝし入てこのぬしのほむするみるそ哀成ける

をむなのよきつみやめすとうりありきけるをきゝて

よみ人しらす

よきつみと云とも誰もかはしかしおとりてつくる人しなけれは

かまを錢にかへけるにこよなくいひおとしけれはうるものゝよみける

地こくのや鼎にもこそにへたまへおほくのせになおとし給そ

返し　　藤原仲子

かふよりもうろ社罪はをもけなれむへこそ釜の底にみえけれ

中納言家成家歌合を歌をよみつゝ判しけるに右歌の心ゆかぬことのみ有けるつかひによめる

左京大夫顯輔

とにかくに右は心にかなはれはひたりかちとやいふへかる覽

濟圓仲胤　かたちのにくさけなるをかたみにをにとつけてなんいとみわらひけるに濟圓公請にまいらすとて綱所の下部つきて房をこほちたくなりときゝていひつかはしける　　僧都仲胤

誠にや君かつかやをやふるなるよにはまされるこゝめ有けり

返し　　僧都濟圓

破られてたち忍ふへき方もなし君をそたのむかくれみのかせ

右續詞花集以織部正乗尹及岸本永膺秘本挍正

群書類従巻第百四十九

和歌部四

玄玉和歌集序

夫和歌者起レ自二八雲之古風一。傳爲二吾朝之習俗一。用二之郡國一。用二之郷人一。諷喩之道莫レ先レ於レ此。爰代々謌仙奉二詔命一而撰二集之一。家々好事。稱二打聞一而編二次之一。而身既爲二桑門之叢一。品詞雖二泥花之藻一。只愁摭二近代綺靡之句一。式爲二下愚素閑之玩一。千餘首成二部數十有二一。連二卷軸一號曰二玄玉和歌集一而已。

やまとうたはやくものかせひさしくつたはりて。世々にさかりなることわさとそなりにける。むかしはこゝろふかくことはすなをにして。人をおしへ物をいましむるたよりなりき今もまたそのなかれを思へるともからなきにしもあられと。ときうつりことかはりて。うけるすかた雲のことくにまかひ。しつめるおもひいつみのことくにわく。つゐに耳をたのしみ。めをよろこはしむるもてあそひとして。上にも是をすてたまはす。下にもいとふものなかりけり。しかれはすなはち。みことのりをうけてゑらひたてまつること。そのかすおほくかさなりて。あきつしまのなみしきりにきこゆ。また家々のうちきゝなつのこすゑよりもしけくして。つくは山のかけをあらそへり。爰に殘れるちりを。かきのもとにたつれて。あらたなるともを花のしたにれかふもの有。身いやしけれはともなふものまれにして。つれ〳〵のなかめなくさめかたきあまりに。ちかきよのうたをあつめて玄玉和歌集となつく。ちうたあまり。あはせて十二卷とせり。はしめに神祇をつらね。をはりに釋敎をゝけり。たま〳〵あとをいにしへにたつとひて。なかきちきりをまことのみちにむすはむとれかふなるへし。そも〳〵玄なれともきゝつたへさるはいたつらにもれぬ。玉なれとも見をよはさるはひろふことなし。うらみを殘す事たゝ是に有。のちにみむ人。たやすくあさけるへからすとなむいふことしかり。

玄玉和歌集巻第一　四十三首

神祇歌

攝政前太政大臣右大臣におはしましけるとき百首歌よませ給けるに神祇のうたとて　皇太后宮大夫（俊成卿）

神風やいすゞの川の宮はしらいく千代すめとたて初めけむ

百首歌の中におなし心を　法性寺座主法印（慈圓）

なかむれはひろき心も有ぬへしみもすそ川の春のあけほの

やはらくる光にあまる影なれやいすゞ河原のあり明の月

中宮はしめて入内の時の御屛風に春日祭書たる所をよませ給ける　攝政前太政大臣

けふまつる神の心やなひゝ覽してに涙たつさほの川かせ

同御屛風に賀茂の下社神館邊に祭したる人有處を　前左大臣

いくかへりけふのみあれに葵草たのみをかけて年のへぬれは

賀茂の臨時祭かきたる所を　皇太后宮大夫俊成卿

月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山あゐのそて

大納言實家卿

百敷や庭火たくよの朝くらに返す〳〵も神やなひかむ

題不知　右京大夫季能

あさからぬちかひ思へは石清水すゑたのもしき流れなりけり

石清水の社の歌合に社頭の月といふこゝろをよみはへりける　右京權大夫藤原隆信

榊葉に霜もをきけり岩し水川のこほりの影さゆる夜は

四位しはへりてのちの春石清水の臨時の祭の日内裏の事はてゝ舞人ともきたの陣にいてゝ侍りけるほとにあふきにかきて侍從家隆か許につかはしける　左近衛少將藤原定家朝臣

立歸り猶そ戀しきつらねこしけふのみつのゝ山あゐのそて

かへし　侍從藤原家隆

やまあゐのしほれ果ぬる色なからつられし袖の名殘はかりそ

きつきおほやしろにまうてゝよみ侍ける　寂蓮

やはらくる光や空にみちぬらし雲ゐをわくるちきのかたそき

いつも河ふるき湊を尋れははるかにつたふわかのうらなみ

嚴嶋社にまうつとてうしまとのとまりにて海邊の松といふ心を人々讀侍けるに　前左大臣

はる〳〵となきたるあさの岩かれにまつとはしるし宮嶋の神

住吉の松に書付られける　前大僧正覺圓

神代より松のみとりのかはられはむかしにあへる心地社すれ

隆寛法師

うしとみる此世のほかに身も成ぬ月影きよきちきのかたそき

後白川院天王寺に百日籠りまし〳〵ける時人々すみよしにまうてゝ讀侍りけるによめる

すかはらや伏見ならねといさ爰に我世はへなん住よしのはま

右衞門佐

尋れ來て心のとまる住吉に岸うつ浪のなとかへるらん

百首のうたよませ給けるに神祇の心を讀せ給ける　攝政前太政大臣

すみわたるみたらし川の底みれは清きは神のこゝろのみかは

賀茂にまうてゝ雪のふり侍りけれはなにとなくむかしのことなとおもひ出て　大納言實家卿

庭の雪にむかしの跡を思ふにも出もやられぬしめのうち哉

いまた中納言になられさりける時人々まうてきて社頭の藤といふ心をよみ侍りける　左大臣

春日山はな咲ふちの中にまたひらけもやらぬ枝も有けり

百首の歌の中に神樂のこゝろを　法性寺座主法印

神かきやして吹かせにさそはれて雲井になひく朝くらのこゑ

かものみやの歌合に述懷のこゝろをよめる　前民部少輔源定宗朝臣

さりともとたのむ心になくさむやかつ〳〵神のしるし成らむ

三輪のみやの歌合とて人々にうたよませ侍りけるとき
はるの歌とてよめる　殷富門院大輔
敷嶋やみわの山もとほの〴〵とかすむは春や尋ねきぬらむ
かものみやに百首の歌奉られける中に
皇太后宮大夫俊成卿
久かたの月のみやこもいかゝあらん賀茂のかはらの有明の空
きふれ川岩こすなみも氷りゐて冬そしつかに月はすみける
百首の歌中に神樂の心をよめる　隆信朝臣
みたらしに心をきよくすましつゝなを立かへるさゝ浪のこゑ
石清水社の歌合に寄神述懐といふ心を
法印靜賢
さゝ波の聲もあらすなよもの海にあきつ嶋もる神ならは神
賀茂の宮の歌合にかすみの心を　法印範玄
神山は霞にけりな榊葉のかをとめてこそゆくへかりけれ
春日の宮の歌合に社頭の月といふこゝろを　已講範圓
くまもなく月すみぬれは三笠山なへて木すゑにかくる白ゆかな〔ふ脱〕
春日の社に百首歌たてまつられける中に
皇太后宮大夫俊成卿
世をすては吉野のおくに住へきをなをたのまるゝ春日山かな
攝政前太政大臣右大臣におはしましける時の百首の歌
の中に讀侍りけり　俊惠法師
三笠山たかき藤のうら葉にはわきて春日もまつやさすらむ
神祇歌とて　法性寺座主法印
もろ人のねかひをみつの濱かせに心すゝしきしてのをとかな
皇太后宮大夫俊成卿
ひえをやま岩きりとをす谷川のはやきしるしをなを頼むかな
日吉社にて月をみてよめる
隆寛法師
みたひまてこの下露にやとりこし光に色をそむる月かな
北野社にて人々歌よみ侍りけるとき時雨のうたとてよ
める　鴨長明
しめのうちは心してふれ村時雨ぬれきぬほしに人もこそくれ
題不知　圓位法師
流れたえぬ波にや代をはおさむらん神風すゝしみもすその岸
さやかなる鷲の高ねの雲まより影やはらくる月よみのもり
後白川院位におはしましける時やそ嶋まてはへりける
にすみよしにてよみ侍りける　紀二位
すへらきの千代のみかけにかくれすは今日住吉の松をみましや
松の歌とて　皇太后宮大夫俊成卿
うきなから久敷世をそ過にけるあはれやかけし住よしの松
中宮月次の御屏風に五節參入かきたる所を
左大臣
雲の上に玉ものこしを引つれてのほりそやらぬ天津をとめ子
左少將定家朝臣
白妙の天の羽衣つられきてをとめまちとる雲のかよひ路
同御屏風に神樂したる所をよませ給ける
攝政前太政大臣
神代よりなかく雲ゐにますかゝみひかりをかはす明星のこゑ

玄玉和歌集巻第二 六十四首

天地歌上

月次の御屏風にすみよしにかすみたち渡れりけるをよませ給ける　攝政前太政大臣

さひしさはなを住吉の朝ほらけ松やはかすむ難波江のはる　左大將

なかめやる遠里をのはほのかにて霞にのこる松のかせかな　皇太后宮大夫俊成卿

霞の歌とて

明石より ゐしまをかけてかすめとも霞の上も沖つしら波　三位中將公衡

題不知

唐を霞のうちに思はせてまつらの興の春の明ほの　皇太后宮大夫俊成卿

大原野にまうてゝ松原の霞をみて

春かすみ立にけらしなをしほ山小松か原のうすみとりなる

攝政前太政大臣右大臣におはしけるとき歌合せさせ給けるに霞のうたとて　太宰大貳重家

たちわたる春のかすみもわかれぬは煙になるゝしほかまの浦　寂蓮法師

立歸りくるとしなみや越ぬらん霞かゝれるすゑのまつ山　俊惠法師

たつのゐる鹽ひのかたをみわたせは春の霞のみちにける哉

百首歌の中に春の歌とて　法性寺座主法印

あつまには絕ぬけふりをたよりにてむろの八嶋やまつ霞む覽

題不知　定家朝臣

思ふこと誰に殘して詠むかむこゝろにあまる春の明ほの

前左大臣家の十首歌中に遠村霞と云こゝろを　皇太后宮大夫俊成卿

新勅 朝戸あけて伏見の里になかむれは霞にむせふうちの川浪

百首歌の中に霞籠行船といふ心を　寂蓮

中々にみるめやよそに成ぬらむ霞をかつくあまのつり舟

歌合に霞の歌とて　三位中將公衡

大かたは絕てとなりもなけれとも霞につゝく春の山里

題不知　俊惠法師

何とこは音羽の山のゆふ霞人めはかりのせきかたむらむ　隆信朝臣

分入し秋のけしきにかはれとも霞もふかし荻のやけ原　前左大臣

けふもまた花まつほとのなくさめになかめ暮しつ峯の白雲

百首歌中に春の歌とてよめる　隆寛法師

命をはみれの霞にまかすへしみ山の雲よをのれかれなは　晴眞法師

山ふかみ世にふる道はたえぬれと峯の霞にはくまれつゝ　從三位經家卿

日にそへて立やかされむよしの山霞の衣またひとへなり　左大將

おほろ成そらに哀をかさぬれは霞も月のひかり也けり

題不知　定家朝臣

梅花かすみにかほる春の夜はくもるも月の光なりけり　前播磨守藤原隆親

何ゆへにかすむ梢をおもふらん花なきみれはさもあらはあれ

望山待花といふこゝろを　皇太后宮大夫俊成卿

山さくら咲やらぬまは暮ことにまたてそみつる春のよの月

賀茂の社の歌合に霞をよめる　顯昭法師

朝かすみきえ行まゝに高砂の松のみとりのふかくなる哉

覺盛法師

なろみかたとまり尋ねて行舟を波まにやとすゆふ霞かな

藤原親盛

吉野河とをつかは風春めきて霞なかるゝ明ほのゝ空

俊惠法師

しめはへてしつのあらまく小山田の春のかこひは霞成けり

題しらす　法橋宗圓

雪たにもまた消やらぬ柴の戸をかされてうつむ春霞哉

ならの歌合に霞のこゝろをよめる　藤原隆親

春霞へたてぬたにも行かよふ宿はまれなるみ山への里

海邊の霞といふ心をよめる　顯昭法師

友ふれは霞にきゆるこしの海はるの波路はさひしかりけり

歌合に霞のこゝろをよめる　朝惠法師

ゆふかすみ浦こく舟にかけてこそ難波の春はみるへかりけれ

題不知　太皇太后宮大進淸輔

東路やあさたつ空に詠れはかすみにしつむうき嶋のはら

大江公景

朝かすみふかくみゆろや煙立むろのやしまのわたり成らん

圓位法師

はるかせや岩間の氷ふきとけはまた末むすふ人も有けり

左大將

ふりつみし高根のみ雪とけにけり淸たき川の水のしら波

千里まてけしきにこむる霞にもひとり春なき越の白山

大江公景

住よしの岸うつ浪とみゆるかな松の木かけに殘るしら雪

百首歌の中に春雨をよめる　隆信朝臣

はれくもり定めなかりし空よりもしつかに袖をぬらす春雨

侍従家隆

行衞なくかすめる空に雨ふりてなかめもあえぬ春の夕くれ

五月雨を讀せ給ける　攝政前太政大臣

五月雨はおふのかはらのまこも草からてや波の下にくちなむ

大納言實家卿

五月雨はいさら小河を便りにてそともの小田を海になしつる

右衞門督隆房

五月雨はあさ澤をのもなのみして深く成行わすれ水かな

皇太后宮大夫俊成卿

さみたれは岩なみ洗ふきふれ川かはやしろとは是にそ有ける

五月雨は水上まさる泉河かさきの山も雲かくれつゝ

資盛卿家の歌合に五月雨をよめる　寂蓮

花の春月の秋たに人とはぬしはの庵のさみたれの空

題不知　性我法師

浦かせもしほたれにけりきさかたや雲のとまふく五月雨の比

素覺法師

山影の雫にゝころさらし井のゐつゝもみえすさみたれの頃

俊惠法師

五月雨に水かさまされはこやの池のあしのは末にかはつ鳴也

晴眞法師

よとゝもにはれぬ心はさもあらはあれ[　]空に五月雨やせし

百首歌中に五月雨を　左少將定家朝臣

山里の軒はの梢雲こえてあまりなとちそ五月雨の空　覺盛法師
五月雨はつたの入江のみをつくし見えぬも深きしるし成けり　平康頼
さみたれはかつみか葉すゑ水こえて家路にまとふみつの里人　藤原親盛
日數ふるひらのみなとの五月雨にこかれといつるあまの釣舟
泉留客といふ心を　大納言實國卿
堰とむるし水にかくるしからみはくる人をさへやらぬ也けり
題不知　三位中將公衡
さらぬたにすゝ鋪松の下陰にせきかぬはかり出るまし水　家隆
せきかぬる山した水をむすふ手の雫に秋の露そこほるゝ
泉爲夏栖といふ心をよめる
故郷は岩もる水にすみかへてよもきや庭のあるし成覽
題不知　圓位法師
道のへの清水なかるゝ柳かけしはしとてこそ立とまりけれ
泉靜來枕といふこゝろをよめる　俊惠法師
あか月に夜や成ぬらむ岩まもる水のしら玉音のすゝしき
瀧の糸の岩にみたるゝ音きけはまくらに秋そくる心ちする
題不知　顯緣法師
岩波の木すゑにかゝる心地してむすはまほしき庭の松かせ
御屏風に納涼したる所を　皇太后宮大夫俊成卿
立とまるほとたにすゝし山の井に住らむ里の人をしそ思ふ　左大將
山陰やいつる清水のさゝなみに秋をよすなりならのした風
をのつから木のまもりくる日影社さすかに夏のしるし也けれ　左大臣

玄玉和歌集巻第三　二百四十一首

天地歌下

月の歌とてよませ給ける　崇德院御製
只管にいとひもはてしかはかりの月をたもてるこのよなり覽
前左大臣
思ふことなくてなかめし昔たに月にこゝろの殘りやはせぬ
按察大納言公通卿
秋かせは夜さむ成とも月影に雲の衣はきせしとそおもふ
題不知　大納言實家卿
空はれて月すみのほるうれしさやかたふくまゝの歎き成らん
百首歌中に月の歌とて　左大將
さらぬたにふくるはおしき秋のよの月よりにしに殘るしら雲
今宵たれすゝのしのやに夢さめて吉野の月に袖ぬらす覽
前左衞門督公光
虫明のせとの鹽ひの明かたになみの月かけ遠さかるらむ
右衞門督兼光
あたしのゝ花のえことにをく露のかすに影すむ秋のよの月
參議敎長
秋風になひくをかへの玉さゝに露もてみかくゆふ月夜かな
左大將
限りありて更るもおしき月影のいかにせむとて雲かゝるらん

月たにもなくさめかたき秋のよの心もしらぬ松のかせ哉
法性寺にて十首歌人々よみ侍りけるに月の歌とて
皇太后宮大夫俊成卿
月清み都のあきをみわたせは千里にしける氷なりけり
攝政前太政大臣右大臣におはしましけるとき歌合せさせ給けるに月のうたとて
前右京權大夫賴政
遠かたやあさつま山にてる月のひかりをよするしかのうら浪
題不知　刑部卿頼輔
秋のよは身のうき事そ忘れぬる月みるほかの心なけれは
百首歌中に月のうたとて　三位中將公衡
なかむれは涙の玉にみかゝれて袖にそ月の色はみえける
世中をおもひはいれし袖の雨にたくはゝ月のくもりもそする
歌合に月歌とて　侍從家隆
大空もひとつにみゆる波の上を光にこむる秋のよの月
田家曉月といふこゝろを讀せ給ける　二品法親王仁和寺
あけぬとはよひよりみつる月なれと今そ門田に鴫も立なる
百首歌中に月のうたとて　法性寺座主法印
みか月のほのめき初る門田よりやかて秋なる空の通路
秋のよの月のあたりのむら雲をはらふとすれは荻の上風
おもひ入心のすゑに月さえてふかき色ある山のおくかな
題不知　前右京權大夫賴政
秋のよも我よもいたく更ぬれはかたふく月をよそにやはみる
太宰大貳重家
月きよみ思ひそあへぬ山高みいつれの年の雪にか有らむ
世をのかれてつきのとし秋月あかく侍りけれは
皇太后宮大夫俊成卿
思ひきやわかれし秋にめくりきてまたも此よの月をみむとは
崇德院百首歌の中に
月よりも秋は空こそ哀なれはれすはすまんかひなからまし
夢さめて後の世までの思ひ出にかたるはかりもすめる月かな
つゆしけき花の枝ことにやとりけりのはらや月の光成らむ
法印靜賢
山端はわれもちかくや成ぬらんかたふく月をみるとせしまに
法印範玄
よひのまに月は入ぬる秋のよのなかき思ひはなくさめそなき
すみのほる心にたくふ身なりせは山のあなたの月はみてまし
法橋登蓮
月みれば秋の心もわすられてしはしよそなる葛のうら風
月前遠情といふこゝろを　隆信朝臣
さらしなやおはすて山もまたみぬに思ひしらする夜半の月哉
皇太后宮大夫俊成十首歌人々によませ侍けるに月の歌とてよめる　前民部少輔盛方朝臣
はりまかた明石のせとにすむ月の□まさるうらの松かせ
百首歌中に月のうたとて　寂蓮
いひしらすせめても月のさゆる夜はうす霧わたるをは捨の山
天河月や波まのみをつくしふかきあはれをよそにみすらん
うらやまし空行月のみや人と身をさためてもすめはすむ也
法性寺座主法印
なかめこし心は花のなこりにて月に春あるみよしのゝ山
清みかた月のひかりのさえぬれは波のうへにもしもは置けり
少納言藤原有家朝臣
秋のよは野中の清水ぬるけれと月すみぬれはつらゝゐに皃

百首歌中に月歌とてよめる　性我法師
木のまより月かけおちぬ暮たにも秋にたゆへき我こゝろかは
題不知　右近衛少將藤原成家
月のすむ清瀧川はこほりして岩こすなみのをとそかはらぬ
前伊豆守源仲綱
早き瀬も流れさりけり月影はたのかつらゝをしからみにして
隆信朝臣
何事をおもふともなき人たにも月みるたひになかめやはせぬ
家　隆
よしさらは心はつくせ秋の月いりなん後のものもおもはし
崇德院さぬきの國におはしましける時修行のつひてに
參りて月のあかく侍りけるよゝみて奉りて侍りける
寂　蓮
昔みし月は雲ゐの影なから庭はよもきの露そこほるゝ
民部權少輔藤原知資
よる浪もひとつ哀にさえゆけは月にをとあるよさのうら風
藏人おりてのちの秋月をみてよめる　源仲綱
なかむれはぬるゝ袂にやとりけり月よ雲井の物かたりせよ
題不知　隆信朝臣
くまもなく月すむ峯になかむれは千里は山のふもと也けり
藤原知資
里すみて待よもふけぬ秋の月有明の空をいかにせよとて
石清水の歌合に月の歌とて　法印靜賢
おもひきやわかのうら風みにしめて吹上の濱の月をみむとは
題不知　法橋宗因
松かせに月かけよするしら波のかへるもおしきしほかまの浦
これもみるうき世のなかの夢の中に思ふもおしき夜半の月哉
信詮法師
はかなくも草葉の露にやとりつゝ月さへもとの雫とそなる
攝政前太政大臣右大臣におはしましける時歌合させ給
けるに月のうたとて　俊惠法師
照月のすむへき夜半に成ぬれは雲もこゝろは有けるものを
中宮月次の御屏風に月池にうつりたる所をよめる
左少將定家朝臣
あまつかせみかく雲井にてる月の光をうつすやとの池水
歌とて　寂　蓮
月影はいとゝ隈なく空さえて秋の雨ふる松のかせかな
月さゆるみほか崎まて見わたせは氷をとをるしかのうら波
曉月のこゝろをよめる　覺　蓮
何となく明ぬとつくる鳥の音もうらめしきまてすめる月哉
道　因
山のはに雲のよこきる宵のまは出ても月そなをまたれける
身につもるわかよの秋のふけぬれは月みてしもそ物は悲しき
因（圓賢）位法師
すつとならは憂世を厭ふしるしあらん我みは曇れ秋のよの月
かくれなくもに住むしはみゆるともわれから曇る秋のよの月
うき世にはほかなかりけり秋の月なかむるまゝに物そ悲しき
源　季貞
いにしへにかはらぬ月のかけみれは共になかめし人そ戀しき
藤原公信
なかむれはあはれをそむる秋のよの月そ心の色はそめける
大中臣定雅

秋の田のかりねの床のいなむしろ月やとれともしける露かな

田家見月といふこゝろをよめる　惟宗廣言

よもすから稻葉の風を身にしめてそともの小田に月をみる哉

題不知　中原有安

かくはかりむかしを忍ふ心をは月みる夜半の袖そしりける

殷富門院新少納言

影きよみ立よる波のかすことに月もてあそふよさのうらかせ

大　輔

はかなくて雲と成なんよなりともたちはかくさし秋のよの月

皇嘉門院別當

打はらふ枕のちりもくもりなくあれたるやとのてらす月かけ

なかむれは月には袖のぬるゝやと物おもひなき人にとはゝや

左大將家の百首歌の中に月のうたとてよめる

左少將定家朝臣

床の上のひかりに霜のむすひきてやかてさえ行あきの手枕

月きよみはねうちかはしとふ鳥の聲あはれなる秋かせの空

さらしなはむかしの月のひかりかはたゝ秋風そおはすての山

月前遠情といふ心を　太皇太后宮小侍從

いとふらむくめちの神のけしきさへ面かけにたつ夜半の月哉

百首歌中に月歌とて　攝政家丹後

きよみ潟なきたるおきに漕出て雲なき夜半の月をみるかな

法性寺座主法印

山のはにをくる心の色にいてはあらぬかけそふ月かとやみむ

有明の月の行衞をなかめてそ野てらのかねはきくへかりける

山のはにあかて入ぬる月かけは松のあらしにのこるなりけり

入ぬれと涙の露に影とめて月はたもとに有明のそら

左大將

秋そかしこよひはかりのねさめかは心つくすなあり明の月

ひとりねの夜さむになれる月みれは時しもあれや衣うつこゑ

うき世いとふこゝろのやみのしるへかな我思ふ方に有明の月

百首歌中に月歌とて　皇太后宮大夫俊成

月みれはなくさめかたしおなしくはをはすて山の都なりせは

師光家の歌合に月歌とて　俊惠法師

久方の天のかはらに雲きえてなきたる夜半の月をみる哉

百首歌中によめる　左少將定家朝臣

さむしろに待夜の秋のかせふけて月をかたしく宇治のはし姫

月清みねられぬよしも唐の雲の夢まてみる心地する

さひしやな明石の月に秋くれて波のこなたに衣うつこゑ

題不知　登蓮法師

月影に鹽みちくれは難波かたうたひて出るあまのつり舟

清みかた月すむ夜半の浮雲はふしの高ねの煙なりけり

河上月といふ心をよみ侍りける　信定法師

よしの河岩こす波にやとりきて光をくたく秋のよの月

故鄉月といふこゝろを讀る　寂圓法師

さひしけや世になか岡の里ふりてあれたる露にひとりすむ月

海邊の月といふ心を　大納言實家卿

もしほやく烟なたてそあま人の明石の月のくまともそなる

古池月といふこゝろを讀る　圓喜法師

かつまたの池はあさちとあらはれて露にそやとる秋のよの月

題不知　源資清

卷向のあなしの宮にたつ民の山かつらとる秋の夜の月

素覺法師

難波かた葦のはかくれすむあまのこやもあらはに照す月かけ
海上月をよめる　朝恵法師
わたの原しほ路はるかにすむ月のいつるも入も興津しら浪
殿上まうしけるとき月をみてよめる　寂念
すみのほる心はおなし空なからよそに雲ゐの月をみるかな
題しらす
難波かたあしまを分てこく舟のをとさへすめる秋のよの月　寂超
このよゝり哀と思へ秋の月なかめてよはひかたふける身そ
故郷月といふこゝろを
ふる里のやともる月にことゝはむ我をはしるや昔すみきと
歌合に海上月といふ心をよめる　藤原兼康
もろ共になみの上にそ出にける月はいつくかとまり成らむ
海邊月といふ心を　隆寛法師
さ夜ふかき月の白なみ峯こえていつらはおきのあはちしま山
歌合に月歌とて　法橋忠慶
扨もなをすみはつましき物ゆへに月にこのよのおしまるゝ哉
素覺法師
なかむれはわれやも忘れぬ有明は月みる人の名にこそありけれ
三輪の社の會に月歌とてよめる　平康頼
世をすては我も入へき山端にまつかくれぬる夜半の月かな　律師證覺
題不知　圓位法師
さらぬたに西に心はすむ物をかたふく月のなにさそふらん
身にしみて哀しらするかせよりも月にそ秋の色はみえける
うき身こそいとひなからも哀なれ月をなかめて年のへにけり
月みはと契をきてし故郷の人もやこよひ袖ぬらすらむ
いつくとて哀ならすはなけれともあれたる宿そ月はさひしき
くまもなき折しも人を思ひ出て心と月をやつしつるかな
世をのかれてはへりける比月のうたとて讀る　寂超
有明の月よりほかに誰をかは山路の友と契りをくへき　寂然
題しらす
かくしつゝ我世も更ぬ月かけのかたふくをのみ歎くへきかは
山路曉月といへる心をよみ侍りける　性我法師
月にふくみねの松かせ音さひし色なおしみそ有明の月
中宮の月次の御屏風に山野に秋風ふきたるところをよ
ませ給ける　攝政前太政大臣
野原より秋の哀をさそひきて籬の萩に風つたふなり　前左大臣
いつも聞麓のさとゝ思へともきのふにかはる山颪のかせ
三輪社の會に秋の歌とて　隆信朝臣
を鹿なく小萩かはらに月さえてなかむる袖に秋風そ吹
題不知　源清貞
なにそとてきえにし人のあとなれや玉しく庭の道芝の露
月次の御屏風に霧をよませ給ける　攝政前太政大臣
常よりもふかくたくもの煙かな鹽屋をこめて霧や立らん　隆信朝臣
磯つたひそこともみえぬ秋霧に立こめられぬ波の音かな
百首歌中に秋のこゝろを　左大將
山賤のたにのすみかに日は暮て雲のそこより衣うつなり
句を定て百首歌人々よまれ侍し中にいなつまといふか

みのこと葉有題の心を　三位中將公衡

いな妻のひかりにまかふ山端にほとなくかよふわか心かな

左少將定家朝臣

稻つまの光もいまはよはりけりたのもの風の聲はかはらて

題しらす

むら雲のたえまのかけにし立てしくれ過ぬるをちの山きは

遠村擣衣といふ心を　大納言實家卿

これやこの朝けのけふり棚引てみえつる里に衣うつこゑ

題不知　右京大夫季能

霧こめて秋のあはれやみえさらむとふ人もなきみ山への里

田家夕風といへるこゝろをよめる　圓經法師

をとつれよ友はいな葉の風そかしひた打いほの秋の夕くれ

題不知

人とはぬ霧のまかきをいかゝせむならはぬ宿の住ゐ成せは

清輔朝臣

霧のまに明石のせとに入にけりうらの松風をとにしるしも

寂　然

きり深き淀のわたりの明ほのによするもしらす舟よはふ聲

百首歌中に秋の歌とてよめる　侍從家隆

あれはてゝ野原につゝく花の色をもとのまかきにこむる霧哉

あさちに露おもしといへるこゝろをよめる　寂　蓮

をく露におれふす庭のあさち原すゑはにもとの雫をそみる

霧隔行舟といふ心をよめる　前齋院長官源有房

いせしまやいそらか崎の朝霧にたなゝしを舟こきかくれつゝ

題不知　圓位法師

哀いかに草はの露のこほるらむ秋風たちぬみやきのゝはら

たれすみてあはれしるらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空

法性寺座主法印

もしほやく煙も霧にうつもれぬすまの關屋の秋のゆふくれ

大かたの峯ふく風に霧はれてかゝみの山に月そくもらぬ

題不知　二條院參河內侍

難波かたうらさひしきは秋霧のたえまにみゆるあまのつり舟

侍從家隆

今よりは雪ふりつまむみ山路に冬をこめてもうつむ霧哉

高野にこもりて侍ける比大原の寂然かもとに山ふかみといふ十首の歌よみてつかはしける中に

圓位法師

山ふかみ槇のはつくる月影ははけしきことのすゑき成けり

やまふかみさこそあらめと聞えつゝをと哀なる谷川のみつ

前左大臣

袖ぬらすさよのね覺の初しくれおなし枕にきく人もかな

題不知　崇德院御製

木からしに紅葉ちりぬる山めくり何をしくれの染むとすらん

皇太后宮大夫俊成

そてぬらす雄嶋か磯のとまり哉松かせ寒み時雨ふる也

百首歌中によみ侍りける　定家朝臣

霰ふる曉かさゝやよそよさらに一夜はかりの夢をやはみる

侍從家隆

くもる夜やなかめはゝれん有明の月は袂にうちしくれ皃

隆寬法師

霜寒きかせのまかきに時雨してさひしき色をそむる山里

神無月もの思ふやとのむらしくれたえまなつくは涙也けり
百首歌中に霜の心をよめる　中原仲業
これや此玉かとみえし露ならん草葉にしろくなける初しも
山寺時雨といふこゝろを讀る　源仲賴男童
吹まよふ嵐くれぬる初瀬山しくれにくもる入あひのこゑ
題不知　圓經法師
木の葉ちる外山のおくに風ふけは時雨にはるゝ冬のよの月
圓位法師
秋篠やとやまのおくやしくるらん伊駒のたけに雲のかゝれる
俊惠法師
月をまつたかれの雲もはれにけり心あるへき初しくれかな
月をこそ哀とよひになかめつれくもるしくれも心すみけり
みよしのゝ山かき曇り雪ふれはふもとの里はうちしくれつゝ
覺　盛
むら雨の山めくりして吹かせに木のはしくるゝ夕暮の空
鴨長明
時雨すと梢にみえしかた岡のならの落葉に霰ふる也
宇治にとまりて侍りける夜山風いたく吹て月のくまなく侍りけれは法性寺座主法印御もとに十首の歌讀て奉りける中に　定家朝臣
杉の屋のゆきあはぬまよりなく霜にむすはぬ夢も月に成ぬる
是を見給て　左大將
霜さゆる杉の板屋のめもあはすさこそは袖に月こほるらめ
同十首の中に　定家朝臣
か□□□のひゝきにたにもなれぬ身のこれさへつらき山颪哉
かへし　法性寺座主法印
おとすへき木のは落ぬる山風をなみにかくさぬうちの川霧
左大臣
秋の色の今はのこらぬ梢より山かせおつる宇治の川なみ
同時あまたはへりける返事の中に　法　印
かりそめと君はみるらむ我宿のいほ哀なるうちの山かけ
百首歌中に　左大將
すきぬるか嵐にたくふむら時雨竹のさ枝にこゑは殘りて
大井川せゝの岩なみをと絶てゐせきの水に風こほる也
しかの山梢にかよふ浦風はこほりにのこるさゝ浪のこゑ
題不知　皇太后宮大夫俊成
かつこほりかつはくたくる山河の岩まにむせふ曉のこゑ
三位中將公衡
霜かるゝ荻のはわたる風とても哀はあきにかはらさりけり
かりくらしかたのゝ眞柴折しきて天の川せの月をみる哉
ゆふ暮は絶ぬ清水もつらゝゐてをとさへとまる逢坂の關
隆信朝臣
片岡の眞柴おりしきさぬるよを所もなかすふるあられかな
霰ふるは山かすその柴の庵に夢みしとてはすまさりし身を
荻のをとは風にのみやは聞えける朽葉かうへに霰降なり
百首歌中に霰の心をよめる　源資淸
たか庵のまとろむ夢を殘すらん霰ふる也のちの篠はら
題不知　橘惟村
雪つもるよしのゝ山の明ほのや雲にまかひし花のおもかけ
遠山の雪といふ心をよめる　宴信法師
かつらきの高まの山やこれならん雲より上にみゆるしら雪
山居雪深といふ心をよみ侍る　寂圓法師

さひしとてまたいとふへきすみかゝは通路のこせ山のしら雪

攝政前太政大臣右大臣におはしましける時歌合せさせ給けるに雪歌とて　皇太后宮大夫俊成

たつぬへき友こそなけれ山陰や月と雪とをひとりみれとも

中將に侍りける時雪の夜月またいとあかく侍りければ大内の女房あまたくして法性寺のかたに行侍りてそのつゐてに師光の家に立いりていさなひ侍りければまかりてよもすからあそひて歸侍てのちいひつかはしける　右衛門督隆房

あはてこそむかしの人は歸りけれ雪と月とをともにみてしか

返事　右京權大夫源師光

月冴る雪かき分てとふにこそふるにかひある身とはしりぬれ

中宮月次の御屛風に雪ふりたる所を　左大臣

雪ふりて所もわかすさく花はこすゑも庭もさかりなりけり

左大將

なかめやる心のみちもたとりけり千里の外の雪の明ほの

同御屛風に氷を　隆信朝臣

池水にさゆるひかりをたよりにて氷は月のむすふ成けり

題不知　中納言長方卿

をしのゐる池の汀の薄氷ふかき契をむすふなりけり

中納言親家卿

宮木ひくそま山人は跡もなしひはら杉原ゆき深くして

宰相中將公時卿

ふる雪のひましらみぬといそき出て明こそやられ野原しの原

山里のあさけの水もいかゝせむそとものをかは氷しにけり

右京大夫季能

をしなへて氷しぬれはあすか川冬や淵せもかはらさるらむ

泉侍りける家に住ける女の許に夏比ゆきて住なとせられける程に何となくてかき絶られて侍りければ其年の冬頃女の許より云つかはしたりける　讀人不知

をのつから思ひ出やと待ほとにむすひし水もつらゝゐにけり

返事　民部卿成範卿

心にもまかせぬ宿のまし水はとゝこほらてもいかゝすむへき

歌合に冬月といふ心をよめる　前右少將公重朝臣

月かけのかされてしろくみゆる哉更行まゝに霜やをくらん

題不知　清輔

をのつからをとする物は庭の面に木葉ふきまく谷の夕かせ

はつ雪にわれとは跡をつけしとてまつ朝たゝむ人を待哉

殿上のをのことも曉望山雪といふ心をつかうまつりけるに讀せ給ける　高倉院御製

音羽山さやかにみする白雪を明ぬとつくる鳥のこゑかな

題不知　性我法師

淸見かた汀の月に冬さえて雪打はらふ波のせきもり

皇太后宮大夫俊成

濱ゆふもいくへかしたに成ぬらん霧ふりしけるみくまのゝ浦

師光

雪つもるひらの高ねの山おろしに木末もみえす谷の埋木

侍從家隆

きさ山のふゝき分ける衣手に何いとひけむ秋のはつ霜

隆信朝臣

中々に雪にはあさく成にけり木葉を分し冬の通路

大原にて雪の歌とてよめる　寂然

尋れきて道分わふる人もあらしいくへもつもれ庭のしら雪

百首歌中に冬の心をよめる　侍從家隆

冬きては峯の柴屋も物さひて雲のまかきをはらふ木枯

たかいほのれ覺の窓にしらむらん雪降つもる岑の明ほの

秋の色をさてしも人にみするかはかれの丶冬をうつむ白雪

崇德院御製

はれぬれと枝もとを丶にしつりしてこの下かけは猶雪そふる

百首歌に氷閇瀧水といふこ丶ろを　寂蓮

石はしる音は氷にとちられて松かせ落る布引のたき

題しらす　隆寛法師

よる波をつら丶のうへに結ひきていくへかされつまの丶浦風

空仁

花の春もみちの秋もしろかりし松の木すゑもみえぬ白雪

惟宗廣言

冬されのあさちかうへにをく霜のきゆる雫はたるひ也けり

海邊の雪といふ心をよめる　侍從藤原公仲

すまの蜑の鹽屋も雪にうつもれてたくもの煙ゆく方もなし

仁和寺二品親王雪の朝遍照寺におはしまして人々歌よませ給けるによみ侍りける　顯昭法師

玉すたれむかしをかけて降雪に山さへけさはしのふもちすり

大原の寂然かもとにいひつかはしける　圓位法師

おほはらは（え職）ひらの高ねのちかけれは雪ふる程を思ひこそやれ

題不知　法橋覺範

冬かれのおはなかそれに霜さえて月影さむしまの丶浦かせ

法橋宗圓

霰ふるゆらの御崎をなかむれは玉しく磯にさゆる月影

山家冬月といふこ丶ろをよめる　性我法師

柴の庵は軒のたるひにとちられてわつかにそもる冬のよの月

あしまの冬の月といふ心をよませ給ける　後入道親王

いせの海しほみちくれは濱荻のひまにた丶よふ冬のよの月

百首歌中に冬の心をよませ給ける　前齋院

玉の井の氷のうへにみぬ人や月をは秋のものといひけむ

有明の月いとあかく侍りけるにまたくもりもあへす雪ふり侍りけるをみて大原宰相入道修範卿のもとにいひつかはしける　讀人しらす

月かけやあまきる空にみたる覽光ちりくる雪のあり明

返し　入道參議修範

有明の月にまかへる雪の色も深き山路はまさるとをしれ

山家冬情あまた侍けるなかに　左大將

みせはやな氷れる露にかけとめて庭の木のはにやとる月影

風寒み庭のやり水こほりゐて松にのこれる岩浪のこゑ

柴の庵のあらしにたへぬあれまよりさえ行月に床をまかせて

あともなき庭はかれの丶けしきにて心の道も霜埋むなり

都にはしくれしほと丶おもふよりまつ此里はゆきの明ほの

法性寺座主法印

ひきかへてさひしさみかくのへの月氷らぬ露にやとりし物を

山川のをのかなかれに氷ゐて松のこすゑに岩た丶く浪

定家朝臣

露こほる木のはのしたに跡とちて月や山路の色うつむらん

百首歌中冬歌とて　皇太后宮大夫俊成

遠かたや都のたつみ誰すみて槇のすみかにけふり立らむ

すみかまのなのか煙の雲さえて雪ふれは又まよふやま人

侍從家隆

山深みやくすみかまに立けふり絶すみゆるもさひしかりけり

たいしらす　參議教長卿

よそにみるひらの高ねの雪なれとさゆるは床の物にそ有ける

藤原季定

板まあらみねやに霰のもりこすは枕にゆめを殘さましやは

百首歌中に冬の心をよめる　晴眞法師

ねやのうへ霰たはしる曉はさめぬうつゝもおとろかれけり

法性寺座主法印

霰ふる曉かゝやゝの板ひさしうつゝの夢を殘さましやは

氷を

物おもふ枕のしたのうす氷いかなる春かとけむとすらん

山家送年といふ心をよめる　寂蓮

立出てつま木をこりしかた岡の深き山路と成にけるかな（こりにしイ）

山家心を　三位中將公衡

つゐにわかすむへき庵をわすれねは心のうちに山もありけり

山里はとはぬ人をそうらみつるくすのかれはに霰ふる也

河水久澄といふをよめる　清輔朝臣

年へたる宇治のはしもりこと〻はむいく代になりぬ水の水上

百首歌中佛寺歌とてよみ侍りける　信光

はつせ山かはらのこけに霜ふけてさひしくひゝく鐘の音かな

玄玉和歌集卷第四　四十六首

時節歌上

伊勢の御社に百首歌奉られけるに立春の心を

皇太后宮大夫俊成

いつしかと霞の衣立かけてみもすそ川にこほりとけゆく

百首歌中に同心を

あまの戸の明るけしきもしつかにて雲ゐよりこそ春は立けり〔マヽ〕

圓位法師

岩まとちし氷もけさはとけそめて苔のした水道もとむ也

右京權大夫隆信

あふ坂の關の清水のうす氷とくるや春のこゆるなるらん

前左大臣

久かたの天のかく山てらす日のけしきもけふそ春めきにける

きのふかもあはとなかめし淡路嶋春としなれはかすみ一むら

百首歌中に同心を　法性寺座主法印

朝またき春の霞はけふたちぬくれにし年やなのかふる里

立春の心をよませ給ける　二品親王仁和寺

年なみの立かへりぬるしるしあれや氷し水もしたむせふ也

中院の右大臣家の會に立春のこゝろをよみ侍りける

俊惠法師

今朝みれはこやの池水うちとけて氷そ春のへたて成ける

おなしこゝろを

春といへは霞にけりな昨日まて波まにみえしあはちしま山

中宮川次の御屏風に小朝拜かきたる所をよみける

霞しく春のはしめの庭の面にまつ立わたる雲のうへ人　左少將定家朝臣
百首歌の中に立春の心をよませ給ける　攝政前太政大臣
春たては霞はかりはみとりにてまた雪白し三吉野の山
前左大臣家會によみ侍ける　登蓮法師
かすみ立春のみそらと思はすはけふも雪けの雲とみてまし
俊成卿家の十首歌中に立春のこゝろを人々よみ侍ける　前中納言師仲卿
おほつかな空に心やかよふらんかすみも春もけふこそはたて
前右京權大夫頼政
冬こもるよしのゝ山のいはやには苔のしつくに春やしるらん
源行頼朝臣
あふさかの關ふきこゆる春風にをかはの氷今やとくらむ
源仲綱
春やきて雪の下水さそふらんふしのなる澤をとまさる也
俊惠法師
春はけさこえぬと思に逢坂のせきの杉むらなをかすむらん
顯昭法師
東路をまた夜をこめてくる春はしのふの里を立やしぬらん
大輔かよませ侍ける百首の中に立春の心をよめる
侍從家隆
春風の吹くるまゝにしかのうらの涙にもかへるうす氷かな
春自東來といふ心をよめる　顯昭法師
こゝろをやとゝめて春も過つらん清見か關のあけほのゝ空
題不知　圓賢法師

春はまた汀にかへるをとす也遠さかりにししかのうら波
山家立春といふ心を讀る　藤原公信
解そむる岩まの水をしるへにて春こそつたへ谷のかけひを
百首歌めしける時子日の心をよませ給ける　崇德院御製
子日する春のゝ毎に尋ぬれはまつにひかるゝ心ちこそすれ
月次の御屏風に野邊の小松原に子日したる所を長保の
昔をおもひて　左大臣
千代ふへき春日のゝへの姫小松なかくたもてるためしにそ引
百首歌中に野歌とて　皇太后宮大夫俊成
春日野は子日わかなの春のあと都の嵯峨はあき萩の時
子日こゝろをよみ侍ける　左中將源有房朝臣
のへみれはまたふた葉なる姫小松いつくに千代の數こもる覽
藤原家隆
子日してけふひき殘す小松原われとや千世のかけを待らん
三月盡の心を　法性寺座主法印
紅に霞の袖もなりにけり春のわかれのくれかたのそら
皇太后宮大夫俊成
ゆく春の霞のそてを引とめてしほるはかりや恨かけまし
百首歌中に同心を　三位中將公衡
花の色はこゝろのそこに有物を霞をさそふ春のくれかな
題不知　法橋宗圓
ふしなれし夜とこあらして鶯の今は音せぬ春のくれ竹
前中務大輔藤原仲綱
こぬまても花ゆへ人のまたれつる春も暮ぬるみ山への里
月次御屏風に更衣したる所　左大將

けふよりは千世をかされんはしめとてまつひとへなる夏衣哉

更衣心を　藤原大納言定國

おもひなく花色ころもぬくはかり染し心のまつかはれかし

小侍従

おしみこし花の袂はそれなからうき身をかふる今日とならはや

前左衛門督公光

よのうさを我身一つにかさぬれはうすき衣はたつかひそなき

加茂神主重保

けさみれは霞の衣たちかへて山もひとへにうすみとりなり

道圓

かきりあれは衣はかへつ花にそむ心そ春のかたみなりける

菖蒲歌とて　顕昭法師

宿ことにつまと成ぬる菖蒲草もとのよとのはれや絶ぬらん

六月祓の心をよませ給ける　後入道親王仁和寺

淵もせにかはる流にみそきしてうきもかくてはやましとそ思

百首歌に同心を　皇太后宮大夫俊成

みそきする麻のたち枝の青にきてさはへの神もなひけとそ思

隔秋一夜といふ心を讀る　源季貞

みそきする川瀬の風の身にしむは明るをまたて秋やきぬらん

六月祓の曉といふ心をよめる　藤原資俊

なこしするとなせの風の涼しきは秋のかたにやよは成ぬらん

月次御屏風に六月祓を　前宮内卿季経

御祓してたつるいくしの河風になひくや神のこゝろ成らむ

攝政前太政大臣

みそきするかへさを秋やむかふらん袂にふけぬ夜半のかは風

玄玉和歌集巻第五　六十四首

時節歌下

初秋のこゝろをよませ給ける　崇徳院御製

いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゝや秋とそ風もつくなる

圓位法師

をしなへて物を思はぬ人にさへ心をつくすあきの初かせ

秋立日前大僧正覺忠の御もとに申遣して侍りける　俊恵法師

ものことにさひしさまさる秋の暮はとはぬ人さへ恨めしき哉

かへし　前大僧正

とへかしと思ひもよらすさひしさは我宿からの物としりつゝ

山家立秋といふこゝろを　法印靜賢

吹風にしはのとはそをたゝかせてむくらの宿に秋はきにけり

百首歌中に初秋の心を　皇太后宮大夫俊成

今朝みれはさかのゝ露も色つきて嵐の山に秋かせそふく

海邊初秋と云心を　右兵衛督家光

いせしまやたくもの煙さそひきて浦つたひする秋の初かせ

旅泊初秋といふこゝろをよめる　寂蓮

みなと河おなしうきれの涙の音もけさ立かはる秋のはつかせ

百首歌中に初秋の心をよませ給ける　前齋院

秋きてはいくかもへぬを吹風の身にしむはかりなりにける哉

題不知　中納言長方卿

あき立てことそともなくかなしきは荻のはそよく夕暮の空

人々によませ侍りける三輪の社の會に初秋のこゝろを

朝またきひはらを分る山風の身にしむこれや秋のはつ風　大輔

秋といへは心の色もかはりけり何ゆへとしも思ひそめれと　左衛門督通親

百首歌に初秋のこゝろを　三位中將公衡

きゝなるゝ松のあらしも秋たてはいかなる色のこゑにそふ覽

初秋の心をよめる　性我法師

あれゆかむけしきもしろくしすかはらや伏見の里の秋の初かせ

前右衛門佐藤原資持

秋かせの吹はまつちる涙かな荻のうはゝの露ならねとも

立秋のこゝろをよめる

今朝みれはふしみの里のいなむしろかへしそゝむる秋の初風

早秋忽涼といふ心をよみ侍ける　左中將公經朝臣

うちをかぬ心は夏にかはられとあふきのすゑに秋はきにけり

崇德院百首歌中に初秋の心を讀る　右馬權頭實清朝臣

葎はふ宿にしもこそしら露のたまもてかさる秋はきにけれ

初秋の心を讀る　信光法師

袖のうへはふるきおもひの宿なるを露あらたむる秋の初かせ

七夕のこゝろを讀せ給ける　崇德院御製

天川やそせの波もむせふらん年まちわたるかさゝきの橋

皇太后宮大夫俊成

たなはたのとわたる舟のかちのはに幾秋かきつゝゆの玉つさ

清輔朝臣

けふはかり天の河かせ心せよ紅葉のはしのとたえもそする

定家朝臣

思ひやるけさのわかれは天川わたらぬ人のそてもぬれけり

長月の有明の月のあなたまてこゝろはふくろほし合の空

俊惠法師

たなはたのたえぬ契りをうれしとも今宵はかりや思ひ知らん

たなはたのわかるゝけふの袂にやあきの白露をきはしむ覽　道因

たなはたはあすの別をなけくまに逢よの袖やかはかさるらん　大輔

織女の暮をまつまはあちきなく雲のよそなる心地こそすれ　刑部卿頼輔卿

天河わたるこよひや棚機は中々袖をぬらさゝるらむ

二條院御時御前にて七夕の夜歌よむへきよし仰られけれはよめる　參河內侍

雲井にてなかむる折そ天河ほし合の空ははるけかりけり　定家朝臣

五十首月歌の中に十五夜の心をよめる

いく里か露けき野へにやとかりし光ともなふ望月の駒　寂蓮

もろこしの山路たつねてすみそめしむかしや思ふ秋のよの月　圓位法師

秋はたゝこよひ一夜の名成けりおなし雲ゐに月はすめとも

かそへれと今宵の月のけしきにも秋の半を空にしる哉

法印顯玄に具して逢坂の關に行て十五夜の月み侍りて讀る　尋玄法師

あふさかの關の清水にやとりてや今宵の月は名をとゝめけん

隆信朝臣家の會に兼思十三夜月と云心を　隆寬法師

折しもあれ秋暮かたに名をとめて人の心にかゝる月かけ

九月盡のこゝろをよみ侍りける　寂蓮

ゆく秋をおしむにさよのふけぬれは袂よりこそ時雨そめけり

皇太后宮大夫俊成

暮わたる夕の空をなかむれは雲こそ秋のなこり也けれ

九月盡の日ものにまかれりけるに旅のとまりもあはれに覺て侍りけれは　民部卿成範卿

草枕こよひはかりの秋かせにことはりなりや露のこほるゝ

道因

しら露を秋のかたみとみるへきにあすは霜にや置かはる覧

藤大納言實國卿家の歌合に九月盡の心を讀る　俊惠法師

けふこそは秋の哀をなかめきて心つくしのはてには有けれ

おなしこゝろを　法印靜賢

うき世をは我もさ社はあきはつれことはりなくも惜きけふ哉

藤原知資

あかさりし有明の月の名殘までおもひつゝくる秋の暮かな

皇太后宮大夫俊成

行秋のかへる雲井をなかむれは夕の空も波路なりけり

百首歌中に秋のくれの心をよめる　定家朝臣

よをかされ身にしみまさるあらしかな松の梢に我やすくらん

顯昭法師

雲路をや暮ゆく秋はかへるらんしたふ心の空になるかな

九月盡の日時雨のし侍けれはよめる　清輔朝臣

大空も秋の哀をおもふらん今日のけしきはうち時雨つゝ

題不知　左大將

眞葛原秋かへりぬる夕暮は風こそ人のこゝろなりけり

崇德院百首歌中に初冬の心を　皇太后宮大夫俊成

いつしかと冬のしるしに立田川紅葉とちませうす氷せり

同心をよませ給ける　二品親王仁和寺

冬きぬと水の心やしりぬらむ谷風さむみつらゝゐにけり

法性寺座主法印

さひしとよ秋はくれぬといひかほにみな山里は冬の夕くれ

三位中將公衡

神無月冬のしるしや是ならむみわの山こえうち時雨つゝ

隆寬法師

山風もやかてはけしく成ぬなり秋にわかるゝしのゝめの空

歲暮の心をよませ給ける　攝政前太政大臣

つもりては老は成とて行年をいとふはおしむ物にそ有ける

旅宿の歲暮といふ心をよめる　師光

かりそめの草の庵とおもひしに今宵あけなはふたとせやへん

年の暮のこゝろを讀る　道因

老にける我社年のふるさとよかへるといひてみにしつもれる

仲綱

はやきせもいはきる程は有物をさはる物なき年のなみ哉

俊惠法師

なけきつゝことしも暮ぬ露の命いけるはかりを思出にして

參議敎長

立かへる年の行衞を尋ぬれはあはれ我みにつもるなりけり

攝政前太政大臣におはしましける時年の暮雪の心をふれりけるに奉ける　皇太后宮大夫俊成

暮はつる松のとほその雪のうちを春こそしられ君たにもとへ

かへし　攝政前太政大臣
雪のうちはいつくも同しさひしさを我宿とても春をしるかは
題不知　法　印靜賢
年なみの我身にたかくよるまゝに藻屑とのみそ人にいはるゝ
圓位法師
昔おもふ庭にうきゝをつみおきてみし世にも似ぬ年の暮哉
寂　然
ゆく年を送りむかふといふ程に定めなき世のはてそかなしき

玄玉和歌集巻第六　百八十七首

草樹歌上

中宮月次の御屏風に人家并に野邊に梅花咲たる所をよませ給ける　攝政前太政大臣
梅かゝをほかへや風のさそはまし夜ふかく明ぬ槇の戸ならは
百首歌中に梅華を　左大将
軒ちかき梅の梢に風過て匂ひにさむる春の夜の夢
題しらす　崇德院御製
大かたの色をはいはし梅の花香をもあたにはちらさゝらなん
大納言隆季卿
朝霞梅の立枝はみえねともそなたの風に香やはかくるゝ
題不知　右大将頼實卿
梅の花心にそむる程はかり匂ひは袖にとまりやはする
隆信朝臣
咲しより色にも香にもあらはれて春のさかりもみゆる梅哉
清輔朝臣
あしかきのおくゆかしくもみゆる哉たかすむ宿の梅の立枝そ
百首歌中に梅歌とてよみ侍ける　左少将定家朝臣
春の夜は月のかつらも匂ふらん光に梅の色はまかいぬ
左中將兼宗朝臣の家の歌合に同心を
梅の花霞のほかの雲ゐまて匂ひにこむる春の山かせ
題不知　寂　蓮
梅枝に軒のしからみかけてけり花のせきもるさゝかにの糸
有家朝臣
我宿の軒はの梅をふく風は匂ひよりこそ先ちらしけれ
俊惠法師
袖はぬれ香はうつるとも梅の花折てなき名はたゝむとそ思ふ
圓位法師
とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人は折にこそよれ
隆寛法師
むめかゝを空にさそひて行風もしたふ心にあかぬものかは
寂　然
忍ひ妻おきゆく床に匂ひきて軒はの梅そ名殘かほなる
顯昭法師
春風の吹にまかせて梅の花匂ひは宿をさためさりけり
梅花薫風といふ心をよめる　惠章法師
たかさとの梅の梢を過つらんぬしなつかしくにほふ春風
前大僧正
梅かゝの薫るあたりは窓のうちにあつむる雪を花かとそみる
正月七日後白川院少納言かもとにちいさきかたみにわかなを入てつかはすとてよめる　大　輔

わかなをはかたみにいれつ身の上に老を積てそやる方もなき
百首歌めしける時若菜の心よませ給ける　崇德院御製
賤の女はかたみしなへてひをつめとまたうら若菜てにも溜らす
皇太后宮大夫俊成
澤に生る若菜ならねといたつらに年をつむにも袖はぬれけり
題しらす　前薩摩守忠度朝臣
春毎のわかなにそへてつむ年のもろゝかたみをいかて結はん
二條院御時柳の歌とて　前中納言師仲卿
春風や心々に吹つらんとけぬみたれぬ青柳のいと
美福門院御時彼岸御念佛の會に橋邊の柳と云心を人々
よみ侍けるに　皇太后宮大夫俊成
やつはしにみとりの糸をくりかけてくもてにまかふ玉柳かな
題しらす　三位中將公衡
波かくる川そひ楊枝しけみなかれもやらぬ水のおとかな
法性寺座主法印
霞しく春の川風うちはへてのとかになひく青柳の糸
俊惠法師
梢ふく風もや水にうつるらん庭に波よるあを柳のいと
顯昭法師
春風やたえす契をむすひけんまつ打なひく青柳のいと
前左大臣
わかやとの柳の糸のうちなひき春よりほかにくる人もなし
隆信朝臣
旅ねせし宿の梢やそれならぬ霞にもるゝ玉のをやなき
野亭早蕨といふ心を　右京大夫季能
早蕨のおりにも人にとはれれは野へのすまひそいとゝ物うき
百首歌中に花の歌とてよませ給ける　攝政前大臣
櫻咲たかれに風や渡るらん雲立さはく小初瀬のやま
中宮月次の御屏風に小野井に人の家に花咲たる所を
左大將
吹風にちるともみえす櫻花はなはけふこそさかり也けれ
題不知　前左大臣
咲さかすおほつかなしや白雲の絶すかゝれる峯の櫻は
さゝ波にまかふ櫻をさきたてゝ風こそしかの山はこえけれ
花のちるひら山おろしうみふけは峯より沖によする白なみ
百首歌の中に春の歌とて　左大將
昔たれかゝる櫻の花をうへてよし野を春の山となしけん
谷川のうち出る波にみし花の峯の木すゑに成にける哉
明わたると山の木すゑほの／＼と霞そかほる遠の春かせ
をしなへて花の梢に成まゝに雲こそなけれみよしのゝ山
題しらす　前中納言師仲
日にそへて立こそまされみよしのゝ吉野の山の花の白雲
參議敎長
よしの河花のしら波なかるめり吹にけらしな山颪の風
崇德院近衛院殿に御幸侍りける日遠尋山花といふ心を
皇太后宮大夫俊成
面かけに花のすかたをさきたてゝいくへ越きぬ峯のしら雲
人々百首の歌よませ給けるに花のうたとて
左大將
しほりせて吉野の花や尋ましやかてと思ふ心ありせは
九重の花のさかりに成ぬれは雲そくも井のしろし成ける

いつくにもさこそは花をおしめとも思ひ入たるみよしのゝ山　有家朝臣

花は雪霞はたえぬけふりにてふしのねうつす山櫻かな　定家朝臣

櫻花咲にし日よりよしの山空もひとへにかほるしら雲　前大僧正

題不知

山櫻木ことにうつる心かな一枝たにもをしみえなくに　法性寺座主法印

百首歌中に花の歌とて

咲そむる花の梢をなかむれは雲に成ゆくみよしのゝ山　前右京權大夫頼政

華ゆへにとひくる人のわかれまて思へはかなし春の山風

重家卿歌合花の歌とて

あふみちやまのゝ濱へに駒とめてひらのたかねの花をみる哉　俊惠法師

題不知

咲をまち散をおもむに春暮て花に心をつくしはてつる

よしさらはしるへにもせんけふはかり花もてむかへ春の山風

法勝寺にて花を見てよみはへりける

後の春ありとたのみしむかしたに花をおしまぬ年はなかりき　左大將

十五首の花の歌中に

はる〳〵と我すむかたは霞にてやとかる花をはらふやま風

高砂の尾上の花に春くれて殘りし松のまかひ行かな

けふこすは庭にや跡のいとはれんとへかし人の花の盛を　定家朝臣

花おもふ心にやとるまくす原秋にもかへすかせのをとかな

後もうしむかしもつらし櫻花うつろふ袖の春の山風

花のちるゆくゑをたにもへたてつゝ霞のほかに過る春かな　寂蓮

いかはかり花咲ぬらむよしの山霞にあまる峯の白雲

花にあかぬ心のはてはもろこしの吉野の山の春の明ほの

天川雲のみおにや通ふらん花のそこなきみよしのゝ山　藤原公信

祇園社の歌合山路の花といへる心を

なかめつゝゆきそやられぬ山櫻花こそ道を遠くなしけれ　藤原爲廣

題不知

花にあかてかへる山路のなくさめはかすめる空に出る月影　藤原隆親

ちらぬまの花の下にてあかすよは梢よりこそしらみそめけれ　清輔朝臣

から國のとらふす野へに匂ふとも花の下にはねてをかへらん　崇德院御製

山高みいはねの櫻ちる時はあまの羽衣なつるとそ見る

ことならはさてこそちらめ櫻花おしまぬ人もあらしと思へは　皇太后宮大夫俊成

櫻花おもふあまりにちる事のうきをは風におほせつる哉　三位中將公衡卿

中山の家の花のさかりなるをみて

すみなるゝ我宿なれとけさみれはおほめくはかり花咲にけり　前宮内卿季經

百首歌の中に花の歌とて

汀には峯のさくらを吹とめて雲に波こすしかの浦かせ　二條院參河内侍

春日社歌合に花のうたとて

おしと思心にとまる色ならは花は我身の物にそあらまし

よしの山花のさかりをきてみれはうき世の外の心ちこそすれ　參議教長卿

高砂の尾上の花のさかりにはこゝも波こす末のまつやま

ちりまかふ花のよそめはよしの山嵐にさはく峯のしら雲　刑部卿頼輔
をのつから花のしたにし休らへはあはゝやと思人もきにけり　前右京大夫頼政
よしの川岩瀬の波による花や青根か岑にきゆる白雲
攝政前太政大臣右大臣におはしましけるときの歌合に
花の歌とて　太宰大貳重家
春のうちはよしのゝ山のみれならぬ心も花に成にけるかな
花の歌とてよめる　左中將兼宗朝臣
しつみぬるみくつならすはもろ共にけふ白河の花はみてまし
範兼卿白河の花みにまかられぬときゝて遣しける
吉野山みれたちかくす雲かとて花ゆへはなをうらみつるかな
南殿のさくらのさかりにはへりけるにうへの人々花の
歌よみ侍けるによめる　藤原範孝蔵人文章生
物いはゝ花にとはまし吹風はむかしもかくやのとけかりしと
閑居待花と云へる心を　權律師定範
さかぬまは人も梢のさひしさに花をのみまつ柴の庵かは
題不知　法橋聖玄
心をは雲ふむ峯にとゝめをきて花そ家路の關かためける　圓經法師
山櫻さそふ嵐のかよひきて匂ひもまかふ岑の白雲
百首の歌に花の歌とてよみ侍ける　侍從家隆
よしの山霞も花の色ならはいく重かみましみれの白雲
世中を思ひつゝけて見るときもちるこそ花の盛也けれ　藤原知資
身のうさを花になくさむ程たにもうらみは風に絶せさりけり

うき世をはまたなにゝかはなくさめん花に先たつ命ともかな　大輔
今よりは花のたよりに人またしちれはわかるゝ思ひそひけり　寂蓮
見わたせはならの都の花さかり梢をこむるやへのしら雲　前齋院中將
九重に匂ひをそへしいにしへのふるき梢に花咲にけり　攝政家丹後
春はまつよもの山へにあくかれて花よりさきにちる心かな　法性寺座主法印
あたにちる花には風も遅れけりこれもうき世の習ひならすや
松風になかめし秋は花ゆへにいとふへしとも思はさりしを　法橋範榮
ちる花のふるさとゝこそ成にけれわかすむ宿の春の暮かた
ちりつもるその木の本や櫻花さそひし風のやとり成らん　法橋宗圓
花の歌とて
花さかりなをおくありとみゆる哉雲のはてなきみよしのゝ山　法橋覺範
高砂の尾上の花やさかりなる雲の波せく松のむらたち
松間夕花と云心を
高砂の尾上吹こす夕風に花のなみせくまつのむら立　源定宗朝臣
題不知
みわたせは梢につもる白雪の風にきえぬや櫻なるらん　定家朝臣
百首に春の歌とてよみ侍りける
たれすみて心のかきりつくすらん花にかすめる遠の山きは
二條院御時南殿の櫻のちるを御らんして歌つかうまつ
るへきよし仰有けれはよめる　三河内侍

身にかへてちるもおしまし君か代の花みん春の限りなけれは
題不知　寂　念
吹風に花なるさとをきてみれは木末よりこそ春は暮けれ
山寺はなと云心を　法橋宗圓
初瀬山木すゑの花にひゝきゝて入あひのかねの聲かほる也
道　因
我宿の花をや風にゆつらましぬしとなりなはおしむはかりに
公衡卿の中山の家にまかりて花み侍りて後に申をくり
侍ける　隆寛法師
花の色の猶おくありてみえしかなよしのゝ山の春をうつして
わか宿の梢の花をみるたひによしのゝ山を思ひこそやれ　源　季　貞
題不知　平　康　頼
花にあかぬよしのゝ山の旅ねには夢にもみゆる峯の白雲
世をのかれんとしける比百首歌よみて法性寺座主法印
のもとに奉ける中に花の歌とてよめる
晴眞法師
世をいとふ思ひを花にみたらしと心つくろふ春の山さと
花の歌とてよめる　行圓法師
おもひやるよものたかねの花さかりみる面影に雲をかけつる
題不知　圓位法師
吉野山木すゑの花をみし日より心は身にもそはす成にき
よしの山去年のしほりの道かへてまたみぬ方に花を尋ん
よしの山やかていてしと思ふ身を花ちりはなと人や待〔らん〕
咲そむる花をひとへにまつおりて昔の人のためと思はん
俊恵法師

山たかみ峯の櫻を尋てそ都の花は見るへかりける
露なから折てかさゝん山櫻しつくに袖やしはしかほると
かつらきやたかまの櫻咲しより春ははれせぬ峯の白雲
なかむへき殘の春をかそふれは花とゝもにもちるなみたかな
花みれは物おもひなしといひ置し人は散をやおしまさりけん
登蓮法師
櫻花散なんのちのなくさめは朝ゐる雲のたゝんとすらん
さくら咲なからの山に風ふけは空にそみゆるしかのうらなみ
顯昭法師
天の原たなひく雲はかつらきやたかまの山のさくらなりけり
あかなくにちりぬる花のかたみとて殘るは風のつらさ成けり
前左大臣そのかみ白河の花見にさそひ侍けれはまかり
てよめる　師　光
いさやまた月日のゆくもしらぬ身は花の春もけふ社はみれ
題不知
わひ人の宿にはうへし櫻花ちれはなけきのかすまさりけり
人しれぬ心のゆきて見る花は殘る山へもあらしと〔そ脱歟〕思ふ
うきよには思ひもいてしよしの山花ゆへならす岩のかけみち
玄俊法師
世をすてゝ吉野の奥にいる人は花のさかりやすみうかるらん
白河にまかりて水邊落花と云心をよめる
藤原行康
花さそふ嵐の空に浪こえて雲になかるゝ白河の水
百首歌の中に花歌とて　法橋覺範
心すむ有明の空の月かけに花ちるさとは秋の夕くれ
ねにかへる梢のそらに春くれは花にわかるゝ峯のしら雲

圓位法師
うきよにはとゝめおかしと春風のちらすは花をおしむ也けり
風もよし花をもちらせいかゝせん思いつれはあらまうき世そ
かさこしの峯のつゝきに咲花はいつさかりともなくや散らん
世の中をおもへはなへて散花の我身をさてもいつちかもせん
花さへに世をうき草と成にけりちるをおしめはさそふ山水
法橋季嚴
いふことはなきならひなる花なれと惜む心をしるやしらすや
信定法師
たつねわひまとろむ夢にみる花はさむるうつゝや春の山風
題不知　橘惟村
花の色を梢にとめぬ山風や月みし秋のむら雲のそら
信詮法師
みよしのゝ花のさかりや過ぬらむ雲ふきおろす春の山かせ
杜若の心をよませ給ける　後入道親王仁和寺
そこきよきあさゝは水にかけそひてふたへに見ゆる杜若かな
百首歌にすみれの心を　皇太后宮大夫俊成
紫のねはふよこののつほすみれ眞袖につまん色もむつまし
題不知　三位中將公衡卿
ふるさとのよもきをわけてすみれつむ折しも袖をぬらす春雨
寂蓮
春雨にまかきのすゝきむら立ぬ今年もさてや道もなきまて
崇德院御製
田子の浦の岩ねにかゝる藤なみはみちくる鹽の聲をからなん
老ぬれと若紫にかさゝれて藤にも松はかゝるなりけり
前齋院
しつかなる庵にかゝる藤の花まちつる雲の色かとそみる
紫藤亂風と云心を讀る　寂念
ときはなる名たてなりとや藤浪をゝのれなかく〳〵ちらす松風
百首歌中に欵冬　皇太后宮大夫俊成
櫻ちり春のくれぬる物思ひも忘られぬへき山吹のはな
顯昭法師
こゑたつる井出の蛙は山吹の花さきぬとや人につくらん
朝惠法師
蛙なく井出のわたりは山吹の色にそなみの花も咲ける
卯月のはしめつかた大炊御門のやへさくらを折て定家
朝臣のもとにつかはすとてよめる　攝政家丹後
ことしより春やときはに成ぬらむまたちりそめぬ花も有けり
卯月の歌とて　前參議親隆卿
ふしみつや川そひうつき花咲て波はかきねの物とこそみれ
河邊卯花といふ心をよめる　源清貞
きしつたひ風にしられて立浪のなかれぬ程や卯花の色
野徑卯花と云心をよみ侍ける　顯昭法師
關河やおりえてさける卯の花にみゆきめつらしのへのふる道
題不知　法印範玄
うの花のさかりなりけり風さゆる冬のまかきは雪おれそせし
葵の歌とてよめる　小侍從
いかなれはそのかみ山のあふひ草としはふれとも二葉成らん
菖蒲の歌とてよみ侍ける　宴信法師
かゝる身の枕となれはあやめ草けふもうきをは離れさりけり
雨後早苗と云心をよめる　參議敎長
なはしろにほそ谷川もひかてこそ雨の名殘はさなへとりけれ

題不知

おほあらきのうき田の早苗おいにけり杜の下草取なまかへそ　皇太后宮大夫俊成

百首歌に沼邊菖蒲といふ心をよめる　寂蓮

ひき殘す跡忍へとや菖蒲草すゝしくかほる波の岩かき　崇徳院御製

かくれぬにいつかと待し菖蒲草けふはひきます物なかりけり　前齋院

花たちはなの心をよませ給ける

たれとなく空に昔そ忍はるゝ花立はなに風過るよは　左大臣

たち花の夢の枕に匂ふよはむかしの人とぬる心ちする　皇太后宮大夫俊成

たれかまた花たち花に思ひいてんわれも昔の人と也なは　前宮内卿季經

有し夜の袖の匂ひはわすれぬを花立はなのほのめかすらん　小侍従

軒ちかき花たちはないにしへを忍ふの草のつまとこそみれ　定家朝臣

故郷は庭もまかきも苔むして花たちはなの花〔を脱歟〕ちりける　藤原家隆

ことしより花咲そむる橘のいかてむかしの香にゝほふらん　覺範法師

風わたる花橘の折々にむかしを袖にさそひきにけり　寂蓮

題不知

この世にて物思ふ袖もくたしけり雨そゝきする軒の橘　祐盛法師

忘れゆくむかしをたれかしらせまし花橘の風なかりせは

軒ちかき花橘のかほるよはあふきの風もなつかしきかな　法印顯玄

をちに咲花橘を吹過てさもあらぬ軒に匂ふゆふかせ　藤原親盛

雨の後花橘をふく風に露さへにほふゆふくれの空　皇太后宮大夫俊成

夕されははすのうきはに風こえてうつしそかふる露の白玉　俊惠法師

蓮葉の色にもめてしそこすまぬこれもぬま江の名殘ならすや　性我法師

野へにをくおなし露ともみえぬ哉はすのうきはにやとる白玉　皇太后宮大夫俊成

花はみなあかぬなかにもこんよ迄ゆかしき物ははちす成けり　攝政前太政大臣

中宮川次の御屏風に夏草かきたる所をよませ給ける

日數ゆくのはらしのはら夏ふかし分行袖の露の草すり　皇太后宮大夫俊成

夏ふかみ野へのさゆりは風過て秋おもほゆる杜のかけかな　大納言實家卿

題不知

夏の夜をかけにわするゝ吳竹はまたきに秋のよやこもるらん　寂蓮

こぬ人を思ひたえたる庭の面によもきか末そまつにまされる

玄玉和歌集巻第七　八十八首

草樹歌下

草花の歌とてよませ給ける　攝政前太政大臣

よそなからみやきか原をみわたせは心にうつる萩か花すり

中宮月次の御屏風に草花の歌とて　前左大臣

萩か花玉しく庭にうつしうへて露をきなから千世の秋みん

前右京權大夫頼政

かり衣われとはすらし露しけきのはらの萩の花にまかせて

圓位法師

萩か枝の露に心のむすほれて袖にうらある秋の夕暮

百首歌に秋の歌とて　法橋宗圓

宮城のゝ露わけ衣おもけれとしほらてそみる萩か花すり

百首歌の中に　皇太后宮大夫俊成

あたらしや露けきのへにふす鹿のうは毛にうつる萩か花すり

題不知　前宮内卿季經

棹鹿のしからむほとそみやきのゝこはきか露のたえま成ける

隆信朝臣

心してわくへかりけり秋風にうつらなくのゝ萩の夕つゆ

源仲綱

秋風のをとつれしより小萩さく野守にわれは成にし物を

崇徳院御製

あらはれて虫のみ音にはたえれとも女郎花にそ露はこほるゝ

歌合に女郎花を　三位中將公衡卿

妻こひの鹿の鳴野の夕露にたへすおれふす女郎花かな

隆信朝臣

はけしさをうらみやすらん女郎花なひくは風にそむく成けり

有家朝臣

一かたになひきなはてそをみなへし風の心はかはりもそする

百首歌に女郎花交泪と云心をよめる　寂蓮

山さとにかこひわけたる女郎花いくもと野への物と成らん

古籬女郎花といふ心をよめる　寂然

主なきまかきはあれてをのれのみ秋を忘れぬ女郎花かな

定家朝臣

女郎花なひくまかきの露なからたれふる里とあらしそめけん

題不知　寂念

住吉の遠里小野のをみなへしたれ松風に露こほるらん

圓位法師

花か枝に露のしら玉ぬきかけておる袖ぬらす女郎花哉

崇徳院御製

秋立て野ことに匂ふ蘭なかふむ鹿やあるし成らん

題不知　右京大夫季能

ふかぬまはいつかはまねく花すゝき思へは風の袂也けり

大輔

こぬ人をうらみやすらん花すゝきまねく袂に露そこほるゝ

法印顯玄

花薄ほにいつる秋の夕暮はまねかぬにたにすくる物かは

歌合に草花の心をよめる　圓玄法師

はなすゝきむへこそ人を招きけれさひしかりけるのちの夕暮

題不知　圓信法師

波とみえて尾花かたよるたきの原に松の嵐の音なかるなり

左大將

うちなひく入江の尾花ほの見えて夕波まかふまのゝ浦風

かるかやを　皇太后宮大夫俊成

はし鷹やはつとやたしの秋風にまたきしほれぬのちのかる萱

百首歌中に苅萱の心をよめる　性我法師

かるかやの野へや信夫の摺衣たれゆへにとてみたれそめけん
大納言實家卿
夕まくれ荻吹風の音ならて秋のあはれを何にしらまし
三位中將公衡卿
露むすふ荻のうはゝに風ふけは玉にこゑある秋の夕暮
皇太后宮大夫俊成
風わたる秋よりほかの物ならはおきも哀やよそにきかまし
題不知　隆信朝臣
秋風の荻の葉わたる夕暮は身を分て吹心ちこそすれ
八條院六條
わきもこを待つる宵の風ならはあやしかるへき荻のをとかな
秋のゆふへ常よりも物さひしく侍けるに人のもとにつかはしける
寂蓮
吹過る荻のうはゝの風ならて有やなしやをとふ人そなき
荻聲驚眠と云心をよめる
さもこそは跡なき庭とあれはてめ夢路もたえぬ荻のうは風
荻帶晩風と云心をよめる　左中將公經朝臣
たそかれにをとなふ秋の風もまた荻の葉よりや立はしむらん
源清貞
思ひわく袖にはあらす荻の葉にやとかる風の哀はかりよ
題不知　大江公景
夕されは秋のあはれを荻のはも思ひしりてや露けかるらん
皇太后宮大夫俊成
朝日さすほとをもまたぬ朝顔はたゝ面かけの花にそ有ける
家隆
おきて行人はくれをもまつ物を露にわかるゝ朝かほの花
題不知　法性寺座主法印
秋のよのすゝのしのやの夕暮も猶身におはぬすまゐ成けり
圓信法師
しけき野をいく一むらに分なしてさらに昔を忍ひかへさん
前左大臣
ふりにけるなからの橋をきてみれは蘆のかれはに秋風そふく
中宮の月次の御屏風に紅葉を　左大將
秋霧のはれ行まゝに色みえて風も木のはをそむる成けり
題不知　侍從家隆
まさきふくと山の嵐色つきて末葉かれ行庭の紅葉は
圓位法師高野にこもりて侍けるに秋比大原の寂然かもとへ山ふかみと云五文字ある歌十首よみてつかはして侍けるを又大原の里と云はての七文字ある歌讀てつかはしけるなかに　寂然
山ふかみ岑のさゝくりはら〳〵と庭に散しく大原の里
むくらはふかとは木葉（に脱歟）埋もれて人もさしこぬ大原の里
あたにふく□□の庵のあれまより袖に露をく大原の里
題不知　崇徳院御製
いり日さすとよはた雲にわきかれつ高間の山の岑の紅葉は
攝政前太政大臣右大臣におはしましける時歌合せさせ給けるに紅葉の歌とて　皇太后宮大夫俊成
時雨ゆくそらたに有を紅葉はの秋はくれぬと色にみすらん
殷富門院皇后宮におはしましける時紅葉のさかりに六條殿の御かたのもみちにむすひつけ侍ける
うらやまし軒にゝしきを折かけてもみちにあける秋の宮人
歌合に紅葉の心をよめる　隆信朝臣
月ゆへはいとひし山も紅葉して人の心もいろやかはらむ

題不知　圓信法師

松にはふまきのはかつらちりにけりと山の秋は風すさふらん　左大將

このはちりて後にそ思ふおく山の松には風もときは也けり　顯昭法師

紅葉はを染るのみかはときは木の色も時雨にあらはれにけり　定家朝臣

わか思ふ人すむ里のうす紅葉きりのたえまにみてやすきなん　資隆朝臣

初しくれふりにし里をきてみれはみかきか原に紅葉しにけり　法橋覺範

をしなへてそめぬ木末もなき物を時雨に殘る岑の椎柴　公重朝臣

松間紅葉といふ心を

ときはなる松のたえまの紅葉はをいかて時雨のわけて染けん　藤原隆親

題不知

たつねゆくと山かすそのはゝそ原奥ゆかしくも紅葉しにけり　攝政前太政大臣

杉のやにたえすをとなふ木葉こそ時雨ぬよはの時雨也けれ　太宰大貳重家

凩のふきにし日よりたつた川紅葉になれる波の花かな　左大將

紅葉ちる岑の嵐のくらきよにおもかけにたつ袖の色哉　道因

紅葉ゆへふたゝひつらき嵐かなまた庭をさへはらふへしやは　信光

落葉の心をよめる

しくれちる紅葉のかはのみなかみはたつたの山のおくの秋風

落葉埋筏と云心をよめる　性我法師

筏士のさほなかりせは大井河紅葉を風のくたすとやみん　資宗朝臣

時雨かときけはこのはのちる物をそれにもぬるゝ我袂かな　隆寛法師

擣衣聲盡と云心をよめる

衣うつしつのたふさやよはならんひとりさやけき庭の松風　藤原行康

題不知

故郷は庭もあさちに成にけり軒のしのふにかはるのみかは　前齋院

百首歌中に秋歌とてよませ給ける

さらてたに身にしむ秋の夕暮に松をはらひて風そすくなる　寂然

住吉に詣てゝ讀る

松風の音はいつくとわかれとも猶すみよしの秋そことなる　隆家法師

題不知

しかすまん心をかれてならすかな松風しむる秋の庵に　皇太后宮大夫俊成

大嘗會悠紀方の御屛風吉水郷に多人家菊花臨水所を

いく千世の秋かすむへき菊の花匂ひをうつすよし水の里

中宮月次の御屛風にきくの花を

山人のおる袖匂ふ菊の露うちはらふにも千代はへぬへし　師光

兼宗朝臣家歌合に殘菊をよめる

やへ〳〵の花のをとゝとみし菊の霜をいたゝく冬はきにけり　寂蓮

秋の夜の有明の空にみし月の影さへ殘る白菊の花　皇太后宮大進

寒蘆歌とてよめる

風渡る蘆のかれはもふる雪のつもらぬほとそうちそよきける　賀茂重保

難波江の蘆の葉末もうつもれて雪をそわくるたゝしをふれ　圓位法師

題しらす

つの國の難波の春は夢なれやあしのかれ葉に風渡るなり　侍從家隆

古池寒蘆と云心をよめる

しま風の蘆のはわたる夕暮に汀の鶴も聲かよふなり　寂蓮

山家歌とて

昔おもふ池にはいゐもくちはてゝかれ野につゝく蘆の上風　左大將

さひしとよたゝわか友とたのみこし竹のは分の冬の山かせ　法性寺座主法印

吳竹は冬のおきにそ成にけるさこそ吹しか秋の夕風　後入道親王仁和寺

風わたるまかきの竹のそよ／＼とみはてぬ夢をあはすなる哉　寂圓法師

月前松風と云心を讀る

身にはさて殘るあはれもなかれとやかたふく月に峯の松風　源資清

山里はあらしのそこに音ふりて軒は夜すから松の村雨　三位中將公衡

百首歌に松のうたとて

かしこくもさひしき松の風の音に習ひにけりといつか思はん　隆寬法師

佛寺の歌とてよめる

いにしへの我立杣に年ふりて谷の杉むら色さひにけり　寂蓮

題不知

わかの浦を松の葉こしになかむれは梢によするあまのつり舟　散位中臣祐仲

延慶三年庚戌三月廿八日於大和國添上郡辰市鄉春福院書寫之畢深住興隆之思不顧多精之眼而已

右玄玉和歌集以佐伯侯秘本挍正了

群書類從卷第百五十

現存和歌六帖

和歌部五

はるのくさ
信實朝臣
かきやれる雪まをみれは水莖の岡の春草したもえにけり
從三位行能
春日野のゆきまの草の淺みとりまたはつかなる春の色かな
前關白左大臣良實
春きてはかつそもゆらしあは雪のふれとたまらぬ岡のかけ草
前大納言爲家
〔新六〕しられしな霞にこめてかけろふのをのゝ若草したにもゆとも
眞　觀
みよしのゝやけふをみれはいとはやもにゐ草もえて淺緑なる
法眼長尋
今朝見れは垂氷のうへの薄みとりそれかとはかりもゆる若草
なつのくさ
藻壁門院少將
さほ姫のそめし緑の色なからのへの草葉に夏はきにけり
前關白左大臣
茂り行あたのおほのゝ夏草の道なきかたや我身なるらん
藤原爲繼朝臣
今はまた庭の夏草みちもなし茂るとみても日數へぬれは
藤原爲氏朝臣
かよひこしあとやはいつく夏草の茂みかしたの野への古みち
藤原行宗朝臣
いまはゝや道ふみたえてこぬ人のつらさあらはすやとの夏草
法印耀清
夏草のふかき心のひくかたやかれんのちをもしらすなるらん
あきのくさ
前大納言爲家
明わたるあさゝはをのゝ秋草にうきぬはかりもをけるしら露
正三位知家
露深きわれにてしりぬ夕暮の草はも秋の心あるらし
鷹司院按察
わかおもふことのしけさの數ならし秋の夕の草のうへのつゆ
藻壁門院少將
けぬかうへに又や結はん秋草のしけるしけみの露のふかさは
かれはてむ後まてつらきあき草の深くや鹿の妻をこふ覽
鷹司院帥
うかりけるたかならはしに秋草のうつろふころは鹿の鳴らん
ふゆのくさ
御　製後嵯峨
かきれなる草も人めも霜かれぬ秋の隣や遠さかるらん
入道三品親王
やたのゝに雪ふりおほふ冬の草のもえてみゆへき我思ひかは

冬かれのお花かもとの草のなをそれとはかりもしる人そなき　入道前攝政道家

なにゆへか人もすさめんおきな草身はふりはつるのへの霜枯　前大納言基良

かたちこそ霜のくちはとなりはてめたてろもよはき翁くさ哉　信實朝臣

冬くさは我老らくのかみなれやけたすてしものふり重ぬらん　祝部成茂

したくさ　藤原爲綱朝臣

さとわかす春の日かけはてらせともまた露ほさぬ谷のした草　明珍法師

にこくさ

我思ひ人しろらめやあしかきのなかのにこ草したにもゆとも　信實朝臣

さうのくさ

〔新六〕みま草はくろともからんみこもりのゐかひの岡の事の繁さに

露しけきをかのあさけにかゝる草のひつきに袖をぬらす比かな　正三位知家

人めもろしのひの岡にかゝる草のあなかま露に袖のぬるらん　源有長朝臣

我戀はみつのうへのにかゝる草の一日もみれはいやまさりつゝ　隨心法師

足引の山のかけくさしけりあひてせかるゝ水やむすほゝろ覽　皇太后宮大夫俊成女

いかにせんしくろゝのへの思ひ草した葉にむすふ露の亂れを　權中納言資季

しられしなきみかあたりの草のはに露の命をかけてこふとも　正三位知家

〔新六〕かつまたのいけるは何そつれなしの草の扨しも老にける身よ　入道前攝政

わひ人のたのむ蔭なくなりしより壁におふてふ草のなそうき　九條前内大臣基家

筆の海かく人なみのもしほ草あろもかひなき名にやしほれん　衣笠前内大臣家良

やまふき

うかろへき春のわかれのちかしとも咲なしらせそ山吹のはな　前大納言爲家

早瀨かはなみのかけこす岩きしにこほれて咲ろやまふきの花　藻壁門院少將

よろなみもしたにやむせふ山吹のはなにかくろゝゐての河岸　權中納言資季

しめゆひしまかきやたりになりぬらん花おもけなる庭の山吹　從三位行能

咲なろゝまかきはなにのつらけれはいはて露けき山ふきの花　侍侍家中納言

いはすともすみうき程や見えぬ覽あれたろ宿のやまぶきの花　正三位知家

〔夫木抄六〕はふりこかころもの色やまかふらん神のみむろの岸の山ふき　淨恩法師

くちなしのこそめの衣をりはへて垣ほにさらすやま吹の花　義停法師

あをによしならちもちかし山城のゐての山吹みにこわかせこ　藤原隆祐

春のゆくかたこそみゆれよしの河散て流ろゝ山ふきの花　入道前攝政

なてしこ

朝な〳〵猶咲まさるいろ見えてちりたにすへぬとこ夏の花

衣笠前内大臣

〔新六〕見ても又あかんものかはなてしこの初花なひきをける白露

我やとのからなてしこの花盛みにきませとも誰に告まし

浦人やかさしにおらん夏草ののしまかさきのやまとなてしこ

前大納言爲家

よそなから哀とそ思ひかは嶋の草のはつかにみゆるなてしこ

右兵衛督基氏

なてしこの花の色々にをく露のちらまく惜みとらはけぬへし

正三位知家

我せこかやとの床なつ咲たらはたえすやとはん花につけても

はき

白露のをけるをみれはたかまとののへの萩原ときはきにけり

入道前攝政

いさこともはや行てみんしらすけのまのゝはきはら盛成らし

前太政大臣實氏

旅衣あさたつをのゝこはき原あらくはわけし露もこそちれ

前中納言定嗣

移しうへしこの秋はきの枝たはみあかす日毎にをけるしら露

正三位知家

人はこぬ草葉のとこの露の上にかたしきれたる萩か花つま

卜部兼直宿禰

こよひたにれたりとみゆなる萩か花月にめてすと人も社いへ

源有長朝臣

秋はきに衣にほはゝあつさ弓ひくまのゝへに又かへりこん

衣笠前内大臣

露かけておらはおしけん神なひのあさゝは原のあき萩のはな

式乾門院御匣

あれはてゝ野へとなる庭の秋はきに玉をく露そみる人もかな

正三位知家

しはしたにをきてやはみん日影さすつとには消る萩の上の露

藤原隆祐

年をへてのとなるにはのかひあらは鹿たにかよへ秋はきの花

藤原爲繼朝臣

たかまとのゝへのあきはき今も又花咲ときやしかも鳴らん

前攝政左大臣實經

ぬれ〳〵も折てかさゝむ萩かはなちらす詠の日數もそふる

信實朝臣

しはしみむあやなゝちりそ白露の玉もて咲る秋はきのはな

從三位行能

遠山田かりそ鳴なるあき萩の下葉の露や色にいつらん

藤原爲氏朝臣

まはきはら秋の野風は心せよ色とる露のちらまくもおし

秋萩はうつろひぬらし乙女子か行あひのわせもまた刈ぬまに

藤原基政

さかはまつみせんと思ひし秋萩の移ろふまてに人はとひこす

承明門院小宰相

さためなき風を待まもうつろひぬもとあらの萩に結ふ白露

少將内侍

秋かせに今こそものゝかなしけれしたは色つくまのゝ萩原

尚侍家中納言

うき人の心もしらす秋はきのしたはをみすはなをやたのまん

をみなへし　　鷹司院按察

夕されはなにをうしとか女郎花いはぬ色にも露こほる覽

藤原惟平朝臣

露かゝるむかひのゝへの女郎花おらぬになとか袖のぬるらん

平重時朝臣

おもひきやあたれの床のをみなへし露結ふへき契りありとは

明珍法師

男山よそにみつのゝをみなへし誰ゆへ花のひもはとく覽

すゝき　　衣笠前内大臣

秋風もあたにな吹そ花すゝきほむけのいとのぬけるしら玉

正三位知家

さても又たれかはきます花すゝきこてふにゝたる袂なれとも

〔新六〕夕暮はふきもさためぬ秋かせにまねく薄の袖かへるみゆ

おき

秋かせにをきふしわふるおきのはや老のね覺の心しるらん

權大納言公相

さらてたに身にしむいろの秋風を軒はの荻の音に立なる

正三位惟季

をのつから哀はのこせ秋の風さこそはおきのうはゝなりとも

少將内侍

かなしさはなにといふとも荻のはに風吹はかり聞ことはなし

辨内侍

いかはかりね覺せられんおきのはに今宵はいたく秋風のふく

鷹司院帥

さなくても秋とおほゆるわか宿におきのは風もさそと吹也

信實朝臣

荻原やすゑのゝ露に風たちて身にしむときの秋の夕暮

藤原隆祐

袖のつゆのきはの荻を吹かせに思ひそしけき秋の夕暮

承明門院小宰相

はかなしやこぬ人たのむ夕くれにのきはの荻を秋風のふく

皇太后宮大夫俊成女

色かはる心の秋のときしもあれ身にしむ暮のおきの上風

入道前攝政

とへかしなまたほに出ぬした荻も暮れは風のよそにやはきく

前攝政左大臣

身に寒きのきはの荻のあき風にいも待かねてねんかたもなし

權中納言資季

おき原や葉わけのかせの音ことにたのめぬこひも驚かれつゝ

卜部兼直宿禰

秋風の聲にもたてぬした荻の穗のめかさてやしほれはてなん

平重時朝臣

秋の露いかにむすへは荻のはのみたれてくれはかなしかる覽

惟乘法師

こゝろからまかきに荻をうへそめて秋風ことにぬるゝ袖かな

玄譽法師

物おもふ有明かたのそてに又なを露そふるおきのうはかせ

親玄法師

年をへて秋のあはれやつもるらん身にしみまさるおきの上風

らに　　信實朝臣

〔新六〕むらさきの色そめはてぬ藤はかまうすきや草のゆかり成らん

藤原爲氏朝臣

誰かきてぬしとはいはんふちはかまのことに露の色はそむ共
入道前攝政
いろ／＼に咲ぬとすれと藤はかまやかてもろくも秋かせの吹きく
前關白左大臣
あしひきの山路の菊も君かため萬代ふへきかさしとそ咲
前太政大臣
菊の露あきにもあへすうつろひぬ老せぬ花のかさしなれとも
藤原爲繼朝臣
誰しかもかさしにおらん足曳のやまちに匂ふ秋のしら菊
平重時朝臣
月もさはいかにわきてかやとる霓色もかはらぬきくの上の露
信實朝臣
秋の色をいま一さかりなく霜にうつろひとまる庭の白菊
藤原資宗朝臣
白妙ににほひしきくのうつろひておなし花ともみえぬ色かな
藤原隆祐
うつろふはかるゝはしめの色なれはまたきにおしむ秋の白菊
正三位知家
そかきくの色のてこらもみえわかす秋の初霜をき迷ひつゝ
色かはるきくの籬をきてもみよ身をこそ人のとふにうからめ
承明門院小宰相
つむ菊の花もかひなし初霜のよそにはをかぬなか月の空
前攝政左大臣
あた人の心のみかは世中もうつろひそ行しらきくのはな
正三位知家

くさのかう

けふもまたいちめかもたるくさ／＼のかう人おほみ殘り少き

きちかう

今もなをこふるは苦し尋れみんいてそもきちかうらの初しま
淨忍法師
みよしのゝたきちかうちに月さえてよるさへみゆる波の花哉
卜部兼直宿禰

りうたん

かきのもと哀と見ませかくはかりうたむかしより盛なる世を
源兼氏
かきとむるあふみふりうたむかしへて今もかはらぬ水莖の跡
藤原隆祐

しをに

亂れあしをにこれる水にふみしたき鴛の浮れの影たにやみぬ
卜部兼直宿禰
あまたとしをにもたへすてくたくるは老の泪の玉にそ有ける

くたに

こほりしく谷の下水おもひいつやもりこし月の秋のひかりを
衣笠前内大臣
ふかくたに契りもをかは夜半の月かたふく迄に待もみてまし
淨忍法師
いはた河いくたに水のおちあひて百瀨にかはるならひ成らん
卜部兼直宿禰

さうひ

しらすいさうひとは歌の姿にて神のいつもしなきなとそきく
正三位知家
早せ河さてにはちかふ石ふしをいさうひとつに任せてをみん
信實朝臣

かるかや

〔新六〕おれかへるしたの亂に埋れてほにかすかなるのへのかるかや
嘉陽門院越前
秋風におもひみたれてくやしきは君をならしの岡のかるかや

かや

うつらふすをのゝかやふは霜枯ておれはかたより風さはく也　衣笠前内大臣

〔新六〕はた山の尾上つゝきのたかゝやに臥猪ありやと人とよむなり　前大納言爲家

吹かせや寒くなるらししらすけのまのゝかや原うら枯にけり　權大納言公基

やま人のかやかりおほひ作るやのひまなきこひは露そ亂るゝ　九條前内大臣

はちす

たまこゆるはすのうき葉に宿かりてかけも濁らぬ夏のよの月　前太政大臣

み草のみしけく成行秋の池のはすのかれはに村雨そふる　衣笠前内大臣

このよにもいかなる露の契りとてわきて蓮の花にをく覧　前大納言爲家

種しあれはむれの蓮も開けなんと思へはやすくやすからぬ哉　脩明門院大貳

かきつはた

このれぬるあさゝはをのゝ杜若衣にゝほはせあかぬかたみに　正三位知家

いそのかみふるかはをのゝ杜若はるの日數はへたてきにけり　二條院讃岐女

こも

〔新六〕かりてほすよとのゝまこも網糸のちかひめおほき我うれへ哉　〔信實朝臣〕

はなかつみ

〔新六〕よしや唯假にもよらし花かつみかつみなれなは亂れもそする　前大納言爲家

花かつみかつ見るからにものそ思ふつらき心のしけり増れは　下野

あし

分わふるほとをしれつゝ湊江のあしのわかはを手折ふな人　前攝政左大臣

霜さゆる浦風あらく冬はきて下葉のこらぬあしの村立　前太政大臣

朝霜のかれはの芦の隙をあらみやすくや船の湊いるらん　九條前内大臣

難波かた入江のしほやみちぬらん末はそ殘るあしのむらたち　權大納言公相

難波かたふるえの芦のしほれはもよをへて浪のしたに朽ぬる　按察使爲經

なには江やなかれて早き夕しほに汀のあしのかたなひきなる　權大納言資季

水こもりの入えの芦のさかりはの沈み果ぬる代をいかにせん　入道三品親王

興津かせ吹しく浦のあしの葉の亂れてしたにぬるゝころ哉　前太政大臣

こやとてもいつくを問ん津の國の芦のまよひに過る比かな　正三位知家

なとかゝるえにしあれはか難波成みほの芦れはうく方もなき　信實朝臣

芦のはも霜かれにけりなにはなるみつとて人をこひ渡るまに　少將内侍

世中はなにはのあしのかりそめと思ふにたにも猶そすみうき　前攝政家民部卿

老らくもさそはたおなし難は江の芦のよはくも霜枯にけり　信實朝臣

藤原季宗朝臣
ほに出ていはれはこそあれ芦のはにかくれて住し里そ忘れぬ
最知法師
波かくろ礒邊のあしのねを絶て浮立ほとの世をやおしまん
〔新六〕ひし　前大納言爲家
いかゝして池のひしつるうき事は始めもはても思ひわくへき
ぬなは　鷹司院按察
こほりする冬の池なる浮ぬなはくるしや解すむすほゝれつゝ
左兵衛督基氏
よしや唯浮ぬの池のうきぬなはうきなたつとも逢むとそ思ふ
れぬなは　眞観
をくろさきぬたのれぬなは苦しきは此世にひける心なりけり
〔新六〕あさゝ　信實朝臣
みれはまたあさゝおふてふ澤水のそこの心のねをやあらはす
うきくさ　御製
戀わひて身をうき草と思へ共ねはたえすこそまつなかれけれ
正三位知家
さのみやはうきに年へん浮草のねもみぬ人を思ひたえなて
少將内侍
浮草のうきかうへこそこほろらめさそふ水たになき我みとて
承明門院小宰相
たくひある浮身もさそへ行水にねさしとゝめぬ草ならすとも
つきくさ　鷹司院按察
おほかたの露もうらめしつき草のうつろへとやは契り置けむ
兵部卿有敎
つき草の花もあたにや思ふ覽ぬれぬに移る人の心を

藤原行宗朝臣
つきくさにころもはすらしうつろふを心の色と人もこそみれ
わすれくさ　九條前内大臣
露そおくまくらのしたの忘草うへていてにしひとの名殘に
前大納言爲家
〔新六〕うき人の心のたねのわすれ草うたてあるよになとおひけん
權中納言資季
すみよしの忘るゝ草のたねもかなつれなき人をよそに思はん
しのふくさ　藤原爲氏朝臣
かれねたゝその名もよしや忍ふ草思ふにまけは人も社しれ
藤原經平朝臣
故郷の軒におふてふ忍ふ草しのひに君をこふる頃かな
權大納言公相
人しれすしのふの草に置露のみたれてのみや思ひきえなん
ことなしくさ　正三位知家
〔新六〕都人とふことなしの草のはも今霜かれの冬のさひしさ
せり
〔新六〕いたつらにあるゝ園生のはたけせり侘しけにてもあるよ也覽
なき　信實朝臣
〔新六〕苗代のたつらのあせのうへこなきまくてふ種にとりやませ劔
たて　前攝政左大臣
みつたてのほつみにかよふむら鳥の立ゐにつけて秋そ悲しき
衣笠前内大臣
〔新六〕さきのとふ河へのほたてくれなゐに日影さひしき秋の水哉
藤原隆祐
世を秋のたつらのほたてつみはやし幾度からきふしにあふ覽

むくら　　前大納言爲家

あしかこふ垣ほにかゝる八重葎ひまなき物は人めなりけり

鷹司院帥

やへむくらしけりはてたる故郷そ見るもさひしき秋のゆふ暮

たまかつら　　少將内侍

心してはふきさためよ玉かつらあまたにならはえやは賴む

隆專法師

わきもこかれやまにかゝるたま葛くるとみゆるも夢ち成けり

右近中將忠基

夏くれは大江の山のたまかつらしけりにけりな道みえぬまて

くす　　權大納言實雄

しはしたに猶立かへれま葛原うら枯て行秋のわかれち

前大納言伊平

忍ふ山したはふくすの夕しくれしらしな人はそむるこゝろを

前大納言爲家

あまのすむ里のとまやの葛かつらひとかたにやは浦風も吹

平重時朝臣

あちきなしかくかき〳〵て水くきの岡へのま葛恨みはてすは

明珍法師

夏山のしけみかしたにはふくすのいつあらはれて恨たにせむ

かの岡に葛かるおのこまてしはし恨みんと思ふおりも社あれ

藤原忠倚朝臣

風渡る野原のくすをけふみれはひとりは身をも恨みさりけり

藤原隆祐

葛の葉もこゝろの秋にくらふれは風のひまある恨なり鳬

皇太后宮大夫俊成女

おもふよりいかに夕の秋なるをまた吹かへすくすのうらかせ

鷹司院按察

人こゝろ霜かれはつる葛のはのうらむときさへ過にけるかな

侚侍家中納言

秋はてゝしも枯にけりまくす原うらむるさまに扨やみえけん

さねかつら　　前大納言爲家

〔新六〕いとはしや山した茂みされかつらはひまつはれて絶ぬ心を

信實朝臣

まつはるゝなけきの杜のされかつら絶ぬや人のつらさ成覽

あをつゝら　　衣笠前内大臣

足曳のやましたはへるあをつゝらくるゝ日影もなかき頃かな

前大納言爲家

草の原うはゝにはへるあをつゝらくるしやことの茂き夏のは

〔新六〕我こひはあそ山もとのあをつゝら夏野を廣み今盛なり

源俊平

かへるさのあしたの原のあをつゞらくるしき道と今そ知ぬる

祝部成茂

同しくは端山かしたのあをつゞらくる〳〵しけくあふ由も哉

靜眞法師

わすらるゝ宿の垣ねの青つゝらくるものとてそ人もまたれし

あさかほ　　入道前攝政

立まよふ霧のまかきにむすほゝれまた露はさぬあさかほの花

衣笠前内大臣

朝かほの夕をまたぬ花のよになきてあたなる露の身もうし

藤原行宗朝臣

ゆふ影を待へきものかけさのまにとふ人あれやあさかほの花

朝かほの花よりけなる命もてあすともいかゝ身をたのむへき
三善康義

朝かほのなとゝきのまを契りにて露よりけなる色に咲覧
下野

いかさまに契りかをきし白露の結ふほとなきあさ顔の花
從一位掄子家尾張

暮をまつちきりもあらはきぬ〳〵の袖にはかけし朝顔の露
藻壁門院少將

たゝひとや契りをきけむしら露もくれなはなけの朝かほの花
鷹司院按察

きえぬまの色を哀とみる人も花もはかなきあさ顔の露
皇太后宮大夫俊成女

あさち
いつくにも同しやとりの露なれと月はあさちの上そさひしき
藻壁門院少將

乙女子かしめゆふをのゝ淺ち原いつしか秋の色かはりける
右兵衛督基氏

今よりはやゝはた寒しま葛はふをのゝあさちや移ろひぬらん
藤原行宗朝臣

露さゆる末はのあきの淺ちはらむしのねよりそ枯はしめける
源具親朝臣

つはな
〔新六〕たまほこの道の芝草ほに出て春のつはなも人まねき見
信實朝臣

かにひ
よそにては春のすさひとみゆれ共誰ためのへのつはなぬく覽
藤原隆祐

いくとせの秋の今宵かあふさかにひくてふ駒の跡ふりぬ覽
源兼氏

我忍ふおもひの程をみせたらはいかに人めもくるしからまし
卜部兼直宿禰

から崎やしかつの濱のひとり松いかに久しき名にかふりぬる
正三位知家

あちさゐ
〔新六〕今もかもきませ我せこみせもせんうへしあちさゐ花咲にけり
正三位知家

さこく
伊勢の海やしほもかなひぬ浦人の朝こく船はつりにいつらし
前大納言爲家

すみれ
〔新六〕むらさきのこそめの袖とまかふまてすみれ摘もて歸る里人
正三位知家

なつかしき色こそあかれ紫ににほへるいもかすみれつみつゝ
藤原經平朝臣

をはき
堇咲いはたのをのにしめさゝん行きの人のつまゝくもおし
前大納言爲家

〔新六〕春日野はをはきつみけりなら山のこのめはる風ゆるく吹らし
正三位知家

わらひ
〔新六〕けふの日はくるゝ外山のかき蕨あけは又こんおり過ぬまに
眞觀

露かゝる小笹ましりのしたわらひさもおりふしはぬるゝ袖哉
正三位知家

ゑく
雲雀あかる山澤水に袖ぬれてゑくのわかはを摘はたかこそ
前攝政左大臣

ゆり
いまはけに秋ちかゝらしさゆりはなゆりあふまてに置る白露
衣笠前内大臣

草の原しけみ隱れのひめゆりも花にしさけは人にしれつゝ

正三位知家
今も猶草のま袖にかくろへてあらはにみえぬのへの姫ゆり

あ　ゐ
衣笠前内大臣
〔新六〕はりまなるしかまの里にほすあゐのいつか思ひの色に出へき

まさきのかつら
正三位成實
山深みまさきのかつらくる人のとふにつらさの露そこほるゝ

信實朝臣
誰をかもくる人にせんとやまなるまさきのかつら道は絶つゝ

藤原爲氏朝臣
奥山のまさきのかつらうちはへて苦しきよ社かなしかりけれ

藤原行宗朝臣
いかはかり色にそむらん外山なるまさきの葛まなくしくれて

法印耀清
薄くこきまさきのかつらくりかへしとやまをめくる村時雨哉

ひかけ
前大納言爲家
をみ衣けふきてかさす日かけ草豊のあかりの名こそしろけれ

權中納言資季
けふにあふ豊の明りのひかけ草いつれのよゝり懸はしめけん

従三位行能
あかねさす日かけの葛千代かけて乙女さひすもいはふ頃かな

やまたちはな
あし引の山たち花の木かくれて身はいたつらになるよ也けり

信實朝臣
〔新六〕いはかねはみとりもあけもはへ色の山橘のときはかきはに

すけ
入道前攝政
山里はしけりにけりな岩こすけなか／＼し日の詠せしまに

衣笠前内大臣
こひわひぬあふよもかたし奥山の岩もと菅のねのみなかれて

權大納言實雄
したにのみしのふの山の岩小菅いはておもひの年そへにける

右兵衞督基氏
我こひは人もかよはぬ奥山の岩もと菅のしける頃かな

正三位知家
武士のゆつるにまけるみしま菅みしまゝ乍らとけぬつれなさ

従三位泰光
逢見てもまたかくれぬの岩こ菅いはては長きねをのみそなく

明珍法師
五月雨のまなくし降は笠にぬふまのゝ小菅もしほれあひに皃

前大納言爲家
〔新六〕皆人のかさぬふ草のかり跡の世にすけなく／＼も成にける哉

さ　ゝ
入道前攝政
秋風にまつうちなひくさゝ竹の大宮人の袖そ涼しき

衣笠前内大臣
玉さゝの葉分にむすふ白露の我よ計のうきふしはなし

あふひ
前大納言爲家
賀茂山のみあれをちかみ今こそは神の宮つこ葵とるらめ

入道攝政
千早振神もかさせるもろかつら萬代かけてたえしとそ思ふ

前太政大臣
宿ことにかさすみあれのあふひ草神のしるしやときは成らむ

權中納言資季
神まつるけふのみあれのかさし草なかき世懸て猶やたのまむ

中原師光
其かみのみかけの山のもろは草けふはみあれのしるしにそ取
右大將近忠母
〔て歟〕
かたみとそみるに泪そかゝりける葵はよそのかさしと思ふに
入道三品親王
かさしこしかものみあれの葵くさその名をけふはかくる計そ
前大納言爲家
みくり
今ははやとをちの池のみくりなはくるよもしらぬ人に戀つゝ
信實朝臣
〔新六〕いたつらにひかぬみくりの深き江に沈むくるしき戀もする哉
藤原隆祐
みくり生る池の浮草とにかくにまつはるゝよのところせき哉
皇太后宮大夫俊成女
よもき
たつれてもわすれぬ月の影そとふよもきか庭の露の深さに
信實朝臣
なゝそちにむかふの里の古よもきうたゝ朽ねとなれるさま哉
源有長朝臣
いつの日か霜のよもきをはらひつゝ松のとほその月を眺めむ
藤原隆祐
霜深き庭に折ふす蓬生のたつかたなくて身はふりにけり
こけ
御製
おく山の谷には冬もよそなれや霜かれもせぬ苔の色哉
皇太后宮大夫俊成女
すみよしとおもはぬ人のためなれや岸にしくてふこけの小莚
藤原隆祐
幾度かきしうつ泪のあらふらん年ふりにける苔の色かな

かく山のむすきかもとにむす苔の色も戀らてよをやつくさん
觀玄法師
なき人の跡をのはらに尋きてこたへぬ苔のしたをとふかな
鷹司院按察
さればとて苔のした共いそかれす浮なを埋むならひなければ
いちし
入道前攝政
たつたみも衣てしろしみちのへのいちしの花の色にまかへて
正三位知家
人をいかておもひ忘むおほ原や此いちしはのつかのまはかり
しは
前攝政左大臣
曉の露のみちしは置わかれ袖のかたみに殘る月かけ
信實朝臣
秋されはをのか心と霜かれぬとふ人もなき庭のみちしは
入道前攝政
〔新六〕いゐの風吹からしたるしはのれのをこし處もなくなりにけり
むし
さらてたに秋はかなしき淺茅生にをのれもたえす虫の鳴らん
前攝政左大臣
我やとのまかきの草のしけきれに何をうしとかむしのなく覽
よもすから草のはかくれ鳴虫も我すむ宿はれをやそふらん
九條前内大臣
夕暮の野はらに人やかよふらん草葉にたゆるむしのこゑ〳〵
前大納言基良
なれにける秋の寢覺も今更にしのゝめつらき虫の聲かな
權大納言實雄
曉のね覺ことゝふむしのれに我さへあやなゝみたおちけり

正三位忠定
明行は野原のむしもよはる也誰をうらみの音をもなかまし

信實朝臣
雨過てときそともなくなく露のいまは夕とむしのなくらん

藻壁門院少將
露しけき庭のあさちふ我ならぬ思ひもありと虫そなくなる

下　野
秋かせのさむく吹ぬる夕暮は草葉の虫もこかれてそ啼

信實朝臣
大かたのあらしにわふる虫のねもやとからしけき秋のゆふ暮

承明門院小宰相
あれまさる宿は草はのかけなれはよる鳴虫のねをのみそきく

皇太后宮大夫俊成女
明ぬとてわかれぬ虫のこゑにさへ袖のなみたの露そこほるゝ

前攝政家民部卿
われのみとのもせにすたく虫のねに露もをとらぬ袖の上かな

正三位知家
我せこかこぬたにつらき風の音にさこそはなかめ秋のみの虫

信實朝臣
庭草のもとくたちゆくさかりはもやゝ過るれに虫そ鳴なる

藤原行宗朝臣
なくむしの聲うらふれてこの頃の有明かたは露そさむけき

鷹司院按察
かれぬへき草の葉かくれ住虫の曉かたは寒くこそなけ

せ　み

九條前內大臣
夏山の木のしたとよみ鳴せみは岩こす瀧になみたかるらし

衣笠前內大臣
絶はてはいかにせんとか空蟬の空しきくれは音のみなかるゝ

權大納言實雄
身をかへてなにしか思ふうつせみのよはたのまれぬ人の心を

鷹司院按察
よしやさはみきとなかけそ空蟬の薄き契りはなきになしても

前攝政左大臣
かゝりける身をうつ蟬のおりはへて茂きなけきの枝に鳴也

九條前內大臣
誰ためとぬきてかすらん空蟬の鳴木のもとの已か羽ころも

正三位知家
秋やまに聲たに殘る空蟬のからくもひとり露けかるらむ

藤原忠兼朝臣
人の身も果はむなしきうつ蟬の鳴なる聲を哀とそきく

圓地法師
うつ蟬の世としりなからねをそ鳴心のうちのむなしからねは

なつむし

前大納言爲家
〔新六〕はかなさのたくひも悲しともし火の影にかゝよふ夜半の夏虫

右兵衛督基氏
ともし火のほのほにむかふ夏虫の心つからをよそにやはみる

御　製
我こひに誰かまさるとくらへみむよるはすからに燃る夏虫

前攝政左大臣
身をかへて思ひこかるゝ夏虫の扨もあふよはなきそかなしき

鷹司院按察
みに近き秋そしらるゝなつ虫のもえて見せたる夜はの思ひに

きり〳〵す　信實朝臣

淺茅生の秋の夕のきり〳〵すねに鳴ぬへきときはきに皃　正三位知家

蓬生の夕日かくれのきり〳〵すよ半の思ひをかれて鳴也　衣笠前内大臣

きり〳〵すねに鳴あかす秋のよをねすて我身に思ひしりぬる　入道三品親王

露深き我手枕のきり〳〵す誰かまさると鳴あかしつる　御製

曉の枕のしたに住なれてねさめことゝふ蛬かな　前大納言爲家

秋計露にうれふるきり〳〵すわかとことはのねさめをもしれ　權中納言資季

ふるさとの淺茅か庭のきり〳〵す曉をきの露になくなり　前中納言定嗣

夢さむるゆかの下なるきり〳〵す聲いそかはしあけぬ此夜は　正三位知家

長月のくれこそあらめ蛬よのあくるにも聲よはる也　下野

心していたくなきそきり〳〵すかことかましき老のね覺に　菅原有氏

夕されはあさちかもとのきり〳〵す秋かせさむみ啼まさる也　式乾門院御匣

つれもなき人こそとはれ蛬鳴音にまさる秋のおもひを

なへてよの哀はしるやきり〳〵す壁におふてふ草のゆかりに　前關白左大臣

うらかるゝかやの垣ねのきり〳〵すよかせを寒み聲よはる也　衣笠前内大臣

きり〳〵すいたくなくのゝ淺ちふは曉深きつゆやをくらむ　正三位知家

行秋のあり明かたのきり〳〵すものうかるねに今は鳴なり　衣笠前内大臣

まつむし

里遠き野中のもりのした草に暮るもまたぬ待虫の聲　藻壁門院少將

まつ虫の聲するのへの露わけて我かとゝはゝ袖やぬれなん　嘉陽門院越前

何ゆへと思ひはわかてまつむしの鳴ゆふくれの秋そかなしき　源具親朝臣

人はいさくるしきものとしりぬれはよそにもきかし待虫の聲　祝部成茂

けふもなとゝはれぬ秋の夕そとわか宿かこつ庭のまつむし　法眼長隷

誰ゆへの露のかことにかゝるらんお花かもとのまつむしの聲　前中納言定嗣

見し人のくへきよひともたのまれすいたくなゝきそ待虫の聲　前關白左大臣

我ことやたのめてつらき秋かせの寒きよな〳〵待むしの聲　前太政大臣

草の原したはやさむく成ぬらんやゝうらかるゝ待むしの聲　式乾門院御匣

こぬ人を猶まつ虫のねにそ鳴庭のあさちもうらかるゝまて　鷹司院按察

たのか名も忘るゝ程にたえにしを何まつ虫のこゝら鳴らん
正三位知家

すゝむし

〔新六〕秋はゝやよさむになりぬをとめこか袖ふる山の鈴虫のこゑ
九條前内大臣

ひくらし

あしかきに山おろし吹て日暮しのなかなく里は秋そま近き
衣笠前内大臣

吹すさむ山した風に雨過て夕日のかけにひくらしそなく
前大納言爲家

〔新六〕人はこてかせのみ秋の山里にさそひくらしの音はなかれける
藤原隆祐

契りをきし時そと思へは日晩の鳴ねにつけて袖そぬれける
入道前攝政

ほたる

なつのよは物おもふ人の宿毎にあらはにもえて飛ほたる哉
前大納言爲家

〔新六〕とふほたる光りみるこそ哀なれ何の思ひにもえはしめけむ
按察爲經

あたりたにすゝしき水の上になともえて螢のよを渡るらん
信實朝臣

みなそこにもえたるかけの移らすはかた思ひなる螢ならまし

ひろふてふ玉にもかもなひさきおふる清きかはらに螢飛也
藤原爲氏朝臣

何なけく思ひなるらし終夜身にあまるまてもゆる螢は
鷹司院按察

おもひやれ澤の螢のよるはもえ晝はきえつゝとしへぬる身を

千早振神たにけたぬ思ひとや御手洗河にほたるとふらん
藻壁門院少將

ほたるとふ岩まの水を結ひつゝ袖におもひの猶やたりなん
源仲業

いかなれは澤の螢にあらぬみのよるは思ひにあへすもゆらん
正三位知家

はたをりめ

うらかるゝ草のいとすちをさをあらみま遠にもをる虫の聲哉
入道前攝政

くも

さゝかにのてたまもゆらに引糸のくるれは人を待ぬよそなき
前攝政左大臣

待人はむなしき暮に何と又あしたゆくゝるさゝかにのいと
鷹司院按察

さゝかにの糸かくしるき宵々もうきみはいさやそれも頼ます

なみたのみ袖にはかゝる笹かにの我をたのめし暮そこひしき
尙侍家中納言

たえすとも何か頼まむさゝかにのいとはるかなる人の契りは
信實朝臣

僞をなにかふるまふ蜘蛛のいかに待ともくへき宵かは
紀宗茂

さゝかにのいかにふるまふ夕暮か契りたかへす待人はくる
正三位知家

て　ふ

思ひしれ花にむつるゝからてふも移ろふ色のはてのつらさを
前大納言爲家

き

春しらぬ我のみかけの朽木にてよそなる花をなにいそくらん
入道三品親王

花さかて春をしへぬるみ山木のありてなき身をいかに頼まむ
前攝政左大臣

茂りあふ山の常盤木いつれともわかれぬなつに成にける哉

權大納言實雄
よそにのみみし計なる深山木のそのなもしらぬ人にこひつゝ
前參議定經
年へぬるゆけのかはらのむもれ木の浮ひ出へき行衛しらせよ
正三位知家
老ぬれは風もいとはし今はわれつま木こりたき身を過してん
やき捨し古山はたのかたきしにたてるやからき我みなる覽
信實朝臣
〔新六〕ふる枝のふしのみ殘るうつほきの立るもさひしはたのやけ山
里人はきてもや道をこりぬらん雪おれひろふ山の妻木に
橘　則廣
とたちはの岡の萱のゝふるたつ木こひに馴たる年そ經にける
〔しほり〕　藤原隆祐
ひとかたのあらぬしほりの道なれはなか〳〵まよふ花の頃哉
は　な　正三位知家
花の木をうへし花にそ今年より春しりそめよひとめをもみん
藤原基政
散をうしと思ひし花そまたれける春くることに物わすれして
皇太后宮大夫俊成女
尋きておりもそやつす此里に花咲そむといひなちらしそ
まちとをに思ひし春のめくりきてことしの花を又見つるかな
入道前攝政
山かせの霞の衣ふきかへしうらめつらしき花の色かな
攝政前太政大臣
命あらはこの春見むと契り置し花は我をやおもひいつらん
前攝政左大臣
あたなりと思ひし花は咲にけりみしにかはらぬ人はなけれと
九條前内大臣
たつぬへき我よりさきにあし曳の山にいる人花やみるらん
衣笠前内大臣
たまきはる命あらはとまたれこし花の盛になりにける哉
正三位知家
いにしへの八雲たつとや今もかも出雲のこらは花をみるらん
下　野
いつもみるおなしたかまのあまのはら花咲ぬれは匂ふしら雲
權中納言顯朝
花ゆへはしらぬ山路もたとられす匂ふしるへを風にまかせて
中原師光
あめつちをわけしむかしの春よりや華に心を人のそめけむ
丹波經長朝臣
朝またき吹こす風のかほる哉山のあなたに花やさくらむ
藤原盛基
世々へぬるしかの都のあとなれとふりぬは花のさかり也けり
祝部成茂
都人とはゝとはなん山里のあるしときゝし花もさくめり
藻壁門院少將
ふくかせの匂ふやいつく道すから花に心をかけてこそゆけ
尙侍家中納言
咲ぬれはかならす花のおりにともたのめぬ人のまたれける哉
つけやらむ人のこゝろもこゝろ見よまたれし花は今そ盛りと
承明門院小宰相
をしほ山神よの春や契りけんにほひも盡ぬはなのしらゆふ

見る人ぞむかしのいろはかはりける花は老木の春も有けり　按察使隆衡
かへりこぬ昔を花にかこちても哀いくよの春かへぬらむ　前太政大臣
春をへて花をしみれはとはかりをうき慰めの身そふりにける　正三位知家
浮身には人よりもけになれぬへし花みるほかの春をしらねは　從三位伊忠
いとまありて馴ぬる身をも思ひしれさりとも花は情わくらん　承明門院小宰相
身にうとき春の恨もかへりみすいつのものとて花になるらん　藤原隆祐
花にこそ心よはしとみえもせめとことはになと袖のぬるらん　眞觀
ちりてまたあひみむ春もさためなき人の哀を花もしる覧　皇太后宮大夫俊成女
後に又あひ見んこともたのまれす花も我身もさためなき世は　前攝政左大臣
みな人のよそにのみきくみよしのゝ高ねの花をみてそ過にし　法印覔守
春をへて芳野の奥に咲花や人の心の色をわくらん　承明門院小宰相
うつし植て移ろふ色にならふともいかゝは花を恨みはつへき　入道前攝政
見る程はうさも忘るゝ世中になとしも花のあたに咲らむ　從三位伊忠
思ひいてもなき身と思へと春をへて多くの花をみてそ過ぬる　藤原季宗朝臣
おしむとてとまるならひもなき花にさのみ心をつくさすも哉　承明門院小宰相
春をへてくるしきことゝしりにしをまた散かたの花に馴ぬる　鷹司院按察
ありてよの果しうけれは花のためうしろやすくそ風は吹ける　前攝政家民部卿
花はまたなかき別れやおしむ覧のちの春とも人を頼まて　入道三品親王
身にかへて思へは何かしたふへき花をとめても同しわかれを　九條前内大臣
さりとても終にとまらぬ花ゆへにことしもあやなもの思ふ覧　從三位顯氏
あたにしもおもひし人の命もて花を幾度おしみきぬらん　蓮生法師
うつろふをしたふならひはいとせめて花にもみゆる我心かな　鷹司院按察
そてならて心を空におほふとも人まにのみや花のちるらむ　入道前攝政
人こゝろ風も吹あへぬよのなかにあたにも花を恨みける哉　前中納言國道
咲は散はなに心をつけしよりあたなる世とは思ひしりにき　下　野
なからへていけらはのちの春とたに契らぬさきに花の散ぬる　辨内侍

入道三品親王
けぬか上にまたふる雪とみゆるまできのふもけふも花は散也
前太政大臣
とはれつる人のかたみもとゝまらすふめと跡なき花のしら雪
藤原經平朝臣
いにしへのならひとてこそなくさむれ散しく頃の花の別れは
藤原爲繼朝臣
をのつから今年のみちる花とみはいか計なるつらさならまし
平長時
さらてたにうつろひやすき花の色に散を盛と山風そふく
權少僧都珍覺
めのまへに散てふ事の悲しきもはなはよそにや思ひやらまし
玄譽法師
老ぬれはこれを限りとみる花に哀をそへて春かせそ吹
度會與房
花をのみあかすちりぬとうらむれは我みの春もさかり過つゝ

あきのはな

前太政大臣
かすかのやゆかりの草のたれまきて花咲秋をけふみつる哉
前大納言基良
あるしなき庭の千草のはな盛いかはかりかは秋はかなしき
辨内侍
咲はなにのへをさかりとみわたせは千草の露のそむる秋かな
成恩法師
うへ置し籬の花のさかさらはむかしのあとゝいかてしらまし

もみち

前大納言爲家
岡邊なるふるねのはしの初もみち色めきわたるゆふつく日哉
正三位知家
秋きぬと人もみるへくまきもくのあなしの山ははつ紅葉せり
藤原經平朝臣
おほかたの梢はいまたしくれぬにみ室の山はうすもみちせり
前攝政左大臣
染やらぬ青はましりの薄もみちいかなる色の時雨まつらん
御製
はる〳〵とひとつ梢とみしさともけさは色々の紅葉しにけり
入道前攝政
露霜のをきあへぬまに染てけりはやまかすその秋の紅葉々
權大納言公相
里遠き霧の晴まのうすもみち絶々みゆる秋のゆふ暮
大納言典侍
むら時雨はるかにめくる外山より尾上の里のもみちをそ見る
信實朝臣
むへしこそ松は紅葉に殘りけれおなし枝をたにわきて染れは
藤原爲繼朝臣
秋山はしくるゝ程のあらはれて木ことに今はもみちしにけり
中原友章
いつくにもしくるゝ雲はかゝれとも龍田の山そまつ紅葉せる
源兼泰
紅葉はの色にもしるし神なひのこすゑを寒み時雨しにける
藻壁門院少將
しくれつゝうき雲はるゝ山もとの梢をさむみもみちしにけり
前攝政家民部卿
けふも猶いかにそめむとしくる覽はや紅葉にし山のこのはを

権大納言公相
神なひのいはせのもりの紅葉々をいかに時雨のわきて染らん
権少僧都澄舜
おほのなるみかさの杜にしくれふり染なす紅葉今さかり也
皇太后宮大夫俊成女
くれなゐにちしほやそめし山姫のもみちかされの衣手のもり
前太政大臣
枝をそめなみをも染つもみちはのしたてる山の瀧のしらいと
前大納言基良
龍田河ちらぬこすゑのうつろより波のしたてる秋の紅葉々
草のはらかれ行あきの初霜に色つきそむる峯のもみちは
権大納言實雄
そめてけりまなくときなく露しものかさなる山の峯の紅葉々
従三位行能
しくれ行をくらの山のもみちはゝ曇るにしもそ照まさりける
信實朝臣
晴くもりしくるゝ数はしられともぬれてちしほの秋の紅葉々
藤原爲繼朝臣
日影みぬ岩かき紅葉いたつらにしくるゝ色はほすひまもなし
入道攝政家宰相
夕つく日うつろふみねの雲まより山したてらす木々の紅葉々
藻壁門院少將
たつたやま木のは色つく程はかりしくれにそはぬ秋風もかな
同院但馬
外よりもいろこそこけれ我やとのもみちも物や思ひそめけむ
藤原隆祐
おほ井河はやふれよせよわたし守山のもみちに嵐もそたつ
侍従伊成
紅葉々の散にもまかふしくれ哉殘る木すゑをそめ盡すとて
尚侍家中納言
いつの冬ちらはともにと契りけむ枝さもかはす木々の紅葉々
鷹司院帥
いかにせむ枝もゆるさぬもみちはをさそふ嵐のつらくも有哉
藤原行宗朝臣
行秋のぬさに手向し紅葉々の殘りあれはや今も散らん
圓地法師
木からしに葉守の神のこゝろさへなひきにけりと散もみち哉

はゝそ

藤原行宗朝臣
岡へなるはゝそのこすゑ霧たちて色つくみれはかりはきに見
藤原爲氏朝臣
かたをかのはゝそのもみちいろつきて秋風寒く鴈そ鳴なる
入道三品親王
さを鹿のたちならす山の岡へなるはゝそは早く紅葉しにけり
前攝政左大臣
さほやまのはゝその紅葉けさみれは時雨をはやみ色つきに見
前太政大臣
薄きりの外山かくれのはゝそはらうつろはんとや時雨そむ覽
衣笠前内大臣
たかせさすさほの河原のはゝそ原うつろふ秋に成そしにける
前大納言爲家
〔新六〕みれつゝくとやまのすその柞原あきにはあへす薄もみちせり
正三位知家

〔新六〕鳴かりの聲きく山のはゝそ原した葉かつ散秋風そふく
信實朝臣
いつみかはゝその梢みわたせはわたりを遠み紅葉しにけり
藤原爲敎朝臣
けさ見れは時雨にけりなさほ山のはゝその紅葉色そうつろふ
法眼長尋
あらし吹いはたのをのゝ柞原あはれふり行秋の色かな
前大納言伊平
山科のいはたのもりに冬のきてはゝそのもみちいまか散らし
前大納言爲家

まゆみ

朝霧のあたちのまゆみ秋はまつしくれをこめて色つきにけり
正三位忠定
あたちのも雪ふりにけり狩人のひかぬまゆみの末たはむまて
藤原隆祐

かへて

夏山のおなしみとりにましりても人のみはやすわかゝへて哉
前大納言伊平
しけり行庭のかへての若みとり色そめかへむ秋もまたれす
正三位知家
〔新六〕めかれせぬ宿のかへてをいつのまにいろとる秋の風は吹けむ
入道前攝政

まつ

神風やもゝ枝の松に契りをきしいろは常盤の千世もかはらす
九條前内大臣
霜やたひをけとかれせぬ濱松の久しきよゝり波やかけゝん
衣笠前内大臣
すみよしのきしのみつかき神さひてその世もしらぬ松の色哉
鷹司院帥
住吉のあら人かみのともなれや世々にかはらぬきしのひめ松
右衛門督通成
千とせまてきみかすむへき池水にかけあらはなる岸の松か枝
權中納言顯朝
ちとせともかきらしものを庭の松をいく春も君にまかせて
嘉陽門院越前
高砂の松を友とはなけれともなかめそなるゝいたつらにして
信實朝臣
しも雪の色にゆつりて高砂の松も我をは友とやは見む
をのかとちさてのみ年はたけくまの松の千歳の朽やはてなん
從三位行能
ゆき嶋の巖にたてるそなれ松まつとなきよにしほれてそふる
入道三品親王
さひしくてふりぬるものはみの山の一木の松と我となりけり
入道前攝政
時雨する紅葉の外のまつの色はをのれさめてそ秋はよそなる
前大納言爲家
浦とをきしらすのすゑのひとつ松またかけもなくすめる月哉
信實朝臣
しほ風にえやはむかはぬ枝も葉もそむきにたてる浦の松原
藤原爲氏朝臣
猶しはしみてこそゆかめたかしまや麓にめくる浦のまつ原
前攝政家民部卿
いかにせん哀なるおのひとつ松よにたくひなくもの思ふ身を
式乾門院御匣
夢にたにあふの松原いかなれはもろこしよりもはるけかる覧

從三位行能

うき名のみあらはれわたる河きしの松のねたくもかへる浪哉　嘉陽門院越前

岩の上におひぬる松のたれをのみたのむ計のなくさめそなき　源孝行

誰世にかあふをたのみの種まきていはにも松の生はしめけむ　明敎法師

いはしろの野中のまつを我とみよ難面き色にむすほゝれつゝ　橘廣兼

波よする磯まの浦のそなれ松ねをしほにのみぬるゝ袖かな　賀茂季保

思へとも人にはえこそいはしろのまつ事遠き身をいかにせん　前大納言爲家

かえ

〔新六〕しめのゆき紫のなるかえのもりはかへすなから埋もれにけり　信實朝臣

〔新六〕道のへのかえのかさおち拾ふとて木の下かくれ行そやられぬ　卜部兼直宿禰

たけ

呉竹のときはかきはのかけはあれと君かみかけに萬代やへん　入道三品親王

夏かけのそのふに生る呉竹のいやしき〱にしけきうきふし　眞觀

朝戸明てみれはすゝしもうへそよく竹のはなみの秋の初かせ　隨心法師

いかにして籬のたけのよの程に身にしむ風の吹かはるらん　藤原隆祐

秋の雨のとたえて過る山おろしに軒はの竹もまとをうつ也

よに絶ぬとももとみるこそ哀なれ雪ふる頃の庭の呉竹

物おもふ涙と聞もあはれなりむかしそめける紫のたけ　平重時朝臣

風吹はしとろになひくなよ竹のそろはぬふしによを重れつゝ　前大納言爲家

たかむな

〔新六〕いかて我かきねに生る竹のこによのうきふしを思ひしらせし　前攝政左大臣

むめ

身こそかく袖のみぬれめ春雨に花さへをそき宿の梅かえ　衣笠前内大臣

はるかにも思ひこしかと我宿のねこしのむめは花咲に覓　前大納言爲家

我やとのねこしの梅もかた咲てほすゑのかせそ薄匂ひなる　正三位知家

梅かえを春のよそなる宿にうへて心ゆかすや花のさくらむ　入道前攝政

むめの花今さかり也ことならはをちかた人もはやきまさなん　前大納言爲家

〔新六〕我せこにまつゝけやらん梅花あかぬにほひをきてもみるやと　權大納言實敎

わか宿になにかうへけん梅のはなにほふ頃とて人もこなくに

香をとめてたつねそきつる梅の花いとはし今はゝるの山かせ　尚侍家中納言

咲ぬとはかせにしらるな梅花おしむ心のくまにかくれて　鷹司院按察

さても猶色そゆかしきむめの花かをふきかくる風はあれとも　辨内侍

梅かえの花のたよりのゆかしきはかせに匂ひをつくる成けり
權大納言顯朝
夢ならておとろくものは春風の枕ににほふ夜半の梅かゝ
藤原爲氏朝臣
今こむといはぬものゆへ梅花にほふさかりは人そまたるゝ
藤原爲教朝臣
いたつらに垣ほの梅は咲ぬれとかをたつれてもとふ人はなし
藤原行宗朝臣
梅花にほふやかこと我宿にさらてはいつか人のまたるゝ
うたて人とひこぬやとのむめの花なにそ匂ひの有かひもなし
平重時朝臣
よそ人そ春はとひける山かつの色かもしらぬ軒の梅かえ
藻壁門院少將
月すまは色やまかはんむめの花やみそ匂ひのわくかたもなき
尙侍家中納言
いかにせむ梅ちりかたに成にけり折にをこする人もこそあれ
前大納言爲家
きみこすて軒はのむめは散ぬへし誰ゆへ待し花の盛そ
祝部成茂
さりともとうつろふまてに梅花なれしかたへの人そ待るゝ
藤原隆祐
わきて猶よるはおしけん梅の花ちらすはあすもみん人のため
法印韓海
風吹は空にしられぬ雪をさへ窻にあつむる軒の梅かゝ
こうはい
權大僧都實伊
咲あへぬ軒はの梅のくれなゐにまつふりいてゝ鶯そなく
前大納言爲家
むめかえの初花染のくれなゐにうつるはかりの袖のかそする
やなき
衣笠前内大臣
〔新六〕白波のうつたのうへの河やなきもゆといふ春は昨日けふかも
眞　觀
さゝれふみいさ行てみん佐保路なる河そひ柳もえわたるらし
藤原行宗朝臣
うち渡す駒ひきとめてさほ河のきしの柳のなひくかけみん
信實朝臣
春はまつなひきにけりなさほ姫の染る手ひきの靑柳の糸
春風のわきても吹か山かけにみたれてなひく靑柳のいと
入道前攝政
靑柳のはるのけしきもたをやめのかさしの玉の露そ亂るゝ
攝政前太政大臣
靑柳の糸よりかけて春かせになひくけしきを人にみせはや
前太政大臣
みちのへのひともと柳ふして靡きおきて亂るゝ春風そ吹
前大納言基良
うちなひき春さりくれは道のへに染て亂るゝ靑柳の糸
鷹司院按察
靑柳の枝のいとまもみえぬまて吹みたしたる春の風かな
さくら
入道前攝政
あをによしならのあすかはいたつらに猶八重櫻いまも咲なん
御　製
いと早もやとのさくらは咲にけり花まつ人のこゝにしもくる
前攝政左大臣

いこまやまあたりの雲とみろまてにおこしの櫻花咲に鳧
藤原隆平朝臣
高砂の尾上のさくら夜の程に春雨ふりて花咲にけり
鷹司院帥
山里は櫻さきぬとつけやらはさすかに人も今やとひこん
右衛門督通成
わく方もなくて詠めむ櫻はな立なまよひそ山のはの雲
従三位行能
しら雲のきやとろみれは高砂のおのへにさける櫻なりけり
藤原隆祐
大原やをしほの山のさくらかり雲こそ春のとたち成けれ
九條前内大臣
はし鷹もしらふになりぬ櫻かり春のとたちに嵐吹らし
衣笠前内大臣
いさ櫻おりてかさゝむふりはつろかしらの雪の色やまかふと
前大納言爲家
櫻花いけらは後とたのますはあかぬに身をもかへやしなまし
藻壁門院少將
あらし吹山へのさくらいかにしてしはしも花の盛なろらん
辨内侍
おりてみむことのみそよき櫻花うつし心は散も社すれ
眞觀
世中にうきめみえてし身のはてはいさ櫻ともえこそいはれね
源俊平
さくら花かはらぬ色をわきかれて雲さへおしき春の山かせ
前參議宣經

春くれはまつもおしむも人ことに櫻なりけり物思ひの花
承明門院小宰相
櫻さくよしのゝおくに住人は風ふくことにものやかなしき
尙侍家中納言
あたにのみ散はうけれと櫻花さかさらはとはおほえやはする
九條前内大臣
瀧河のいはもとさくら朝な〳〵おちても花やあはと浮なむ
よのなかにみれの櫻はありてなしあなうとやいはん春の山風
衣笠前内大臣
あたならはさかすもあらなん櫻花おしむも人の思ひそふよに
心からちろとはいはんさくら花れたさもれたし春の山かせ
權大納言公相
山高みさこそあらしはさそふともあまりなろまて散櫻哉
按察使爲經
さくら花うつろひやすき世間の人の心にいつならひけん
従三位顯氏
何ことも心にかなふ世ならればおしむにつけてちろ櫻かな
承明門院小宰相
あすしらぬ我みなからもさくら花うつろふ色そけふは悲しき
鷹司院新參
はてはうきよとはみなからすむものをうらやましくも散櫻哉
藻壁門院但馬
見ろ儘にありて浮よのならひそとしらせかほにもちろ櫻かな
藤原隆祐
春のあらし吹にけらしなかつらきやたかまの櫻雪とふろまて
藤原長綱

いつまてと身をたのみてかおしむ覽櫻のみ散うき世ならぬに
大中臣俊職
またれしもきのふと思ふに櫻花おしむはかりもいつ成にけん
玄譽法師
としたけて後こそいとゝ櫻花ちる哀をはおもひしりけれ
前大僧正行遍
春のよの匂ひも深き八重さくら月のなさけをかされてそみる
權大僧都實伊
咲やらぬ山したかけの遲さくらほかのゝちとは誰契りけむ
前太政大臣
殘りける深山かくれのをそ櫻なつさへかせを猶やいとはむ
衣笠前内大臣
かにはさくら
雪ふかき垣ねの梅のいかにしてなを埋もれぬかにはさくらん
源寂法師
はなさくら
花さくら人のためともうへさりきとはすはとはす春の山さと
惟宗盛長
たえす立かつらき山のしら雲にわくことかたき花さくらかな
前大納言爲家
〔新六〕うき人のあたし心のはなさくらことはり過てうつろひにけり
前攝政左大臣
なにそこはよにさためなき花櫻おしきはかりのかはらさる覽
式乾門院御匣
故郷になをうへをかむ花さくらうつろふ色のためしなりとも
衣笠前内大臣
やまさくら
春かすみたつをみしよりみよしのゝ山の櫻をまたぬ日はなし
正三位知家

あまのはらみれはたかきのやまさくら空に棚引雲はそれかも
信實朝臣
よそにしてわきやかれなむ雲かゝるかの山櫻花さきにけり
眞　觀
久かたのあまのしら雲たなひくはなら山さくら今さかりかも
祝部成茂
おりてみぬ春はなけれと山さくらあかぬは花の色やそふらん
藤原長綱
山さくらあるをみるへきときたにもいかに契りて霞そめけむ
信實朝臣
我もしかありしものなり山櫻あはれはかなきひとさかり哉
藻壁門院小宰相
けさのまのさかりを見ても山櫻うきをわするゝ花のうへかは
下　野
手折ても誰にか見せむ山さくら花もかひなき旅の空かな
衣笠前内大臣
かすみよりもれて吹くる春かせに遠山さくら人にしれつゝ
權大納言實雄
咲にほふ都のきたの山櫻いく里かけて人さそふらむ
前關白左大臣
菅のねのなかきひかけを足引の山のさくらにあかて暮ぬる
前大納言爲家
身は春のよそなりなから山さくら咲ぬる花よえやはめかるゝ
權大納言公相
あちきなくまたこりすまにおしめとも移ろひあまる山櫻かな
權大納言實雄

散といふことこそうたてやま櫻なれては花のつらさなりけれ
従三位行能
ちることを思ひまされは山さくら花みる春もうらみやはなき
藤原爲氏朝臣
春の日もあかてそくるゝやま櫻花のさかりのうつり安さに
身にかはるならひしあれな山櫻あかぬ名殘のうきにつけても
承明門院小宰相
あかてちるなけきはあれと山さくら逢みる春はあまたへに皃
宣仁門院一條
人しれぬ深山のおくのやまさくら散はてぬとも誰かおしまん
藻壁門院少將
けさはまたうつろひそめて山櫻いまより風のつらさみす也
信實朝臣
今はとやかたえのはなもちりそめてうきたつころのやま櫻哉
花とやは眺めもはてん山さくらちるまをたにと雲にまかへて
法印覔守
みよしのゝ雲にうきたつ春かせに散さへまかふ山さくらかな
前太政大臣
雲となり雪とふりしく山さくらいつれを花の色とかもみむ
前大納言基良
いへちをもさこそ忘るれ山さくられにかへるさを何急くらん
藤原爲氏朝臣
おほかたの春の心はのとけきにちることいそく山さくらかな
藤原行宗朝臣
よしの河瀧のうへなる山さくら岩こす波の花とちるらし
正三位知家
にはさくら
春の日のかけのとかなる庭櫻ほかにちらさて花をみる哉
あなこひし我ふるさとの庭櫻手をりもてきてみせんこもかも
前大納言爲家
〔新六〕ひさくら
春をやくひかりはおなし梢にてわきてなにたつひさくらの花
蓮信法師
ちるたひにもえこかれてもおしけきはかまと山なるひ櫻の花
前攝政左大臣
ふ　ち
思ひ出よ奈良の都の藤のはなむかしを今に咲にほふめり
御　製
ふかみとり色もかはらぬ松か枝はふちこそ春のしるし成けれ
正三位知家
見れは又まつにひかれていやとしにさもそこ高くさける藤浪
しはかこふ藤の若枝に取そへて花のしなひをれるやたれそも
平重時朝臣
よそなから心にかけて見つる哉たれまつ宿の池の藤波
藤原隆祐
たちはな
思ひやるむかしも遠きみちのくのしのふの里に匂ふたちはな
源寂(釋イ)法師
猶たのめさつききぬれは橘の身はふるれとも花咲にけり
安嘉門院高倉
いける世に袖ふれをかん橘のかをなつかしみ人やしのふと
九條前内大臣
むかしをは我こそしのへたち花のこのした露に袖やふれまし
入道前攝政
かきりあれは昔に又もかへらしを香こそ忘れね軒のたち花
橘の花やはもとのはなゝらむ香こそむかしのしかのふるさと

前攝政左大臣
人めみぬやそのしまもりなのれもやはな橘たに袖にかくらん

正三位知家
わかせこかことしけきとてこすもあらは散や過なんやとの橘

藤原爲繼朝臣
人そうきうつれはかはるならひたにしらぬ昔に匂ふたちはな

卜部兼直宿禰
我戀はまして常盤木しけりあひてかさへ露さへ袖にひまなし

眞觀
橘のはなちる露を今朝みれはさそなむかしとぬるゝ袖かな

あへたちはな

淨忍法師
花さかぬおりもきてみよわか宿のあへたち花の色のてこらさ

正三位知家
ときはにてあへたち花のかはられと行としろく苔生にけり

しゐ

入道前攝政
はしたかの鳥かへる山に春くれはつれなく殘るみれのしゐ柴

無品法親王
よもすから何をしくれの染つらむ檜原の山の峯の椎しは

前太政大臣
したもみちうつろふまゝにをくら山色ことになる峯のしゐ柴

前攝政左大臣
とき過る椎のさえたもみえわかすのちせの山に積るしらゆき

前大納言爲家
〔新六〕いつのまに誰たれまきてかた岡のむかひのみれにしける椎柴

承明門院小宰相
いのりこししるしもみせす神山の椎柴かくれしのひはてなて

衣笠前內大臣
我こひは色にいてめやむかつおの椎のさえたは紅葉しぬとも

信實朝臣
位山みれのしゐ柴いまはさてかはらぬものと朽やはてなむ

さくろ

正三位知家
わきもこはかたしきなからねにけらしけさ黒髮も亂れ勝なる

なし

前大納言爲家
〔新六〕いたつらにおふの浦梨年をへて身は數ならすなりまさりつゝ

信實朝臣
なみかくろおふのうらなしみなるらんことも覺えす濡る袖哉

やまなし

前大納言爲家
〔新六〕きゝ渡るおもかけみえて春雨の枝にかゝれる山なしのはな

もゝ

源直氏
春の日にさらすにしきは霞たつのやまのもゝの花さかりかも

すもゝ

信實朝臣
〔新六〕數ならぬかた山かけの靑すもゝ身はあるかひもなく也にけり

藤原隆祐
いなしきや竹おひ廻る園生なりみゆるすもゝの花もめつらし

からもゝ

衣笠前內大臣
〔新六〕いかにして匂ひそめけむひのもとの我國ならぬからもゝの花

くるみ

信實朝臣
〔新六〕夏山のしけみかくれの姬くるみかれてみまくのかたき戀かな

すき

前攝政左大臣
しのふへき誰しろしとかいにしへの人はうへけむ杉のむら立

前大納言爲家
〔新六〕道のへの杉の下枝に引しめはみわすへまつるしろしなるらし

皇太后宮大夫俊成女
たつれこし三輪の杉むら跡とへは霞にまかふ春の山もと
衣笠前内大臣
おく山の谷のすきふのあさあけにひとりきゝつる時雨哉〔マヽ〕
入道前攝政
夕立のふるかはのへのふかみとりぬれてすゝしき二本の杉
九條前内大臣
旅人はいまやたつらんとやまなる杉の梢に月かたふきぬ
法橋春撰
月かけは三輪の山もと神さひてむかしの杉に秋かせそ吹
藤原行宣
すきのはに秋のしるしはみえれ共やゝはた寒しみわの山かせ
從三位行能
はつしくれふるの山なる杉むらはかはらぬ色もしるし成けり
承明門院小宰相
とひもせてつれなき色をならへとや誰うへ置しみわの杉むら
信實朝臣
このくれも又みたれなはあや杉のめみせにくゝや人の思はむ

むろ

藤原隆祐
むろの木の常盤に闇きしま陰を涙のよるとはいふへかりけり
源仲業
ともの浦や波ち遥にこくふれのそかひになりぬ磯のむろの木

まき

九條前内大臣
槇のはに月かけさゆるおく山のみれのかけちはあふ人もなし
前大納言爲家
〔新六〕見すひさになりそしにけるをすて山まきのふる木の苺深き迄
槇の葉もこけおふるまてなりにけり幾よかへぬるなか峯の山
前中納言經光
よひのまに雪積るらしまきのはのしなふせやまの風も音せす
正三位知家
夕されはをすての山の苔のうへに槇のはしのき積るしら雪
源有長朝臣

かつら

前大納言爲家
〔新六〕舟とむる秋の入江の月かけにひかりたまらす散かつらかな
正三位知家
わたつうみの月のうへこすしら波はかつらの枝の花と散つゝ
信實朝臣
ことに今ふる里寒きなか月の桂のもみち秋かせそふく

かうか

正三位知家
〔新六〕わきもこにかくとはかりは告やらんかたみのかうか花咲に皃

あふち

源仲業
たまにぬくさ月も近しまたきよりそとものあふち人な手折そ
前大納言爲家
〔新六〕御垣もるとのへにたてるあふち影したふみなれし道な忘れそ

かし

入道前攝政
夜を重れ山路のしもゝしらかしのときはの色そ冬なかりける
前大納言爲家
〔新六〕とやまなるをかのかし原吹なひきあれ行頃のかせの寒けさ
眞觀
秋かけて露やはそむる玉たすきうねひの山の峯のかしはら

くぬ木

衣笠前内大臣
〔新六〕高瀬さすさほの河原のくぬきはら色つくみれは秋の暮かも

つはき

みの山のしら玉つはきいつよりか豊のあかりに逢はしめけん　藤原行宗朝臣

かしは

神まつる頃にあはむとみゆる哉はひろになれるかしは木の杜　入道前攝政

神山のこのてかしはな取かさしうつきになれは君なこそ祈れ

時雨のみふるからなのゝもとかしは元つはもなく紅葉しに凫　源有長朝臣

あられふるならのひろはの玉かしは枯て音せぬ物とやはきく　源寂法師

故郷となりにしよゝりみの山の玉のはかしはとる人もなし

ほゝかしは

おほのなる三笠の杜のほゝかしは神のひくてに幾世ますらん　淨忍法師

すへらきのみわそゝきますほゝかしは大宮人の捧けもつかも　卜部兼直宿禰

かた山のそかひに立るほゝかしは風にからかふ音のさやけさ　藤原隆祐

なかめかしは

神無月しくれぬ日社なかりけれ詠かしはのなにやふるらん　正三位知家

〔新六〕雲はれぬなかめかしはの下露のなやみなくこそ袖ぬらしけれ　前大納言爲家

つゝし

〔新六〕ゆふひさすなかへの松のしたつゝしときわき顔に花咲にけり　信實朝臣

いはつゝし

〔新六〕かた岸にれなさしのほる岩つゝしいつれな枝と花の咲らん・

入日さすむかひの岡のいはつゝしいはれとしろき春の暮哉　正三位經季

ことにいてゝいはぬはかりそ岩つゝしにほへる姿今も忘れす　前攝政左大臣

ひさき

幾秋も月にはあかしひさきおふる清き河原の有明の空　入道前攝政

冬かれにはや成にけりひさき生ふるなのゝ淺茅に霜や置らん　藤原爲繼朝臣

くり

ふるはたの栗の若はのこき垂てこはいかにとよれのみ泣るゝ　前大納言爲家

くは

あちきなく物は思はし賤かほすにゐ桑まゆのうちにくるしも　平重時朝臣

おほうみの其なかはまや君か世ににゐ桑原とみたひなるへき　源孝行

はたつもり

〔新六〕はたつもり積りし雪のきえぬれは賤かすさひに若葉つむらし　信實朝臣

しきみ

〔新六〕哀なるしきみの花の契り哉ほとけのためと種やまきけむ　前大納言爲家

かよひける人のあとたにみえぬかなしきみか原にふれる白雪　嘉陽門院越前

あせみ

〔新六〕みま草は心してかれ夏のなるしけみのあせみ枝ましるらし　信實朝臣

やまちさ

〔新六〕足曳の山ちさのはな露かけてさける色これ我みはやさん　衣笠前内大臣

ゆつるは

〔新六〕ゆつるはの常盤の色もうつもれぬあらくま山に雪のふれゝは

〔新六〕これそ此春なむかふるしるしとてゆつるはかさし歸る山人　正三位知家

かたかし　前大納言爲家
〔新六〕誰かみむ身をゝく山にとしふ共よにあふことのかたかしの花
つまゝ　衣笠前内大臣
〔新六〕神さふるいそのつまゝのねをはへて深くや人をしたに忍はん
信實朝臣
〔新六〕磯の上は心してゆけまさこちやれはふつまゝに駒そつまつく
源兼氏
たつのゐる磯へのつまゝ世々かけて何れか久に年のへぬらん
されき　信實朝臣
〔新六〕青山となにこそたてれをのつからみれのされきは花咲にけり
とり
〔新六〕かたしきの衣て寒しいかはかり雪のみやまに鳥の鳴らん
みつこひとり　正三位知家
袖にみつよはのなみたをたつれこて水こひ鳥のひとり鳴らむ
はなちとり　信實朝臣
〔新六〕籠のうちを思ひやいつる放ちとりさらぬわたりの梢にそすむ
ひなとり　前大納言爲家
〔新六〕春のゝのありすの雛のはをよはみ思ひたてとも行衞なのよや
かひこ　従三位行能
もゝ鳥のふるすにとめしすもりこのかへらぬ物は暮る年なみ
空曉法師
ためしあれは鶴のかひこも君か爲十つゝとをや千世を重れん
つる　皇太后宮大夫俊成女
むれゐつゝ和かの浦はに啼田鶴の聲にも君か千世そ聞ゆる
衣笠前内大臣
住よしのうらのわかすのしほがれに神さひわたる鶴の聲かな
前大納言爲家
汐かれのひかたの浦のはなれ洲に田鶴そ鳴なる友よはふらし
正三位知家
あしたつのこたへぬれこそ悲しけれ我ため高き雲ゐなられと
人しれすれをこそなかめ嶋かくれすむ芦田鶴の妻こひにのみ
正三位成茂
友鶴のむれゐしことはむかしにてみしまかくれに我のみそ鳴
信實朝臣
わかの浦に我一むれの芦たつの數はためしもあらしとそ思ふ
祝部成茂
うへは霜したは氷れる芦のはのさやくよ寒にたつさはになく
かり　衣笠前内大臣
天つ空雲のはたての秋かせにさそはれ渡るはつかりの聲
御製
ほの〳〵と朝霧かくれはつ鴈のはつかにすくる聲きこゆなり
入道三品親王
むはたまのよわたる鴈のこゑす也いまはた萩の露あまるらし
九條前内大臣
河水にとわたる鴈のかけみえてかきなかしたる秋の玉つさ
前大納言基良
こゝろからあきしもなとかこしちより都を旅とかりの鳴らん
權大納言公相
よしさらはこし路を旅といひなさむ秋は都に歸る鴈かれ
右近中將經家
山のはゝ月いてぬへきけしきにておりめつらしき初鴈の聲
式乾門院御匣

かけてこむ誰玉章はしられ共空にまたるゝはつかりのこゑ
承明門院小宰相

越の海をいつかいてけむあまをふれ初かりかれそ空に聞ゆる
鷹司院按察

人毎にいむなるものを行かりのたか玉つさを月にみすらむ
衣笠前内大臣

佐保山のこすゑも色やまさるらん霧たつ空に鴈はきにけり
藤原行宗朝臣

けさの朝け秋かせさむみ我宿のそとものわさ田鴈そ鳴なる
平　基久

天の原月にいさよふかりかれのこゑうらかなしさよや更ぬる
三善康家

秋のたの穂むけの風をたよりにてあまとふ鴈はゝやもきに鳬
藤原基綱

月にゆくかりの涙やこほるらんをのかはかせもさゆる霜夜は
平重時朝臣

かりかれは花をそまたぬしかすかに鳴て別れぬ春はなけれと
平　長時

帰るさの雲路もかすむ曙にあまのとわたるはるのかりかれ
藤原孝継

わきてよもあとは霞もふかゝらし雲ゐの鴈そ遠さかるらん
藤原隆祐

秋風にあひ見むことはいのちとも契らて帰る春の鴈金
下　野

かへるかりたかたまつさもかきたえて霞にきゆる鳥の跡哉
信實朝臣

あけてみぬ誰玉章もいたつらにまたよをこめて帰るかりかれ

あやしともえやかきそへん玉章のもしならひしてかへる鴈金
前大納言爲家

玉章のあとゝなえこそことつてを人もそしのふかへる鴈かれ
侍從家中納言

をのか身の翅にかけるたまつさをやらてもみはや帰る鴈金
皇太后宮大夫俊成女

あかなくにかへる雲井に春雨のふるはなみたか鴈そ鳴なる
入道前攝政

行鴈の山とひこゆるかたをなみ霞そふかき曙の空
御　製

何ゆへにいさなはれつゝかりかれの行ては帰るならひ成らん
前太政大臣

誰ためにこし鴈かれときかれ共かへるはつらき春の別路
承明門院小宰相

かへる鴈たか僞にならひきて心もとめぬ空にしもなく
皇太后宮權大夫師繼

春かすみなを立かくせかへる山越ゆく鴈のみちまとふかに
藤原隆祐

こゝろからかへるわかれもしかすかに哀なれはや鴈の鳴らむ
法印實位

こしかたを思ふれ覺のあけほのにかへるもかなし春の鴈金
藻壁門院少將

春霞たちわかれぬるかりかれはみもせぬまてそ遠さかりゆく
藤原忠直朝臣

我ならぬ雲井のかりも音に鳴て春をはよそに遠さかる也

藤原爲綱朝臣
こゝろから都をよそに行鴈もわかれはうしとれをや鳴覽
藻壁門院但馬
あかつきの別や空にしりぬらんよこ雲わけて歸るかりかれ
藤原爲氏朝臣
歸る鴈はな咲程の春にしもなと限りける別なるらん
中原師光
花みむといそく心も有物をいかにちきりてかへるかりかれ
藤原隆祐
みやこにも花なき里はあるものをなへてそ歸る春の鴈かれ

うくひす

權大納言實雄
しら雪のふるすは今朝も猶さえて鳴れも解ぬ谷のうくひす
尙侍家中納言
今もなを雪とけかたき山里にすかくれてなく鶯のこゑ
鷹司院帥
ふるゆきに谷のふるすを出やらてまた物うけにうくひすの啼
皇太后宮大夫俊成女
明やらぬ谷のとすくる春風にまつさそはるゝ鶯のこゑ
はるなれはまつさくむめの花のかにやまの鶯鳴ていつらし
入道前攝政
みよしのは谷のふるさとちかけれは先馴そむる鶯の聲
九條前内大臣
せりつみしみかきか原の鶯はおなしむかしのれにや鳴覽
さきやらぬ我身の花のものうきに鳴やしつくの春のうくひす
正三位知家
いまこそは妻こひすらし霞たつはる日かくれに鶯のなく

觀　眞
世は春と誰もしるらし鶯のなきゝかせたるけさの初音に
信實朝臣
木ことにはなかすや有らんふる雪に梅かゝとむる鶯の聲
嘉陽門院越前
うくひすのはつれはきゝつ我宿の花こそ今は立ゐまたるれ
源具親朝臣
谷深きゆきのふるすにおもなれて花にものうき鶯のこゑ
源　直氏
わか戀はまたふるすなる鶯のなきても人に知せかれつゝ
源　仲業
鶯の聲をきくにもかなしきは春のよそなるわか身なりけり

ほとゝきす

從三位行能
常盤なるいはれの山の郭公つれなかれとはまたぬ夕を
前攝政左大臣
あはさりしよひのれたさのありかほに我またせたる時鳥かな
衣笠前内大臣
今こむとたのめやはせしほとゝきす有明の月に何またるらん
ほとゝきすしのふ比とはしりなからいかにまたるゝ初れ成蘭
いかなれはさ月まつまは郭公なくれを人におしみそめけむ
前大納言基良
とことはに待そくるしきほとゝきす鳴ぬよをたに知よしも哉
正三位忠定
今宵ともたのめぬものを郭公うたていたくもまたれつる哉
御　製
われも又いさかたらはむほとゝきすまちつる程の心盡しを

前太政大臣
鳴聲をぬさと手向よ千早振神のみむろの山ほとゝきす
衣笠前内大臣
ほとゝきすなくれを聞はふるさとの花橘は今さかむかも
前大納言爲家
なきふろす里をはしらて時鳥きくやはつれと思ひけるかな
按察使爲經
聞つやと人にそつくろ郭公我まちかれしころのならひに
權大僧都實伊
たかためのはつれ成らむほとゝきす遠の高ねを鳴て出なり
宣仁門院一條
まとろまて一人明ぬろみしかよになく〳〵そ聞山ほとゝきす
承明門院小宰相
郭公よその別や憂物とあくろほとなき月になかなむ
明教法師
一聲に明ろと聞とほとゝきすまた夜深そ鳴て過ぬろ
下　野
年へぬろね覺や空にしろからん絶すことゝふほとゝきす哉
前太政大臣
またれつるをかへの杜の郭公思しよりも聞ぬ日そなき
入道三品親王
きけはうしきかれは戀しほとゝきすむかしの夏は如何鳴けむ
權大納言實雄
おちかへり鳴ふるせ共ほとゝきす猶あかなくにけふも暮しつ
法印良守
こゑふりて馴ぬろ後も郭公あかぬは何の契り成らん

藤原爲繼朝臣
なきふろす時こそ有けれほとゝきす何か卯月の空にまちけむ

ちとり

藤原忠直朝臣
岩こゆろ河をとすめろ秋のよの更行月に千鳥なく也
衣笠前内大臣
むれてゐろさほの河原のむらちとり霜より外の跡も殘らす
權大納言忠信
山近きさほの河との夕霧に行かたしらす鳴千とりかな
從　位行能
山河のみかけにそよく芦のはの寒き夕になく千鳥かな
信實朝臣
しらすけのおふの河原のかはちとり鳴よの月の影のさむけさ
藤原爲氏朝臣
霜さゆろ堤のうへの川むかひおちかた聞は千鳥なくなり
藤原爲繼朝臣
こゑたてゝ千鳥しは鳴古郷のさほの河かせ寒く成らし
鷹司院新參
冬きては風やさむけき河千とりなかき霜よに今そ鳴なろ
中原師光
ひとりねの心の友となろものは霜夜にわふろちとり成けり
惟宗盛長
ますけおふろ水の河せにさよふけてつまよふ千鳥聲すみぬ也
義凉法師
佐保河のよかせをさむみ更行は聲もおします千とりなくなり
皇太后宮大夫俊成女
思ひかれ行やさほちのさよ千鳥妹にあふよをちとせともなけ

よふことり

哀しる人をやさそふよふこ鳥月と花とのかほる山路に
前大納言爲家

〔新六〕名にしおはゝ待すしもあらす行人をこてふにゝたる呼子鳥哉
藤原隆祐

山深みかすめる空の曙におりあはれなる呼子鳥かな
皇太后宮大夫俊成女

しき

まちかれてきみかこぬよの數よりもなみた落そふ鴫の羽かき
辨内侍

うき人のこぬ夜の數もよそなから知やあしたの鴫のはねかき
衣笠前内大臣

〔新六〕曉の鴫のはねかきしけしともおいてよふかきれ覺にそきく
前大納言爲家

〔新六〕霜かれのゝたの草ねにふす鴫のなにのかけにか身をも隱さん
平重時朝臣

澤水にぬれてなく／＼立鴫の聲ふき流す秋の夕風
藤原時朝

しられしなしきのはねかきかくはかり思ふ心の隙もなきとは
信實朝臣

からす

月に鳴やもめからすの聲すみてかた山はやし秋かせそふく
前大納言爲家

〔六〕月にねぬやもめからすのねに立て秋のきぬたそ霜にうつなる
前太政大臣

うかれきてさこそは晝とまよふらめ明るもしらぬ月のよ烏
衣笠前内大臣

さき

鷺のゐる野澤のますけ水こえて猶曇そふ五月雨の空
信實朝臣

河中のあさせやいつくみと鷺のたちともみえぬさみたれの頃
前攝政大政大臣

さきたてる沼田のわせを刈はてゝあゆちの水は顯はれにけり
前大納言爲家

〔新六〕朝またきそれかあらぬか鷺たてる寒き汀によする白波
右兵衛督基氏

賤のおか外面のをたのみくさゐにみなくち守る鷺たてるめり
衣笠前内大臣

はことり

〔新六〕春されは友まとはせるはこ鳥のふたかみ山に朝な／＼なく
信實朝臣

〔新六〕何ことを思ひいれてかはこ鳥の明る朝けの音をは鳴覽

かほとり

〔新六〕ありとてもまたみもしらぬかほ鳥のいとゝ霞に空かくれつゝ
藤原隆祐

河岸のいくゐを傳ふかほよ鳥みをたのみてやかけをみるらん
承明門院小宰相

我門のいくゐはあれとかほよ鳥きゝしにゝたる聲たにもせす
入道前攝政

かさゝき

あまの河雲井をわたる秋かせに行あひを待かさゝきの橋
前大納言爲家

〔新六〕よそにして戀渡るかな天のはら雲ゐに高きかさゝきのはし
從三位行能

鵲のわたすひとよのはし／＼らたちゐまたれし秋はきにけり
源俊平

こひわたる心は空にかよへ共逢はよそなるかさゝきのはし
正三位知家

もす

〔新六〕
鵙のゐるのへの草葉の末さはきはれもやすめす秋風そ吹
信實朝臣

〔新六〕
見渡せは一村すゝきもす鳴てやゝかれにけるのへのさひしさ
くゐな
明珍法師

日のくれにおほやか原を分行はすかもかしたにくゐな鳴なり

建長元年十二月十二巳類聚畢。同廿七日入二仙洞一。依レ召也。同二年九月六日可レ註二附作者一之由被二仰下一。仍令二書顯一也。名之事。續六現存。此二様令レ申。可レ爲二現存倭歌一之旨也。部類未微少。重而選加而可レ爲二六帖一之趣仰也。倭歌之數八百五十首。作者百九十七人也。

右現存和歌六帖以日野家御本書寫以新六帖及夫木抄挍合畢

和歌部六

秋風抄

やまとうたの道は。ひろくしていりやすく。はるかにしてきはめかたきものなり。しかるにいまこの事のさかんなるをきくに。いにしへのあとをあらため。歌のこゝろをもさとれる人あまたにそ成にける。これをいはんとするに。其くらゐたかきと。そのしないやしきとをはいれす。家をつき名をあらはせる人は。すなはち前大納言爲家卿は。よく歌のおもむきをえて。そのことはたくみなり。しかもえんなるをもとゝして。やさしきをれかへるにや。たとへは上陽の人のまなふたは芙蓉に似。むれは玉に似たるかことし。かの深宮のありさまもおもかけなきにあらす。

新續古　かち人のとはぬ夜寒に待侘てこはたの里は衣うつ也

我袖の海となるをは津の國のなかす涙のつもる成けり

いたつらになかめておつる涙哉すゝまぬ月の恨めしき迄

正三位知家卿は。ことはふるきをしたひて。姿いにしへにはちさるをや。いはゝ陵園妾の春愁秋思そのかきりをしらす。松門のあかつきの月。柄城の秋風。ときとして身にしみ。こゝろをくたかすといふ事なきかことし。

續古　此春の別れや限りとまる身の老て久しき命ならねは

續後撰　神無月しくるゝ頃といふ事はまなく木のはのふれは成見

其かみもいつら我身の思ひ出あなうや斯て年のへにける

前左京大夫信實朝臣はそのさまおかしきをことゝして心になさけふかし。さむさをこひのなとよめるまても。たとふるに賣炭のおきなの雪のあかつきくるまをかけしに。牛くるしみていちのほかにやすめり。官のつかひきたりて。半疋の紅紗をかけしかことし。

續古　物をのみさも思はするさきの世のむくひや秋の夕成らん

續後撰　數ならて思ふ心は道もなしたかなさけにか身を憂へまし

從三位行能卿は。此名ある人々よりは。よめる歌あまたもきこえれは。かよはしてしることかたけれとも。そのおもむきもしかの宇治山のあとをれかへるさまなるにや。いはゝ新豐の翁のひそかに臂を折て風吹雨ふる夜。天のあくるまてにもいたむてれふらさりしかとも。雲南望江の鬼とならさりし事をひとりよろこへるかことし。

曉のねさめにおもふ身のはてをしる人あらは哀とやみむ

皇太后宮大夫俊成女は。あはれなるやうにてまことすくなし。歌のさまつよからぬは女のしわさなれはなり。いはゝ李夫人さりて九花の帳夜しつかなるに。魂きたれとも物いふ事なかりしかことし。

新古　梅の花あかぬ色香もむかしにて同しかたみの春のよの月

同　あくかれて寐ぬよの塵のつもる迄月にはらはぬ床のさ莚

續後撰　はかなしや頼めはこそは契けめやかて別れもしらぬ命に

前侍従隆祐は。その心あまりてことはのこれり。はしめはほまれなきにしもあらす。いは丶大行の路にことならす。衣裳にたき物をすれとも。容飾をこと丶すれとも。むなしかりしかことし。

玉　かもめゐる藤江の浦の朝ほらけあれたる波も心すみけり

何となくしらぬむかしの戀しきは有明の空にめくる月影

この人々な丶きて其名高くきこゆる。あるはもろこしのふみにたつさひてことはをかさり。あるは法のをしへにつきて心をぬすめり。これもよせおもく。かれもなさけ有といへとも。そのいにしへを思へはか丶るへくなんあらさりけるにや。た丶はなをもてあそひ。月をあはれむ心をのみそあらはせりける。あるはふるきことはをねかひて。をよはぬすかたをまなひ。あるはひとしれぬ海山の名をとめて。めつらしき事をえたりとおもへる。これらのたくひは。清行式を見さる人のこのみよめるなるへし。かの式には凡和歌は先レ花後レ實。不レ詠二古語幷卑陋之所名。奇物之異名一。かくのことくそいましめたりける。た丶しこの道に其ほまれある人。世々にたえさるをいふには。かならすしもかの式をまもらす。ちかくはすなはち定家家隆等の卿は。むかしの赤人人丸のたかひにかみしもにた丶むことかたくなん有けるかやうにそ。よに思ひ時にあらそひ。このみちのひしりなるかなとあふきけるも。詞はふるきにより。すかたはたかきにいたり。所の名をはよみふるさる丶をもとめ。心はあたらしきをもちひて。すくれたる歌をはつくれりけるとそ。

前中納言定家卿歌

新古　駒とめて袖打はらふかけもなしさの丶わたりの雪の夕暮

同　旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし

新勅　暮る夜は衛士のたく火を夫とみよ室の八嶋も都ならねは

同　こぬ人をまつほの浦の夕凪に燒やもしほの身も焦れつ丶

續後撰　久堅の天照神のゆふかつらかけて幾よを戀渡るらん

新續古　駒なつむ岩木の山を越かねて人もこぬみの濵にかもねん

從二位家隆卿歌

新古　富士の根の煙も猶そ立のほる上なき物はおもひ成けり

新勅　風そよくならの小河の夕暮はみそきそ夏のしるし成ける

同　老ぬれは今年はかりと思ひこし又秋のよの月をみる哉

續古　いつもかく淋しき物か津の國の芦やの里の秋のゆふ暮

明方に山路の空や成ぬらん木々の雫のしけくも有かな

新拾　龍田山夕越くれは大伴のみつの泊にふれやまつらん

これらの跡をしのひ。かのなかれをうくるともから。いやしきをのかれて。たかきにむかへるをは。あたらしきすかたのいてき。歌の道のかはれるかとおもひて。はかなき事のみそきこえける。しかはあれと時うつりことさり。うれへふかくなけきおほく。したしかりしはうとくなれとも。まことに歌にて其こ丶ろをはなくさめける。これによりて人のあさけりをもわすれ。みつからのつたなきをもかへりみす。新古今新勅撰にいらぬ今の世のうたをあつめける。また萬代といふ集いてきにけり。かの古曾部か打聞をゆるして。後拾遺にいれす。いまの内相府の撰集。いかてかたやすくこの抄にのせしめん。いかにいはむやいにしとしのなかのふゆ。かたしけなくも別

勅ありて御製入らる。かされて勅するに三千の篇たちまちに槐門よりいてゝ。朽さる萬代の名はやゝ射山にとゝまらむものをや。おほよそ歌はひろく見。とをくたつれぬみちなれは。たゝ詞林にいりて花をもとめ。心石くたきて玉をとれるはかりなり。人の心よろつなれは。このめる姿ひとつにはあらさるものなり。たとへは絲竹のこゑことなれとも。伶人ともにきらはす。丹青色わかるれとも。畫工みなもちふるかことく。この歌もまたかくのことくそあるへき。夫いま六義のおもむきをわきまへ。一分のことはりをあきらめたるにもあらす。たゝみしかき心にまかせて。をろかなる身にしめることのはをあつめて。三百餘首上中下卷とせり。名を秋風の抄といふ。ときに建長二年四月十八日。小野春雄ひそかにしるしをはりぬることしかなり。

秋風抄上

春歌

前攝政家百首歌山早春を　正三位知家

岩戸山天の關守今はとてあくる雲井に春は來にけり

百首歌中に　入道前攝政道家

續古 久方のあまの戸明て出る日や神代の春のはしめ成らん

前大納言爲家

續後拾 早春を

ゝ集 いとはやも春立けらし朝霞たな引山に雪はふりつゝ

藤原信實朝臣

鶯の聲きくなへに新玉の年も春へも霞む空哉

藤原爲氏朝臣

續後拾 春霞はや立にけり故郷のよしのゝみ雪いまやとくらし

けぬ集 藻壁門院少將

霞を

三輪山の春のしるしは霞つゝしかもかくるゝ杉のむら立

前太政大臣實氏

建保四年院御百首の春歌

續古 かさしおゑ三輪の檜原の夕霞昔や遠くへたてきぬらん

衣笠前内大臣家良

題不知

足曳の山はみ雪のかきくもりふれ共霞む春の空かな

皇太后宮大夫俊成女

千五百番歌合のうた

此間二行闕 山里は猶ふる雪のきえかてにまたき梢の花そ散ける

入道攝政家百首に　正三位知家

梅か枝を春のよそなる宿に植て心ゆかすや花の咲らん

依梅待友　藤原行家朝臣

梅花匂ふやかこと我宿にさらてはいつか人のまたるゝ

柳を　信實朝臣

續千 春はまつなひきにけりなさほ姫の染る手引の青柳の糸

建保四年院御百首春歌　入道前攝政

かり人の安達か原のしらま弓をして春雨幾日ふるらん

花歌　前攝政左大臣

伊駒山あたりの雲とみる迄に尾こしの櫻花さきにけり

藤原經平朝臣

高砂のおのへの櫻夜の程に春雨ふりて花咲にけり

倚侍家中納言

さきぬれはかならす花の折にともたのめぬ人のまたれぬる哉

鷹司院帥

山里に櫻咲ぬとつけやらはさすかに人もいまやとひこむ

題不知　攝政前太政大臣兼經

命あらは此春見むと契をきし花も我をや思ひいつらん
続古 花十首に　前太政大臣
かへりこぬ昔を花にかこちても哀れ幾よの春かへぬらむ
住吉社三十六首に　衣笠前内大臣
うかるへき春の別れの近しとも咲なしらせそ山吹の花
院御百首に籬欵冬　従三位行能
咲なるゝ籬はなにのつらけれはいはて露けき山吹の花
暮春を　侍従伊成
いかにせむ身にかふ計おしむともかたしや春のけふの別れは
藤原為氏朝臣
思ふにもいふにもよらぬ別れ路の悲しかりける春の暮哉
入道三品親王
玉きはる命のためもいとゝしく老ては春のおしまるゝ哉
院御百首に同心を　前大納言基良
よそに行恨はふかき春なれとけふはをろかにおしみやはする

夏歌

千五百番歌合うた　皇太后宮大夫俊成女
春の色をとゝめかたみの夏衣たつ日のけふに成にける哉
夏歌　衣笠前内大臣
ほとゝきすはやもなかなむ山賤の垣の卯花いま盛なり
百首歌の中に　前摂政左大臣
あはさりしよひのれたさのありかほに我またせたる郭公哉
入道前摂政家にて題をさくりて歌よみけるに葵　権中納言資季
神まつるけふのみあれのかさし草なかきよかけて我や頼まん

洞院摂政（教実）家百首に　従三位行能
常盤なる岩根の山の時鳥つれなかれとはまたぬゆふへを
郭公を　従三位泰光
此里も猶まちかれつ郭公雲のいつくにときと鳴らん
入道前摂政
郭公遠山越て出にけり五月と契る人そ有らし
御百首に聞郭公　院（後嵯峨）御製
続千 我もまたいさかたらはむ時鳥待つる程のこゝろつくしを
題不知　入道三品親王
きけはうしきかれは戀し郭公むかしの夏はいかゝなきけむ
九條前内大臣
昔をは我こそ忍へ橘の木の下露に袖やふれにし
院御百首に五月郭公　右大將通忠
続拾 橘のにほふ五月の郭公いかにしのふるむかし成らん
前摂政家百首に里廬橘　藤原隆祐
おもひやるむかしも遠きみちのくの忍ふの里ににほふ橘
院御百首に早苗　辨内侍
続古 小山田にまかする水の淺みこそ袖はひつらめ早苗とるとて
前大納言爲家の家の十五首に　入道前摂政
五月雨にかすまさるらし龜山の岩根を落る瀧の白玉
洞院摂政家百首に　前大納言爲家
続後撰に集 天の川遠き渡と成にけりかた野のみのゝ五月雨の比
入道前摂政家百首に　正三位知家
今も猶草の眞袖にかくろへてあらはにみえぬ野へのひめゆり
入道前摂政

夏の夜は物おもふ人の宿ことにあらはにもえてとふ螢哉

夏歌　鷹司院按察

身にちかき秋そしらるゝ夏虫のもえてみせたる夜半の思ひに

結縁經百首に　前大納言爲家

とふ螢光りみるこそ哀れなれ何の思ひにもえはしめけむ

藤原爲氏朝臣

なになけく思ひ成らし夜もすから身にあまるまてもゆる螢は

夕立　源兼氏

玉 かくてはや暮ぬとみつる夕立の日影たかくもはるゝ空哉

續古 建保四年院御百首に夏歌　前太政大臣

風さはくしのたの杜のゆふ立に雨をのこしてはるゝ村雲

此間數行闕 院御百首に荻風　從三位行能

秋の來る空こそあらめ荻の葉に風の音さへなとかはるらむ

題不知　平重時朝臣

心なき風にも秋を誰つけてきのふに荻の音かはるらん

千五百番歌合歌　嘉陽門院越前

かゝれはや野山も色のかはるらむ身にしみそむる秋の初風

續古 院御百首に早秋　少將內侍

秋きぬといはぬをしるは吹風の身にしむ時の心なりけり

洞院攝政家百首に　正三位成實

御祓して幾日もあらぬ川風のふかく身にしむ秋は來にけり

里早春　入道三品親王

うちつけに涼しく成ぬ夏衣服檜の里のあきのはつ風

建保四年院御百首に秋歌　入道前攝政

續古 天川雲井をわたる秋風にゆきあひを待かさゝきの橋

日吉社五十首に二星期秋　右兵衛督基氏

もろともに待し心の通路にあき風ふけはほしあひの空

前攝政左大臣の時七夕の歌三首よませ侍りけるに　藤原行家朝臣

天川はや船よせよ年の內にまたふたゝひは渡るせもなし

題不知　鷹司院按察

荻の葉に風の吹よる音す也袖ぬらすへき時そきぬらし

藤原隆祐

袖の露軒端の荻を吹風におもひもしけき(そイ)秋の夕暮

晩露　入道前攝政

夕されは物おもふ袖と荻の葉とをきあへぬ露の何れしけけん

入道前攝政家秋三十首に　前大納言爲家

旅人の立かてにする秋のゝはかりほの萩の花さかりかも

院御百首に萩露　正三位知家

人は來ぬ草葉の床の露のうへにかたしきれたる萩かはなすり

おなし題を　承明門院小宰相

定めなき風を待まにうつろひぬ本あらの萩に結ふ白露

女郎花　藤原經平

露かゝるむかひのゝへの女郎花おらぬになとか袖のぬるらん

野外鹿　院御製

新拾 秋のゝの尾花か本に鳴鹿も今はほに出て妻をこふらし

百首歌中に　入道前攝政

春日野にむれ行鹿の聲きけは我も涙のおちぬへき哉

住吉社二十首に　藻壁門院少將

續後撰む集 枯果てのち迄つらき秋草にふかくや鹿の妻をこふらん

九條內大臣家三十首に夕虫　信實朝臣

［　　］に空も夕はかなしきを草の葉にのみ虫は鳴らん

千五百番歌合歌　源具親朝臣
人はいさくるしき物としりぬれはよそにもきかし松虫の聲
續後撰 院御百首に曉虫　下野
心していたくな鳴そきり〳〵すかことかましき老のねさめに
叢虫を　前關白左大臣
きり〳〵す鳴夕かけの草の原いかになみたの露をそふらん
前攝政左大臣
我宿の籬の草のしけきねになにをうしとか虫の鳴らむ
入道前攝政家秋三十首　正三位知家
露ふかき我にてしりぬ夕暮の草葉も秋の心あるらし
藻壁門院少將
續古 草のはの露も我身の上なれは袖のみほさぬ秋のゆふ暮
百首歌に　衣笠前内大臣
同 夕されは露吹おとす秋風に葉末かたよるをのゝしの原
秋夕　院御製
同 我なから思ひもわかぬ涙哉たそかれ時のあきのならひは
權大納言實雄
わか袖のぬるゝや何のかことそと秋のゆふへを誰にとはまし
西園寺入道前太政大臣家月十首に　權大納言公相
なかき夜をあかすとや猶いそく覽暮るをまたぬ山のはの月
順德院御時待月といふ事を　正三位知家
續古 見し人のたのめて更しよひ〳〵のつらさにゝたる山のはの月
院御百首に湖月　承明門院小宰相
光りそふ月のためとや暮るよりひら山おろし海にふくらん
御歌合海邊月　院御製
續後撰は集 鹽竈の浦のけふりもたえにけり月みむとての海士のしわさに

家歌合に月前鹿　入道前攝政
續古 三笠山月さしのほる空はれて峯より高きさほ鹿のこゑ
藻壁門院少將
玉 さを鹿の聲きく時の秋山に又すみのほる夜半の月影
秋二十首に　前關白左大臣
續後拾 幾秋もかはらすすめる久方の月のかつらやときはなるらん
院にて月契多秋　權大納言公相
行末の限りもあらし久方の天照月のあきの契りは
御百首に山月　按察使爲經
久にふる三室の山の夜半の月幾秋おなし影にすむらん
月を　前太政大臣
新千 いにしへを思ひつゝけてなかむれは神代にかへる秋のよの月
九條前内大臣
月さゆる深山の秋はのとかにて苔のいほりのよるの露けさ
衣笠前内大臣
山里の松のとほその淋しきにひとりも秋の月を見る哉
鳥羽殿にて月前庭虫　大納言典侍
露深き淺茅か庭の虫のねに影すみまさる秋のよの月
題不知　尙侍家中納言
かく計月を哀となかめすはいかに久しき秋のよならん
式乾門院御匣
思ひしる人やなからむ秋をへて幾よの月に袖はぬるとも
皇太后宮大夫俊成女
まてしはし同し空行秋の月又めくりあふむかしならぬに
前大納言爲家
續古 いにしへは我たに忍ぶ秋の月いかなるよゝをおもひ出らん

秋三十首に　藤原爲氏朝臣

同 秋のよの月こそ有けれ世中にいまも昔のかたみはかりに（は集）

入道前攝政家歌合に名所月　（信實朝臣集）

同 をしほ山おのへの松の颸に神代もふりてすめる月かけ

夜深月明といふ事を　従三位伊忠

あまの原さよ更かたの秋風にかけものこさすすめる月哉

順徳院御時惜月といへる事を　前大納言基良

神代より明るならひも今更に天の戸つらき夜半の月影

曉鹿を　前大納言伊平

つれなさの恨やのこるさをしかの妻とふ山のあり明の月

院御百首に夜鹿　信實朝臣

續後撰 秋風に妻とふ（まつ集）山の夜をさむみさこそ尾上の鹿はなくらめ

朝鹿を　蓮生法師

續拾 秋萩の咲て散ぬる朝（夕）露に猶立ぬれて（る、）鹿は（そ）なくなり（る集）

野外鴈　藤原基政

鴈啼て朝露さむみ月草のうつし心に野は成にけり

秋三十首歌　藻壁門院少將

夕されは霧立空に鴈啼て白露さむし小野の篠原

千五百番歌合のうた　皇太后宮大夫俊成女

續古 うら枯て下葉色つく秋萩の露ちる風に鶉なくなり

入道前攝政家百首に秋歌　前攝政左大臣

吹風もさそさむからし鶉鳴かたのゝをのゝ秋のゆふ暮

建保四年院御百首に　前太政大臣

草の原下葉やさむく成ぬらんやゝうらかるゝ松むしの聲

内大臣の時の百首に原鹿　入道前攝政

うらかるゝ淺茅か原に鳴鹿の聲吹みたる山おろしの風

入道前攝政家百首に秋歌　正三位知家

初霜のさやくをみれはさをしかのすたき鳴のもうら枯にけり

長谷寺十八首歌　入道前攝政

千草まて色とる比は初霜の夜寒になれやころもうつ也

題不知　權中納言資季

大方の月にねられぬ宿まても哀をそへて衣うつなり

院御百首に聞擣衣　鷹司院按察

おもひねの夢路も絶て悲しきになとかよるしも衣うつらん

千五百番歌合のうた　皇太后宮大夫俊成女

深草の野への月影うらみつゝ住こし里に衣うつなり

順徳院御時歌合に月前擣衣

衣うつ人もやよるはおしむらん山のはちかきあきの月影

入道前攝政家百首に　藤原行家朝臣

長月の末野の草の白露を玉につくれるあり明の月

題不知　従三位行能

新續古 月影も夜寒に成ぬ今よりの寐さめを誰かとはんとすらむ

住吉社百首に秋歌　鷹司院帥

ねさめして袖ぬらしけり長月の有明の月にかゝる時雨は

倚侍家中納言

物おもふ袖のみぬらす時雨哉四方の木のはゝ何かそむらん

院にて遠樹紅葉　大納言典侍

村時雨はるかにめくる外山より尾上の里のもみちをそみる

洞院攝政家百首に紅葉　前太政大臣

續古 きのふけふしくるとみゆる村雲のかゝれる山は紅葉しぬらん

秋三十首に　藤原爲氏朝臣
雲かゝる遠山もとは時雨めり行てやみましもみぢしぬらん
北野社歌合に山紅葉　藤原爲繼朝臣
秋山のしくるゝほとはあらはれて木毎に今は紅葉しにけり
院御百首に杜紅葉　衣笠前内大臣
續古 村時雨いくしほ染てわたつ海のなきさの杜の紅葉しぬらん
洞院攝政家百首に　前大納言爲家
をくら山梢もみちて秋風の日ことに□鹿もなく也
順德院御時百番歌合のうた　前太政大臣
秋の色は移りにけりな村雲の山端さらす時雨せしまに
題しらす　權中納言資季
秋の色は染へき限り染つれと夕の雲は猶しくれつゝ
源有長朝臣
色深き紅葉こきませ吹風や身にしむ秋の限り成らん
入道二品親王(道助)家五十首歌　従三位行能
まつとなき人も恨めし山里に木のはの落る秋のゆふ暮
千五百番歌合のうた　嘉陽門院越前
夕されは梢をはらふ風の音にさひしくなりぬ秋の山さと
皇太后宮大夫俊成女
色かはる淺茅か末に吹風の音にもしるき秋の暮かな
暮秋　式乾門院御匣
續拾 思ひやるかたこそなけれ巡りあはむ命もしらぬ秋の別れは
入道攝政百首を和侍けるに　衣笠前内大臣
けふはまた誰かは袖のかはくへき時雨て暮る秋の別れに

冬歌

六帖題歌に初冬　信實朝臣
けふしこそ時雨もことに降まされ思ひしことそ冬のはしめは
千五百番歌合のうた　嘉陽門院越前
冬きぬとおもふはかりの朝朗ことのほかにもかはる空かな
前攝政家にて題をさくりて歌よみ侍けるに柞を　藤原行家朝臣
けふはや冬とつく也はゝそ原いはたのをのゝ木枯のかせ
前太政大臣家十五首に　藤原爲教朝臣
山風のはけしくかはる神無月むへも木のはゝたまらさりけり
前攝政家百首に杜初冬　藤原隆祐
うら枯る生田の杜の神無月とふそといひしことの葉もなし
題しらす　慶政上人
はれくもる時こそ有けれ神無月時雨わたさぬ里なかりけり
内大臣の時百首に田家時雨　入道前攝政
足曳の山田の庵の篷をあらみまとをにあれや時雨もる也
時雨　前攝政左大臣
神無月さも定めなき村雲に時しる雨のいかてふるらん
權中納言資季
見渡せは山の尾上に雲こえて一村すくる夕しくれかな
續後撰 六帖題歌　正三位知家
ふりはつる我身むそちの神無月袖はいつより時雨そめけん
前大納言爲家の家の百首に　信實朝臣
續古 さらに又おもひ有とや時雨らん室の八嶋の浮雲のそら
暮山時雨　明珍法師

夕されは河風さえて衣手のたなかみ山にしくれふる也

閑居落葉　隆專法師

落つもる木の葉を道にふみなして宿とふ人も淋しかるらん

建保四年院御百首に冬歌　前太政大臣

（續古）木の葉さへふかく降行山路哉嵐もおくやはけしかるらん

橋上落葉　院御製

山人は心あてにや渡るらん木のはかくれの谷のかけはし

題不知　攝政前太政大臣

神無月ゆふへの空をなかむれは時雨ぬ宿も袖はぬれけり

夕時雨　入道三品親王

曇りなき影たに寒き冬の日のかたふく山に時雨ふる也

冬歌　前大納言爲家

霜枯の野田の草根にふす鴫の何のかけにか身をかくす覽

從三位行能

竹の葉のさやく霜夜におとろけは冴たる月そかたふきにける

九條前内大臣

（續後拾）紀の國や吹上のをのゝ淺茅原なひく霜夜にさゆる松風（はま集）

御百首に池氷　院御製

朝毎に氷そ今は結ひける霜枯はつるきくの池みつ

氷を　入道前攝政

（續古）さえくれぬけふ吹風にあすか川七瀬の淀や氷はてなむ

九條前内大臣

篠分る山下水もこほりけりあはてこしよの谷のあらしに

池水鳥　右衛門督通成

冬されはまのゝ池水氷ゐてよかれかちなるあちの村鳥

院御百首に池氷　藤原爲繼朝臣

芦ふきのこやのあたりの池なれは結ふ氷もまた隙そなき

湖邊氷を　平重時朝臣

しかの浦や汀は遠く氷ゐて波よせかへすひらの山かせ

夜千鳥　中原師光

眞菅生るみつの河せに小夜更て妻とふ千鳥聲すみぬなり

前攝政家百首に湊千鳥　藤原伊嗣朝臣

湊入の芦まもわけぬ小夜千鳥なにゝさはりの妻をこふらん

千鳥を　鷹司院新參

ひとりれの心の友と成物は霜夜に渡る千鳥なりけり

千五百番歌合のうた　嘉陽門院越前

まさ木ちる谷のかけはし埋れてとはれぬ宿は霰ふるなり

閑居霰　權大納言良教

槇のやの木の葉の後の淋しさを思ひ知てもとふ霰かな

冬御うた　院御製

（續後撰）天乙女玉もすそひく雲の上に豐（の集）のあかりはおも影に見ゆ

前攝政左大臣

霜枯のあさのゝきゝすふみたてゝ谷のうへ行狩人やたれ

結緣經百首に　前大納言爲家

いかにせむ身は降まさる雪にまた出てみしよの月のさそふを

信實朝臣

都まてさむさそ見ゆる峯越のひらの遠山雪ふりにけり

雪歌　少將內侍

思ふよりいとゝいくのゝ道たえてまたふみもみすつもる雪哉

辨內侍

とふ人をえやは待みん三輪の山雪には道のあらしと思へは

我爲とこと更にこそわけすともふりつむ雪のうへをたにとへ　尙侍家中納言

九條前内大臣家十五首に名所雪　承明門院小宰相

雪ふかき木幡の峯をなかめてもうちのわたりに人や待らん

千五百番歌合歌　嘉陽門院越前

雪にまたかくれてすめる津の國のこやもあらはに立けふり哉

寛喜女御入内屛風歌　前太政大臣

烟たつ槇のすみかま燒そへてさゆる時しるをのゝやま人

入道前攝政百首を和侍けるに　衣笠前内大臣

いたつらに暮ぬと思ひしあら玉の年のやとりは我身也けり

題不知　權大納言實雄

今更におしくも有哉かれてより思ひし年のをはりなれとも

卜部兼直宿禰

老ぬとてさらぬ別れのちかけれはいよ〳〵おしき年の暮哉

院御百首に歳暮　藤原行家朝臣

いたつらに過る月日のはては又たゝひとゝせの暮にそ有ける

秋風抄下

戀歌

續後撰 院御百首に寄風戀　前太政大臣

夕されは天津空なる秋風に行衞もしらぬ人を戀つゝ

寄雨戀　權大納言公相

降雨をいつまてよそに思ひけむぬるゝは戀の袂なりけり

鳥羽殿にて月前忍戀　院御製

續拾 いとせめて忍ふる夜半の涙ともおもひもしらてやとる月哉

千五百番歌合のうた　皇太后宮大夫俊成女

續後撰 いかにせむ忍ふの山に跡たえておもひ入とも（道集）露のふかさを

戀歌　承明門院小宰相

玉致 戀そひてたえぬ烟にまかへましあまたにつゝむ戀ときかすは

院御百首に寄瀧戀　辨内侍

續古 音に猶たてぬもくるし思ひせく心の内に瀧なくもかな

藤原爲氏朝臣

我涙なとやせかれぬ瀧つせの中にもよとは有とこそきけ

入道前攝政家百首に戀　藤原行家朝臣

涙川あさき瀨そなき陸奥の袖のわたりに淵はあれとも

寄荻戀　卜部兼直宿禰

秋風の聲にもたてぬ下荻のほのめかさてやしほれはて南

忍戀　加茂季保

よそにこそ忍ひもはてめ君にたに心のほとをしらせかねつる

戀歌　藤原爲繼朝臣

思ひそむる始めはありて有かひのみえはや戀のはてを賴まん

六帖題歌　前大納言爲家

淀河のむかひにみゆるみつの杜よそにのみして戀渡る哉

九條前内大臣家十五首に名所戀　承明門院小宰相

いかにせむうき身にかきる名取川あふせもしらて命たへすは

住吉社百首に戀歌　鷹司院帥

湊路のあまのゆきゝのかひもなし我爲にかるみるめならねは

戀歌中に　入道前攝政

たくなはの長き命のかひもなしくるしや心あはぬためしに

衣笠前内大臣

續古 我戀は海士のいさり火よるはもえひるはくるしき浦のあみ縄

院にて寄海戀　　按察使爲繼

わか袖のたくひやなにそわたつ海の鹽のひるまも有といふ也

寄松戀　　橘廣兼

波よするいそまの浦のそなれ松ねをしほにのみぬるゝ袖かな

前大納言爲家の家百首に　　下野

新後拾 最上川いなとこたへていな船のしはしはかりの心をも見む

不逢戀　　藻壁門院但馬

うらむとも我心なる道なれはこさはやこさん相坂の關

入道前攝政百首を和侍けるに　　衣笠前内大臣

假初にみし計なるはし鷹のをふさのはしを戀や渡らん

院御百首に　　前大納言基良

あつさ弓春のきゝすをみてたにも人の心にいるよしも哉

權大納言公相

續後撰 はかなくも思ひなくさむ心哉おなし世にふる頼みはかりに

題不知　　九條前内大臣

身にしめし秋のね覺のさむしろに物おもふ我と成にけるかな

秋三十首に　　少將内侍

あすしらぬ命に人に戀侘て秋の夜なかく物おもふ哉

前關白左大臣

我ことや頼めてつらき秋風のさむきよな〳〵松虫のなく

待戀　　尙侍家中納言

新後撰 たのめしは今夜もいかに成ぬらん更ぬる物を山のはの月

六帖題歌　　前大納言爲家

山端に出つる月をおしむまてなをさりともと君を待かな

正三位知家

君まつとさも夜寒なる秋風に閨の板戸をさゝて明ぬる

寄莚戀　　最知法師

今夜こそこぬもつらけれ獨ねの我さむしろに秋風そふく

夜戀　　藤原時朝

かき曇り時雨る空をかことにてこぬよの床の更にける哉

院御百首に寄雨戀　　下野

續古 かきくもれたのむる宵の村雨にさはらぬ人のこゝろをもみむ

戀歌中に　　辨内侍

ならはれはその僞りもしらぬ身になにとかならん夕くれの空

宣仁門院一條

僞りを待はしめけむいにしへの人もうらめしゆふ暮の空

寄風戀　　院御製

いもとぬるすきまの風そ猶さむきいつならひける心成らん

六帖題歌　　正三位知家

袖かはす夜半の手枕何かたかあかぬなみたにぬれ増るらん

題不知　　尙侍家中納言

おきてゆく人は待ける鳥の音をなとあやにくに我いとふらむ

入道前攝政

新後拾 暮るまを待へき身とも頼まれすかへりし道の心まとひに

前太政大臣

玉 歎きわひむなしく明し空よりもまさりてなとかけさは悲しき

前太政大臣家十五首に　　右兵衛督基氏

けさはしもあやに心の悲しきはいかにされける夜半の名殘そ

寄關戀　藤原經□
今更に恨みやはせむ相坂の關は別れのみちと聞しに
正三位知家の家にて別戀　信實朝臣
なのつからあふはあふとも賴まれす別れそ戀のまこと也ける
戀歌　少將內侍
此世にはいつ逢むともたのめねは今よりさらぬ別れとそなる
尙侍家中納言
續拾
又いつと賴まぬ物のうつゝとも夢ともなくて別れぬる哉
洞院攝政家百首に不遇戀　藻壁門院但馬
しほるともいかゝ賴まむ淚川あさみにぬるゝ袖のならひは
題不知　藤原隆祐
淚川ぬれにし袖は賴まれす身さへなかるといかてしらせむ
寄池戀　源兼氏
新拾
鳰鳥のすむ池水のたえもせはいかに忍へとかよひそめけん
寄河戀　藤原季宗朝臣
たえしとは契りしかともいさや川いさまたしらす底の心は
結緣經百首に　爲氏朝臣
我心たな井のし水あさくのみ思ひなせはや人のたのまぬ
六帖題歌　前大納言爲家
賴むから命をきはのかれ言もあまりになれはうたかはれつゝ
住吉社百首に戀歌　鷹司院按察
續拾
いかにして契りし事を忘れまし賴むよりこそつらさをもしれ
千五百番歌合のうた　皇太后宮大夫俊成女
續後拾
夏衣うすくや人の成ぬらん空蟬のれにぬるゝ袖かな
戀歌　衣笠前內大臣
新後撰
我なからいかに心の成ぬらむ人めもしらすぬるゝ袖かな
承明門院小宰相
身のうさを歎くにあまる淚こそ忍ふに堪ぬ色はみせけれ
鷹司院按察
忍ふともちりなむ後のかれことを心の花になと忘れけん
式乾門院御匣
續古
うかるへき身の世かたりを思ふにも猶くやしきは夢の通路
藻壁門院少將
續古
おもかけをうき身に添て戀しなは後のよ迄のつらさをやみん
少將內侍
むは玉の夢はさめぬる床の上に猶おもかけの見えもする哉
院御百首に寄月戀　辨內侍
袖にしも月ゆへとまる俤の何と身にしむなみた成らん
月前戀　紀宗氏
逢ぬまのかたみなれとも契られはこぬよそ袖に月はやとれる
寄夢戀　藤原爲賴
あらましに思ふよりこそみえもすれ賴まし今は夢のまことを
院御百首に寄枕戀　承明門院小宰相
續古
宵々にはかなき夢のなくさめも枕さためていつ迄かみし
題不知　前大納言基良
新後撰
いかにせむまとろむ程の夢をたにうしとみしよの慰めもかな
（にぬ集）
院御百首に　鷹司院按察
夢かとそ思ひ成ぬる契てしことそともなき人のこゝろを
承明門院宰相
なそもかく我身にそはぬ陽炎のもゆる思ひをむれにしるらん

夕戀　　藻壁門院少將

續拾 見し人を思ひ出るも悲しきにゆふへは月のまたれすもかな

千五百番歌合うた　　源具親朝臣

續後拾 今はとて思ひたゆへき槇の戸をさゝぬや待し習ひ成らん

秋戀　　藤原爲敎朝臣

人はよも思ひもしらしいたつらにひとりそこふる秋の夕暮

前太政大臣家十五首に戀　　權大納言公基

こりすまに有し名殘を忘れてもおなしつらさを歎く比哉

權大納言實雄

續拾 おもはすは(に)哀つれなき命哉いけらは後のたのみ計に

院御百首に寄風戀　　皇宮大夫隆親

そよいかて思ひいつ共しらせましいなの篠生の風につけても

寄草戀　　兵部卿有敎

續古 月草の花もあたにや思ふらんぬれぬにうつる人のこゝろを

寄虫戀　　權大納言實雄

身をかへて何しか思ふ空蟬の世はたのまれぬ人のこゝろを

六帖題歌　　前大納言爲家

いさしらすなるみの浦に引しほのはやくそ人は遠さかりにし

九條前內大臣家三十首に怨戀　　源具親朝臣

よそに見し鹽やく里のしるへともからく我身の成にける哉

前攝政家百首に絕戀　　信實朝臣

またもみぬ契の末もなからへて戀しとのみやおもひはてなむ

遇不逢戀　　源孝行

はては又戀しき計りおもはれて人をうらむる心たになし

院御百首に寄獸戀　　藻壁門院但馬

よしや身を虎ふす野へに捨はてゝさのみはつらき心をも見し

題不知　　右大將通忠母(こおもふに集)

續千 形見そとみるに淚そかゝりけるあふひはよそのかさしなれ共

入道前攝政

續古 つらからは本の心の忘れなてかされてほさぬ袖のつゆかな

院御百首に寄烟戀　　鷹司院按察

續後撰 いかにせむふしの煙の年ふれと忘るゝ程にならぬおもひを

戀歌　　前攝政家民部卿(よみ人しらす集)

續古 限りそと別れし時にいはぬこそおもへは人の情なりけれ

藻壁門院少將

一筋に身をうき物と思ふこそ人のつらさのあまり成けれ

藤原爲氏朝臣

續古 うきにこそけに僞りも(は集)なかりけれ忘るゝ方のつらさまことに

院にて月前戀　　按察使爲經

新後撰 おもひ出て月につらさの增る哉見しや別れの有あけの空

住吉の社三十六首に　　從三位顯氏

思ひいつやいかにれしよか手枕のすきまをたにも猶いとひけん

題不知　　右兵衛督基氏

いにしへの契りのいかに成果て別れはいとゝ遠さかるらん

信實朝臣

あか月のうきは別れに成はてゝ思ひいつるに人そ戀しき

衣笠前內大臣

新拾 思ひあまり昔まてやはつらからぬたか世に人を忘れそめけん

雜歌

建保四年院御百首歌　　入道前攝政

續古 我國はよろひろ守る神しあれは頼むそやかていのり成ける

續後撰 神代より今我君につたはれるあまつひつきの程そ久しき

帝王系圖をひらきて思ひつゝけける（かき侍し集）

前大納言爲家の家百首に　祝部成茂

君を祈る心のはなやいつとなく世は春なれと思ひそめけん

題不知　從三位伊忠

かすめるは春の習ひと思へとも月待いてゝつらき空かな

二條院讃岐女

春のよもおなし雲井の空なから霞めは遠き山のはの月

院御歌合のうた　源俊平

櫻花かはらぬ色をわきかれて雲さへおしき春の山かせ

落花を　平長時

續拾 さらてたにうつろひ安き花の色に散を盛りと山風そ吹

雨中郭公　蓮生法師

續古 限りなきなみたと見えて時鳥をのか五月の雨に鳴なり（せ集）

閑居夜雨　前大納言基良

淋しさになれてたに猶忍はれす秋の窓うつ夜半の村雨

前太政大臣家十五首に　權大納言實雄

續拾 いかなりし秋に涙の落そめて身はならはしと袖のぬるらん

入道前攝政家にて樺を　從一位倫子家尾張

いかさまに契りか置し白露の結ふ程なき朝かほの花

月歌　衣笠前内大臣

月をみて經にける年を數ふれはいつゝのとをそ身に積りぬる

前大納言伊平

身につもる霜をは秋のならひとて猶あかなくに月をみるかな

正二位忠定

續後撰 幾秋か雲ゐのよそに成はてゝみしよの空の月をこふらん

正三位知家

月を見て後の秋とは待もせすいける限りをかれてしられは

信實朝臣

心すむ思ひの末のとをるかと見ゆるはにしの山のはの月

法眼長尋

大方の秋のおもひの長き夜に猶いれかての閨の月影

前大納言頼經家十首に　三善康朝

難波かたあしまの月に鶴鳴て夜寒になりぬ秋のうら風

藤原基綱

續後撰 身につもる秋をかそへて詠むれは獨かなしきありあけの月

陵園妾　源有長朝臣

菊の露なみた落そふ松の戸にまた袖ぬらす有明の空

題不知　義淳法師

年たけて寐覺かちなる秋のよを時雨ゆへともおもひける哉

光俊朝臣世をのかれて後時雨しける比消息して侍ける　小槻爲景

山深み時雨る庵の音信に宮古の人の袖もぬれけり

題不知　下野

とち果しむくらの門の冬枯にさらても誰と待人はなし

前攝政家民部卿

さひしさはよそにてもしれ朝夕にたく冬柴のけふりけふらは

世中のうきにもまさる淋しさはかれて思ひしふゆの山さと　入道三品親王

院御百首に歳暮　權大納言忠信

さりともと君につかへし跡はあれと又いたつらに暮るとし哉

前中納言定嗣

つかふとてよるひるわかすいそくまに私しらて年そくれぬる

題不知　慶政上人

住わふるうき身の果の雲も猶さすらへきゆる方やなからん

藤原隆祐

新續古　なかめきて久しくなれと天の原むなしき事そかはらさりける　りぬ集

徳大寺にこもりゐて侍ける秋の比ふかき山家なる人の

返事に　内大臣

此里も嵐ははけしいりにける深きみやまの住うかるらん

洞院攝政家百首に山家　正三位成實

山深みまさきのかつらくる人のとふにつらさの露そこほるゝ

住吉社百首に　尙侍家中納言

小篠原わけゝる人の衣手に露のふかさはおもひしるかな

御百首に旅行　院御製

此間脱落　限りなく遠く成行都かな角田かはらのわたりしてけり

前大納言爲家

續古　安部嶋の山の岩かねかたしきてさぬるこよひの月のさやけさ

内大臣の時百首に江月　入道攝政

あまをふれ入江の月にしたふ哉人はおしまぬ袖の別れを

海邊月を　信實朝臣

まつかれはしほのみちひも靜にて月になきたるよさの浦風

洞院攝政家百首に旅

續古　しほ風に篷のうはふきひまみえてうきねの枕あけぬ此よは

院御百首に濱千鳥　藤原隆祐

鳴海かたしほみちくれは跡たえて身のたくひなる友千鳥かな

嶋　鶴　正三位成實

續古　友鶴のむれゐしことは昔にてみしまかくれに我のみそなく　わを集

海邊眺望　入道三品親王

秋沙ゐる荒磯岩の松のうれに入日うつろふくれのさひしさ

九條内大臣家三十首に　下　野

ある人とまつを頼むも哀れ也それもむかしは馴し友かは

題不知　院御製

新後撰　道あれと難波の事も思へとも芦分小舟すゑそとをらぬ

前攝政左大臣

いたつらに成ぬる身こそ悲しけれ神のいつきの杣木ならねは

九條前内大臣

我うへに涙のみこゆる名取川いかにならむと世を渡るらん

從三位伊忠

何にこの思ふかたくそひぬらん身のうき計り歎くへき世に

藤原忠兼朝臣

續拾　なに事を世には待へき命とて長くも哉と身を思ふらん

權大僧都實伊

歎かしとおもふ心のなき迄そうきもつらきも有世成ける

圓地法師

空蟬の世と知なから音をそ鳴心の中のむなしからねは

藤原光成朝臣

九條前内大臣
みる程は思ひもわかぬうたゝねの　此間脱落
衣笠前内大臣
露霜をたくりむかふる鐘の音に其事となくすむ心かな
尙侍家中納言
いつれの日いつれの時を契りにて哀命のかきり成らん
修明門院大貳
めくりあふ同し月日と待つれと煙にみゆるかけたにもなし
皇太后宮大夫俊成女
世かたりに有とも聞て習はゝやむかし忘るゝ人のこゝろを
入道前攝政
あたの世によろつのことは捨果つ子を思ふ道そ猶うかりける
正三位知家
曉のねさめのたひにねをそ鳴後の世思ふ袖の枕に
結緣經百首に
續古　いかさまに秋の夕をなくさめん世はそむけとも本の身にして
住吉社の三十六首に
世を捨てあるにもあらぬ身となれり何しかおいの尋きつらん

右秋風抄以織部正乘尹横田茂語藏本挍合畢

和歌部七

雲葉和歌集卷第一

春歌上

春たつこゝろを　従二位家隆

天の原かすみてかへるあら玉の年こそ春の始なりけれ

名所百首歌たてまつりし時　前中納言定家

音羽川雪けの涙も岩こえて關のこなたに春はきにけり

題しらず　柿本人丸

春きぬと人しもつけす逢坂のゆふつけ鳥の聲にこそしれ

山邊赤人

いにしへの人の植けん杉かえに霞たなひき春はきにけり

百首歌人々にめしけるとき　後鳥羽院御製

昨日まてさえし雪けのひきかへて明る霞の山そのとけき

千五百番歌合　後京極攝政太政大臣

なしなへてけさは霞の敷嶋やゝまともろ人春をしるらし

春のはしめのうた　慈鎭和尚

朝みとり春はかすみに立田山よはにや年もひとりこゆらん

崇德院御時の百首歌の中に　皇太后宮大夫俊成

春たつと空にしるきはかすか山みねの朝日のけしき成けり

はつ春の心を　源俊頼朝臣

いつしかとけさは氷も解にけりいかて汀に春をしるらん

三條右大臣の家の屏風歌に　紀貫之

春たちて子日になれは打むれていつれの人かのへにこさらん

文治六年女御入内屏風に　三條入道左大臣

子日するかすかのゝへの姫小松なかくたもてるためしにそ引

北野宮へ百首御うた奉られける時に　後鳥羽院御製

春風にいくへの氷けさとけてよせぬにかへるしかのうらなみ

たいしらす　前中納言匡房

水鳥のうきねのとこの春風に氷の枕とけやしぬらん

紀貫之

春たちて風や吹とくけふみれは瀧のみおより花そ散ける

寛和御時殿上歌合に　大納言齊信

氷とく風のたよりにやふるすなる谷の鶯春をしるらん

百首の歌人々にめしける時　院御製

鶯のさえつるけさの初音よりあらたまりける春そしらるゝ

題しらす　よみ人しらす

霞たつ野上のかたに行しかは鶯なきぬ春になるらし

道助法親王家五十首歌に雪中鶯　前太政大臣

春やとき草葉もみえぬ雪のうちにむすほゝれたる鶯のこゑ

如願法師

打とくる涙もこほる雪のうちに又かきこもる鶯のこゑ

後京極攝政家百首歌合に　寂蓮法師
梅かえのにほひはかりや春ならんまた雪深し窓の曙
雪中梅花といふことを　花山院御製
梅かえに降かさなれる白雪をやへさく花と思ひける哉
題しらす　藤原基俊
紅にゝほはさりせは雪消ぬ軒端の梅をいかておらまし
延喜のすゑつかたの御屛風に　紀貫之
鶯のなくはしるきに梅のはな色まかえとや雪の降らん
わかなをよめる　清原深養父
をしなへていさ春のゝにましりなむ若菜摘くる人もあふやと
たいしらす　藤原元眞
よしの山霞たな引けふよりのあしたの原はわかなつむらん
春のうたに　源俊賴朝臣
かすかのゝ雪の村消かきわけて誰爲つめる若な成覽
小辨
けふも猶春ともみえす我しめしのへのわかなは雪やつむらん
前大納言忠良
若なつむ荻のやけ原かき分て袖にたまるは春のあは雪
百首歌たてまつりし時　土御門院小宰相
是のみそなのか春とて山かつの野澤の若なつみに出らん
わかなの心を　祐子内親王家紀伊
さそはれとかたみにそみる若なつむ心はのへに通ひけりとも
土御門院御製
たかためのわかなゝらねと我しめし野澤の水に袖はぬれつゝ
春の歌の中に　曾根好忠
根芹つむ春のさはたにおり立て引もの裾のぬれぬまそなき

惟明親王家十五首歌に　從二位家隆
橋姬の霞の衣ぬきをうすみまたさむしろの宇治の川風
承久元年内裏十首歌合に野徑霞　前中納言定家
春日のゝ霞の衣山風にしのふもち摺みたれてそゆく
題しらす　伊勢
春霞たちてのゝちにみわたせはかすかのをのはみゆき寒けし
二條院讃岐
春風は更に雪けに吹かへて峯の霞そ雲かくれゆく
參議雅經
さゝ浪やふるき都のしかすかに霞なからの山のしら雪
早春のこゝろを　順德院御製
風ふけは峯のときは木露おちて空よりきゆる春のあは雪
題しらす　壬生忠峯
足引の山のかひよりかすみきて春しりなからふれる白雪
五社百首歌に殘雪を　皇太后宮大夫俊成
おなしくは花のさくまて待つけよ吉野の山の峯のしら雪
題しらす　源俊賴朝臣
立かへる春のしるしは霞しく音羽の山の雪のむら消
百首歌たてまつりしとき　光明峯寺入道前攝政左大臣
音羽川瀧のみなかみ雪消て朝日にいつる水のしら波
俊成卿家十首歌に　從三位賴政
冬こもるよしのゝ山のいはやかは苔のしつくに春をしるらん
山家鶯を　源俊賴朝臣
うくひすのきなかさりせは山里に誰とか春の日をくらさまし
故宮鶯を　從三位行能
鶯の聲もたかまの宮木もり山にしめゆふむかしこふらし

後法性寺入道前關白家百首歌に　皇太后宮大夫俊成

雲まよりよそにきくこそ哀なれ朝倉山の鶯のこゑ

題しらす　西行法師

色つゝむ野邊の霞の下もえき心をそむる鶯の聲

百首歌たてまつりし時　後京極攝政前太政大臣

かすかのゝ草のはつかに雪消てまたうらわかき鶯のこゑ

建保三年內裏詩歌合侍しに野外霞　參議雅經

春日野の雪まの草の摺衣かすみのみたれ春風そふく

いへに百首歌合侍りけるに若草　後京極攝政前太政大臣

雪消るかれのゝ下の淺み（わかイ）とりこその草はやれにかへるらん

わか草のこゝろを　土御門院御製

春のきる霞のつまやこもるらんまた若艸のむさしのゝ原

前內大臣家の五首歌に武藏野　從二位家隆

春もまた色には出す武藏野や若紫の雪の下くさ

百首歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

さわらひも今はおりにやなりぬ覧垂氷のこほりいはそゝく也

はるの歌とて　柿本人丸

こゝにきて春日の原を見わたせは小松かうへに霞たなひく

かすみの歌に　大納言師頼

磯上ふるのやしろの春の色に霞たなひくたかまとの山

五百首の御歌の中に　後鳥羽院御製

天にます豐をか姫のゆふかつらかけてかすめるあまのかく山

百首の歌人々にめしける時山霞　後嵯峨院御製

今は又霞へたてゝおもふかな大內山の春のあけほの

西園寺入道前太政大臣

神代より霞もいくへ隔きぬ山田の原の春の明ほの

春の歌とてよめる　宜秋門院丹後

たこのあまのねぬるしほやのよひのまは獨や涙に霞たつらん

たこのうらにて春のこゝろを　道因法師

たこの浦風ものとけき春の日は霞そ浪に立かはりける

北野宮へ百首御歌奉納侍し時　後鳥羽院御製

浦風に霞をむすふ網人は春の空にや心ひくらん

名所百首歌たてまつりし時　僧正行意

伊勢の海はるかにかすむ波まより天の原なるあまの釣舟

五社百首うたよみ侍けるに　皇太后宮大夫俊成

明石かたゑしまをかけて見渡は霞のうへも沖つ白浪

土御門內大臣家歌合に遠嶋朝霞　鴨長明

明わたる沖つ浪まにれを絶て霞にやとるうき嶋の松

十首歌合に朝霞　後鳥羽院御製

鹽かまの浦のひかたの明ほの（のイ）に霞にのこるうき嶋の松

土御門院小宰相

浦人の鹽やく里の朝かすみ春のものとやわかすみるらん

光明峯寺入道前攝政左大臣家百首うたよみ侍しに海霞　前太政大臣

伊勢のあまの玉藻の裾やまかふらん霞に遠き沖つしら浪

家隆卿の家にて五首うた侍りけるに海邊霞を　藤原光俊朝臣

棹姫のとこのうら風吹ぬらし霞の袖にかゝるしら浪

百首の歌よみ侍しに　前內大臣

霞しく袖の湊のうら風に春さへ浪のうつ衣かな

六首歌合侍しに江上霞　順德院御製

難波江の汐干のかたやかすむらん芦間に遠き海士の漁火
前太政大臣
難波めの入江にこかす夕煙たゆともなしにかすむ春哉
題しらす　後久我太政大臣
なにはかた朝けの鹽路こく舟のよるへもふかく霞春かな
千五百番歌合に　後京極攝政太政大臣
つの國のなにはの春の朝ほらけ霞も波もはてなしらはや
たいしらす　民部卿爲家
霞行なにはの春の夕くれに心あれなと身をおもふ哉
建保四年內裏十首歌合に　權大納言忠信
しかのあまの出ぬる跡も霞つゝ我すむかたの山端もなし
元久元年仙洞にて詩歌合侍りけるに水郷春望を　醍醐入道前太政大臣
春のよのあけのそほ舟ほの〳〵と幾山本を霞きぬらん
成實卿八幡にて歌合し侍けるに河上霞　源家長朝臣
とをつ川をちかた人やきますらん霞のまより袖そ近つく
題しらす　後惠法師
鶯のなきてうつろふ梅かえにこほるゝ露や涙なるらん
梅花を　藤原元眞
春霞たつかたをかの梅のはな匂はさりせはいかてしらまし
〔式子內親王〕
袖の上に垣ねの梅は音つれて枕にきゆるうたゝねの夢
西行法師
ぬしいかに風わたるとていとふらんよそに嬉しき梅の匂ひを
梅花をよめる　藤原清輔朝臣

あし垣のおくゆかしくもみゆる哉たかすむ宿の梅の立枝そ
百首の歌人々にめされし時梅薫風　院御製
ことならは色にもみせよ梅のはな香はかくれなき夜半の春風
柳を　後鳥羽院御製
旅人のゆく道のへのふる柳おなし昔の春やしらはん
題しらす　柿本人丸
朝みとりのへの青柳出てみむいとを吹くる風はありやと
壬生忠見
青柳の糸よりそむるほともなくとく來るものは月日也けり
春歌とて　源重之
あをやきの糸をみとりに染かけて春の風にやなみはよるらん
柳をよめる　素性法師
池水に波はひまなくあらへとも柳のいとはほす人もなし

雲葉和歌集巻第二

春歌中 花部

百首歌たてまつりし時　式子內親王
花をまつおもかけあまる明ほのは四方の梢にかほる白雲
題しらす　曾根好忠
我やとの本あらの櫻さかねとも心をかけてみれはたのもし
前內大臣
春かすみたつをみしより三吉野の山の櫻をまたぬ日はなし
五十首歌奉りし時山花未遍といふことを　皇太后宮大夫俊成
なしなへて風こそかほれ春山の咲櫻あれはさかぬ梢も

見わたせはふもとはかりに咲そめて花も奥あるみよしのゝ山　宮内卿

題しらす　柿本人丸

音にきくよしのゝ櫻見にゆかんつけよ山守花のさかりを

日吉社へ五十首御歌奉納侍し時　後鳥羽院御製

吉野山さくらにかゝる夕かすみ花も朧の色は有けり

十首歌合侍けるに深山花を　順徳院御製

みよしのゝ山のあなたの櫻花人にしられぬひとやみるらん

千五百番歌合に　野宮左大臣

いかはかりまつもおしむも花ゆへは人の心をみよしのゝ山

石清水歌合に花を　按察使兼宗

よしの山峯たちかくす雲かとて花ゆへはなを恨つるかな

洞院攝政家百首歌に花を　従二位家隆

咲あまるよしのゝ山の櫻はな故郷かけてにほふ白くも

百首歌よみて太神宮へたてまつりし時　慈鎮和尚

よしの山夢にも花をなかむれは心のおくにかゝる白雲

はなのうたとて　西行法師

なへてならぬ四方の山邊の花はみな吉野より社たれは散けめ

名所花を　前中納言定家

日にみかく玉きの宮の櫻はな春の光とうへやをきけん

題しらす　清原深養父

咲にけりけふは山へのさくら花霞たゝすはいそきみてまし

太神宮へ百首歌奉りしに　慈鎮和尚

つれもなき人のよかれにならへかし花にまたるゝ春の山かせ

春山といふことを　順徳院御製

白雲や花よりうへにかゝるらん櫻そたかきかつらきの山

たいしらす　従二位家隆

春くれは櫻こきませ青柳のかつらき山そ錦なりける

百首歌奉し時　後鳥羽院御製

櫻花さきぬる時はかつらきの山のすかたにかゝるしら雲

なかむらん心まよひもよしなしと櫻をよそにすくる白雲

題しらす　柿本人丸

夕やみはあなおほつかな月影のいてはや花の色もまさらん

五社百首歌の中に　皇太后宮大夫俊成

山さくら咲やらぬまはくれことにまたてそみつる春夜の月

百首歌たてまつりし時　後京極攝政太政大臣

やすらはてれなんものかは山端にいさよふ月を花にまちつゝ

洞院攝政家百首歌に花を　藤原光俊朝臣

月たにも霞かへたる春のよに山端てらす花の色哉

題しらす　赤染右衛門

山端の花より月の入やらて誰にやすらふ別なるらん

北野宮へ百首御歌奉納侍し時　後鳥羽院御製

哀しる人はとひこて山里の花にかたふくあたらよの月

花月百首歌に　後京極攝政太政大臣

けふこすは庭にや跡のいとはれんとへかし人の花の盛を

百首歌奉し時　式子内親王

鳥の音も霞もつれの色ならて花吹かほる春の明ほの

花の歌とてよめる　淨意法師

鳥の音につらさかはらぬ嵐かな花にわかれのはるの曙

はなの歌あまたよみ侍ける　西行法師

ちらは又なけきやそはん山さくら盛になるは嬉しけれとも

春歌とて　藤原光俊朝臣
櫻はないま咲ぬらししからきの外山の松に雲のかゝれる
百首歌たてまつりし時　参議雅經
立歸り外山そかすむ高砂のおのへの櫻雲もまかはす
たいしらす　順徳院御製
櫻はなさくとみしまにたかさこの松をのこしてかゝる白雲
素俊法師
高砂のおのへの櫻いつよりかぬしさたまらぬ花となりけん
俊惠法師
さのみやは朝ゐる雲のはれさらんおのへの櫻盛なるらし
道助法親王家五十首歌に山花を　從二位家隆
山櫻にほふはかりのかひもなし霞の袖は花もたまらす
百首歌奉りしとき　光明峯寺入道前攝政左大臣
山風の霞の衣ふきかへしうらめつらしき花の色哉
山寺にすみける僧のもとの花を見てよめる　藤原清輔朝臣
山さくら峯は霞のこめつれは麓の花を折てこそみれ
題しらす　平　兼　盛
しら雲とおもふにつけてさひしきは花の梢の明ほのゝ空
山花といふ事を　藤原伊長朝臣
さかぬまの雲をもかつは花と見て盛久しき山さくら哉
五十首歌奉りし時　参議雅經
色は雲にほひは風に成はてゝをのれともなき山櫻哉
花月百首歌よみ侍しに　前中納言定家
霞たつ峯の櫻の朝ほらけくれなゐくゝる天の川浪
春の歌とて　柿本人丸
ちりぬともいかてかしらん山櫻春の霞のたちしかくせは
とを山さくらといふことを　源俊頼朝臣
雪消ぬふしの煙とみえつるは霞にまかふ櫻なりけり
家に百首歌よみ侍しに　洞院攝政左大臣
たをやめの衣の袖やにほふらん折はへかさす花の白雲
千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成
白妙にゆふかけてけり榊葉に櫻咲そふ天のかく山
五十首歌奉りしに花下送日といふ事を　宮内卿
花にふる日數をしらすけふとてや故郷人の我をまつらん
釋阿九十賀和歌所にてをこなはれける時の屏風に　大藏卿有家
けふまては梢なからの山さくらあすは雪とや花のふるさと
故郷花を　民部卿成範
古さとの花にむかしのこととはゝ幾よの人の心しらまし
題しらす　寂念法師
春きてもとはれさりける山里を花さきなはと何思ひけん
植花待客といふことを　源有長朝臣
移し植て猶宿からにとはれすははなの思はん身こそつらけれ
たいしらす　正三位伊忠
みるほとはうさも忘るゝ世中になとしも花のあたに咲覧
西行法師
思ひ返すさとりやけふはなからまし花に染をく色なかりせは
後京極攝政家十首歌合に朝花　前中納言定家
世のつれのものとはみえす山櫻けさやむかしの夢の面影
朝見花といふことを　覺昭法師

夢のうちも靜心なきおもひれの朝けの花に春風そ吹

春夕花を　從二位家隆

まつ人のくもる契りも有物を夕暮あさき花の色哉

春の歌の中に　正二位忠定

立なれておもへは戀し九重のみゆきの庭の花の下陰

花月百首歌人々によませられける時　後京極攝政前太政大臣

たちよれはみはしの櫻盛なり幾よの春のみゆき成らん

慈鎭和尚

松風にながめし秋は花ゆへにいとふへしともおもはさりしを

寂蓮法師

道しらは風のやとりに關すへて思ふことなく花をみてまし

百首歌の中に　式子内親王

吹風ものとけき御代の春にこそ心と花のちるはみえけれ

深山櫻といふ事を　源俊頼朝臣

風たにもかよはさりける山なれはちらてや花の春を過らん

さくらを　雅成親王

みやこ人分つる山の道とめて是よりおくの花はおらせし

亭子院歌合に　藤原興風

たのまれぬ花の心とおもへはやちらぬさきより鶯のなく

花のもとにて　紀貫之

櫻花おる時にしもなくなるは鶯のねもちりやしぬらん

春の歌とて　俊頼朝臣

心あらは風もや人を恨ましおるはさくらのおしからぬかは

題しらす　藤原清輔朝臣

から國のとらふすのへに匂ふとも花の下にはれてもかへらん

花の御歌の中に　白川院御製

峯つゝきにほふ櫻を我ものと折てやきつる春の日くらし

雲林院の花のもとにて　藤原基俊

人しれすわれやまちつる山さくらみる折にしも散はしむらん

題しらす　柿本人丸

月比へてみれともあかぬ櫻はな風のさそはんことのねたさよ

伊勢

わかために何のあたとて春風のおしむとしれる花を吹らん

千五百番歌合に　前中納言定家

櫻はなうつろふ春をあまたへて身さへふりぬる淺茅生の宿

宇治にて山家花を　大納言經信

白雲のやへたつかたの山さくら散くるときや雪とみゆらん

建保四年内裏十首歌合に　從二位家隆

はつ瀨山うつろはむとや櫻はな色よはりゆく峯のしら雲

僧正行意

をのつからいそしのみゐやくもるらんをれる錦を春の山風

後久我太政大臣

雲のゐる遠山姫の花かつら霞をかけてふくあらし哉

たいしらす　前參議信成

くものゐるとを山櫻咲にけりそれともわかぬなかめせしまに

俊惠法師

待しよりかれて思ひしちることのけふにも花のなりにける哉

百首御歌の中に　順德院御製

ほの〳〵と明行空のさくら花かつ降まさる雪かとそみる

建保四年内裏十首歌合に　後久我太政大臣

山川にはるゆく水はよとめとも風にとまらぬ花のしからみ

建保四年内裏六首歌合に朝落花を
今朝は又くれはとたのむ影もなし櫻にくもる四方の山風
藤原康光
朝な〳〵梢のかせにうつもれて花のかけなき山のゐの水
題しらす　法橋顯昭
是をみよたきのいはまに吹こめて風も花をはちらさゝりけり
百首歌の中に　前内大臣
岩つたふ山のさくらのしきなみに風のかけたる布引の瀧
春の花の心を　後鳥羽院御製
花さそふひら山おろしあらけれは櫻にしふく志賀の浦舟
後法性寺入道前關白家百首の歌に　後徳大寺左大臣
花の春ひら山おろし海ふけは峯より沖によする白波
花のうたとて　俊惠法師
櫻はなちりかふ時はをちこちの峯よりおつるあまの川浪
建保四年仙洞歌合に海邊櫻を　正二位忠方
末の松あたし心の花さくらをのれ浪こす春風そふく
たいしらす　藤原行家朝臣
よしの川瀧のうへなる山さくらいはこす浪の花とちるらし
山花を　津守國平
櫻花ちらすはやかてみよしのゝ山やいとはぬすみかならまし
たいしらす　源重之
吉野山ふもとの櫻ちりぬらしたちものほらて消る白雲
山落花といふことを　正二位忠定
よしのとてうきにも人のすむ山をいつちうかれて花の散らん
はなのちるを見て　壬生忠見
いとゝくもうつろひぬるか櫻花あたなる人もみてこりぬへし

亭子院歌合に　坂上是則
みなそこにしつめる花のかけみれは春は深くも成にける哉
さくらをよめる　大納言經信
春風の吹まふ時はさくら花ちりぬる枝の咲かとそみる
土御門前齋院にて水上落花を　源俊頼朝臣
風ふけはちりぬる花も水の面にうつれる枝にまた咲にけり
たいしらす　紀貫之
ちる時はうしとみれとも忘れつゝ花に心の猶とまるかな
平定文
かせふけは花さくかたへおもひやる心をさへもちらしつる哉
崇徳院御時百首歌たてまつりしとき　皇太后宮大夫俊成
櫻花おもふあまりにちることのうきをは風におほせつる哉
吹風の心とちらす花ならは梢にのこす春もあれかし
題しらす　皇嘉門院別當
花ちらす風をはいとふかせは又たをる人をやつらくみるらん
百首歌たてまつりし時　參議雅經
春風は花ちるへくもふかぬ日にをのれうつろふ山櫻かな
月前落花を　大納言經信
くまもなき月はかりとやなかめまし散くる花の影なかりせは
千五百番歌合に　二條院讃岐
今はとて春の有明にちる花や月にもおしき峯のしら雲
題しらす　藤原信實朝臣
雲よりもよそに成ゆく葛城のたかまの櫻嵐吹らし
平長時
さらてたにうつろひやすき花の色にちるを盛と山風そふく

百首歌奉りし時　　慈鎮和尚
春の山の風やあはれと思ふらんわかるゝ花に年へぬるみを
花のうたに　　前攝政家民部卿
ありてよのはてしうければ花のため心やすくそ風は吹ける
題しらす　　藤原爲繼朝臣
をのつから今年のみちる花とみはいか計なるつらさならまし
伏見にて花を見て　　中務
櫻はなちりかふ空は暮にけりふしみの里にやとやからまし
千五百番歌合に　　宜秋門院丹後
春風にしられぬ花やのこるらん猶雲かゝるをはつせの山
花のうたあまたよみ侍けるに　　藤原季宗朝臣
深山木のしけみかしたの遲櫻思ひよらてや風はすくらん
花のうたとて　　法性寺入道前關白太政大臣
谷かくれ風にしられぬ山櫻いかてか花のつゐにちるらん
洞院攝政家百首歌に　　藻壁門院少將
なにとまたふくはならひの春風を(にイ)人やりならす花のちるらん

雲葉和歌集巻第三

春歌下

家百首歌合に春曙　　後京極攝政太政大臣
みぬよまておもひのこさぬなかめより昔にかすむ春の明ほの
慈鎮和尚
思ひ出はおなしなかめにかへるまて心にのこれ春の曙
名所百首歌人々にめしけるついてに　　順德院御製
芦の屋のなたの鹽やのあまの戸をゝし明方そ春は寂しき

百首御歌の中に
秋風に又こそとはめつの國のいくたの森の春のあけほの
題しらす　　三條院御製
みる人の心すめとや昔より明ほのはかく霞初けん
十首歌合し侍しに朝霞を　　從二位家隆
春夜の朧月よのなこりとや出る朝日も猶かすむらん
名所百首歌奉りしに　　僧正行意
見しまゝに誰なかむらんかつらきやとよらの寺の春の夕暮
題しらす　　山邊赤人
山端に月のいさよふゆふ暮は檜原かうへも霞渡れり
紀貫之
浦ことに咲ちる浪の花みれは海には春もくれぬ成けり
百首歌奉りしとき　　後京極攝政前太政大臣
長閑なる春の光にまつしまやをしまのあまの袖やほすらん
春の歌とて　　素性法師
春深く成行草の淺みとり野原の雨は降にけらしも
寛平御時后宮歌合に　　紀友則
春雨の色はこしともみえなくにのへの緑ないかてそむらん
水無瀬にて當座歌侍けるに春雨　　源家長朝臣
春雨に野澤の水はまさられと萌出る草そ深く成行
後京極攝政家百首歌合に　　寂蓮法師
はるさめは去年みしのへのしるへかは緑にかへる荻の燒原
春雨といふことを　　從二位家隆
きさらきの雲を霞のたちこめて同し衣に春雨そふる
百首歌の中に　　後京極攝政前太政大臣
霞とも雲ともわかぬ(みえイ)夕暮にしられぬほとの春雨そふる

家の五十首歌に行路春雨を　道助法親王

花とみてけふやぬれなん春雨にゆけとかけなき峯のしら雲

百首歌よみ侍しに　藤原光俊朝臣

歸雁わかれを花の比にとはいかなる人にならひしりけん

百首歌を五人によませ侍しとき　後鳥羽院御製

いにしへの人さへつらしかへる雁なと明ほのと契置けん

百首歌たてまつりし時　從二位家隆

かへる雁秋こし數はしられともねさめの空に聲そすくなき

前內大臣家五首歌合に曉歸雁　藤原信實朝臣

あけてみぬたか玉札もいたつらにまたよをこめて歸る雁金

歸雁をよめる　大貳三位

かへる雁我たまつさをことつてんうはの空なる使なりとも

百首歌よみ侍しに　慈鎭和尙

さためなくゆき歸るにもしられ見いつくも同しかりの宿りは

春歌とて　藤原伊嗣朝臣

心かられになきかへり行雁のつらき別をなにしたふらん

題しらす　曾禰好忠

立かへる雁の涙のつもるをや苗代水と春はせくらん

藤原隆祐朝臣

時わかぬ川瀨の浪の花にさへ別てかへる春の雁金

素暹法師

水莖の岡のみなとの浪のうへに數かきすてゝかへる雁かね

源具親朝臣

遠さかる雲井の雁のなこりまてかすめはつらき難波江の月

道助法親王家五十首に遠歸雁を　藤原孝繼

わきてよも跡は霞もふかゝらし雲ゐの雁もとをさかるらん

千五百番歌合に　小侍從

おもへとも聲はたてしと忍ふるをうらやましくもよふこ鳥哉

皇太后宮大夫俊成

猶さそへ位の山のよふことり昔の跡のたえぬほとをは

五十首御歌の中に　土御門院御製

咲ぬとも誰かはしらん春かすみたな引かたに山なしの花

前內大臣家五首歌に　藤原知資

みつ鹽に片枝は浪の花なれや入ぬる磯のおふの浦梨

題しらす　源俊頼朝臣

風ふけは浪をりかけてかへりけり岸にはうへし山吹の花

前攝政左大臣家百首歌に岸款冬を　民部卿爲家

早瀨川波のかけこす岩きしにこほれて咲る山吹の花

春のくれに　壬生忠見

折てたに行へき物をよそにのみみてやかへらん井手の山吹

春歌とて　中務

やまふきの花の盛はかはつなく井手にや春の立とまるらん

題しらす　崇德院御製

春くれは岸の山吹のこらしをたのむかけとて蛙なく也

五百首御歌の中に　後鳥羽院御製

春雨にぬれつゝおらん蛙なくみつのをかはの山吹の花

百首御歌の中に　順德院御製

川のせに秋をやのこすもみち葉の薄き色なる山吹の花

すみれをよめる　待賢門院堀川

行やらて心のとまる春のゝにしはしすみれの花やつまゝし

題しらす　山邊赤人

春のゝに菫つみにとこし我そ野をなつかしみ一夜ねにける

源重之

光なき谷にも春のいはつゝしいかて入日の色に咲らん

かきつはたを　土御門院御製

春風の池吹あらふ波のうへにをのれかけそふかきつはた哉

藤原清輔朝臣

こやの池の汀にたてるかきつはた波のおれはやまはらなる覽

波のうへに藤のさきかゝれるをみてよめる　紀貫之

水の上に咲たる藤を風ふけは浪の上にも波そたちける

百首歌人々にめされける時　崇徳院御製

田子の浦の岩ねにかゝる藤浪はみちくる汐に聲をからなん

藤花といふことを　俊惠法師

木すゑより越て落くるふち浪のゐせきに松のしつ枝成けり

百首歌たてまつりしとき　西園寺入道前太政大臣

紫の藤さく山の峯の松つれなくみえし色そうつろふ

ふちの花を　菅贈太政大臣

紫のいとよりかけてさく藤の匂ひに人や立とまるらん

源道濟

山高み松にかゝれるふちの花空よりおつる浪かとそみる

右大將定國卿四十賀の屏風に　壬生忠峯

にこりなき清瀧川のきよけれは底よりせくとみゆる藤浪

題しらす　山邊赤人

春日のゝふちはちりゆく何をかはみかりの人は折てかさゝん

千五百番歌合に　慈鎭和尚

立かへりみれともあかぬ藤浪は過る心にかゝるなりけり

按察使兼宗

時鳥きなかんことをおもはすは暮行春にいかてたへまし

たいしらす　藤原茂孝

行春をおしみかてらに鶯のなくこのしたをみれは露けし

清原元輔

ゆく春をおしむにとまる物ならは何かはものを人の思はん

在原元方

老ぬれは春のくるゝもおしき哉いそく日かすも命ならすや

亭子院歌合に　紀貫之

おしめ共とまりもあへす行春をなこその山のせきもとめなん

百首歌の中に　光明峯寺入道前攝政左大臣

春くるゝ行衛はいつくしらすとも空に霞の關もすへなん

百首歌たてまつりし時暮春を　正三位顯氏

くれぬとも春のなこりを忍へとや彌生のくれは花のちるらん

題しらす　藤原經平朝臣

過て行春の跡をも見せしとややよひのくれは花の散らん

寛喜二年の冬のころ春の雪氣につきて草庵を歴覽すへきよし定家卿申をくりて後その春もむなしく暮にけれは落花にくしてつかはしける　權大納言敎家

たのめをきし此春も又いたつらに暮ぬる花の庭の白雪

百首歌人々にめしける時　後鳥羽院御製

おしみこしおなしなこりのゆかりとて花の道より春や行らん

慈鎭和尚

何ゆへに春の別はおしきそと問へき花のちりにける哉

後京極攝政家百首歌合に殘春

山端ににほひし花の雪消て春の日數は有明の月

春の歌とて　權中納言通俊

日數ある春こそくれめ奥山に花さへいかにのこらさるらん

百首歌たてまつりし時　前大納言忠良
行春の霞の衣かへしては散にし花そ夢にみゆへき
暮春歌に　慈鎮和尚
紅に霞の袖も成にけり春の別の暮方の空
千五百番歌合に　後京極前攝政太政大臣
手にむすふ石井の水のあかてのみ春に別るゝしかの山越
前内大臣家卅首歌に江上暮春　前中納言定家
ほりえこく霞のをふれ行なやみおなし春をもしたふ比かな
従二位家隆
あしかもの跡もさはかぬ水の江に猶すみかたく春の行らん
權律師公猷
難波江の霞にしつむみをつくし暮ゆく春の跡たにもなし
春二日のこるといふことを　従三位頼政
おしめとも今宵も更ぬ行春をあすはかりとやあすはおしまん
堀川院百首歌の中に　權中納言國信
淺ましや日數ゆくともおもほえて春の今宵に成にけるかな
亭子院歌合に　紀貫之
花みつゝ惜むかひなくけふ暮てほかの春とやあすはなりなん

雲葉和歌集巻第四

夏部

早夏の心を　院御製
あら玉の年をかされてかへつれと猶ひとへなる夏衣かな
百首歌奉りし時　後京極攝政前太政大臣
夏きぬといふはかりにや足引の山も霞の衣かふらむ
前攝政左大臣家百首歌に旅早夏　民部卿爲家
旅衣おりしも花を立かへてけふはかとりのうらにきにけり
題しらす　前内大臣家
別ての後しのへとや行春の日數に花の咲あまるらん
赤染右衛門
をそさくらにつけて人のもとへつかはしける
山かくれ人は尋す櫻はな春さへ過ぬ誰にみせまし
藤原清輔朝臣
早夏歌とて
惜むとも暮なん春をいかゝせむ山時鳥はやもなかなん
四月に鶯をきゝて　道命法師
春過てなく鶯の聲きけはいとゝもつらき時鳥かな
村上御時歌合に　平兼盛
嵐のみさむきみ山のうの花は消ぬ雪かとあやまたれつゝ
住吉社へ百首歌奉納時　藤原光俊
卯花のしろくさけるにことゝはん抑そこか玉川の里
夕〔春イ〕見卯花といふことを　皇太后宮大夫俊成
柴舟のかへるみたにの追風に波よせまさる岸の卯花
崇徳院御時の百首歌に　壬生忠峯
千早振かものみあれの葵艸かさすけふにも成にける哉
題しらす　後徳大寺左大臣
時鳥なのか初音を心からなかてや人に恨らるらん
家百首歌よみ侍けるに　従三位頼政
我はまた夢にもきかす時鳥待えぬほとはぬるよなけれは
待郭公のこゝろを　祝部成茂
郭公聞つとかたる人をさへ又もやくるとまたぬ日そなき
五十首歌に

乙女子か袖ふる山の夕暮につれなく過るほとゝきすかな　祝部成賢

郭公歌とて

時鳥まつとせしまに更にけりれぬよのとこの山端の月　源俊頼朝臣

音羽の山のほとゝきすを

郭公なとはの山に啼つとは先あふ坂の人にかたらん　辨典侍

永承四年祐子内親王家歌合

いつしかとまちつるよりも時鳥聞にそいとゝしつ心なき　大納言經信

題しらす

夕されは雲路すくなる郭公よはにやなかんみ山への里　山邊赤人

宵のまも覺束なきを時鳥啼なる聲のほとのはるけき　道信朝臣

ある所の歌合に人々にかはりて

小夜更てねさめにきけは時鳥鳴成こゑやいつくなる覽　舜身法師

題しらす

またきかぬ人の爲には郭公幾度なくも初音なりけり　洞院攝政左大臣

家に百首歌よみ侍しに

鶯のふるすの竹の時鳥よをかそへてやさつきなくらん　西行法師

題しらす

時鳥いかなるゆへの契にてかゝる聲ある鳥となりけん　土御門院小宰相

十首歌合に待郭公といふことを

里わかすなけや五月の時鳥忍ひし比は恨やはせし　源中業

曉待郭公といふことを

八聲まてまたれぬ鳥は鳴ぬれとつれなかりける郭公かな　後鳥羽院御製

十首歌合侍しに

時鳥いつちいく田の森ならん聲のなこりを雲にのこして　順德院御製

十首歌合侍りけるに曉郭公

曉とおもはてしもや時鳥また中空の月に啼らん　前攝政左大臣

題しらす

今こんとたのめやはせし時鳥有明の月になにまたるらん　慈鎭和尙

百首歌の中に

時鳥なく一聲の夜半なれは秋にはよひの有明の月　院御製

聞郭公といふことを

一聲のなこりそとまる時鳥是やせきやのしるし成らん　民部卿爲家

道助法親王家十首歌に夕郭公

とまらしな雪路こえゆく郭公くるゝ籬は山とみゆとも　後鳥羽院御製

北野宮へ百首御歌奉納侍しに

尋入かへさはをくれ郭公たかためをくる山路とかしる　僧正行意

同宮に三首歌合せしに羇旅郭公

是まてそ鳥のねもする時鳥あすは麓のよそのしら雲　鎌倉右大臣

題しらす

五月やみ神なひ山の郭公妻こひすらしなくれかなしき　藤原秀茂

水邊野草をよめる

しけり行したに清水は埋れて先手にむすふ野への夏草　前大納言伊平

承久元年內裏歌合に水邊草

汲てしる人やなからん夏草のしけみにしつむゐての玉水　從二位家隆

木綿葉川夏行涙のいはこすけぬきもさためぬ玉そ亂るゝ　前太政大臣

建保四年內裏十首歌合に

村雨に秋の露かる玉さゝの短き夜半はあか月もなし　卜部兼直

あやめを

千世ふへき宿のさき草かき分てみつはよつはに菖蒲かな　藤原道信朝臣

題しらす

さなへとる袖は猶こそしほるらめ朝日の山のふもとなれとも

家百首歌に　洞院攝政左大臣

卯花のかきねにかくろ白妙の衣手ほさぬ五月雨の空

後法性寺入道前關白家百首歌に　皇太后宮大夫俊成

いかなれは雲まもみえぬ五月雨にさらしそふ覧布引の瀧

五月雨は水底のはし名におひて涙こそ渡れ人はまよはす

題しらす　西行法師

さみたれは原のゝ澤に水越ていつら三川の沼の八はし

旅五月雨を　賀茂種平

さみたれの晴間をまてはそのつから我も日をふる旅の空哉

五月雨のこゝろを　修理大夫顯季

五月雨に淺かの沼の花かつみ底の玉藻となりやしぬらん

大貳三位

さみたれの隙なき比はいせの海士の藻鹽の烟絶やしぬらん

藤原清輔朝臣

たこの浦のもしほもやかぬ五月雨に絶ぬはふしの煙成覧

賀茂政平

たこの浦のあまのたく繩くりかへしほさて長ひく五月雨の比

藤原隆祐朝臣

かきくらす芦屋の里の五月雨にこのほとやかぬ汐そみちける

建保四年内裏十首歌合に　前大納言經通

夏刈の芦ふきわふる難波めのさみたれなから過る比哉

百首御歌の中に　土御門院御製

あやめおふる沼のいはかきかき曇さもさみたるゝ昨日けふ哉

題しらす　西行法師

橘のさかりしれかし時鳥ちりなん後に聲はかるとも

雨中盧橘といふことを　よみ人しらす

ぬれ〳〵もはなたち花のにほふ哉昔の人や雨となりけん

守覺法親王家五十首歌に　皇太后宮大夫俊成

匂ひくる花立はなの袖の香に涙露けきうたゝねの夢

五十首御歌の中に　後鳥羽院御製

たか香にかはなたち花の匂ふらん昔の人は獨ならねは

夏歌とて　鷹司院師

よそへても誰となけれと橘の哀なるかやむかしなるらん

西行法師

よもすからさして人まつ槇の戸をなそしもたゝく水鷄なる覧

夕立過山といふことを　藤原光俊朝臣

ゆふ立の空吹おくる山風にうかれてかゝる峯の白雲

題しらす　前太政大臣

風さはくしのたの杜の夕立に雨をのこして晴る村雲

前中納言定家

片糸をよる〳〵峯にともす火のあはすは鹿の身をもかへしを

處々照射のこゝろを　従二位忠行

ともしせぬ山こそなけれ誰もしかめをあはせてやよを明す覧

ともし火のこゝろを　權僧正永縁

鹿のたつ小倉の山にいる人や火をともしとやいひはしめけん

百首歌人々にめしける　崇徳院御製

五月闇ゆするふり立ともす火に鹿やはかなくめをあはすらん

百首御歌の中に　順徳院御製

ともしする高圓山のしかすかにをのれなかくも夏はしるらん

夏歌とて　民部卿爲家

月ならて夜河にさせる篝火もおなし桂の光とそみる

大井川にうかふかゝりを見て　道命法師
久かたの月のかつらの近けれは星とそみゆる瀬々の篝火
前内大臣家五首歌に夏川雨を　祝部成茂
鵜飼舟月をまつとはなけれともかゝりにいとふよはの村雨
たいしらす　本院侍従
川風にかゝりも消て鵜かひ舟此世なからや闇を渡らん
百首歌よみ侍しに　寂蓮法師
すまの浦のあまのたくもの蚊遣火やゝかて鹽燒便成らん
四季百首歌よみ侍しに　前中納言定家
此ころの南の風にうきみるのよるそ涼しき芦のやの里
百首歌たてまつりし時　式子内親王
此ころを夏の日數の半とは清水にうとき人やいふらん
草木ゆるかすいみしうあつかりけるころ　花山院御製
露はかり木のは動かぬ夕くれにゆるきの杜はいかゝあるらん
永室のこゝろを　土御門院御製
くろとあくと解んこもなき永室山いつか流れし谷川の水
堀川院御時の百首歌に　權中納言師時
またしらし氷消せぬ氷室山夏てふことを年に有とは　河内
澤水にゐれとも消ぬ螢かないかはかりなるおもひ成らん
夏歌とて　曾根好忠
夕やみに海士のいさり火見えつるは籬の嶋の螢なりけり
河螢といふ事を　權大僧都實伊
螢とふ岸のこかけや天河ほしの林の名にはたつらん
五十首歌奉りし時　寂蓮法師
終夜草の原やく夏むしのもえても人の袖ぬらすらん
螢歌とて　明教法師
ほに出ぬ尾花かもとの草のなをあらはにみせて飛螢哉
百首歌たてまつりし時　小侍従
咲にけり遠かた人にことゝひてなを知そめし夕顔の花
題しらす　菅贈太政大臣
撫子の薄くもこくも日暮れはみん人わきて思ひさためよ
故籬瞿麥を　正三位季經
常夏の花しさかすは跡もなきまかきのほとをいかてしらまし
家百首歌合に　後京極攝政前太政大臣
鳴蟬の羽におく露に秋かけてこかけ涼しき夕暮の聲
たいしらす　俊恵法師
山彦もこたへそあへぬ夕附日さすやをかへの蟬の諸聲
樹陰似秋といふことを　前中納言匡房
夏山の木下風の涼しさに思ひたかへて鹿や啼らん
題しらす　寂蓮法師
なかむれは月は秋なる浪の上にまたほに出ぬいせの濱荻
月前逐涼といふ事を　源俊賴朝臣
しはつ山ならの若葉にもる月の影さゆるまてよは更ぬらし
百首歌人々によませられし時　院御製
夏のよも影そ涼しき久方の月のいつくに秋やとるらん
松下納涼を　前中納言經光
こぬ秋を思ひそわかぬ涼しさはいつも常磐の松の下風
後京極攝政家に詩歌合侍けるに水邊涼自秋と
いふことを　大藏卿有家
こぬ秋のいつ暮はてゝ薄氷むすふはかりの山の井の水

題しらす　寂蓮法師
山陰やいはもる水のいつはりを秋きにけりと思ひなす哉
いつみのあたりにて　二條大皇太后宮大貳
夏の日もむすふいつみの涼しきは人にしられて秋やきぬらん
五社百首歌の中に　皇太后宮大夫俊成
夏の日をいとひてきつる奥山に秋も過たる松の風かな
百首歌の中に　式子内親王
月の色も秋近しとやさよ更て籬の荻のおとろかすらん
後京極攝政前太政大臣
けふまては色に出しとしのすゝき末葉の露に秋はあれとも
建仁元年影供の時草野秋近といふことを
宮城のゝ露をよすかに立鹿はをのれなかてや花をまつらん
建保四年内裏十首歌合に　前大納言經通
たかみそき白ゆふ涙の立田川曉かけてかよふ秋風
題しらす　藤原爲繼朝臣
大かたの夏もかきりの夕すゝみやかてや風のかはりはてなん
安　藝
流れくる音そ涼しき水上の天のかはらに秋やたつらん
六月祓のこゝろを　祝部成茂
立かへり神よの松の陰にしてけふの御祓はしかのから崎
百首御歌の中に　後鳥羽院御製
みそき川行かふ空やふけぬらん露なからおる麻の一ふさ
土御門院御製
みそきする袖にふるゝ大ぬさのひくてあまたになひく川風

雲葉和歌集巻第五

秋歌上

初秋のこゝろを　大納言經信
おほとものみつの濱松神さひて昔なからの秋の初かせ
百首歌奉りし時　後京極攝政前太政大臣
亂芦のほむけの風の片よりに秋をそよするまのゝ浦浪
五百首御歌の中に　後鳥羽院御製
昨日まて忍ふの浦の秋の風けふ顯て涙をよすなり
千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成
汐路より秋や立らん明かたは聲かはる也すまの浦風
水無瀨にて秋十首歌つかふまつりしに　前中納言定家
藻鹽燒あまのとまやのしろへかはうらみてそ吹秋の初かせ
百首歌の中に　後京極攝政前太政大臣
袖にちる荻の上葉の朝露に涙ならはす秋の初風
慈鎭和尚
涙よりかつ〳〵袖に露ちりてまちしか人の秋の初かせ
穐たつこゝろを　院御製
たか袖に秋まつほとはつゝみけんけさはこほるゝ露の白玉
百首御歌に　順德院御製
限あれは昨日にまさる露もなし軒の忍ふの秋の初風
千五百番歌合　宮内卿
軒近き松の梢に音つれて袖にしられぬ秋の初かせ
後鳥羽院御製
龍田姫風のしるへも聲たてつ秋やきぬらんをかのへの松

北野宮へ百首御歌奉納侍しに
秋風や汐瀬の涙に立ぬらん芦のはそよく夕暮の空
五十首歌たてまつりし時　前大納言忠良
けさのまに心をいかにつくせとや殘りおほかる秋の初かせ
千五百番歌合に　嘉陽門院越前
かゝれはや野山の色もかはるらん身にしみそむる秋の初かせ
題しらす　よみ人しらす
天川水かけ草の秋かせになひくをみれは時はきぬらし
七夕のこゝろをよみ侍ける　前關白左大臣
たなはたの淺せふむまに天河まちうるよはも更やしぬらん
祝部成仲
織女の逢夜すくなきなけきをは絶ぬ契にかへてける哉
百首御歌中に　土御門院御製
いせの海深き契の秋ならはこよひかけみん星合の濱
七夕歌よみ侍しに　洞院攝政左大臣
天の原空なる川の渡守秋にはあらすみふれよせなん
五十首歌奉りし時に　嘉陽門院越前
拂ふらん枕そみゆる夕まくれ雲の塵なき星合の空
千五百番歌合に　前大納言忠良
竹の葉にあさ引糸や織女の一よのふしのみたれなるらん
題不知　圓嘉法師
織女も秋なき時やあはさらん契そ長き一よなれとも
堀川右大臣
たなはたのならす扇は有けりと雲にみえたる天の川風
七夕のこゝろを　平重時朝臣
天のかはいかなる水の流にて年に一たひ袖ぬらすらん

北野宮歌合に初秋曉を　慈鎭和尚
織女よいなはの露にせきくたせあかてもわたる天の川水
題しらす　源俊頼朝臣
たなはたのかへる袂の雫には天の川浪たちやそふらん
西行法師
たなはたのけさの別の涙をはしほりやかぬる天のは衣
康資王母
逢とてもなれすやあらん織女のまとをにきたる天の羽衣
八日のあしたひはとのにて七夕の
わかれのこゝろを　藤原義孝
いつしかと待くらしけんたなはたのけさは昨日や戀しかる覽
建保三年内裏秋十首歌合に秋雨　大藏卿有家
日くらしのなく夕暮の浮雲の村雨そゝくもりの下露
秋歌に　鎌倉右大臣
今よりは涼しくなりぬ日くらしのなく山陰の秋の夕風
たいしらす　柿本人丸
春されは霞かくれにみえさりし秋はきさけり折てかさゝん
野花隱路といふことを　大納言經信
白露にたへす秋はき折ふして鹿あるをのゝ道たにもなし
題しらす　壬生忠峯
秋萩のしたにかくれて啼鹿の涙や花の色をそむらん
光明峯寺入道前攝政家宰相
立かへり野原の鹿の跡みえて心すこくもゆく嵐かな
たいしらす　柿本人丸
手にとれは袖さへ匂ふ女郎花この下露にちらまくもおし
嵯峨野の花見にまかりて　清愼公

歸りなは恨もそする女郎花こよひはのへにいさとまりなん

秋歌とて　左京大夫顯輔

しめゆひしかひこそなけれ女郎花心もしらぬ風になびけは

女郎花を　中務卿具平親王

夕霧にほのかにみゆるをみなへし我より先に露やむすはん

たいしらす　尊快法親王

秋の田のくろに生たる女郎花いほもる人や種をまきけん

藤原基綱

をみなへしよかれすむすふ白露のちるやあしたの別なる覽

清原深養父

花すゝき風になびきて亂るゝは結びをきてし露やとく覽

上西門院兵衛

立とまる人はかたのゝ花すゝきなにとほにいてゝ招く成らん

殷富門院大輔

とふ人も分こぬ庭のはな薄まねくはいつのならひ成覽

岡苅萱といふことを　藤原家頼

かち人のゆきゝの岡のかるかやはおれふすかたや道となる覽

百首御歌の中に　土御門院御製

露のぬきあたになるてふ蘭秋風またて誰にかさまし

太神宮へ百首歌奉りしに　慈鎭和尚

昔すみし人の涙や露ならんよをうち山の秋の花園

秋のはらのはなをみて　伊勢

咲花をみれともあかぬ秋のゝはゆきもやられすとまる共なし

秋のはなをとりあつめて人のたてまつりて今日まいらんと申なからをそくみえけれは　中務卿具平親王

千種なる花のにしきを秋くれは見る人いかに立うかるらん

野花を　紀貫之

置露や花のえことに染分て秋のゝへをは人にみすらん

秋の鴈のこゝろを　藤原資隆朝臣

物おもふ心のかよふ雲井にはけさ初鴈もねをのみそなく

題しらす　曾根好忠

くる鴈の夜半のはつ音に驚て野への露ともおきゐぬる哉

柿本人丸

行かよふ雲ゐは道もなきものをいかてか鴈のまとはさる覽

秋歌とて　紀貫之

初鴈の聲につけてや久方の空の秋をも人のしるらん

千五百番歌合に　後京極攝政前太政大臣

とこよにていつれの秋か月はみし都忘ぬ初鴈の聲

百首歌人々にめしけるに　後鳥羽院御製

初鴈の鳥羽田のくれの秋風にをのれとうすき山端の雲

百首歌中に　和泉式部

かり金のきこゆるなへに見わたせは四方の梢は色付にけり

五十首うたたてまつりしに　寂蓮法師

鳴わたる雲ゐの鴈も心せよこぬ人たのむ秋風の比

萩露といふ事を　源家清

をく露は秋のならひの萩かえにあまるや鴈の涙成らん

秋十首歌奉りし時

啼渡る鴈の涙をこきませて本あらの萩に秋風そふく

題しらす　曾禰好忠

打むれてとわたる鴈の羽風にはさはきそすらん天の川波

名所歌奉りしに　源具親朝臣

かりかねも雲のとたえや恨らん濱名の橋の霧の夕暮

鴈の歌とて　藤原爲賴朝臣
秋霧の空になくなる初鴈は霞し春や思ひ出らん
秋のうたとて　鎌倉右大臣
鴈金は友まとはせりしからきの槇の杣山霧たゝるらし
暮山鴈といふことを　院御製
玉章はよみもとかれし墨染の夕の山をこゆるかりかれ
あきのうたとて　藤原光俊朝臣
秋萩の花咲ぬともつけなくにいかてか鹿の鳴はしむらん
たいしらす　和泉式部
さをしかの朝たちすたく萩枝に心のしめはゆふかひもなし
鹿をよめる　小辨
棹鹿の妻戀まさる聲す也まのゝ萩原盛すくらし
西行法師
かれてより心もいとゝすみのほる月待峯のさをしかの聲
あきのうたとて　祝部忠成
こりす猶小鹿啼なりつれもなき妻と知ても年のへぬらん
四條太皇大后宮歌合に　源俊賴朝臣
此ころはみふれの山に立鹿の聲をほにあけてなかぬ日そなき
題しらす　よみ人しらす
夕されはをくらの山に啼鹿の今宵はなかすいれにけらしも
十首歌合侍しに夜鹿を　土御門院小宰相
つれもなき妻をやたのむ秋風の身に寒きよは鹿も鳴也
海邊鹿といふことを　後鳥羽院御製
淡路嶋時雨の下に行舟をしかの音なからをくる山風
従二位家隆
梶をたえ浦こく舟の山おろしに又うみわたるさをしかの聲

旅宿のしかを　源俊賴朝臣
けふ爰に草の枕をむすはすは誰とか鹿の妻をこはまし
たいしらす　安嘉門院甲斐
さをしかのなく音もちかし向ひなる岡への草に妻やこもれる
四條太皇大后宮の歌合に鹿を　康資王母
色に出て秋しも鹿の啼なるは花の折とや今はたのめし
建保四年内裏にて六首うたあはせ侍りけるに
朝野鹿　従二位範宗
朝露のをきもとまらて行鹿の入野の薄秋風そ吹
題しらす　權大納言通成
秋深く成行まゝにさをしかの入野の原もうら枯にけり
百首歌人々にめされし時　後鳥羽院御製
露にふすのへの千種の明ほのにおきぬれてなく棹鹿の聲
建保三年内裏歌合に　藤原信實朝臣
秋の野のおはなにましる鹿の音は色にや妻を戀わたるらん
百首歌たてまつりしに　藤原隆信朝臣
心なきのへのをしかのいかにして秋の哀を聲にたつらん
題しらす　刑部卿賴輔
誰よりも秋の哀やまさるらん聲にたてゝは鹿そ鳴なる
藤原清輔朝臣
思ふこと殘らぬものは鹿の音を聞あかしつる覺也けり
百首歌よみ侍りしに　光明峯寺入道前攝政左大臣
春日野に羣行鹿の聲きけは我も涙の落にける哉
住吉社百首歌奉るとて　鷹司院師
うかりけるたかならはしに秋草の移ふ比は鹿の鳴らん
十首歌あはせ侍しに　順德院御製

宮城のゝしからむ萩や散ぬらんあらはれて鳴棹鹿の聲

嘉陽門院越前

常磐なる山路は秋の外かとてなかむる暮もさなしかのこゑ

建暦二年内裏詩歌合に水郷秋夕　後久我太政大臣

水無瀬山夕かけ草の下露や秋行鹿の涙なるらむ

十首歌合侍しに暮山鹿　院御製

暮ゆけとは山しけ山さはりおほみあはてや鹿の妻を戀覧

右兵衛〔督〕教定

夕暮の山の高ねになく鹿も天つ空にや妻をこふらん

題しらす　前中納言雅兼

秋ふかみ猪まつ峯の鐘の音に聲打そへて小鹿鳴也

深夜鹿といふことを　源兼隆

山里は心のすみてねぬまゝに夜更て鹿の聲そさひしき

十首歌合侍しに夜鹿　従二位家隆

天の河秋の一夜の契たにかたのゝ鹿の音をや鳴らん

前攝政左大臣家百首歌に田家鹿を　右近中將經家

かり庵や露しく小田のいなむしろ鹿もふしみの山や寒けき

たいしらす　空仁法師

晴やらぬ遠山もとの夕霧を我おもひとや鹿もなくらん

建長二年仙洞詩歌合侍しに山中秋興を　土御門院小宰相

しらま弓入さの山の夕霧に立かくれてや鹿のなくらん

たいしらす　壬生忠峯

あら玉の年こそかはれ秋ことに昔の霧そ今もたつらん

前内大臣家十首歌に秋瀧霧　正三位知家

秋山の霧よりうへの瀧津瀬はおつとはみえて音そ聞ゆる

従三位行能

みなかみの雲のはたては霧こめて秋はみしかき布引の瀧

百首歌の中に　後京極攝政前太政大臣

山風やなかめくらせる霧の中をまきのはわきてとふ嵐かな

家五十首歌侍けるに河霧　道助法親王

橋姫のまつよの月も手枕にきりたちこむる宇治の川浪

參議雅經

つれもなきまきのをやまはかけ絕て霧にあらそふうちの河浪

崇德院臨時百首の歌めしけるに　藤原清輔朝臣

霧のまにあかしのせとに入にけり浦の松風音にしるしも

百首御歌の中に　土御門院御製

秋きりの立くれことにつまかくすやのゝ神山みらくすくなし

千五百番歌合　後京極攝政前太政大臣

かち人の道をそおもふ山科のこはたの里の秋の夕霧

二條院讃岐

人は皆心の外の秋なれや我袖はかりをけるしら露

十首歌合侍しに秋夕露　順德院御製

さゝかにの手ひきの糸もたゆむらん草の露吹秋の夕暮

前大納言伊平

眞葛原うらおもしろく亂つゝ風のまゝなる秋の夕露

秋歌とて　民部卿爲家

しほれつるよのまの露のひるまたに草葉やすめぬ秋の村雨

百首御歌の中に　順德院御製

ふしわふる籬の竹の長き夜も猶數あまる穐のしら露

秋歌の中に　前關白左大臣

いつとても同し草葉の露そかし〔いかてか秋は置まさるらん〕

雲葉和歌集巻第六

秋歌中 月部

月の歌の中に　西行法師
秋になれは雲ゐの影のさかゆるは月のかつらに枝やさすらん

月まつ心を　従三位頼政
出ぬまの山のあなたへ思ひこす心やさきに月をみるらん

百首歌たてまつりし時　後久我太政大臣
山里の峯のまさきの夕時雨拂ふ嵐にいつる月影

従二位家隆
穐風に山のは渡るむら雨をことそともなく出る月影

名所の歌よみ侍しに
春日山朝ゐる雲のあとしなく暮れはすめる秋夜の月

長元八年關白家歌合に　能因法師
月かけのよるともみえす照す哉淺かの山を出やしぬらん

百首歌たてまつりしに山月　藤原光俊朝臣
天の河ゐせきの山のたかねより月のみふれの影そさしこす

家五十首歌よみ侍しに山家月　道助法親王
山里は軒端のをかのたかけれは松のはなから月そ更行

題しらす　中原師員
待ほとは山のあなたに更ぬれと出ても長き秋夜の月

月の歌に　堀川右大臣
夕暮の空もさやかに澄わたる月の爲にや秋もきぬらん

秋の山さとにて　小野小町
山さとの荒たるやとをてらしつゝ幾代へぬらん秋の月影

西行法師
獨ふすいほりに月のすみこすはなにか山への友とならまし

穐歌とて　小辨
諸共にすむ月かけのなかりせは山さといかにさひしからまし

題しらす　花園左大臣家小大進
山深く住ける苔の袖にさへ涙ありけにやとる月かな

平定文
雨はるゝ曉かふせやの板間より月そもりきて袖ぬらしける

鎌倉右大臣
苔のいほに獨なかめて年もへぬ友なき山の秋夜の月

尊快法親王
とふ人もあらし吹そふ深山へに木葉分くる秋のよの月

百首歌人々にめしけるとき　崇德院御製
月清みゆるきの森にゐる鷺のたゝすはよそにいかてわかまし

月のよおきゐて　道命法師
常よりも今宵の月のさやけきは鴈の羽かせに雲や晴らん

題しらす　柿本人丸
山端は清くみゆれと天津空たゝよふ雲の月やかくさん

老のゝち月のしくるゝ夜を見て　良暹法師
晴ゆけは光そまさる秋の月しはし時雨るほとはうけれと

崇德院御時の百首歌に　左京大夫顯輔
天津風雲吹はらふ秋のよは月より外のくまなかりけり

洞院攝政家百首歌に　前内大臣
宮城のゝ木の下露は雨なれと空行月は雲もかゝらす

家に花月百首歌人々によませ侍し　後京極攝政前太政大臣
さらぬたに更るはおしき秋のよの月より西に殘る白雲

山月といふことを　雅成親王
空晴て月すみのほる遠山の麓よこきるよはの白雲
建保三年内裏歌合に　正二位忠定
澄のほる月は高まの山陰に秋のよそなる峯の白雲
修行し侍し時月をみて　僧正行意
今宵われよしのゝたけの高ねにて雲も及はぬ月をみる哉
承久二年八月十五夜内裏にて三首歌講せられし時日比の雨のなこりくれかゝるほとより引かへ月はこよひとすみわたれる空のけしきにかなひてことはの露も光ことにもてなされきこえ侍しも思ひ出られて　従二位家隆
恨つる日比なかめの雲晴て月はこよひと秋風そふく
土御門右大臣家歌合秋月を　侍従乳母
長閑にもみゆる空かな雲晴れて入ことをそき秋夜の月
家に歌合し侍し時　平定文
雲ゐよりてりやまさると水清み底にてもみん秋夜の月
洞院攝政家百首うたに　光明峯寺入道前攝政左大臣
月かけのやとりてみかく玉水のたきつ都に秋風そふく
水上月といふ心を　小辨
うつしとる水なかりせは久かたの月を一夜にふたつみましや
俊綱朝臣ふしみにて水上月といふことを講しけるにいやしきともからの中よりよみていたしたりける
水や空そらや水ともみえわかすかよひてすめる秋夜の月
鳥羽皇居にて池上月を　京極前關白太政大臣
大空も池のおもても雲なく今宵はみちてすめる月哉
大將に侍ける時庭月といふことを内々人々よみ侍けるに　菩提院入道前關白太政大臣
宿わかぬ秋のなかめをさひしとはこよひの月に思しるかな
百首歌たてまつりし時　太宰大貳重家
みるたひにさもめつらしき光哉月やよことに出かはるらん
法性寺入道前關白家にて　源俊頼朝臣
おほつかないかなる昔さえ初てこよひの月の名を殘しけん
穐のうたの中に　權律師隆寛
老らくもともに更ぬと西へ行心ありとや幾萬代に
題しらす　院御製
神代より幾萬よに成ぬらんおもへは久し秋のよの月
月の歌よみける中に　西行法師
まことゝも誰かおもはん獨みて後に今宵の月をかたらは
秋の月物おもふ人の爲とてや影にあはれを添て出らん
人の家に女とものゐて月見ける所にて　惠慶法師
我宿の物とたにみは秋の夜の月よゝしとも人に告まし
花月百首歌よみ侍しに　慈鎭和尚
誰となく心に人のまたるゝやなかむる月の誘ふ成らん
秋庭月を　順德院御製
心あらは衛士の燒火もたゆむらんこよひそ秋の月はみるへき
百首御歌の中に
秋山のよもの草木やしほるらん月は色そふ嵐なれとも
後京極攝家詩歌合に月明風又冷　家隆
月清み有明の霜の荻のはに白きをみれは嵐成けり
おなし家十首歌合に山月　寂蓮法師

月といへはをはすて山の秋の空なかむる宿はさらしなの里

道助法親王家五十首歌に野徑月　中納言定家

むさしのは露をくほとの遠けれは月を衣にきぬ人そなき

武藏野は行末近く成にけり今宵そみつる山端の月

百首歌たてまつりし時野月を　藤原隆祐朝臣

かるもかくゐなの丶原のかり枕さてもねられぬ月をみるかな

前内大臣家五首歌に野宿月　中納言定家

夕露のいほりは月をあるしにてやとりをくるゝのへの旅人

從二位家隆

秋かせに野原のすゝき折敷ていほ有かほに月をみる哉

前中納言賴資

月すまは幾よもこゝにかり枕のへより西は山端もなし

崇德院御時百首歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

露しけき花のえことにやとりけり野原や月のすみか成らん

五十首歌たてまつりし時月前荻風　宮内卿

白玉か何そと月に人とはゝ露とこたへよ荻の上かせ

秋萩の露に月のやとれるをみて　源俊賴朝臣

秋萩の下葉に月のやとらすはあけてや露の數をしらまし

五十首歌たてまつりし時旅泊月　皇太后宮大夫俊成

袖のうへにぬるゝかほなる光かな月こそ旅の心しりけれ

中納言兼輔卿家屛風に　紀貫之

降しける雪かとみゆる月なれと濡て冴たる袖やなからん

月前竹風をよめる　宮内卿

色かへぬ竹の葉白く月さえて積らぬ雪を拂ふ秋風

賀茂社歌合に　左近中將公衡

露しけき籬の竹に風ふけはちる玉ことにやとる月影

白川院にて關路月を　左京大夫顯輔

逢坂の關に清水のなかりせはいかてか月の影をとめまし

前攝政左大臣家百首歌に關月　中納言

しろしらすよる相坂の關越て行もかへるも月はみゆらん

關月といふ心を　院御製

曇なく月もれとてや川口のせきのあらかきまとをなる覽

名所の百首歌奉りし時　僧正行意

さすらふる心に身をもまかせすは清見か關の月をみましや

光明峯寺入道前攝政家歌合に名所月　後堀川院民部卿典侍

きよみかた月の空には關もゐすいたつらにたつ秋の浦浪

百首歌の中に　後京極攝政前太政大臣

清見潟波の千里に雲消ていはしく袖によする月影

和歌所にて六首歌合侍しに關路秋風　法印靜賢

誰か又ふしの山風身にしめて清見か關を月に越らん

後京極攝政家名所十首歌に　寂蓮法師

月ならて須磨の關もる友そなきしはしな過そあまの釣舟

仙洞にて十首歌合侍しに浦月　藤原經朝朝臣

わかの浦や昔にかへる波の上に光あまねき秋夜の月

百首歌たてまつりし時古渡月　前内大臣家

いせの海の汐のひかたの見渡にいそかすやとる秋夜の月

民部卿爲家

月影はさして出ぬるゆらのとに汐風まつととまる舟人

たいしらす　平泰時朝臣

唐土の波路分行舟人よ心のこらぬ月やみるらん

後法性寺入道前關白家の百首歌に　後德大寺左大臣

いさきよくすむ月影をあけぬとやゆらの湊に船よはる也

建仁三年八月十五夜月十首歌合侍けるに海邊秋月
参議雅經
秋は今宵浦はあかしの波の上にかゝる月をはいつかなかめし

海邊月といふことを　権中納言長方
夜もすから浦ふく風に雲消てあかしとみよとすめる月かな

和歌所にて六首歌合侍しに旅泊聞鹿
皇太后宮大夫俊成
舟とむる明石の月の有明にうらよりをちのさをしかの聲

月歌あまたよみ侍けるに　法性寺入道前関白太政大臣
にほ船はまかちしけぬきいそく也明石の月にいかりおろすな

光明峯寺入道前攝政家百首歌に江月　前太政大臣
汐のみつ入江にめくる山本のあけのそほ舟月やさすらん

海路月を　前権僧正隆覺
沖津風ふくるもしらすこく船の月かけなからかくる白浪

題しらす　俊恵法師
風をさへ誘ひて月やとるらん玉江のそこも雲の消ぬる

後徳大寺左大臣
難波かた更行まゝに月そすむ高つの宮に雲や消ぬる

海上月を　寂然法師
難波かた芦間を分てこく船の音さへすめる秋のよの月

五十首歌奉りし時江上月　宮内卿
玉かしは埋れはつる難波江のもにあらはるゝ秋のよの月

建仁三年八月十五夜月十首歌合侍けるに月前松風
皇太后宮大夫俊成女
月にたにあくかれはつる秋のよの心のこさぬ松の風かな

住吉社にて月前松　津守經國
片そきの月を昔の色とみて猶霜はらふ松の秋かせ

海邊月を　従三位頼政
浦つたひなるおの松のかけにみて又くまもなき月をみる哉

題しらす　素暹法師
風ふけは海士も釣せぬ浦波にひとり出たる秋のよの月

浦月といふことを　藤原基雅朝臣
いつとなく汐くむあまの袖をさへ待ける露とやとる月哉

宇治にて六首御會講せられける時橋月といへることを
後京極攝政前太政大臣
今宵しもやそうち河にすむ月のなからの橋の上にみるかな

經盛卿家歌合に　従三位頼政
影やとすみたらし川のさやけきは月もやこよひ天くたるらん

秋の月を　土御門院御製
大井川下はかつらの月影にみかきておつる瀬々の白玉

臨水待月といふことを　大納言經信
夕されはまつ山のはをなかめつゝ芦まの水の月をまつ哉

題しらす　慈鎮和尚
照月の光とゝもになかれきて音さへすめる山川の水

湖上月といふことを　光明峯寺入道前攝政左大臣
さゝ波やくにつみかみのます鏡かけてもすめるみよの月かな

山月を　能因法師
行月のかゝみの山や更ぬらん音すみわたるせたの長橋

前内大臣家にて名所月歌に　土御門院小宰相
しかの海士の思ひもはれぬ袖まても秋は色そふ月やみるらん

題しらす　後徳大寺左大臣

明かたにまのゝ浦さひふる雪やひらの高ねにかゝる月影　土御門内大臣
折しもあれ月は西にもなりやらて雲の南に初鴈の聲　紀友則
初鴈のなきわたりぬる雲間より名殘おほくて明る月哉
建保二年内裏にて十五首歌合侍しに　従二位家隆
かりかねの聞ゆる空や明ぬらん枕にうすき窓の月かけ
百首歌の中に　前參議信成
さをしかの聲とをさかる明かたに外山にのこる月そ難面き
（月あかゝりける夜鹿のなきけるをきゝて　平兼盛
浦かけて月すむよはゝ高砂のおのへの鹿や心わくらん
月前鹿といふことを　前大納言伊平
さをしかもこのまの月の影みてや心つくしの妻をこふらん
和歌所にて六首歌合侍けるに旅月聞鹿　宜秋門院丹後
松かれの枕にしかの聲はして木のまの月を袖にみるかな
建保四年内裏十首歌合に　前中納言定家
をしかなくはやまの陰の深けれは嵐まつよの月そすくなき
建仁三年八月十五夜月十首歌合に古寺殘月　皇太后宮大夫俊成
又たくひあらしの山のふもと寺杉のいほりに有明の月
深山曉月　大藏卿有家
花にのみ惜なれたる三吉のゝ梢におつる有明の月
野月露凉　嘉陽門院越前
分るたにさむけきのへの白露によかれすやとる秋夜月
野宿見月といふことを　祐盛法師
明ぬれは野澤にやとるかけもなし月も旅ねの床や立らん
田家見月といふことを　後京極攝政前太政大臣
秋の雲しくとはみれといなむしろ伏見の里は月のみそすむ
家百首歌合に秋田
山遠き門田の末は霧晴てほなみにしつむ有明の月
百首御歌中に　土御門院御製
深山たに曉かけてなく鹿の聲きくかたに月そ殘れる
たいしらす　慈鎭和尚
はつせ山月の光にあまりゆく心をせむる鐘の音哉
内大臣
風ならて身にしむものは片岡の楢の葉分の有明の月
月の歌とて　藤原實方朝臣
雲かゝる峯たに遠き物ならはいるよの月はのとけからまし
月三十首歌の中に　法性寺入道前關白太政大臣
山端のいとふにゝくる物ならは心のまゝに月はみてまし
九月有明のころ　和泉式部
よそにてもおなし心に有明の月はみきやと誰にとはまし
題しらす　深養父
草深くさひしからんと住宿の有明の月に誰をまたまし
源道濟
誰すみて哀しるらんときは山奥のいはやの有明の月
凡河内躬恒
山里もうき世なれはや有明の月もいるさにすみ馴にけむ
柿本人丸
天の原雲なき空にうは玉のよ渡る月のいらまくもおし

伊勢
いかなれは西に成ゆく月影のかたふくまゝにかなしかる覧
中納言家持
うは玉の夜は更ぬらしたまくしけ二上山に月かたふきぬ
雅成親王
月のいる梢はたかくあらはれて河霧深き遠の山本
月のいるをみて　恵慶法師
月のいる山のあなたの里人と今宵はかりは身をやなさまし
和歌所歌合に海邊月を　後鳥羽院御製
唐土の山人今はおしむらん松浦か沖の明かたの月
百首歌たてまつりしに　後久我太政大臣
秋風ににしの浦こく船人の入しほさむき有明の月
月歌よみ侍しに　前内大臣
山端はあまのかはらの嶋なれや月のみふねも漕かくれつゝ
百首歌の中に　藤原隆祐朝臣
行月の峯になかるゝあまの川山よりにしやみなとなるらん

雲葉和歌集巻第七

秋歌下

秋歌とてよめる　伊勢
秋深き山のかけのゝ柴の戸に衣てうすし夕暮の空
和泉式部
奥山のけしきをみるもかなしくてしか啼ぬへき秋の夕暮
百首歌の中に　後京極攝政前太政大臣
松に吹み山のあらしいかならん竹うちそよく里の夕くれ

日吉へ百首歌たてまつりしに　慈鎭和尚
夕まくれ鴫たつ澤のわすれ水思いつとも袖はぬれなん
秋十首歌人々にめしける時　後鳥羽院御製
中々に風も音せぬ夕くれの深山の秋は心すみけり
北野宮歌合に
さひしさをいつよりなれてなかむらんまたみぬ山の秋の夕暮
百首御歌の中に　順徳院御製
人ならぬ岩木も更にかなしきはみつの小嶋の秋の夕くれ
前内大臣家の十首歌に秋海雲　前參議信成
〔その色となかめにかゝる山もなし波の上ゆく秋の白雲〕
百首歌たてまつりしに曉虫　土御門院小宰相
我爲になく虫のねにあられともねさめなれはやかなしかる覧
秋歌の中に　藤原時朝
ねやちかく啼つる虫のあか月は誰にならひて遠さかるらん
題しらす　鎌倉右大臣
虫のねもほのかになりぬ花すゝき秋の末葉に霜や置覧
はつ霜のおくての稻もからなくにまたき色つく白菊の花
中納言定家
いかにせん菊のはつ霜むすほゝれ空にうつろふ秋の日數を
藤原隆祐朝臣
秋の色は月もうつろふ袖のうへに猶折そふる庭のしらきく
月前菊といふことを　〔正三位雅隆〕
〔月すめはうつろひはてし花なから又白菊にさきやかへらん〕
百首御歌の中に　土御門院御製
いはかれにこり敷山のしゐ柴も色こそみえね秋風そ吹
家の百首歌合に蔦を　後京極攝政前太政大臣
うつの山こえし昔の跡ふりてつたの枯葉に秋風そふく

たいしらす　前大納言忠良
高砂の松たにつらき夕暮に鹿の音かけて秋風そ吹
名所百首歌人々によませられける時　順德院御製
たかまとの野分の風にけふみれはまたき草木の色そしほるゝ
前中納言定家
水莖のをかの葛葉を蜑のすむ里のしるへと秋かせそ吹
いこま山嵐も秋の色にふくて染の糸のよるそかなしき
修行し侍し時　藤原基綱
和田の原唐土かけてたつぬとも秋の泊を誰かをしへん
百首歌の中に　土御門院小宰相
太山にも秋はかきりに成にけり落くる水の色かはるまて
崇德院百首歌の中に　藤原季通朝臣
かた〳〵にちる紅葉葉をかきつめて我宿にのみ秋をとゝめん
題しらす　源英明朝臣
ちる木葉かさなる霜に跡もなし山路の末の秋の別は
百首御歌の中に暮秋を　名闕
とにかくになかめし秋もとゝまらす關のわらやの夕暮の空
暮山松といふことを　前中納言定家
秋はいぬ夕日かくれの峯の松よもの木葉の後に逢みん
百首に　八條院六條
又もこむ秋にかならすあふへくはけふの別をおしまさらまし
百首歌奉りし時暮秋を
かねてしる秋の別を今更にけふも暮ぬとなに恨らん
たいしらす　源公忠
恨むとてことはりそなき惜むとてそふへき秋の日數ならねは
寂蓮法師
穐はくれ霧の籬は霜かれぬさてもすむやととふ人もかな
高野へまいりて元性法印の庵室にて暮秋述懐を　西行法師
馴きにし都もうとく成はてゝかなしさそふる秋の暮哉
〔重出〕　信成
その色となかめにかゝる山もなし波の上ゆく秋のしら雲
秋歌とて　鎌倉右大臣
なかめわひ行衞もしらぬ物そ思ふ八重の汐路の秋の夕暮
和歌所にて六首歌合侍けるに關路秋風　皇太后宮大夫俊成
時しもあれ秋の旅ねをすまの關みにしむ風のかくる浦浪
秋歌に　前權僧正澄覺
吹風のいつも身にしむ音羽山松には秋やときになるらん
百首歌たてまつりしに　宮内卿
とやまなるならの葉まてはけしくて尾花か末によはる秋風
千五百番歌合に　後鳥羽院御製
玉鉾の道の芝艸打なひき古き都に秋風そふく
皇太后宮大夫俊成
雲となり雨と成てや龍田姫秋のもみちの色を染らん
洞院攝政家百首歌に紅葉を　源家長朝臣
紅葉するふしのしは山こかれてや秋をやく火の煙たつらん
百首歌たてまつりし時杜紅葉　前内大臣
村時雨幾入染てわたつみのなきさの杜の紅葉しぬらん
承久元年内裏にて十首歌合侍しに庭紅葉
前中納言定家
もろ山の木下まてそしくれける我袖のこせ軒のもみち葉

従二位家隆
しくるなりとはぬ里人みるはかり下葉梢に青葉殘すな

〔重出〕名所歌よみ侍しに　正三位雅隆
月すめはうつろひはてし花なから又白菊にさきやかへらん

千五百番歌合に　寂蓮法師
朝ことにうつろふ色を置かへて霜にはかれぬ白きくの花

菊花寫水といふことを　白河院御製
咲ぬれは菊は水にもうつりけり植けん人は影たにもなし

晩風知菊といふことを　大貳三位
夕暮に風のふかすはきくの花匂ふまかきをいかてしらまし

秋歌とて　能因法師
草木まてきけは心のすむ秋は時雨もやらぬれ覺成けり

題しらす　紀貫之
歌闕

もみち葉の別をしらて秋風はけふやみむろの山は越覽

水無瀬にて秋十首歌つかうまつりし時　前中納言定家
河波のくゝるもみえぬくれなゐをいかにちれとか峯の木枯

亭子院御屛風に　伊勢
浮しつみ淵せなかるゝ紅葉はゝ深く淺くそ色もみえける

紅葉のこゝろを　三條内大臣
水よりや暮行秋はかへるらん紅葉なかれぬ山川そなき

崇德院御時百首歌に　上西門院兵衛
長月の有明の空のけしきをは奥のえひすもあはれとやみん

暮秋の心を　〔入日をうけて露や置覽〕

題しらす　よみ人しらす
春日野に時雨ふるみゆあすよりは紅葉かさゝん高圓の山

たつた山をこゆるとて　素性法師
雨ふれは紅葉の陰にかくれつゝ龍田の山にけふや暮さん

もみちをみて　源信明朝臣
山姫の千々のにしきをゝりはへて龍田のもりは神さひにけり

仙洞にて庚申夜五首歌かうせられけるに秋朝を　慈鎮和尚
たつた山かれてしくると思ひしれ雲をもそむるけさの嵐に

百首うたの中に　能因法師
夏の日の影にすゝみしかた岡の柞は秋そ色付にける

百首歌たてまつりし時　前中納言定家
契ありてうつろはんとやしらきくの紅葉の下の花に咲けん

洞院攝政家百首歌に紅葉　前太政大臣
昨日けふしくるとみゆる村雲のかゝれる山は紅葉しぬらん

延喜御時の御屛風に　紀貫之
紅の時雨なれはやいその上ふる度ことに野邊をそむらん

題しらす　曾根好忠
外山なるまさきのかつら色こきを見にくる人のみえぬ秋哉

秋歌に　和泉式部
をしなへてまたきまゆみの色つくは〔　　〕

源有長朝臣
天の河渡せる橋やみたるらん雲ゐよりちる峯の紅葉葉

秋歌の中に　信生法師
高ねよりもみち吹おろす山風や麓の松の時雨なるらん

名所百首歌人々にめされし時　順德院御製
立田山紅葉散しく秋風におちて色つく松の下露
慈鎭和尚
いさ行て涙つくさん秋深き龍田の里にもみちちる比
五十首御歌日吉社奉納侍しに　後鳥羽院御製
立田川もみちやわきてなかるらんいつくとしらぬ秋の湊を
九月のころ　僧正行意
はるかなる高ねの末の白雲に聲吹とむるすゝの秋かせ
水無瀨にて秋十首歌奉りし時　從二位家隆
秋かせはさてもや物のかなしきと荻の葉ならぬ夕暮も哉
建仁二年新宮歌合侍けるに嵐吹寒草　民部卿範光
荻はらやけさはよれ葉に吹かへて嵐になりぬのへの秋風
五十首歌に　祝部成茂
みわの山いつともわかぬ杉のはもしろしはかりの秋風そ吹
山寒草といふことを　正三位家衡
山陰の木下露やさむからし淺茅色つく嵐吹なり
よにふれは曉のをた巻はては又月に幾度衣うつらん
秋歌の中に　雅成親王
秋の田のをしね色つく今よりやねられぬいほのよさむ成らん
田家のこゝろを　權中納言國信
こかひなき柴の庵はかりそめの稲葉そ秋の妻木成ける
題しらす　柿本人丸
戀つゝもいなはかき分家ゐして〔ともしくもあらす秋の夕風〕
かつらにて稲花風を　大納言經信
ひたはへてもるしめ繩のたはむまて秋風そ吹小山田の庵
秋歌とてよめる
霧はるゝ門田のうへのになかたのあらはれわたる秋の夕暮
百首歌人々にめされし時河紅葉　院御製
なかれつる紅葉そとまる大井川ゐせきやもとの古枝なるらん
大井河にてもみちみて人々よみける　大納言經信
あさりする渡なりせは大井河紅葉をかつくあまやあらまし
千五百番歌合　後京極攝政前太政大臣
こけのうへに嵐吹しく唐にしきたゝまくおしき杜の陰哉
西園寺入道前太政大臣
昨日みてけふみぬ程の風のまにあやなくもろき峯のもみち葉
月あかゝりける夜入道釋阿のもとへつかはしける　慈鎭和尚
紅葉ふく風の便に月おちて霜にうらある庭のおもかな
十首歌合侍しに聞擣衣　順德院御製
秋風はいたらぬ袖もなきものを誰里よりか衣うつらむ
名所擣衣といふことを　後鳥羽院御製
さよ衣きえても色や殘るらん霜なからうつ峯の里人
前攝政左大臣家百首歌に　右近中將經家
風さゆる床の山人をのれのみよなかされてや衣うつらん
百首歌たてまつりし時　參議爲氏
よそにきくわかれさめたに長きよをあかすや曉か衣うつらん
秋歌とてよめる　後久我前太政大臣
風そよくほ田のかり庵の夕霜に曉はた衣うつかひもなし
光明峯寺入道前攝政家百首歌よみ侍しに
いほりさすいなはの雲も打なひき山田の原は時雨てそゆく
建保二年内裏にて秋十五首歌合侍しに秋虫　僧正行意

くるゝよりおなし籬のきり／＼すちかつく聲によや更ぬらん
閑庭虫といふことを　　權中納言顯朝
とひもこぬ人まつ虫のなのれのみなくれさひしき庭の淺ちふ
題しらす　　大納言典侍
露深き淺茅か庭の虫のねに〔かなしさ誘ふ秋の暮哉〕
草むらの虫といふことを　　源　順
草村のそこまて月もてらせはや啼虫のねのかくれさるらん
題闕
狩人のあたちのまゆみ末たはによるやなしかの秋のもみち葉
題しらす　　前内大臣家
もみち葉を染てしくるゝ秋山におくてのなしれほしやわふ覽
水無瀨にて秋十首歌たてまつりしに　　前中納言定家
夕附日むかひのをかの薄もみちまたきさひしき秋のかけ哉
洞院攝政家百首歌に紅葉　　民部卿爲家
くちなしの一入染の薄紅葉いはての山はさそ時雨らん
林葉漸變といふことを　　白川院御製
柞原時雨る數のつもれはやみるたひことに色まさるらん
題しらす　　曾禰好忠
さほ山の錦なるらんもみちはを風より先にみにやゆかまし
百首歌よみ侍しに　　前内大臣
有明の月は入ぬる山のはを猶なかめよと紅葉しにけり
秋歌とて　　惟高親王
入月に照かはるへき紅葉さへかれて嵐の山そさひしき
承久元年内裏歌合渡紅葉　　前大納言伊平
もみち葉のうつろふみつの渡し守風はゆきゝに厭ふのみかは
秋御歌の中に　　順徳院御製
流れ行紅葉や秋のとなせ川井手こす浪に嵐吹らし
名所秋歌たてまつりしに　　參議雅經
此川に紅葉はなかろ足曳の山のかひある嵐ふくらし
題しらす　　式子内親王
思へともこよひはかりの秋の空更行雲にうち時雨つゝ
閏九月盡の心を　　從三位範宗
常ならはけふやかきりの神な月猶長月のおしき秋かな
家の十五首歌に　　惟明親王
あけ行は露なかたみの袖のうへにあたにも秋の色やのこらん

雲葉和歌集巻第八

冬歌

初冬のこゝろを　　壬生忠岑
山端はかくこそ秋もしくれしか何なけふより冬といふらん
藤原清輔朝臣
大空も秋の別をおしむへしけふのけしきは打しくれつゝ
皇太后宮大夫俊成
いつしかと降そふけさの時雨哉露もまたひぬ秋の名殘に
院御製
かきくらし雲のはたてそ時雨行天つ空より冬やきぬらん
百首御歌に時雨を　　土御門院御製
吳竹のみとりは秋もかはられと時雨降にし籬ともなし
題しらす　　皇太后宮大夫俊成
袖ぬらす小嶋か磯のとまり哉水かさゝむみ時雨過也
五十首歌たてまつりしに　　宮内卿

時雨つるこの下露は音信て山路の末に雲そ成行
百首御歌の中に　順徳院御製
いかはかり麓のさとのしくるらん遠山薄くかゝる村雲
たいしらす　覺仁法親王
よもすから何を時雨の染つらん檜原の山の峯のしゐ柴
從三位泰光
寂しさはそめぬときはの梢まて色をかへても降時雨哉
五百首御歌の中に　後鳥羽院御製
いかはかり木葉の色のまさるらん昨日もけふも時雨する比
百首歌たてまつりしに　寂蓮法師
雪ふらは道も絕なん山里をしくるゝまてはとふ人もかな
五百首歌合侍しに曉時雨を　前中納言定家
まとろまぬすまの關守今はとてたゆむ枕も打しくれつゝ
建仁四年內裏十首歌合に　參議雅經
白妙の衣吹ほす木からしのやかてしくるゝ天のかく山
八幡宮へ廿首歌奉しに　慈鎭和尚
そむれともちらぬ袂に時雨きて猶色深き神な月かな
題しらす　光明峯寺入道前攝政左大臣
奥山に時うしなへる我袖の何の色とか猶しくるらん
名闕
我宿のあさちいろつくふなはりのなつみのうへに時雨降つゝ
柿本人丸
山河の水しまさらは水上のつもる木葉は落しはつらん
百首御歌の中に　土御門院御製
橋姫の袂に色やこゝろらん木のはなかるゝうちの網代木
道助法親王家五十首歌に朝時雨を

紅葉ちる山は朝日の色なから時雨てくたるうちの川浪　西園寺入道前太政大臣
春日社歌合に落葉　宜秋門院丹後
紅葉はゝ一枝のこせたつたひめいつれの神の手向なりとも
花山院前右大臣
庭の面にたかさそひをく木葉ゝそつもれは風の又はらふらん
五十首歌たてまつりしに　參議雅經
木葉ふく嵐そ今は音羽山峯たちならす鹿の音はなし
百首歌人々にめしけるとき　後鳥羽院御製
みむろ山時雨こきたれ吹風にぬれなからちる峯のもみちは
十首歌合侍しに　順德院御製
神無月嵐にましる村雨に色こきたれてちる木葉哉
題しらす　前太政大臣
このはさへ深く成行山路かな嵐もおくやはけしかるらん
法性寺釣殿にて歌合侍けるに關路落葉
皇太后宮大夫俊成
色々の木葉に道も埋れて名をさへたとる白川のせき
とけてねぬ袖さへ色にいてねとや露吹むすふ峯のこからし
關落葉といふことを　藤原□
染しより木のはをゝのか物とてやちるにもまかふ時雨成覽
百首歌中に　慈鎭和尚
よひのまはもらぬ木葉に袖ぬれて時雨になりぬ曉の空
冬歌の中に　坂上是則
雲まより名殘忍へともる月に時雨もおしき山端の空
十首歌合侍しに冬夜月　順德院御製

山風に時雨やとをく成ぬらん雲にたまらぬ有明の月
北野宮歌合に時雨を　後京極攝政前太政大臣
題しらず　寂蓮法師
散つもる紅葉分きてよそにみはあはれなるへき庭のおもかな
冬歌とて　西行法師
嵐ふくみねのこのはにともなひていつちうかるゝ心なるらん
五十首歌たてまつりし時　寂蓮法師
さま〳〵に絕ぬこのはの音よりも思ひはれたる松の風かな
千五百番歌合　後京極攝政前太政大臣
霜うつむ苅田の木葉ふみしたきむれゐる鴈も秋をこふらし
春日社歌合に落葉　大藏卿有家
今もかもふりはてぬらんならのはの名におふみやに嵐吹ころ
百首歌たてまつりしとき　式子內親王
神無月みむろの山の山おろしに〔くれなひくゝる立田川かな〕
村雲にをくれ先たつ夜半の月しらす時雨の幾めくりとも
題しらす　俊惠法師
月をこそ哀とよひになかめつれくもる時雨も心すみけり
土御門院御製
龍田山もみちや稀に成ぬらん河浪白き冬のよの月
建保四年內裏十首歌合侍しに　前太政大臣
紅葉せし四方の山邊はあれはてゝ月より外の秋そ殘らぬ
冬歌とて　大中臣能宣朝臣
よを寒みまかきの嶋を見わたせはけさ初霜は置にけらしも
神無月のころならのみやこにて　三條右大臣
道芝の霜よの月をふみならしふりにし都あれにけらしも

朝寒芦といふことを　後鳥羽院御製
難波江やよるみつ汐のほとみえて芦のかれ葉に殘る朝霜
冬御歌の中に　土御門院御製
なにはえやあまの衣のうら風に枯たるあしの音そさひしき
七首歌合侍しに冬山霜を　順德院御製
敷嶋やみむろの山のいはこすけそれともみえす霜さゆる比
冬夕旅　前中納言定家
引むすふ草はも霜のふる郷はくるゝ日每に遠さかりつゝ
百首歌人々にめされし時寒草　院御製
垣ねなる草も人めも霜かれぬ秋の隣や遠さかるらん
千五百番歌合　前大納言忠良
今はとて淺茅かれ行霜の上に月かけさひしをのゝしの原
二條院讃岐
霜結ふ冬のよな〳〵かさなりてなれのみかれぬ庭のあさちふ
百首御歌の中に　順德院御製
山里はまかきのすゝき霜かれぬをさゝはかりは風もたまらし
たいしらず　藤原業清
東路やかれのゝ薄風分て袖になみこす浮嶋か原
建保四年內裏十首歌合侍しに　八條院高倉
旅衣すそのゝおはな霜かれてやとりし秋の露をこふらし
百首歌よみ侍しに　寂蓮法師
霜さゆるかり田の面やはらふ覽またさよ深し鴫のはねかき
題しらす　菅贈太政大臣
竹のよも我よもしらすおはしゝを草葉さやかにをける霜哉
慈鎭和尚
霜枯のまかきのすゝき秋にかへて同しみそらの月をみるかな

西行法師
さひしさは秋みし空に歸りけり枯野をてらす有明の月
後京極攝政家十首歌合に山家夜霜を　後法性寺入道前關白太政大臣
都人月にとふよの庭のおもは跡こそ霜のしるへ成けれ
冬の歌とて　素暹法師
みよしのゝ瀧つはやせにすむ月や冬も氷らぬ冰なるらん
たいしらす　俊惠法師
ちとりなくゐなのみなとに風さえて波まに殘る有明の月
中納言家持
楸おふるかはらの千鳥鳴なへに妹かりゆけは月わたるみゆ
月くまなかりける夜ちとりをきゝて　藤原敏行朝臣
霜かれの芦間の月の明かたに鳴て千鳥の別ぬる哉
ちとりをよめる　行圓法師
小夜更てなくやゆつはの村千鳥河上寒み嵐ふくらし
家の五十首歌に嶋千鳥を　道助法親王
和田の原こき出る舟の友千鳥八十嶋かくれ聲聞ゆなり
前中納言定家
濵ひさしなこのかたみる友千鳥とわたりすつる沖の小嶋に
參議雅經
淡路嶋渡るちとりも白妙の波まにかさす沖つしほ風
千五百番歌合　前中納言定家
鳴千鳥袖の湊をとひこかし唐土舟のよるのね覺に
家十首歌合侍けるに旅泊千鳥　後京極攝政前太政大臣
をのれたに事とひこなん小夜千鳥すまのうきゐに物や思ふと

寂蓮法師
都おもふ夢路にしはし友千鳥聲は枕にちかのうら風
名所歌よみ侍しに　源具親朝臣
衣手もさえ行霜のさよちとりかされて渡る吹上の濱
千鳥のこゝろを　土御門院御製
夕暮の浦もさためす鳴千鳥いかなるあまの袖ぬらすらん
松さむきみつの濱へのさよちとり干潟の霜に跡やつけつる
題しらす　法印教嚴
月すめはつかはぬをしもなかりけり淚の枕にかけをならへて
西行法師
山河にひとり流てすむをしの心しらるゝ淚のうへかな
冬歌の中に　權大納言公實
夕こりのはたれ霜ふる冬のよは鴨のうは毛もいかにさゆらん
たいしらす　源師賢朝臣
うき草に枕さたむるをし鳥も今は氷にれんかたやなき
前參議教長
水鳥の霜打はらふ羽かせにや氷のとこはいとゝさゆらん
源仲綱
よをさむみたちぬるをしの跡に又程なくゐるはつらゝ也けり
修理大夫顯季
時のまも落くる水そよはり行瀧のみなかみよさむなるらし
家十首歌合侍ける池水半氷　後京極攝政前太政大臣
池水をいかに嵐のふきわけて氷れるほとのこほらさるらん
崇德院御時百首歌に　藤原實清朝臣
あなし川氷ゐにけりまきもくの檜原の杣木いかゝくたさん
冬水といふ事を　藤原隆祐朝臣

水上は氷をくゝるしかま川海にいてゝや波はたつらん

百首歌奉りしに　光明峯寺入道前攝政左大臣

唐衣たか下紐をゆふは川とけてれぬよの氷しつらむ

冬歌とて　曾禰好忠

鈴鹿川やそせの瀧の音なきは氷やせきて結ひとめ劔

建保四年内裏にて七首歌合侍しに冬河風を　藤原康光

吹風に汀や遠く氷らむ河せの浪の音そすくなき

洞院攝政家百首歌に　正三位知家

せきあまる波の音さへよとむ也けさは氷のゐてのしからみ

建保六年内裏歌合に冬池　前大納言伊平

こやの池あしまの氷結ふらし嵐あれ行

百首歌たてまつりしに　前大納言忠良

朝ほらけさゆるあしまを行船の氷を分る跡のしらなみ

氷といふことを　惠慶法師

波よする芦のうらはも音せぬは池の氷やとちはてつらん

百首歌たてまつりしに　従三位頼氏

風ふけはうらはの池に入しほや夜の冰の絶まなるらん

前内大臣家にて百首歌侍しに湖上氷　民部卿爲家

さゝなみや遠さかり行鳰の海は氷そ浦の汐干成ける

守覺法親王五十首歌よみ侍りけるに　寂蓮法師

白雪の降にし跡にかはらねは今宵や神も心とくらん　院御製

御かへし　前攝政太政大臣

しら雪の降にしあとを尋ても今宵そいのる御代の千歳を

神樂の心を　中務

小夜深く霜をなくとも杣人のおれる榊は色もかはらし

冬山といふことを　民部卿爲家

嵐こす外山の峯のときは木に雪け時雨てかゝる村雲

行路雪　藤原清輔朝臣

初雪に我とは跡をつけしとて先朝たゝん人を待かな

題しらす　藤原信實朝臣

かち人の汀の氷ふみならしわたれとぬれぬしかの大わた　續古寂蓮法師

氷留水聲といふことを　皇太后宮大夫俊成

冬くれは氷と水の名をかへていはもる聲をなと忍ふらん

題しらす　中納言

冬さむみしのふの山の谷水は音にもたてすさそ氷るらん

百首御歌の中に　土御門院御製

をしなへて時雨しまてはつれなくて霰に落るかしはきの杜

題しらす　寂蓮法師

沍る夜の空より風の結ひきてこほれる雨や霰成らん

たいしらす　曾禰好忠

いはとやまよに明かたき冬の夜の天の關守誰かすへけん

寛元二年十一月東三條神樂の夜つかはされける

山家雪を　大納言通方

けさよりの時雨は雪になりにけりさてたに松の色かはれとて

山里は秋のくれより道そなき木葉に雪は降かはりつゝ

冬の歌とて　中納言家持

飛鳥川かは音たかしうは玉のよるせを寒み雪そ降らし

たいしらす　曾禰好忠

冬ふかく野は成にけり近江なる伊吹の外山ゆき降ぬらし

雪埋遠山といふことを　堀川右大臣
いかはかりつもれる山の雪なれは梢を踏て人の行らむ
後京極攝政家にて名所雪を　前中納言定家
雪折の竹の下道あともなし荒にしのちの深草の里
家に百首歌合侍けるに冬朝を　後京極攝政前太政大臣
雲深き峯の朝けのいかならん槇の戸しらむ雪の光に
中宮權大夫家房
朝戸明て都のたつみなかむれは雪の梢やふか草の里
寂蓮法師
なかめやる衣手さむし有明の月より殘る峯のしら雪
曉雪の心を　經慶法師
有明の月はいつれと跡もなしまた人こえぬ峯のしら雲
八幡宮後番歌合に雪を　祐盛法師
秋は過春はまたこぬなくさめに月と花とをみする白雪
冬歌とて　從二位家隆
冴のほるこしのしられの冬の月雪は氷の麓なりけり
百首歌人々にめしける時冬月　院御製
白妙の光そまさるふゆのよの月のかつらに雪つもるらし
關雪といふことを　土御門院小宰相
思ひやる關のわらやの昔まて雪にさひしき逢坂の山
たいしらす　中納言
たかかよふ道の關とか成ぬらんよひ〳〵ことにつもるしら雪
後京極攝政家にて三首歌講せられし時伏見里雪　八條左大臣
わきもこか歸る跡たにつけしとて獨ふしみの雪のあけほの
宜秋門院丹後
さゆる夜の夢路は雪にとちられて伏見の里のかひやなからん
杜朝雪を　藤原基雅朝臣
明ぬとてねくらの鳥のたつたひに梢よりふる杜のしら雪
冬の歌に　德大寺左大臣
老らくのかゝみの山の面かけはいたゝく雪の色や添覧
たいしらす　正三位知家
朝な〳〵よそにやはみるますかゝみむかひのをかに積る白雪
前内大臣家三十首歌に故郷雪を　祝部成茂
雲さゆるよしのゝさとは冬なから雪より花のふらぬ日はなし
冬歌の中に　從二位家隆
み吉野はまきの下葉のかれしより外山もみ雪ふらぬ日はなし
修行し侍けるに　僧正行尊
けふ幾日雪踏ならし越つらん外山の杣木時雨たにせし
雪のうたとて　後德大寺左大臣
久堅の空もまよひぬ雲かゝる高まの山の雪のふれゝは
光明峯寺入道前攝政家百首歌に濱雪　前中納言定家
大伴のみつの濱風吹はれて松ともみえしうつむ白雪
海邊雪といふことを　祝部忠成
住吉の汀の松の[色]見へてつもらぬ浪に積るしら雪
百首歌の中に　慈鎭和尚
けさみれは雪もつもりの浦なれや濱松かえの波につくまて
後京極攝政家にて詩歌合侍けるに雪中松樹低　源具親朝臣
浪あらふしつえ數多に成にけり雪もつもりの松の村立
たいしらす　平泰時朝臣
降雪のはれ行あとの波の上に消のこれるや海士の釣舟

雪の歌とて　前内大臣家

いせの海あまのしわさの藻鹽草けさかきたれて雪は降つゝ

雪中遠情といふ事を　法性寺入道前關白太政大臣

かきくらし降白雪にしほかまの浦の煙も絶やしぬらむ

前内大臣家十首歌に冬橋雪　藤原信實朝臣

雪おれにのこるなからのはし〱ら芦のはならぬ跡は有けり

たいしらす　如願法師

降雪のしたゝくけふり立まよひいとゝさひしき冬の山さと

光明峯寺入道前攝政左大臣家七首歌合に暮山雪　正三位知家

けさきつる跡やはのこる山人の歸るにまとふ道のしら雪

名所歌よみ侍しに　前中納言定家

をはつせや峯の常盤木吹しほり嵐にくもる雪の山本

建仁三年新宮歌合侍けるに雪似白雲　寂蓮法師

嵐吹峯につれなき白雲のたつかとみれは松の雪おれ

百首歌よみ侍しに　前内大臣

みかりのゝとたちの雪を打はらひ草とる鷹のあとそみたるゝ

たいしらす　俊惠法師

みかりする交野のみのに雪降は朝たつ鳥もとやかへりせり

百首御歌の中に　土御門院御製

はし鷹のすゝのしのはらかりくれて入日の岡にきゝすなく也

春をまつといふ心を　赤染衛門

梓弓はるの戀しくなりゆくは花に心のいれはなるへし

たいしらす　紀貫之

春近く成ぬる冬のおほ空は花をかれてそ雪は降ける

冬歌とて　皇太后宮大夫俊成

をの山の燒炭かまにこりうつむ爪木と共につもる年哉

百首歌の中に　式子内親王

埋火のあたりの里はさよ更てこまかになりぬはひの手習

住吉社へ百首歌たてまつりしに　慈鎭和尚

すみよしは齡つもりの浦なれは神は年をやおしまさるらん

土御門内大臣家歌合に海邊歳暮　二條院讃岐

荒磯のいはたちのほりよる波のはやくもかへる年の暮哉

入道二品親王守覺

過ぬるか年のかよひちいかならんびまゆく駒は跡たにもなし

雲葉和歌集巻第九

賀歌

屏風歌たてまつりし時　紀貫之

あたらしく明ることしを百とせの春の始と鶯そなく

子日のこゝろを　能因法師

春日のゝねのひの松も春をへていはふ心は神そひくらん

通房卿誕生の時七夜の事さたしをくられけるついてに　法性寺入道前攝政太政大臣

年をへて待つる松の若枝たに嬉しくあへる春のみとり子

中宮の御屏風に人々馬よりおりて松の下にて梅の花ををりてかさせる人有けるを　藤原長能

折てくる人なかりせは見さらまし常盤のかけの春の初花

ある所の屏風に花おほくさきたる所を　花山院御製

吹風の枝もならさぬこの比は花もしつかににほふ成へし

鳥羽皇居にて池上花といふ事を　中御門右大臣
千代をへてそこまてすめる池水に深くもうつる花の色哉
こゝのへのはなのかけにて　前大納言公任
咲はなを頭の雪にまかへても千世のかさしは折に逢らし
たいしらす　従三位範宗
花をみる大内山のもろ人は木の本なから千代もへぬへし
従二位家隆
年に逢て春くはゝれる宿の松かつ〳〵しるし千世のあまりは
悠茜しるしをかれたりけるはしにかきつけられたりける　禪林寺入道前太政大臣
三笠山おなしきふちのいかなれは北にさす枝の榮ますらん
建保二年内裏にて秋十五首歌合侍しに秋祝を
皇太后宮大夫俊成
天地をひらきし神のみことより千とせの秋は我君のため
建久三年中宮御方にて和歌會侍けるに月契秋久といふことを　後法性寺入道前關白太政大臣
是そこの思ひしことく世をはへん秋の宮にて月をみるかな
崇徳院御くらゐの時仁和寺に九月に行幸ありてくらへ馬ありけるに菊契千秋といふ事を　待賢門院堀川
雲の上の星かとみゆる菊なれは空にそ千代の秋はしるらし
九月はかり菊花を　文武天皇御製
百敷にうつろひわたるきくの花にほひそまさる萬代の秋
後京極攝政家にて松延齢友といふことを　土御門内大臣
君か代は木高き松をたくひにてむれゐる田鶴やけふの諸人
亭子院御賀の御屏風に　紀貫之
河風になひく芦たつをのかよを波とともにや君によすらん
鷹司殿七十賀をこなはれけるに
法成寺入道前攝政太政大臣
ありなれしちきりはたえて今更に心けかしに千代といふらん
宇治前關白太政大臣
君か爲ちよをかされて菊のはな行末遠くけふこそはみれ
二條前關白太政大臣
かそふれは又ゆく末そはるかなるちよをかきれる君か齢は
たいしらす　伊勢
あらはなるかたにしも住あしたつはちよみん爲の心なるへし
後法性寺入道前關白家百首歌に　正三位季經
一はれに千里をかける鳥なりと君か齢の末はきはめし
俊惠法師
きみか代は津守の浦に天くたる神もちとせをまつとこそみれ
建長五年三月にはしめて天王寺へ御幸侍けるついてにすみのえにて人々歌つかふまつりし時　院御製
跡たれし神よにうへは住吉の松もちとせを過にけらしも
おなしころすみのえにて　前攝政太政大臣
神代よりいくらの春にあひにけんおなし緑の住のえの松
石にうみ松のおいたるを人にたてまつるとて　惠慶法師
うこきなきいはほにねさすうみ松の千歳を誰に波のよすらん
正治二年十題歌合侍けるに　藤原隆信朝臣
かれてよりわかのうらちに跡たれて君をや待し玉津嶋姫
新古今竟宴をこなはれける時に

後京極攝政前太政大臣
敷嶋やまと言葉のうみを〔にし増鏡〕へてひろひし玉はみかゝれにけり
松契遐年といふこゝろを　前中納言匡房
君か代のときはの松に天くたる乙女の袖もいかゝなつらん
いはひのこゝろを　清原元輔
萬代をなからのはまのさゝれいし今宵よりこそ苔はむすらめ
高陽院にわたり給へるはしめつかた祝言よみ侍けるに　太皇太后宮攝津
池水のすむにしらるゝ千歳をは君か心にまかせたるへし
宇治入道前關白家歌合に池水を　中納言定頼
年をへてすむへき君か宿なれは池の水さへにこらさりけり
崇徳院御時の百首歌　左京大夫顯輔
君か經ん年の數をはいくらともいさしら雲のはてしなけれは
たいしらす　前參議教長
大空をおほはむ袖につゝむとも君かへんよの數やあまらん
百首歌人々にめしける時　後鳥羽院御製
をのつからふるきにかへる色しあらは花染衣露や分まし
前中納言定家
紫の色こきまてはしらさりきみよの初のあまのはころも
百首を五人に仰られてよみ侍しに
日影さす乙女の姿我もみきおいすはけふの千代のためしに
修行し侍りし時　僧正行意
七度のよしのゝ川のみをつくし君か八千代のしるしともなれ
守覺法親王五十首歌に　皇太后宮大夫俊成
君か代はたかのゝ山のいはの室あけんあしたの法にあふまて
祝の心を　後法性寺入道前關白太政大臣
行末を我とはなにか祈るへきはるけき御代にあへる身なれは
後京極攝政家にて十題百首歌侍けるに　寂蓮法師
年もへぬさこそは末も遠からめはるかにたのめうちの橋守
行すゑは雲のかきりもあらしかし君をはくゝむ天の羽衣
千五百番歌合に
波のうへに薬もとめし人もあらははこやの山に道しるへせん
社頭祝を　法印尊海
千早振神のみしめも君かよを長きためしに猶や引らん
賀茂興平
立かへりちよとそいのるきふね川も〔せ〕わたるも我君のため
たいしらす　大藏卿有家
雲の色星のやとりもさしなからおさまれるよを空にみる哉
大嘗會御屏風に　左京大夫顯輔
むかしよりなになかれたる岩瀧の水の白糸幾世へぬらん
藤原清輔朝臣
はる〱と曇なきよをうたふ也月出か崎の天の釣ふね
前中納言
玉かつらきよくみせんと神山の豊のあかりの月もくもらす

雲葉和歌集巻第十

羇旅歌

堀川院御時の百首歌に　源俊頼朝臣
いとゝしく都戀しき夕くれに波の關もるすまの浦風
祐子内親王家紀伊
舟とめてみれとあかぬは松風に浪よせかくる天のはし立
京極前關白家肥後

こく船の跡もなければ藻鹽草煙や道のしるへ成らん
たいしらす　よみ人しらす
よそにのみ見てや渡らん難波瀉雲ゐにみゆる嶋ならなくに
おしてるやなにはを過て打靡くくさかの山をけふみつる哉
後京極攝政太政大臣
忘るなよ今はの月をかたみにて波に別るゝ沖のともふね
後京極攝政家十首歌に淨見關旅を　法橋顯昭
身はこえぬ心はとめつ清見瀉いかにすへける關路成らん
後法性寺入道前關白家百首歌に　皇太后宮大夫俊成
清見かた波路さやけき月をみてやかて心や關をもるへき
五十首歌たてまつりし時　寂蓮法師
かりそめに關もるよはの寢覺迄そてふれ□たるすまの浦なみ
たいしらす　中納言行平
幾度かおなしねさめに馴ぬらむ苫やにかゝる須磨の浦波
くほ川といふ所にて　堀川院中宮上總
身にしみて心ほそきは秋のよの浦風ちかき旅ねなりけり
五十首歌たてまつりし時旅泊月を　宮内卿
またしらぬうきねの床の波よりも馴たる月に袖ぬらす覽
百首歌の中に枕をよめる　源有長朝臣
野邊の草いそへの波もふしなれぬおなし枕のなはかられとも
家五十首歌に海旅　道助法親王
故郷の月もいくよかめくりあはん波の數そふ床の浦風
たいしらす　後鳥羽院御製
駒なへてうち出の濱を見渡せは朝日にさはくしかのうら浪
たひにて　西行法師
昔おもふ心有てそなかめつるすみたかはらの有明の月

別のこゝろを　土御門院御製
朝霧に淀のわたりを行舟のしらぬ別も袖ぬらしけり
たいしらす　式子内親王
おのつから逢人あらはことつてようつの山へを越わかるとも
西行法師
狩くれし天の川原と聞からに昔の浪の袖にかゝれる
柿本人丸
朝またき我うちこゆる龍田山ふかくもみゆる松の色かな
よみ人しらす
神さふるいはねこりしきみ吉野の水わけ山をみれはかなしも
後京極攝政家十首歌合に秋旅　寂蓮法師
相坂を越たにはてぬ秋風に末こそおもへしらかはのせき
五十首歌の中に　平政村朝臣
都いてゝけふ越そむる相坂の關や旅ねのはしめ成らん
あつまへまかりける人をくりてあふ坂よりたちかへるとて　源俊頼朝臣
何しかも名をたのみけん相坂の關にてしもそ人はわかるゝ
前内大臣家卅首歌に旅行を　藤原隆祐朝臣
けふは猶みやこもちかし相坂の關のあなたにしる人もかな
百首御歌の中に關路を　土御門院御製
鳥の音に猶山陰のくらければ明てそ越ん足柄の關
旅心を
白雲を空なるものとおもひしはまた山こえぬ都成けり
洞院攝政家百首歌に　藻壁門院少將
かへりみる程そくもゐの大江山いくのゝ道や末になりぬる
和歌所三首歌合に羇中暮　後久我太政大臣

暮は又いつくに宿をかりのなく峯にわかるゝ袖の秋霧

當座歌合侍けるに行路風　如願法師

秋風に猶山ふかくしほりせん又こむ人も忍ふはかりに

建暦二年内裏にて詩歌合侍しに羇中眺望　前中納言定家

はし鷹のとかへる山路越かれてつれなき色の限をそみる

百首歌たてまつりしに旅宿　正三位成實

旅衣つまふく風の寒きよに袖折かへしいくよかもれん

前内大臣家卅首歌に旅宿を　從二位家隆

かへすとも雲の衣はうらもあらし一夜夢かせ峯の木からし

建保五年同内裏歌合に朝夕旅　從二位家隆

さえくらすさやの中山なかなかに是より冬のおくもまさらし

たいしらす　和泉式部

旅衣なれぬる月のわかれさへ空にかさなるさやの中山

みるらんとおもひをこせて故郷の今宵の月を誰なかむらん

人にさそはれて秋のころ　藤原忠幹

都おもふわか心しれ夜半の月ほとは千里の山路こゆとも

親故尋迴レ駕。征從未レ出レ關。鳳凰池上月。送レ我過二商山一。　按察使隆衡

ころゝまて山路の末をつくせとも我よりおくに月はすみけり

たいしらす　伊勢

いはしろの野中の松を引むすひ命しあらは歸りきてみん

五十首の中に　道助法親王

草枕一よの露をちきりにて袖にわかるゝ野への月影

百首御歌の中に　土御門院御製

いなみのや山もと遠く見渡せはおはなにましる秋の松原

旅の道にて　平泰時朝臣

ちかつけは野路のさゝ原あらはれて又末かすむ二村の山

前内大臣家名所十首歌に　後鳥羽院下野

逢人にとへとかはらぬおなし名の幾日になりぬむさしのゝ原

和歌所三首歌合に羇中暮　西園寺入道前太政大臣

暮ぬとや我より先にとまるらんいくのゝ末にあふ人のなき

たひの出立するひとのもとにまかりてよめる　紀貫之

おしみつゝわかるゝ人をみる時は我涙さへとまらさりけり

たいしらす　皇太后宮大夫俊成

曉と聞て出つる別路をやかてくらすは涙なりけり

よみ人しらす

たをやめの袖吹かへすあすか風都を遠みいたつらにふく

惠慶法師

かりにくる人なかりせは昔みし都のことをいかてきかまし

みちのくにのかみしらかはにてせんし侍けるに　中納言朝忠

行かへるものとしるしるあやしくも別といへはおしまるゝ哉

そのかみ宋朝へわたれりける時秋の風身にしみけるゆふへ日本にのこりとまれる老母の事なとおほつかなく思ひやりてよみける　權僧正榮西

もろこしの梢もさひし日の本のはゝその紅葉ちりやしぬらむ

群書類従巻第百五十三

和歌部八

新和歌集巻第一

春歌

立春のこゝろを　　蓮生法師
いつしかと霞もあへぬ山のはのあさ日よりこそ春はみえけれ
　　藤原泰綱
立かはる春のけしきもあらはれて峯の朝日の影そのとけき
　　信生法師
あつさ弓春きにけらしたかまとのをのへの宮に霞たなひく
　　浄意法師
氷ゐし谷のをかはのわすれ水岩間をとめて春は來にけり
右大弁光俊朝臣鶴岳社にて講し侍ける十首歌に
　　藤原時明
煙たつむろのやしまのちかけれは我すむかたや霞そむらん
たいしらす　　蓮生法師
雪消ぬ高ねも春の色なからふもとはかりにたつかすみかな
宇都宮神宮寺障子歌　　京極入道中納言定家卿
かすめともまれにやはみる白雪の春もふりしくみよしのゝ山
百首歌よみ侍ける中に雪中若菜　　藤原泰綱
しら雪の消ぬ野原を踏分てけふそ若なをつみはしめける

蓮生法師八十賀屏風歌　　冷泉前大納言為家卿
春のくるけふのわかなも芹河のちよのふるみち年をつみつゝ
館にて百五十番歌合し侍けるに　　藤原景綱
里人の衣手さむみ若菜つむあしたのはらに雪はふりつゝ
　　證定法師
まきもくの山はかすみてみ雪ふるこまつか原に鶯そなく
春はいつしかもうてゝ山里の住居みんと申たる人のもとへ
　　蓮生法師
春きても跡なき庭の苔のうへに心ときゆる雪をみるかな
題不知　　源長継
かきくらすけしきはおなし空なから雨になりゆく春のあは雪
　　有尊法師
かきくらし降とはすれとかつ消て殘るは去年の雪にそ有ける
藤原時朝よませ侍ける五十首歌中に　　藤原基政
梅花さかぬかきりはうくひすのなきての春もあらしとそ思ふ
　　源親行
雪のうちに匂ふはるへの梅の花それともみえす猶かすみつゝ
鎌倉右大臣家より梅を折て給とて
君ならてたれにかみせむ我宿の軒はににほふむめのはつ花
御返事　　信生法師

うれしさもにほひも袖にあまりけりわかためおれる梅の初花

衣笠内大臣によみてたてまつりける三百六十首歌中に　藤原時朝

色も香もあはれとそみる故郷のみかきか原に匂ふむめかえ

藤原時朝稲田姫社にて十首歌講し侍しに夜梅薫風　藤原時家

明はまつ風をしるへに尋ねみむ寝覺にかほる梅のはつ花

梅花薫風といふことを　坂上家光

とめゆかむ誰すむやとゝわかすとも風をしるへの梅の初はな

蓮生法師八十賀(正嘉元)屏風歌　冷泉前大納言

咲にほふ梅津の河の花さかりうつる鏡の影もくもらす

人の花をこひにをこせたりけるにおりてやるとて　浄意法師

おる袖に香をはとゝめて梅のはな色はかりをや人にしられむ

河邊柳　源親行

青柳のかけゆく水の深みとり淺せもしらぬ春の河なみ

夕霞　大中臣能範

三日月のおほろにみゆるかけらふのあるかなきかに霞む空哉

題不知　坂上道清

いかはかり山のあなたも霞むらんおほろにみえて出る月かけ

花のさくへきころ雪の降侍りけれは　藤原時朝

打きらしなを降雪に山さくら枝にこもれる花のおもかけ

百首歌中に　藤原泰朝

初春の梢にきえぬしら雪は花にさきたつ花かとそみる

山花　蓮生法師

吉野山みねにあさゐるしら雲のかさなる色や櫻なるらん

源親行

しら雲のあとなき峯の霞より風をたよりの花のかそする

鶴岳社十首歌に　藤原朝景

いかはかり人のこゝろをつくす覧花さくころの峯のしら雲

宇都宮神宮寺二十首歌に　藤原時家

雲はなをたえ〳〵みえしみよしのゝ山のまもなく花咲にけり

題不知　浄意法師

芳野山いく木の櫻咲ぬともはつ花までのよそめ也けり

藤原景綱五十番歌合に朝望山花　橘友家女

三吉野のよしのゝ山をけさ越てまつわれはかりみつる花かな

同歌合に山路花　清原時季

たつねいる櫻は花に咲にけり山路のすゑにかゝる白雲

大江季房

かをとめて尋ねはいりぬ山さくらかへる道にやしるへなか覧

題不知　藤原言盛

雲とのみ思ひやはてん山さくら吹くる風ににほはさりせは

藤原時朝よませ侍ける歌の中に　丹波廣長朝臣

かつらきや花こそ雲のよそならめかをたに送れ風のたよりは

はなのうたとてよめる　藤原親朝

いくとせの春のすみかと成ぬらんよしのゝおくの花の下かけ

蓮生法師八十賀屏風歌　冷泉前大納言

おもひいつやをしほの山の櫻はなかけし神よの春のむかしを

百五十番歌合し侍けるに　藤原景綱

いにしへの神代をかけてをしほ山しらゆふはなの今も咲らし

證定法師

花の色のしらゆふかけて玉くしけみむろの山に春風そふく

鎌倉入道大納言家月次御會　藤原泰綱

さほ姫のたむけの山の春風に雲にもなひく花のしらゆふ

題不知　藤原頼業

山里の人にとはゝや都よりほかにもかゝるはなやにほふと

道願法師

山たかみ心のゆきておる花は人にみすへきいへつとそなき

宇都宮神宮寺廿首歌に　淨忍法師

ちらぬまにいさかへりなん山櫻さかりをのちの思ひ出にして

權律師兼忠

よしの山みぬともおしき名殘かな昨日今日こそ花は散らめ

海邊歸雁　藤原頼業

松しまやをしまか崎の夕なきにかすあらはれてかへる雁かれ

歸雁を　淨意法師女

春といへは花なき里にゆく雁の心のうちやのとけかるらん

宇都宮神宮寺廿首歌に　藤原朝氏

かへる雁いかに契りて春ことの花にわかるゝならひなるらん

照因法師

ゆくすゑもおなしはるとや雁金の花に別をおしまさるらん

清原時高

おなしくは越路の花の散ぬまにかへらはいそけ春の雁かね

西圓法師

ちらぬまにかへるは花のうきなまておしき別の春のかりかね

百首歌中に　信生法師

足曳のかた山雉子うちはふき妻こひすなり春の明ほの

藤原泰綱

かつらきや雲も櫻もわかぬまてひとつ色なるはるの明ほの

明わたるとやまの花にうつろひて色の千草にたつ霞かな

藤原景綱

あけわたる峯のかすみのたえまより櫻にのこる入かたの月

藤原景綱よませ侍ける歌に　藤原時盛

くもるともいかゝいとはん春の夜の月にあまきる花のしら雪

題不知　平時重

さくら木の梢はかりやくもるらん花の雪ふる春の山さと

稲田姫社十首歌に　證定法師

かすみしく山のおのへの櫻かりぬれこそぬれめ雪は降とも

藤原時朝四十八首歌すゝめ侍けるに　大中臣能範

雪とのみふるやみかさの山櫻さすかにぬるゝ木のもとそなき

水上落花　親成法師

みなそこのかけのちかふと見えつるは梢の花の散にそ有ける

藤原景綱五十番歌合し侍けるに朝山花　坂上道清

菅原やふしみの里のあさといてに花のかむかふをはつせの山

題不知　蓮生法師

今そしる春はたつぬる山里の花よりほかのあるし有とは

藤原俊定

をのゝえも朽木のそまの山さくらはなに家路を忘れぬる哉

西入法師

花ゆへにをな故郷にかへりきぬ命そ世をはそむかさりける

鎌倉三品親王家に三百六十首歌たてまつりける中に

藤原時朝

花みれは身のうれへこそ忘れけれ軒端の櫻をやうへまし

百首歌中に　藤原景綱

わきかぬる雲と花とは山さくらうつろふころそ色をみせける

宇都宮神宮寺廿首歌に　源基氏

このころはたよりと人もおもふらん花ちりてこむ春の山さと

丹波國長

ちらぬより思ひにおつる涙哉あたなる花のうしろめたさに

題不知　蓮生法師

今よりはかくのみにほへ櫻はなこの春はかりのとけきはなし

あたにのみ思ひし人のいのちもて花をいくたひ惜みきぬらん

信生法師

山さくら散しく庭の名殘まてさそふ嵐にまかせすもかな

落花浮水　想生法師

吉野河なかれのすゑの里人は散てののちや花をみるらん

鶴岳社十首歌に　藤原景綱

ありてよの後はうくとも櫻はなさそひなはてそ春の山かせ

藤原基政

散殘る春もこそあれありてよのはてとないひそ花のきかくに

花の散かたになりけるをみ侍りて　藤原時朝

花の色をうつりにけりと見るほとに我身さかりの過にける哉

岸藤　信生法師

咲にけり誰にみせましおく山のいはかき沼の峯のふち浪

松間藤　源宗景

ふちのはな咲やときはの松にたに春くれかゝる色はみえけり

河邊歎冬　藤原景綱

山ふきの花のしからみせきもあへす春くれて行ゐ手の河波

暮春　清原公高

ちる花のわかれのみかはおほかたの春さへいまは暮かたの空

藤原實好

惜めともよもの嵐に散花の殘りすくなゝゝ暮る春かな

九條内大臣家へ三百六十首歌たてまつりける中に　藤原時朝

散殘る梢のはなをなかむれは春の日かすもすくなかり鳧

題不知　藤原頼業

花もちり春も暮ぬる山のはにかすみはかりそ猶のこりける

淨意法師

めくりあふならひ計りをたのみにて今年も春に又わかれぬる

新和歌集巻第二

夏歌

住吉社の會に　藤原時朝

花をみしそのこのもとをたちかへて夏そきにける衣手のもり

更衣　藤原泰宣

今はとやひとへにかへむ夏ころも花の袂をよそになしつゝ

藤原親時

たちかふる衣の袖はうすけれと春のなこりのふかくもある哉

清原公高

花ちるといとひし風のいつのまに袖にまたるゝ夏のきぬらん

藤原基政

まかへはやあをはましりの櫻色に今はうつきの花そめの袖

宇都宮神宮寺廿首中に隣家卯花を　素暹法師

春まては唯なをさりのへたてかとみえし垣根に咲る卯花

神祭を　淨意法師

けふとてもおりはやつさし柏木の葉もりの神は神ならぬかは

蓮生法師八十賀屏風歌　冷泉前大納言
しのひれのときはの杜の郭公まつほとにたに夏はしりにき
宇都宮神宮寺障子歌に　京極入道中納言
むら雨もふるの山邊の郭公おもひすつへき杉のかけかは
題不知　藤原重賴女
ほとゝきすなを待かぬる村雨に月さへ山をいてそわつらふ
鶴岳社十首歌に　藤原時盛
いたつらにねをなく山の郭公まつにしなれはつれなかりけり
藤原朝景
ほとゝきす鳴音またるゝ今宵哉空かきくもる旅のまくらに
藤原景綱
有明の月にまてとや郭公なのか鳴音もつれなかるらん
題不知　源宗景
ほとゝきすうらみても猶またれけりねられぬ月の有明の空
藤原親朝
人つてにことしもきゝつ郭公うき身をいとふ初音也けり
坂上道淸
一こゑに忘れやせましほとゝきすまつとせしまの心つくしは
蓮生法師
郭公たかすむ宿もあし引の山のかひある初音きかせよ
源親行
わけきつるおなし山路の郭公さとゝふくれもなきてすく也
冷泉前大納言家に百首歌たてまつりけるに夕郭公を　藤原時朝
しのへともたそかれ時やしるからんなのりそめたる山郭公
たいしらす　素暹法師
足引の山ほとゝきす山にてもなをめつらしき初音也けり
鎌倉右大臣家の御會に名所郭公　信生法師
こまやまのいしふむみれの郭公きく人かたきねをや鳴らん
藤原時朝稻田姫社にて講し侍ける十首歌に　右大弁光俊朝臣
鳴わたるつくはの山の郭公しるもしらぬもなへてきくなり
藤原泰綱
尋ねてもつれなかりけるほとゝきすかへる山路に一聲そきく
宇都宮神宮寺卄首歌に　藤原淸定
やまひこの聲もかはらす郭公いつれのかたをわきてきかまし
杜郭公　藤原時朝
いそちあまり老曾のもりの郭公なく音許りはをとりしもせし
題不知　藤原重繼
たつねきて袖にぬれぬる郭公なのか涙か杜のしくれか
素暹法師
たひにしてきくはかなしき郭公都にかはるねをや鳴らん
大中臣能範
郭公なく山さとにすむ人やまつもまたぬも初音聞らん
淨意法師
山かつもたゝにやはきく郭公まつの戸ほその明かたのこゑ
藤原賴業
世をすてはいらんとおもふ山端にかれてかたらふ郭公かな
圓勇法師
すみわひて聲たてつへき山里を鳴てもいつるほとゝきすかな
蓮生法師
かきりなきなみたとみせて郭公なのかさつきの雨になくなり

はとゝきす人の心をつくしきてをのか五月の空に鳴なり　彌陀信法師

五月雨に月こそみえねほとゝきす山より出る聲きこゆ也　平　幹縄

・五月雨の空によふかきほとゝきすなにをうけくの時と鳴らむ　藤原景綱

あやめ草ねにあらはれて郭公さつき來ぬれはなかぬ日そなき　藤原能季

出家ののち五月五日菖蒲のねにつけて人のもとへつかはしける　信生法師

思ひきや袖もあやめも引かへてよをうき沼のねをかけんとは

五月五日くすたまをこせたる人のもとよりそてのぬるるなと申たりける返事に　橘友家女

けふは皆かくる習ひのあやめ草いかなるねにか袖のぬるらん

菖蒲を　藤原基隆

なかきねの雫なからやあやめ草五月のたまと袖にかけまし

五月五日よめる　大中臣景範

我宿ののきはにきなけ時鳥けふのあやめのねをつくしつゝ

蓮生法師八十賀屛風歌　冷泉前大納言

五月雨はしのにきふれの河やしろぬれてほすへき夏ころも哉

山五月雨　丹波忠茂朝臣

ぬれてほすひまこそなけれ乙女子か袖ふる山の五月雨のころ

浦五月雨　藤原景綱

月かすのみつもりの浦の五月雨にほさてや蜑の玉藻かるらん

河五月雨　高階重氏

吉野川岩なみたかくなるまゝにきしもそこなる五月雨のころ

沼五月雨　照因法師

みこもりにからぬ菖蒲や朽ぬらんいはかきぬまの五月雨の比

題不知　大中臣能範

五月雨の雲のいつくにいてぬらんこよひはまたむ山のはの月

夜盧橘　坂上道清

さみたれの雲間の月も身にしみて花たちはなのにほふ比かな

宇都宮神宮寺廿首歌に　淨忍法師

たち花の袖のかたみとならさりし昔は何のにほひ成けん

鎌倉入道大納言家御會に隣家橘　源　親行

あしかきのすゑこす風のにほひきて昔もちかき宿のたち花

題しらす　信生法師

色も香もかたみ成けりしろ妙の袖になれにし軒のたちはな

權律師隆快

いにしへをこふる涙やふるさとの花たちはなの露となるらん

藤原泰朝

すみあらす誰ふるさとのあとならんひとりそ匂ふ軒のたち花

百首歌に夏夜易曙　藤原泰綱

暮るかとおもひもあへぬみしか夜の明行空に殘る月かけ

夏浦月　導阿法師

みしか夜の明るもしらすくむ汐に月かけはこふ田子の海士人

夏曉月　觀念法師

漕かへる鵜舟のかゝり消はてゝ又かけみする山のはの月

水上夏月　淨意法師女

はちす葉にをく白露の光さへ凉しくみゆる夏の夜の月

覺願法師

契りをかむ後の世まても友となれはちすの露にやとる月影

夏月如秋　坂上家光

秋きてはいかなるかけか又そはむかれてさやけき夏のよの月

百首歌中に螢を　源親行

飛螢ひかりみたれて久かたの雲ゐにちかき秋かせそふく

深更螢火　藤原景綱

螢とふなにはのこやのふくろよにたかぬ芦火の影もみえけり

水上螢　坂上滋家

難波江やあしまの水に影みえてなみの下にもとふほたるかな

宇都宮神宮寺廿首歌に　源憲綱

山のはに横きる雲のさはくよりけしきみえつる夕立の空

夕納涼　坂上家光

夏ふかき岩井の水の夕すゝみまたこぬ秋そくみてしらるゝ

題不知　佛也法師

日くらしの鳴ゆふ暮のむら雨に涼しくおつる槇のした露

行路夕顔　藤原泰綱

たよりにもみてこそすきめ玉鉾の道の行ての夕かほの花

鎌倉入道大納言家御會に六月祓を　藤原時朝

御そきする瀬々の岩浪音たてゝまた宵なからかよふ秋風

蓮生法師八十賀屏風歌に　冷泉前大納言

ゆふかくるたゝすの杜にみそきしてちとせの秋の初をそまつ

新和歌集卷第三

秋歌

百首歌中に立秋を　藤原親朝

けふといへはすゝしく成ぬ三輪の山秋のしるしの杉の下風

藤原時朝五十首歌に　藤原基政

おほあらきの杜の下露いとはやも草葉におきて秋はきにけり

圓嘉法師

夕されは置そふ露にしろたへの袖ほし侘る秋はきにけり

題不知　信生法師

故郷の道のしは草しけりあひて路なき庭も秋はきにけり

藤原重頼女

人とはぬむくらの門はとつれとも露のやとりに秋はきにけり

九條内大臣家へ三百六十首歌たてまつりけるに　藤原時朝

軒端なる荻ふく風をたよりにてひころをとせぬ秋はきにけり

稲田姫社十首歌に　右大弁光俊朝臣

初秋風ふきにけらしなかきほなる荻のうはの音たつるまで

源政家

我宿の軒はのおきに吹風のそよくにつけて秋そしらるゝ

題不知　平光幹

宮城野の草葉の露もわか袖の涙ももろき秋のはつかせ

蓮生法師

柴の戸やあたし心はむすひをかすさそひなはてそ秋の初風

西入法師

さ夜更て涼しくもあるか天河ゆきあひの橋の秋の初かせ

平忠幹

天の河紅葉のはしをいかにしてしくれぬさきにわたしそめ劔

百五十番歌合に深夜織女　藤原景綱

行合によや更ぬらんあまの河とわたる風の空に涼しき

證定法師

鵲の行合のはしの半天に霧立わたり夜そ更にける　源行宗

あふことは年にまれなるたなはたの心もしらす更る夜半かな　安部泰弘

曉織女

こひ侘しそのむつこともつきなくにあけなむとする星合の空　藤原親時

七夕後朝を

たなはたのかへるあしたはもろともに立やわかるゝ天の河霧　權律師仙覺

藤原時朝すゝめの三十首歌中に

秋を待あまの河原の一夜妻あさきりかくれ立歸るらむ　冷泉前大納言

蓮生法師八十賀屏風歌

おかし唯さか野の秋の花さかりいろのち草にをけるしら露　藤原朝景

稻田姬社十首歌に

今朝みれは野への千草のかすことにをのか色々花咲にけり　藤原親朝

行路萩

旅人のゆきゝの岡の秋の色を袂にみする萩の花すり　平忠幹

故鄕萩

たかまとのみやの昔はうへつらむ今こそ野への秋萩のはな　藤原泰綱

題不知

宮城野のふる枝の小萩咲ぬれは色にうつろふ秋のしら露　平時重

獨のみなかむる宿の小萩原さてや散なん秋かせそふく　蓮生法師

をく露のあたのおほ野に咲萩の花もてちらす秋風そふく　淨意法師

風のをとをあはれと思ふ涙よりみたれそめぬる秋のしら露　謙基法師

宇都宮神宮寺廿首歌に

したおきのすゝ葉みたれて吹風に袖より落る秋のしら露　證蓮法師

哀とはよそにきくへき風の音をこゝろとやとす庭の荻原　藤原重賴女

里はあれてふりゆく庭の荻の葉にとふへき物と秋風そ吹　藤原景綱

荻風

夕暮の笆は山のしたおきにやとりしらする秋風の聲　坂上道清

吹かふる音こそなけれ秋ことにかなしきまゝの荻のうは風　源長繼

かすならぬ身にも心はありけりと思ひしらする荻の上かせ　證意法師

薄

山かけにうへしおくてはつれなくてまつほに出るしのゝ小薄　藤原基隆

眺めむとうへてし物を花すゝきしけれはしけれ庭もまかきも　藤原親長

苅萱

秋といへは露をかされてかるかやの思ひみたれぬ夕暮そなき　藤原基政

秋夕

なへて世に物の哀をしることも秋のゆふへやはしめ成けん　藤原時朝

あはれ世のうきもつらきもしることは秋の夕そたより也ける　藤原陸淸

今そしるおはなかもとの草の名は秋の夕のこゝろなりけり　大中臣光成

おほかたの秋のあはれは棹鹿の妻よふ山のゆふへなりけり　平忠幹

そのことゝ思ひさためぬ涙こそ秋のゆふへの哀なりけれ
清原時季
さひしさは昔もかくやいそのかみふるき都の秋の夕くれ
藤原親朝女
千えに思ふ心そ色に出ぬへきしのたのもりの秋の夕暮
坂上滋家
あくかるゝ心よいかに成ぬらむ身にこそそはれ秋の夕くれ
藤原景綱
なはすてや月みぬさきの心たになくさめかねつ秋の夕暮
西圓法師
なかむれは雲のはたてもさひしくて空に物思ふ秋のゆふくれ
宇都宮神宮寺障子歌　壬生二品
春日山あさゐる雲の跡もなくくるれはすめる秋のよの月
蓮生法師八十賀屏風歌　冷泉前大納言
雲もなく更にけらしな久かたの月のかつらの秋のはつかせ
百首歌に　藤原泰綱
秋かせの夜さむになれはあまの河とわたる月の影そさひしき
平光幹
あまつ空四方の嵐に雲消て光のこさぬ秋のよの月
藤原景綱
雁かねのきこゆる山の高根より秋かせさむく出る月かけ
藤原時朝すゝめ侍歌に山家月　淨意法師
柴の戸やかけひの水に影見えて軒はをめくる山のはの月
鎌倉入道大納言家月次御會に深山月　藤原時朝
岩ねふみかさなる山のおくまてもすみけるものは秋のよの月
二條右衛門督中將ときこえし時鶴岳社にて五十首歌詠し侍けるに山路月　藤原泰綱
こえかゝる山路の末はしられともなかきをたのむ秋夜の月
同會に海邊月　蓮生法師
みなとこす入江の浪のひく汐に行かた遠き月のかけかな
百首歌中に　清原時高
さとの海士の浪かけ衣よるさへや月にも秋はもしほたるらん
野月　坂上家光
ゆふされはたまゝく葛にをく露のひかりをそふる野への月影
故郷月　淨意法師
露むすふ野原の萩の色なから袂にうつる夜半の月影
ふるさとにひとりいく夜を詠めきぬ忍ふにくもる軒の月かけ
山鹿　源宗景
秋來ても秋とはみえぬときは山いつとしりてや鹿の鳴らむ
なす野へかりしにまかりけるみちにて　藤原親朝
小男鹿の山路にかへる跡なれやすそ野の原の露のむら消
蓮生法師
秋萩の咲ちる野への朝つゆになを立ぬれて鹿そ鳴なる
藤原泰綱
高砂のおのへの霧に立なれて妻をこめたるさをしかの聲
遠鹿　高階重氏
はるかなる麓の里にきこゆなり峯に夜ふかき棹鹿のこゑ
野鹿　藤原泰重
棹鹿のなかき夜すから聲たてゝ明ての後や野への草ふし
槿花を　淨意法師

秋ことにかはらぬ色をなかめてもはかなき物はあさかほの花

権律師仙覺

朝かほの夕かけまたぬ花にこそ定めなき世はいとゝしらるれ

山家槿花　源長繼

庭のおもは日かけもさゝぬ谷の戸に盛り久しきあさかほの花

百首歌中に　信生法師

あさな〳〵露寒したかまとの野邊の秋はきうつろひに鳬

蓮生法師

鴈なきて萩の下葉の色つくは我袖よりやならひそめけん

藤原景綱

消あへぬ萩のうはの朝露をなみたとみせて鴈はきにけり

蓮信法師

かりかねのなみたやかけてみえつらん草葉にむすふ露の玉章

藤原朝景

初雁の聲もほのかに聞ゆなり霧たちわたる明ほのゝ空

題しらす　淨意法師

あま小舟初かりかねも時しあれは聲をほにあけて鳴わたる也

藤原基政

かへるさに花をみすてし恨みまて月にはれたる初雁のこゑ

清原公高

秋かせにまつとしりてや初かりのいなはの山の峯に鳴らむ

冷泉前大納言家に百首歌みせたてまつりける中に　藤原時朝

久堅の雲のころもをかりかねのつはさにかけて秋はきにけり

信生法師

あさといての衣手さむみ雁金のきこゆる空に秋風そふく

行路秋　藤原經光

ゆくすゑの麓のおはな打なひき朝霧はるゝ野邊の秋風

秋夜雨　藤原景綱

吹まよふ嵐のかせにたくひきてねさめにかゝる秋のむら雨

あき山里より人のもとへ申つかはしける　蓮生法師

風ふけは草葉にもろき露をみよみやまの秋の袖にまかへて

鶴岳社十首歌に　西圓法師

なみたのみ身にそふ山の深き夜に月もはなれぬ秋の空かな

題不知　坂上道清

あるをこそ慰めさらめあちきなくなき思ひさへ月のそふらん

宇都宮神宮寺廿首歌　淨意法師

身のうさも忘れやするとなかむれは猶袖ぬらす秋夜の月

藤原時朝館の會に月を　源孝行

涙ゆへくもるならひとしられなはうき身を秋の月やいとはむ

題しらす　藤原時家

いそち餘りなれこし秋もしられつゝ隈なき月に老そかくれぬ

藤原泰綱

むそちまてみるへき物と思ひきや心のほかの秋のよの月

圓智法師

さても世におもふ心や殘らましみさらむのちの秋のよの月

大中臣能範

あたら夜のあめの中にそ更にけるいるかたはるゝ山端の月

親成法師

いつの間に隈なき空のしくれつゝはるゝもやすき秋のよの月

あかて入月にそへつる心こそかけとなりてもゆきめくるらめ

圓勇法師
わきてみむいくよもあらし長月のはつかにあまる山のはの月
鎌倉三品親王家の十首御會に月前擣衣　源親行
心なきしつはた衣織はへてうたすは夜半の月にねなまし
里擣衣　藤原時盛
をとなしの里とはいはしすむ人のあれはや今も衣うつらむ
百首歌中に山家擣衣　想生法師
秋風やさむく吹らんしからきのとやまの里に衣うつなり
題しらす　藤原景綱
鳴あかす野原の虫のおもひ草おはなかもとや夜寒成らん
宇都宮神宮寺廿首歌に　謙基法師
秋の夜の長きおもひはをとらぬに我のみとなくきり〳〵す哉
題しらす　西仁法師
悲しさは秋のならひそきり〳〵す思ひ忍ひてなかすもあら南
平經成
ふるさとのかきほあれてやきり〳〵すふかき蓬の露に鳴らん
清原公高
今ははやあさちか原もかれ〳〵にむしのねよはる秋風そふく
有尊法師
鳴かはすあさちか庭のむしのねになみたをそへぬ夕暮そなき
源親行
手枕によはりなはてそきり〳〵す涙の露はしもゝむすはす
成願法師
をく露に淺茅か原はうら枯てさひしく成ぬ松むしのこゑ
藤原國弘
夕されは哀身にしむ秋風をうらみかほなる松むしのこゑ
顯信法師女
しくれにもつれなき色は殘りけり青葉ましりの峯の紅葉は
蓮生法師
紅葉々に入日のかけや殘るらんしたてる山の秋の夕くれ
建長三年九月三嶋社歌合に　藤原時朝
外山なるならのましはの色つきて夜寒に秋の成まさる哉
宇都宮神宮寺障子歌に　京極入道中納言
秋にあへす色つきそめし立田山いまは時雨の染ぬ日そなき
題しらす　淨意法師
いかにして月の桂のもみつらん雲のあなたはしくれしもせし
藤原泰綱
しくれ行日かすにそへてかた岡の杜の木葉は色まさりけり
藤原景綱
時雨する生田の杜のもみち葉はとはれむとてや色まさるらん
想生法師
をしなへて時雨にけりな足曳の山のはことに色まさり行
玄長法師
初時雨ふるからをのに秋更てならのはかしは色つきにけり
清原時季
はつしくれいかにそむれは立田山峯のもみちの色増るらん
蓮生法師
ときは山岩ねに殘るした紅葉吹もわすれよ木からしの風
信生法師
秋といへはしのひもあへす忍ふ山色にいてゝも散木のはかな
千早振神なひ山の秋かせに峯のもみちやぬさと散らん

この葉ちるいはせの杜をみはたせはならしの岡も秋風そふく　源基氏

見るまゝに千枝のはもりの神さひて信田の杜に秋そくれぬる　清原時高

惜めともとまらぬ秋の名殘までなをしたはるゝ夕暮の空　藤原泰綱

新和歌集巻第四

冬歌

百首歌よみ侍ける中に初冬を　藤原泰綱

神なひの杜のこのはもかつ散てしくるゝ空に冬はきにけり

蓮生法師

みやまへの秋にわかるゝ袖のうへにやかて降ぬる初時雨かな

山家時雨　西入法師

初しくれきのふも今日もしからきのとやまの里に冬はきに凫

夕時雨　藤原實好

雲まよふ夕の空の風ませにしくれて寒き神無月かな

曉時雨を　權少僧都明喩

夜も今は明ぬと思へと足曳の山かきくもりふるしくれかな

海邊時雨　藤原親長

おきつ風よそのむら雲さそひきてあまの笘屋にしくれふる也

題不知　蓮生法師

雲ちかき深山の庵のしるしとて時雨の音のことにはけしき

行圓法師

くもまよふ夕のかせと見しほとにこの里まても時雨きに凫

半天にうきたる雲のいつくより風にまかせて時雨來ぬらん　藤原基隆

鶴岳社十首歌に故郷時雨を　藤原景綱

高砂のおのへの宮の夕しくれ山もとかけてふらぬ日もなし

後久我太政大臣家に三百六十首歌みせたてまつりける
中に　藤原時朝

世中をあきはてゝよりむら時雨ふるは我身の涙なりけり

題しらす　坂上道清

あらし吹庭のこのはのふる郷にしくれせぬよも袖はぬれけり

藤原重繼

しくれつゝ山のこのはのふるさとにあかすちれとや嵐吹らん

河上落葉　藤原時朝

紅葉々のなかれていつるみなと河これやにしきの浦といふ覽

題しらす　淨意法師

吹すくる音はひとつにたくひきてよはる嵐に散このはかな

藤原泰綱

あらし山さそふ紅葉やうつむらん麓の里は道まよふ也

想生法師

紅葉ちる嵐の山の月かけはしくるとみえてくもり増り凫

信兼

山風や殘るもみちをはらふらん木かけくもらぬよの月

坂上道清

さゝ浪やひらの高根の木からしにうみ山かけて散紅葉かな

藤原朝景

山河の水はこの葉にうつもれて空にのみすむ冬の夜の月

藤原朝氏

なかき夜のまた明やらぬ柴の戸のねさめに寒き木枯の風
謙基法師
初霜のけさいろ〳〵にみえつるはうつろふ菊になけは也けり
藤原時盛
をのつから秋みし色もなかりけり霜の下なる庭のしら菊
蓮生法師
百首歌に
ゆふかりに鳥ふみたつるならしはのはをとまきれて霰降なり
冷泉前大納言
蓮生法師八十賀屏風歌
風さむみうちの網代の日をへてはいさよふ浪もかつ氷りつゝ
浄忍法師
宇都宮神宮寺廿首歌に
せたえして流もやらぬふる河のみさひなからにつらゝゐに鳧
尼 西 蓮
たいしらす
まきもくのあなしの河やこほるらんもりくる水の音むせふ也
平 光 幹
吉野山花より後のさひしさをけふなくさむる峯のはつ雪
證定法師
降雪ははなとまかへとよしの山春よりさきにとふ人そなき
坂上家光
深山初雪
木のはにもたえて久しき深山路をなを降うつむ今朝の初雪
蓮生法師
百首歌に
ときは木のしけきみ山にふる雪は梢よりこそまつ積りけれ
藤原泰綱
はれやらて時しもわかすふる雪のつもりて高きふしのしは山
藤原景綱
鶴岳社十首歌に
いかはかりみ雪降らしかひかれはさやにもみえす雲の懸れる
清原時季
山雪を
草も木も春にしられぬ花咲て雪にときはの山なかりけり
權律師仙覺
花ならはさかぬ梢もましらましなへて雪ふるみよし野の山
仙風法師
しら雪の消ぬかきりは烏羽玉のくろかみ山も名のみなりけり
權少僧都明喩
古寺雪
麓にはあか井の水もあらし山むすふ氷につもるしら雪
藤原泰重
山家雪
かりそめにむすひし柴の庵なれと雪ふる里と成にけるかな
橘友家女
故郷雪
をのつからとひこし人もしら雪のふるさと今は跡たえにけり
坂上道清
百首歌中に
しからきの外山もふかく降雪にひはらかおくを思ひこそやれ
京極中納言家へ千首歌みせたてまつりける中に
藤原時朝
降雪にうつもれゆけは柴の戸をたゝく嵐のをとつれもなし
西善法師
題不知
月影のさすにまかするしはの戸をたゝくや峯のあらし成らん
信生法師
とふ人のあとなき宿のさひしさも庭の雪にそあらはれにける
藤原泰朝
さをしかのあとはかりして山里の雪のあしたは淋しかりけり
源 親 行
ふる雪にみつのむら芦したおれて音もかれゆく冬の浦風
丹波廣長朝臣
そことたに煙もみえすしろ妙の雪のしたなるしほかまのうら

蓮生法師

こぬまても道あるほとはまたれけり思ひたえたる山のしら雪

藤原基政

踏わけし紅葉のあともみえぬまて又降かくす庭のしら雪

權律師隆快

いにしへのあとふみつくる雪の中に哀もふかしなの〻山さと

山路雪　藤原朝氏

かよひこしあと降うつむ雪の中にふみたかへたる岩のかけ道

樵路雪　清原公高

道そとは心あてにやわけつらん雪より出る冬の山人

沼水鳥　安部泰弘

散積る山のこのはにかくれぬのそこともしらぬをしの一こゑ

月前水鳥　近阿法師

雲かとていとへはやかてすきにけり月によこきるあちの村鳥

河水鳥　平忠幹

湊かせさむき夕のしほさひにいはかはのほる鴨のむらとり

宇都宮神宮寺廿首歌に　神行郊

あしのねのしけき入江の水鳥はしたやすからぬねをや鳴らん

河邊千鳥　信生法師

月かけもきよき河原に霜さえて夜や更ぬらん千鳥なく也

藤原景綱

霜ふかき岩垣こすけふみわけてかよふ河原に千鳥鳴なり

賀茂有忠

かせわたるむつたの淀の河千鳥なく音もさむし冬の夕くれ

海邊千鳥　藤原泰綱

さよころもさへ行袖のしほ風にことうらかけて鳴千鳥かな

丹波忠茂朝臣

うな原やなこのしほひの濱千とり鳴れもさえて浦風そふく

磯千鳥　清原公高

有明の月かたふきて松しまやをしまか磯に千鳥なくなり

夕鷹狩　行圓法師

かり暮すかた野のき〻す聞ゆ也ふみのこしたる草はなけれと

神樂　座蓮法師

庭火たくあたりもさゆる冬の夜に霜のしらゆふかくる榊葉

題しらず　信生法師

老ぬれはやすくもとしの暮る哉むかしもおなし月日なれとも

源宗景

あはれわか命のほとをおもふにもすくるはおしき年の暮かな

浄忍法師

ゆくとしを今いく度かおしむへき身なからしらぬ命なりけり

藤原時朝

行年のけふも暮なはますか〻みうつりしかけも猶やかはらん

年中に春のたちけるつこもりによみ侍ける

浄意法師

あやなしやけふを限のことしたに思へは春の日かすなりけり

新和歌集巻第五

賀歌

百首歌に寄鶴祝　藤原泰綱

天の原雲井のたつの聲なから空にも千世の初をそしる

八十賀し侍し時の歌に　蓮生法師

法の道あとふむかひはなけれ共これもやそちの春にあひつゝ
冷泉前大納言
はかりなき命はやそちたもちきぬ末のみのりの萬代もみよ
土御門大納言
八十まて久しくへたる年のをのなかきかひある春にあふらし
權中納言
めくりあふ限りもしらぬ春なれは八十年のすゑも猶そ久しき
左京權大夫信實朝臣
我よはひ君かやそちにをよふてふ猶ゆきつれの千世を待ける
左中將經定朝臣
やそちふるけふを千年の初にてなを行末のほとそひさしき
少將內侍
なをも又ちよのよはひのしるき哉いまのやそちの心ならひに
辨內侍
はるかなる人の齡をかそふれはかつ〳〵今そやそちなりける
下　野
かそへしるやそちの峯の松風になをよろつよと山そこたふる
法印長惠
西の山八十のさかはたかくともなをのほるへき峯そはるけき
日吉禰宜成茂
神に祈るやそちのかすはおいらくの萬代ふへきはしめ成けり
稲田姫社十首歌に寄神祇祝　藤原時朝
君か代も我よのすゑも久かたのあまくたります神そ守らん
寄河祝　平　朝定
みなかみも流れのすゑもすみた河濁らぬ御代のためし成けり
藤原時朝在京の時會し侍けるに寄神祇祝

惟宗行經
たまつしま神のうけゝるしるしとて色ある人や光まさらん
題しらす　想生法師
いそのかみふるの社の榊葉の色もかはらぬ君か御代かな
顯信法師女
我君のときはかきはのためしとや神代の榊折はしめけむ
寄月祝　源　宗景
曇なき月も千とせのいくめくり君かみかけとともにすむらん
寄松祝　藤原眞義
君か代ののとけき春の色そへてみとりそふかき野への若松
淨意法師女
神代より思へは久しすみよしの松をや君かためしにはせむ

神祇歌

少將にて宇都宮へくたり侍けるついてに白川の關みはへりて　權中納言
しら河のせきのあるしの宮柱たかよにたてしちかひ成らん
題しらす　有尊法師
白川のせきもる神も心あらはわか思ふことの末とをさなむ
日光山にて神祇の歌よみ侍ける中に　權律師謙忠
すへらきの治まる御代を思ふにも國とこたちの末そはるけき
しるらめやとよあし原の声かひのひらけてなれる國津神とは
よをてらす日の光こそのとかなれ神の名におふ山のかひより
宇都宮によみてたてまつりける
東路やおほくのゑひすたいらけて叛けはうつの宮とこそきけ
宇都宮にくたりて侍けるに當社三所大明神はたひ人を

あはれみ給ときゝて寶殿のはしらにかきつけゝる　藤原仲兼
たひ人の心やすめよ千早振みところ神もさそちかふなる
三輪社にて　蓮生法師
ふりにける神代の杉はそれなから尋る人やかはり行らむ
修行の時太神宮にまいりて　信生法師
年ふとも色はかはらし神風やいすゝかはらの水のしらなみ
賀茂のみあれにまいりてよみ侍ける　藤原時朝
そのかみに心をかけしあふひ草けふのみあれにかさす嬉しさ
たいしらす　座蓮法師
神山やけふのかさしの葵草かくるたのみのゆくゑしらせよ
覺願法師
いくとせか涙のしらゆふかけつらん岸邊にたてる住よしの松
鶴岳社十首歌に　藤原朝景
すみよしの神のいかきはふりなからいつも變らぬ松のむら立
たいしらす　藤原親時
住吉の松のみとりはかはらぬに年へにけりといかてしるらん
宇都宮神宮寺廿首歌　平　秀政
すみよしの松はかきりもなかりけり濱の眞砂の數にまかせて
住吉社にまいりて　藤原親朝
しきしまややまとしまねを住吉とさためて神も跡やたれ劍
百首歌中に社頭月　藤原泰綱
をしほ山松も久しき神代よりかはらぬ月のかけそのとけき
藤原景綱
あとたるゝ神のちかひやかゝるらんおふくみ山の秋のよの月
撿非違使になりて白褉始に鹿嶋社に參てよみ侍る　藤原時朝
ゆふたすきかけていのりし白妙の袖にもけふはあまる嬉しさ
五位尉になり侍て宇都宮にまいりてよみ侍
しめはふるあけの玉かきうつりきて猶色まさる我たもと哉
宇都宮神宮寺二十首歌に　謙基法師妹
ふたつなきみつなきのりの玉かつら神も心にかけてあはれめ
題しらす　丹波忠茂朝臣
おほ江山昔のあとのたえせれはあまてる神もあはれとやみん
圓勇法師
千早振神のみむろのみしめ繩くる人ことに世をいのる哉
日光山にまうてゝ　淨意法師
なにことを松の嵐もおもふらんおり〳〵たゝく神のよりいた
三嶋社にまいりて　空寂法師
隈もなき月をみしまの山風によをうき雲はのこらさり覓

釋敎歌

八十の賀し侍けるに　蓮生法師
たきゝつきてふたちとせにも成ぬれは空は煙とかすむ春かな
左京權大夫信實朝臣
かすむよもこのはかくれにゝたる哉わしのみ山の春の月かけ
權中將光成朝臣
わしの山つれにすみける影なれはかはらすみゆる春のよの月
左近中將爲敎
たえすすむおもかけみせてきさらきやおなし昔のもち月の空
藻壁門院但馬
ゆく道をたしふる法のなくはこそひみつの河の涙にさはかめ

普往生觀の心を　權律師賴觀
ゆきやすき道としりぬる心こそやかて浮世の外にすみけれ
因解悟百千門の心を　信生法師
鶯のはるを告たる一聲にさとりひらくる花のいろ〳〵
光明寶林演說妙法の心を
このまより洩くる月も松風も心すゝむる夕くれの空
耆闍流通の心を　蓮生法師
み山にもおなしにほひに咲にけりみやこの花の色もかはらて
在々諸佛土常與師倶生の心を
なしへなく露のかことをたよりにてひとつ草葉にやとる月影
下品下生の心を
みちもなくわすれはてたる故鄕を月はたつれて猶そすみける
入於深山思惟佛道
ふみなれし浮世のあとは絕はてゝ道なき山に道を尋ねん
日想觀　權僧都明喩
山のはの入日にむかふ夕くれはたのむ光のさすかとそみる
空花の喩を　證觀法師
いかなれは花とはみけんしら雲の峯にわかるゝ色そむなしき
止觀第六卷に初果猶未斷の心を　西圓法師
曉はほのかに殘るともし火の消なむとてや光そふらむ
日光山にて又如淨明鏡悉見諸色像の心を　權律師謙忠
曇りなきおなしかゝみに見る人のおもひ〳〵の影そかはれる
我宿何罪生此惡子の心を　藤原時朝
今更にみぬさきのよのつらきかなさらすはかゝる物は思はし
說是語時無量壽佛住立空中の心を
ほとゝきすかたらひいつる雲間より影あらはるゝ有明の月
六道輪廻の心を　佛也法師
浮世には今いくたひかむまるへきこれを限の我身ともかな
人命不停過於山水
山河のなかれてはやき水よりもとまらぬ物は命なりけり
たいしらす　平忠幹
さとりいろまことの道はひとつにてまとふに多き法の門かな
松嶋の見佛上人に法華經申うけ侍りてこの緣によりて後生にかならすあひたてまつらむとてかへり侍けるにかの上人のもとより
なかきよの闇にもまとふ身なりともれふり覺なは君を尋ねん
返事　蓮生法師
やみちにはまとひもはてし在明の月まつしまの人をたのみて
藤原時朝あまたつくりたてまつりたる等身の泥佛をおかみ奉りて　淨意法師
君か身にひとしときゝし佛にそ心のたけもあらはれにける
返事　藤原時朝
心よりこゝろをつくるほとけにて我身のたけをしられぬる哉
鹿嶋社にて唐本一切經供養し侍ける時ひころはあめやます侍けるかけふしも空はれてことゆへなく供養とけぬる事とて導師　權僧正隆辨
今よりや心のやみも晴ぬらん神代の月の影をうつして
返し　藤原時朝
千早振神代の月のあらはれて心のやみは今そはれぬる

新和歌集巻第六

離別歌

あつまへくたり侍けるにみちより申つかはしける　淨意法師
しろらめや和歌の浦ちを立わかれ友なし千鳥雲になくとも

返し　京極入道中納言
今はとて立わかるなろうら風はかへる波ともえやはまたるゝ

もとは都の人の下野に侍けるかあからさまにのほりてくたりけるに申つかはしける　惟宗行經
すみわひしもとの都を忘るなよ今はあつまの人となるとも

百首歌に別　藤原泰綱
一すちにゆくを別といひもせしとまるもおなし名殘ならすや

宇都宮にくたりて侍けるあかつきはたゝんとての夜人人名殘をおしみ侍けるに程なくあけにけれはまかりたちてみちより　藤王（橘下傀儡）
曉のつらさはいつもならひにきあやなかりつるよはのほと哉

京よりくたり侍けるにいけたの傀儡かめつるきせかはまてあひつれて侍けるかそれよりかへし侍るとて　藤原時朝
なれきつる袖の別の露けきはかたみにかゝるなみたなりけり

さくり題に別を　照因法師
かへりこむほとしもあらし高砂のまつとないひそ心つくしに

あひかたらひて侍ける女を出家ののちおやのもとへつかはし侍けるときゝて申つかはしける　信生法師
かきくらしゆく空もなき別にはとまるもとまる心ならしな

返事　蓮生法師
今更にわかると何かおもふらん我こそさきにいへは出しか

蓮生法師京へのほりけるに申つかはしける　藤原時家
わきてよのわかれは悲しもろともに老ては末の殘りなけれは

羇旅歌

大番はてゝくたり侍けるに白川の花のこすゑみすてかたくおほえけれは　平光幹
しら河の梢にとまるこゝろかな都をいつる春の明ほの

嘉禎四年春の頃將軍家御上路（洛歟）の時供奉し侍けるにはまなのはしにてよみ侍　藤原時朝
立わたるはまなのはしの朝かすみみて過かたし春のけしきは

藤原景綱百五十番歌合し侍けるに羇中嵐　證定法師
たひ衣かさなる雲はとたえして嵐をわくる峯のかけはし

旅夕　淨意法師女
鳴海かたしほのひるまを待ほとに行やらぬ道に日そ暮にける

旅泊重日いふことを　仙風法師
けふも又むこ山おろしうみふけはいなの湊になをやとまらん

藤原時朝五十首歌に　藤原基政
かち人は曉ことにいそけともやとにさきたつ夕暮そなき

修行し侍けるに八はしの木のかけにをりゐてかきつはたをよみ侍ける　信生法師
かきつはたよゝを久しくへたてゝも昔のあとの色そ殘れる

信生法師にあひつれて侍けるか折句によみ侍ける　西音法師

かくしつゝ消もやられぬ露の身の果はいかなる旅にか有らん

宇都宮神宮寺廿首歌に　藤原時家

はる〳〵とさやの中山なかき日にこえても遠きあつま路の末

素暹法師

こえなはと思ひし峯にきてみれはなを行末も山路也けり

たいしらす　蓮生法師

いしふまぬあその河原に行暮ぬみかほの關になをやとまらん

藤原泰綱

たひ衣あさたつ野へのしら露のをきてや袖のぬれ増るらん

法眼頼瑜

草枕ふたゝひむすふやともなしそこら旅れのかすはつもれと

野旅　源親行

むさし野や落て草葉に猶そをくわけゆく人の袖のしら露

旅月　藤原景綱

月にこそ宿もさためすあくるかなよるはこえしと思ふ山ちを

旅關月　座蓮法師

秋しもあれ都をいてゝ東路や清見かせきの月をみるかな

旅宿惜月　藤原朝氏

あつまちは都戀しきたひなれは入かたしたふ有明の月

百首歌中に　圓勇法師

ゆきかへる雲井の雁にことつてん都はとをきつほのいしふみ

冬朝旅　念生法師

霜むすふ野路の笹原ふみわけて朝たつ旅の袖そさむけき

題不知　藤原景綱

末とをきゐなの笹原行暮ぬ嵐をさむみ宿はなくして

藤原頼業蓮生舍兄

かたしきの袖のなみたのいかなれは草の枕もうきしまか原

信生法師

草まくら家路を何かいそくらむ故郷とてもかりのやとりを

祖父の配所へおもむき侍けるに中山といふ山をこゆとて　蓮生法師

行末もおほつかなきをいかにしてしらぬ山路を一人こゆらん

旅宿松風　照円法師

苔ふかき岩根かたしく袖の上になれぬみ山の松かせそふく

證定法師

夢のうちはいつくもおなし旅なれはさむるうつゝの都をそ待

哀傷歌

尾張權守藤原經綱泰綱之子すみ侍ける人身まかりて後夢になむあみたふつといふもしをはしめにをきて歌をよみてとふらへと見侍けるときゝてよみてをくりける　冷泉前大納言為家

みしはうくきくはかなしき世中にたへて命のうたて殘れる

權中納言

ふかゝりし契りのほとを思ひかはあさからすとは涙にそしる

右兵衛督

つゐにゆく道のしるへとたのむ哉すゝむる夢にむすふ契は

左京權大夫信實朝臣

もらすなよ千尋の底は重くとも誓ひのあみのうけにすくひて

左中將光成朝臣

なかめつる花も浮世の色なれは散を別となをしらせけり

中務大輔爲繼朝臣

つてにきく御法の海はふかくとも猶ゆきやすき方を賴まん

法眼圓瑜

なにとしてをくれ先たつ習ひのみ定めなき世にかはらさる覽

蓮生法師

哀なをとまる命もある物をかはるならひのなとなかりけん

藤原泰綱

身のうさも辛さも一つ別れにて思ひとくにそれはなかれける

藤原賴業

ふして思ひ起ても夢の心ちしてうつゝならても世をすくす哉

藤原時朝

ありてうき身はなからへて世中におしみし人の別れをそとふ

藤原經綱 尾張守泰綱之子

露の身の消にし跡のわかれにはぬるゝ袂そかたみなりける

藤原時光

見し人のなきを夢とはおとろかしあるも浮世の現なられは

藤原景綱

なにかその人の哀もよそならむうき世の外にすまぬ身なれは

一首によみてをくりける　平 長時

なもあみた佛といまは契りても浮世の夢をおとろかすらん

昔あひしれる人のもとよりなくなれる人のかすをしる
してをこせ侍ける返事に　淨意法師

みし人のなきをしらてそやみなましうきは都のたより也けり

壬生二品身まかりぬときゝてたよりにつけて申つか
はしける

いかはかりかつなけくらむよそにたにみし面影のさらぬ別を

侍從隆祐朝臣

返事

今もなを歎をさらぬ別かなみたれすみえしおはりなれとも

あひともなひたりける女わつらふことたいしになりて
ほかへうつり侍ける時おりからしくれのし侍りけれは　平 經時

忍ひれのなみたあらそふ初時雨いつれかまつは袖ぬらすらん

たいしらす　藤原賴業

別れにし人のかたみの夕けふりいかなるかたの雲となるらむ

父信生身まかりたりけるのちのわさし侍りてあしたに
よみ侍　藤原時朝

たき捨し煙も今はたえれともけたぬ思ひは身にのこりけり

武藏守平經時の室身まかりにけるころ　蓮生法師

たれよりも心安しと思ひしはまさる歎のふかき也けり

としころあひなれけるおとこ身まかりて後よみ侍りけ
る　尼 西蓮

新撰古ニ入
別てはなからふへくもなかりしにあれはあらるゝ憂身也けり

母の身まかりけるに念佛すゝめておもひのことくおは
りとけ侍りぬと聞て申つかはしける

左京權大夫信實朝臣 法名寂西

をしへやる道をまことゝ思ふにも心やすくそ人はさきたつ

返事　蓮生法師

ゆきやすき道にも人をさきたてゝ跡を尋ぬるほとそかなしき

五十日逆修とけ侍てはか所なとしたゝめをくよし申つ
かはしける

しはじなを此世にありとみきくともとはゝ昔の跡とたつねよ
返し　九條三位（蓮生ノ女カ可尋）
君はよしさてとゝまらは別れちに我そさきたつ跡はとはれん
たいしらす　信生法師
思ひ出ることの葉になく露の色をいつくの草の陰にみるらん
あつまよりあひくして侍ける女京にてはかなくなりにける後かのおとこひとりくたるときゝて申つかはしける
なき人のかけやはみえむ石清水又あふ坂の關はこゆとも
武藏守平經時の室みまかりにける中陰にこもりて九月十三夜に雨の降けるに人のもとへ申つかはしける　藤原時朝
物思ふこのさとはかりかきくれて外にや月のさやけかるらん
長門守藤原時朝女になくれて侍ける比人々に無常十首よませけるに寄雪無常　淨忍法師
久かたの雨にましりて降雪のしはしあるへきよとは頼ます
寄露無常　西音法師
露むすふ草葉を分る旅人もなくれ先たつみちやしるらん
寄雲無常
わかれにし心よいかにあま雲のよそにきくたに袖そしほるゝ
寄花無常　源頼明
なき人のかたみにしのふ櫻はなわすれて過よ春の山かせ
若松の禪尼の四十九日卯月の六日なりしにけふはみなきみ忍ひれなく人もしらすかほなるほとゝきす哉と申つかはしたりし返事に　藤原景綱
けふのわか心なしらは郭公しのはぬほとの音なそなかまし
母の服に侍ける五月五日によめる　淨意法師女
墨染の袖になみたのかゝる哉五月の玉をよそになしつゝ
たいしらす　蓮生法師
思へたゝさらてもいそく道に又さきたつ人をしたふならひは
人の後生とふらへと申たりける返事に
とまりゐはとふへき物と思ひしれたか先たゝん事はしられと
はかなくなりにける人のはかにまかりて　藤原朝基
なき人のおもかけとまる跡にきてけふは袂に露をかけつゝ
たいしらす　平光幹
風にちる花よりも猶はかなきはおしみし人の命なりけり　藤原朝氏
おほかたのはかなき世をは歎けとも身の上しらぬ我なみた哉
　　御所かくれさせ給ひてのちつれの御所にまいりてよみ侍　藤原重頼女
いかはかり涙もちりもつもるらん君なき床のふるき枕に
武藏守平經時の室身まかり侍ける比　藤原泰綱
夢とのみ思ひてたにもなくさまむみし面影のうつゝならすは
たいしらす　想生法師
然りとて夢とはいかゝ頼むへきうつゝはかなき世とは思へと　藤原基氏
われは又たかれ覺にかかたられむこよひも人を夢にみるかな　藤原親朝
はかなしやうつゝはいつの習にてさなから夢のよを歎くらむ　眞空法師

幻のあるかなきかの世中にうつゝすくなき夢にそ有ける

百首歌に　有尊法師

くれ竹のみしかきよはの夢よりもみはてぬ物はうつゝなり鳧

淨意法師

昔よりなくれ先たつならひあらは別れをさらになけかすも哉〔マヽ〕

女のおもひに侍ける比おなし思ひなる人のとふらひける返事に　藤原景綱

思ひやれをくるゝあとの心をはうかりし時になれてしるらん

世中さはかしくて人々おほくうせにけるころよみはへる　藤原景家

今更に驚くへしやあたしよにたとひいかなることをきくとも

新和歌集巻第七

戀歌上

百首歌中に初戀　藤原景綱

みぬ人のうはの空にも戀しきはなにをたよりの心なるらむ

宇都宮神宮寺廿首歌に　淨忍法師

由良の戸を朝霧かくれ漕舟のこひわたるとも人はしらしな

神行郊

君こふるわれとしらなんいはせ山谷のした水忍ひ〳〵に

寄鳥忍戀　座蓮法師

足曳の山ほとゝきすこかくれて人にしられぬねをのみそなく

寄涙戀　平秀政

しのへともをさふる袖をもるものは心にあまる涙なりけり

藤原景綱

しのふるもおなしわか身の心よりほかなるものともる涙かな

清原公高

思ふよりぬるゝは袖のならひにて戀にさきたつなみた也けり

百首歌に　佛也法師

なにゆへにつれなき人を恨むらんおもひそめしは心なりけり

座蓮法師

さても猶しのはむとこそ思ひつれたか心よりおつるなみたそ

寄草初戀　藤原泰綱

淺茅生のをのゝしの原尋てもおもふあまりをいかてしらせん

藤原時朝稲田姫社にて十首歌講し侍けるに欲言出戀　右大弁光俊朝臣

それをたに暫しやすめて慰めむいはねはむねのさはく思ひを

たいしらす　高階重氏

荒磯のいはにかけこすしら浪のくたけて人をこひわたるかな

蓮生法師

秋山にしもふりおほふ紅葉々の下こかれなるこひもするかな

藤原親朝

大ゐ河うふれにともす篝火のかゝりとたにもほのめかさはや

大江經盛

かくとたに思ふ心をしらせはやさのみはいかゝ忍ひはつへき

權律師隆快

いかにせむ涙のいろもかひそなきとへかし人のものや思ふと

平時重

ゆきかよう心はかりをしるへにて忍ふおもひをとふ人もかな

彌陀信法師

あらはれてたかなみたとかかこたまし忍ふにおつる露の白玉

蓮生法師
今はたゝおもふ心を殘りなくしらするほとのことのはもかな
藤原景綱歌合し侍けるに　橘友家女
さえゆけはなみたもこほる冬夜に獨かたしく袖をみせはや
題しらす　藤原泰朝
ときしあれは春は氷も消にけりいつかは君かわれにとくへき
寄涙増戀　藤原泰綱
名とり河せゝにくたくる岩浪の猶わきかへり思ふころかな
源　親行
限りあれは岩に碎くる白浪もあらはれてこそつれなかるらめ
冷泉前大納言家に戀百首歌奉りける中に　藤原時朝
吹風の音にたてゝもしらせはやのきはの荻のそれとはかりも
忍久戀　源　宗景
としふとも色にはいてし時雨つゝくもゐる山の峯のときは木
戀歌よみ侍ける中に　浄意法師
心にはしのふもちすりしのへともみたれにけりな袖のしら露
互忍戀　清原時季
もろともにしのふもちすりたか袖か亂るゝ露のかすまさる覽
京極入道中納言家に千首歌たてまつりけるに顯戀を　藤原時朝
しはしこそ袖に涙をつゝみしか今は人めにあまりぬる哉
寄涙戀　西入法師
今はたゝ人めもしらぬ涙かなしのふはこひのはしめ成けり
圓嘉法師
いつまてかしはし涙をせきとめてうとき人には猶しのひけむ

富小路大政大臣家に百首歌たてまつりける中に祈戀を
藤原時朝
なからへはつらき人にもあふやとて惜からぬ身を祈るころ哉
たいしらす　蓮生法師
祈こしみむろの山のくすかつら神をかけてもうらみつるかな
想生法師
逢事を神にそいのるさかきはのときはかきはに人をこふとて
鶴岳社十首歌に　藤原朝景
逢事はゐなのさゝ原いつとてもつれなき色のかはるものかは
題しらす　藤原親朝女
あふせなき涙の河にしつみつゝふかくも物をおもふ比かな
藤原言盛
身をなけて逢瀬もあらは涙川いきて思ひにしつまさらまし
坂上道清
我袖はみわたになひく浮草のうきあたなみのかけぬまそなき
衣笠内大臣家へたてまつりける歌の中に
藤原時朝
なみた河みなとは袖のうらなから我身こかれてよる舟もなし
藤原景綱百五十番歌合に寄煙戀　源　信行
きえかへり淺間の煙いたつらに空にのみしてたつわか名かな
藤原朝高
消かへるふしのけふりの空にのみうきて思ひのはてそ悲しき
丹波廣長朝臣
しらせはやもゆらんふしの山よりも猶身にこえてあまる思を
想生法師
消よたゝなひくかたなき夕煙わか身あさまの名をたてぬまに

蚊遣火のゆくかたもなきけふり社むせふ思ひのたくひ成けれ　藤原親朝女

題しらす

日かすのみつもりの蜑のぬれ衣かけても今はかはくまそなき　信生法師

思ひかねよるの衣をかへしてもねはこそ人を夢にたにみめ　大中臣光成

宇都宮神宮寺廿首歌に

ちゝわくに思ひ亂るゝかた糸のあふ事をなみとしそへにける　藤原時家

つれなさを恨みよとてやときは山したはふくすに風の吹らむ　素暹法師

題しらす

つれもなき人をはいはすあはれ共うしとも何を恨みそめけん　長圓法師

つれなきを我身のうきにしりなからさはなしはてす恨みる覽　藤原景綱

あふまてとこふるもたれかためなれは命にかきる物思ふらむ　源　頼　明

戀路にもしをるしをりの跡しあらは思ひ入とも惑はさらまし　素暹法師

迷ひゆくすゑはいかにととふへきに我戀路にはあふ人もなし　大江季房

年月はこえてゆくとも逢坂の關のこなたに思くるしさ　藤原蔭清

寄花不逢戀

つれもなき心の花のしたひもは春まちえてもとくるものかは　坂上道清

いかにして花のしたひもとけぬらむ春もつれなき人の心を　平　倚　時

我宿のさくらひと木の花ならはつれなき人も尋ねきなまし　淨忍法師

宇都宮神宮寺二十首歌に

せめて我つらきはさきの報ひにてこむよとたにも契をかはや　藤原基隆

こひしなむのちに逢よのあるへくは猶おしからぬ命ならまし　平　忠　幹

たいしらす

こひしなん後のむくひは有ものをあふにかへたる命ならねは　藤原泰朝

しらさりき逢みるほとの嬉しさに後にはものを思ふへしとは　淨意法師

報あらは我もつれなき身と成てこむよも人にあはしとやする　平　道　好

かくはかり思ふといふを賴まぬは誰につらさを習ひそめけむ　權律師謙忠

なをさりの時や人めをつゝみけんけに思ふには身をも惜ます　淸原時季

寄夢戀

うつゝにはあふ事かたしむは玉の夢にもせめてみるよしも哉　淸原時高

寄衣戀

かへしても何にかはせむさよ衣あひみる事のうつゝならねは　淸原光定

百首歌に

戀ころもなか〳〵袖のくちねかしあるにそつもる露も淚も　藤原泰綱

不遇戀

かく賴むうつゝを身には習はねと逢夜をなをも夢とこそみれ　淨意法師

藤原時朝五十首歌に

ひとすちに夢をまつこそはかなけれ必しもやあふとみるへき　藤原基政

しきたへの枕のちりと成にけりとしへてあはぬ戀のつもりは　源長繼

戀歌中に

ちりならぬなはたちなから逢ことのむなしき床をはらふ秋風　西圓法師

秋夕戀

わひはてゝまたしと思へはひくらしの鳴夕くれに秋風そふく　藤原親朝女

題しらす

いたつらになかむるくれもある物をまつをくるしと何思ふ覽　藤原泰家女

契りなきしけふはその日に成ぬれと猶夕くれを待そくるしき　藤原基隆

待戀歌とて

誰にかもことつてやりて大伴のみつの濱なるまつといはれん　顯信法師女

寄月戀

いつはりの昨日のくれにこりもせてこよひの空も猶待れつゝ　平忠幹

今更に月夜よしとはなかめてもつれなき人をいかにまたまし　權律師隆快

今こむとたのめしくれの秋の空ひとりも月のふけにけるかな　蓮生法師

こぬ人をまたせ〳〵て月かけのいりなむとする空そかなしき　源長繼

わひつゝもれなましよはの村時雨曇りもはてぬ月もうらめし　藤原俊定

始逢戀

やとりこし袖にもうとく成にけりなみたにくもる夜半の月影　淨意法師

寄枕戀

こよひこそあふくま河のみをつくし朽ぬる袖の程もみゆらめ　證定法師

こよひさへ枕のちりをはらはてや積る思ひのほとをみすへき　道阿法師

寄錦戀

新枕こよひよりこそすかのねのなかき契をむすひそめつれ　大江季房

寄鳥戀

結ひをく契りありてやをくるまの錦のひものとけはしめ劔　藤原景綱

こひ〳〵てまれにとけぬる下紐の夕つけ鳥のねこそつらけれ　藤原時家

宇都宮神宮寺廿首歌に

あけぬとておなし心になくとりをつらきためしとなに恨む覽　大中臣能範

題しらす

明る夜をつくろやこゑの鳥のこのかへらんとする空そ悲しき　藤原泰綱

寄鳥別戀

しのゝめのあくる別のれにたてゝたか涙とか鳥の鳴らむ　藤原眞義

曉戀を

あふさかのゆふつけ鳥も曉のわかれをたれに鳴はしめけん　權律師賴觀

待わひてうらみなれにしかれの音はあふよもつらし曉のそら　照因法師

うきものといひしは人のよかたりの思ひしらるゝ曉の空　藤原朝忠

うきものときゝおとろかぬ曉のかれの音こそ身にしられけれ　法眼圓瑜

うき物とさしもおもはぬ有明の月は今こそ身にしられぬれ　藤原親長

今そしるうきあかつきのならひとてわかるゝ空の有あけの月　西善法師

あかつきはかれて思ひしつらさにもなを餘りぬる袖の露かな

藤原重頼女

うき物とゆふつけ鳥のねにたてゝこぬよはかりそ東雲の空

後朝戀を　藤原重繼

朝露のおきてわひしき別れかないかにたえてかくれを待へき

新和歌集巻第八

戀歌下

宇都宮神宮寺廿首歌に　素暹法師

君をわかおもふ心の色ならはちしほやちしほそめてみせまし

平光幹

かすか野のわか紫の色にいてゝふかくも人を思ひそめつゝ

朝戀を　藤原公綱

みせはやなけさわかきつるみちしはの露よりもろき袖の涙を

寄源氏戀　有尊法師

物おもふ涙の河のはやきせに身をうき舟そひとりこかるゝ

寄河戀　源宗景

涙のみなかれてふかき思ひ河あふせは人のこゝろなりけり

平幹縄

目にそへてなけくにまさる涙河いとゝ逢瀬もたえやはてなん

平幹時

あさきせもありてふ物をなみた河ふかき思ひにしつむ比かな

題しらす　藤原朝基

今更にぬるらん袖もたのまれす我そつらさのねをのみはなく

冷泉前大納言家に戀百首歌みせたてまつりける中に

藤原時朝

人こふる涙のいろにあらはれてからくれなゐに袖そなりゆく

あひしれる女のもとへきるへき物なとつかはしたりけるにさらすともとてかへしたりけれは

信生法師

ちきりしを思ひかへすかさよ衣さてやうらみつまと成なむ

女かへし

せめてなをあかぬ名殘にさよ衣夢にみゆやとかへすはかりそ

寄夢戀　藤原景綱

うつゝとてなにうつりかの殘るらんみしよは夢の契り成しに

浄意法師

あふ事のうつゝは夢になりゆけと夢はうつゝの心ちやはする

源長繼

うつゝにてうかりし事のその儘にみえつる夜半の夢も恨めし

坂上道清

なのつから逢とみし夜の契りにて夢よりほかは思ひてもなし

證定法師

侘ぬれは夢てふ物を頼みてもねられぬ夜半そかひなかりける

寄月戀　藤原時朝

有明のつれなき月もかたふきぬ人の心をいつとたのまん

稲田姫社十首歌に不知在所戀　藤原蔭清

しかすかにとへはこたふる山彦の住家をいかてしらせさる覧

隔戀　坂上滋家

あしかきのつらき隔のなかりせはみても心のなくさみなまし

宇都宮神宮寺廿首歌に　謙基法師妹

うみ山のとをきへたてもなかりけり人の心のかよふなかには

近戀　大中臣能範

伊勢のうみしほのみちひのめのまへにかはるは人の心也けり

九條内大臣家に三百六十首歌たてまつりけるに　藤原時朝

しほむかふおきつふな人こきまよひ哀ゆかれぬ戀のみちかな

題しらず　證意法師

風ふけはあらいそなみのうつせかひ心くだけてあはぬ戀かな

隔山戀といふことを　平光幹

出ぬまの月にこゝろやなれぬらん山のあなたの人をこふとて

戀歌中に　清原時季

雲間よりほのかにみゆる三日月のわれのみ物を思ふころかな

くれをたのみてこさりける女のもとへいさむる人ありときゝて　信生法師

あまの原よこきる雲やへたつらむ空たのめなるいさよひの月

題しらず　蓮生法師

おもかけはなみたの露にうつりけりみるもかなしき有明の月

宇都宮神宮寺廿首歌に　源基氏

うき物となとわかために成ぬらんこれもみしよの有明の月

稲田姫社十首歌に　藤原朝景

つれもなき人のおもかけいくたひか有明の月に思ひいつらむ

寄月戀　照因法師

おほかたの月にれぬよの枕にさひしき物を秋のならひは

藤原景綱

なみたともしらしな月は我袖の露をは秋に思ひならひて

藤原頼業

物おもふ袖やしくるゝわきてよもなかむる山の月はくもらし

寄露戀　清原成朝

露ふかき秋ののはらの草の葉をよそに思はぬ袖のうへかな

信生法師

思ひあらは分てもゆかんさくらあさのおふの下草露しけく共

旅宿戀　西入法師

おもひかれうちぬるとこの枕とてむすふ草葉も露そこほるゝ

寄虫別戀　藤原景綱

明たてはれこそ泣るれ蟬の羽のひとへにつらき袖のわかれに

寄鳥戀　藤原重頼女

あふことを思ひたえたる曉もわかれし鳥のねにそなかるゝ

秋戀　藤原重繼

いろかはる野原の草の露みても人のこゝろのあきそかなしき

題しらず　名忍法師

思ひかれまとろむ程はわすられてつらきは夜半のね覺也けり

百首歌中に寄身怨戀　藤原泰綱

疎くなる人はなか〳〵つらからてかへりて身社恨みられけれ

夢中逢戀　藤原國弘

歎きつゝうちぬる床にあふとみる夢の名殘もおきうかりけり

稲田姫社十首歌憑契約戀　西圓法師

ねたくこそおなし心になりやられ人のわするゝ契りおほえて

寄書戀　源宗景

かくはかりうはの空なることのはをたれかたのむの雁の玉章

信生法師のをこせたるふみのはしにかきて女のかへしける

濱千鳥かよふ方々あまたあれはふみたかへたる跡かとそみる

寄鳥戀　導阿法師

水鳥のなみたのたまもよな〳〵はうきねの床に鳴あかしつゝ
西圓法師
かはとみは袖にもかよへさよ千鳥人のふちせに涙まなきころ
戀の心を　浄意法師
頼まれぬとりとならはの契りかな枕をたにもえやはならふる
藤原景綱
たまくらにつもる涙もわたつみとあれにし床に恨みてそぬる
慶西法師
君を思ふ心のほとはわたつみの千尋のそこもなをそをよはぬ
女のもとよりいまはおもひもいてしなと申たりける返
事に　藤原時朝
人はいさわれはわすれしいもかしまかたみのうらの有明の月
寄松戀　有尊法師
いはしろの松も恨めしあはぬまの久しかれとは結はさりしを
藤原時朝十首歌よませける中に　藤原泰重
たゝならぬ夕の空のけしきかな思ひいてゝも袖ぬらせとや
寄雲戀　清原政高
我戀はしのふの山にたつ雲のきえてあとなき契り也けり
怨戀を　丹波國長
言のはのかれのみゆけは眞葛原うらみにたへぬ露そこほるゝ
暮秋戀を　權律師隆快
秋はつる嵐のかせにいかならむ我身うきたのもりのことのは
百首歌中に　想生法師
君により今そしりぬる言のはのあきはてぬれはかるゝ物とは
ひさしくをとつれさりける女のもとへなかつきのすゑ
つかたにつかはしける　平時兼
吹すくる風をたよりの荻のはのあきはてぬとや音つれもなき
歌合し侍けるに冬戀を　藤原景綱
秋はてし心よりこそかれにけめことのはになく霜はおらしな
すみわたりける女長月の末つかたにものへまかりて今
はかへるましきよし申たりけるにうつろへる菊につけ
てやりける　浄意法師
長月はあすをかきりときく物をけふ秋はつる人も有けり
女かへし　顯信法師女
白菊のうつろふ色をみするにもあきはてけりと我そしりぬる
題しらす　藤原親朝女
おしからぬわか玉の緒は長らへて逢みし事そたえはてにける
哀とは思ひもいてよはなかたみめならふ色にうつりはつとも
ひさしくとはさりける女のもとより信生法師に申つか
はしける
さてもさはかき絶ぬるかさゝかにのいかになるへき心細さそ
寄草戀　權少僧都明喩
たのめ置し秋や昔の秋ならぬ庭のよもきのもとの身にして
源光泰
おほかたの草ははあきにあられともわか身はかりの袖の白露
惟宗經光
かよひこし道のしは草茂れたゝさらても人のあとしみえねは
清原公高
忘れ草さこそは今はしけるらめおもひたえたる中のかよひ路
安部泰弘
やましろのとはれしこともかき絶て難波の芦のね社なかるれ

藤原親朝

うき身をは思ひもいてぬ草の名の人ののきはにしける比かな

たいしらす　藤原泰綱

なかれてのたのみも今はなかりけり思ひたえにし中かはの水

きゝわたるなからの橋の跡もなくたえて久しき身の契りかな

信生法師

あちのすむすさの入江のそなれ松なれて恨みの年そへにける

寄氷戀　坂上家光

水とりのおりゐる池のうすごほりむすひもはてす中や絕なむ

寄關戀　藤原蔭清

あたち野のあたにも人を思はぬに勿來の關の名こそつらけれ

住吉社歌合に寄瀧戀　藤原時朝

思ひせく心のたきのひまなくて袂におつるわかなみたかな

被忘戀を　淨意法師

たえはつる人の心のみしかさをわすらるゝ身の命ともかな

宇都宮神宮寺廿首歌に　西圓法師

戀しさのさても昔に成ゆかはわするゝほとのとしもへぬらん

百首歌に　藤原泰綱

あふことのたえにしことのたえもせて命そなかき契り也ける

新和歌集卷第九

雜歌上

藤原時朝稻田姫社にて十首歌講し侍けるに社頭立春　右大弁光俊朝臣

千早振このやへかきも春たちぬひのかはかみは氷とくらし

淨意法師

神かきやよろへの水のうす氷とくるもやすく春はきに鳬

湖邊早春　橘公成

志賀の浦のみきはの氷とけにけり浪より春や立はしむらむ

下野國よりしはすのつこもりころにまかりのほり侍りてあけはとくなと申つかはしてまからさりけれは　素暹法師

春霞たゝはといひてこぬ人はうくひすよりも猶またれ鳬

むつきのはしめ雪のふる日藤原泰綱もとへ申つかはしける　平長時

今はゝやこのめも春の花のえに面かけみする今朝のしら雪

返事　藤原泰綱

春の色あらはれにける花のえにさきてもちらぬけさのしら雪

題しらす　中原盛綱

おいらくの我身につもるたくひかな殘るともなき春のあは雪

藤原景綱のもとにて題をさくりて歌よみはへりけるに

雨中若菜　藤原經光

ぬれ〳〵も猶やつまゝし春雨のふる野のわかな時過ぬまに

藤原時朝在京の時會し侍けるに　惟宗行經

かすか野は山の麓のちかけれは日かけ待いてゝ若菜をそ摘

題しらす　想生法師

さきそむる若木の梅のゆく末をおもへはおしき我いのちかな

圓嘉法師

おいらくの我すむかたの池水にふるきの梅もかけやはつらん

鎌倉入道大納言家の月次御會に海邊霞　藤原泰綱

津の國のなにはの春をみわたせは霞たなひくうらの初しま
宇都宮神宮寺廿首歌に　權律師謙忠
なにとなく身をしろ雨に袖ぬれてほしこそあへれ春の夕暮
たいしらす　蓮生法師
おろそにも物うくもなし紫のわらひも草のゆかりと思へは
淨意法師
軒ちかく春の雀のむつれきてこそのふるすの跡もとむなる
藤原景綱
ことしより花咲そのゝ百千鳥さえつる春もみち世へぬらん
宇都宮神宮寺廿首歌に　平秀政
うくひすの花に鳴れの物うきはかれて別のおほえやはすゑ
西圓法師
いかにして色をも香をもしらぬ身の花を哀と思ひそめけん
題しらす　平幹時
あしを山花やさくらんつくはれのそかひにみえてかゝる白雲
庭にうへたりける櫻のふる木になりたるをみ侍て
藤原時朝
うへをきし花はふる木に成にけり我おいらくの程そしらるゝ
故鄕花　坂上道清
ふりにけるあとゝもみえすさゝ浪や志賀の都の春の花その
閑居花　藤原景綱
さきなはと思ひし花のうつろまてとふ人またてすくる春かな
寄花述懷　彌陀信法師
うきよをはいとひはてんと思ふ身の花に心のなをのこるかな
長圓法師
世をうしと花も人めをいとひてや我すむ山のおくにさくらん

古寺落花　大江季房
かれのをとも涙もさそふはつせ山花散ころの夕暮の空れ
百首歌中に更衣　蓮生法師
うつり行人の心もしられけり春をわするゝ衣かへして
首夏　仙風法師
わか宿のふち咲ぬれはほとゝきすまつに心をかけぬ日そなき
夕郭公　照因法師
待わひぬさのみはいかに郭公ゆふへの空のむなしかる覧
鶴岳社十首歌に船中郭公　藤原時朝
かしまかたおきすのもりの郭公船をとめてそ初音きゝつる
題しらす　諦如法師
われのみとまちつる暮を郭公またたか爲に鳴てすくらん
稱佛法師
里とをき山のすそのゝほとゝきすたか爲になく初音成らむ
五十首歌に河夏　源長繼
やましろのよとの河おさ袖ぬれて入江のまこも今やかるらん
河早秋　大江季房
浪の音もたちかはるなりたなかみやうちのわたりの秋の初風
初秋風を　藤原朝基
いつのまに秋とて色のかはれはや沖ふく風の今朝は身にしむ
藤原時朝舘にて題をさくりて人々歌よみ侍けるに田家
初秋　藤原蔭清
足曳の山田のさなへとりもあへすやかても秋になるこひく也
田家秋を　淨意法師女
我宿はいなはの風そをとつるゝあせのかよひちくる人もなし
野秋風　藤原泰綱

なく露のたまゝく野へのくすのはにうら悲しくも秋風そ吹
父清原高經宇都宮九日會の頭のかりし侍けるほとにい
とまなきよしを人のもとへ申つかはすとて
清原公高
しろらめや野邊の鶉をふみたてゝ小萩か原にかりくらすとは
秋夕　坂上道清
世中のうけれはおつる涙にてかこつかたなき秋の夕くれ
西圓法師
ものをのみ歎かむためとなれるみの限りしらるゝ秋のゆふ暮
たいしらす　藤原重頼女
しら露のをきところなき我身かな草のいほりも秋風そふく
藤原景綱
草葉のみ露けかるへき秋そとは我袖しらて思ひけるかな
信聖法師
秋の野にたかかるかやのなはをなみいふかひもなき草葉成覽
清原公高
わか宿は軒はの山のたかけれはまちとをにのみ月をみる哉
鶴岳社十首歌に山路月　藤原時朝
あしからの山のおのへにのほりてそ空なる月も近つきにける
名所月　蓮信法師
さえまさる月の影をはしもとゆふかつらき山に夜やふけぬ覽
野亭月　藤原景綱
里とをき草の庵に秋をへて野へもはるかの月をみるかな
海邊月
よる涙の音にれられぬ關もりはいく夜かすまの月をみるらん
關月　無量壽丸

きよみかたよせくる涙の岩間よりくたけてかへる夜半の月影
渚月　源長継
秋の夜の月すめとてや松かけのきよきなきさをあらふしら浪
海上月　顯信法師女
浦風にやへの潮路はきり晴て月をしろへによふねこくなり
藤原時朝舘にて正元元年八月十五夜會し侍けるに池月
を　淨意法師
みな底に宿れる月をありと見てとらはやとらんさるさはの池
旅宿月　西圓法師
今はれてあけはと空を待へきにたひなる夜しも月のさやけさ
寄月述懷　平忠幹
自からうき身も月はめてつれと老となるまてよにはしられす
宇都宮神宮寺廿首歌に　謙基法師姉
昔見し人はいつくにかくるらんひとりくまなき山のはの月
淨忍法師
淋しとて我さへやとをうかれなはひとりやすまむ秋のよの月
題しらす　彌陀信法師
わかあきとまちこし月をみるはかり涙よしはし曇らさらなん
物思侍けるころ月を見侍りて　淨意法師
定めなきよにおもなれて秋の月かはらぬ影のめつらしきかな
百首歌中に　藤原實好
月も又我をわするな秋をへてみしはかりなる契り成とも
行圓法師
すみ〳〵て西へ入ぬる月みてそこのよに止る身はうかりける
鎌倉三品親王家に三百六十首歌たてまつり侍る中に月
前述懷といふことを　藤原時朝

有明の月よりも猶つれなきはうきよをいてぬ我身成けり

旅宿鹿　坂上家光

草枕ならはぬ野へのさひしさをわするはかりにしかそ鳴なる

山家鹿　空寂法師

鹿のれのきゝすてかたき秋の夜はみやまの庵に心とまりぬ

田家鴫　藤原蔭家

れ覺する山田の庵にきこゆなりあかつきことの鴫のはれかき

題しらす　藤原景綱

山里の庭のもみち葉ふみわけてさらにとはれぬ秋そさひしき

藤原基政

もみちせぬときはの山にふる雨はあきも緑の色やそむらん

蓮生法師

たにかけの庵のしたのした紅葉わかなみたにも色やそふらん

慶西法師

きてみれはかさとり山のかひもなし時雨に濡て紅葉しにけり

信生法師

もみち葉は時雨てふかく成にけりこけの袂そつれなかりける

百首歌中に　藤原泰綱

いたつらに秋はくれぬるなか月の空にのこれる有明の月

暮秋虫　清原貞高

くれて行秋はすゑのゝまくす原恨みかほなるむしの聲かな

九月晦日鹿のなきけるをきゝて　藤原泰重

暮てゆく秋のかきりをおしみてやおのへの鹿のけふは鳴らん

初冬を　名信法師

今朝よりはおきのかれはに吹風の又をとかはる冬はきにけり

平忠幹

白妙のふしのみゆきのけぬかうへに又もふりしく冬はきに鳧

河上落葉　藤原重継

みとりなるいろともみえす紅葉はの流てくたるたけかはの水

藤原泰朝

たつ田河かはせにたゝむ浪のあやを錦になすはこのは也鳧

賀茂在忠

紅葉はのなかれておつる立田河せきもとゝめぬ水のしからみ

冬山　西圓法師

風のかすよその紅葉のいろたにも見えすなりぬるときは山哉

時雨後月を　藤原親朝

神無月しくれのあとのいたまより思はぬほかの月そもりくる

安倍資氏

ひきかへてしくるゝ峯のこのまより猶かけさゆる冬の夜の月

有尊法師

吹はらふ嵐の山の月かけにしくれもはてぬむら雲の空

清原公高

むら雲の月のあたりにのこる哉又やしくれむ冬の夜の空

九條前内大臣家に三百六十首歌たてまつりけるに　藤原時朝

嵐には雲もたまらぬ冬のよにいかにすみてか月殘るらむ

河冬月　藤原泰重

みなと河にほのかよひち見ゆるまて浪の底にも月はすみけり

題しらす　象觀法師

むは玉のよるとはたれかわきそめしこほりのうへの冬夜の月

玄長法師

かり殘すたまえの芦も霜かれてむれゐる鳥のかくれかそなき

曉千鳥　藤原公綱
あかしかた浦の松かせ音さえて有明の空に千鳥鳴なり
證願法師
明ぬるかふしの河きり立まよひ千鳥鳴なりうきしまかはら
河水鳥　藤原泰綱
水鳥のしたになかるゝ思ひかはいかにくるしきねのみ鳴らむ
故郷雪　想生法師
初雪のふるさと人にことゝはむ思ひやるにもあとはありやと
雪のふる日人のもとへやるふみをもてまうてきたりけるそのうへにかきつけてかへしける
行圓法師
ふる雪にふみたかへたるあとなれととはれかほなる庭の面哉
海邊雪　生願法師
なるみかたをかのふる道雪ふれは浪まや人のゆきゝ成らん
題しらす　淨意法師女
暮はつる今年のけふを身のうさの限りときかは嬉しからまし
證定法師
心をはをくり迎へぬとし月のすゝろにたけて身はふりにけり
藤原時朝
昔思ふ心の空のしくるゝはわかおいらくのなみた成けり
百首歌中に曉を　權律師隆快
秋の霜に野てらの鐘をまかへても猶ゆめふかしあかつきの空
信生法師
すきにけるこの世の夢を思ふにものこりすくなき曉の空
高階重氏
まとろまぬ昔かたりのなかき夜もあかてことはの猶殘りつゝ

舘にて歌合し侍けるに月前雞　藤原景綱
月をみてふくるもしらす成にけり曉とてそ鳥のなくらん
關路曉　坂上道清
鳥のねにあけぬときけは逢坂の關の戶くらき杉の下かけ
紀　行宣
關の戶はあけやしぬらんあふ坂のゆふつけ鳥はいまそ鳴なる
清原時季
關の戶も今やあくらんあふ坂のゆふつけ鳥の聲しきるなり
宇都宮神宮寺廿首歌　素暹法師
蜑をとめふなのりすらし浦風のなこの入江にたつかへるなり
江船　照圓法師
みつしほのたよりをまちて難波江のあしまつたひに船通ふ也
河船　西命法師
つなてひく聲はかりしてみえぬかな霧立こむる淀の河ふね
海路朝船人　藤原朝氏
霧はるゝすまのうらはの朝なきにあかしのとよりいつる舟人
海夕船人　藤原景綱
わたの原ゆふ風あらき浪間よりみゆるこしまによする舟人
海路夕煙　西圓法師
漕よせよ夕日にみゆる山もとはとまりなれはそ煙たつらむ
たいしらす　藤原基政
しほきころあまのゆきゝのあとみえて浦よりつゝく山の細道
海眺望　藤原時朝
はるかなるおきつこしまに立波を空よりかゝる雲かとそみる
宇都宮神宮寺廿首歌に　高階重氏
みな上にみなはさかまきをとたてゝ落くる浪の末そのとけき

あらましに心やすめし山里もけにすむときはすみうかりけり　淨忍法師

題しらす　蓮生法師

○今さらに都へかへる心かなしはのいほりに身をはとゝめて

高階重氏

たに深きいはほのなかのかひもなし心のおくそ身は隱しける

信生法師

あとたえていくよになりぬ白雲のかゝる住ゐをとふ人もかな

豐原泰範

山ふかく思ひ入身はしをりせしうきよにまよふ人もこそとへ

椎柴　源親行

暮ゆかはたかしきすてゝあとに又枝おりそへん峯のしゐしは

深夜松風　平時重

れ覺してすゝろに物のかなしきは更行よはの松かせのこゑ

百首歌中に　藤原泰綱

吹しほるとやまの風はそれなから軒端の松の音そはけしき

鶴岳社十首歌に　藤原景綱

山里のならひとしのふさひしさも思ふにまさるみねの松かせ

山家月　藤原國弘

山里のしはのかこひもあれはてゝねさめの床に月をみるかな

題しらす　西圓法師

遠さかるつまきの道にしろきかな年へてすめは山もあせけり

藤原泰綱

おもひやるみやまのおくの秋の空またみぬ月にすむ心かな

空寂法師

つらき身をわか心さへすてにけりみ山のおくに宿もとめつゝ

山家秋　源宗景

みやまへや住ならひてもさひしきは桐の葉おつる秋の夕くれ

源頼明

山里はうき世のなかのほかゝとてすむかひもなき秋の夕く

宇都宮神宮寺廿首歌　淨忍法師

うき世にてなかめしよりもさひしきは草の庵の秋のゆふ暮

武藏守平經時の亡室墓所へまうてゝそれより尾羽とい
ふ山寺へまかりけるみちにて　蓮生法師

みし人のすみける宿をゆきすきて尋ぬる山は秋の夕くれ

新和歌集卷第十

雜歌下

六帖題にて歌よみ侍ける中に日を　藤原時朝

いつる日のかたはあつまの山かつも仰くは君のみかけ成けり

月

かさゝきの峯とひこゆるかすみえて月澄わたる雲のかけはし

けふりのちかきほとにたつをむつかしなとひとの申
けれは　藤原基綱女

今さらに煙をなにといとふ覽むろのやしまの近きあたりに

むろのやしまへまかりあはんと人にやくそくして侍け
るかさしあふ事（せはイ）侍て申つかはしける　藤原親朝

煙（なきイ）たつ室のやしまと思はすは君かしろへに（我やたゝ）ならまし（ましイ）物を

むろのやしま見にまかりてよみ侍ける　藤原景綱

たえすたつ烟やむろのやしまもろくにつみ神のちかひ成らん

源　行宗

むかしより絕せぬ物はしもつけやむろのやしまの煙成けり

安部資氏

よそに聞むろのやしまをきてみれは煙はかりそ名には立ける

清原成朝

よとともに思ひのけふり絕すたつむろのやしまや我身成らむ

宇都宮神宮寺障子歌に　　京極入道中納言

多武の山賴む尾上の身はかくてはる日もさゝぬ藤のしほれは

遁世のこゝろさしある人の僧綱になり侍るもとへ申つかはしける　　淨意法師

かのきしに心をかくるたよりにもうれしかるへき法のはし哉

返し　　法橋道秀

とゝこほる事もなくてやわたりなん心にかけし法のはしをも

仁治三年(四條)大甞會の撿非違使つとめ侍りてかへりけるみちにてよみ侍ける　　藤原時朝

よそにみしひかけの糸の玉かつらかけてそきつるをみの衣手

人々の點あひたる歌みよと申てをこせたりけるをかへしつかはすとて　　淨意法師

うれしくも今そ尋れて三輪の山しるしの杉のしけきことのは

返し　　寂身法師

人ことのやまとことのは尋れみよ我のみしけき杉のしるしか

師匠のかきをきたる聖教を見侍けるついてに

有信法師

をしへをくことのはなくはいかにして昔の跡を思ひいてまし

題しらす　　藤原賴業

數ならぬ人にはよらし山ひこのとふをはいかて答へさるへき

藤原時家かもとへ申つかはしける　　蓮生法師

〇忘るなよなかれのすゑはわかるともひとつみやまの谷川の水

返し　　藤原時家

〇わかるともいかゝ忘れんみなかみはおなしなかれの谷川の水

駿河國うとはまにとしころすみ侍けるかうつの宮にうつりゐてのちかしこなる人のもとへ申つかはしける

想生法師

いつか又たちかへりなむうと濱のうとく成にし跡のしら浪

題しらす　　蓮生法師

〇年をへてなれにし跡の面影をかたみにみよとたれとゝめけむ

淨意法師家集を衣笠内大臣家にみせたてまつりたりけれはおくにかきつけて給ひける

をしなへてふかき色なることのはの露さへ袖にかゝりぬる哉

藤原泰綱に古今かきてたひけるおくにかきつけられける　　京極入道中納言

あとをたにありし昔と思ひいてよ末の世なかき忘れかたみに

よみをける歌を人のもとへつかはすとて

權律師隆快

をのつから心に浮ふうたかたの消すはあり共かたみともみし

所望かなはさりけるころ

さり共と猶やまつへきあすか河きのふもけふも沈む身なれは

たいしらす　　平　光幹

行末もゆかしき程そまたれつる今はうき身のなくさめそなき

藤原蔭清

行すゑと思ひしことの積りてはこしかたにのみなるそ悲しき

有尊法師
なにとなき心のうちのあらましも慰むほとそなくさまれける

稲田姫社十首歌に老後述懐　右大弁光俊朝臣
ものをのみうれへなけくとせし程にむそち近くも成にける哉

西圓法師
はかなしなけふかあすかの齢まてあしたの露にかゝる心は

百首歌中に　藤原泰綱
はかなくもうき身を暫し頼む哉あるにつけては世をも厭はて
今はとてたゝ一すちの道にのみ思ふこゝろはさはらさりけり

題しらす　有信法師
何ゆへに今まて世をはそむかぬととふ人あらはいかゝ答へん

蓮生法師
つく／＼と思へはさてそ殘りけるなを人數にいらぬしるしに
うしといふみななをさりのことのはを思ひしるにそ人は少き
いかなれは世のうきことにたふる身の法の道には忍はさる覽
まことなきあらましことにあけ暮ていつか月日の限り成へき

よをのかるへきよし申たりける人の本意とけぬるよし申つかはして侍ける返しに
色にいてゝとはるゝ程に成にけりあらましことの墨染の袖

出家の心さしあるよしをちゝのもとへ申つかはすとて　浄意法師
人しれぬ心のうちのあらましをいつかころもの色にいたさむ

返事　源有仲
紫もあけもみとりもそめてこそよにすみ染のはてもみめ君

藤原清定たつねまうてきてかはりにし世のことゝもよもすからかたり侍けるついてに　浄意法師
あらぬよのむかしかたりを墨染の袖にもかはる色そかなしき

返し　藤原清定
雨の夜の昔かたりのぬれ衣かされてしほるわかのうらなみ

宇都宮神宮寺廿首歌に　浄忍法師
今はわれ旅ともいはしあつま屋のまやの餘りに年のへぬれは

題しらす　浄意法師
吹まよふ風によこきるあは雪のおもはぬかたにふる我身かな

藤原朝氏
人の世もかくこそあれと慰めてうきをいとはぬ身のすまゐ哉

修行にいて侍けるに母もなきこのやつになりけるかいひをこせたりける
恨めしやたれをたのめとすてゝ行われを思はゝとく歸りこよ

返し　信生法師
鳥の子の獨りふるすにとまる共うきよにいかゝ立かへるへき

いのちすつる事おほく侍けるにのかれていまゝてはへりける事をおもひてよみける
あたしのゝ風にまかせし露の身のいかて今まて消のこりけん

出家ののちふるさとにかへりて
故郷のこのした露に又ぬれて昔にかへるすみそめのそて

六帖題にて歌よみ侍けるに墨を　圓勇法師
するすみに衣をふかくそめなから心のいろはあさましの世や

宇都宮へくたりて侍けるか事のさういありてまかりのほらんとしけるになつのころ人のもとへ申つかはしける　藤原親敎
恨みしよ人の秋風ふくなへにときをもまたてかへるくすのは

題しらす　藤原時盛

世中をうらむとしもはなけれとも身のうき時そ涙おちける
西圓法師
草木にも劣りける身のはかなさは春をしらぬに思ひしられて
神阿法師
谷かけや人にしられぬむもれ木のやかて朽なむことそ悲しき
藤原泰綱
百首歌中に
さためなき世のことはりを思ふには袖に涙そ猶こほれける
源宗景
涙のうへに浮てたゝよふ水鳥のおしからぬ身にねのみ鳴らむ
藤原時朝かしまのおきすの社にまいりて彼社僧中に十首歌すゝめ侍けるに
理然法師
うなはらやおきつしほあひに立涙のしつめかたきは心なり鳧
題しらす
親成法師
くれ竹のよはうらむへきふしもなし身を驚のねをのみそなく
清原時高
うきこともなからへてこそまさりけれつらきは人の命成けり
平時重
いかにせむあるかひもなき世にふるは心にたかふ命成けり
良義法師
なか／＼に世にある人は厭へ共數ならぬ身そつれなかりける
源基氏
いけるより外にはさらて（しイ）身のとかも覺えぬものを恨わふらん
大中臣能範
たらちねにわかれし頃をかそふれは同しほとにも身は老に鳧
藤原時盛
たらちねのいさめしことをそむきしははかなき迄の心なり鳧

うしとみし昔なれともいたつらにすくるはおしき心なりけり
坂上道清
かしこきもうき身も同し年月の積るはかりやかはらさるらん
大中臣能範
うしとても又この頃をなけかしよ猶なからへは忍はれそせん
藤原泰朝
うしと見し昔の世をはこひなから又このころをなに厭ふらん
西命法師
かゝる身のうきをはしらて世中をうらみてぬるゝ袖のうへ哉
香阿法師
おいらくのかけみるたひにます鏡うつし心もなきわか身かな
象觀法師
行すゑを思へはなにか歎くへきさすかたのみはある身也けり
藤原基政
懷舊の心を
蓮生法師
故郷ののきのした草しけれともかれにし物は人め成けり
題しらす
平忠幹
かす／＼に昔のことは忘れねとうき思出はあるかひもなし
大中臣景範
いつとても同しうき身はかはらぬに昔はなとて戀しかるらん
源長繼
うけ難き人となりけるさきの世の身にはいかなる心ありけむ
西圓法師
生れてもありけむ物をいにしへにあはすとなにか身を恨む覽

新和歌集目錄

春　八十五首　夏　六十六首
秋　百十八首　冬　六十八首
賀　二十首　神祇　廿五首
釋敎　二十七首　離別　十首
羇旅　二十五首　哀傷　五十首
戀上　九十七首　戀下　七十八首
雜上　百廿八首　雜下　七十五首
已上八百七十二首

作者　次第不同

鎌倉右大臣家　一首
衣笠前內大臣家家良　一首
冷泉前大納言爲家　十一首
土御門大納言通成　一首
京極入道中納言定家　五首
冷泉侍從中納言爲氏　三首
壬生二品家隆　二首
九條正三位知家　一首
右兵衛督從二位教定　一首
右大弁光俊朝臣　五首
左中將經定朝臣　二首
左近中將爲敎朝臣　一首
權中將光成朝臣　二首
左京權大夫信實朝臣　四首
侍從隆祐朝臣　一首　源有仲　一首
中務大輔爲繼朝臣　一首　平經時　一首

平長時　二首　祝部成茂宿禰　一首
藤原泰綱　四十二首　丹波廣長朝臣　三首
丹波忠茂朝臣　三首　源親行　十二首
藤原賴業　十首　藤原基政　十二首
藤原時家　八首　藤原親朝　十四首
藤原時朝　五十一首　藤原經綱　一首
藤原基隆　五首　源孝行　一首
藤原清定　二首　源信行　一首
惟宗行經　三首　藤原景綱　四十八首
藤原泰重　五首　藤原重繼　五首
藤原時光　一首　藤原泰朝　七首
藤原時盛　六首　平光幹　八首
平忠幹　九首　藤原親長　三首
藤原朝景　八首　平時重　五首
丹波國長　二首　藤原景家　一首
藤原親時　三首　大中臣能範　十首
藤原俊定　二首　高階重氏　六首
平幹繩　二首　平幹時　二首
大中臣景範　二首　大中臣光成　二首
源宗景　十首　源長繼　八首
源賴明　三首　源基氏　五首
藤原朝氏　八首　源行宗　二首
坂上道淸　十六首　坂上家光　七首
坂上滋家　四首　平經成　一首
藤原朝基　三首　源憲綱　一首
藤原實好　二首　藤原眞義　二首

藤原能季　一首
安部泰弘　三首
藤原朝高　一首
安部資氏　二首
藤原朝忠　一首
藤原經光　二首
橘公成　一首
藤原言盛　二首
清原時高　五首
清原公高　十首
藤原國弘　三首
藤原公綱　二首
平尙時　一首
中原盛綱　一首
源政家　一首
清原政高　一首
平朝定　一首
清原貞高　一首

賀茂在忠　二首
藤原蔭清　六首
平時兼　一首
神行郊　二首
藤原仲兼　二首
惟宗經光　一首
豐原泰範　一首
藤原親敎　一首
清原時季　八首
大江季房　五首
平秀政　三首
平道好　一首
大江經盛　一首
紀行宣　一首
源光泰　一首
清原成朝　二首
清原光定　一首
無量壽丸　一首

僧付凡僧次第不同

權僧正隆弁　一首
法印長惠　一首
權律師謙忠　九首
權律師仙覺　三首
法眼圓瑜　三首
圓勇法師　五首
蓮生法師　五十九首

見佛上人松島　一首
權少僧都明瑜　四首
權律師賴觀　二首
權律師隆快　八首
法橋道秀　一首
導阿法師　三首
信生法師　三十三首

淨意法師　四十首
素暹法師　五首
證定法師　十首
西圓法師　十七首
淨忍法師　九首
座蓮法師　四首
想生法師　十二首
親成法師　三首
證觀法師　三首
佛也法師　三首
證意法師　二首
彌陀信法師　四首
念生法師　一首
玄長法師　二首
西善法師　二首
空寂法師　三首
近阿法師　一首
諦如法師　一首
信聖法師　一首
蓮信法師　二首
證願法師　一首
寂身法師　一首
神阿法師　一首
亘義法師　一首
象觀法師　二首

觀念法師　一首
行圓法師　四首
有尊法師　八首
西入法師　五首
圓嘉法師　三首
照因法師　二首
道願法師　一首
長圓法師　二首
覺願法師　二首
謙基法師　一首
圓智法師　一首
西仁法師　一首
成願法師　一首
仙風法師　三首
亘空法師　一首
西音法師　四首
名忍法師　一首
稱佛法師　一首
名信法師　一首
慶西法師　二首
西命法師　二首
有信法師　二首
理然法師　一首
香阿法師　一首
生願法師　一首

女房

弁内侍　一首　少將内侍　一首
藻壁門院但馬　一首　下野　一首
藤原重頼女　六首　信生法師女　一首
藤原親朝女　五首　淨意法師女　八首
橘友家女　四首　顯信法師女　五首
藤原基綱女　一首　藤原泰家女　一首
謙基法師姉　一首　謙基法師妹　二首
尼西蓮　二首　傀儡藤王　一首
八歲になる子の歌一首　不知交名女歌　四首
已上百八十六人

宇都宮打聞新式集目錄イ无

墨點。丸點。此集中之撰歌也。

此宇都宮打聞新式和歌集者。藤原爲氏卿下ニ向宇都宮一撰レ之。有ニ子細一式之一字除レ之云々。

續門葉和歌集序

夫二儀之初。清濁漸分。三才以來。詞什盛起。所以者何。有二人倫一必有二心情一。有二心情一必詠二詞什一。故詞者託二其根於心地一。發二其花於詞林一。誠哉斯言。和國諷詠者。起二於素盞之往躅一。吾寺歌謠者。始二於斑鳩之再誕一。見レ雲心動レ內。郄鄙應物之昔。分レ詞花發レ外。古今獻什之時。彼八雲辭高雖レ隱。本地之秋月。此遺風跡馥以榮。禪洞之春花。逐而至二文治中興之代一。雖レ有下撰二門葉一之碩德上及二嘉元末流之今一。更無下續二風塵一之賢才上但見賜紫之綱維。非レ無二殺靑之器量一。然而或臥二孤巖之雲一。叶二對法破邪之義關一。或飡二深溪之霞一。訪二一致十住之玄門一。尙無二三餘之暇一。豈撰二一部之集一乎。然間。靑苔明月之閑地。自雖レ有二禪客之動一レ思。松房蘭室之舊窓。更無二詞仙之留一レ名。爲レ寺爲レ道。一歎一憂。依レ之。吠若磨嘉寶膺等。同レ心集二滿寺之和什一。結レ契撰二自門之秀詞一。于茲支幹遷兮兩三廻。凉燠改兮幾多程。捨二竹馬一向二馬蹄一。夜露空徒二烟藁一。忌二芥鷄一占二鷄距一。春雨徒穿二舊苔一。此非レ不レ耻三童蒙之在二于己一。唯專依レ憂二賢哲之不(永イ)一レ殘レ名也。志之所レ之。集而注レ之。其數千首。分爲二一十卷一。號曰二續門葉和哥集一。所謂春尋二晚花之幽一。知二野花之隔一レ霞。秋見二雲葉之紅一。識二嶺樹之經一レ雨。夏慕二時鳥於皓月之曉閨一。冬望二寒雪於靑嵐之夕庭一。何況辭二木幡里一之驛馬。迷尋二童郞之懇志一。過二粟䎃野一之兒店。咽向二行旅之別恨一。加之。釋門之作。神道之詠。廻二風情於寺門之花一。搆二瑩露「詞」(衍歟)於鎭護之叢祠一。然者雖二鳴レ戲弄一。顧作下扇二禪林德風一之緣上。雖二住レ水蛙之所レ吟。不レ爲下灑二清瀧恩波一之媒上乎。

嘉元三年玄冬臘月記之耳

續門葉和歌集卷第一

春歌上

たつ春のこゝろを　前大僧正聖兼

いつくなか春立かたとわきてみむ今朝は霞まぬ山のはもなし

春のはじめの歌　前權僧正憲深

春やたつ雪けの雲も涙まより霞てみゆる淡路しま山

嘉元元年太上法皇龜山仙洞にて當座の御歌合せさせ給ふけるに朝霞といへる事を　宮僧正道性

山ははや霞にけりなこのれぬるあさけの空に春をしらせて

春の歌の中に　蓮藏院右王丸

雲は猶雪けなのこす山のはの霞はかりに春やたつらむ

百首歌の中にうくひすを　法印相助

春きぬといへともいまたしら雪のふるすなからの鶯のこゑ

大藏卿隆博山早春といへることをよませ侍りけるに　法印隆勝

白雪のふる山かけてまきもくのひはらかすゑは今朝そ霞める

餘寒のこゝろを　宮僧正聖雲

霞めとも春の日かすや淺香山やまかけさむき雪のむら消

澤春雪といへることをよみ侍りける　法印實勝

春はまたあさゝは水のうす氷きえはともにと淡雪そふる

殘雪をよめる　法印長順

かつきえて降もたまらぬ庭の面に殘るは猶もこそのしら雪

法印公紹

をしなへて木のめも春の山陰になを時しらすのころ白雪

春雪を　權少僧都道順

きえのこる雲のけしきはみえわかて霞よりちる春のあは雪

題しらす　權少僧都定耀

春きても日影よそなる谷の戸にこそみしまゝの雪そ殘れる

春草といへる事を　法印長順

春日野は今もなやきそさならてももゆるならひの春の若草

權少僧都有嚴

昨日こそ野へはやきしかいとはやも又もえ出るはるの若草

當座の歌合し侍りし中に春草といへるこゝろを

報恩院永壽丸

もえ出る春はよそなるなかめにて花に秋まつ庭の若草

題しらす　阿闍梨賴覺

消そむる雪まの緣はつかにて日影にもゆる野邊のさわらひ

民部卿成範の家の歌合に子日をよめる　權大僧都實繼

打むれてこのもかのもに子日する野への小松は千世の色かも

春の比伊勢の内宮の御殿へまうて侍りけるにもゝ枝の松に風のをとのとかにて神さひまさりけれはよみはへりける　前權僧正通海

神垣やもゝえの松にをとつれてみとりの空は春風そふく

題しらす　よみ人しらす

さゝ波も氷のひまにうちとけてのとかにかすむ志賀の浦風

法印實爲

難波江や霜にかれにし芦の葉のまたをとさむき春の浦風

春猶寒といへるこゝろをよめる　阿闍梨憲家

春風は殘る雪けに猶さえてとけし氷そ又むすひける

前右兵衛督爲相朝臣家の歌合に雪中梅といへることを　權律師圓俊

花は猶それともみえすうつもれて雪より匂ふ梅の下かせ

題しらす　權少僧都賴聰

にほはすはおもひわかてや過なまし雪ふる里の夜の梅かえ

鶯の歌に　法印隆勝

春やときまた雪きえぬ吳竹のは山かくれの鶯の聲

雪中鶯といへるこゝろを　權律師定叡

なくやときゝゆるやをそき鶯のこゑきく山の谷のしら雪

建保四年正月六日權僧正成賢　七庚申の會はしめ侍りけるに春の歌とてよめる　前權僧正憲深

梅か香をこむる霞のたえまよりこほれてにほふ鶯の聲

梅映夕陽といへるこゝろを　權少僧都敎同

くれなゐの色をかされて夕日影さすや軒はに匂ふ梅かえ

故郷梅といへる事をよめる　報恩院如意珠丸

梅か香をとひこし人もむかし哉たかつのみやの春の夕くれ
前權僧正教範

故郷のむかしの春のおもかけを花にのこして匂ふ梅かえ

五十首の歌よみて人のもとへつかはしける中に
法印靜運

よそにては春しるやとゝ人やみむひとり花さく梅のたち枝を

朝霞といへる事を
權少僧都範助

朝日山今朝は霞のたなひきてをとものとけきうちの川波

百首歌の中に春雨を
宮僧正道性

空は猶かすみくらしてふる雨にゆふ日のかけのにほふ山の端

題しらす
蓮藏院又一丸

をのつからみとりをそめて春日野の草葉にみゆる春雨の色

前民部卿兼行家の歌合に朝春雨といへる事を
權律師兼勝

あをみゆく草葉のうへに露みえて朝けのとけき春雨の庭

歸鴈の歌とてよめる
寶池院松夜叉丸

花をたにわする計のならひをはいつ定めてかかへるかりかね

權少僧都道順

かりの行とをちの梢かすかにて霞にのこる有あけの月

建暦元年の長尾宮の歌合に海邊歸鴈といへる事を
權律師猷圓

たれこゝに秋風ふかはまつしまやをしまの涙にかへる鴈かね

同歌合に
權少僧都季嚴

かりかねの聲ふきをくる春風に煙もなひくしほかまの浦

題しらす
權律師賴驗

ちれはうきわかれやかれてしりぬらん花をもまたて歸る雁金

嘉元元年九月太上法皇龜山　仙洞にて當座の御歌合せさせ給ひけるに曉歸鴈を
宮僧正道性

したへとも月は有明の山の端にわかれをそへて歸るかり金

月前歸鴈といへる事をよめる
法印憲淳

とをさかる聲をのこしてかすむ夜の月にきえぬる鴈の一つら

題しらす
阿彌陀院千代石丸

いてぬまに思もわかす春の夜の月にそかすむ空としらるゝ

宮僧正道性

出るより霞のそこに影みえて山のはしらぬ春の夜の月

前權僧正遍海

あまの原いはとの關をいてなから霞にさはる春のよの月

公廉朝臣すゝめ侍ける三嶋社五首の歌に春月を
權律師圓俊

山の端の雲はよそなるかけなから霞をいてぬ春の夜の月

題しらす
大智院幸乙丸

雲はらふよはのあらしの跡にたに春はならひてかすむ月哉

地藏院幸福丸

はるゝ夜は中々くらきこかくれもおなしおほろに霞む月影

河春月といへることを
權少僧都運雅

影うつす月に霞を吹わけて川浪はらふよはの春かせ

春曙といへる心をよめる
法印親瑜

明ゆけは霞になりぬ夜のほとそおほろなからも月はみえつる

法印定敎

おほろには霞はかりにみし物を月にも老の春そしらるゝ

開性法師

かすめとも横雲しらむかたはみえてこと山くらき春の曙

山霞といへる事を　前大僧正覺濟

をちこちの高根やいつこひたすらの霞のうへに松そ一村

關霞をよめる　蓮藏院有王丸

あけぬとて行すゑいそく關のとも霞にとつるあふ坂のやま

夕雲雀を　宮權僧正聖雲

久堅の空もかすみて夕日影くるすの小野にひはりなく也

柳垂露といへる事を　法印賢助

おちとまるもとの雫もしたりえの末をはなれぬ青柳の露

池柳をよめる　權律師兼勝

池水になひく柳のかけみえてそこの玉藻に春風そふく

河柳を　報恩院彌勒丸

吹風に河そひ柳涙かけてしつえはそこのたまもとそなる

寶池院鶴松丸

風わたる柳の糸のうつろへは涙もみたるゝ春のやま川

待花といへる心をよみ侍ける　法眼覺親

春ならぬ日かすはさても過こしを霞むとなれは花そまたるゝ

權律師頼驗

さきなはと思ふ心のあらましにまつおもかけの花をみるかな

前權僧正憲深

人しれすまつ面影にさく花をいつか木末にうつしてもみん

法印定任

花もはやさくへき比とおもふよりおもかけまよふ峯のしら雲

法印堅助 私有前雲助

此比はうはの空なる雲をさへ木末の外の花かとそ見る

阿闍梨頼胤

さきぬとや思ひなさまし芳野山花まつ比の峯のしら雲

花の歌中に　觀心院有夜叉丸

吹ぬれは盛りとみるも程なきにをそきそ花の心ありける

寶池院鶴松丸

きのふよりけふは咲そふ山櫻あすの色こそ猶ゆかしけれ

尋花といへる心を　前權僧正教範

尋いる霞のおくも匂ひけり猶やまふかく花や咲らん

權律師頼驗

山深くなを尋ねてやあさからぬ心のおくを花にみせまし

題しらす　法印覺基

いたつらに咲ても花やまたるらんきのふもみえし峯の白雲

霞中花といへる心をよみ侍ける　法印定快

立こむる霞に色はうつもれてあらしに匂ふ山さくらかな

天王寺よりのほりてよみ侍ける　阿闍梨隆堅

此春は都の花を尋見ん猶こゝのへの色やまさると

花の歌の中に　前大僧正聖兼

みつのえのよし野のみやの花かつらかけて昔の色にさくらし

尋れいるさくらや末にのこるらん猶みれとあくかゝる白雲

建暦元年長尾宮の歌合に社頭花といへる事をよめる　權少僧都喜嚴

もゝしきの花の匂ひもかゝりきとましみなれはや神もみる覽

依花待人といへるこゝろをよめる　權律師賢快

咲ぬともをとつれてこそ花ゆへに春の友をはこぬもうらみめ

名所花といへる事をよみ侍ける　權少僧都經覺

わけすくるあとは麓の雲となりて花のおくなきみよしのゝ山

嶺花をよめる　權大僧都公性

咲そむるけしきをそへてかつらきや花より匂ふ峯の白雲

東大寺の若宮の歌合に遠山花といへることを
前大僧正聖忠
雲かゝるたかねはよそにとをけれとさかりはしろき山櫻かな
得業俊助
足引のとを山さくらはる〳〵となかき日かけに匂ふ春風
題しらす
法印道惠
ひとりみる花のたよりとなりにけり人めおもはぬ宿の夕くれ

續門葉和歌集卷第二

春歌下

理性院の花さかりなりける比よみてをくり侍りける
座主僧正親玄
いかはかり花のあるしのなかむらんよそにもあかぬ宿の梢を
終日見花といふこゝろをよめる
法印兼朝
こと色にまたもうつらぬ心かな花みるほとの春の日くらし
題しらす
法眼顯惠
みるたひに心そとまる山さくら春やうき世の關となるらん
憲圓法師
あかすみる心の色はやま櫻花よりさきにいつかうつりし
觀心院孫淸丸
あたらよの月はおほろにかすむとも花になふきそ春の山風
山春望といふ事を
權少僧都道順
明はつる山のさくらは色そひてかけなき月そ峯にのこれる
まゆさかをこえけるに蓮藏院の花さかりなりけるをみてよみ侍りける
義淳法師
櫻はなたかいつはりの昔より雲にあた名のたちはしめけむ
題しらす
阿闍梨俊叡
かつらきや雲ゐるみねのよそまても櫻に匂ふ春の山かせ
花の歌に
阿闍梨賴胤
詠つるおもかけなからまところめは夢にも花のめかれやはする
蓮藏院愛二丸
をのつから松ある岑は明やらて花咲かたそまつしらみゆく
閑居花をよめる
權少僧都賴仲
とへかしなさひしき宿のすまゐにも花なき時は恨みやはせし
故鄕花といへるこゝろを
前大僧正聖兼
なかむへき身そふりにける幾春と花はかきらぬ匂ひなれとも
金峯山へまうて侍りけるに花さかりなりけれはよみ侍りける
前權僧正教範
玉きはる老の春こそかなしけれことしはかりやみよしのゝ花
題しらす
法印憲淳
おしからぬうき身も春はわすられて花をみるこそ命なりけれ
長樂鍾聲花外盡といふ心を
法印定教
咲にほふ花にひゝきはうつもれて雲のそこなる春の山里
山家花をよめる
阿闍梨懷紹
寺ふかきおのへの花はかすみくれてふもとに落る入あひの聲
海邊花といへる事を
權少僧都道順
もしほやくいそ山さくら咲にけり煙のうへにかゝるしら雲
花の比西南院にすみてよみ侍りける
前權僧正通海
まつにすきおしむにくれて春はたゝ花のためなる日數成けり
惜花といふ事を
おしみこし老木の花の色まても我身に殘る春そすくなき

身につもるやそちのとしを行末の花みん春と思はましかは

圓俊律師世をのかれて後花の比よみてつかはし侍りける　任心法師

よしさらは春は浮世をわすれはてゝ思ふ計の花をたにみん

かへし　權律師圓俊

友とみるうき世の外の花をたにうたてあらしの又さそふかな

花歌の中に　法印靜運

とふ人の心の色もさくら花うつれはかはる春の山さと

花の比あしからのやまをこゆとてよみ侍りける　地藏院幸松丸

吹まよふあらしは花の匂ひにて雲も色あるあしからの山

題しらす　寶池院舜玉丸

吹まよふ山風たかき木末よりそらにうきちる花の白雪

地藏院尊丸

高砂の花にあらしや立ぬらんおのへの雲そとをさかり行

海上落花をよめる　權律師宣遍

水上に櫻ちるらし山川の岩まをくゝるはなのしらなみ

百首歌よみける中に　前大僧正定濟

限あれはさらても今はちる花をいかにせよとて山おろしの風

題しらす　前權僧正教範

ちる花を惜むなこりのはては又人のわかれと成そかなしき

庭落花をよみ侍りける　權少僧都經乘

風吹は雲よりふらぬ白雪にあとこそみえれ花の下道

花埋庭といへる心をよみ侍りし　報恩院吠若丸

春も猶とはれぬほとのあらはれて庭に跡なき花の白雪

海邊の落花といふことをよみ侍りける　法印實勝

あら磯の岸のいはれにれをかけて波にもろくちる櫻哉

花隨風といへることを

おしむらんぬしをは花のよそにして行ゑもしらすさそふ春風

花の歌の中に

いつくともしらぬ櫻のちりくれは花なきやとは風そまたるゝ

散殘るこの一枝はうくひすのなきてとゝむる花かとそみる

百首歌に春の歌とて　宮僧正道性

ちれはこそ風もさそへと思へとも花のうきにはなさてみる哉

せめてなと春と共にそ咲ちらてさかり程なき花と成けん

惜花心を　蓮藏院愛二丸

日にそへてちるとしみれはおほかたの春までおしき山櫻かな

題しらす　金剛王院王壽丸

みしよりも松のみとりの色そふや花の梢のうすくなるらん

前權僧正教範

風わたるみねより花の波こえて春そやよひの末の松山

落花の歌の中に　阿闍梨房海

花さそふ風に匂ひをさきたてゝ梢よりこそ春は過けれ

權律師賢譽

吹しほる梢は花のあとならて庭にあらしの色そ殘れる

苗代をよみ侍りける　無量壽院實光丸

櫻ちる山下水をせきかけて花をまかする小田の苗代

杜若をよめる　法印定任

ありとたにしられぬぬまの杜若人めはよそにさそへたつらん

すみれを　法印長順

たれか又ゆきてもつまぬ里遠き野原のすみれ花はさくとも

雨後欵冬といへるこゝろを　權律師良伊

ふりすさむ雨より後の色そひてなこりの露に匂ふ山ふき

水邊欵冬といへる事を　阿闍梨賴胤

おなしせにかけをうつして行水のよとむににたる井手の山吹

阿闍梨隆堅

池水にうつらぬ枝やたならまし影さへおしき山ふきの花

春のうたとて　法印道乘

蛙なく山田の原の春のくれしきたつ秋のあはれのみかは

百首の歌の中に　法印隆勝

たれをかも春と契りてよふこ鳥たえすまつちの山に鳴らん

暮春のこゝろをよめる　清淨光院鶴若丸

花は猶風のとかともうらみしをかこつかたなき春のくれかな

法印隆勝

時しあれは春やくれぬる櫻色の雲ものこらぬみよし野の山

三月のすゑに大原より醍醐へいりけるみちにはなのちりけるをみて　念寂上人

かたみともみるへき物をちりのこる花をさそひて歸る春風

關路春已暮といふ事を　阿闍梨俊賀

とゝむへき霞の關も名のみして雲ちに春や立かへるらん

暮春月を　宮権僧正聖雲

春もはややよひの末の山の端にのこるともなくかすむ月かな

暮春鶯をよみ侍りける　阿闍梨兼家

くれて行名殘はいかに夕くれの春もいまはのうくひすのこゑ

三月盡の日報恩院なりける人とも三寶院の花をみてかへりけるによみてをくり侍りける　阿闍梨範秀

限あれは花こそれには歸るとも人はいへちをいそかすもかな

三月盡の心を　三寶院千手丸

けふのみの春をはなにかさそふらん花こそ風の心なりとも

地藏院幸松丸

たのまれぬ命につけておしきかなゆくすゑしらぬ春の別は

釋迦院彌鶴丸

いく春かとまらぬかけを恨むらん惜むは猶もとの身にして

法印靜運

くれぬともわすれむとすれは花鳥の別をへたる入相の鐘

續門葉和歌集卷第三

夏歌

更衣のこゝろをよみ侍りける　前権僧正教範

たちかへて袖にはみえぬ色なから心にのこる花のおもかけ

夏のはしめの歌とてよめる　寂靜院乙夜叉丸

けさよりはみとりそふかきあしひきの山も霞の衣かへして

をそさくらを　法印定任

しらすなよ春のなこりのをそ櫻花にうつろふならひありとも

殘花を　阿闍梨定弁

時しらぬは山に春や殘るらんあをはの下の花のひともと

夏歌の中に　宮僧正道性

神まつる卯月を時とさく花のなのか色もてかへるゆふして

百首の歌の中に垣根卯花といへる心を　権少僧都經覺

みしか夜のあくるもおしき月影を籬にのこす庭の卯の花

前大僧正道玄すゝめ侍ける日吉七百首の歌に葵の歌とて

よめる　法印長順

今も又そのかみ山のもろかつらむかしをかけて神まつるなり

題しらす　阿闍梨頼覺

神山の松のこかけのあふひ草これもみとりの色はかはらす

待ほとゝきすといふ事を　前大僧正(慈禪)

待かれて何と心をつくすらんなかてしもよも山ほとゝきす

題しらす　法印定任

をいつから人つてにても郭公なきぬときかはなくさみやせん

題しらす　清淨光院鶴若丸

あけはては人にもとはむ時鳥おなしねさめに初音きくやと

權少僧都定耀

郭公今夜もたゝにあけぬなりまたれぬ鳥のやこゑのみして

東大寺八幡宮の歌合に　前大僧正(聖忠)

霍公まつにふけぬる短夜ははつれのうちの夢そすくなき

聞郭公といへることを　法印定敎

初音とは身に社おもへほとゝきす我より先に人やきゝけん

題しらす　權律師圓俊

まちえての後も心はつくしけりあかてすき行山ほとゝきす

權律師頼驗

いつはりをたれに習ひて郭公かたらひなからとをさかるらん

雨中時鳥といへる心をよみ侍りける　權少僧都俊覺

足引の山ほとゝきす時そとてなくねふりぬる五月雨の比

題しらす　法印道惠

わすれめや山ほとゝきす鳴すてゝ晨明すこきいほのねさめを

曙郭公といへる事を　前大僧正(靜嚴)

うき物とたれにならひて郭公あけ行空の月になくなり

夏の歌の中に　淺淳法師

入江にはあやめひくらし五月雨のふる野の蓬けふそひくめる

法印隆勝

夏かりのあしのやへふきさみたれにひまこそなけれ軒の玉水

故郷五月雨といふ事を　前權僧正(憲深)

いにしへをしのふのゝきにつく／＼と猶故郷の五月雨の空

名所五月雨といへる事をよめる　權律師定叡

河をとは空にきこえてさみたれの雲にかくるゝきひの中山

開性法師

みなせ川したにかよひし流さへあらはれ出るさみたれの比

題しらす　權少僧都道順

うつもれしこけの下水をとたてゝいはれをこゆる五月雨の比

山家五月雨といへる事を　權少僧都經覺

さひしさはみ山かくれの松の戸に雲とちくらす五月雨の比

雨中早苗といへるこゝろを　蓮藏院王僧丸

さなへとるたこの衣手ぬれてほすひまこそなけれ五月雨の比

寢覺霍公をよめる　權少僧都弘雅

曉のねさめのとこのほとゝきすきかすは今日も待くらさまし

夕郭公といへる事を　法印憲淳

なきすつるゆふへの雲の外までも心をそふるほとゝきすかな

題しらす　法印靜運

くれかゝる雲のいつくをとまりとて山ほとゝきす聲急くらん

蓮藏院右王丸

きゝもすてし夕のそらの時鳥いてなは月に又もこそなけ

老後聞時鳥といへるこゝろを　法印俊譽

哀なり老のねさめのほとゝきすうきをかたらふ人はなき世に

法印公紹
あはれなりおひぬる身にはみしか夜もねさめてきく山時鳥
法印親瑜
心あれや老のねさめのさひしきになく音ををくる山時鳥
前權僧正成賢湯山にて人々に歌よませて鎭守明神にたてまつりけるに社頭時鳥といへる事を
法印行嚴
時鳥なれもたむけの心あらはしめのうちにはおちかへりなけ
關路時鳥といへる心をよめる
阿闍梨教淳
きく人そしはしとゝまる相坂のせきもりなれや山時鳥
題しらす
權律師義俊
今もなを花たちはなをうへをかん後の世に又ひとやしのふと
前權僧正教範
たれとしもしらぬむかしの名殘哉ふるき軒端に匂ふ橘
定尋法師
いにしへのわきてねさめに戀しきは匂ひやかよふ軒の橘
題しらす
觀心院孫淸丸
夢ならて又もむかしはしられけり更行閨に匂ふたち花
報恩院永壽丸
たちはなの花ちるさとの月影にむかしをやとふ山ほとゝきす
夕立の歌とてよみ侍りける
法眼顯惠
ゆふ立のすき行かたもしられけり夏野の草の露を尋て
得業俊助
山のはにさすや日かけはうつろひてふもとをめくる夕立の雲
題しらす
蓮藏院右王丸
山陰を一むらすくるゆふたちにくもらぬ里も風や涼しき

野夕立といふ事をよめる
報恩院嘉寶丸
山越てさとやいつくとなかむれはまたのへとをき夕立の雨
阿闍梨懷紹
分いれは草葉の露に成にけりすゑのゝ原の夕立のあめ
杜夕立といへるこゝろを
阿闍梨俊賀
ゆふたちのはれ行雲のあとはかり日影うつろふ森の下露
寶池院松夜叉麿
このさとにやとやからましゆくさきは猶夕立の雲そかゝれる
禪林寺にて前中納言爲兼歌合し侍し中に夏天象をよみ侍し
報恩院永壽丸
さそはるゝ雲はおのへにたゝよひて雨にさきたつ夕立の風
題しらす
權律師義俊
夕立のすくる野もせのさゝれ水に草葉をわけて月そやとれる
氷室をよめる
法印長順
いつとてもさこそさゆらし時しらぬ山はひむろの谷の下かせ
夏草を
權少僧都賴聰
しけれたゝ庭の夏草かりにたにとひこぬ人のつらさをもみん
深夜螢を
法印隆勝
難波めかあし火の影はきえぬるをこやに夜ふけて飛螢かな
鵜河のこゝろをよみ侍りける
權律師兼勝
入月のかつらのかはの夕やみにひかりをかへてのほる篝火
題しらす
權少僧都定耀
短か夜もまたるゝよひはつれなくてみらくすくなき有明の月
權少僧都顯有
夏ふかき葉山のしけみもりやらて木かくれおほき月の影哉
伊勢の神道山の月杉の木すゑにかくれてみもすそ川の

にしの落合のかはらにかけみえけれはよみ侍ける　前權僧正通海
月ははや神ちのみねにいてぬらし御川のにしに影そ涼しき
海邊夏望といへる事をよめる　法印憲淳
すゝしかれや松あるいその山風にゆふなみかけて出る月影
題しらす　阿闍梨實淳
吉野川瀧つ岩根のはやき瀬にすむも程なきみしか夜の月
權少僧都房基
すむ月のひかりを秋にさきたてゝ涼しさうかふ庭の池水
納涼の歌とてよめる　憲圓法師
すゝしさは音なきくにもかよひけり袖まてふかぬ峯の松風
義淳法師
おかへなるならの葉したり吹風に木かけ涼しきひくらしの聲
法眼覺弁
夕くれはすゝしく成ぬしからきの外山をこゆるむら雨の空
夕顔をよみ侍りける　權大僧都公性
咲程はこれもなさけとなりにけり曉かかきれの夕顔の花
六月祓の歌とて　義淳法師
みそき川涙に流るゝあさの葉の程なくに早く夜そあけぬへき
權少僧都經覺
みそき川流るゝあさのゆふしてに秋をかけてや風かはるらん

本云
六十五首
挍了
十帖之内文祿四乙未稔八月下旬寫之
堯演

續門葉和歌集巻第四

秋歌上

秋のはじめの歌とてよみ侍りける　前大僧正覺濟
時しもあれ今こそ風の身にはしめあやしやいかに秋やきぬ覽
日數へはたえぬあはれもいかならむしのひかたきは秋の初風
前大僧正聖兼
今よりはすゝしくなりぬかた岡のしのゝ葉わけの秋の初風
題しらす
さひしとてゆくへき方も秋なれはたえて聞つる荻の上風
朝の早秋といへる事をよめる　蓮藏院行王丸
いつしかとけさ身にしまぬ風ならは夕暮よりそ秋をしらまし
初秋の歌とて　前權僧正通海
露はいまたこほれもやらて宮城野の草のはつかにかよふ秋風
初秋風といへる心を　法印靜運
かけろふのをのゝみなとのあさ明にほのかにかよふ秋の初風
寶池院辰熊丸
今よりの秋のあはれも身にしみて風ふきかはる庭の荻はら
題しらす　阿闍梨懷紹
今朝よりは音ふきかへて秋來ぬとしろき氣色の森の下風
良殿法師
うつりゆく秋とはかりの風をとにみえぬ色そふわかおもひ哉
憲圓法師
めに見えぬ秋のあはれを人とはゝ風より外にいかゝこたへん
露知秋といへるこゝろをよめる　權律師宣遍
音かはる風こそあらめ夕くれの露の色にも秋は來にけり

右大弁光俊朝臣家の會によみ侍りける歌の中に
義淳法師
夏衣ほすかとすれは久堅のあまのかく山秋風そふく
秋の歌の中に
宮僧正道性
ひとゝせをまちつるよりも天の川遠きやけふの渡りなるらん
永仁二年長尾宮の歌合に七夕契久といへるこゝろを
法印定快
まれにあふつらさにかへて七夕のたえぬ中とや契をきけん
同しき歌に
權律師頼驗
あまの川としのいくせをわたるらんちきりもくちぬ鵲のはし
題しらす
權少僧都定耀
心から秋のひとよをかきりけん契よいかにほしあひの空
秋の歌の中に
義淳法師
たむけするやそせのぬさの夕なきにはやこきいてよ天の川舟
七夕歌とてよめる
金剛王院摩尼一丸
むつ言もなかきよはとや七夕のわきて秋とは契りをきけん
人間五十年下天一晝夜のこゝろにて七夕をよみ侍りける
前權僧正通海
あめのしたいそちの秋を一夜にていくよになりぬ星あひの空
題しらす
三寶院千手丸
おほかたの露こそ袖にこほるとも涙は秋のならひならしを
野露といへる心を
蓮藏院王僧丸
こゝろなき草の袂も秋はなをぬるゝならひの野邊の夕露
山居秋夕といへる事を
法印實篤
松の戸の軒にゆふ日はへたゝりて霧よりくるゝ秋の山本
五十首の歌よみ侍りける中に
法印靜暹
いとゝ猶くたけて物をおもへとや袖のなみたに秋風そふく
をとつるゝ人なきやとの荻の葉にたかならはしそかよふ秋風
題しらす
阿闍梨憲家
うきもわか身のならはしのゆふへそと秋にかこたぬ荻の上風
權少僧都有嚴
もゝ草も千種も野へにある物をおきの葉のみと秋風そふく
權少僧都頼聰
ゆふされはおきの葉わたる秋風に我袂さへ露そこほるゝ
月前荻といへる事を
權少僧都經乘
さひしさをたえてもいかゝしのふへき月もる軒の荻の上風
法印覺雅
風になひく庭のおきはら露ちりてうつろふ月も影そくたくる
秋の歌の中に
法印道恵
ほのかなる木のまの影を猶とめて入月したふ露の下荻
宮僧正道性
秋風のたよりすくさぬをとつれもつらさをそふる庭の荻原
法印長順
さのみよもなへての秋はつらからし身のうけれはそ涙おつ覽
權律師頼驗
うしやたゝなかめしとおもふ心にもかなはさりける秋の夕暮
題しらす
法印道恵
ねやちかき一村薄露みえてさひしくふくる秋のよの月
薄の歌とてよみ侍りける
阿闍梨頼胤
小くら山ふもとの霧のあさあけにおはなしほれて秋風そふく
蓮藏院十用夜叉丸
ほにいてぬこころたにかなししの薄ましていまはの秋の夕くれ

野闌をよめる　權律師兼勝

きてもみむたちなかくしそ藤袴ほころふる野の秋の夕霧

永仁二年長尾宮歌合に草花知秋といへる心をよめる　權大僧都覺繼

さきかはるちくさの花のいろ／＼もおなし心に秋やしるらん

草花初開といへるこゝろを　權律師義俊

さきそむる枝こそなひけ女郎花花になきそふ露をかされて

題しらす　法眼顯惠

こゝろとはなひかぬものを女郎花花のなたてにをける白露

太宰權師資實のもとより女郎花をこひ侍りけるにつかはすとてよみ侍りける　念寂上人

女郎花のちの秋ともたのまれは露ものこさすうつしつるかな

萩露をよめる　權少僧都經覺

をきあえぬ露もさこそはくたくらめ風の下なる野邊の秋萩

夕萩といへる事を　法印隆勝

夕暮のちくさをわけて吹風に猶袖そむる萩の下つゆ

報恩院嘉賓丸

夕くれの風ふかぬまのはきか枝に露もしはしの色そうつろふ

前大納言長房家歌合に萩露といへる事を　阿闍梨覺玄

露は袖にうつりにけりな旅人のゆききのをかの秋萩のはな

風前萩といへる事を　聞性法師

しほれつる野原の露はかつおちて風に色そふ秋萩の花

秋の歌の中に　權少僧都道順

ゆふ日さす野へのうすきりきえはてゝ小萩か末にのこる秋風

野夕望といへる心を　理藏院右王丸

花の色もうすきりかゝる夕くれの野へまてふかぬ山の秋風

百首の歌よみ侍りける中に秋の歌とてよめる　隆舜法師

ゆふきりのはれ行みねの秋風にふもとの野邊も露そこほるゝ

秋山といふ事を　阿闍梨圓濟

日かけさすこすゑの色はほの見えて夕霧となき秋の山本

權少僧都賴聰

谷河のいはもとすけの風ふけは涙そすゑ葉の露とこほるゝ

朝霧といへる事をよめる　開性法師

たちこむる霧のへたてのあさな／＼しはしかくるゝ秋の山本

文集の中に秋風滿袂涙といへるこゝろを　釋迦院鶴丸

あはれしるなみたの露をかことにて袂になるゝ秋のゆふ風

夕草花といへる事を　權大僧都公性

をく露も色やあまたにこほるらん花もちくさの風の夕暮

題しらす　法印定叡

明わかぬなみたの露もしゐて猶ゆふくれしるき袖の秋風

阿闍梨經淳

よをうしと思ひもいれぬ身にも猶秋はゆふへそ心うかるゝ

前大僧正定濟古今の詞を中にをきておの／＼秋の歌よませ侍りけるに千草なからにといへる事を　前大僧正聖兼

野邊見れは千種なからになきかへて花の色わく秋の夕露

草露を　權律師定叡

ふきをくるあさちかすゑの秋風にみたれてつたふ野への白露

夕虫をよめる　阿闍梨範親

夕暮はおなし野もせになく虫も露けきかたやれはまさるらん

夜虫をよみ侍りける　法印道惠

かくはかり千々にもの思ふ秋の夜を我身ひとつと虫や鳴らん

前大僧正覺澄

聲たてゝなけや籬のきり〴〵すものさひしかる秋のねさめに

權少僧都運雅

庭の虫を

庭にうふる千草に野への色みえてうつさぬ虫を籬にそきく

盛琳院觀音丸

月前初鴈といへる事を

すむ月の秋のあはれもふかきよにねさめさひしき初鴈の聲

理性院千福丸

時しもあれ月のすむ夜の秋の空に一つらすくるはつかりの聲

釋迦院耶々丸

題しらす

久かたの月にちきりや結ひけん秋をわすれぬ鴈の玉つさ

地藏院幸福丸

聲は猶すきぬるあとにかよふ也あらしにむかふ鴈の一つら

權少僧都經覺

月前鹿といへる心をよめる

もろともにあきのあはれをすゝめけり月出る山の小男鹿の聲

前權僧正教範

よもすからをのゝ草ふし月さえてしのふかたなき小男鹿の聲

大みねをとをりけるにちかきほとには鳥けたものもなきにはるかなるとやまをへたてゝしかのねきこえ侍りければよめる

はるかなる外山に鹿の聲はしてひとり更行みねの月影

蓮藏院王左丸

夜鹿といへる心を

つまこひの鹿そ鳴なるよもすからしくるゝ山の峯のあらしに

義淳法師

題不知

たか野はら男鹿つまとふ秋風にわれさへものゝ悲しきやなそ

禪林寺にて前權中納言資雍歌合し侍りしに秋動物といへる事をよみ侍りし

報恩院吠若丸

野邊のむしみやまの鹿も夕くれのおなし哀にねをやたつらん

佛昭上人

秋田といへる事をよめる

小山田のひかぬなるこに風過て空におとろく秋のむら鳥

報恩院永壽丸

三日月を

うちなひくいなはの雲もしくるらし夕露もろきをたの秋風

宮僧正道性

くれぬるか秋くるかたの山端にまつみえ初る三日月の影

權少僧都經覺

いつるより山の端近くかたふきてみるほともなき三ケ月の影

開性法師

待月といふこゝろをよめる

くれはつる夕日ののちの山の端にまたいりかゝる三ケ月の影

法印行譽

山の端をいてはいかにと思ふよりまつあらましの月をみる哉

權大僧都公性

いてやらぬ光はよそにみえなからまつほとをそき山端の月

寬尊法師

鷹司前關白大政大臣家にて題をさくりて歌たてまつりけるに待月といへるこゝろを

まつほとの恨をなにとのこすらんかならす出る月のなさけに

法眼覺親

題しらす

遠近の山の端くらき松かけのあらはれゆくや月のいつらん

報恩院彌勒丸

一むらの雲をはよそに吹なして月影さそふ峯の秋風

蓮藏院王僧丸

望出山清光といへるこゝろを

山の端をのほる光はほのみえて高き木の間に月そやすらふ

法印道惠

題しらす

吹はらふ嵐を空にさきたてゝ雲のあとゆく秋の夜の月

蓮藏院土用夜叉丸

ふけゆけは月のためとや秋風にあたりの空の雲ものこらぬ　權少僧都空耀

河月をよめる

飛鳥川きのふにかはる波の上にやとれる月はふちせともなし　權律師義俊

いはかねをうつ浪ことに影そへて月にくたくる山川の水　蓮藏院愛貮丸

野月といへる事を

よもすからわくる草葉のはてもなし月のかすめる武藏野の露　權律師圓俊

田家月を

もりあかす田つらのいほに影さえて稻葉の雲は月もへたてす　權少僧都定譽

いなむしろ露しく小田のかり庵に幾夜か月の影もゝるらん　法橋覺能

海の月を

山あひのいり海くらきゆふしほにひかりをうけていつる月影　阿闍梨遍曉

あま小舟月とともにや出ぬらん霧ふきはらふ須磨の浦風　俊毫法師

たえまなき浦のもしほの煙さへ空にははるゝ秋の夜の月

八月十五夜に月をなかめて十五首の歌をよみて送れり
ける人のもとへつかはし侍りける中に　法印憲淳

ひとり猶なかむる影やつけぬらし心に月のすみうつるまて

かへしの中に　漸空上人

幾秋もなかめてあかぬ月そわか山の端ちかき影となるらん　寛賢法師

題しらす

さゝかにの糸にかゝれる白露にやとかる月もかけやまつらん　蓮藏院右王丸

山の端によそなる雲をさそひきて月にもしはしうきあらし哉　法印眞敞

迎秋月明といへるこゝろをよめる

いつもまたそらゆく月の秋をしもいかにちきりて光そふらん　法印實勝

名所月といへるこゝろをよめる

なくさまぬあはれを月にかこちてや鹿も鳴らんおはすての山

本云
憲家僧都筆跡云々
百十首校了

續門葉和歌集巻第五

秋歌下

東大寺若宮の歌合に野月といへる心を　前大僧正聖忠

袖ふれて秋の野はらをわけ行は月影なから露そこほるゝ　前權僧正通海

山月といへるこゝろをよめる

たつね入高根に月ははれにけりふもとの雲を誰いとふらん

人のすゝめにて百首のうたよみ侍りけるに月の歌とて
よめる　權少僧都經覺

時しあれはこれもなさけの數なれやふけたる月に雲の一むら　蓮藏院愛貮丸

題しらす

はらふへき雲はのこらぬ山端の月にのみふく夜半の秋かせ

故京月といへる心を　前大僧正聖兼

山とりの尾上のみやはあとふりてなかきかた□[みイ]の月そ殘れる

あつまにすみ侍りけるに大藏卿重經のもとよりありし
よにかはらぬ月の面影もみやこのほかはいかゝ

すむらんと申をくり侍りける返しに　法印憲淳

なにをかはみしよの友とたのままし月も都におもかはりせは

月あかゝりける夜よもすからひとりなかめてよみ侍りける　權律師頼驗

たれにかはあはれかたらんひとりみる心はかりの秋の夜の月

月爲秋友といへる心をよめる　遍智院瀧一丸

友とみるこゝろや空にかよふらん月もさひしき淺茅生の宿

山家月といへる事を　權少僧都顯有

すみはてむ柴の庵と思ひしに月に心そあくかれぬへき

法印隆勝

眞柴ふく宿も外山の秋風にたまらぬ月の影そさひしき

仙兪法師

我のみとおもふみやまの柴の戸に槇の葉わけの月もすみけり

田家月といへるこゝろをよめる　法印相助

なにとまた我身ひとつと思ふらむ山田の庵は月ももりけり

月歌の中に　法印公紹

物おもふ涙にやつす秋ことに月こそうさをまつはしるらめ

獨見月といへる心を　法印賓爲

我計り月にあはれのまさるかとまたみる人のあらはとはまし

百首歌よみ侍りける月の歌とて　法印定任

月を見るなくさめならてなにをかは浮世にめくる思出にせん

月前感思といへる事をよめる　法眼覺親

昔より秋はかなしきならひかとかはらぬ月の影にとはゝや

人のすゝめ侍りける撰歌合の中に月のうたとてよめる

うき事のわすらるゝまてすむ月をみてしもなとか涙おつらん

月の十首をよみ侍りける中に　權律師圓俊

いつよりかうき世の秋をのかれいてゝ涙の外の月をみるへき

秋の歌の中に月をよめる　阿闍梨俊叡

花薄末こす風に露ちりてもとのしつくに月そやとれる

月の百首をよみ侍りける中に　舜海法師

はるゝまもこゝろやすめぬなかめ哉月より遠の村雲の空

山月出霧といへるこゝろを　權律師定叡

たちこむる山はすかたもみえわかて霧よりいつる秋の夜の月

月の十五首の歌をよみ侍りし中に　報恩院永壽丸

山端にいりぬとみれはよこ雲のわかるゝあとにまた月の影

題しらす　權少僧都運雅

いるまてもさやかにやみん月のあたり雲ものこさぬ秋風の空

月十五首の歌よみ侍りける中に　憲圓法師

いらぬまをまた夜ふかしと眺れは月影なからあくる山の端

月の歌とてよめる　權少僧都敎圓

有明の月はさやけき山の端になをかすかなるさをしかの聲

題しらす　前大僧正定濟

まちえてもなこりはいかに秋の夜の雲間に出る有明の月

禪惠法師

村雨のなこりの空の雲間よりたえ〳〵見ゆる有明のかけ

八月十五夜にある人十五首の歌ををくり侍けるかへしの中に　法印道惠

いたつらに我身世にふる月をみてみそち移りし秋そくやしき

法印公紹

むかしより月はみしかとわか涙もろきそ老のしるしなりける

いたつらにむそちの影もかたふきぬ今いく秋かありあけの月

法印親瑜

月の歌の中に　法印定敎
月よりも山のはちかく成にけり我よひのまやしはしなりけん
閑居曉月といへる事を讀侍ける　法印隆勝
人とはぬ庭はさなから淺茅生の露にうつろふあり明の月
名所曉月といへるこゝろを　法印賢勝
はつせ山みねの松風ひゝきておのへのかねに月そかたふく
阿闍梨賴胤
いつるより心つくして松嶋や入もおしまの秋の夜の月
題しらす　阿闍梨敎有
山の端にかたふく月をなかむれははや曉と鐘そきこゆる
惜曉月といへる事を　權律師兼勝
月もまた哀とおもへあまのとのあくるまてなをおしむ心を
秋歌の中に　法印道惠
かりかねもとをちにすきている月のかたふく影そ庭に淋しき
權少僧都運雅
みるまゝにうつろふかけはうすくなりてけしき淋しき曙の月
海邊秋曙といへるこゝろをよめる　法印憲淳
あくる夜の月は浪まにかたふきて薄霧同しおきのとなしま
題しらす　權少僧都賴聰
白浪は麓にきえて有明の月こそこゆれすゑのまつ山
報恩院如意珠丸
あけかたの月はかくれて空とをきおきのこしまの霧そ殘れる
有明月をよめる　阿闍梨經淳
出るかとおのへの月をなかむれははや影うすし晨明の空
傾月をみてよみ侍りける　阿闍梨澄承
月ははや山もとくらくかたふきて梢はかりにのこるかけ哉

題しらす　覺洞院千世若丸
長き夜に入まて月をなかめてもあかぬ心そ猶のこりける
法印隆勝
秋深き礒へのなみのよる〳〵は霧にほのめくあまのいさり火
聞性法師
またいらぬ日かけを空にたちこめて夕くれいそく峯の秋風
月前擣衣といへるこゝろをよめる　寶遍院松夜叉丸
衣うつをのゝ里人をのつからねぬよすからの月やみるらん
寂靜院孫鶴丸
秋はたゝ夜さむの風をかこちても月みむとてや衣うつらん
阿闍梨明胤
吹風もをとすさましき月かけに夜さむの里は衣うつなり
秋歌の中に　法印相助
ふきおろす峯のあらしやさむからしふもとの里は衣うつ也
里擣衣といへるこゝろをよめる　法印道惠
さえまさる月のかつらの里人やねぬよすからの衣うつらん
阿闍梨宗尋
さらしなの里をはかれぬ月影にまた音たえすうつ衣かな
擣衣聲々といふ事を　仙兪法師
うちそへてあまたきぬたのをとす也庵ならふる里の一むら
霧中槿花をよみ侍りける　法印在圓
朝かほもまた露なからのこりけり日影へたつる霧の籬に
暮秋萩といへる心を　釋迦院彌鶴丸
行秋のすえのゝ小萩花ちりて露もうつろふ色そすゝなき
水邊菊を　法印靜運
咲匂ふきくの下水むすふ手にくみてしらるゝよろつよの秋

櫻會ひさしくたえてまちとをに侍りしに永仁の秋の比雨のいのりのかへり申とて童舞いとおもしろく侍りけれは樂屋のまへのさくらの枝にむすひつけ侍りける

よみ人しらす

花にまちしその色々のおもかけをおなし櫻の紅葉にそ見る

題しらす　權律師定叡

もみち葉のぬれて色そふ村時雨ほさてみよとやまた曇るらん

法印長順

そめつくす紅葉をやかてさそふ也しくるゝ雲のあとの山かせ

伊勢のくにへくたり侍りけるにすゝか山の紅葉をみてよめる　法印定任

外よりもみやまの秋の時雨こそ紅葉の色もふかくそめけれ

紅葉露といへる心を　權律師圓俊

ぬれてゆく袖をも秋の色にそめよもみちにあまる山の下露

秋の歌の中に　義淳法師

年たけてねさめかちなる秋の夜をしくれゆへとも思ひける哉

長月の比治部卿重經のもとへ申つかはし侍りける　阿闍梨憲家

淋しさをいかゝしのはむ山里のきりの葉おつる秋のむら雨

返し

淋しさはおもふにこえぬ秋の雨に桐の葉もろき宿ときくにも

廬山雨夜草庵中といへる心をよめる　法印親瑜

なにふりし草の庵のあめのよや我身の秋のこゝろなりけむ

題しらす　權律師良伊

ふりすくるあきのすゑはの村雨に猶露をもる庭のあさちふ

野徑虫といへる事を　阿闍梨澄承

しはしたに虫のねのこせ初霜の野邊のあさちは枯はてぬとも

曉虫をよめる　權少僧都經覺

むしの音もかすかになりぬ有明の月影うすき初霜のには

暮秋虫といへるこゝろをよみ侍りける　權少僧都定耀

今はとてやゝ夜さむなる長月のすゑののはらに虫うらむなり

寶池院長命丸

をのかねのよはるにつけておほかたの秋も暮ぬと虫や鳴らん

念西法師

よはり行老か身にこそかなしけれ秋もいまはのむしの聲々

權僧正教範下河原の坊にて同宿と歌よみける中に暮を　阿闍梨尊喜

老らくの枕の下のきり〳〵すよはる聲こそ身にしられけれ

大江宗秀朝臣家にて歌合し侍けるに暮秋のこゝろをよめる　蓮藏院右王丸

ひとかたのなこりをせめてしたはゝや秋も今はの有明の月

前權僧正憲深千日の護摩をこなひて無量光院にすみ侍りけるに九月盡の日けふしもなとつれなき事をうらみつかはしける歌の中に　前權僧正成賢

あはれにも秋のわかれをなくさむる夜半の時雨そ心ありける

惜秋といふ心を　阿闍梨隆堅

身にかへて秋を留むるならひあらは露より先に我やけなまし

權少僧都經覺

暮ひつる秋の日數はつきぬとも我身やたえてあすものこさん

本云

中正院憲家僧都筆跡云々

七十六首挍了

續門葉和歌集卷第六

冬歌

初冬の歌とてよみ侍りける　前大僧正定濟
今朝ははや秋より冬にうつるとてみねより峯にふるしくれ哉

法印定任
しはのとにかよふ嵐のをとまても淋しさそへて冬は來にけり

冬の歌の中に　三寶院千手丸
かれてより夜半のしくれの氣色にて夕邊の山にかゝるむら雲

夕時雨といへるこゝろをよめる　地藏院幸松丸
夕時雨すきぬるあとのなこりまて猶袖ぬらすまきの下露

憲圓法師
はれのころ雲のひとむらたよりきて又ふりいつる夕時雨かな

五十番の歌合し侍りける中に時雨歌とてよめる　阿闍梨憲家
うすくもはかゝるともなき夕暮の日かけにそゝくむら時雨哉

時雨の歌とてよみ侍りける　權律師圓俊
うき雲のたえ〳〵かゝる山の端に日影をわけてふる時雨かな

法印賢助
ゆふ時雨すくるまてこそなけれとも雲間ありける三日月の影

龜山仙洞にて當座御歌合の侍りけるに時雨の歌とて　宮僧正深性
うつり行雲のいつくもみえわかて闇はあやなく降時雨かな

百首歌の中に
一村はさそひてすくる山かせにおくるゝ雲そ又しくれける

山時雨といへるこゝろをよめる　阿闍梨俊賀
山高みうきたつ雲の行かたに時雨てすくる風の音かな

神無月のころ人のさそひ侍りけれは山つたひにまかり侍りける所へ又人のもとよりおもひやれ山めくりして行雲のあとにのこれる袖の時雨をと申送り侍りける返しに　觀心院有夜叉丸
峯つゝき時雨をわくるすゑまてもそなたの空を忘れやはする

里時雨といへる心を　法橋覺能
吹かへす嵐に雲のゆきやらてまた此里にふるしくれかな

題しらす　開性法師
めくりくるおなししくれの晴曇月をさためぬ村雲の空

田家時雨を　寂俏法師
苫ふきしたつらの庵はあれはてゝ人こそもられ時雨ふるなり

旅時雨といへる心をよめる　法印兼徹
槇の屋のたひれの夜半の村時雨枕をたにもえこそさためね

神無月のころ禪林寺にすみ侍りけるに嶺のさくらのもみちし侍るに時雨のふりけれはよみ侍りける　權律師圓俊
花にみし嶺の櫻は紅葉してまかはぬ雲にふるしくれ哉

題しらす　前權僧正敎範
時雨をは秋よりきゝしまきの屋に冬來にけりとふる木の葉哉

冬の歌の中に　前大僧正靜嚴
雲まよふ嵐の山のたかねよりをのれしくれてちる木の葉哉

九月のころ龜山の仙洞にて當座の御歌合に庭落葉とい

ふ事をよみ侍りける　權少僧都道順

名に高き山のふもとを庭にうけて嵐のをくる紅葉をそみる

落葉歌とてよめる　阿闍梨全成

庭のおもに秋のこのはをうつしをきて色なき風そ松に殘れる

法印淨眞

おほあらきのもりのこの葉や散ぬらん今朝吹風の聲の少なき

故鄕の落葉を　法印定敎

あをによしならの宮この山風にふりさけ見れは落る紅葉は

題しらす　前大僧正聖忠

ふり積る庭のこの葉をふきたてゝ風もしくれの音になりぬる

法印兼朝

さそひこし梢はよそにをとたえて拂嵐を落葉にそきく

阿闍梨憲家

この葉ちるうへ山風の夕暮に時雨たまらぬうき雲の空

蓮藏院右王麿

をとはかり松にきゝつる山風のふくかたみせてちる木の葉哉

法印靜運

もみち散ふもとの野への冬草に秋の色かす山おろしかな

朝霜といふ事を　觀心院孫清丸

むすひとむる露のなこりやこほるらん庭の淺茅のけさの初霜

題しらす　阿闍梨懷紹

霜をけは又こと色のあらちやまやた野の淺茅露はかりかは

枯野霜といへるこゝろを　報恩院嘉賓丸

露わけし千草の花はかれはてゝ霜こそ野邊の色と見えけれ

おの／＼百首歌よみ侍りけるに江寒芦といへるこゝろを　釋迦院彌鶴丸

難波江や枯葉のあしのよをこめてこほる朝けの霜そさむけき

枯野をよめる　遍智院瀧一丸

をのつから霜にかれ行おきの葉に猶をと殘す野へのこからし

枯野月といふ事を　蓮藏院愛二丸

淋しさはかれ野の草の霜のうへにこほれる月の有明の影

攝津國みつの入江をすき侍けるに寒芦をみてよめる　同院王僧丸

さす鹽のみつの入江に風こえてしほるゝあしの夜半の寒けさ

氷の歌とて　慈琳院觀音丸

もみち葉の影みし水も今はとて秋をへたつる薄氷かな

百首の歌の中に　前大僧正聖兼

をのつから下行水もたえにけりそこまてこほる冬の山川

冬の月を　前權僧正通海

雲のみを流るゝ影ははやくともこほりてよとめ冬の夜の月

冬の歌とてよめる　權僧正賴嚴

外山おろす嵐のすゑもこほるらし雪けにかはる峯のうき雲

冬山路といへる事を　阿闍梨成祐

わけきつるふもとは時雨峯は雪みのしろ衣ほすひまもなし

題しらす　報恩院彌勒丸

よしの山ふもとは時雨みれは雪さためぬ雲に嵐吹なり

權少僧都勝玄

かきくらす山路の雲をさきたてゝ嵐のすゑに雪はふりきぬ

蓮藏院右王丸

雲間より影もる程はかつきえて入日ののちにつもる雪哉

淺雪といへるこゝろを　報恩院吠若丸

つもれとも猶みちしはのすゑみえてまた深からぬ野邊の白雪

深雪を　　權少僧都有嚴

今はさそ山の白雪ふかゝらし里さへのきもうつもれにけり

夜雪をよめる　　阿闍梨經淳

村雲にかくるゝほともすむ月の光とみゆる庭のしら雪

雪のふりけるに月あかゝりけるを見てよめる　　圓靜上人

白雪の庭にふりしく冬の夜はいつれを月の影とわかまし

倶舍三十講つとめて醍醐にすみ侍りけるころあかつきの月幽なるに雪ふりければよみ侍りける　　法印憲淳

木枯の峯のうす雲雪ちりて月幽なるあけほのゝやま

前民部卿(爲行)家にて歌合し侍りけるに遠山曙雪といへることろを　　權律師兼勝

あけやらぬ空の光にさきたちて雲間にしらむ雪の山の端

朝雪といふ事をよめる　　權少僧都定耀

里ちかきおのへの松は緑にてとを山しろし雪のあさあけ

權少僧都賴聰

今朝は又軒のたるひとなりにけりとくるかとみし夜半の白雪

上の醍醐にこもりておこなひ侍りけるに雪ふかくふりけるあかつきあか井の水をとるとて根本尊師の昔を思出てよみ侍りける　　權少僧都道順

雪ふかき谷の清水もわか山のふりにしあとを尋てそくむ

雪中煙といへるこゝろを　　蓮藏院右王丸

山人のかれてつま木やとりつらんあとなき雪に煙たつなり

庭雪といへるこゝろをよめる　　清淨光院鶴若丸

われとても人をとふへきみちもなしたれをかまたん庭の白雪

法眼賢增

つもれたゝさらても人のとふへしと思はゝこそは庭のしら雪

俊毫法師

をのつからとひくる人のなさけとめて暫しあとある庭の白雪

權律師賢快

訪くへき人しなけれは庭の雪のきゆる跡をやけさはまたまし

雪の朝に醍醐より前中納言(爲兼)のもとへ申つかはし侍りける　　法印憲淳

けさいかて都のやとの雪の庭にかよふ心のあとをみせまし

返し

我こそは思ひやりつるけさの雪にまつとはれぬる跡そ嬉しき

行路雪といへる心をよめる　　義淳法師

冬ふかきこしの中山馬はあれと雪ふみならしかちよりそゆく

旅宿雪といへる事を　　法印在圓

夜のまにも雪にやあとをつけてまし夢に道行たひねならすは

海邊雪を　　權律師賢譽

ふれはきゆるあとよりやかて白浪のよするなきさは雪の面影

三寶院千手丸

埋もれぬしほせはそこともみえなから雪の浪こす浦のはつしま

江上雪望といへるこゝろをよみ侍りける　　報恩院永壽麿

みつしほに入江の芦はをきになりてなみにうきたる雪の一村

日吉七百首歌の中に　　法印長順

しかの浦やこほるみきはのむら〳〵に浪を殘してつもる白雪

上醍醐に侍りけるか思ひのほかに三井寺へまかりにけるをあさからすなけきて醍醐へかへり侍りしに寺の僧

とも歌よみてなくさめ侍りけるに湖上曙雪といへる事をよめる　遮那院松若丸

からさきや松のはしろくふる雪のなみにあとなき曙の空

あつまよりのほり侍りけるに曙にしかの浦をとをりてよみはへりける　法眼覺辨

雪つもるひら山おろしさえあけてさゝ波しろし志賀の辛崎

岡雪を　權少僧都運雅

風にうらみ露にしほれし俤も雪にのこらぬおかのくすはら

松雪を　權大僧都公性

をのつからかよふ嵐も吹たえて雪のみうつむおかの松かえ

蓮藏院右王麿

枝しけきおかへの松のかけはかり雪にたとらぬ里のかよひ路

聞性法師

ふりとまるこすゑの雪のたえ／＼にきえてそむすふ松の下露

冬の歌の中に　法印定任

きゝなれし松の嵐のをとまてもたえてほとふる峯の白雪

蓮藏院龜若丸

降てしもかはらぬ色にならひてやきえかてにする松のしら雪

阿闍梨憲家

おのへより風こゆらしもはれて猶ふもとの松におつる白雪

竹雪をよめる　法印寛惠

木にもあらす草にもあらて咲花はまかきのたけにつもる白雪

權律師圓俊

煙かとみえしすゑ葉は色かへて雪こそなひけまとの呉竹

寶池院舜王丸

ふりおもる枝より雪やこほるらんほとなくうつむ竹の下道

前權僧正敎範

ふりつもる雪の下なるくれ竹やうつもるゝ身の友となるらん

百首歌よみ侍りける中に雪のうたとてよめる

法印公紹

埋もるゝ身こそつらけれ白雪のふるののおとろ道たえしより

朝鷹狩といへる事を　權律師貞伊

今朝はまた雪にさきたつ跡もなし我のみ急く野へのたかかり

日吉七百首の歌の中に鷹狩をよみ侍りける　法印長順

暮ぬとも猶かりゆかむこの山のすその草にきゝすこもれり

百首の歌の中に山霰といへる事をよめる

權律師賴驗

山人のきそのあさきぬ袖さえてあられふきまく峯のこからし

竹霰を　權少僧都定耀

うちそよく籬の竹のよをさむみゆめをのこせとふるあられ哉

冬の歌とて　權律師宣遍

よをさむみ庭の小笹にふる雨のあられになるかをとさやく也

冬月といへる心を　權律師兼勝

おり／＼はあられこほれて村雲のひまもる月の影そさむけき

百首歌よみて中納言定家のもとへつかはしける中に

法印敎嚴

月の夜はつかはぬおしもなかりけり涙の枕に影をならへて

いすゝの河なる瀨に水鳥のうかひたりけるをみて

前權僧正通海

いすゝ川なるせおち行水とりのあをはにかゝる波のしら雪

題しらす　蓮藏院王僧丸

水くゝる雁のうはけに玉こえて涙そあられにちりまかひける

江千鳥を　釋迦院彌鶴丸

船とむる入江のうきね夢たえてあるゝ浪より千鳥なくなり

前大納言具房百首の歌をすゝめ侍りけるに湊千鳥とい
ふ事を　權少僧都道順

すきぬなりゆらのみなとのさよ千鳥とわたる月を浪に殘して

潟千鳥をよめる　權少僧都有嚴

常陸帶のうなかみかたに啼千鳥めかり鹽やくあまやきくらん

嶋千鳥を　權律師圓俊

さひしとやおきつ嶋もりきゝわひむ友なし千鳥月になく聲

任淳法師

月さゆるゑしまかいその浪まくらねられぬ友となく千鳥哉

前權僧正通海

からことのをしまか崎になく千鳥いはこす浪に聲かよふらし

題しらす　法印長順

荒礒によせくる浪のたてはなをかへれはかへる友千鳥かな

蓮藏院王僧丸

夜やさむきいそ山あらしをとふけて月すむうらに千鳥鳴也

冬の歌とて　義淳法師

なこの江のみなとの風や寒からし霜夜のつるも妻よはふなり

神樂をよめる　法印相助

庭火たくかけには神のこゝろまてうちとけぬへき夜半の白雪

義淳法師

その駒のむちにさかきをとりくして庭火の影にとれり立まふ

冬の歌の中に　法印隆勝

さらぬたに影もみしかき冬の日のかたふく山にかゝる村雲

歳暮の歌とてよめる　前權僧正通海

ゆくと思ふ年は我身に積れともさてもとまらぬはてそ悲しき

前權僧正成賢すゝめける六時の歌の中に黄昏を　法印深賢

つく〳〵と暮行年をしらすなりよそちあまりの入相の鐘

歳暮のこゝろを　法印隆勝

をのつから月と雪とのなさけまても積りておしき年の暮哉

右續門葉和歌集以古寫一本挍合

續門葉和歌集卷第七

戀歌

はしめたるこひの心をよめる　蓮藏院右王丸

おほつかなまた身にしらぬ思ひにもいつならひてか涙落らん

念西法師

思ひそむる心のうちをしりてもやあはれそふらん袖の月影

忍戀のこゝろを　前權僧正教範

もらすなよ我したもえの夕煙さこそおもひに身をこかすとも

前大僧正聖忠

かすならはしらせてましな我戀をうきに忍ひて年そへにける

九條前關白の家にて月前戀といへることを

もろともに心にしける忍草つゝむ人めやたれとなるらん

前大僧正厳

このひえぬ涙有とはしりぬらんよな〳〵なるゝ袖の月影

前大納言實教の家にて歌よみ侍けるに忍戀のこゝろを　無量壽院松若丸

袖に置露をは秋にかこちても心の色を人やとかめむ

權律師義俊

袖をたに心のまゝにぬらさはや人にはつゝむ涙なりとも

不被知戀といへることを　法印定任

さしも又包まんとしはなけれとも憂身をしれはえこそ漏され

人のすゝめ侍りける撰歌合中の戀の歌に　法眼宗圓

いはてたゝおもふはかりの年月は我より外にしる人もなし

題しらす　法眼賢増

しのひこし心のうちをしるものは袖をはなれぬ涙なりけり

觀心院有夜叉丸

涙こそ我心よりさきたちていはぬに袖の色を見せけり

互通戀の心を　寛尊法師

伊勢の海や見るめにしるしいそなつむかたみに通ふ心有とは

題しらす　蓮藏院右王丸

心にはしのはぬものを今はとてむかふとなれは言の葉そなき

法印賢助

しらせてもかひなかり見されはとて今より後はいかゝ忍はむ

寄水戀といへるこゝろを　清淨光院鶴若丸

とはれすは猶いかにせんわきかへり岩もる水を袖にみすとも

待戀の心をよめる　寂靜院孫鶴丸

まてといひしそのかれことは空しくて契らぬ月そ袖に宿れる

人のもとへ申つかはし侍りける　釋迦院彌鶴丸

いくよまたむなしき床の月影をおなし涙の袖にみるらん

夕待戀の心を　權律師兼滕

限りありてくるれはいつる山端の月たにまつは苦しきものを

大智院幸乙丸

たのめつゝこぬいつはりに習ひてもまたこりすまに夕をそ待

寶池院鶴松丸

はかなしやまたいつはりのたひ毎にこりすまたるゝ夕暮の空

妙法院幸若丸

頼めしもいつはりそとは知なからせめてもけふの暮をまつ哉

權少僧都定耀

君やくるとまつは中々苦しきにたのめし暮をわれやとはまし

念西法師

さりともと人まつ時は秋のよの永きのみこそたのみなりけれ

法印相助

人しれぬ袖の涙にくもる哉まつにつれなき有明の月

契空戀といへるこゝろをよめる　法印定快

まち侘ぬさしも頼めし言の葉のいかになれはか小夜更ぬらん

宮僧正道性

思へたゝたのめぬたにもまたるゝにこよひといひし心盡しを

報恩院嘉寶丸

たのめてもせめて心をつくせとや空しきよはの數つもるらん

阿闍梨頼胤

さりともとたのむはかりの年もへぬつらきや戀の命なるらん

已灌頂一海

契てもあはぬものゆへ中々の心つくしのことの葉そうき

題しらす　阿彌陀院鶴壽丸

ふくるまて月をみつるやなをさりに頼むる人のなさけなる覽

不遇戀といへることを　法眼覺弁

あふさかのゆきゝは人もゆるされと涙とゝむる關守そなき

法印公紹

あはてよになを長らふる命こそうき人よりもつれなかりけれ

題しらす　權少僧都教圓
わかれちもいつならひてか有明の月みるたひに袖のぬるらん　觀心院御寶丸
あふせこそよその人めにせかるともよとみなはてそ中川の水　法印長順
逢戀といへることを
今宵さへうつゝとはなし逢ことを夢より外に身にはならはて　前大僧正靜嚴
後朝の戀の心を
夢とのみ思ひなせともかひなきはけさの別のうつゝなりけり　權少僧都勝玄
心をは人にとゝめてかへるさの身にそふものは涙なりけり　念西法師
きぬ／＼の涙にかけをやとしわけて同しかたみと月やなる覽　寬尊法師
いきてけさかへらんものか移りかにそふ俤のをくらさりせは　權律師義俊
かけやとす袖の涙にねをそへてかたふく月に鳥もなくなり　讀人不知
おきわかれかへるあしたの俤は身にそひなからなをそ戀しき　阿闍梨憲什
わかれゆく心まよひにまたとたにちきらて出る有明の空　釋迦院安喜久麿
永仁元年長尾宮の歌合に絕戀のこゝろを
まつよひの更しうらみも色そひて別てつらき晨明の影　權大僧都覺繼
題しらす
うかりける契りよなにと秋かけて露のかことの袖ぬらすらん　妙法院瀧黑丸
うき人の心の秋の色見えて涙の露そ袖にこほるゝ　三寶院千手丸
かれことの行末しらぬならひとは思ひなからもなをちきる哉　權律師賴驗
題しらす
また人に契るときかぬ程まては忘られなからなをそたのみし　理性院千福丸
思ひきやあひみしよはの嬉しさのすゑは恨にかはるへしとは　前大僧正聖雄
俤の身にそひこすはをのつから人をわするゝひまやあらまし　寶池院舜王丸
われならぬ人になれしと契りしはあひみるほとの情なりけり　地藏院尊丸
絕不値戀の心を
思ひきやあふせたえぬるなか川の涙はかりをなかすへしとは　無量壽院松若丸
遇不逢戀
限そといひて別れしつらさしもなといつはりのなき世なる覽　權律師円俊
おなし世にあらはとなをもたのむ哉われにはかはる人の心を　尊延法師
夢ならて又もあふへき身にしあらは夜半の衣は反さらまし　法印覺雅
かはらすはこの夕暮もとはかりのうきあらましにぬるゝ袖哉　法印憲淳
ありあけのわかれは秋のむかしにてつれなき月にのこる俤　寶池院松夜叉丸
おもひきやひとよの夢のさゝ枕わかれぬふしに忍ふへしとは　法印親瑜
題しらす

吹風にうらみしほとのたよりたにかれてあとなき岡のくす原

權律師兼濟

かくはかり思ひたえてもあらるゝをいかに慕ひし心なりけん

蓮藏院愛二丸

かゝらさりし昔そかしと思ふにもうきはしはしの情なりけり

絕後遇戀といへるこゝろを　地藏院幸松丸

そのまゝにさゝ山の井の水ならはまた淺きせに袖はぬらさし

戀の歌の中に　寶池院長命丸

かはりはてん中そとをも思はぬにうきも幾度たえ忍ふらん

三寶院千手丸

あかつきを何恨けんまれにてもあふよそあかぬ別れをもせし

題しらす　法印定敎

をのつから忘れはてぬを情にてとをきたえ間もえこそ恨みれ

無量壽院寶光丸

おのれとや今はきゆらんあさゆふにかよひなれにし道芝の露

恨戀の心を　前大僧正覺濟

なか〳〵に思ひいれしと忍へとも賴むとなれは恨みられつる

權大僧都公性

恨へき言の葉さへそなかりける只なをさりのつらさならねと

報恩院の永壽ほかにすみてひさしくをとつれさりしか

はつかはし侍し　報恩院吠若丸

契りしをまちしたのみは昔にてうらみはかりそ身に殘りける

返しの歌の中に　同院永壽丸

身をしれはかくともいかゝ云へきと心にこめて物をこそ思へ

題しらす　權律師賢快

一すしにおもふといへはつれなきに恨て人の心をも見ん

難面さをしゐてもいかに恨みまし猶さりともと賴む身ならは

觀心院有夜叉丸

疑戀の心を　法印定任

身をしれはまことゝかける言の葉も又いつはりと疑はれつゝ

權少僧都經覺

ひとかたに定めぬ人の言のはは變らぬまてもうたかはれけり

題しらす　權少僧都經乘

數ならぬ身のうき程を身にしれは人のつらさも人のとかかは

戀歌とてよめる　法印道惠

言の葉の人の情のいつはりも身のうきにこそなきよなりけれ

人々あまた戀の歌よみける中に　釋迦院寶喜丸

つらさをも身のことはりとしり乍ら何をかこちて淚おつらん

人をうらむること侍りけるころ申つかはしける　報恩院杉王丸

つらさをも身のとかにたに恨みしよ心にゆるす思ひなられは

百首の歌の中に恨戀の心を　蓮藏院土用夜叉丸

いかにせんうき我からと思なせとけにはつらさの人に成ぬる

題しらす　釋迦院安喜久丸

たかとかに恨なさまし數ならぬ身をしれとての人のつらさを

法印長順

人もまた數ならねはといとふらん思へは身をやなを恨みまし

戀歌の中に　權少僧都道順

稀にのみあひみるなかは忘れんと思ふさへこそ叶はさりけれ

あひしりける人のひさしくをとつれ侍らさりけれは申

つかはしける　蓮藏院松菊丸

我もはや忘れはてぬといひやらんかへりてしたふ心ありやと

被忘戀のこゝろを　權少僧都定譽
さりともと我のみ頼むかひもなしわすられはつるなかの契は

乍恨不忘戀といへる心を　俊毫法師
いかなれはわかためにしもうき人の其俤のわすれさるらん

片思の心をよめる　法印親瑜
もろともに思ふとまてはきかすとも情はかりの言のはもかな

變契戀といへる心を　權律師賴驗
もろ共に忘れしとのみ契りしもわか身ひとつのまことなりけり

題しらす　權律師兼勝
よしさらはつらくは我もしたはしと思ふ心もまたよはりぬる

前大僧正聖兼
つらしともいはてすきぬる月日哉身をしるほとの心よはさに

法印定任
我なからしたふ心そうかりける思ふとたにもおもひいれしを

隆舜法師
せめてなを人の心にたかはしとわれさへはては疎くなりぬる

悔戀の心を　權律師圓俊
悔しさはさきのよかけてなけく哉人を思はぬむくひしられて

題しらす　權少僧都經覺
中々におもひきえなて後のよは契ある身となりもこそすれ

依戀遁世といへる事を　念寂上人
いまたにも哀とおもへ人なみにそむくもつらき餘りならすや

法印定教
こん世にも同しむくひのつきせすはつらき名殘の物や思はん

前權僧正教遍
むくひそと思ひしらるゝつらさこそ此よかきらぬ恨なりけれ

別戀を　法印公紹
あすしらぬ命そかしと思ふにも今のわかれもしはしなくさむ

法印實勝
ありあけの面影のこす月にさへ今朝はわかるゝ横雲の空

法印定任
かりそめの別をなにと歎くらんゆきてかへらぬ道もあるよに

いつまてもかはるましきよしなと申ける人に心ならす
うとくなり侍りければ申つかはしける　大智院月光丸
かく計おもふにもにぬ身のはてをいかにたのみし心なりけん

申たえける人のもとへつかはし侍る　遍智院瀧一丸
あふことのたえはともにといひをきし命よありて人にしる哉

戀歌の中に　蓮藏院右王丸
わするともうきなたてぬを情にてこよひの夢を人にかたるな

秋戀といへることを　阿闍梨明胤
こほるゝも唯おほかたの露そとて涙つゝまぬ秋の夕くれ

寄月戀　阿闍梨定弁
いかにせん涙に宿る袖のうへの月さへかけのまたくもりなは

戀歌あまたよみて人のもとへつかはし侍りし中に　報恩院永壽丸
わするなよ人こそいまはつらくともともにまちみし山端の月

權少僧都賴仲
ひとりのみ涙かたしくさむしろに月はよかれぬ袖のうへなか

觀心院八淸麿
さりともと人たのめなる月影のかたふく迄そなをやまたまし

蓮藏院禪師丸

思ひきやともに待見し月かけの忘れかたみにならんものかは
やとれはそ曇るもつらきせめてたゝ月にしられぬ涙ともかな　權少僧都勝玄
安藝國なる山寺よりのほるとておもひなくこと侍りけれはすみける所のかへにかきつけける　道證法師
都にもかはらぬ空の月なれはまたこんまてのかたみとはみよ
月前戀　妙法院幸若丸
戀しさのなかむれはまたまさりゆく月なや今は猶うらみまし
月の夜きたりける人の歸りけるなとゝめ侍らんとてよめる　得業俊助
暫ともいかゝは人なとゝめなかむ月にかこたぬ今宵なりせは
寄雲戀　法印相助
しらせはやそらにたゝよふあま雲のはるゝ時なくおもふ心な
寄煙戀　仙兼法師
ことうらのもしほのけふりわか方になひくな人の心ともかな
寄風戀　義淳法師
越の海のありその浦に吹風のやむときもなく戀わたる哉
寄露戀　權少僧都運雅
きぬ／＼の袂にはらふみちしはの露やかへりて形見なるへき
さまかへけるわらはのぬきなきたりける水干のそてのつゆなかたみにとりて水干なはかへしつかはすとてかきそへける　權律師定叡
とゝめなく露に心はなくさまて涙のかすやいとゝまさらん
寄川戀　法印靜運
こかくれのたきつ山川こほりしてとけぬ恨はしる人もなし
ひとつせにいかて流さんなとり川渡る方せくしからみもかな　寶池院長命丸
いかにしてまたもあふせとなりぬらん思ひたえてし中川の水　權律師宣遍
弘安九年のさくらゑのわらはまひに杉王青海波まひはへりける次の日南都の衆の中よりとておくり侍りける　よみ人しらす
底ふかくおもふ心そまさりけるそのあなうみの波なみしより
かへし　報恩院杉王丸
青海の涙ときえてもたのまれすかゝらぬ浦もあらしと思へは
おなしき櫻會に壽王丸□院の御さしきよりいてゝ青海波のかへしろにたちて笙ふきて侍りけるのち申つかはしける　よみ人しらす
吹風の便なそまつ青海の波に心なかけそめしより
寄花戀　法印定任
たのますよ人の心のはな櫻うつろふ色の見えそむるより
建長四年の櫻會の後舞童吉祥かもとへ仁和寺なりける僧の申送りける　よみ人しらす
いろ／＼にはなの姿は見えしかとたゝ一枝につゆそこほるゝ
返し　報恩院吉祥丸
たのますよいろなき花の一枝にうつらふ露のなさけ計は
櫻會のならしのころ人のもとよりかさしのはなにくしてふみな送り侍りけるな返つかはすとてそへ侍りける　寶池院鴨王丸
かすならぬ身にはかさゝし山櫻花もいろなきななもこそたて
寄紅葉戀　釋迦院安喜久丸

しられしなみ山かくれの下紅葉したにこかれてもの思ふとは

寄草戀　　聞性法師

わかおもひ人の心や軒はなるしのふわすれの草となりけむ

七月の比蓮藏院の德壽丸をみて同宿の實禪阿闍梨かもとへ申つかはしける　　阿闍梨亮深

初秋のはつかに見えし花薄まねかぬ袖も露そこほるゝ

前大僧正道意すゝめ侍りける日吉七百首の歌に

法印長順

いかにして尾花かもとの草のなを露計りたにさそとしらせん

寄葛戀　　阿闍梨頼胤

恨むへきたよりたになし葛かつら稀にも人のくるよなけれは

聞性法師

ことに出てうしとはいはしまくす原見ておもひしれ秋風の比

權少僧都定譽

恨みてもかひこそなけれ言の葉もかるゝまくすのかよふ秋風

寄鳥戀　　權少僧都道順

今はたゝこぬよの數ときくもうしあけかたしろき鴫の羽かき

寄蟬戀　　三寶院千手丸

おもふそよまたこむよまて空蟬の身をはかへてもおなし心に

蓮藏院禪師丸

いつまてか人の心の秋風に身をうつせみの音をはなくへき

寄獸戀　　義淳法師

奥山のいはにつのかけぬる鹿の身はなか空にうきなたてつゝ

寄貝戀　　阿闍梨房海

年ふれとあふになきさのうつせかひをのれ獨やくたけ果なん

弘成法師

おきつ浪よせ來る磯のかたし貝ひろひつくせと逢よしもなし

としころ同宿し侍ける僧におもひの外にはなれてあつつにすみけるかたよりにつけて申送り侍ける

大智院月光丸

荒磯のいはまの波のうつせ貝くたけてもまたあふせありせは

櫻會まひけるわらはに三井寺なりける僧清瀧のやしろのうしろ無量光院の池邊にて物申たりけるのちほとなくさまかへぬときえて〔きゝ歟〕彼僧申をくりける

讀人しらす

今はまたみてややみなんきよたきの神のうしろにありし姿を

かへし　　三寶院慈氏丸

もろともに誓ひしことをわすれすは神のうしろに今はなく共

寄夢戀　　前大僧正聖兼

あふと見てさむるつらさのなかりせは夢も現に劣らさらまし

聞性法師

あふ事はさむる枕にとたえしてつらさにかへる夢のうきはし

法印道惠

さりとものも賴みはかりにねられねははかなき夢の契たになし

法眼慈惠

あふとみるゆめてふ物そうき人の心の外のなさけなりける

法印隆勝

あひみんと賴めしすゑは空しくて夢こそ人のまことなりけれ

阿闍梨明胤

あふとみるその思ひねの覺ぬれははかなき夢をなを慕ふかな

寄衣戀　　權大僧都公性

いささらはかへしてねなんさよ衣せめてはゆめの契もそある

さよ衣たちわかれにし曉の俤さらぬねやのうちかな　法印宗遍

寄袖戀

せめてわか袖を衣の關となしてつゝむ涙をもらさすもかな　權少僧都信助

いまはまたかたしく袖も朽はてゝ涙にかくるしからそなき　前大僧正聖兼

しれりける童のきたりけるかかへるとて衣をわすれたりけれはかへすとてそへ侍りける　權律師定叡

きてなれし夜半の衣をかへしてもありし姿を夢かとそおもふ　義淳法師

寄枕戀

枕より雲井の月もいてぬへしはらはぬちりのやまとつもれは　實禪阿闍梨

寄文字戀

戀といふもしのつくりのいかなれはしたの心のくるしかる覽

人のもとへむすひたるふみをつかはしけるなかにかき侍りける　寳池院鴨王丸

なし返しやるもむなしき玉章にうらみをさへそ結ひかさぬる

續門葉和歌集巻第八

雜歌上

先師僧正成賢にをくれて後報恩院にこもりゐてをこなはれけるかおり〳〵よみをかれける歌の中に　前權僧正憲深

人とはぬ身をうくひすのなく〳〵もいくよへぬらん窓の吳竹

報恩院にすみ侍りけるに山家の春のけしきゆかしきよし治部卿重経申おくりける返事にそへ侍りける　法印憲淳

時しあれは花鶯のなさけをもほかにたつれぬ春の山さと

返し　重経卿

いささらは君かなさけの宿なから花鶯の山ちたつねむ

無量壽院の坊にひさしくすみてよみ侍りける歌ともの中に　法印公紹

すみなれし山の霞ようたてなとわか身の春をたちへたつらん

故郷梅といへるこゝろを　理性院千福丸

れにたてゝ鳴とはすれと我はかり世をうくひすも物は思はし

閑居の歌の中によめる　寳池院眞松丸

故郷のあれしのきはのあとかとや蓬か庭に匂ふ梅か枝

淋しさをわすれよとてや匂ふらんとふ人もなきやとの梅かえ

題しらす　前大僧正覺濟

なにこともみしにはあらぬふるさとに月そ昔の春の夜の空

弘安九年の春宮僧正道性座主にて櫻會をこなはれ侍りしに仙院御幸なりて靑海波の垣代に壽王といふわらはを出され侍りしかはこの寺の御幸は代々の御門の御あとなりしかともかゝるためしはいとまれなりとてかたへの衆の中へ申をくり侍りける　法印勝舜

この春は花も御幸をまちえてやえならぬ色をわきてそふらん

乾元二年に内裏よりむめさくらをめされけれはそへてたてまつりける　法印公紹

花ゆへそ君もとひける御代にさへ春をへたつる我身と思ふに

比叡山に侍りけるか醍醐にうつりて後花の歌よみける

中に　法印道惠
思ひいつや我たつそまのやまさくら色かはりぬる身の昔をも
おもふ事侍りけるころ人のもとへよみてつかはしける
法印賢勝
ひかりなきたにの埋れ木春をへてよそにも花を思ひこそやれ
上醍醐にすみ侍りけるか花の歌あまたよみける中に
法眼顯惠
春の色は身にわすれぬる山里に花こそひとりさかり見せけれ
題しらす　阿闍梨房海
山さとも花みかてらに人そとふ春はいつくに身をかくさまし
權少僧都仙覺
春は猶身をすてゝすむ山里も花に心そあくかれてゆく
高野の千日こもりし侍りてのち一長者になりける比大
塔の花をおもひ出てすみ侍りける高野の房へよみてつ
かはしける　前大僧正覺濟
わか山と思はて過しみとせたにあたにたか野の花をやはみし
上醍醐にて　法眼顯惠
樒つむ山のゆきゝのみちかへて春は櫻の花やたつれん
山のさくらをうつしそふとてよみ侍りける
前權僧正教範
うゑをきてなからん後のあとまてもかたみなるへき山櫻かな
花の比と契侍りける人空しくて花散けれは申つかはし
ける　法印覺基
庭の面にふままく惜き花にこそとはぬつらさも思ひかへぬれ
思ふ事侍りけるころ百首歌の中に老後述懷といへるこ
ころを　權律師圓俊
いにしへは花もさくやとおもひしに老木は後の春もまたれす
醍醐の花見ありきけるを人々のすゝめて歌よみ侍りし
に花前懷舊といふ心を　開性法師
なからへてよそちあまりの春花となれにし外の思ひてもなし
三條坊門入道內大臣になくれて女房次のとし夢につけ
によりて二首の歌をすゝめ侍りけるに花下思故人とい
へるこゝろを　前權僧正通海
咲花もおもひやいつるみし人のちりにしまゝの春の木のもと
あつまよりのほり侍りて後前中納言爲藤の家にて歌合
し侍りける中に歸鴈を　蓮藏院右王丸
故鄕は身にいそかれしみちなれはしたひもとめし春の鴈金
前大納言經任になくれ侍りける比人々哀傷の歌よみ侍
りける中に春雨によせて　法印定任
かされても袖ぬらせとやものおもふころはやよひの春雨の空
題しらす　法印親俊
なにことも思ひすてぬる山の奥に猶またれける時鳥かな
述懷五十首の歌の中に　法印靜運
ひく人もなきみかくれの菖蒲草時をしらてもねこそなかるれ
五月の比靜運法師かきりに成侍りけるをなけきてよみ
侍りける　蓮藏院土用夜叉丸
さらてたに袖やはかはく菖蒲草またはなにとかねをもそふ覽
三井寺圓滿院隆覺法印身まかりて後その手跡にて故池
菖蒲とかきをける題にて歌をすゝめ侍りけれは
前權僧正通海
みなれにし姿の池のあやめ草かりにも人もわすれやはする
五月五日爲通朝臣身まかりて後次の年の五月に爲實朝

臣のもとへ申つかはし侍りける　法印公紹

すみそめの袖にはかけぬあやめ草こその名殘のれそ殘りける

返し　爲實朝臣

とはれすは獨やかけんあやめ草哀とはかりよそにみしれを

述懷の歌の中に　前大僧正聖兼

いかにせんまとに螢を集めてもよにひかりなき我身なりけり

法印公紹

あつめこしまととしもなくあれはてゝ庭もひとつに飛螢かな

五月の比山里にすみ侍りけるによめる　執行法眼賢延

五月雨にいはのかけみち水こえて人もとひこぬ谷かけのいほ

永仁二年五月の比思ふことありてあつまへくたり侍りけるにゆくさきかきくれて五月雨ひまなくふりければ　法印定任

うきことのはれもやすると思ひたつ方さへいかに五月雨の空

法印靜運

はれやらぬおなし歎きの日數さへいたつらにふる五月雨の比

夕立のあと吹風にゆく雲のうかれなからもあるよなりけり

一流の事を思てよみ侍りける　權少僧都道順

夏草のことしけきよにまよひてもなをすゑたのむ小野の古道

五十首の歌に　法印靜運

かはるらんときはしられと秋やこれ我袖ならて露のおく見ゆ

此歌ともをつかはしけるを見てかへし侍るとてかきてそへける歌の中に　阿闍梨文昭淨昭上人

ゆふ暮のあはれ計そそむきにしうきよのほかの秋もかはらぬ

題しらす　權少僧都經覺

なにことの心にかゝるあきなればこけの袖にも露のをくらん

定成朝臣家にて歌よみけるに夕述懷といへる事を　寛尊法師

月をまつなくさめならは身のうきの夕やわきて悲しかるへき

永仁元年長尾宮歌合に秋述懷の心を　遍智院瀧一丸

うきことのさてしもまさる夕かと身にはよそなる秋風もかな

なけく事侍りて東山のほとりにすみ侍りける比月あかかりけるによめる　法印道惠

かゝらすはさしも哀と月もみしうきそ我身のなさけなりける

上醍醐の盛琳院にすみ侍りける比月を見て　法印覺雅

さひしさはたくひもあらし松のとの嵐にふくる秋夜の月

述懷の歌の中に　權少僧都俊覺

眺めしよかはかぬ袖のなみたより曇らぬまても月の名たてに

阿彌陀院にすみ侍りける比遍智院にとゝまりける人々の中へよみてつかはされける　權僧正成賢

もろともにみし秋よりも中々にひとりそ月はこゝろすみける

山家の詩をつくりけるおくに書そへ侍りける　阿闍梨房海

月のいるまきの板戸の明方に木の葉しくるゝ山おろしの風

すかくたににすみ侍りける比月いとものさひしかりければよみ侍りける　權大僧都公性

人とはぬやとこそあらめすむ月の影さへなとか淋しかるらん

題しらす　權少僧都勝玄

淋しさもなれすは庭の淺茅原たえてみるへき月の影かは

結ひ捨し野邊のかりほは荒にけり月も時雨ももるにまかせて
高野へまうて侍りける路にて月をなかめて　權少僧都定譽

よの中を逃れて後やうきことのなくさめならて月をみるへき　權律師兼濟
弘安のころ雙林寺宮獅子のいはやにこもり給ひしによもすから御供して歸り侍りて後たてまつりける

よもすからわけつる道の露よりも思ひなくにそ袖はぬれける　前權僧正敎範
御かへし

たちかへる山路も深き白露のおくるゝ袖そぬれまさりける　無品法親王靜
秋の比山里にこもりゐ侍りけるに右近衞督爲相朝臣おもひのほかにたつねきたりけるか次の朝にこゝろのみしらぬ野山にともなひて形見の露や袖にのこらんと申をくり侍りけるかへしに

露はなをむすふ野はらの末までも身を宿すへき草の葉そなき　法印憲淳
題しらす

心なき蜑となるともすまの浦のもしほはやかて月をこそみめ　權律師兼觀
修行にいて侍りけるにたいこの同法のもとより

やとしめて我すむ宿のみねの月なかく〱よその人やみるらん　得業俊助
かへし

住なれし山路にわれをとゝめをきていつちか月のひとり出なん　よみ人しらす

もろともにかけをならへぬたひなれはいつる空なき山端の月　念寂上人
秋のこゝろ心ならす人にともなひてとをき國へまかり侍りけるに月あかゝりける夜をの〱わかれをおしみて月の十五首の歌よみ侍りける中に

憂にたへてもしなからへはこよひみる月や都の形見なるへき　報恩院永壽丸
述懷の歌の中に

かきくらす涙もつらしむかしおもふ心よ月に物わすれせよ　權律師賴驗
としをかされてあつまにすみ侍りける比人々うたよみ侍けるに月前涙といふこゝろをよめる

ほしやらぬ袖の涙にやとりなれて月もうき身を友とやはみる　權律師圓俊
題しらす

ともなれや人めにかへてもる月のかけのみなるゝ秋の山里　得業俊助

眺めても歎きそまさる身のうきはかならす月のとかならね共　聞性法師
月をみておもひいつる事おほかりけれはよみ侍りける

なからへてまた忍はんと思ひきやうしとみしよの秋のよの月　法印道憲
題しらす

老らくは月みるよさへうかりけりむかしはかくや涙くもりし　前大僧正覺濟
よをのかれて後上醍醐にすみ侍りける比寄月述懷といふ事をよめる

月影はむかしみしにもかはらぬを浮世の中のかゝらましかは　圓靜上人宰相入道修範
題しらす

こととはむ昔をかたるともとなれ影はみしよのふる里の月　阿闍梨親譽
法印覺雅あつまにて年をかされけるあとに彼房をみて

よみ侍る　法印靜運
宿もはや思ひしよりは荒はてゝのとなるかたになくうつら哉
大藏卿隆博薬湯のために杉の葉をこひ侍りける返事に
そへ侍りける　法印公紹
君かとふしるしともまたなりにけりすきのみたてる秋の山本
あつまへくたりける人のうつの山よりおとつれし侍り
けれは返事に　法印定敎
おもひやる袖にはこえしうつの山わくらん道のつたの下露
さよの中山をとをりけるに夜にかゝりて霧晴月あかく
成けれはよみ侍りける　權少僧都道順
夕きりにふもとのをさゝわけすきて月にそこゆるさよの中山
題しらす　尊延法師
たひころもすそ野の露のなこりとて山路の月を袖に見る哉
羇中月をよめる　寶池院松夜叉丸
くれぬとてとふへき宿をなをもまた月にすきゆく秋のたひ人
たひにいて侍りけるに月入て路くらかりけれは　釋迦院彌鶴丸
星の影は月のあとよりあまたみえてなを夜をのこす明暮の空
東へくたりける道にて　法印親瑜
ふる里のかたみとそなるみやこより涙になるゝ袖の月かけ
月送客と云事を　宮僧正道性
かへるさの袖まて月はしたひきぬひとはをくらぬ秋の山路に
なか月の比東にておもひかけぬいそ山の麓にやとをなをし
め侍りけるか便につけて律師頼驗かもとへ申つかはし
侍りける　法印憲淳
おもへたゝいその松風波の音ならはぬたひの秋のねさめを

返し　權律師頼驗
おもひやる秋のねさめのなみの音は便にきくも袖ぬらしけり
事ありてとをき國へまかりけるかすまの浦をすくると
てよみ侍りける　阿闍梨道範
流れ行うきみならすはすまの浦とまりて夜半の月は見てまし
あつまへくたりけるかあかつき海のおもてにつり舟の
いてけるをみて　法印隆勝
見わたせはよわたる月はいり海にあけぬと出るあまのつり舟
月前旅泊といへる心を　法印相助
船とむる涙のまくらの淋しきはよさの入江のあきのよの月
權少僧都運雅
あけはてん影をかきりてとまりをも月にさためぬ秋の舟人
年比上醍醐にすみて思ふ事侍りけるに長尾宮の歌合と
て人のすゝめ侍りけれはよめる　權少僧都定譽
山里のすまひも秋の初時雨うきよの外にふるかひもなし
上醍醐盛琳院にすみ侍りける比よめる　法印隆勝
かくしこそよのうきよりは物ことにあはれをそふれ秋の山里
正嘉二年十月最勝講の時御河水にうけらるへしとて紅
葉をめされけるにまいらせて後詠てたてまつりける
法印經舜
みる人もなきおく山の下紅葉雲のうへにて色やそふらん
永仁の比雨の祈のしるしのかへり申とて紅葉のさかり
になりて童舞の侍りしに或そうのもとへ紅葉を折てつ
かはすとてそへ侍ける　讀人不知

降雨のしるしあらはすけふなれは染し紅葉をかさゝさらめや

けふにあひて木々の紅葉は色そへつかさゝて過し花や恨みん

秋のころ前栽のやりみつにそうつといふものをつくりてかけたりけるを　權少僧都經覺

水上にまかする水やたゆむらんそうつのをとの稀になりぬる

九月廿五日法印覺雅かくれ侍けるのちとしをへて各歌よみける中に　蓮藏院右王丸

なか月のはつかあまりのいつかわれ深きわかれの涙やすめむ

九月の比修行し侍りけるに人丸のはかと申所ゆかしくてたつね見けるにそのあともなくなり侍りけれは文集に墳樹正秋風といへるこゝろ思出られて

念寂上人

とゝめをくむかしの跡を尋ぬれはそこはかとなく秋風そふく

安嘉門院かくれ給ける御いみにこもり侍りけるに九月十三夜に爲信朝臣のもとより月おもしろきよし申たりけるかへしに　前權僧正敎範

こよひとて涙のひまはなきものをいかなる人の月をみるらん

九月十九日先師權僧正成賢にをくれて其月の晦日の日權僧正憲深のもとへ申をくるとてそへ侍りける

法印淨眞

心うき秋のくれとはおもへともすくる日かすは猶そかなしき

かへし　前權僧正憲深

さらぬたに秋の名殘もかなしきをおくれにし日の遠さかり行

なけくこと侍りける比九月盡によみ侍りける

法印靜運

霜むすふ秋のすゑのゝ虫のねにわれこそいとゝ心よはけれ

神無月の比ひしりあまたともなひてたいこの紅葉みありきてよみ侍りける　道證法師

もみち葉の色に心はとまりけり身をあきはつる山のおくにも

返し　聖戒上人

よの中をあきはてゝいる山までも心とむなとちる紅葉哉

道證法師身まかりて後十月のころ人のもとへ申つかはしける　蓮藏院彌陀王丸

神無月しくるゝ山のあらしにもふり行ものはなみたなりけり

嵐似時雨といへることをよめる　憲圓法師

雲はらふ夜半の嵐の音更てをのれしくるゝ松の一むら

題しらす　前權僧正敎範

年をへてふりぬる身とはしるものをなにゆへ袖の又時雨らん

前藤大納言爲世勅撰うけ給はりて後雪の朝に申つかはしける　法印公紹

しきしまややまとことはのその道に跡をもつけよ今朝の白雪

返し　爲世卿

敷嶋ややまと言葉のみちしあらは雪にもなとか跡はなからん

題しらす　權少僧都賴聰

庭の面はまたあともなし君やこむ我やゆかんの雪のあけかた

雪朝とひ侍りける人の返事にそへける　權律師定徹

かきわけてとはるゝ庭の雪の中はふての跡まて嬉しかりけり

高野へまうてけるにゆきふかくふりけれはよみ侍りける　前大僧正實賢

ふりつもる雪もたか野の山なれはわくる心もあさからぬかな

高野の奥の院へまいり侍とて　法印覺基

わけきつるみちこそあらめふる雪も猶ふかくなる山のおく哉

雪のあした醍醐なりける人をさそひ侍りけるにさしあふよしを申をくり侍りけれはつかはしける
阿闍梨尊喜

みせはやと思ふ計りそ庭の雪とはすはとはすあともこそつけ

雪朝に醍醐の同法あまたともなひて大原の唯心上人の坊をたつねてをの〳〵十首の歌よみ侍りける中に
念寂上人

もろともにおなし山へにふりぬるをあはれとおもへ峯の白雪

東よりのほり侍けるに十二月の晦日菊河の宿にとゝまりて詠侍りける
聞性法師

ゆくすゑは日數も遠き相坂を我よりさきにはるやこえなむ

述懷の歌の中に歲暮の心によせてよめる
權少僧都定耀

ゆく年をおくり迎ふるかすのみやうき身も人にかはらさる覧

續門葉和歌集卷第九

雜歌下

上醍醐すくかたにの別所に孝賢律師權僧正成賢の影をつくりてをきたてまつりけるをみて僧正すまれける比よみて帳のとひらにおされける歌
前權僧正成賢

すむ人の心の底はすくかたにおちくる水もなかれきよたき

年をへてうき世をあきの月影や此山端にすみはしむらん

先師僧正成賢にをくれて後彼あと報恩院にこもりゐてとし月をかされてをこなはれける比人のもとよりをとつれ侍りける返事にそへ侍ける
前權僧正憲深

柴の戶に入めをいとふ身なれともとふはさすかに嬉しかり見

遍智院の十樂の詩歌の中に坊中寂靜樂といへるこゝろを
權僧正成賢

こけのほら松の扉はあまたあれと久しくなりぬ風もならさて

有馬の湯にくたられけるに人々に山家の歌よませられける中に
法印行嚴

わすれしな軒の松風まとの雲都はかゝるなさけなければ

無量壽院にて山家のこゝろをよみはへりける
法印靜眞

すみわひぬまとうつ雨に夢さめて鳥たになかぬあかつきの庵

山家煙といへる事を
法印公紹

我庵は月日のかけのをそければ峯のひはらのひまもとむなり

禪林寺淨土院にて前中納言爲兼眼前の物を題にて繼歌し侍りしに雨をよめる
法印定任

かすかなる煙をみても山里の心ほそさのほとそしらるゝ

題しらす
憲圓法師

峯は雲麓の里は煙にて雨靜なるゆふくれのやと

醍醐にすみ侍るへきよし申なからさはる事ありて月日すきける比報恩院なる人のもとへよみてつかはし侍ける歌の中に
權律師忠覺

われのみとおもひ入ぬる山の奥にかれてもすめる谷川の水

上醍醐にてよみ侍ける
蓮藏院松菊麿

身には猶たゝあらましの月日にてこゝろのみすむ山陰の庵
阿闍梨俊叡

とにかくによのうきよりは淋しさを忍ひてすくる山かけの庵

閑居嵐といへる事をよめる　權律師信耀

友となる松の嵐のいかなれはなれゆくからにさひしかるらん

山家歌とてよみ侍りける　隆舜法師

世をいとふ心計をともとしてひとりたへたる山のおくかな

阿闍梨頼胤

住なるゝ身には思はぬ淋しさをとひくる人そいひてしらるゝ

法印俊譽はかなくなり侍けれはやかてその日出家して
上醍醐の慈心院にすみ侍りけるかよみ侍りける　俊紹法師

淋しさのたへぬ心の身にそはゝいく山里かすみうかれまし

題しらす　寶池院鶴松麿

なをうしと柴の庵をいとひてもいつくにか又身をかくさまし

憲圓法師

うきときはいとはぬまての心にもまつ山里そあらまされける

法印覺雅なくなりて後よをすてゝ彼あと禪林寺の坊に
すみ侍りける比よめる　權律師圓俊

すみかふる心からこそ山里もうきよの外のやとゝなりけれ

上醍醐にすみ侍りけるか下へくたりけるみちにて

權少僧都定譽

すてはてゝ靜なるへき山の奥にのほりくたるとなに急くらん

暮山望といへる心を　權少僧都經覺

わきてその草木の色はみえれともすかたはかりの夕くれの山

海上眺望といへるこゝろをよめる　權律師定叡

なこの海の風しつかなる夕なきにこきつゝきたるあまの釣舟

阿彌陀院千代石丸

風むかふあらいそうみをこきやらて涙のまゝなるあまの釣舟

阿闍梨圓濟

はるかなる山のゆきあひ海見えてそかひに出るあまのつり舟

旅の歌とてよみ侍ける　權律師宣遍

ゆきくるゝいはれの露の苔莚ぬるともこよひやとやとはまし

旅に出侍りけるに有明のかすかに出けるをみて

法印實勝

たひ衣あさたつ峯の雲まより心ほそしや有明の月

少將經行朝臣あつまへ下りけるに道までおくり侍りけ
るか有明の月物さひしく出けれは　權律師兼勝

我のみとあさたつ旅の空にまたまつ出にける有明の月

旅の道にいてゝよめる　阿闍梨懷紹

かへりみはみゆへき宿の梢さへそこともしらぬ野邊の朝きり

旅松といへる事を　法印相助

なをしほ山ゆふこえゆけはおほはらの松の嵐の音そ身にしむ

旅宿夢といへる心をよめる　法印覺基

ふしわふる野原の草のかり枕いつより夢もむすひなれけん

とをき國へくたり侍りけるか鳥羽より車なかへすとて
すたれにむすひつけて同法の中へつかはしける

權律師宣遍

歸りこん程はしられとをくるまのめくりあはんそ頼み也ける

僧正親玄あつまにすみ侍りけるにそこへくたりける
かさよの中山にて　法印道惠

都にておもひしまゝのあはれにも越てかなしきさよの中山

旅歌の中に　蓮藏院右王丸

わかおもふ人もこそとへ都鳥かたるはかりに音をやなかまし

あつまよりのほりける道に山あひに煙のみえけれはよめる　　權律師賢譽

人ありとよそにはみえぬ山あひの煙そ里のしるへとはなる

おなしき道にてあかつきたちけるかよみ侍りける　　蓮藏院右王丸

鳥の音もかすかになりぬあけぬとていてつる宿や遠さかる覽

大嶺第二度の修行になさゝの宿をとをりはへるとてよめる　　阿闍梨宗尋

しけれとも道は迷はすかよひなれし跡はみしかき峯のさゝ原

おなしき宿にてよみ侍りける　　阿闍梨憲一

苔のうへをさゝの下もいとはれすいつれものりの道と思へは

おなしきみねにてしは宿をとりてすゝのしたにふしておもひつゝけ侍りける　　權律師定叡

宿もなし行をかきりの深山路は日のくれぬれはすゝの下ふし

白山立山なと修行してかへりけるかおなしやとにとまりてたちけるあかつき障子に書つけ侍りける　　權律師賴驗

かへるさのとまりもおなし草枕夢はかりこそむすひかへぬれ

述懷の歌の中に　　義淳法師

露時雨つれなき色にとしもへぬ都の松やわか身なるらん

久しく世の望をすてゝ口のうちといふ跡にとし比をこなひ侍りける　　法印俊譽

老か身はまた立かへりねをそなくそむきてし世に物忘れして

題しらす　　權少僧都定燿

いにしへに涙は色もかはられともろきそ老のしるしなりける

安祥寺に閑居して年をかされ侍りける時　　法印親瑜

老か身によのうき事のなくさむはいまいく程と思ふはかりに

前大僧正定濟の坊にて當座歌合に曉述懷といへる事を　　前大僧正聖兼

曉は身のあらましになくさめてねさめそ老のこゝろやすむる

人のすゝめ侍りける歌の中に老によせて述懷のこゝろを　　清淨光院鶴若丸

やゝ積る我身のとしを思ふにもまつたらちねの老そかなしき

文集の送老詩に可憐鏡中類今朝老昨日といへるこゝろをよめる　　觀心院八清丸

あさな〳〵かはる鏡の俤もきのふやけふの老となるらん

題しらす　　前權僧正欽範

身の程のうきをもしらてつれなきは猶なからふる命なりけり

法印公紹

なに事もいはしと思ふなくさみやうきよの中のなさけなる覽

法印定任

さても又よをやのかれん行末の身のあらましを思ひ出にして

法印賢助

うき事のすゑもさこそとおもふ身は出る涙のかきりなるへき

權少僧都範助

さりともといひし計に年ふりて後のよたのむあらましもなし

法印隆勝

さりともと身のあらましは空しくて過にしかたそ更に戀しき

權大僧都憲海

うかりける身のことはりをしりなからいつを限りと猶歎く覽

さきの世のむくひとまてはしりなから後を思はぬ身そ愚なる　阿闍梨懷紹

行末をさためなきよとおもはすは何かうき身の賴みならまし　阿闍梨經賢

うき身よになにの賴みのあれはとて猶行末のゆかしかるらん　前大僧正聖兼

嘉元二年五月十八日前中納言有房後久我太政大臣の影供はしめ侍りけるに述懷のこゝろをよみ侍りける　權少僧都道順

かすならて齡もいまはたけくまのまつ事をそき年もへにける

題しらす　宮僧正道性

涙こそ心もしられすてしより何のうらみか身にはのこらん

寄夢述懷といへる事を　權律師亘伊

あらましをうつゝの儘にみる夢のかはらてさむる習なりせは

寶池院尊福丸

うき事の暫しなくさむ程たにもなくてさめぬるうたゝれの夢

權律師宣遍

なくさむるたよりも更にあらはこそうき身の末を猶も賴まめ

かれこれあまた歌よみ侍りけるに寄水述懷といへる心を　阿闍梨定弁

人しれぬ山した影のむもれ水さてもうき身はすむかひそなき

題しらす　阿闍梨圓濟

いつくにも心とまらぬよの中のうきはかへりて身こそ安けれ

世をのかれて後よみ侍りける歌の中に　義淳法師

いとひつゝすつるならひのあるよにも歎くは人の心なりけり

今はわれ野にも山にもとまりなんいつくを家と定めなけれは

題しらす　法眼顯慧

我のみやさはるかたなき人はみな惜まれてこそ世をも捨るに　阿闍梨房海

ありとてもありはつましき世の中に捨ても捨ぬ身社つらけれ　權大僧都靜遍

人なみに家をはいとひいつるいきの思ひもいれぬ道そ悲しき　法印定任

うすくこき色こそかはれ世をいとふ心はおなしすみそめの袖　權律師圓俊

いとはぬも心の科になしはてゝよのうきたひに身をそ恨むる

聖戒上人にあひて穢土をいとひ淨土をねかふへきことはりなときゝて出家のあらまし申侍りけるついてに　道證法印

たらちねの親のおしへておなしくは我黑髮をそれないにしへ

あつまにすみ侍りけるか思ふ事ありて山里にすみ侍りける比よめる　法印覺雅

かくはかりなけきこりつむ柴の庵になとか煙のたえむとす覽

題しらす　權少僧都定耀

うき事はいつもかはらぬまことにて身のあらましそ僞になる　權律師義俊

身のうさをのかるゝ道に入ぬれは人のためにそよを祈りける　法印親瑜

世を忘れ世にすてられて過る身はうさもつらさも歎かさり覽

權律師兼濟

しなはやと思ふ心にまかせぬやうきをもしらぬ命なるらん

寶池院松夜叉丸

よしさらは人をも世をも恨みしよ身の行末をうきにまかせて

地藏院幸福丸

いつとなき身のあらましはさもあらて思ひの外のうさのみそそふ

法印定敎

今更にすつとしならはこしかたをおしみける身と人や思はん

としころたのみける人のなけく事侍るよしを聞てさまかへて後聖戒上人のもとへ申つかはしける

道證法師

遁れてもさすか浮世になからへはいけ覧程の身をいかにせん

返し

聖戒上人

世をわたる道をなにとて尋ぬらん我とゆかれとすくる月日を

大僧正を人にこえられぬと聞て鷹司前關白へ文をたてまつられけるはしにかきてそへられける

前大僧正[聖兼]

遙なるおきつの涙もこゆるきのいそかすともとなに思ひけん

中將後通朝臣從三位に叙留して侍けるつきのあしたに彼もとよりせかれてもしはしそよとむいはし水さてたえはてぬなかれなりけりと申をくりて侍ける返事に

權少僧都道順

石清水きよき流のたえぬにそにこらさりけるよとはしらるゝ

勅撰のさた侍りけるころ前藤大納言[爲氏]のもとへ百首の歌つかはすとてそへ侍りける

前權僧正[教範]

和歌の浦によるへさためぬ浮舟の猶たゝよふや我身なるらん

この返し

和歌の浦の波にたゝよふ浮舟もつゐによるへはありと社きけ

永仁のころ勅撰のさた侍りけるに大藏卿[隆博]歌をたつねけるをつかはすとてそへ侍りける

法印隆勝

和歌の浦や群ゐるたつのその數に數ならぬ身も名を殘さはや

懷舊のこゝろを

座主僧正[親玄]

とにかくにもろきは老の涙にてむかし思へはぬるゝ袖かな

權大僧都公性

いつとてもうきはかはらぬおなし身の昔をさのみなに忍ふ覧

上醍醐盛琳院にすみ侍りける法印覺雅此所を興隆し侍りける昔も思ひ出られけれは

法印隆勝

なれしよの人たにあらは古へを語りてもまたなくさみなまし

法印覺雅にをくれて後かたほとりにすみ侍りけるか年をへて後彼あと報恩院にて歌合し侍りけるに懷舊のこころをよめる

開性法師

思へたゝ身のうきたひになき人のあらましかはとしのふ心を

阿彌陀院つくりたてゝすまれけるか弟子ともの中へなからんあとまてもおなし心にとふへきよしなと序のことはをそへてよみてつかはしける

前權僧正[成賢]

契りをく言の葉なしと露の身のきえなん後もあとをたつねよ

をの〳〵返事とも申ける中に

權少僧都寛隆

誰よりも先にきゆへき露の身のけふことの葉にかゝる嬉しさ

阿闍梨賢覚

よろつよの秋をそちきるよはの月この池水にすみそむるより

百首の歌の中に

前大僧正[聖兼]

いつくにか宿求めましよの中にうき身はすまぬ習ひなりせは
歎かしよ歎けはとてもよのうさの身をはなるへき理りもなし
つれなくて人もあれはと思ふこそなをよをすてぬ心なりけれ
しろ人も此よはかりそなきかすに我身なりせは忍ひたにせし
いけるよの情はさてもありぬへしなからん跡をとふ人もかな

題しらす　權少僧都勝玄
跡とてもとはるへき身と思はれはなき人數の名もやきえなん

歌をあまたかきあつめ人のもとへつかはすとてそへ侍りける　寶池院鴨王丸
はかなくてきえなん後は數ならぬこのうたかたも哀とやみん

前栽にあさかほの咲るを見てよめる　阿闍梨亮深
あさかほのひかけまつまの露にこそ老の命のもろさをもしれ

無常の歌とて　前權僧正通海
むすひをく露も雫もあたし野のよもきかもとをはらふ秋風

題しらす　地藏院幸松丸
ありはてぬ習ひをしれとあたし野の露にやとかるよひの稻妻

權少僧都忠覺
玉緒のかゝるうき世になからへはよその哀をいつまてかみん

わつらふことの侍けるころ　念寂上人
あたなからまた消はてぬ露の身をいつか蓬のしたにをくへき

權律師定叡
さりともと頼む心もありなましまれにも人のとまる世ならは

岡屋前攝政に臨終十念すゝめたてまつりける鐘をきゝて　前大僧正聖兼
今はとておはりすゝむる鐘の音のたえぬときくや限なるらん
たらちねにかはりて迷ふ道ならは我身そくらき闇はゆるさし

文昭阿闍梨世をのかれて後あつまへくたりけるをみちまてをくりけるか程なくはかなくなりぬと聞て
道證法師
おもはすよおくりし旅の空までも煙となりてのほるへしとは

程をへて此なけき年へても猶わすらるましきよしなと返事申けるにそへける　聖戒上人
年ふともをとろふましきすかた哉うつる日數に殘るおもかけ

定成朝臣病にしつみてかきりに覺え侍りける時に前中納言爲兼のもとへおもひいれて思ひいつへき人もあらし君はかりこそあはれのこさめと申をくりけるに中納言の返しに思ひいれて思をきける此道のなさけはいつもわすれしもせしと侍りけるをみて阿彌陀佛の字を頭にをきて七首の歌をよみて彼卿のもとへをくり侍りける中に　法印憲淳
みちのためもさこそなこりをおもひけめ今は限とつけし心に

返しに
みちをおもふ名殘も今をかきりとてつけし心の中そかなしき

寂靜院の日光三井寺へうつりて後程なく身まかりけるときゝて同院の孫一丸年比なれ契ける事を忘すふかくなけきふしたりける夢の中に彼日光申侍りける歌
わすられぬふしそ嬉しき吳竹のうきよの中になき身なれとも

觀心院孫清身まかりて又うちつゝき同院の福壽なく成侍りしにその春の三月盡の日よみて彼坊へつかはしける　權律師賴驗

色々の花のすかたのわかれまてかされておしき春のくれかな

彼の二人の童身まかりて後孫清百日の佛事しけるに草子箱を諷誦にそへてつかはすとて　權少僧都經乘

玉櫛笥またあけぬよのうたゝねに再ひみつる夢そはかなき

母身まかりて後年をへて彼墓所へまうてたりけれは松の風苔の露いと物さひしくて昔きゝしことの音までもおもひ出られてかなしく侍けれは　法印實勝

朽はてし苔の下にもことの音をおもひやいつる峯の松風

前大僧正覺濟にをくれてなけきゐ侍ける比歌に

權律師賴驗

なき人をこふる涙のやかてまた身をなけくにも成にけるかな

なけく事侍りける比又僧正親玄母のいとまにて籠りけるに申つかはし侍りける　法印靜運

身のうれへ人の歎きもかす／＼にさも定めなくみつる夢かな

たのみける人にをくれ侍りけるかまた靜運法印いたはりたのみなく成けれはよみ侍ける

蓮藏院土用夜叉丸

うきたひの涙はかりはかはらしなきを忍ふもあるを思ふも

五月七日靜運法印身まかりて後おとゝの經覺僧都いとまにてこもりけるに四十八首の歌をよみて贈りける中に

法印憲淳

秋をまたぬをち葉は風にしたかひて殘るかた枝にもろき露哉

經覺僧都この集に入へきみつからの歌ともゆくすゑまてあとをも殘すへきよしなと申て書あつめ侍りしかいまた撰はてぬに俄にはかなく成侍し後その歌ともを見て　法印隆勝

行末のためと集めしことの葉をいまなき數にみるそかなしき

權僧正勝眷かくれて後程へて人のもとよりとふらひける返事にそへ侍りける　法印覺基

驚かすことの葉さへも悲しきはうきよの夢のわかれなりけり

覺基法印さきたちて身まかりけれはかきりなくなけきて追善の諷誦にかきそへ侍りける　前大僧正覺濟

おくれゐてなに歎くらん闇路にも迷はゝともに迷ふへき身を

先師大僧正覺濟にをくれて高野山へまいりけるに彼千日參籠の坊を尋れ侍りけれは松のあらしものすこくてすみけむ昔もいとあはれに忍はれ侍りけれは

法眼覺親

みとせまてすみし昔の人もなし誰まつ風の音をたつらん

圓光上人にをくれてなけきゐ侍りける比よめる

仙法師

忘てはわかれし人そまたれける猶もこのよにあるこゝちして

賴瑜法印身まかりて後かの作りをける文ともをひらき見てよみ侍りける　亘殿法師

みるたひに袖そぬれけるなき人のかきをく法の水くきのあと

同法身まかりて後修行にいて侍りける道にてあまり露けかりけれは　念寂上人

さらぬたにかはかぬ物を藤衣又みちしはの露そこほるゝ

むかし同宿し侍りける亮深阿闍梨世をのかれてのち尾張國こやすかといふ所にすみけるか臨終の時書をきけ

る文をあとより送り侍りし後年をへて彼いほりをたつれ侍りけるにすみける庵もあれはて、庭はあさちのみのこりけれはふるき堂のとひらにかきつけて歸り侍りける　法印憲淳

そのあとゝ尋ぬる庵はあれにけり露やむかしのあさちふの庵

高野の奥院のみちに前大僧正覺済の手にてそとはの面に先師大僧正増進佛道とかきをきける筆のあともあはれにてよみ侍りける　法眼覺親

おもはすやはかなきあとを殘し置て今も昔と忍はれんとは

安嘉門院の御いみにこもり侍りける御はての日よめる

前權僧正 教範

あはれにもおなし月日はめくりきぬ涙もけふや限りなるへき

權僧正 成賢 阿彌陀院の池にはなたれけるおしのなくなり侍りけるに人々あみた佛の五字を歌のかしらに置てよみ侍りける歌の中に　前權僧正 憲深

あたなりや身をおし鳥のたちかへり深き哀のつまとなりぬる

おなし歌に　阿闍梨頼賢 意教上人

哀なり汀のおしもたつ涙のふちせにかはるつゐのわかれは

山　法印定任

富士の根のけふりは雲にまかへとも山は姿のにる山そなき

河　法印公紹

くみつゝもいく代になりぬわか寺の谷の小川の流ひさしく

海路　義淳法師

しはしまていらこのしまのあら浪に鹽さはかけてわたる舟人

海邊　權少僧都道順

磯山の松ふきのほるしほ風に峯まてつゝく浪の音かな

阿闍梨憲家

ゆふなきやなたの入江の浦風にあらぬ浪よるあしの一むら

橋　法印公紹

きゝ渡るなからの橋は名のみこそ年へてもなを朽せさりけれ

苔　法印長順

山深きいはほはなにのたれしあれはふりゆく儘に苔のむす覧

阿闍梨圓濟

踏わくる程もしられてなか〳〵に苔こそ庭のあとはみせけれ

鶴　蓮藏院愛二麿

難波江やしほの干潟にたつなきて夕凪すこきあしの一むら

獸　權大僧都公性

きくからにこれも哀はしられけり峯に淋しきさるの一聲

箏　三寶院千手丸

よそにこそ聞こし物を松風のわかてになるゝよゝのからこと

海人　阿闍梨俊叡

あけくれは磯への浪にうきしつみ世渡るあまのさそな苦しき

正安三年の春今上位につかせ給ふての梅花をたてまつるとてそへ侍りける　法印公紹

幾千代もかされてにほへ梅の花此春よりは我君のはな

公家の御いのりのために大神宮にまうてゝ宸筆御告文をよみたてまつるとて伊勢の國はとこよのなみのしきなみよする國なり人のいのちもなかゝるへしと御託宣ありける事思出て　前權僧正 通海

やそちまていのる心は伊勢の海やとこよの浪の數にまかせて

大僧正 定濟 寶池院つくりたてゝ門流あつめて歌よませ

侍りける中に　法印玄慶

ふた葉なる緑の松のゆくすゑも君か千とせもおなしひさしさ　阿闍梨印禪

姫小松老せぬ門にうつしうへて千とせの色は君そみるへき　阿闍梨重祐

老ぬれは軒端の松もゆつるらしよはひを君か千代にやちよに　阿闍梨範秀

松か枝の千代をは君にゆつるとも君は千代にも限らさらなん　權大僧都隆雅

ひきうへてまたふたはなる姫小松ことしや千世の始なるらん

文永の比伊勢太神宮法樂寺の杣のために祝みつから入けるに神代よりなかれつきせぬ河上ゆくすゑもかきりなからん事をおもひつゝけて　前權僧正通海

君か代のひさしきかけそうかひけるとよ宮河の水のみなかみ

本云

報恩院法務僧正隆舜御筆云々

百五十首挍了

續門葉和歌集卷第十

釋敎歌

人の物をたてまつりたりける返事によみてつかはされける歌　根本僧正聖一

皆何もなきはまことの事なれはえさすと思ふなえつと思はし

此うたは三論の心ならは絶待無所得の義眞言の義ならは遠離因果都絶能所の心なるへし

菩提心論の中に夫迷途之法從妄想生といへるこゝろをよみ侍りける　法印覺雅

よしあしをわけて思ひし心よりなにはのことも迷ひきにけり

法印俊譽

ありと思ひなしと思ひし心こそわか心をもとめかれつれ

大師釋の中に顧過去冥々不知其首臨未來漠々不尋其尾といへる事を　阿闍梨經淳

いつをはしめいつを終とさためてか長き闇路に迷ひそめけん

猶如車輪無始終といへる文の心をよみ侍りける　法印賴瑜

小車のゆきめくるにそしられぬる始もはてもなきよなりけり

人のすゝめける十首撰歌合の歌に釋敎の心をよめる　法印寬惠

こととはむもとのさとりの都鳥迷ひのはしめありやなしやと

學敎成迷といふ心を　法印兼朝

われとしる心のをくを迷ひいてゝをしふる道をなをたとる哉

已名生死之長夜豈無覺悟之曉哉といへる事をよみ侍りける　法印賴瑜

しのゝめのあけゆく毎に思ふ哉なかきねふりも覺さらんかは

唯識論讀侍りける比未得眞覺恒處夢中といへる心をよめる　權律師圓俊

よしあしの夢をまこととたのみてそ現なき世に身は迷ひける

三界唯一心の四句の文字を歌の始にをきて　爲實朝臣のもとへつかはされける三十八首の歌の中に

おふの浦や立くる浪のありなしとかたえになとか心よすらん
圓覺經の始知衆生本來成佛ととける文のこゝろを　法印道意
今そしるなにはのもりのことはりに迷ふ程こそ身を盡しけれ
一道無爲心　權少僧都道順
たちのころ霞をしらて雲をのみはれぬとみつる春のよの月
法花經の序品に上慢の五千座をたちて純有貞實と說るこゝろをよみ侍りける　前權僧正通海
色にそむこの葉はよそにちりはてゝ松にのみ吹山おろしの風
序品の諸人今當知合掌一心待といへる文の心を　前權僧正憲深
もろともにつほめる蓮を捧けてもけふ開くへき色をこそまて
化城喩品の汝等當前進此是化城耳と說る心をよめる　前大僧正覺濟
みちのへにやかて心をとゝむなよたゝかりそめの草の庵に
授記品　法印公紹
むすひなくよゝの契りもふか草の露のかことにぬるゝ袖かな　報恩院如意珠丸
池水の深き濁もゆくするに月すむへしといまそしりぬる
提婆品　寂仙法師
千とせまて拾し峯の菓こそ御法の花のたねとなりけれ
壽量品　前權僧正通海
花の色をそのきさらきにさそひても匂ひつきせぬ春の山風　法印實勝
濁ける心の水を秋の夜の月もしりてそ雲かくれける　前大僧正聖忠
わしの山のちのはる社またれけれこゝろの花の色をたのみて
極無自性心　讀人不知
なをおくに櫻ありとはしりなから麓まてみるみよし野の山
華嚴經の三界唯一心心外無別法と說る心を　佛昭上人
みる人の迷心のあた波も御法のみつの外にやはたつ
秘密莊嚴心の表德門の心を　よみ人しらす
分すきし四方の梢もひとつ色に高根は花をもらさてそ見る
大師釋に褰霧見光無盡寶といへる心を　權少僧都定與
へたてつるきりのうへにてみる月は霧こそ月の光なりけれ
秘密莊嚴心のこゝろにて生死涅槃といへる事を　法印賴瑜
よの中をいとふうつゝも夢なれはさなから夢そ現なりける
入道大納言實冬卿のもとよりあきらけくいまはた見はやをのつから霧の中なる月の光をと申侍りける返しに　法印公紹
あきらけき月をもとむる心よりやかて光はさすにそありける
菩提心論の自心如滿月といへる心を　寂靜院孫鶴丸
尋へき月は外にもなかりけり心の內のすむにまかせて
五相成身の通達心のこゝろをよめる　禪惠法師
雲霧もへたつるかたそなかりける心はれぬるそらの月影
眞言の心とて　敎遍法師
しつかなれはむなしき空も一つにて月は心のうちにすみけり
永仁二年憲淳法印內裏菩提心論の御談儀にまいりけるにいかなる甚深の法門ともか侍らんなと申つかはしけ

ゐつゐてにかきそへ侍りける　聖戒上人

なにといひなにとか人のなかむらん雲もをよはぬ雲の上の月

返し　法印憲淳

ことの葉もいかゝをよはむ雲のうへに上なき月のきよき心は

大日經疏に然此自證三菩提出過一切心地といへる文の心を宗義とてよみ侍りける　權少僧都道順

はれくもる心もつきてことの葉もをよはぬ空にすめる月陰

經の中に唯有明朗更無餘事といへる文につきて宗のこころをよみ侍りける　法印憲淳

心なき心を月になしてみよはれくもるへきことはりやある

布字觀成就といふことを　憲靜上人

阿縛羅賀迦ふしの高根に雲きえて心きよみに月そさやけき

灌頂とけてのちに非冒地難得遇此敎難也といへる大師の御ことはおもひあはせられてたとく覺けれはよみ侍りける　法印隆勝

なに事か世にうれしきと人とはゝまことの法にあふと答へん

灌頂の後朝によめる　法印道惠

かゝるえにあはすはいかて濱千鳥今はた深きあとをふまゝし

傳法とけてのち隨喜の心にたへすよみて人のもとへつかはしける　權律師兼勝

人の身と生るゝたにもまれなるにまた上もなき法にあひぬる

かされて灌頂うけて後人のもとよりよろこひつかはし侍りける返事にそへ侍りける　權少僧都信助

さそなけに心のやみのくもはれてふたゝひみつる秋の夜の月

題しらす　前大僧正覺濟

すへてわれこのよ後の世ふかくのみ法の心をたのむはかりそ

釋敎歌中に　權律師定叡

かりの身のしつむをなにと歎くらん心の水のすみたにもせは

三十八首の歌の中に　宮僧正道性

しかの園鷲の高ねのいにしへをきけはこひしき秋の夜の月

ちきらはや高野の山のありあけにいつへき月のゆくすゑの影

十樂の詩歌のなかに本尊慈應樂といへる心を　前權僧正憲深

我たのむしるしもありや阿遮羅敎こゝに久しく物をすくひて

增重修學樂を

日にそへてみかく衣のうらの玉つゐに蓮のうへの露まて

三十首の歌よみはへりける中に　寂仙法師

みなかみはそこゐもしらぬきよたきの深き流を尋ねてそくむ

受法のために上の醍醐にすみ侍りけるに大原にても同法なりける人のおなしくこの山にかよひけれは昔の契もあはれにて申つかはしける　念寂上人

思ひきや心をあらふ山河のひとつなかれをくまんものとは

末法の心をよみ侍りける　法印俊譽

くみて見ぬ人はしらしな法のみつ流のすゑのこゝろほそさを

野徑雪といへるこゝろにて小野の流の事をよみ侍りける　法印憲淳

古のあとをあまたにふみかへて雪にあらそふをのゝふるみち

後夜のをこなひにをきてよみ侍りける　法印靜運

鳥のねもいく曉かなれぬらんわか身ほとけの道につかへて

上醍醐にて佛法僧をきゝてよみ侍りける　念寂上人
羨しいかにさへつる鳥なれはみのりのほかのこゑなかるらん

了然上人を導師にて佛供養せられける次の朝にゆきふりけれはつかはされける　宮僧正道性
あかさりしきのふの法の庭なれはふかきあとをものこす雪哉

返し　了然上人
あさかりし法にそいとゝ迷ひけるとはるゝ庭の雪のふかさに

次の日この歌ともをみてよみそへ侍りける　法印道惠
もれにけるうらみも更に深き哉きのふの法の庭の白雪

法印聖覺説法の後に銀のはすの葉のうへに水精の念珠をおきてつかはしけるか西方の往生は眞言中品の悉地ことにゆへある事なりけれはよみてそへ侍りける　●權僧正成賢
極樂の蓮のうへにをく露をわか身のたまとおもはましかは

返し　法印聖覺
さとりゆく心のたまの光とてうきよのやみをてらせとそ思ふ

觀無量壽經の勢至觀の令離三途不處胞胎といへるこゝろを　前大僧正覺濟
みつの途はなるゝのみかはゝきゝの園原にさへ宿るへしやは

阿彌陀經の六方證明の心を　法印定任
たのみあるちかひの上に重れてもみよの佛のまことをそしる

定散の二心をきらはすひとへに稱名すへき心を　法印賢助
月にすみ花にちらさむ心にも世を秋風の聲をわするな

決得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣といふ文の心を　聖戒上人
人をわかぬ誓の船のわたすとき皆のりつれていさやいてなん

返し　權律師圓俊
うれしくもくるしき海はこえにけり誓の舟ののりにまかせて

嘉元元年仙洞御談義にまいり侍けるに大師他緣覺心の二心を空論有宗と釋したまへる心を人の問侍りけれは返事にそへ侍りける　權少僧都道順
咲匂ふ色香の外はちりて後殘れる花のすかたやはある

拔業因種心
吹風のならひなられとちる花のむなしき色はおのれとそしる

他緣大乘心の中に唯識無境の心を
夢の世にみる事はみなむなしくて心ひとつそまことなりける

覺心不生心
現とも夢ともいかゝわきていはん心ことはのたえはてしより

權少僧都定譽
津の國の難波のことのよしあしも心ことはのたえはてゝこそ

不生一句觀中妙斷といへるこゝろを　隆舜法師
法の道いかにとゝへはなしといふ言葉のうへにものな思ひそ

不偷盜戒　法印覺基
忘れてもたちたによるな白浪のうきなも罪もおふのうらなし

宗家の十住心論の心を讀て當寺琰魔堂にをしける中に
異生羝羊心を　よみ人しらす
むつのみちまよふ心はひとつにてうくる姿そあまたにはなる

異生羝羊心の釋の中に三辰戴頂暗同狗眼といへる心を
權律師領驗

さとらしなみつの光はてらせともなをそのうへもくらき心は
嬰童無異心を　　　　　　　　　　　　　よみ人しらす
暫しその影な賴めとはゝそはらちゝは此身もいかゝとまらん
愚童持齋心の本覺內薰佛光外射といへるこゝろを
日影さすそこの心は春になりて氷し水はとけそめにけり
唯□無我心　　　　　　　　　　　　宮僧正道性
夢の世とおもひなせともなされぬはなを驚かぬ心なりけり
いかにして常ならぬ世のことはりを人にもしらせ我も悟らん
經の中に生死涅槃猶如昨夢と說る文につきてよみて人
の許へつかはしける　　　　　　　　法印憲淳
さめやらぬ旅れの夢の俤をきのふになしていつかみるへき
返し　　　　　　　　　　　　　　　聖戒上人
旅れしてさむるうつゝのあらはこそきのふの夢の面影もみめ
慳貪の心をよみ侍りける　　　　　　前大僧正覺濟
津のくにの難波の浦のなにまてもおしむ心はあしのやへふき
飲酒の心を　　　　　　　　　　　　法印實勝
竹の葉にかたふく月の影さしてなをさめやらぬ春の夜の夢
康和二年冬のころ阿彌陀の像にむかひてまとろみ給ひ
けるに　　　　　　　　　　　　　　前大僧正定海
露の身のきえなん後は功德池のはちすのうちを家とこそせめ

神祇歌

伊勢皇御孫の御ことあまくたり給ひける時は御かたち
をうつしてさつけたてまつられけるかしことところの御
事をよみ侍りける　　　　　　　　　前權僧正通海
なをてらせ日の御鏡にうつしけん影は雲井にかはらさらまし
伊勢小朝熊の宮の兩面の御かゝみに月のやとり侍りけ
るを見てよめる
あさくまや鏡の宮のくもりなく影をならへて月そやとれる
人々あまた神祇の歌よみ侍りける中に
　　　　　　　　　　　　　　　　　權律師圓俊
万代をかけてそいのる神風やいすゝの川の浪のしらゆふ
出家の後八幡宮にまうて侍りてよみたてまつりける
　　　　　　　　　　　　　　　　　法印道惠
男山代々へしあとのかすならぬ苔の袖をもあはれとはみよ
おもふ事侍りける比よみ侍りける　　權律師宣遍
前の世の契りかこれも石淸水しはしつかふる身ともなりしは
賀茂の御ちかひをおもふ事侍りてよみける
　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮藏院右王丸
わするなよたのまん人を徒らになさしとちかふ神ならは神
稻荷の社にまうてゝまつりける十五首の歌の中に
　　　　　　　　　　　　　　　　　前權僧正敎範
たのもしな法の守とあとたれし神のしるしの杉のむらたち
出家のために醍醐へまかりいらんとて春日の社にまう
てゝよみて奉りける　　　　　　　　權律師兼勝
ちかひをそなをたのみける春日山わかいる法の道のすゑまて
同社にて　　　　　　　　　　　　　權律師定叡
春日山よゝのまつりの月影に鏡の宮はひかりそふらし
住吉の社を思ひ出てよめる　　　　　權少僧都經覺
おもひやる心にそすむすみよしの神さひわたる浦の松風
神祇歌の中に日吉社を　　　　　　　法印靜運

神のちかひかはらぬ色をのこすらし船とめし浦の松の一本
熊野權現の御歌に道となし程もはるかにへたゝりぬおもひをこせよ我もわすれしと夢の中にしめし給ひけるむかしをおもひいてゝよめる　權少僧都經乘
神も又ちかひわするな我たのむ心の道はへたてなけれは
川あかゝりけるに長尾宮にまて侍りけるに松風身にしみて神さひたりけれはよみ侍りける　權律師賴驗
月影も神さひにけり山とりのなかおの宮の夜半の松風
法印貫勝笠取山の清瀧の社にまうてゝ歌たてまつるへきよしすゝめ侍りけれはよみ侍りける　法印定聰
苔のむす岩根につたふ清瀧に年經る神や影やとすらん
いたはること侍りけるころよみて清瀧の社にたてまつりける　權少僧都定耀
神よ神たのむ心のふかきをは人たに人をすくふとそきく
この後夢のつけありてやまひなをり侍りにける
託宣の文にあまたの御ちかひ侍ける中に源氏の僧をまもるへき御ちかひをおもひいてゝよみ侍りける　權少僧都道順
清瀧やしつむみくつも源のなかれをまもるかすにもらすな

圓俊法印手跡云々
九十首挍了
右拾冊報恩院有之寫本但卷本也筆者奧書隆源大僧正御手跡云々
右續門葉和歌集以村井敬義本挍合了

和歌部十

續現葉和歌集卷第一

春歌上

嘉元元年内裏に百首歌たてまつりし時　前關白おほきおほいまうちきみ

あさみとりはる立ぬらしあら玉の年をこめてもかすむ空哉

同年百首歌めされしついてに霞　法皇御製

春きぬとかすみにけりな山のはのみとりも薄くけさはみゆ覧

立春朝といふことをよませ給ふける　今上御製

もゝしきのやとにのみくる春かとやあくれはいそく雲上人

百首歌たてまつりしとき　入道前おほきおほいまうちきみ

春の立しるしはかりはかすめとも猶雪きえぬ峯の杉むら

餘寒のこゝろを　左のおほいまうちきみ

更にまたゆきけのあらし空さえて春をわするゝきのふけふ哉

初春霞　二品法親王覺

あし引の山はかすみのあさみとり春ともしらすさゆる空かな

嘉元内裏に百首歌たてまつりし時　前關白おほきおほいまうちきみ

はるのくるあさけの風のをとは川たきついはれも氷とくらし

鶯知春といふ事を　春宮御歌

なをさゆるをのかふるすの鶯は聲をしるへに谷や出らむ

春の歌の中に　權中納言公雄卿

うくひすも物うかるれやわするゝ覽谷にも春の光まちえて

百首歌めされし時　入道前おほきおほいまうちきみ

埋もるゝ若菜はそれとみえすとものへに出てや雪またまし

若菜を　春宮御歌

きえすともをしてやけさは梓弓春の雪まのわかなつままし

百首歌たてまつりし時　昭慶門院一條

春はまたあさけののへにちる雪の積らぬ程にわかなをそつむ

前大納言經繼卿

いそのかみふるのゝ雪もかつきえて昔のあとにわかなをそ摘

權中納言爲藤卿

さと人はいまや野原にふる雪のあともおしますわかなつむ覽

澤若菜をよませ給ふける　今上御製

春あさきのさはの氷とけにけりせりつむ人の袖やぬるらん

龜山殿にて人々題をさくりて千首歌よみ侍しとき若菜　前大納言爲世

老ぬれは友こそなけれ春ののにたれをさそひて若菜つまゝし

百首歌たてまつりしとき　權中納言公雄卿

春日野にもゆとは見えてわかくさの烟のすゑそ立ものほらぬ
嘉元百首歌たてまつりし時霞　入道前のおほきおほいまうちきみ
あまのたくけふりよりこそ鹽かまのうらの霞は立はしめけれ
春の歌中に　二品法親王慈
あまのたくもしほの煙ひとつにてうらのとまやゝ猶かすむ覽
二品法親王覺
こく舟の風をたよりのしるへたになみちへたてゝかすむ春哉
遠山霞を　前大納言爲世
よそにみしおのへへたてゝかすむなりとを山鳥の春の曙
龜山殿千首歌に柳　權中納言爲藤卿
青柳のいとのみとりのうちはへてなひくともなく春風そ吹
今上みこの宮と申侍し時歌合に柳風　前大納言爲世
風ふけとみたるゝ程もなかりけりおい木にのこる青柳のいと
龜山殿にて題をさくりて七百首歌人々によませられ侍しついてに簷梅　法皇御製
わかやとの梅さきぬとはいはすとも人にはつけよ軒の春風
梅を　内のおほいまうちきみ
さきぬとも人にはつけし梅の花にほふのきはの風にまかせて
右兵衛督爲定朝臣
春風のさそふもしらす梅の花なをこのもとのふかきにほひに
嘉元百首歌たてまつりし時梅　前關白おほきおほいまうちきみ
ふく風のさそふともなきおりおりも心とにほふのきの梅かえ
龜山殿千首歌に同心をよませ給ふける　法皇御製
梅かかのかすめるよはゝ木のもともしらてそにほふ春の山風
同千首歌に歸鴈を　前大納言實教卿
みことのりふるきにかへる春なれは雲井の雁も道はたとらし
太宰帥邦親王
とゝまらぬならひにはるはなしはてゝおなし心にかへる雁金
おなし心を　藤原爲明朝臣
歸るさをきゝてもよそにしたへとや雲井の雁のれにはたつ覽
百首歌たてまつりし時　前大納言俊光卿
都にもさすか心やとまるらんかへりもやらぬ春のかりかれ
法印定爲
つゝむへきたかことつてそ玉章をかすみにこめてかへる雁金
前大納言爲世よませ侍し春日社三十首歌中に　法印長舜
玉つさも見えこそわかれ墨染のゆふへのそらにかへるかり金
嘉元百首歌たてまつりし時歸鴈を　左のおほいまうちきみ
かすみにもかくれさりけり夕日さす雲のはたてをすくる雁金
百首歌たてまつりし時　前關白左のおほいまうちきみ
かれてよりあたしいろをやしりぬらん花になれしと歸る雁金
春月をよませ給ふける　今上御製
ほかよりはかすみもいかゝはれさらむ雲の上なる春のよの月
彈正尹忠親王
山のはを出るゆふへのかけよりもふけてそかすむ春のよの月
百首歌たてまつりしとき　昭訓門院春日
をのつから暫しかすまぬよはもかなさてもや月の曇る共みむ
少將内侍

さやかなる影をそ見まし春の月霞むつらさのなきよなりせは

江春月を　藤原爲親朝臣

なにはかたいりえの芦のみこもりに月もかすみを出ぬはる哉

題しらす　よみ人しらす

大かたの空こそあらめなにはえやなみちもかすむ春のよの月

津守國道

さほひめの袖もなみたのはれぬかとかすめる月の影にみる哉

權大納言定房卿

あひにあひて曇りなきよの春なれは霞も空に月なへたてそ

龜山殿千首歌に霞をよませ給ふける　法皇御製

櫻花さかはとおもふ山のはにあやにくにたつ朝かすみかな

待花といふ事を　前僧正實超

あたにちるなにはたてともさかぬまをまつは久しき山櫻かな

峯花を　正三位爲實卿

みよしののたかきの櫻咲ぬらし空よりかゝるみねの白雲

花の歌の中に　平宣時朝臣

雲かゝるとをつたかねの霞こそはるれはやかて花になりけれ

内親王祺

さかぬまもまかひしみねのしら雲に猶色そふや櫻なる覽

前僧正慈勝

待れつる身のなくさめと柴の戸のあくれは聽て花をこそみれ

龜山殿千首歌に花　前權僧正雲雅

白雲か何そとはゝさくらはなさくとこたへよ春の山もり

山花を　万秋門院

君か見むはるをかされて山たかみいくへもかゝれ花の白雲

百首歌めされし時　前關白左のおほいまうちきみ

をしなへて風おさまれる春なれは千代もへぬへき花の下かけ

龜山殿七百首歌に朝花　前大納言爲世

山さくらへたつるみねもとたえして梢を見する朝霞かな

續現葉和歌集巻第二

春歌下

尋花といへる心をよませ給ふける　法皇御製

尋ねゆく道しらすともをちこちのたつきは花の色にまかせん

二品法親王覺家五十首歌におなし心を　權中納言公雄卿

色まかふくものいくへかわけきつる花に心のゆくをかきりに

百首歌たてまつりし時　前大納言爲世

遠くともなをこえゆかむめにかゝるたかねの雲を花とみる迄

權中納言爲藤卿

たつねても花とは見えすよしの山わけ行みねにかゝる白雲

參議實任卿

みねこえて後そしらるゝまかひこし雲は櫻のへたてなりけり

花といふ事を　本空法師

こえてこそ花とも見つれかつらきやよそにおもひし峯の白雲

平維貞

たつねつゝ花こそはてもなかりけれ猶行末にかゝる白くも

百首歌たてまつりしとき　法印定爲

匂ひくる風のたよりをしおりにて花にこえゆくしかの山道

題しらす　内親王榮

かつらきやたかまの山の春風にかすみをもるゝ花の白雲

行路花といふ事を　按察使親房卿

くれすとも花のやとかせたまほこの道行ふりににほふ春かせ

題しらす　春宮御歌

なかしてふならひもしらす春の日のくるゝまてみる山櫻哉

百首歌たてまつりし時　前大納言爲世

くるゝまてみつるなこりに山櫻かへるさ送る花のおもかけ

夕花を　前大納言俊光卿

なかめやる遠きこすゑははやくれてのきはにのこる花の色哉

百首歌たてまつりしとき　前大納言實教師

おもかけは倚立さらてこのもとにくれても花の色をみる哉

嘉元百首歌たてまつりし時花

前關白おほきおほいまうちきみ

おもひねのゆめてふ物そ春のよのやみにも花の色をみせける

百首歌たてまつりしとき　權中納言公雄卿

櫻さくたかねをかけていてにけり花のかゝみの春のよの月

月前花を　參議惟繼卿

空よりも花のひかりそさやかなる梢の月やかすまさるらん

按察使親房卿家の詩歌合に春曉　右衛門督師賢卿

たかさこのおのへの花もかすむまに昔をのこす有明の月

花歌中に　法親王承

あれぬれといまも昔のおなし名を花にそのこすしかの故郷

百首歌たてまつりし時　右兵衛督爲定朝臣

春をへてしかのふるさと古のみやこは花の名にのこりつゝ

題しらす　大納言典侍

春ことにのきはの花はにほへともふりにし里をとふ人もなし

前僧正慈勝

世のうさも見てそ忘るゝ山さくらわかためとてや花は咲らん

法皇御製

龜山殿千首歌に花を

春といへとまつ事もなきよの中に花に心のなをとまるかな

前大納言爲世よませ侍し春日社三十首歌中に　權中納言爲藤卿

みよしのは花より外のいろもなしたてるやいつこゝれの白雲

花の歌中に　法印道然

けさはなをたえまも見えす山のはに花をかされてかゝる白雲

法眼行濟

よしの山花のこのまはあけやらて櫻にかゝるみねのよこ雲

藤原爲嗣朝臣

立のほるとやまのみねのよこ雲も花にわかるゝ春の曙

百首歌たてまつりしとき　前大納言經繼卿

なかめてもあかぬ色かをいこま山おのへの櫻雲なへたてそ

題しらす　藤原忠定朝臣

山さくら盛りになれは白くものかゝるをさへに花かとそみる

花を　法皇御製

やまさくら盛りになれは枝かはす松のときはも見えぬ春かな

前大僧正良信

かすか山もりのしめなはひきはへておる人もなき花をみる哉

法印長舜

見れはまたちらぬ心を山さくら花にもいかておもひしらせん

僧正道意

なか〳〵にちらはちらなんさくら花はなの盛りはしつ心なし

法皇御製

山さくらひと木なりとも宿しめて靜に花はちるまてもみむ

今上御製
いかにして散てふ事のつらさをは忘れてたにも花をみるへき

百首歌たてまつりし時
前關白おほきおほいまうちきみ
花のかをさそはさりせは吹風をつらしとのみや恨みはてまし

昭訓門院春日
やかてまたさそひもそする山櫻うつろふ色を風にしらすな

題しらす
宰相典侍
ちるをみしおほくの春のつらさにもこりぬ心そ花にうつれる

新院御製
春風はふくとしもなき夕暮にこすゑの花ものとかにそちる

永福門院内侍
ふくとしもよそには見えてもろくちる花にしらるゝ庭の春風

僧正桓守
心あらはいかにいひてか恨みまし花ちるころのはるの山かせ

花見侍へきよし前大僧正禪助申侍けるかにはかに神宮へまいるとて花のちるまてむなしくすき侍けれは
前大納言通顯卿
さかりこそいとはれもせめ櫻花ちるまをたにも猶見せしとや

返し
前大僧正禪助
散までにとはれぬをこそ恨みつれ花にはいかゝ人をいとはむ

花歌とて
新陽門院兵衛佐
ひとすちにうつろふ花のつらさをもさそはて見せよ春の山風

權僧正桓守すゝめ侍し日吉社三首歌合に暮山花を
法眼兼譽
はなの色はうつろひやらて白雲のゆふゐる山ににほふ春かせ

題しらす
藤原重綱
ありてよのうきをしりてや吹風のさそはぬさきに花のちる覽

藤原宗秀
さほひめのかさしの花のうつろへは霞の袖そいろかはりゆく

昭訓門院小督
人すまぬみ山のおくの櫻花さそふかせをもたれいとふらん

花厭風といふことを
按察使親房卿
さそはるゝ花の心はしられともよそにそいとふはるの山かせ

龜山殿にて人々題をさくりて歌つかうまつりし時花
前大納言經繼卿
よしさらはちるもうけれは櫻花まかひもいてよみねの白雲

百首歌たてまつりしとき
藤原行房朝臣
ふく風はさそはすとても山さくらちりのころへき花の色かは

法印定爲
雲はるゝとやまの松の梢よりさくら吹こすみねのはるかせ

落花を
春宮御歌
よしさらは風のさそふになしはてゝ移ろふ花のうきを忘れん

昭慶門院一條
さくらさくおのへのあらしふくたひに空にみたるゝ花の白雪

權少僧都能信
きえかてになをそふりしく春の日の光にあたる花のしら雪

前中納言資名卿
こすゑこそさそふ風にはもろくともにははのこれ花の白雪

平齊時
散つもる花をしみれは木のもとにやかてもきえぬ春のあは雪

太宰帥邦親王家に五十首歌よませられ侍しとき花

丹波忠守朝臣
雪とのみふるさとかけてみよしののよしのの櫻今やちるらん

百首歌たてまつりしとき　前關白おほきおほいまうちきみ
今は身のはるのめくみもときすきてふりゐる宿のはなの白雪

家に五十首歌よみ侍けるに落花　二品法親王覺
またはるのちきりもしらぬ老か身を思ひすててもちる櫻かな

同心をよませ給ふける　法皇御製
うしとみて散ともよそに過へきを花のあたりは立そはなれぬ

前右おほいまうちきみ
おしまれてとまる習ひのあらはこそ散をもわきて花を恨みめ

内裏三月盡に三首歌講せられ侍しに殘花を　藤原爲冬
さてもなをとまらぬ色と山さくらのこるこすゑに春風そふく

春歌に　權大納言基嗣卿
心あらはさそひなはてそをのつから殘るひときの花の下かせ

二品法親王慈家三首歌に落花稀　法印隆淵
庭にたにあとなくなりぬさくら花なをも梢をさそふあらしに

落花の心を　中宮宣旨
をのつからとひこし宿の人めさへともにあとなくちる櫻かな

水上落花といふことを　能譽法師
いけ水はかつちる花にうつもれてのこる櫻のかけもうつらす

惟宗光吉
吉野河なかるゝ水のよとむまて浪にかけたる花のしからみ

河花を　前大納言爲世
吹風にちりしくときは山河のふちにも花のあた浪そたつ

瀧邊花　宰相典侍
たきつせにちりてなかるゝ櫻花きえせぬ水のあはかとそみる

春歌中に　權少僧都淨道
あすをまたたのめて歸るこのもとにまたしとや尚花の散らん

法印宗圓
たか爲にくるゝもおしむ春なれはまつさきたちて花の散らん

前中納言定資卿
あたにちる花をは何と恨むらむ春の日數もとまるものかは

軒のさくらのちり侍て後風の吹けるをきゝて　天台座主慈源
さそはれしなこりときけは吹風の音こそ花のかたみなりけれ

御まへになをさくらをうへられ侍しに歌つかうまつるへきよし仰られ侍しかはよめる　法印道我
春風もこの一もとを山さくら君かためとやよきて吹けん

御返し　法皇御製
春風にもろき老木の山さくらこのひともとをいかてよきけん

題しらす　昭訓門院權大納言
いはれとも色にそみゆる行はるのなこりをとむる山吹の花

津守國夏
いへはえにいはぬ色なる山吹は心ひとつにおしき春かな

嘉元百首歌たてまつりし時欵冬　二品法親王覺
ゆくはるのつらさしらてや山吹のさかりみるらんゐての里人

題しらす　津守國道
見れはまた流れそゆかぬ山吹のうつるふかけやゐての水柵

龜山殿千首歌に欵冬を　左大辨公明卿

はる風にゐての山吹ちりぬらしいはぬ色なる水のしからみ

百首歌たてまつりしとき　前大納言實教卿

さきぬれはよせくる浪の共儘にかはらてかゝるたこのうら藤

入道前おほきおほいまうちきみ

ちる花は雪とつもれとよしの山あとも見せてや春のゆく覧

暮春雲といふことを　前權僧正雲雅

はるの色も今はあらしの山のはに雲こそのこれ春はのこらす

嘉元百首歌たてまつりしとき暮春を　昭慶門院一條

ちりはてし花のなこりはつきもせてまた春くるゝ入あひの鐘

題しらす　藤原泰宗

いりあひの鐘にあらしの音そへてけふを限りと花やちるらん

百首歌たてまつりしとき　權中納言公雄卿

花にのみあたし浮名はたちなから風のさそはぬ春もとまらす

舟中暮春といふことを　達智門院

ゆく舟のあとなきかたを慕ひても春はとまらぬ八重のしほ風

龜山殿千首歌に暮春　權中納言爲藤卿

たれもかくしたふにつけて忘れすは人の心に春やのこらむ

百首歌たてまつりしとき　權大納言定房卿

とゝまらぬおなし別にならひてもまたなけかゝる春の暮哉

暮春のこゝろを　源邦長朝臣

はかなくてすくる月日を行春のわかれになして猶歎くかな

權中納言公雄卿

いく春の別にたへて歎くらん人もおしまぬ身のみふりつゝ

續現葉和歌集巻第三

夏歌

百首歌たてまつりしとき　前大納言爲世

夏衣かふるとなれはおしきかなはなにもそめぬ老のたもとも

卯花を　法皇御製

さとつゝきかきれにうへん此ころは卯花月よみちもまよはし

百首歌たてまつりしとき　昭訓門院春日

卯花のちりゆくときは山かつのかきれにみゆる雪のむらきえ

郭公を　法親王承

つれなくてこよひもあけぬ郭公またぬやこゑの鳥はなけとも

入道前おほきおほいまうちきみ

さゝかにのくものはたての郭公くへきよひとや空にまつ覽

前關白うちのおほいまうちきみ

まとろまていくよかされつ郭公またしき程の初音まつとて

權律師實性

いかはかりなをつらからん郭公待とはしりてつれなかりせは

平貞俊

まちわふる心のうちを郭公しられはこそはつれなからめ

權僧正聖尊

待人はわれにかきらし郭公誰にかわきてことかたるらん

權律師淨辨

さらてたに忍ふはつれを郭公まつ人ありといかゝしらせむ

三善遠衡朝臣

かくはかり待とはしらて郭公人のためにやはつれなくらん

覺懷法師

身をしれは我とはまたす郭公よそにかたらふ一聲もかな

前大納言爲世よませ侍し春日社三十首歌中に

法眼行濟

たつね入山のかひあれ郭公きゝてみやこの人にかたらん

津守國道

郭公を

わかための聲とはさてそおもふへきひとりたつねむ山郭公

龜山殿にて十首歌講せられし時山郭公

惟宗光吉

たつね入人をまつらしあし引の山ふかくなく郭公かな

藤原泰宗

題しらす

つれなくてさてしもやまし郭公今こそきかぬ初音なりとも

藤原利行

つれなさはいつれかまさる郭公おなし心にあり明の月

內のおほいまうちきみ

おなしくは待おりきなけ郭公つゐにつれなきはつれならしを

今上御製

待郭公をよませ給ふける

人つてに聞そめしより郭公なかなく聲をまたぬ日はなし

二品法親王覺

題しらす

郭公また山ふかきはつ聲をうきよの外のすみかにそきく

昭慶門院一條

しのひれとおもふ物から郭公きゝては人にまつかたるかな

女三宮治部卿

きなくをも人につけすは郭公いま一聲も我そきかまし

前大納言通顯卿

杜郭公

かたをかのもりのこすゑの郭公神のたむけにいく聲もなけ

平氏村

郭公たれに昔をしのへとてさのみおいそのもりになくらん

百首歌たてまつりしとき

前關白おほきおほいまうちきみ

つゝみえぬ淚なりけり郭公こゑをしのふのもりの下露

權中納言公雄卿

郭公をのれなきてもおもひしれたもとにたえぬ老の淚を

前參議雅孝卿

祭日郭公を

郭公けふとはたれにことゝひてそのかみ山に聲たむく覧

前僧正慈勝

夏歌中に

みつくきのをかのやかたの郭公ねての朝けの空に鳴なり

大江廣房

なく聲におとろかされて郭公ゆめちよりこそきゝはしめけれ

右近大將實衡卿

まつにのみ心はつきて郭公きくとしもなきよはの一聲

前大納言爲世よませ侍し春日社卅首歌中に

藤原爲親朝臣

をのつから聞かひもなし郭公我ためならぬよその一こゑ

今上御製

題しらす

またれつるをのか五月とあし引の山ほとゝきすいまそ鳴なる

春宮御歌

なかぬまはさもこそあらめ郭公なと二聲のつれなかるらん

法皇御製

龜山殿七百首歌に獨聞郭公

人しれす我ためとてやほとゝきすひとりねさめの枕とふらん

前大僧正道昭

郭公を

をしなへてまつとしりてや郭公たか里わかす鳴て過らん

權中納言爲藤卿女

たかさとの心つくしも郭公わするはかりにいまそなくなる

二品法親王覺家五十首歌に遠郭公　法親王寛

をちかたの空にすき行郭公たれさたかなる聲をきくらむ

聞郭公といふことを　中務卿恒親王

たちかへりさたかにそきく郭公ほのかなりつるよはの枕に

題しらす　二品法親王覺

ことしこそきなれのさとの郭公をちかへりなく聲をきゝつれ

權中納言兼信卿

あやめかる淀のわたりの郭公ねにあらはれてけふたにもなけ

菖蒲を　藤原重綱

ひく人もなくて年ふるかくれぬにおふる菖蒲のねこそ流るれ

盧橘　中臣祐臣

袖ふれしはなたちはなは色よりもかこそ昔のなこりなりけれ

平親清四女

忍はるゝ昔やゆめにのこるらんねさめの袖に匂ふたちはな

二品法親王覺家五十首歌に早苗　前大納言經繼卿

かへるさのたこの家ちや近からしくるゝ急かす早苗とるなり

河五月雨を　源具行朝臣

はれやらてふる五月雨に飛鳥川淵はせになるひまやなからん

權少僧都能信

名取川いとゝ沈みてむもれ木も朽やはつらん五月雨のころ

參議實任卿

五月雨のつきてしふれは最上河この月はかり水やまさらん

嘉元百首歌たてまつりしとき五月雨　万秋門院

山河の淺きせもなき五月雨にあたなみたてゝいく日へぬらん

同心を　法皇御製

五月雨にあなしのかはら水こえてひはらも見えすくもる比哉

夜五月雨を　春宮御歌

よるはなを空のゆきゝもみえわかて晴またれぬ五月雨の空

嘉元百首歌たてまつりしとき　前關白おほきおほいまうちきみ

けふもまたかさなる雲のころも川なみ立まさる五月雨のころ

題しらす　よみ人しらす

水まさるうちの柴舟しはしたによとむせもなき五月雨の比

津守國夏

今はよも葉すゑもみえし草か江の入江の波の五月雨のころ

藤原範秀

すまのあまの刈干す浦の玉もたにしほれてたかぬ五月雨の比

津守國顯女

いとゝなをもろこし船もよりぬへし袖の湊の五月雨のころ

夏歌とて　中務卿恒親王

おほゐかわ川せもみえぬ夕闇にうふねのかゝり影そほのめく

二品法親王覺家五十首歌に鵜川　權中納言資藤卿

夏のよのあくるとともにはやせ河くたすもやすし篝火のかけ

藤原基任

いてやらぬ月の桂のゆふ闇にひかりさきたつよはのかゝり火

題しらす　法印圓伊

たきかわの流をとめて夏のよの月もいはもる影そすゝしき

永福門院

風のをとも涼しくそよくくれ竹のふしうきよはの月のかけ哉

前大納言實躬卿

明やすきならひたにうき短かよの月には雲のかからすもかな

嘉元二年院に三十首歌たてまつりしとき夏月
前關白おほきおほいまうちきみ
いつかたも山のは遠きなか空の雲まにあくるみしかよの月
おなし心を　平宣時朝臣
山のはにかたふく月の影をたにまたてあけ行みしかよの空
二品法親王覺家五十首歌に野夕立　權中納言爲藤卿
宮城野のこのした露はしけくともなを立よらん夕たちの空
遠夕立を　今上御製
かつらきやたかまの山にゐる雲のよそにもしろき夕立の空
右近大將實衡卿
この里はくもらぬ空もなるかみのをとにそしるきよその夕立
前大納言爲世人々に三首歌よませ侍しとき夕立を　前中納言隆長卿
なる神のをとはいつくもきこゆれと雨はさとわく夕立のそら
龜山殿千首歌におなし心を　前中納言有忠卿
此里ははれてもしはしなる神の音こそのこれ夕立のそら
題しらす　法皇御製
ゆふ立はいくさと遠くなりぬらんのこる雲まにみゆる稻妻
前大納言爲世
いつかたへすくるともなく晴にけりこの里かきる夕立のそら
尋觀法師
ゆふ立のかけろふ空のうき雲はいくさとかけて涼しかるらん
百首歌たてまつりしとき　彈正尹忠親王
夕立のはれ行みねのうつ蟬は羽にをく露やすゝしかる覽
平宗宣朝臣すゝめ侍し住吉社卅六首歌中に夏草　前大納言爲世
そゝろにもしけらさりけり里人のみちをはのこすのへの夏草
題しらす　安部忠顯
夏くさのしけれるときは春日野の野守もをのか道やたとらん
百首歌たてまつりしとき　前大納言俊光卿
夕闇にそことも見えぬみなとえの蘆まあらはにとふ螢かな
螢を　春宮大夫公賢卿
ゆふくれはたまえのあしを吹風にいとゝ螢の影そ亂るゝ
昭訓門院小督
草ふかき露よりしけくとふ螢きえぬ光そ風にみたるゝ
内親王琜
池水にしけるみくさのかたはかり影もうつらてとふ螢哉
二品法親王家覺五十首歌に澤螢　前大納言實教卿
くれはまつかけをみるへき澤水にみくさへたてゝとふ螢かな
題しらす　右兵衞督爲定朝臣
とふ螢ひとつ思ひのきえやらて身をいたつらにゆくよもゆ覽
權中納言公雄卿よませ侍ける北野社三首歌に　法印長舜
もえてこそよそに見えれとゝふ螢我も思ひはありとしらなん
百首歌たてまつりしとき　左おほいまうちきみ
わけすくる山した道のおひ風にはるかにをくる蟬のもろ聲
題しらす　藤原行朝
夏山のしけきこすえになくせみの聲はかりこそ人にしらるれ
前中納言季雄卿
このまゝにすゝしくくれぬ夏山の日かけもらぬまきの下道
百首歌たてまつりしとき　前大納言經繼卿
山かはの水のみなはのわきかへり玉ちる瀬々の風そすゝしき

河邊納凉を　　法印禪隆

すゝしさはかせよりさきに音たてゝいはれにはやき山川の水

百首歌たてまつりしとき　前關白左おほいまうちきみ

みそきする夜はの川浪をとふけてあけぬよりふく袖の秋かせ

權中納言公雄卿

みそきする河瀨の浪のしらゆふは秋をかけてや涼しかるらん

續現葉和歌集卷第四

秋歌上

龜山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりしついてに立秋朝　法皇御製

けさのまにたもとすゝしき夏衣一よにたちぬ秋のはつかせ

初秋風といふことを　中務卿恒親王

夕暮はまとのくれ竹うちなひきすゝしき風に秋はきにけり

前右のおほいまうちきみ

露はなほ結ひもあへすふきかはるあさけの風に秋そしらるゝ

百首歌たてまつりしとき　權中納言爲藤卿

露結ふしのゝをすゝきほにいてゝいはれとしるき秋はきに皃

前關白左のおほいまうちきみ

秋をへてたむくる露の言葉にあはれをかけよあまの川なみ

左のおほいまうちきみ

心をはかすともなしに天の川よそのあふせにくれそまたるゝ

入道前のおほきおほいまうちきみ

七夕に心をかしてあまのかは我なかならぬあふせをそまつ

七夕をよめる　津守國道

天のかは秋とちきりしことのはやわたす紅葉の橋となりけん

平春時

まれなれと年に一よはいつはりもなき世なりけりほし合の空

百首歌たてまつりしとき　前關白内のおほいまうちきみ

うき中はふちせもあるを天のかは年の渡りはいつもかはらす

七夕をよませ給ふける　法皇御製

七夕はわれてまたあふ鏡かと秋のなぬかの月やみるらん

龜山殿にて人々題をさくりて千首歌つかうまつりし時おなし心を　彈正尹忠親王

天のかはあけなん空をいかゝせむ今宵はかりは梶かくすとも

前大納言經繼卿

久方のあまの川なみたちわかれあくるよつらき星合の空

題しらす　よみ人しらす

いはまくらかはしもはてす明にけり天のかはらの星あひの空

百首歌たてまつりし時　法印定爲

七夕はうきて思ひやまさるらむたつかはきりのけさの別に

龜山殿にて人々題をさくりて千首歌つかうまつりしとき荻　權中納言爲藤卿

音たてゝすきつるからに秋風はおきの葉にのみ吹かとそきく

秋夕をよみ侍ける　平時元

なにとたゝおきふく風をかこつらむ心よりうき秋のゆふへを

平貞時朝臣十首歌よませ侍し時おなし心を人にかはりて　權僧正定顯

夕暮はものをおもへと音たてゝおきのはゝかり秋かせそふく

内裏にて庚申の夜人々歌合し侍し時秋夕を

丹波忠守朝臣
おほかたの哀は秋にそふ物をうき我からと何なけくらむ
夕露といふことを　前大僧正良信
ゆふ暮はくさはのみかは物おもふ袖にもあまる秋のしら露
題しらす　惟宗光吉
をきあまる露はみたれてあさちふのをのゝしのはら秋風そ吹
人々すゝめて春日社によみてたてまつりし三十首歌に　前大納言爲世
結ふともよしやはらはし老か身は露なしとてもかはく袖かは
秋の歌の中に　達智門院兵衞督
むかしたれ秋のあはれをしりそめて今も涙の露こほるらん
龜山殿千首歌に苅萱　前大納言實敎卿
夕暮はたか心をかかるかやのみたれて秋のあはれしるらん
薄をよめる　能譽法師
うちなひくいりえの尾はなかけみえて袖に浪こすまのの浦風
内のおほいまうちきみ
風わたるすゑののはらの花すゝき心しらすや人まれくらん
大江政國女
あつさ弓ひきののはらのしのすゝきしのに玉ちる秋の白つゆ
題しらす　前中納言公脩卿
風かよふおはなにましろ女郎花まれくかたにやまつなひく覽
法親王承
あきかせの心もしらす女郎花いかなるかたにまつなひくらむ
龜山殿千首歌に女郎花　法皇御製
見ぬ人にかたりやせましをみなへし露のみおつるのへの秋風
おなし心を　中務卿恒親王
さきましろ千草はあれと女郎花をのれのみこそ色もまかはれ
正應二年九月盡日三十首歌たてまつりしとき草花交色といふことを　前大納言實躬卿
をく露もちくさなからに移ろひぬひもとく花の色にまかせて
野徑秋行といふことを　藤原冬隆朝臣
わけすくるたもとは花の色なれは露もはらはしむさしのの原
萩露を　中臣祐春連
さらぬたにほさぬ袂を秋はきの花すり衣露なかされそ
法眼兼譽
つゆなからなをわけゆかん秋はきの花すり衣色やまさると
藤原盛德
萩かはな袖にみたれてみやきのゝこの下露に秋かせそ吹
左のおほいまうちきみ
おる袖も色そうつろふ白露のむすふまかきの秋はきの花
三首歌講せられしついてに朝草花をよませ給ふける　今上御製
露よりもなをことしけし萩のとのあくれは急く朝まつりこと
草花をよみ侍ける　正三位爲實卿
をき餘る露もたまらすをかのへのもとあらの萩やもろく散覽
龜山殿にて五首歌の中に暮山鹿　前大納言實敎卿
あらし山入あひの鐘にれをそへてけふもくれぬと鹿そ鳴なる
題しらす　院御製
鹿のねもとをさとをのゝ萩か花袖にうつしてかへるかり人
春日御歌
高圓ののへの秋はき咲ぬらしよなく鹿の聲そきこゆる
龜山殿千首歌に鹿　前中納言季雄卿

山鳥のおのへの秋のなかきよにつまをへたてゝ鹿そなくなる
おなし心をよませ給ふける　今上御製
忍はてや妻はこふらんよもすからもれにたてゝ鳴さをしかの聲
今上みこの宮と申侍し時よませられ侍し歌に鹿　左近中將光忠卿
秋ことにかはらぬ鹿のおなしれになれてや妻もつれなかる覽
秋の歌中に　藤原基夏
なしか鳴やたのの薄ほにいてゝまねけと妻はつれなかりけり
示證上人
さを鹿のなのか妻とふ聲にさへ秋のあはれのいかにそふらん
題しらす　二品法親王覺
色かはるをのゝあさちふ露ちりてかりかねさそふ秋の夕かせ
藤原行朝
秋の田のいなはをしなみ吹風に聲をほにあけてかりも鳴なり
按察使親房卿
こしの海やとをき浪ちを凌きても秋をわすれす雁はきにけり
龜山殿千首歌に初雁　法皇御製
白雲のみちゆきふりのことつては初かりかねにかくる玉つさ
前大納言爲世よませ侍し春日社卅首歌に
法印定爲
思ふこと秋くるかりの玉つさにかきつられてや人に見せまし
寢覺聞雁といふことをよみ侍ける　前中納言爲前卿
しられしな雲井のよそに行雁の聲はれさめのともにきくとも
秋歌の中に　右近大將實衡卿
いくつらと數こそみえれ秋きりのへたつる空をすくる雁かれ
龜山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかふまつりしとき關霧
權中納言公雄卿
せきの戸はあけてもくらし秋きりの猶立こむるあふさかの山
題しらす　左のおほいまうちきみ
明わたるたかねはかりはほのの見えてなをきりふかき秋の山本
權少僧都淨道
ふけはかつみれの朝きりはれそめて松のこすゑを見する秋風
平齋時
あまつ空雲に日かけはうつろひてとやまかくるゝ秋の夕きり
平維貞
はれてたになを山見えぬむさしのすゑたちこむる秋の夕霧
月歌中に　權中納言經定卿
山のはにむら雲まよふ夕くれは月よりさきに風そまたるゝ
百首歌たてまつりしとき　藤原行房朝臣
いとふへき心やそらにしくるらむ月よりさきに雲そはれぬる
月歌とてよめる　權少僧都澄世
むら雲はよそに殘りてあらし吹みねよりいつる月そさやけき
法印公惠
吹すてゝ雲ものこさぬ秋かせにゆふ山はれていつる月かけ
源國貧朝臣
雲もなき空をは何とはらふらむ月さしのほるみれの松かせ
二品法親王覺家五十首歌に山月　前大納言爲世
山かせのはらふもまたてうき雲のかゝるおのへをいつる月影
百首歌めされしとき　前關白おほきおほいまうちきみ
はれやらぬむらくもなからいてにけり秋風さそふ山のはの月
月をよませ給ふける　歌春宮御
やまのはの松よりほかはくまもなしはれたる空にいつる月影

百首歌たてまつりしとき　二品法親王覺

ふけゆけはこのは曇らていてにけりたかつの山の秋のよの月

深山月といへることを　入道親王尊

月かけのいてつるかたを尋ねはやこれより山の奥もありやと

平宗宣朝臣人々によませ侍し住吉社三十六首歌に月　平齋時

ふけゆかは雲やかゝらんよとともに月に吹そへみれの秋かせ

百首歌たてまつりし時　右兵衛督爲定朝臣

あまつ風いかに吹らむひさかたの雲のかよひち月そさやけき

亀山殿千首歌に月　前大納言爲世

さやかなる程もしられて秋のよはおいてみるにも月そ曇らぬ

月前雲を　万秋門院

すみのほる月にのこらすそらはれて心にかゝるむら雲もなし

深夜月といふ事を　左近中將道持朝臣

ふけゆけはあらしふかれと雲きえて心と月の影そさやけき

平英時

峯たかきふもとの里はほかよりもふけてや月の影をみるらん

八月十五夜によみ侍ける　長圓法師

雲もまた心とはれてこよひこそ名におふ月を空にみせけれ

題しらす　左衛門督公敏朝臣

ことはりにすきてくまなき光哉秋のもなかの山のはの月

嘉元百首歌たてまつりしとき月　權中納言公雄朝臣

雲のうへになれし昔のおもかけも忘れやすると月にとはゝや

おなし心を　法皇御製

秋ふかきみ山かくれの影みえてむかしわすれぬ雲の上の月

權中納言爲藤朝臣

みかさ山その名をかけて見し秋もはるかになりぬみれの月影

續現葉和歌集巻第五

秋歌下

百首歌たてまつりし時　前關白内のおほいまうちきみ

はしひめのまつよふけ行袖かけて月影さむしうちの河かせ

河月といへることゝろを　前中納言兼信卿

ときしらぬこほりと見えてすみわたる月のかつらの秋の川浪

題しらす　左近中將公宗朝臣

みるまゝに雲もかゝらす久かたの月のかつらをはらふ秋かせ

前大納言爲世すゝめ侍し住吉社歌合に江月　前大僧正良信

くもりなき月はいくよかすみの江のまつ吹かせに光そふらむ

題しらす　了雲法師

ふけゆけは浪の音さへ住のえの松のあらしに月をみるかな

よみ人しらす

雲はらふまのゝいり江の秋風ににほてりまさる浪の上の月

二品法親王覺

もしほやくとまやのゝきの夜はの月くもるけふりを拂ふ浦風

百首歌たてまつりしとき　右兵衛督爲定朝臣

秋のよはなたの鹽やきいとまあれや煙もみえすはるゝ月かな

嘉元百首歌たてまつりし時　万秋門院

はるかなるおきつ鹽瀬の秋の月かけをうつしてよする浦なみ

百首歌たてまつりしとき　昭訓門院春日

うら風にふけゆくかけをしたひても月をはとめぬすまの關守
關月をよみ侍ける　津守國道
心あらはすまの關守うちもねしよひ〳〵ことの秋の月かけ
二品法親王覺家五十首歌中におなし心を　よみ人しらす
かたしきの袖もよさむの月かけにねもせてあかすすまの關守
みこの宮と申ける時九月十三夜に月前松風といふ事を
をのこともつかふまつりしついてに　今上御製
いとゝなをあきにはあへぬ心かな月もゐよはのにはの松風
龜山殿にて人々題をさくりて千首歌つかふまつりしつ
いてに　法皇御製
空にすむ物ならなくにわか心月みるたひにあくかれて行
前大納言爲世よませ侍し春日社卅首歌中に　權中納言爲藤卿
なへて世をてらすとならは秋のつき人の心のくまものこすな
月の歌の中に　前内のおほいまうちきみ
あきらけき御代の秋とや月もまたくもらぬ影を空にみすらん
元應元年八月のころ月のあかゝりける夜内へたてまつ
らせ給ける　春宮御歌
へたてなき雲ゐの影やかよふらんこの里まてもすめる月かな
御返し　今上御製
かよひける心もやかてへたてなき雲井の月の影そとをしれ
題しらす　宰相典侍
照すへき行すゑしるしかすか山くもらぬ月のかけとみるにも
百首歌たてまつりし時　參議實任卿
いにしへのますみの鏡代々かけて神ちのやまにてらす月かけ
題しらす　源宗氏
松にふくあらしの音をきゝわかて時雨にはるゝ月かとそみる
法親王覺
くもはらふ尾上のまつの秋かせにしくれていつる山のはの月
前中納言定資卿家に詩歌合し侍けるに山居月夜といへる
ことを　法印隆淵
嵐ふくたかねのいほは空はれてちさとの月をふもとにそみる
秋の歌中に　法印長舜
吹ほとはくまなきそらも秋風のよはれは月にかゝるむらくも
法親王承家に人々題をさくりて歌よみけるときに月前
風を　法眼兼譽
すみのほる月の跡行雲をさへなをのこさしと秋風そふく
嘉元百首歌たてまつりしとき月　前大納言俊光卿
心ありて月よりさきにゆく雲をなをふきをくるよはの秋風
おなし心を　法親王恵
うちはらふ露より袖になれそめて山ちともなふ秋のよの月
平時香
をのつから木かけもあらし山のはもとをきの原の秋のよの月
百首歌たてまつりし時　二品法親王覺
夜もすからいく野の露をわけすきぬとふへき宿を月に忘れて
題しらす　法眼行超
いまもなを野中の水にやとりけり木の心を月やしるらん
中臣祐臣
秋のよは我よりほかもとふ日のゝ野守やいてゝ月をみるらん
百首歌たてまつりし時　前中納言定資卿

春日野やくもらぬ月のかけなれはおとろの道の跡もまとはす

藤原泰宗

みるまゝに慰みはせてうき身には月に思ひのかすそひける

弘安元年百首歌たてまつりける時　權中納言公雄卿

秋ことに月を哀とみてもまたくもらは老の身をやなけかむ

月歌の中に　よみ人しらす

月になれむかしの影や殘るらむなかむれはまつぬるゝ袖かな

藤原長義

月たにも老のたもとにやとらすはさのみ昔の秋はしのはし

平宣時朝臣

しのへとも昔は又もめくりこてみしよの月にねこそなかるれ

すみうかれて年ひさしくなり侍山さとに立かへりすみ侍し秋のころ月を見て　岩藏姫君

我ならてまたしのふへき人そなきみしよの秋のふるさとの月

題しらす　大江貞重

いく秋か光をそへてをく露のたまきの宮に月もすむらん

百首歌たてまつりしとき　權大納言定房卿

よもすから伏見の里のかりいほにたのもの月の影そふけぬる

龜山殿千首歌に月　彈正尹忠親王

わたの原雲もかゝらていつるより入まてすめる浪の上の月

題しらす　藤原高兼

わたのはら浪のちさとにこく舟や八十嶋かけて月をみるらん

元亨元年龜山殿五首歌講せられ侍しとき川曉月を　前右衛門督教定卿

大井河ゐせきの水ははやくともしはしはよとめ有明の月

龜山殿にて欲入月といふ事をつかうまつりける　惟宗光吉

ふけぬれはいとゝなかむる程もなし軒はにちかき山のはの月

正應元年九月十三夜白河殿十首歌講せられしとき曉月透松といふことを　前大納言爲世

西になるかけにこのまはあらはれて松の葉みゆる有明の月

題しらす　祝部行親

せきの戸の明かた急くとりのねになを月のころあふさかの山

藤原爲明朝臣

ねをつくす思ひもさそなきりきりすたれも涙によそにやは聞

藤原基任

我もまたねこそなかるれきりきりす涙露けき秋のねさめに

權僧正實意

くれぬまはありともしらぬ草かけによるあらはるゝ虫の聲哉

嘉元百首歌たてまつりしとき虫　前關白おほきおほいまうちきみ

たか秋の露のちきりをたのむらんふけ行まてとまつ虫のこゑ

百首歌たてまつりしとき　權中納言爲藤卿

夜をさむみかれ行をのゝ草かけによはりもはてぬむしの聲哉

題しらす　前大納言爲世

きけははや裏枯にけりあさちはら虫のねまても霜やをくらん

左のおほいまうちきみ

秋のいろはむすひもとめす夕霜にいとゝかれ行庭のあさちふ

嘉元百首歌に擣衣　万秋門院

よそにきく砧のをとやうちたえてぬるともしらぬ友となる覽

おなしこゝろを　内親王

一すちに月みむとおもふこよひたに衣うつらん人さへそうき

みこの宮と申侍し時九月十三夜に月前擣衣といふこと
をよませ給ふける　今上御製
なのつから月にまとろむ里人はおとろくまてとうつ衣かな
前大納言經繼卿
月見てそあはれとはきく秋かせの身にしむはかり衣うつこゑ
題しらす　紀俊文
夜もすからなをまとろまてから衣うつ人はかり月やみるらん
あれてはや宿あらはなる月かけに猶をとたてゝうつ衣かな
信專法師
わかことくあくかれはせていたつらに月みぬ人や衣うつらん
賀茂基久
あかしかた月やゝ寒に成ぬらんすまのうら人衣うつらし
前大僧正道昭
夜さむなるねさめにきけは有明の月もいてぬと衣うつなり
入道二品親王性家五十首歌に　前大僧正禪助
なかきよのねさめの涙うちそへてきぬたの音に袖もかはかす
擣衣をよめる　祝部行氏宿禰
をのつからわかうちたゆむ時にこそよその砧のおとは聞ゆれ
前齋宮節折
かすかなる音はとをちの里のなもとはぬにしるくうつ衣哉
藤原範行
今ははや衣うつ也秋風のをとにつけてやよさむなるらん
たえ〳〵に衣うつなり秋かせも里をわきてやよさむ成らん
聖遠法師
さ夜ころも打をと寒し秋かせのふけ行袖に霜やをくらん

衣うつをとなかりせは里人のねぬよの程をいかてしらまし　平政雄
法印房觀
誰里もおなしよさむの秋かせにねられぬものと衣うつらん
平齋時
浦波にぬれてしほくむ里のあまのいかにほすまか衣うつらん
平貞俊
難波人こやの秋かせよやさむきあしの葉かくれ衣うつなり
法眼行濟
入道二品親王性家に菊をうへさせられ侍けるに花にそ
へてたてまつり侍りける
うつしうへは千代まてにほへ菊の花君は老せぬ秋をかされて
百首歌たてまつりしとき　權大納言定房卿
穐かせの吹上の波のたよりにもちろといふことは白菊の花
今上御製
三首歌講せられしついてに庭菊をよませたまふける
もゝしきやわかこゝのへの秋のきく心のまゝに折てかさゝん
前中納言有忠卿
龜山殿千首歌に菊
ひともとの菊もさかへておほさはの流をそへる君か万代
おなし心を　平宣時朝臣
咲そむるころより菊のうつろひはまかきの霜の色はまかはし
津守棟國宿禰
初紅葉といふ事をよみ侍りける
山のはのしくれぬさきの薄紅葉こゝろと色やまつかはるらん
百首歌たてまつりし時
前關白おほきおほいまうちきみ
あきといへは梢の色もつくは山はやましけ山しくれふるらし
紅葉をよめる　權僧正道意

むら雲のあともとまらぬ高根にも時雨けりとはみゆる紅葉は
狛　秀房
時雨つゝ色にやいまはいつみ川はゝその森の秋のもみちは
能譽法師
しくろともいはての山の下もみちそめてそ秋の色はみえける
百首歌たてまつりし時　前關白内のおほいまうちきみ
露しものいかに染てかしのふ山きゝのこの葉の色にいつらん
題しらす　平　維貞
しからきのと山はましていかならんよその梢ももみちろす頃
權律師淨弁
ときはなろ松をもそめは村時雨ちらぬもみちの色はみてまし
宗嚴法師
たつた山いろつきのころ下葉こそもらぬ時雨の程はみえけれ
百首歌たてまつりし時　前中納言資前卿
けふまた一しほそめつゆふ時雨ふろの山への秋のもみちは
紅葉をよめろ　遊義門院兵衛
時雨するやしほの岡のもみちはやほかよりふかき色はみゆ覽
平　時英
下もみち露より染し秋の色をちしほになれとふろしくれ哉
龜山殿千首歌におなし心を　太宰帥邦親王
いつのまにちしほ染けん昨日より時雨とみえし峯のもみちは
法皇御製
春秋のにしき也けりあらし山おなし櫻の峯のもみちは
藤原爲親朝臣
みわたせは木々の紅葉のから錦たつたの山はなをしくれつゝ

題しらす　津守國夏
から錦しくれの雨のたてぬきにおりかけてほす秋のもみちは
大納言雅房卿女
しくれつろ雲のあとより夕つくひうつろひそむろみねの紅葉
藤原經清朝臣
照月の光にあたろもみちはゝよろも錦のいろはみえけり
龜山殿にて暮秋廿首歌よみはへりけろに　前大納言經繼卿
いかにせむ月をめてつろ秋たにもくれなん後の老のこゝろは
おなし心を　春宮御歌
わきて又いかにしたはむ有明の月と秋とのおなしなこりを
永仁元年龜山殿十首歌に河上暮秋　二品法親王[illegible]
いにしへの面かけとめて大ゐ川ふろきなかれに秋そくれ行
題しらす　左近中將家房卿
みろまゝに野へのあさちもうら枯て殘ろ日數の秋そすくなき
西花門院大藏卿
うつろはぬかた枝に秋はのこりけり霜のまかきの白菊の花
今上みこの宮と申し時九月盡日暮秋霜といふことを　前大納言爲世
うらかろゝ野への尾花の袖にしもむすひすてゝもくろゝ秋哉
九月盡時雨といふことを　源清兼朝臣
けふのみとおもふ心もかきくれてしくろゝ空に秋そとまらぬ
前大納言經繼卿
あすよりは秋もいなはの山風にしくれむ空をおもひこそやれ

續現葉和歌集卷第六

冬歌

百首歌たてまつりしとき　前大納言爲世

風にちるこのはも今朝は神な月ともにしくれて冬はきにけり

權中納言公雄卿

なみたさへ昨日の秋のわかれちに時雨そへてそ冬はきにける

昭訓門院春日

故郷は人めもかろゝみちしはにたれにとひてか冬のきぬらん

內裏に三首歌講せられ侍しとき時雨を　左近中將公泰卿

冬きてはいく日もあらぬ槇のやにはや音たつるむらしくれ哉

嘉元百首歌たてまつりしときおなし心を　權中納言爲藤卿

ふきよはる嵐のひまのうき雲やしはしやすらふ時雨なるらん

題しらす　平宣時朝臣

うき物とねさめをいかてしらせまし心のまゝにふる時雨かな

法印成譽

ねさめする老の淚にふりそへてまつ袖ぬらすむらしくれかな

權少僧都淨道

ときわかぬ老のねさめを今さらにおとろかしてもふる時雨哉

昭慶門院一條

晴くもる時雨に袖は任せてんさらはなか〱ほすまありやと

藤原經淸朝臣

むら雲のたゝよふ風もはけしくてあきも過ぬと降しくれかな

藤原冬隆朝臣

秋の色をいまは殘さて久かたの月もくもれとふるしくれかな

權少僧都澄守

いたつらにそめぬ梢やしくるらんさきたつ山にかゝる村雲

大江貞重

山風のふくにつけてやはれぬらんしくれの跡に雲ものこらす

平　齋時

しくれける山のあなたやはれぬらん嵐にこゆる峯のうき雲

百首歌たてまつりしとき　前大納言實教卿

きゝまかふ時雨やよそに過ぬらんまつには風の音そすくなき

冬歌中に　藤原基祐

ふくるよの松のあらしの音さえて雲もかゝらぬ月そしくるゝ

祝部成久宿禰

うき雲のかゝれるほとはいてやらて時雨をすくす山のはの月

藤原淸隆

ありあけの空にしくれはすきぬれと月にかゝりてのこる浮雲

百首歌たてまつりし時　入道前おほきおほいまうちきみ

山風のふくにまかせてさためなく木の葉さへふる神無月かな

落葉を　よみ人しらす

さらぬたにもろきこのはを山かせの心のまゝにさそふ比かな

法印貞宋

この葉こそなをふりまされ神無月時雨はかりに限らさりけり

津守國助宿禰女

ちりつもる庭のこの葉の色まても猶そめかほにふる時雨かな

龜山殿にて講せられ侍し歌中に雨後落葉といふことを　左大辨公明卿

むら時雨をとをのこして過ぬなりこのは吹まくみねの嵐に

冬の歌中に　中宮

ふきはらふと山の嵐をとたてゝまさきの葛いまやちるらむ
今上御製
夕くれは入逢のかねの音をさへこの葉にそへてさそふ山かせ
龜山殿にて講せられ侍し歌中に松下落葉を　前大納言經繼卿
枝かはすおなし尾上のこからしに松はつれなくちる紅葉かな
左近中將光忠卿
吹かせやよそのこすゑをさそふらん松の下てる庭のもみち葉
二品法親王覺家五十首歌に河落葉　藤原基任
流れゆく木々のこのはやしかま河海にいてゝは舟と見ゆらん
法印靜澄
たつれはやもみちなかるゝ山川の此みなかみに秋やのこると
よみ人しらす
ふく風の枝にとゝめぬもみち葉をおちてもさそふ山川の水
題しらす　源宗氏
さそひゆく山のあらしのふかぬまはこの下はかりちる紅葉哉
内親王禖
さそふ風あらはのみやは思ひけん吹にまかせてちるこの葉哉
落葉を　源清兼朝臣
梢よりふくかた見えて空にちるもみちそ風の色となりける
權僧正慈仙
梢をはふきすきて行山かせのあとにもしはしちるもみちかな
霜埋落葉といふことを　式部卿久親王
庭のおもに秋のかたみを殘しつるこの葉もみえすけさの朝霜
題しらす　春宮御歌
いかなれは同しこのはも庭の面にちりては秋の殘らさるらん

龜山殿七百首に杜寒草　權中納言公雄卿
この葉ちるいはせのもりはいつのまに下草かけて霜のをく覽
殘菊霜といふことをよませ給ひける　法皇御製
秋すきてうつろふ色を見せしとや今さら霜のをける白きく
龜山殿にて庭殘菊といふ事をよませられ侍しついてに
庭のおもにおいの友なるしらきくは六十の霜や猶かさぬらむ
元亨元年龜山殿にて山家冬朝といふことを　權中納言公敏卿
あさな〱かはらぬ色をそへてけり山ちのしもにのこる白菊
題しらす　權少僧都能信
秋をなとさやけきかけと思ひけんしもの上なるあさちふの月
中原師梁
しもむすふかれのゝ草にやとるよは光さむけき冬の月かな
權中納言實忠卿
人めさへかれゆく宿のあさちふに秋見し月は影そかはらぬ
信專法師
さえまさる袖のあらしをかたしきて霜よのとこに月をみる哉
二品法親王覺
なかきよの霜のまくらは夢たえてあらしの音にこほる月かけ
冬歌の中に　二品法親王慈
さゆるよの霜をかされてたもとにもやとせはこほる月の影哉
按察使親房卿
夜とともに影見し水はこほれともむすひもとめす月そ流るゝ
中宮右衞門佐
さゆるよはやとれる月の光さへひとつにこほる冬の池水
左衞門督公敏卿

かれはつる草葉の霜の白妙にやとるもさむき月の影哉
頓阿法師
なつみ川しもをはらふ芦鴨のうはけにこほる月のかけかな
權僧正雲雅
百首歌たてまつりしとき
すみよしのきしの松風よやさむきゆきあひのまに氷る月かけ
前大納言俊光卿女
題しらす
いつのまにちくさか上にみし露も枯のゝ霜にむすひかふらん
藤原爲明朝臣
深草ののへのあさちふうらかれて鶉のとこも霜やをくらん
慶運法師
故郷のまかきはなをそうつもろゝかれてもしけき庭の草はに
平貞宗
江寒芦
なにはえや夕霜さむく風さえてかれはさひしき芦のむらたち
前右衞門督教定卿
なには江や氷とちたる亂れ芦の葉すゑも霜にむすほゝれつゝ
毛詩に蒹葭蒼々白露爲霜といふ事を
前おほきおほいまうちきみ
なにはかたあしの葉しけき白露のをきなからこそ霜と成ぬれ
一條の内のまうちきみ家歌合に氷閉細流といふことを
源邦長朝臣
おく山のいはかきし水ふゆさむみあかすむすふは氷なりけり
冬歌中に
權僧正桓守
さえわたるよはの嵐にこほりゐていはれにとまる谷川の水
二品法親王慈
さえまさるひら山おろし吹からに氷にけりなしかのうらなみ
祝部行氏宿禰

わかの浦やあしまの千鳥いかにして永き世迄の跡をとめまし
よみ人しらす
浦千鳥を
いつ方に遠さかるらむさよ千鳥あとをかたみの浦にのこして
右衞門督師賢卿
風さゆるよはのみなとの浦千鳥あとをは霜にのこしてそたつ
前大納言爲世すゝめ侍し日吉社歌合に同し心を
前大僧正良信
にほのうみや浦風さえてよる浪のたちゐも寒くちとり鳴なり
藤原秀行
題しらす
清見潟ちとり鳴夜の月かけにれられんものか波のせきもり
藤原雅朝朝臣
影こほる月も清見か關の戸にあかつきかけてなくちとりかな
みちしらぬわかの浦はの友ちとり跡をつけても猶やまよはん
平守時朝臣
古のあとみるまてとわかの浦にかひなきねをも鳴ちとり哉
前大納言實教卿
二品法親王覺家五十首に千鳥
むれてゐるひかたほとなくみつしほに跡をもつけす立千鳥哉
右兵衞督爲定朝臣
おなし心を
なにはかたおきつしほ風さゆる夜も氷らぬ涙になく千鳥かな
藤原爲冬
しほ風になれもたちきてすみのえや岸うつ浪に千鳥鳴なり
平宣時朝臣
題しらす
遙なるおきのひかたのさよ千鳥みちくるしほに聲そちかつく
前參議雅孝卿
しほやみつおきつひかたのさよ千鳥我すむかたに聲そ近つく
前おほきおほいまうちきみ
百首歌奉りし時

風あらきおきつの浪やたかからし磯山ちかくなくちとりかな
彈正尹忠親王
小夜ちとり浪にこそなけ鹽の山さしてのいそも波やこすらむ
冬かれの野はらにのこる玉笹は霰ふりしく名にこそ有けれ
題しらす　大江經親
冬かれののちのしのはら風さむみしのにみたれて霰ふるなり
前大僧正道昭雪ふらはとふへきよし申つかはして侍し
返事に　源邦長朝臣
ふらはまつ我ふみわけて跡つけんまつらんやとの庭のしら雪
雪をよめる　丹波長守
とふ人もまたてやきえむふりそむる雪もあさちの庭の通ひ路
藤原重綱
やたのゝのあさちをさむみ雪ちりてあらちの峯にかゝる浮雲
古寺初雪といふことを　達智門院
いかはかり埋もれはてんたかのやまけさたに深きみれの白雪
題しらす　右兵衛督爲定朝臣
いとゝまた跡やたえなんいはねふみかさなる山の峯のしら雪
藤原賴氏
たつねきて人もとまらし夕くれのまかきは山と雪つもるとも
雪の歌中に　新兵衛督
とはるへき人めもまたぬ柴の戸はいくへもうつめ庭のしら雪
源兼胤朝臣
いくへとも庭には見えぬ白雪のつもれる程を軒はにそしる
式部卿久親王家にて題をさくりて歌よませ侍けるに檜
雪　平齊時
はつせ山ひはらの嵐さえくれて入あひのかねにふれる白雪

題しらす　藤原資廣
はつせやま尾上の雪はふかけれとうつもれもせぬかねの音哉
前中納言資香卿
をしなへてあなしのひはら白妙にまきもく山にみ雪ふるらし
右のおほいまうちきみ
峯のまつふもとのましはをしなへて野にも山にも積るしら雪
津守國顯女
うつもるゝこすゑを見てそおもひやる遠山まつの雪の下おれ
百首歌たてまつりし時　權大納言定房卿
みねたかき松の梢もうつもれて雪よりいつる月そさやけき
寄嵐雪といへる心をよませ給ふける　法皇御製
吹すくるあらしの末はみとりにてまつあらはるゝ峯のしら雪
海邊雪　中務卿恒親王家按察
ほかよりもつもりやすらん浦かせの吹上のはまにふれる白雪
題しらす　鴨祐夏
鹽木とるさとのかよひち跡もなし雪にやうらの煙たゆらん
百首歌たてまつりし時　入道前おほきおほいまうちきみ
おきつかせ吹こすいその岩ね松なみこそかくれ雪はたまらす
前大納言爲世
梢をはふりかくせともときは木のしけき山ちは雪もたまらす（つもらす）
雪のうたに　權少僧都隆雅
うつもるゝ梢をはらふ山風にふらぬまもふるまつのしらゆき
法親王承
やすらはゝ猶そつもらんふる雪にしゐてやこえむ冬の山みち
入道二品親王性家五十首歌に　前大僧正禪助

かよひこしあとゝも見えす冬ふかき山のかけちに積るしら雪

百首歌たてまつりし時　前關白おほきおほいまうちきみ

つかふとてまつふみわけし庭の雪の我跡をたにみぬそ淋しき

雪の歌中に

ふりにける跡をしよゝに尋ぬれはみちこそたえれ關の白雪

權中納言爲藤卿よませ侍し千首歌中におなし心を　津守國道

ふりにける跡をはいまも殘すなり道ある御世を雪やしるらん

題しらす　よみ人しらす

雪のうちに我やとはかり跡たえて道ある代にそ猶まよひける

春宮御歌

みるまゝに宿の垣ねもうつもれて雪こそけさのへたて成けれ

嘉元二年内裏十首歌合に山家雪　昭慶門院一條

かけくらきのきはの松の下折につもるも見えぬにはのしら雪

冬の歌中に　達智門院内侍

通ひける心いつくをわけつらんみかきの雪はあともみえぬに

法印圓伊

おもひやるわか心たにあとあらは野山の雪もみちや見えまし

前大納言爲世よませ侍し春日社三十首歌中に　權中納言公雄卿

日かすふる山ちの雪の深けれは人のあとをそしるへにはゆく

題しらす　前齋宮節折

我あとも人のしるへとなりにけりまつわけそむるのへの白雪

龜山殿千首歌に雪　前大納言實教卿

我よりもさきたつ人やまよふらん跡さたまらぬのへのしら雪

おなし心をよめる　女藏人万代

跡つけぬほとこそ人もまたれけれとはれはつらき庭の白雪

覺懷法師

わひぬれは跡をとめしとおもふ世に人をもまたしにはの白雪

兼好法師

ふる雪に道こそなけれよしの山たれふみわけておもひ入けむ

前關白内のおほいまうちきみ家新少將

ふみわけて人こそとはれ山ふかみまつに音する雪のしたおれ

平維貞

山里の人めおもはぬ宿ならは跡なき庭の雪は見てまし

閑居雪を　源重泰

をのつから問人あらは降ゆきのきえぬさきにも跡はみてまし

遠炭竈といふことを　法印禪圓

さゆる日は雪けの雲に立そひて煙もまさるをのゝすみかま

安部泰光

埋もれてけふりはかりそ立のほる雪よりおくのをのゝ炭かま

龜山殿七百首歌に同心を　前大納言經繼卿

とはゝやなをのゝ炭かまをのつから通ひし道は雪ふかくとも

冬歌の中に　内親王愉

もとすゑにうたふ神樂の聲すみてにはひの影もふくるよは哉

百首歌たてまつりし時　左のおほいまうちきみ

曉のほしの光もほのかにてなこりをしたふあさくらのこゑ

歳暮雪を　前僧正慈勝

白雪のふるにつけても思ふかな身につもるへき年のくれとは

藤原盛徳

つもり行月日はかりとおもひしに雪さへふかきとしの暮かな

題しらす　藤原基文
いそかれし心やさらにかはるらん老てかなしき年のくれかな

二品法親王覺家五十首歌に歳暮　源隆泰
いたつらにまたくれはつる年浪の立もかへらぬ老そかなしき

老後歳暮を　法印禪隆
おしめともむそちにちかき老の涙立もかへらてとしそくれ行

前大僧正範憲
はやせ川なかるゝとしをせきかれて今はた老の涙そ數そふ

歳暮の心を　權少僧都能信
はやせかはくたす筏のいかにしてしはしも年の暮をとゝめむ

百首歌奉りし時　參議實任卿
さとわかすいそくと見えてもろ人の行かふ道に年そくれぬる

嘉元百首歌めされし時歳暮　左のおほいまうちきみ
君か代の限りなけれはいくかへり百千の年をおくりむかへむ

續現葉和歌集巻第七

羇旅歌

嘉元百首歌奉りし時旅　前關白おほきおほいまうちきみ
峯の雲ふもとのきりの立ゐにも都わすれぬたひのそらかな

羇中關を　今上御製
故郷をへたつる關のつらけれはいそかてこえむあふ坂のやま

龜山殿千首歌に旅　前中納言有忠卿
旅人やよるもこゆらむあふ坂の關の戸さゝぬ御代のしるしに

おなし心を　右衛門督師賢卿
あけぬとて關路こえ行たひ人の袖吹おくるすまのうらかせ

權大納言定房卿あつまへくたり侍しにいそきのほり侍るとておきつの宿を過て清見か關をこえけるにかの宿の遊君たちかへり給へと申おくり侍けれはよみて遣しける　源重泰
いかにして立かへらまし清見かたこえてくやしき涙の關もり

返し　遊女
こえて行人をなにとか恨むへきとゝめぬ關の名こそおしけれ

題しらす　藤原資明朝臣
關の戸もはや明かたのとりのねにおとろかされていそく旅人

藤原秀長
なくこゑをきかてはこえす逢坂のゆふつけとりや關を守らむ

宗寛法師
あふさかの關をは鳥のねにこえてくるゝやととふなのゝ篠原

旅のやとりにて鳥の鳴をきゝて　惟宗忠景
都にて人のなこりにつらかりしゆふつけ鳥を旅ねにそきく

藤原景德あつまへくたり侍りし時かゝみの宿へつかはし侍りし　前大納言爲世
ことのはになけくとはみよかゝみ山したふ心に影はなくとも

旅行嵐を　平政雄
吹おくるあらしはさきに過ぬれとまたこえやらぬさやの中山

菊河宿をたちて佐夜中山をこえ侍けるに朝霧ふかく侍けれは　平齋時
あけぬとてふもとのさとは出ぬれとまた霧ふかきさやの中山

あつまよりかへりのほりける時うつの山にておもひつゝけ侍ける　前大僧正禪助
夢とのみ思ひしものをうつの山うつゝにこゆる旅もありけり

題しらす　疑然法師
足柄の山こえくれてやとゝへはかせそこたふる竹のしたみち
法印公惠
みちありてこゆるもやすきこの比はせきともいはし足柄の山
藤原高兼
おなしくは清見かせきの月をみてあすこそゆかめうき嶋か原
彈正尹忠親王家歌合に關路月を　橘以通
關路をはよふかき月にあくかれてあけぬにこゆるみのゝ中山
題しらす　鴨祐夏
有明の月をあけぬるしろへにて鳥のねきかぬ山ちをそ行
よみ人しらす
たひ衣すそのゝはらはあけはてゝまたみちくらき山の下かけ
平氏村
けさよりもあふ人まれになり行は深き山ちのすゑやちかつく
法親王惠
わけきつる麓をよそにへたてゝも猶雲ふかき山のおくかな
法橋長榮
こえなはと見えつる峯は過ぬれと末もかはらぬ山ちなりけり
大江貞重
はこれ山そらにやつゝくわけこゆる袖にそかゝる峯のしら雲
平春時
山こえて行さきとをきたひ人の跡たちかくす峯のしら雪
前大納言爲世よませ侍し春日社三十首歌中に　權大僧都公順
けふこそはよそになりぬれ葛城やこえしたかれの峯のしら雲
題しらす　高階成兼
いつくともみえぬ山ちに日は暮てとふへき方の宿もしられす
藤原範秀
わけきつる日かす重れて山のはもさすかにみゆる武藏のゝ原
權少僧都淨道
あすもなをはてやなからむ行くれてけふ分のこす武藏のゝ原
禪覺法師
たのめをくやとしなけれは旅の空くるゝを道のかきりにそ行
旅歌に　藤原行在
行くらすけふの宿りのしろへかなのはらのすゑの入あひの鐘
鴨祐光
入あひの鐘のひゝきも暮はてゝのはらのすゑにあふ人もなし
藤原泰宗
行くるゝのはらのみちをへたてつゝまた里とをく立けふり哉（末もはる〴〵となを）
春宮權大夫具親卿
夕くれは里のつゝきもかす〴〵によそより見えてたつ煙かな
旅行日暮といふことを　二品法親王慈
くれぬまとなを行さきそ急かるゝ里のしろへも遠きけふりに
旅の心をよませ給ひける　院御製
都おもふなみたの玉もとゝまらすゆふ露もろきのへの嵐に
今出川院近衛
行なれぬひなのあらのゝ露分てしほるゝ旅のころもへにける
法親王承
朝夕に露わけわふるたひ衣きつゝなれてもぬるゝ袖かな
藤原基世
のへの露うらはの涙にたひ衣ほさていくかをかさねきぬらん
題しらす　藤原宗秀

あつまのゝ露分衣こよひさへほさてや草にまくらむすはむ
藤原秀仕

露ふかきのはらの草のかり枕いくよたひれの夢をむすはん
法印守雅

行くれてやととふのへのくさ枕我よりさきにむすふ露かな
平貞俊

むさしのや里となけれは鳥のねを草の枕にきくよはもなし
玄暹法師

むさしのやいくよの夢のかはるらむむすふはおなし草の枕に
前大納言實躬卿

あらし吹山のすそのゝ草枕あたなる夢はむすふともなし
藤原高基

草枕むすふともなき夏のよは夢もみしかきゐなのさゝはら
平時國

露むすふ一よのゝへのさゝまくらふしうきものは旅ねなり鳧

百首歌奉りしとき　入道前のおほきおほいまうちきみ

月もまた露のやとりやたつぬらんかりねの草のおなし枕に

旅歌中に　平高資

よるもなを戸さゝてそ行宿もなきのはらの月を友とたのみて
法印隆賢

へたて行都をおもふたひねには夢路さえこそとをさかりけれ
藤原懷世朝臣

かりそめのやとゝ思へはいつこにも旅は心そとまらさりける
昭空上人

かきりそとおもはて後をまちしたに別しみちは悲しかりしを

都のほかに侍ける頃法印定爲もとへ申つかはしける
法眼行濟

老らくの身には後とも頼まれはひなの住居そありしよりうき

返し　法印定爲

老らくは我もたのみのあらはこそ又かへりこむ後もまたれめ

題しらす　法印靜伊

たかしまやしほつの浦に舟とめてひら山風のひまをまつかな
行觀法師

いさり火の影は浪まにかつ見えてはや暮かゝる浦のをちかた

海路日暮といふことを　前おほきおほいまうちきみ

蜑小舟日もゆふくれになるみかた急きやすらん歸るしほちを
藤原基行

おきとをく入日のかけは傾きてくるゝうらちをいそくたひ人

題しらす　津守國道

たひ人のふれをへたつるともれにもかはすは浪の枕なりけり
鴨祐夏

浦風のあらきはまへのかち枕波のうちたへいやはれらるゝ
法親王覺

よる浪もあらきいそへの松かれにむすふ枕の夢そみしかき
是法法師

舟とむる入江のあしの一夜たに夢ちにさはる浪の音かな
女三宮治部卿

たひれするとこの浦風さむきよは都にかよふ夢そすくなき
藤原基教

たひころもたちわかれても故郷をへたてぬものは心なりけり

二品法親王覺家五十首歌に旅泊　藤原基任

かち枕いかにさためて夢もみむうきれになるゝ人にとはゝや

旅泊夢といふことを　　二品法親王覺

かちまくらならはぬ床のしき涙に浮たる夢はむすふともなし

續現葉和歌集卷第八

哀傷歌

龜山殿千首歌に無常　　前大納言實教卿

一すちにうしといひてもいとはれすわか心たに定めなき世は

寄夢無常をよみ侍ける　　達智門院兵衛督

よのうさもいか計りかは歎かれむはかなき夢と思ひなさすは

法親王承

はかなしやさめてもおなし夢の世をしはしうつゝと賴む心は

題しらす　　源邦賢

とゝまらぬ昔のともは夢のよにいつまて我もすみそめの袖

法印定俊

はかなしやつゐにゆくへき道芝にしはしかゝれる露の命は

平利致

さためなきよそと思へといきて今あるもたのまぬ命なりけり

榮順法師

さためなき世のはかなさをみしよりそそむく心の初なりける

はかなきことおほくきこえけるころ身のうへの事なと
おもひつゝけて　　法印長舜

見し人のなきかうちには數ふともあらましかはと誰か忍はむ

後一條入道關白かくれ侍ての比雨のふりける日前大納
言雅言卿雨とのみふるは涙とおもひしに空さへくるゝ昨
日けふ哉と申て侍ける返事に　　源邦長朝臣

かきくらす涙はかりにほしわひてふりける雨もわかぬ袖哉

從二位公顯卿身まかりて後程へて權律師實性もとへ申つ
かはし侍ける　　入道前おほきおほいまうちきみ

なけき餘りまよふ心にかきくれてとはて涙の日數ふりぬる

返し　　權律師實性

日數ふるのちも今さらせきかねてつとふにつらき袖の涙は

藤原爲道朝臣身まかりての比人のとふらひて侍しかは　　前大納言爲世

悲しさをなけく涙にうかひきてなきおもかけそある心ちする

平時範身まかりて侍けるをとかくなして又の日かの所
へまかりてよみける　　藤原敏行

なき人の煙となりし跡とへは夕の雲そおもかけにたつ

堀川の內のおほいまうちきみ身まかり侍にけるをいは
くらにおさめ侍て又のとしかの山のわらひをとりてつ
かはしける　　兼好法師

早蕨のもゆる山へをきてみれはきえしけふりの跡そ悲しき

返し　　延政門院一條

見るまゝに涙の雨そふりまさる消しけふりの跡のさわらひ

大僧正道順身まかりにけるはる月をみてよみ侍ける　　道世法師

このはるははれぬ涙にかきくれて霞むとたにも見えぬ月かな

題しらす　　平政雄

さためなきならひをしらは見る人を花はあたにや猶思ふらむ

從三位光成卿身まかりて又のとしの春かの家の花を見て　　理達上人

みるまゝに昔の春のこひしきは花におもひの色やそふらん

人のおもひに侍ける比四十九日にあたりける日權中納言公雄卿もとへむすひたる橘のえたと諷誦文のはしに歌をかきてをくり侍ける

入道前おほきおほいまうちきみ

古のにほひをのこす花ならは玉のありかのしるへとをなれ

返し

權中納言公雄卿

今そしるありしかたみの花そともをくるゝ袖にとまる匂ひを

爲道朝臣五月五日身まかりてひとめくりに人々寄菖蒲懷舊といふことをよみ侍けるに

前大納言實敎卿

おもひきやこそのさつきの菖蒲草連れし袖にれをかけんとは

おなしおもひにあまたのとしをへたてゝ後五月五日よみ侍ける

藤原爲道朝臣女

昔おもふなみたも袖にふりにけりとゝせあまりの五月雨の比

文永十年の春後嵯峨院の御前僧にて侍けるに嘉元二年の秋又龜山院かくれさせ給ふける比よみ侍ける

前大僧正禪助

おもひいつやみしよのさかの春かすみ今年の秋の袖の露にも

從一位顯子身まかりにける時をくりにまかりてかへり侍るとておもひつゝけける

權僧正覺圓

なき人のとゝまるこけの下よりもかへるたもとは猶や露けき

父廣茂身まかりて後よめる

大江廣房

をくりをきし野原の露をその儘にほさてくちぬるふち衣かな

秋の比うちつゝきはかなきことを見侍てよめる

圓昭法師

なへてをく露にはあらぬ涙かな今年いかなる秋のきぬらむ

身まかり侍ける童のためにまたのとし佛事なといとなみ侍ける人につかはし侍ける

二品法親王慈

よそまても袖こそぬるれあたしのやきえにし露の秋の哀に

龜山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりけるついてに寄露無常といふ事をよませ給ふける

法皇御製

あたしのゝ露もちりては又そをく消てあひみぬ人そはかなき

なき人のためにすゝめ侍ける歌の中に懷舊を

安喜門院大貳

あたにのみきえにし露のゆかりとて昔をとふも涙なりけり

世の定なきことをおもひつゝけ侍にも身のうへ思ひしられてよめる

法眼兼譽

限りありてつゐに行へき道しはの露ときえては誰にとはれん

題しらす

丹波□長

かりの世に草の庵を結ひをきてあたなる露の身をやとさむ

壽成門院

露きえし草のゆかりを尋ぬれはむなしきのへに秋風そふく

後宇多院かくれさせ給ての八月十五夜の月くもりて侍けるに宰相典侍につかはしける

万秋門院

あふきみし月もかくるゝ秋なれはことはりしれと曇る空かな

御返し

宰相典侍

ひかりなきよはことはりの秋の月涙そへてや猶くもるらむ

寄月無常を

平氏村

月よなとあたしうき世の慰めにみるにもいとゝ袖のぬえ覧

贈從三位爲子身まかりての秋八月十五夜の月くもりて

侍けるによみてつかはしける　法眼行濟
おもはすよ人の心のやみにさへこよひの月のくもるへしとは
返し　賀茂定宣
かきくらすこよひのそらの月もけに人の心のやみをしりけり
月前思故人といふことを　昭空上人
もろともにみしは昔になりはてゝ涙はかりや月にのこらむ
春宮權大夫雅長卿身まかりにける秋月を見侍て申つかはしてける　爲道朝臣女
いつくにかみしおもかけの殘るらむ宿はむかしの秋のよの月
返し　春宮權大夫雅長卿女
秋のよの月もむかしの宿ならなと面かけののこらさるらん
贈從三位爲子のいみにこもり侍ける比月をみてよめる　頓阿法師
有明のつれなき月そやとりけるとまらぬかけを歎くたもとに
大納言冬基卿身まかりて第三年の秋月をみてよみ侍ける　前關白おほきおほいまうちきみ
めくりあふ三とせの秋はかはられと月見し友のなきそ悲しき
なき人の第三年のわさしに山里へまかり侍けるを哀にも月をみとせのかたみにてみ山の露にいかゝしほるると申て侍ける人の返事に　前大納言俊光卿女
おもへたゝ月をみとせのかたみにて山ちわけゆく袖の露けさ
贈從三位爲子のおなしわさしける日しくれのふり侍ければよめる　藤原懷世朝臣
うかりけるみとせの秋のけふそとは空もしりてや打しくる覽
龜山院御忌にこもり侍よしきゝて申つかはしける　法印定爲
うかりける此世のさかの秋のくれ露もしくれも身にやそふ覽
返し　權中納言爲藤卿
思ひやれ露もしくれもふりまさる此世のさかの秋のあはれは
母身まかりての後おもひつゝけ侍ける　法印玄守
ちりはてしはゝその森のこからしに賴むかけなくふる時雨哉
おなしおもひにて侍けるころ藤原景綱もとにつかはしける　前大僧正禪助
忘るなよはゝその森はかれぬともした葉に殘る露のゆかりを
民部卿爲藤卿身まかり侍しのち前大納言爲世につかはされける　春宮御歌
をくれゐるつるの心もいかはかりさきたつわかの恨みなる覽
御返し　前大納言爲世
おもへたゝわかの浦わにをくれゐておいたるつるの歎く心を
前大僧正守譽身まかりにける比人のとふらひ侍ければよめる　能譽法師
夢とのみなをも疑ふわかれちをうつゝに人のとふそかなしき
藤原基任すゝめ侍ける哥中に懷舊を　右兵衞督爲定朝臣
うきなから同し月日はめくりきぬなかきは人の別れなりけり
前大僧正俊信身まかりて後おもひつゝけ侍ける　前大僧正範兼
遠さかる日かすにつけて悲しきは又もかへらぬ別れなりけり
從三位爲信卿身まかりてのち從三位爲理卿もとよりかたみの色をぬきかふると申しをこせて侍ける返ことに　少將內侍

ぬきかふる袖の色にもかなしきは限りあるよの別れなりけり

神無月の比母の服ぬき侍とておもひつゝけ侍ける　藤原冬隆朝臣

神無月うかりし頃もめくりきてまたぬきかふる袖そしくるゝ

亀山院かくれさせ給にけるとき素服給りて侍けること
をきゝて申をくりける　法印定爲

わきてまつ君か袖をそおもひやるなへて野山も色かはるころ

返し　權中納言爲藤卿

墨染にかはるのみとやおもふらむ涙のいろもふかきたもとを

續現葉和歌集巻第九

神祇歌

嘉元百首歌たてまつりし時神祇を　入道前おほきおほいまうちきみ

天つ神くにつやしろと別れてもまことをうくる道はかはらし

百首哥奉りし時　權中納言公雄卿

ゆふかけて御世をそいのるさかきとる八十氏人のおなし心に

神祇哥中に　前大僧正禪助

いはし水たのむ心のそこすみてにこらぬ程は神そしるらん

權律師重源

いはし水その水上の末までもたのむこゝろはくみてしるらむ

前おほきおほいまうちきみ

いくちよも神にまかせていはし水淸きなかれそ限りしられぬ

題しらす　法印禪隆

みかさ山いつるあさ日の末とをく代々をてらして神そ守らむ

前大納言俊光卿

いとゝなを惠みをそまつ春日山かたへのふちの花をみるにも

百首哥奉りし時　前關白おほきおほいまうちきみ

みかさ山藤のすゑはのいかなれは北にさす枝の榮えそめけむ

前大納言爲世すゝめ侍りし春日社三十首哥に　權中納言公雄卿

朽はつるみかさの森のみしめなは神たにひかは末をたのまん

神祇哥とて　前關白おほきおほいまうちきみ家讃岐

忘るなよみかさのもりのみしめなはなかき世かけて賴む心を

若宮神主になりてよめる　中臣祐臣

かすか山おなし跡にといのりこしみちをは神も忘れさりけり

寄月神祇といふことを　達智門院

くもりなき君かやちよをてらすらし神ちの山にいつる月かけ

題しらす　藤原盛德

今宵こそをしほの山に雲はれて月も神代の影はみゆらめ

行賀法師

おほはらや神の惠みの年をへて千代のかけみる松そこたかき

百首哥奉りしとき　入道前おほきおほいまうちきみ

月かけも神代をかけてますかゝみみかきそへたる天のかく山

社頭月を　藤原泰宗

やはらくる神のちかひをあらはして光もきよし秋のよの月

度會朝棟神主

おもかけをなみにうつして宮河や神代の秋にかへる月かな

春日社に百日こもりて人々すゝめて五首哥よみ侍ける
に海邊月　前大僧正良信

住よしのうらはの月をみかさ山うつしてやみるいはもとの神

神祇心を　春宮御歌
住よしの神をそたのむしきしまのみちをいかてとおもふ心は
法皇御製
住よしの松のうれこす風の音はこれもややかてやまと言のは
前大納言爲世すゝめ侍し住吉社三首歌合に
前大僧正良信
あとたれし神代も久し我國のやまと言はのみちをまもりて
題しらす　慈寛法師
しるへあれは跡をそつくる住の江の神に祈りししき嶋のみち
能喜法師
住よしの神よあはれとみしめなはたゝ一すちにいのる心を
法印宋助
我たのむ神々ならは和歌のうらにまよふ浮身の道しるへせよ
藤原秀清
やはらくる光をそへてしきしまの道をそみかく玉津嶋ひめ
正三位秋氏卿
神もまた哀をかけよすみの江によるへもしらぬ涙のうたかた
津守國藤
君か代をいのるかたにはみしめなは神の心もさこそひくらめ
津守國夏
ちるときや榊のえたにかゝるらむ神のいかきの花の白ゆふ
龜山殿にて歌よみ侍しとき神祇を　前權僧正雲雅
すみよしのきしうつ涙にことゝへは千代と答ふるうらの松風
題しらす　藤原安清
かたそきの宮ゐふりぬる住吉のまつの嵐は神さひにけり
津守國道

祈るよはいく代もたえぬ神垣にちとせをまつのなと限るらむ
三善遠衡朝臣
まつにしも契ありてや住吉の神も久しき跡をたれけむ
權僧正桓守
契りをきし神代のまゝの色なれは深くそ頼むからさきの松
法親王承
いはとあけし同し光をやはらけて日吉の神やよをてらす覽
藤原良伊
曇なきみよにめくみはあらはれて照す日吉のかけそかしこき
前僧正慈勝
曇なき日吉の神をあふくこそ我身をてらすひかりなりけれ
おもひの外になけくこと侍しとき日吉社にいのり申侍
しに　法眼兼譽
いまさらに神はすてしとやはらくる光にあたる身をたのむ哉
權僧正桓守すゝめ侍ける日吉社三首歌合に神祇
法印長舜
哀とはなゝます神もてらしみよこゝのしなにとかくる心を
おなし心を　祝部行氏宿禰
いとはてもまことの道はしりぬへし後の世まてを神に祈りて
社頭雪といふことを　正三位資賢卿
たれをかは神もまつらむ白雪のぬさとちりかふみわの山もと
雪のふりけるにきふれへまうて侍とてよめる
丹波忠守朝臣
神もなと跡つけさらむ貴船山ゆきふみわけていのる心に
北野社にこもりていのり申こと侍けるにしるしあるさ
まに侍けれは雪のあした申をくりて侍りし

ななための北野の雪にあと見えていのりし道そ末となりぬる　法眼行濟

返し　前大納言爲世

祈りけるしるしも雪に跡みえて神こそみちのすゑとなしけれ

題しらす　法眼慶宗

としふとも色はかはらてみしめひく一よのまつの千代の行末

平師親

ちかひてし神もむかしを忘れすはいのる心のすゑをたかふな

大宰師邦親王家五十首歌に述懷　鴨祐夏

みたらしやひとつ流の末うけて我をもすつな加茂のみつかき

題しらす　藤原宗景

あきらけき日影もたかき神ち山あふく心はそらにしるらん

百首歌奉りし時　法印定爲

天地のひらけしときの芦牙や神の七代のはしめなりけむ

題しらす　圓昭法師

うこきなき下ついはねの宮柱ちたひや君の御世にたつへき

百首歌たてまつりし時　前關白左のおほいまうちきみ

久かたのあまつ國つの宮柱たてしちかひはわかきみのため

續現葉和歌集巻第十

釋敎歌

釋敎の心をよませ給ふける　法皇御製

心さしふかくくみてし廣澤のなかれはすゑもたえしとそ思ふ

受法の事なとおもひつゝけてよみ侍ける　二品法親王慈

我ならてたれかはしらむ山川のふかき流のそこの心も

百首歌たてまつりし時　二品法親王覺

埋もれぬのりの水かみあとしあれは代々の流は君そしるらん

大日經疏見其條末喩其宗本　法印道我

風かよふ袖たに匂ふ梅か香になをこのもとをおもひこそやれ

觀心如月輪若在輕霧中といふ心を　權僧正相守

さほかはの霧に光をへたてゝも空にかはらぬ秋のよのつき

百首歌たてまつりしとき　道基法師

うれしくそよせくる浪にあらはれて袖師の浦の玉もみえける

寄玉釋敎　法印禪隆

玉かくる衣のうらをわすれすはもとよりみかく心ならまし

身出光明飛行自在の心を　藤原光章

やみちにもをのか光をしるへにて心のまゝにゆくほたるかな

法師品　法印宗圓

一こゑもあたにはなかす郭公をのれもわしの山やいてけん

佛法僧といふ鳥のなくをきゝて　法印賴驗

すむ人のとなふる聲をきゝなれてふかき山にも鳥はなきけり

安樂行品夢に八相を唱といふ心を　爾淨上人

後に又思ひ合せはぬるかうちに見しよの夢やまことなるへき

壽量品柔和質直者則皆見我身の心を　前大僧正良信

にこりなき心の水にかけとめてふたゝひやとれ山のはの月

我見燈明佛本覺光瑞如此の心を　權少僧都憲守

むかし見しおもかけなからめくりきておなし光の山のはの月

常在靈鷲山　顯遍法師

常にすむわしのたかねの月かけを心の闇に見ぬそ悲しき

隨喜功德品疾生厭離心　法印隆淵

うきよそと思ひしりなは栄のとにしはしもいかゝ心とゝめむ

屬累品流布此經廣令治益　權律師實性

山さくらにほひをかせにまかせてそ花の盛をよもにしらする

前大納言(爲家卿)止觀談義の後わしの山くもらぬ月をたのむかなとしへし法のみつくきのあとゝ申しつかはして侍ければ　法印成運

いく秋かたかれの月にちきるらんわしのみ山の雲路たつねて

三界唯心々外無別法の心を　權律師宗伊

つらしともうしともわかし心より外に歎きの有世ならねは

今於唯識深妙理中得如實解故作此論の心を　前僧正(實聰)

たへなりとしることはりの增鏡つくりをきける法もかしこし

後二條院御ことの後西花門院より舊院の水精の御鏡をつかはされて七日光明眞言法を行てかへしわたしたてまつるとて　前大僧正(禪助)

よのつれの光ならねは增鏡そこさへすめるさとりをそしる

御返し　西花門院

すきゝつる名殘はいとゝます鏡殘るともなき夢のおもかけ

釋敎歌中に　法印顯範

覺やらてなかき闇路に迷ひきぬぬるかうちには夢としられと

權少僧都澄世

人ことに迷ふは夢としりながらおとろかぬ身そつれなかりける

藤原家信

いたつらになかきねふりにみる夢のさめておとろく曉もかな

佛舍利を拜し侍けるついてに釋尊說敎の莚にもれし事を　法印禪圓

もれにける法の莚のうらみこそそのころ煙のあとにはれぬれ

諸佛如來從一之身現無量阿僧祇佛刹心

中臣祐敦

いろ〳〵によもの梢はかはれともそむる時雨はひとつなり皃

究竟師のこゝろを　前權僧正(慈仙)

一むらはなを時雨つる雲はれてさはるかたなくすめる月かけ

戒波羅蜜(普明王)のこゝろを　入道親王(尊)

賴めをくその言のはのあとしれはふたゝひ歸る道そかしこき

十戒歌中に不慳貪戒　前僧正(慈勝)

さのみやは散をもおしと思ふへきうつろふ花の色としりなは

法印賴驗

山櫻ちるをなけくもとかならは花をあらしに今はおしまし

往生要集十樂蓮花初開樂の心を　法橋相眞

ひとふさの花の下紐とけそめてうき世へたつる春にあひぬる

上輩觀即便往生を　昭空上人

かきりある命の外にたつねしはしらてまよひし心なりけり

汝若不能念者應稱無量壽佛の心を　尊空上人

きえやすき露の命の限りまてこゑをはのこせ野への秋風

如來淨花衆正覺花化生　法眼行濟

露の身のをきところとて賴むかなさとり開きし花のうてなを

人々題をさくりて當座に千首歌よみ侍けるに釋敎

法印長舜

いつれにかわきて契をむすふらんこゝの品なるはちすはの露

横川に侍りし比靈山院の生身供の式のふるきをかきあらため侍とて　兼好法師

浮ふへき便となれ水くきのあとゝふ人もなき世なりとも

釋迦の敎にあはすは彌陀の名號きかましやといふことを　法印圓俊

みなれさほさしてをしふる人なくはいかて誓の舟にのらまし

釋敎の心を　圓胤上人

西にはやいそく心はさきたちて浮世にとまる身をはなけかし

よみ人しらす

六の道にまたや歸らむ一聲もすてぬちかひをたのまさりせは

源隆泰

今そきくたゝ一こゑに六の道まよはぬ法のちかひありとは

二品法親王覺

しつかなる心のうちにはるけさやそら行月はきりへたつとも

釋敎のこゝろを　入道前關白左のおほいまうちきみ家坊門

雲はるゝ心の月はすみそめの衣のたまのひかりなりけり

惣重上人

法華經序品の心を　兵部卿實香卿

たかの山この曉のおもかけを心の月にうつしてそみる

くもりなき秋のみ空の月をみてなかきねふりの夢やさむへき

譬喩品得未曾有非本所望を　法印房觀

かれて我おもひしよりもよしの山なを立まさる花のしら雲

信解品止宿草庵　爾淨上人

しき忍ふいはれの苔のさむしろにいくよの夢を結ひきつらむ

同品のこゝろを　藤原宗秀

をろかにて迷ひいてにし末に社やかてまことの道はありけれ

五百弟子品

題しらす　能阿上人

おもひやる心は西に有明の月にうき世そいまはわするゝ

賢聖名字品捨貪欲意入空道信の心を　賀茂定行

をのつから心にかゝる雲もなしもとよりはるゝ月のそらには

法印滿意

へたつへき雲はもとよりなきものを月をかくすも心なりけり

よみ人しらす

しはしこそうきよの闇にまよふともつゐに心の月はくもらし

藤原宗康

にこりある水にも月はやとるそとおもへはやかてすむ心かな

法印守雅

なそもかく心の月の心からすむへきかけをすまさゝるらむ

雪のあした人のもとにまかりて宗の大事なとならひて

おもひつゝけ侍ける　權大僧都成瑜

ふりつもる雪ふみわけて尋ねすは深きみのりの道をみましや

釋敎心を　權律師良聖

傳へてもをのれと悟る道なくはいかてまことの法をしるへき

權少僧都承祐

よしあしを思ひわくこそ中々にうき世はなれぬ心なりけり

平貞宗

尋ぬれは外には道もなかりけり心そ法のしるへなりける

前關白おほきおほいまうちきみ

ありと思ひなしと思ふも兎に角に心の知るは迷ひなりけり

長驗法師

をろかなる我心にはいかにして迷ふとまても思ひしるらん

北野社經藏承元の比曩祖爲蓮法師つくり侍けるを回祿

の後その跡をおもひて元應につくり侍て供養しける日おもひつゝけ侍ける　　佐伯爲助

やはらくる光を神に契てそまたかゝけぬる法のともし火

神護寺の學頭になり侍し時おもひつゝけ侍ける　　法印成譽

かゝけてもかひこそなけれうき身には光もしらぬ法の燈

龜山殿千首歌に釋教　　權僧正 雲雅

心にてこゝろをみする道もかないはむとすれは言のはもなし

おなし心を　　法印道我

迷ひこしうきよの夢のいつよりかさめてまことの道に入へき

前大僧正 親源

思ひとく心ひとつのことはりやまことの道のしるへなるへき

院御製

教へをくそのしな〳〵の法のかと開くる道はひとつなるらし

右續現葉和歌集以二內藤甲斐守正範主所藏左中將爲冬朝臣眞蹟本一書寫一挍乞二町田清興一淨書畢。

群書類從巻第百五十六

和歌部十一

臨永和歌集巻第一

春歌

はる立日よみ侍ける　前大納言爲世卿

あら玉の春たつけふの空みれはかすみてたかき天のかく山

嘉曆四年三月內裏にて人々歌つかふまつりける時關路霞といふことを　中務卿尊親王

あふ坂の關の杉むらけさよりや春立かたと霞そむらん

正中二年九月十三夜內裏にて人々歌合し侍ける時早春霞　權中納言爲定卿

足ひきの山のおのへの朝かすみたつをしみれは春めきにけり

題しらす　中宮大夫實忠卿

淺みとり霞の衣たちそめて長閑き空に春は來にけり

うへのおのことも題をさくりてうたつかうまつりけるつゐてに雪中鶯といへることをよませたまうける　今上御製

空は猶ふゆこもりける雪のうちに我のみはると鶯そなく

ねの日を　院御製

諸人の千代のかさしのためとてやけふの子日に相生の松

題しらす　二品法親王覺

鶯はまたをとつれぬ山里になにをしるへと春の來ぬらん

いかにして春をしる覧谷の戸を出ぬより鳴鶯のこえ　從三位藤子

鶯ははやきなけともみゆきふる空には春のをそくも有哉　永福門院

元亨四年二月內裏にて人々十首歌つかうまつりける時聞鶯といふことを　前關白左のおほいまうちきみ

君か世にまた時しりて谷の戸を出てかたらふうくひすの聲

題しらす　宰相典侍

春立ていくかもあらぬを鶯の鳴聲きけは里なれにけり

花もまた匂はぬ谷のふるすよりをのれ春しるうくひすの聲　右近大將道敎卿

文保三年後宇多院に百首うたたてまつりけるとき　權中納言爲定卿

わきもこかとかむはかりの梅か丶によそなる袖もうつる頃哉

前大納言爲世卿家に三首歌講しはへりしとき行路梅

今そしる此ひともとの梅か丶や過つるかたに先匂ひけん　藤原爲親朝臣

文保三年百首歌たてまつりけるとき　前大納言爲世卿

立よりて梅の匂ひをかり衣袖にうつさん人なとかめそ

題しらす　讀人しらす

雪は猶ふれとたまらぬ梅かえに花を殘して春風そ吹

春雪を　　權僧正慈

ふる程はさすかつもりて空にたにをやむとみれは消る淡雪

元亨四年二月内裏にて講せられ侍ける十首うたの中に

殘雪を　　中納言公明卿

いつかたに若なつまゝし春きても我しめしのは雪そつもれる

題不知　　從二位隆教卿

あされともつむ程もなし降雪の絶間まれなるのへのわかなは

雪中わかなといふことを　　前大納言爲世卿

かすかのや絶々みゆる雪ま社わかなつむへきしるし也けれ

藤原爲道朝臣女

春日野は春めきにけり白雪の降にし跡にわかなつみ筒

今出河院近衞

淺ちふの枯生のを野は雪消ぬたれしめゆひてわかな摘らん

一品内親王裳きの四季屏風に　　權中納言爲定卿

春にあふよもの里人野へに出てひろき惠のわかなつむ也

元亨四年二月内裏にて十首歌講せられけるとき朝霞

前大納言實教卿

棹姫の霞の衣きさらきの空にやけさは立かさぬらん

海邊霞を　　今上御製

汐風のあらき磯邊の波の上ものとかに霞む春の明ほの

二品法親王覺家五十首うたに浦霞　　修理大夫實任卿

立渡る波も霞てそことたに見ぬめの浦のはるの明ほの

おなし心を　　前中納言資名卿

清見潟うらはの波の淺みとり霞て遠きみほの松はら

前大納言爲世卿よませ侍ける春日社の三十首のうた

藤原行房朝臣

淺みとり霞そかゝる棹姫のかつらき山のはるの明ほの

題不知　　春宮大夫公宗卿

いとゝ猶絶ぬ煙やかすむらんふしのたかねのはるの曙

永福門院

雪散て朝風さむき道のへの柳の色は春めきにけり

左のおほいまうちきみ

吹過る風や梢によはる覽みたれもはてぬ青柳のいと

文保百首歌たてまつりける時　　權中納言爲定卿

飛鳥風ふきにけらしなたをやめの柳のかつら今なひく也

元亨四年二月内裏にて十首の歌こうせられける時歸雁

大納言師賢卿

いにしへにかへる都の花の色をこしちにつけよかりの玉札

おなし心を　　中宮

歸るかりしはしやすらへこしちにも都にまさる花はあらしを

夕春雨といふことを　　平守時朝臣女

かすむたにおほつかなきを夕月夜なを雲かゝる春雨のそら

題しらす　　彈正尹忠親王

春霞たちにし日より山櫻咲へき頃をまたぬ間もなし

平英時

わか宿にまたるゝ花は咲やらて外より匂ふ庭の春かせ

從二位隆教卿

白雲の絶てしなくはさかぬまの花のよそめに何をからまし

元亨四年二月内裏にて十首歌講せられける時待花

前内のおほいまうちきみ

あめつちの惠あまねき春たにもいかなる花のつれなかるらん

尋花といふことをよませ給うける　今上御製

花遅き春の山ちを行くれてさかぬ木陰に宿やからまし

元徳二年二月中殿にて花契万春といふことを講せられけるつゐてに

時しらぬ花もときはの色にさけわか九重のよろつ代のはる

元亨四年三月後宇多院にめされける住吉社歌合に海邊花と云ことを　藤原爲明朝臣

朝戸いての袖こそ匂へ蘆のやのこやの一夜に花や咲らん

花の歌の中に　藤原爲親朝臣

をのつから此ひともとに咲そめてかたへ淋しき山櫻哉

今上御製

よそにてもみるへき物をかつらきやたかまの櫻雲なへたてそ

今出河院近衛

櫻花咲そめしよりゆふたすき手向の山にかけぬ日そなき

大納言師賢卿

雲の色もみな白妙のゆふたすき手向の山は花さかりかも

春宮大夫公宗卿

よそにのみ思ひ社やれはる霞へたつる山の花の盛は

新院御製

故郷のあさちか庭の櫻花あたらさかりとみる人やなき

元亨四年三月後宇多院にめされける日よしの社の歌合に　從一位安房卿

ふる郷のしかの山ちの花さかり馴ていくよの春かへぬらん

前大納言爲世卿よませ侍ける花十首歌に

權律師淨弁

久方の空さへかけて卷向のあなしの山は花かつらせり

花盛といふことを　修理大夫實任卿

山櫻うつろふ色のみえぬまは嵐もあたにさそひやはする

題しらす　中宮

櫻はな今盛なりおなしくは風にまかすな春の山もり

達智門院

あかすのみ詠（なをイ）る色もいつまてと思へはつらき山さくら哉

人のもとへ花につけてつかはしける　爲道朝臣女

またれつる人も梢の花さかり今は嵐にまかせてそみる

かへし　よみ人しらす

吹風にまかせなはてそいそかるゝ心は花のおりもすくさし

題しらす　二品法親王慈

濁れたゝうつれはやかて散花の面かけみする庭の池水

權大納言通顯卿

散を猶したひてやみむ山櫻とまるならひは花になけれと

從二位隆教卿

かきくれて晴ぬ夕の春雨に又降そふる花のしら雪

前中納言季雄卿

さらぬたに心ともろく散花をさそひなはてそ春の山風

法親王承

さそはるゝたよりもとめて吹風の跡までもろく散櫻哉

從三位藤子

大井河なかれてとまる方もなしいせきをこゆる花のしら波

從一位定房卿

春毎に散ならひともなくさまて今年も花を又恨つゝ

正中三年九月十三夜内裏にて人々題をさくりて歌合し侍ける時惜落花といふことを　藤原爲冬朝臣

さこそけに花の心はあたならめしたふもしらて風の吹らん

二品法親王覺家五十首歌中に　前大納言實教卿

今はとて庭の櫻をとふ人の跡たにつらき花のしらゆき

關白前左のおほいまうちきみ

初せ山尾上の花も散はてゝ入相のかねに春そのこれる

内裏にて三月盡に人々歌つかうまつりけるに殘花　前中納言季雄卿

春はまたありとやこゝに匂ふ覽殘るみ山の花のした風

元亨四年二月内裏にて十首歌講せられ侍ける時春月　權中納言具行卿

あきらけき御代にも春はしらるゝをたかため月の朧成らん

おなし心を　法印長舜

思ひ出る春や昔の月影もおいてはいとゝ哀とそみる

正中二年七月内裏にて人々題をさくりてうたつかうまつりけるに　前大納言爲世卿

いとゝ猶かすみまさるもつらけれは老ては春の月はなかめし

題しらす　二品法親王覺

幾とせかつもれと老の身をしらて春も在明の月をみる覽

入道親王尊

思ひ出る世々のむかしはさたかにて空社かすめ春のよの月

前大納言實教卿

波の上にうつろふ月の影なから霞をよする春の浦かせ

新院御製

そことなき霞の底にかたふきて花に影もる在明の月

元亨二年龜山殿にて人々題をさくりて哥つかうまつりける時春月　權僧正道我

立こむる山の霞やふかゝらん入ともみえぬはるのよの月

橋邊歎冬といふことを　法親王承

行春のわたるひかすもいは橋のいはてうつろふ山吹の花

文保三年後宇多院に百首歌たてまつりける時　前關白左おほひまうちきみ

ゆくはるのわすれかたみの俤を霞にのこすあり明の月

春宮大夫公宗卿母

おもかけや春より後もしのはれん霞になるゝ在明の空（月イ）

前大納言爲世卿よませ侍ける春日社三十首歌に　法印長舜

行はるも今いくとせかおしまれむしらぬ名殘そ老てかなしき

今上いまたみこのみやと申侍ける時人々うた合し侍けるに暮春月　前大納言爲世卿

中空にかすみて殘る影もおし暮るやよひの在明の月

左のおほいまうちきみ

年毎にしたふかひなきわか□ならひになしてくるゝ春哉

うへのおのことも三首歌つかうまつりけるついてに三月盡と云ことをよませ給うける　今上御製

あけて社なをつらからめ玉くしけふたよたになき春の別は

臨永和歌集卷第二

夏歌

文保三年後宇多院に百首歌たてまつりける時　權中納言爲定卿

春過てけふぬきかふるから衣身に社なれれ夏は來にけり

更衣のこゝろを　式部卿恒親王

思ふより涼しくなりぬいつしかとけさ立かふる蟬のは衣

古歌のことはにて歌よみける中にうつりかこくもといふことを　從二位隆教卿

袖ふれてうつりかこくもみし花に詠かへたる夏木たち哉

民部卿爲藤卿よませ侍し百首歌中に卯花　よみ人しらす

時しらぬ雪かとそみるうの花のかきねはふしの山ならねとも

題しらす　達智門院

おらて祉たちよる人もすきにけれ月とのみみる宿の卯花

新院御製

あふひ草かさすやけふの神まつりたてしつかひも面影にみゆ

前大納言爲世卿家に五首歌講し侍しとき待郭公　爲明朝臣

かこつへき物とはしらす郭公まつをならひの心つくしに

題しらす　從三位藤子

よしさらはしゐてはまたし郭公うき身をわきて忍ひもそする

平守時朝臣女

恨てもわひてもきかす郭公かひなきねをやまつゝくさまし

前大納言爲世卿家に五首歌よみ侍し時待郭公といふことを　法印隆淵

よしさらはたゝつれなかれ時鳥まつをうきみの慰めにせん

おなし心を　法印長舜

つれなしと何うらむらん郭公われひとり待初音ならぬを

惟宗光吉朝臣

うき物と思ひやはてん在明の空につれなき郭公かな

平英時

つれなさの待にまさらは郭公思ひよはりて後やきかまし

元亨三年八月十五日夜龜山殿にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時夕郭公といふことを　前大納言爲世卿

ほとゝきすたかならはしの契よりくるゝをたのむ初音成らん

郭公の歌とて　前關白左のおほいまうちきみ

人つてのよその初ねは聞馴て我身にをそきほとゝきす哉

元亨二年四月七日龜山とのにて五首歌講せられける時初郭公　前中納言有忠卿

ほとゝきすまたしき程の忍ひねは聞ても猶そうたかはれける（ねイ）

題しらす　祝部成久宿禰

待わふるつらさもしらぬ郭公かたらふとてもいかゝたのまむ

權大僧都雲禪

思ひねの夢とそたとる郭公いやはかなゝるよはの一聲

二品法親王覺

みやこ人今や聞らん足曳の山ほとゝきすなきていつ也

前内おほいまうちきみ

一聲もうらみたにせし郭公そをたにきかぬ里もあるらし

前參議爲實卿

時鳥さよのねさめをとひこすはいつかたらひし音をか忍はん

何方に行ともきかす郭公誰なかそらのよはの一こゑ

世をのかれて後禪林寺に侍けるに後宇多院南禪院に御幸ありて聞時鳥と云ことを講せられ侍けるに御まへにめされてつかうまつりける　藤原盛德

またれけるけふとしりてや霍公山のかひ有ねをは鳴らん

おなじ心を　讀人しらす

過ぬれと心にとめて一聲も猶なこり有時鳥かな

早苗をよませ給ふける　春宮御歌

おりたえて手玉もゆらにさなへとる民の心も哀とそみる

文保百首歌たてまつりける時　前大納言爲世卿

せき入る水も心にまかせつゝ袂ゆたかにとるさなへ哉

家に題をさくりて歌よみ侍けるに砌橘

移しけるたか袖のかとおなしくはしらせて匂へ軒の橘

元亨四年内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりけるに盧橘を　前内おほいまうちきみ

いつかわか袖にうつさむ橘のかほるみはしの花のした風

文保三年百首歌奉けるに　春宮大夫公宗卿母

わするへき昔ならぬを橘の袖のかとめておとろかす覽

二品法親王覺家の五十首歌中に五月雨　修理大夫實任卿

見るまゝに水まさり行山の井の結はて濁る五月雨のころ

正中二年九月内裏にて人々題をさくりてうたつかうまつりける時五月雨雲　權中納言爲定卿

晴やらぬ空にゆきゝは見えわかてへたてそ増る五月雨のくも

夏のうたの中に　大僧都頁聖

天のはら猶かきくらし五月雨のふりさけみれは雲そかさなる

宰相典侍

はれやらぬ日數かされて我袖もいとゝひかたき五月雨の頃

前參議雅孝卿

あま人もほすひまやなきから衣袖しの浦のさみたれの頃

河五月雨を　今上御製

いとゝ又わたりを遠みいつみ河人もかよはぬさみたれの頃

藤原爲忠朝臣

さほ河のきよき流を行水もまされは濁る五月雨の頃

題しらす　大納言親房卿

あなし河水増らし巻向のゆつきかたけの五月雨の頃

權少僧都實性

日數ふるたかまと山の五月雨にそてつき衣ほすひまもなし

藤原基明

はれまなき高根の雲の中に落る芳野の瀧の五月雨の頃

今出河院近衛

さみたれのはるゝ日もかな時鳥わか袖にのみ涙かるやと

連日霍公といふことを　二品法親王覺

あま雲の日かす重て時鳥待しさ月の空に鳴也

夏の歌の中に　權中納言具行卿

時鳥ほのかなる音はむらさめの空行月のかけになく也

元亨三年八月十五夜後宇多院に月五十首歌たてまつりけるに　前大納言爲世卿

またれつる風よりも猶夏衣ひとへに月の影そ涼しき

題不知　關白左のおほいまうちきみ

待出てしはしなかむる月影の跡より明るみしかよのそら

元亨二年四月龜山殿にて五十首歌講せられけるに河夏月といふことを　藤原爲冬朝臣

大井川みつのまに／＼やとるよりなかれてやすく明る月かけ

鵜河を　院御製

とをつ河鵜舟にともすかゝり火の消ぬとみれは又そほのめく

文保百首うた奉りける時　權中納言爲定卿

やみをまつよかはの鵜ふれ何ゆへにともすかゝりの光成らん

題しらす　爲道朝臣女

分わふる草のしけみにことよせて夏そ人めはかれ増りける

前關白左のおほいまうちきみ

しけり生ふのへの夏草打なひきゆふへ露ちる風そ凉しき

讀人しらす

れにたてゝなかぬ螢も夏草のしけき思ひはかくれさり鳧

今上御製

あちきなくれにたにたてぬ螢哉身に餘るとはみゆる思ひを

中納言公明卿

年へぬる窓のほたるも君か世にあはすはいかて身を照さまし

權中納言爲定卿よませ侍し百首歌中に螢をよみ侍ける

權律師淨弁

あれまさる草の庵の窓のうちにあつめしよりもとふ螢哉

おなし心を　藤原重綱

風さはく野澤の草の露なから亂れてとふはほたる也けり

文保百首歌たてまつりけるに　前大納言爲世卿

やかて又つゝきの里にかきくれてとをくも過ぬ夕立のくも

夕立を　院御製

過ぬれと猶雲のこる夕立の名殘はかりの宵のいなつま

納凉のこゝろを　万秋門院

てる日をはよそにへたてゝ松陰のいはれのしみつ袖そ凉しき

題しらす　從一位定房卿

立よれは秋よりさきに凉しきは木陰や風のやとり成らん

永福門院

吹かせもこよひは凉しみそきする河せの波に秋やさきたつ

文保百首歌奉りけるとき　前大納言爲世卿

みそきするけふみな月の河のせにしらゆふかけて流す麻のは

臨永和歌集卷第三

秋歌

初秋のこゝろをよませたまうける　今上御製

秋きぬと目にみぬ風の音よりもまつしる物は袖の白露

前大僧正桓守

秋きぬといはたのをのゝしの薄忍ひに吹も風そ身にしむ

前大僧正道意

露けさはいつともわかぬ苔の袖風こそかよへ秋やきぬらん

春宮大夫公宗卿

わか爲の秋にはあられと哀そふこころと思へは袖そ露けき

院御製

初秋の天つ星合の小夜更て吹たつ風そ袖にすゝしき

正中二年七月内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時七夕衣　前大納言爲世卿

たなはたのいほはた衣きてもなとふたよかされぬ契り成らん

元德二年七月内裏にて三首歌講せられける時おなし心を　權中納言爲定卿

けふといへはいほはゝたてゝ七夕のをるとも猶や衣かさまし

藤原爲親朝臣

久方の天川原にたつ波のしろへ衣今かさぬらし

按察使公敏卿

限りなき秋をかされて契るらしけふ星合の天のは衣

七夕風　侍從隆朝卿
いましはやすゝしく成ぬ久方の天つ星合の秋の夕かせ
藤はらの爲冬朝臣
天つ風涼しくもあるかたなはたの行合いそく雲のかよひち
藤原爲忠朝臣
たなはたのいそくふな出のしるしとややその湊に秋風のふく
正中二年七月内裏にて七夕契久といふことを講せられけるに　藤原爲嗣朝臣
年をへて契りかはらぬたなはたの幾世の秋にあはんとか思ふ
題しらす　前大納言爲世卿
心してしはしなよせそたなはたの歸る別の天のかはふね
新院御製
詠つる夕の空はくれはてゝ荻のは風の音のみそする
從三位藤子
夕暮はなへての秋のならひかととはゝや袖の露のふかさを
前中納言有忠卿
いかにせんなけかしとてもかなしさの心にあまる秋のゆふ暮
前參議爲實卿
なかめしと思ふにたにもいとはれす心にうつる秋の夕暮
行路薄といふことを　權大僧都雲禪
眞野の浦や行かふ人の袖かけてお花をこゆる秋のさゝ波
秋の歌中に　能譽法師
風渡るのもせになひく花薄同し心にたれまねくらん
丹波守忠守朝臣
はる〳〵とおはなひきて秋風の吹もはてなきむさしのゝ原
文保三年百首歌たてまつりける時　從一位定房卿
花薄たか袖ふれし名殘よりこぬ人まねくならひ成らん
草花を　今出河院近衞
白露の玉ぬきとめぬ女郎花たか秋よりかみたれ初けん
平守時朝臣女
折袖もうつりにけりな白露の色とる庭の秋はきの花
修理大夫貞任卿
いさゝらはぬれてうつさむ朝露の色とる野への萩の花すり
題しらす　よみ人しらす
萩か花うつりにけりなしら露にぬれにし袖のいろかはるまて
法印公順
露はさぬわか袖よりや秋はきの花すり衣うつりそめけん
權少僧都實性
うつるとも分行程はみえわかて袖にそ殘るはきか花すり
前參議淸忠卿
高圓の尾上のこはき露なからかつちる花に秋風そふく
津守國夏
秋風にあへす散らし高まとのをのゝ萩はら行てみましを
今出河院近衞
秋はきの花すり衣色に出て今そ妻とふさほしかのこゑ
文保百首歌たてまつりける時　春宮大夫公宗卿母
月影も在明かけてさほしかのなけともいまた妻そつれなき
關白前左のおほいまうちきみ
小男鹿のをのゝ草臥ふしわひてひとりや月に妻をこふ覧
山路聞鹿といふことを　從二位隆教卿
分過る山ちの末の秋風に猶われしとふさほしかのこゑ
平英時よませ侍し百首うたに遠鹿　讀人しらす

秋風の吹こす空にきこゆ也山のあなたのさたしかの聲
秋の歌とてよめる　後稱念院前關白太政大臣家讃岐
わか爲の秋とや鹿のれにたてゝ長き夜寒につまをこふらん
平貞直
いなは守田のもの庵の秋風によな〳〵淋しさほしかのこゑ
平貞俊
詠れはたれも心のすむ月にあこかれきてやかりも鳴らん
淨觀法師
霧はるゝ山もと遠く見渡せはたのもをわたるかりの一つら
祝部成久宿禰
一つらは絶間にみえてくるかりのは風に晴る嶺の夕きり
嘉元元年百首歌たてまつりける時初鴈
前參議雅孝卿
詠やる外山の霧のをち方に聲かすかなるかりの一つら
おなしこゝろを　永福門院
八重霧のたつ山本のはる〳〵と田のもにおつる秋のかり金
河霧を　万秋門院
高せさすなとはかりしてこく舟の行かたみえぬうちの河霧
家に題をさくりて歌よみ侍し時田家霧　前大納言爲世卿
立こむる田のもの霧の籬こそへたてもはてぬへたて也けれ
元徳二年内裏にて對山待月といふことを講せられ侍ける時　爲明朝臣
古はいかにつかへて山のはにまたてもむかふ月をみつ覽
文保百首歌たてまつりけるとき　權中納言爲定卿
いやましに光そまさる夕汐のみちくる浦の秋のよの月

題しらす　大僧都良聖
すみのほる光は空に高まとの尾上の月に秋風そふく
平氏村
高砂の松より外の陰もなしおのへの嵐月にふく夜は
女藏人万代
露結ふわか衣手や秋ことにわすれぬ月のやとり成らん
權僧正道我
吉野河いはこすなみははやけれとのとかにやとる秋のよの月
内裏にて人々題をさくりてうたつかうまつりける時河月　權中納言隆資卿
くもらしな清瀧川の波の上にやとるもすめる秋のよの月
題不知　中宮
難波江のこやの芦ふき隙をあらみさなから月の宿りとそみる
大納言師賢卿
里のあまの絶す汐やく浦にたにすめはすみ見秋のよの月
惟宗光吉朝臣
秋のよの月の光のみつ汐にかくれぬ磯の波のしたくさ
爲道朝臣女
水の面にやとれる月も今宵社なになかれたる影はみえけり
兵部卿邦親王
雲の波空にそ拂ふきの海や月もなたかの秋のうらかせ
前大僧正桓守
しほかまの煙も雲も空に消て浦風寒くすめる月哉
月歌とて　平泰時
かれてよりくもらぬ月に音たてゝいたつらに吹峯の松風
入道親王尊家の詩歌合に月夜山居　權律師淨弁

雲たにもふもとにみゆる峯の庵に猶空たかくすめる月哉

題不知　藤はらの盛徳

晴やらぬ山路の霧のいつくより袖に在明の影うつすらん

元亨三年九月内裏にて五首歌講せられける時曉月　藤原爲冬朝臣

夜寒なるわか衣手の秋風にひとりねさめの月をみる哉　前中納言有忠卿

いそかれし曉露におき馴てのこれる秋の月をみる哉

月をよませたまうける　院御製

月殘る汐ひのかたにたつ鴫て秋はふけゐのうらちかなしも

秋歌の中に　二品法親王慈

かりそめのやとりをとふもきり〳〵す秋の哀はふか草の里

よみ人しらす

うつら鳴秋の夕をきてとへは袖まてかゝる深草の露

正中二年九月盡内裏にて五首歌講せられける次に連夜擣衣　今上御製

あし引の山鳥のおの長き夜にあかていくよかころもうつ覽

おなしこゝろを　永福門院

とを里の賤かさ衣秋風の寒きよころをかされてそうつ

元亨三年八月十五夜龜山殿にて月五十首歌めしける時　前大納言實教卿

たかさとにかたふく月をしたふらむ更て砧の音そうらむる

海邊擣衣を　法師長舜

すまの浦や汐やき衣うちわひぬあまの苦屋の秋のよ寒に

題しらす　二品法親王覺

初霜のふる野の淺ちうら枯て在明寒くうつ衣かな

津のくにのこやの芦ふきよや寒き隙こそなけれ衣うつ聲

前大僧正道意

たれか又秋風さむみ長き夜にねさめいそけところも打覽

祝部成久宿禰

たれか今よさむの月の秋風初に霜なから衣うつらん

平貞宗

よもすからをた守人やさほしかのをとろへはかり衣うつらん

平英時

田家秋を　頓阿法師

庵さす山田のひたのうちはへて明ぬ暮ぬと秋かせそふく

よみ人しらす

置露も涙もろしをしれ守たのもの庵のそての秋かせ

秋の歌中に　從三位藤子

色かはる神のいかきのくすかつらうら淋しくそ秋は成ぬる

文保三年百首歌たてまつりける時　權中納言俊定卿

分過る山ちの菊の花のかにぬれてもほさぬ袖のしら露

初紅葉をよませ給うける　今上御製

ひとしほの峯のもみちは立田姫またをりはてぬ錦成らし

杜紅葉といへることを　二品法親王覺

神なひの杜の梢の薄紅葉うつりも行か秋のひかすは

嘉元元年百首歌たてまつりける時　前大納言實教卿

秋の色を忍ひのをかの下紅葉いつの人まに時雨初けん

おなしこゝろを　紀俊文

山姫の涙や今は色に出てしのふの杜の下葉染らん

平時英

露時雨さそゝめつらむ神なひの杜のこのはの色の深さは

前參議雅孝卿

しくれの雨まなくや染る紅に雲もうつろふ峯のもみちは

暮秋の心をよませ給うける　院御製

山風にこの葉うつろふ庭の面の入日の色も秋ふかきころ

おなし心を　春宮大夫公宗卿母

いかにせむ暮行秋をかそふれは月みん程の夜はそすくなき

前中納言公脩卿

長月のよさむの霜は置そへて淺ちか庭そ色かはり行

九月盡夕といへることを　從二位隆教卿

いかにせむあすを頼みの夕とも思はぬけふの秋のなこりを

臨永和歌集巻第四

冬歌

文保三年後宇多院歌百首めしける時　權中納言爲定卿

けさのまは時雨もあへす神無月日かすや冬のはしめ成らん

題しらす　前大僧正慈勝

吹からにみねの木のはゝ散はてゝむへ山かせに冬はきにけり

藤はらの經有朝臣

かれてよりうら枯そめし淺ちふに霜置まよふ冬は來にけり

紀俊文

やへふきの芦やのさとにふる時雨隙こそなけれ冬やきぬらむ

二品法親王覺家五十首歌に朝時雨　法印長舜

朝嵐の過行かたに行雲の末は時雨にかきくらしつゝ

後宇多院御時龜山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりける時岑時雨といへることを　前大納言爲世卿

あらし吹峯のうき雲とにかくにたちもさためすふる時雨哉

時雨を　祝部成久宿禰

吹風に山のはこえて行雲のやすらふ程もなき時雨かな

平範貞

山かせもけさはゝけしく吹かへて時雨をいそく浮くものそら

梯時雨と云ことを　平貞宗

風はやみとやまの里は時雨きて雲のうへなる峯のかけはし

文保百首歌たてまつりける時　前參議雅孝卿

吹風のひとかたならぬ程みえて行かふ雲にふる時雨かな

冬の歌中に　二品法親王承

ふき過るあらしの末の山のはにしはしくるゝ雲の一むら

權大納言通顯卿

神無月空さためなきうき雲にしくれぬ方も又時雨つゝ

前參議爲實卿

吹風に亂てうすき雲の色も末はきえゆくむら時雨かな

文保百首歌たてまつりける時　前中納言有忠卿

露こほる萩のかれはにふる時雨秋風よりも音そ身にしむ

冬のうたとて　前大僧正道意

散殘るならのかれはに音たてゝ外山淋しくふる時雨哉

落葉混雨と云ことを　源清兼朝臣

風ませにしくるゝ雲ははれやらてもろともにふる峯の紅葉は

題しらす　多々良貞弘

時雨つる雲は殘らて山風のはけしき空にふる木のは哉

讀人しらす

色をのみ染ると思ひし紅葉はの音は時雨にいつならひ劔
新院御製
むら時雨雲ふきはらふ朝風に木々のこのはそ降かはりぬる
前内のおほいまうちきみ
さそひ行嵐に雲は晴ぬれと殘る時雨は木のは成けり
元亨元年龜山殿にて題をさくりて人々うたつかうまつりける時落葉
藤原經季朝臣
神無月あらしは山の名にふりてさそふもまたす散このは哉
元亨四年二月内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時おなし心を
前大納言爲世卿
はては又積れる庭を吹風に散ての後もちる木のは哉
題しらす
平政秀女
紅葉はを峯の嵐はさそふともしからみとめよ谷川の水
淨景法師
庭のおもに置そふ霜の下もみち秋みしまゝの色そすくなき
忠惠法師
かた岡の杜の下くさ枯しよりこのはも深くむすふ霜かな
平忠時
枯はてゝ霜をく庭の淺ちはらかせさへ秋に音そかはれる
宮内卿資明卿
このねぬる夜はのさむしろ床さえて朝霜深きよもきふのには
藤はらの行房朝臣
秋のよの露より霜にうつりきて尾花か袖に氷る月かけ
内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時月前霜
按察使公敏卿
月やとるのへのあさちのよはの霜いつよりつゆの結ひかへ劔

夜の時雨といふことをよませ給ける　今上御製
絕々に時雨て過る浮雲の行かたみゆるふゆのよの月
元亨三年八月十五夜龜山殿にて月五十首歌めしける時
二品法親王覺
竹のはに霜夜のかせも音たてゝ明かた寒きまとの月かけ
日吉社にて歌合し侍し時冬月
前大僧正桓守
にほてるや志賀の濱風ふけゆけは月影なから氷る浦なみ
千鳥を
源高氏
浦風も今吹たてゝいせしまや月の出汐にちとり鳴也
圓昭法師
明石かた千鳥しはなく今よりや冲つ汐かせ寒く吹らん
平泰時
ゆふ汐は今かさすらむ鳴海かたおきの千鳥の聲さはくなり
爲明朝臣
うら人の波かけ衣袖さえて夕しほかせに千鳥鳴也
嘉元百首歌のなかにちとり
万秋門院
さゆる夜はいつくもおなし汐風になにと千鳥の浦つたふらん
元亨三年八月十五夜龜山殿にて題をさくりて人々歌つかふまつりける時水鳥
藤原爲冬朝臣
水とりのをのか羽風もさえ行をしらてやよはの霜拂らん
おなし心を
平時英
をく霜をいかにはらひて声かもの冬枯しらぬ青羽成らん
題しらす
惟宗忠秀
あらし吹山下かけのむもれ水このはかくれに氷る頃哉
三善爲連
風寒みきのふの淵のあすかゝはかはるせよりや氷初らん

仙阿法師

ならのはゝ散はてゝより吹風の音もまかはてふる霰哉
法印宗俊

夜を寒み深山おろしのさゝのはにさやくときけは霰ふるなり
藤はらの家能

狩くらすとたちのはらは雪深しかたのゝ里に宿やからまし
前中納言季雄卿

今朝よりは雪けになりぬ山のはに時雨てはるゝ浮雲の空
平貞俊

しからきのと山の雲そさえくらす里まてこよひ雪やつもらん
權少僧都實性

とふ人の跡みるほともなかり鳬つもらて消るけさの初雪
初雪のあしたまうてきて侍ける人のかへりてのち中つかはしける
前大納言實教卿

けさよりそとひくる人の跡まても初てみつる庭のしら雪
運尋法師
冬歌中に

庭のおもに積るはかりはみえねとも霜にまかはぬけさの白雪
丹波忠守朝臣

宵のまははけしかりつる風の音のよはれすやかて積る雪哉
前參議雅敎卿

宵のまは中々さえし雲風も降てのとけき雪の朝あけ
藤はらの敎秀
望山雪といふことをよみ侍ける

ふしのねは猶そら高くあらはれて雲より上に積る白ゆき
讀人しらす
題しらす

時雨つゝやたのゝ雲の絶まよりはるかにみゆる峯の白雪
藤原盛徳
山雪を

冬かれのあさちをしなみ吹風の音をあらちの峯の白雪
大藏卿[illegible]家にて人々歌よみ侍けるときおし[illegible]　従二位[illegible]

猶はれぬよのまの雪の朝ぼらけとふとも人の跡やなからん
法親王
題しらす

ふる程はそこともしらぬ山端に晴てそつもる峯の白雪
中宮

袖にたにはらひもあへぬとの守の跡のみみゆる庭の白雪
前大納言爲世卿

降積る山もあらはに雲はれて里より近き峯のしら雪
二品法親王

風かよふ松はのきはにうつもれて聞しつか成雪の明ほの
夜雪を　大納言親房卿

降雪にまやのいたまもうつもれて月たにもらぬよはの淋しさ
藤原行朝

ふみ分る人しなければわか宿は積るまゝ成る庭の白ゆき
平光平

今更に誰かはとはん里はあれて宿もふりぬる庭のしら雪
大納言親房卿家詩歌合に冬夜　權律師淨弁

沖つ波よるともみえす高砂の尾上さやかに積る白雪
頓阿法師

野も山もさやかにみえてむは玉のやみのうつゝにふれる白雪
冬の歌のなかに　藤原信平朝臣母

うつもれし梢の雪もかつおちて嵐の音そ松にきこゆる
よみ人しらす

分るのに雪はふりきぬ夕まくれやとりやいつこ逢人はなし

なか〱にさはらぬ道とみゆる哉雪のしたなるはやましけ山　藤はらの基明

瀧雪を　慶運法師

山たかみ雪吹おろす朝風にこほるもみえぬ瀧の白いと

歳暮の心をよめる　藤原重綱

行年もわか身もおいもきはまりぬされはいつまてかきる命そ

山家歳暮といふことを　前權僧正雲雅

山里の年のくれにそ思ひしる都の人のいそくこゝろを

入道親王尊

閑なるみ山のおくのとしの暮うき世にすまはいかに急かむ

歳暮急と云ことを　爲明朝臣

いそくにもよらぬ習ひをひとことのしけきにかこつ年の暮哉

臨永和歌集卷第五

神祇

題しらす　院御製

やはらくる光くもらすもろ神のうけ守るへき國はたのもし

野宮にて梅を　達智門院

神がきのよそにゝほへる梅かかをしめのうちまてさそふ春風

梅の花のさかりに北野にまうて侍て　入道親王尊

手向する袖こそ匂へ神かきやみしめのうちの梅の下かせ

梅をよめる　法眼良重

外よりも匂ひそ深き神かきにむかしわすれぬ軒の梅かえ

安樂寺にたてまつりける百首歌中に　讀人しらす

跡たれし北野の宮のひとよ松ちもとは君か萬代のかす

北野の社にて講すへき歌とて人のよませけるに神祇　前大納言實教卿

いつはりのなき名あらはす神かきに雪とは花のなとまかふ覽

元亨四年二月後宇多院にめしける石清水社三首歌合に

社頭花　權中納言爲定卿

神かきにをりはへかくる棹姫の手向や花のにしきなるらん

前大納言實教卿

神そみむ花のかゝみのいはし水くもらぬ御代の春をうつして

前中納言有忠卿

おとこ山跡たれしより瑞垣の花も久しき世々のまる哉

題しらす　權大納言通顯卿

いはし水たえぬ流をたのむ哉身の行末を神にまかせて

藤原經有朝臣

末葉までめくみもらすな春の日にいや榮行北のふち波

春日まつりを　從一位定房卿

春日山かみのいかきにさよ更てをとめの袖も風そ涼しき

神祇歌とてよませ給うける　今上御製

三笠山さしていく世とかきられは千とせの末も神のまに〱

おなし心を　關白前左のおほいまうちきみ

行末をさしてそたのむみかさ成神の惠に身をまかせつゝ

左のおほいまうちきみ

なとか又うけすもあらんみかさ山たゝしき道を神に祈らは

前關白右のおほいまうちきみ

かすか山ちとせの春をまつか枝の久しき色もわか代のため

前大僧正覺圓

ふたつなくたのむ心をみかさ山神も哀とうけさらめやは

達智門院

君か世をてらさむ末の光にそいはとを出し月日なるらん

葵をよみ侍ける　前大納言為世卿

をのつから神より外はあふひ草われに哀をたれかかくへき

社頭霍公を　紀俊文

みしめなは夕くれかけて神かきにうちはへきなく郭公かな

青蓮院門跡もとのことくかへりて後吉水の新宮にて歌合し侍しに神祇　入道親王尊

頼むそよ宮居をこゝにうつしてもなゝ世はへぬるなゝの神垣

日吉社をうつして燈爐をかけ侍ける所に　二品法親王慈

神かきにかゝけそめつるともし火の光を添よ身をてらす迄

題しらす　藤原冬隆朝臣

あひにあひて君に仕へむ爲なれは身をも千世とや又祈らまし

よみ人しらす

久方の天の八重雲空晴ててらす日吉もわか君のため

前大僧正桓守よませ侍し日吉三首歌合に社頭述懐と云ことを　法印長舜

數ならぬちりの身なれとやはらくる光のうちに我をもらすな

題しらす　定顯法師

いかはかりおなし心にちかひてかなゝの社の跡をたれけむ

權少僧都淨道

言のはのしるへとならは住吉の神もをしへよ敷嶋のみち

彈正尹忠親王

てらしみよ神にまかせて玉つしま道の光は盡しとそ思ふ

紀俊文

たのみこし神の惠もゆふかつらかけてつかふる今そ知るゝ

女藏人万代

見わたせはゆふかけそへてをしほ山神代ふりぬる松の白雲

祖月法師

かはらしなよゝかされても榊葉のときはかきはの神の惠は

從二位隆教卿

曇なき光をみせて神かきのあたりにきよくすめる月かな

平明英

わきて只身をは祈らし芦原のくにの榮に神ももらすな

祝部成久宿禰

いにしへに又立かへる敷嶋のみちをは神のさ(もイ)そ守らむ

宗像氏長

千はやふる神代久しくすむ月のくもらぬ影を猶たのみつゝ

丹波忠守朝臣

おろかにや神もみる覽先のよのむくひもしらす祈る心を

よみ人しらす

祈るとも世々のむくひの身のうさは神も心にみやはまかせん

平氏村

神かせや手向の袖も白妙の雪をかされてなひくゆふして

龜山殿にて月五十首めしける時　權中納言爲定卿

天のとを出し神代の月影も君かためとやてらしそめけん

臨永和歌集卷第六

戀歌上

嘉元百首歌たてまつりけるとき初戀といふことを

前大納言實教卿
忘れしよ思ひ初ぬる月日まて後はかたみとなりもこそすれ
万秋門院
時雨とも色にはいかゝ出そめむ忍ふの杜の下のことの葉
題しらす　前大僧正慈勝
いつしかと落そふ袖のなみたかなうきには何と思ひ初けむ
藤原ためちか朝臣
うき物といつよりしりて戀ころもならはぬ袖は露けかる覧
藤原冬隆朝臣
つれなしと人をは何とうらむへきしらせて積る月日ならねは
今上いまたみこの宮と申ける頃人々うた合し侍けるに
忍戀　權中納言具行卿
物思はてしほるゝ袖のたくひあれなせくも苦しき泪もらさん
おなし心を　院御製
わきもこかその黒髮のむすほゝれいはてやゝまん思ふ心を
思ひつく心ひとつのあらましも道なき戀に我そくたくる
今出川院近衛
おもひ入忍ふの山は道もなし我心たにおくそ(もイ)しられぬ
なさへても今はしのはむかたそなきおなし袖よりあまる涙は(にイ)
中務卿尊親王
いたつらに人こそしられわたつ海の波の下草かはくまもなし
正中二年十一月内裏にて三首歌講せられけるときしの
ふこひを
刑部卿惟繼卿
しられしな落葉にうつむうす氷くたく心も色しみえねは
中宮大夫實忠卿
戀衣たれゆへかゝるなみたとはせく袂にもいかゝしらせん

前參議淸忠卿
忍ひかねうきなもいてはもりぬへしつゝむは袖の涙のみかは
題しらす　今上御製
朽はてゝ後にももらはいかゝせん袖の外なるなみたならぬを
春宮大夫公宗卿
つゐに又誰そてよりかもり初む諸共にこそ忍ふ涙も
前大僧正慈勝
もらさはや岩まの水のわくらはにとふ人あらは思ふ心を
寄虫戀といふことを人にかはりてよみ侍ける
爲明朝臣
かひなしやもゆる螢にたくへても君に告こす思ひならす(ねイ)は
忍戀をよめる　法印公順
いかにせむ下行水の早せ河せきとゝむへき思ひならぬを
藤原貞忠
いかにしていはせの杜の言のはに我言の葉をたゝへやらまし
寄瀧戀を　惟宗光吉朝臣
とことはにくたけてそ思ふ人しれぬ心のうちの瀧のしら玉
戀歌中に　藤原行朝
まれにとふ契りもいかにつらからん人もしのはぬ中と思はゝ
紀俊文
いはすとも思ひはかりのしろへにてみせはやしのふ袖の涙を
源英嗣
思へともいはたのをのゝはゝそ原色つくまてに袖そしくるゝ
中原政宣
せきかれて袂にあまる涙かな心にゆるすひまはなけれと
權少僧都淨道

つゝめとも猶もる袖のなみたこそ我身にあまる思ひ成けれ

能譽法師

人しれぬみやまかくれのむもれ水したに心の行かたもなし

多々良貞弘

ほしわひてうきなもたゝは如何せんさのみなかけそ袖の浦波

よみ人しらす

しらすなよれくたれ髪の玉かつら（たまくらにイ）むすほゝれたる下の亂れを

忍久戀

三善爲連

いつまてとさのみ涙を忍ふらん過にしかたもとしはへにけり

題しらす

女三宮治部卿

もらすとも人なとかめそなへて世のうきにも袖は濡ぬ物かは

前中納言資名卿

思へ共いろにそ出ぬことのはのちりなん末をかれてしられは

永福門院

松かれのあらはれてこそいはすともくたくろ涙の心をはしれ

前中納言公脩卿

しられしなこのはによとむ埋れ水したにはかよふ心ありとも

大納言親房卿

涙こそ袖にもよとめ今よりのたきつ心をいかてせかまし

惟宗忠秀

思ひせく心のたまのわきかへりあまるや袖の涙なるらん

藤原の爲ちか朝臣

戀しなん後のうき名を思ふにはおしまておしき我命かな

平貞直

思ひしる心やあるとこひすてふ浮名をよそにたてゝたにみん

人々いさなひて北しら河の紅葉みにまかりて十首歌講侍し時忍不逢戀

前大納言ためよ卿

しられしとつゝむにしけき人めこそかよふ心の關となりけれ

こひのうたのなかに

右近大將道教卿

誰ゆへの涙とまてはしらす共ほしあへぬ袖を人やとかめん

元亨四年五月内裏にて題をさくりて人々歌つかふまつりけるとき顯戀

大納言師賢卿

なみたせく袖と共には朽もせてまつ世にもろやうきな成らん

題しらす

聖悟法師

色かはる袖をはしらてはかなくもつゝむ涙とおもひけるかな

運尋法師

わたるへきあふせやいつこ涙川思ひたつより袖はぬれつゝ

藤原貞忠

我そてはほすひまもなくかりこもの思ひみたるゝよはの涙に

今出河院近衛

我涙かゝれとてしもくろかみのなかくは人にみたれやはせし

伴經清

よそにたにみぬめの浦による浪のまなくも人をかけて戀つゝ

嘉元百首歌たてまつりける時不逢戀

前參議雅孝卿

あふ事はなきさの松のとしをへて色もかはらぬわかおもひ哉

同し心を

院御製

あふ事もみには渚による波のよそのみるめにれこそなかるれ

寄船戀を

中宮

逢事はなきさに遠き捨舟のよるかたしらぬ物や思はむ

元亨元年十月龜山殿にて人々題をさくりて歌合つかうまつりける時不逢戀

藤原經季朝臣

いつまてかつらしと人をみしまえの玉えのあしの思ひ亂れん

題しらす　　従三位藤子

あふ迄はむすはさりけるさきの世の契りくやしき中川の水

今出かはの院近衛

うしと思ふ人をはこひし偽のわか心にもなき世なりせは

大納言師賢卿

誰ゆへに思ひ入にしこひちとて人の心のかよはさるらん

寄關戀を　　宰相典侍

きく度に名はむつましきあふさかもゆるさぬ中の關守そうき

祈不逢戀といへることを　　入道親王尊

いかならんみそきかうけんあふ坂の關もる神の心つよさは

法親王承

戀せしのみそきかひなきみたらしにこりす逢瀨を又や祈らん

藤原爲ちかのあそむ

さきのよの契りを神もかへしとや祈かひなきつらさなる覧

平久義

難面さにおもひたえてもあられぬやいのる心のたのみなる覧

寄夢戀といふことを　　平英政

はかなくも待そわひぬる思ひつゝぬれはとたのむ夢の契りを

侍従忠定卿

むは玉の夢路はかりはなか〳〵にみゆるもつらし人のおも影

平重棟

むはたまの夢にもなとか下紐のとけて結はぬ契りなるらん

津守國夏

うつりかは殘らぬゆめの契にてかへす衣そかたみなるへき

前大納言爲世卿

さすか又かよふ心のあれはこそ夢にもあふとよるはみゆらめ

題しらす　　前中納言公脩卿

人しらす思ふ心はかよへともまた踏そめぬあふさかのせき

前中納言季雄卿

逢まての命もかなと思ふにはまたたちかへりみこそおしけれ

尾張久重

なかめやるそなたの空に行雲や思ひより立けふりなるらむ

平貞直

あふまてとおしまれしみの命さへ人のつらさに成にける哉

前大僧正慈勝

いかにせむ秋くる鴈のつはさにもかけて賴まぬ人の玉章

戀歌中に　　兵部卿邦親王

こひしともことつてなまし吹風も我思ふかたの空にかよはゝ

二品法親王覺

引はへて思ふもくるしかくてのみえやはありその浦のたく繩

正中二年八月十五日夜内裏にて五首歌講せられける時

月前戀といふことを　　按察使公敏卿

面かけも猶みせしとやめくりあふ月も涙にかきくもるらむ

戀の歌とて　　從二位隆教卿

こひしさもなくさみぬへき月をたにやすくはみせぬ我泪かな

新院御製

我袖のなみたにやとる夜半の月おなし影をも人やいとはむ

院御製

わか思ふ人をしさそふ月ならはなかむる空もうれしからまし

元亨四年五月内裏にてうへのをのことも題をさくりて

歌つかふまつりけるついてに不逢戀　　今上御製

いつまてと限りもしらぬあふことにたのみをかくる命なる覽

同し心を　右近大將道教卿

あふ事は思ひたえても何ゆへにいのちはかりのつれなかる覽

平英時

うつゝにもあふよのあらは思ひねの夢や契りの初ならまし

戀のうたとてよめる　津守國夏

うくつらき時たに人の戀しきはいつ忘るへきこゝろなるらん

大僧都良聖

今は又千つかもしらすにしきゝの終にかひなき名をや立へき

隔遠路戀といへることを　頓阿法師

ひとりぬるとを山鳥のきりたにもかさなる岑を隔てやはする

題しらす　祝部成久宿禰

はかなしや心つくしになけきてもいつ迄か世にいきの松はら

權少僧都淨道

つれもなくいけると人や思ふらんあふにかへむとおしむ命を

藤原利尙

逢事をなをさりともと待はこそいきてかひなき世には住らめ

大納言爲世卿

いさゝらは我命をもこひしなてつれなきものと人にいはれん

中宮大夫實忠卿

あふまてとおしまれしみは昔にておなし命をいとふころかな

嘉元百首うたたてまつりけるときあはさるこひといふことを　前參議雅孝卿

おしからぬ命よされは何ゆへにさのみはたえて物思ふらむ

臨永和歌集巻第七

戀歌中

題しらす　よみ人しらす

こひしなて猶やたのまん逢事をかふるはかりの我みなりせは

中宮

かくはかりつれなかるへき心ともしらてや人を思ひそめけむ

民部卿爲世卿家に三首歌講し侍ける時不逢戀　前參議清忠卿

あふことは涙の川のみをつくしふかき思ひにしつむはかりそ

同し心を　藤原行朝

なくさめし夢の契りもよかれして面影をのみ涙にそみる

藤原基夏

後の世の契りもいとゝ頼まれすあはてつらさに戀しなんみは

丹波忠守朝臣

かひなしやけにこひしなん程まては只なをさりに人や思はむ

通書戀といへる事を　よみ人しらす

いくたひかあわてのうらの眞砂地にはかなき鳥の跡をみす覽

たのみて侍ける人のもとより契りしや我いつはりに成ぬらんこゝろのほかのさはりなれともと申て侍ける返事に　爲道朝臣女

いかゝまた心の外のいつはりをうきひとかたに思ひなすへき

待戀といふことを　永福門院

思ひなれしわか心より哀なれたのまぬものを夕くれの空

兵部卿のみこの家五十首うたに待戀　法印公順

さりともと思ふたのみもなき物をいかにまたるゝゆふへ成覽

題しらす

あふまての命にもせむ行末をたのめといはんことのはも哉　源頼重

頼ますはまたれしもせしあちきなく心からこそ人もつらけれ　權大僧都雲禪

さりともと頼むもくるし契りしは僞とたにいかてしらまし　權少僧都實性

僞をたのむとしもはなけれともまてと契りし夜こそれられれ　大納言親房卿

またぬよも猶いねかての槇の戸に音する風や吹もやまなん　新院御製

今更にたかいつはりのなき世とてたのめしまゝの暮を待らん　中務卿尊親王

たのまるゝ契りなりせは待ほとのふくるはかりや恨ならまし　今上御製

後にこそ思ひたゆともたのめつる此夕くれは猶やまたまし　從一位定房卿

いつよりか契りもをかぬ夕暮をとはるゝ程のなかとならまし　平英時

僞のあるをならひとたのみてややすくも人の契り置けむ　能譽法師

くやしくそ契りをあたに頼みける人の心のかはり行世に　丹波長博朝臣

行すゑをたのむるまゝに頼かな誰いつはりもしらぬならひに　女藏人万代

内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時寄原戀といへることを　藤原爲冬朝臣

あた人のいひし契りのあさち原あさくもたのむ我そはかなき　權中納言具行卿

民部卿爲藤卿家に十首歌講侍し時僞戀

僞のあるも恨みしうき人をたのむ心のなき世ともかな　女三宮治部卿

戀のうたとてよみ侍ける

あかさりし色たにみえぬ山の井の淺き契りを何結ひけん　藤原光章

久戀を

忘れしといひしはかりのことのはを命になして年はへにけり　二品法親王覺

いつはりのうき月日のみつもりきて涙のそこにくるゝ年かな　源義久女

題しらす

僞にならはさりせはとしふとも行すゑかけて頼まれやせん　藤原基夏

つらかりしかたをはしらて忘るなと後をのみこそ契り置つれ　前大僧正覺圓

おり／＼の哀はさすかみゆれともけに我はかり人はおもはし　藤原爲親朝臣

さりともと頼むにつけていかなれは人の契りはうたかはる覽　關白左のおほいまうちきみ

をのつからかはらぬ暮も有やとて頼むことに待もはかなし

契戀をよませ給ける　今上御製

哀とも思ひしるらむとはかりにまつたのまるゝ人のことの葉　達智門院

題しらす

數々に契りをかすはかくはかりいひしにかはる程はしられし　よみ人しらす

今はたゝまたしとおもふ心さへまた僞になるゆふへかな　平英時

なからへはいくゆふ暮の僞を命のうちにたへてまたまし
仙阿法師
なのつからとはれはなをやたのまれん僞にたにこりぬ心は
侍従忠定卿
今こんと契りしことも忘る覧おとろかしてや猶も待まし
中宮
いつはりのつらさになれて言のはのみに頼まるゝ夕暮そなき
元徳三年三月盡内裏にて講せられ侍ける三首歌中に毎
夕待戀　前關白左のおほいまうちきみ
ふけてこそ僞そとも思ひしれ契れは待ぬ夕くれそなき
同し心を　法親王聖
さすか又限りやあるといつはりも積るにつけて頼むはかなさ
尋失歸戀といふことを　前大納言實教卿
立かへりしゐてとはゝや契り置し心やかはるやとやあらぬと
待戀を　法印隆淵
たのめてもうき僞にならはすは心つくさて人やまたれん
宗像氏長
はかなしやなをさりともと思ふまに僞つくる鳥の八こゑは
元亨四年二月内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつ
りけるに同し心を　大納言師賢卿
山のはを出へき月のかけなくはなにゝよそへて人をまたまし
文保百首歌たてまつりけるとき　前參議雅孝卿
涙のみ待夜の床にさきたちてかたしきなるゝ袖の月影
題しらす　中原元宣
待わふるこゝろを月になくさめて更行程のしられすもかな
藤はらの光長
逢みても猶社つゝめなからへてとはるへしとも頼みはてれは
能譽法師
年月のつらさは夢になしはてゝ今宵をなかきうつゝともかな
よみ人しらす
うつゝともよしや定めしあふことを夢としりてそ又も頼まん
嘉元百首うたの中に初逢戀　万秋門院
もらすなよ下ゆふ紐のとけそめて又も結はぬ契りもそ有
元亨二年八月龜山殿にて人々題をさくりて歌つかうま
つりける時別こひ　權僧正道我
又とたにたのめも置ぬわかれかなたへてあるへき命ならねは
同し心を　前大僧正道意
かきりありて明るたにうき別路によふかき鳥の音そつらけれ
禪了法師
別をはよしやなけかしあふことの有をうきみの忍び出にして
旅宿逢戀といへることを　前大僧正慈勝
あふことはかりそめなから草枕むすふ契りを人もわするな
羇中曉戀といふことを　前大納言爲世卿
旅衣そての別に(こイ)立そひて俤をくる有明の月
戀歌中に　今出河院近衛
おなしよとなにしたふらん有明のおもかけはかりさらぬ別を
万秋門院
別路は我のみしたふ涙ともしらてやとりの音をはなく覧
後宇多院万秋門院に御幸侍ける時御ともにさふらふ人
人題をさくりて歌合つかうまつりけるに後朝戀　中納言公明卿
今朝はたゝ涙はかりをかたみにて袖にのこらぬ有明の月

題しらす
式部卿恒親王

あやしくもけさはぬれそふ袂かないかにみえつる夢の名殘そ
平貞宗

みせはやな今朝の別のそのまゝにやかてかはかぬ袖の涙を
藤原英頼

一夜にもかたり盡さぬむつことの數かきそふるけさの玉つさ
前大僧正桓守

露むすふしのゝをさゝのかり枕たゝ一よとは契りやはせし
よみ人しらす

よしやたゝかけひをつたふ谷水のたえ〳〵結ふ契りはかりは
大僧都頁聖

をのつからあふと計りのなとり河またいくせにか浮沈むへき
前關白右のおほいまうちきみ

たまさかに待もはかなし思ひ出てとはるゝ程の契りはかりは

元德二年九月十三夜うへのをのことも三首歌つかうまつりけるついてに稀にあふこひといふことをよませ給ける
今上御製

あはぬまも忘るゝとしはなけれとも又おとろかす面影そうき
前大納言爲世卿

をのつから待えて今宵はらふとも枕のちりはまたやつもらむ
宰相典侍

絶はてぬ契りをしらて水の泡のうかりしせゝに消なましかは

臨永和歌集巻第八

戀歌下

忍被忘戀といふことを
前參議爲皆卿

かひなしや餘りあたなる契りにて忘らるゝ名の立ぬはかりは

後宇多院にめされける十首歌中に被忘戀
中納言公明卿

なからへていつをか待ん同しよにありと計りも人のしらすは

戀の歌の中に
前中納言季雄卿

たのみなく忘られしみのおなし世に有はかりこそ契り也けれ
院御製

うきにこりぬ習ひもさすか恨あれは今はと思ふ程そかなしき
彈正尹忠親王

あたにのみ誓ひしすゑのなり行は神をも人やわすれはつらん
前參議雅孝卿

今更にうきみからともいひなましかはる心のゆへをしらはや
前權僧正慈嚴

ことの葉のかれ行まゝにあらはれぬしたにうつろふ人の心は
藤原貞經

いつまてかおきのはならてをとつれし人の心の秋のゆふかせ
藤原行朝

あふことはさて山陰のわすれ水むすひ絶てもぬるゝ袖かな
藤原基明

さすかなを聞すてさりし松かせの今はよそなる夕暮の空
多々良頁貞

難波江やこと浦かけてひくしほの早くそ人は遠さかりぬる
前中納言公脩卿

今は身のよそになるとのおきつ浪立ゐるにぬるゝ袖をみせはや
萬秋門院

嘉元百首歌に逢不遇戀

いつなれし面かけそともかこたれす只身にそふを慰めにして

題しらす　兵部卿邦親王

何とたゝおとろかすらん待なれし契りはよその入相のかね

藤原行房朝臣

逢事のけに絶はてゝはせめてたゝ忘るはかりのうきふしも哉

平範貞

つらさのみかさなる山のみねの雲へたつる中そ遠さかり行

藤原基夏

契りしはさなから夢になりはてゝつらさはかりや現成らん

平重雄

心には思ひこりぬる夕暮を忘れぬものは涙なりけり

絶戀を　慶運法師

思ひやれさすかあふせの有世たに袖のみぬれしなか川の水

文保百首うたたてまつりける時　春宮大夫公宗卿母

なをさりによとむとみえし中川のつゐに逢瀬のたえにける哉

題しらす　院御製

うきをみるこのころしもそ哀なるありはつましき命と思ふに

春宮大夫公宗卿

いかにせん殘るかたみの面影もへたてはてぬる中の契りを

万秋門院

いかなれは思ひたえてもよひ〳〵に待しならひの忘れさる覽

人のもとにつかはしける　よみ人しらす

あたなりし昔の夢の名殘をもよになからへてみるよしも哉

かへし　平英時

うつゝにそ我はしのふるうき人の夢になすてふ契りなれ共

文保百首うたたてまつりける時　春宮大夫公宗卿母

をのつから思ひ出てもとはれぬは同し世になきみとや知らん

題しらす　よみ人しらす

今更にうらみやりてやわすらるゝみは同しよに有と知られん

玄観法師

まれにのみかくるなさけとうらみしにそをたに今は忍ふ比哉

能譽法師

ふみ分しをかのかれ草かれ〳〵にかよひたえたる水くきの跡

民部卿爲藤卿家に三十首歌よみ侍りける時逢不遇戀　頓阿法師

思ひいてよつたのほそ江をこく船の行あふ中は遠さかるとも

同しこゝろを　慶儕法師

今は唯これをかきりの分れそといはさりしこそたのみ成けれ

藤はらの行房朝臣

今はまた殘るかたみもなかりけり面影たにもさたかならねは

題しらす　よみ人しらす

夢ちこそせめてまたるれうつゝには立歸るへき契りならねは

本空法師

遠さかる面かけしたふひとりねに忘れかたみの夢そはかなき

春宮大夫公宗卿母

忘られぬかたみもつらしよしさらは月もみしよに面變りせよ

前權僧正慈隆

いとゝしくちりこそ積れ我さへにうとく也行ねやのさむしろ

平貞俊

忘らるゝ後はさなからあらぬよに猶もとのみと思ふはかなさ

淨觀法師

露霜のをかへのまくす日にそへてかれ行なかをなを恨みつゝ

元亨四年三月盡内裏にて三首歌講せられ侍けるに忍恨
戀　刑部卿惟繼卿
せきかぬる涙に袖も朽ぬへしうらみけりとやつゐに知られん
題しらす　權大納言通顯卿
つらしともいはてこそみめ中々に恨みはつへき我みならねは
源高氏
言のはにいてぬ先よりもりそめて涙そひとをまつうらみける
前中納言資名卿
かれはつる野原のまくすうらみてもかひなき中は言葉そなき
丹波忠守朝臣
まくす原またも歸らぬ契りゆへくやしやなにと恨みそめけん
本空法師
さのみたゝ恨みけりとや思ふらむうきみをしろも同し涙を
法親王聖
いはぬにもしろらむものを今ははや言葉もなきつらさ成とは
嘉暦四年三月内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつ
りける時怨戀　權中納言爲定卿
かす〳〵にいかてかこたん思ふにも云にも餘る人のつらさを
戀歌の中に　永福門院
思ひしるひとふしをたにみせかぬる心よはさそ我なからうき
中宮大夫實忠卿
年ふれは涙はかりそ色かはるつらさは同しこゝろなれとも
今上御製
なからへてうきをもしはし恨みはやさこそはかなき命也とも
元亨四年二月内裏にて人々十首うたつかうまつりける
時恨戀　權中納言具行卿
つらくとも恨みはてしと思ふこそせめてもしたふ心也けれ
藤原冬隆朝臣
さても猶かはりはてぬるつらさかと恨みて人の心をやみん
寄枕戀を　平貞宗
思ひわひうちぬるよひの手枕もうくはかりなる我涙かな
怨戀を　春宮大夫公宗卿母
自らきくもぬるよのあらはこそつらきかきりと恨みてもみめ
前大僧正覺圓
恨みしと思ひし物をみをしらぬ心をさへにまたそみえぬる
題しらす　藤原信平朝臣母
涙かはうきせに沈むむもれ木の朽たにはてぬみをいかにせん
女藏人万代
立かへり我みのうさを思はすは人をつらしとなをやかこたん
惟宗忠秀
心にもまかせぬ物はうきことを思ふにあまるなみた也けり
法印長舜
しゐて猶泪そおつるうらむとも今はみえしとおもふたもとに
權僧正道我
ひとすちにうらみはてしとおもひしは猶末たのむ心也けり
二品法親王覺
徒にうきとしなみをかされてもほさぬそてしの恨てそふる
從二位隆教卿
しほたるゝうきみを浦の夕煙いかなるかたになひきはつらん
關白前左のおういまうち君
枯はつるわかみを秋のまくす原うらみし風のたよりたになし
爲明朝臣

よしさらは思ひもしらてすくしてんつらさも人の浮な成けり

前内おほいまうちきみ

よしやたゝなにはの蘆のうきふしに恨みはてぬる中の契りは

平貞宣

絶戀

なかく\に絶はてにけり人しれす忍ひし比はかけしなさけも

臨永和歌集巻第九

雑歌上

中務卿みこの家にて題をさくりて人々歌よみ侍けるに

浦船　爲明朝臣

しきしまややまともろ人ひとかたにもらさす渡せわかの浦舟

題しらす　大納言親房卿

鳥のねに猶そ驚くつかふとて心のたゆむひまはなけれと

永福門院

聞わひぬねさめのまとはよふかくてまきのとくらき曉の雨

院御製

こと\はんふるき軒はの松の風たかうへそめし宿のなさけそ

元亨二年四月龜山殿にて五首歌講せられける時名所瀧

前大納言爲世卿

みとりなる梢に高くうちはへて落るとなせの瀧の白糸

文保百首うたたてまつりける時

前關白左のおほいまうち君

天の戸ものとかにあくるしのゝめのかすみよりたつ春の色哉

江早春といへることを

兵部卿邦親王

みなと風のとかになりて春のくるなこの入江ははや霞みけり

題しらす

前中納言資名卿

みゆきふり猶風さゆる谷のとにをのれときしる鶯の聲

二品法親王慈

谷の戸をはや鶯も出にけりうきよはいつか春をしるへき

彈正尹忠親王

春といへはをのか時しる鶯のなとか物うき音には鳴らん

万秋門院

春しらぬみは鶯の谷の戸をいてかてに啼聲そきこゆる

權少僧都實性

けぬかうへにまたふりそへて去年よりも深きみ山の春の淡雪

前中納言資冬卿

ぬきをうすみ霞の衣立そめてまた空寒き春の山かせ

嘉暦四年三月盡内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時霞

中務卿尊親王

難波かた波の立ゐもみえわかて入江のとかに霞春かな

題しらす

達智門院兵衛督

をしほ山峯の霞の深みとり松にそ春の色はみえける

平貞宗

まつらかた波ちのすゑをみ渡せは霞みも遠き春のあけほの

二品法親王慈

打出し波さへけさは谷かけのさゆる岩まに又こほるなり

二品法親王覺

けふもまたなかめくらせる春雨の降は涙とぬるゝ袖かな

法印隆淵

世のうさもわすれやすると山櫻人よりもなをわきてこそまて

中原政宣

よしさらはまかひもはてよ白雲のかゝるを花と詠たにせん　前參議爲貫卿
百敷やみしよの櫻わすれすはそらふく風のことつても哉　法印長舜
花をみてうきを慰む程はかり春にあひぬとみを思ふなり
前大納言爲世卿よませ侍し花十首歌中に
櫻咲あまのかく山出る日にたか衣手のにしきほすらん　權律師淨弁
今上いまたみこの宮と申ける時人々題をさくりて歌合し侍けるに山花　刑部卿惟繼卿
置露もめくみそふらし時にあふ春のみ山の花のさかりは　法印隆淵
折花といふことを
櫻花うきみのためのかさしとてたおらは人のなをやとかめる　藤原重綱
花のうたのなかに
今ははやほかも尋ねすわか宿の花をそ老のなくさめと見る　二品法親王覺
とゝめあへぬよはひを花にたくへても今年やかきり春の山風　宰相典侍
春毎にみ侍ける花の老木になれりけれはよめる
諸ともにあはれはしるや春をへて花も老木の色そさひしき　源清兼朝臣
題しらす
染てけるこゝろもくやし櫻花うつろふ色のはてのつらさに　兵部卿邦親王
時しあれはこしちの雁もしる物をうきみの春よ誰にとはまし　春宮大夫公宗卿
なれも又うつろふ花の色やうき散をもまたて歸る鴈かね
歸る鴈なのかわかれをたかゝたのつらさになしてねをは鳴覽　藤原盛德
いとふへき雲はかゝらぬ月影をおほろにみする春の空哉　爲道朝臣女
雨はるゝ山の姿のみしめなははなはしろ水にひきやそふらん　よみ人しらす
左のおほいまうちきみ
咲りともいはぬ色なる花なれは人こそとはれ庭の山ふき　權中納言爲定卿
文保百首うたたてまつりける時
さかはまつ行てこそみめみよしのゝおほかはのへの藤の初花　藤原爲親朝臣
葵をよめる
しろらめや其かみ山の諸かつらかけてかひなきみを祈るとは
内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時卯花　中務卿尊親王
白妙の色こそまされ夕つくようつろふ庭に咲る卯花
文保百首うたたてまつりける時　春宮大夫公宗卿母
なれたにもあはれとおもへ郭公ことかたるへき友もなきみを　伴經清
題しらす
郭公思ひもよらぬひと聲はきゝての後そおとろかれぬる　修理大夫資任卿
諸ともになれもとわたる郭公猶ことかたれなみちいそかて　今出川院近衛
人ことによそふる袖はかはれとも花橘は同し香そする　源清兼朝臣
いか計り水まさるらむ五月雨に雲のみをなるふしのなるさは　法親王承

たのつから晴ぬとみゆる高ねよりまたたちのほる五月雨の空
永嘉門院周防
さみたれのしはしはれ行雲間より影めつらしきみしかよの月
惟宗光吉朝臣
夏の夜も思ひしよりは明やらて鳥のや聲も月に鳴也
よみ人しらす
まとのうちは竹のはくらきみしかよに殘るもしらて月そ明行
うへのをのこども歌合し侍ける次に夏夜言志といふこ
とをよませ給ひける
今上御製
みしか夜ははや明方と思ふにも心にかゝるあさまつりこと
照射をよませ給ひける
新院御製
ともしする今たにくらき夏山にまよはん後のやみはしらすや
題しらす
よみ人しらす
うかひ舟山もとくたすほとみえて木すゑにうつる篝火の影
藤はらの貞冬
茂りあふ草のはつかに道はあれと猶分まよふのちのしのはら
源清兼朝臣
茂りあふなつのゝ草に思ふ哉よのひとことのまよひやすさを
法印隆淵
うつもれて年をふるのゝ夏草にみをもかくさて飛螢哉
前大納言爲世卿家にて三首歌講し侍けるに螢を
爲明朝臣
あさからぬをのか思ひとみせなから猶山のゐに飛螢かな
文保百首うたたてまつりける時
少將内侍
このさともすゝしくなりぬ夕立の雲ふきをくる峯の松風
納涼の心を
藤原貞經
時わかぬ松の木かけのゆふすゝみ秋にはあらて秋風そふく
内裏にて人々題をさくりてうたつかうまつりける時夏
祓
權中納言隆資卿
あはれとは神そしるらむみそき河波の立ゐによをいのるみを
題しらす
前内のおほいまうちきみ
窓ちかき竹のは風のひとよにはすゝしくかはる秋はきにけり
惟宗忠秀
を山田のいなはのかせの音たてゝ露も置あへす秋は來にけり
前參議爲實卿
ふる郷に歸らむまてと思ふみをしほりなはてそ秋の初風
前大僧正聖圓
色かはる紅葉ならてもしられけり秋は立田の山の夕かけ
平守時朝臣女
さすかまたみにしむ程はなかりけりけさふきそむる荻の上風
正中二年七月内裏にて七夕契久といふことを講せられ
けるとき
大納言親房卿
雲のうへにちとせの秋をかそふれは契りも久しほし合の空
内裏にて人々題をさくりてうたつかうまつりける時荻
風
中務卿尊親王
荻のはの露ふきしほる秋風にあらぬ涙そまつみたれける
行路萩を
藤原爲嗣朝臣
宮城のやこれよりほかの道もかな分るもおしき秋はきの花
後花山院内大臣家に五首うた講し侍けるに月前草花
頓阿法師
風をまつ露ともしらて宮城のゝもとあらの小萩月そうつろふ
題しらす
平宗知

水くきのをかへの薄打なひき露も置あへす秋風そ吹く
藤原重綱
さひしさにつれなくたへて我もしか鳴てそ忍ふ秋の山里
寳賢法師
鴈かれの鳴つるなへにを山田のいなは色つく秋の白露
前參議爲實卿
月影もむかしかたりになりにけりなれしさかのゝさを鹿の聲
あつまに月をみてよみ侍りける　前參議雅孝卿
おもかけも月にとゝめて雲の上につかへし秋そさらに忘れぬ
月のうたとて　二品法親王慈
つれなくて同しみやこの月もみつうき世を秋の心なかさに
藤原光章
いつまてかくもらぬかけを詠めけん老の涙の秋のよの月
藤原基明
老てみる月やあはれと思ふらむわか行末の秋そすくなき
三善爲連
とへかしなさひしさまさる山里にひとり詠むる月はいかにと
高憲法師
たれをかは友とたのまん山里にさひしさたへて月のすますは
平氏村
月よなと世のうき事は慰さまてみるにもいとゝ袖のぬるらん
藤原光兼
ひとよぬる手枕の野の秋の月そてにやとせと露や置らん
藤原光政
てりまさる月の桂はなか／＼に時雨れぬよはや紅葉しつらん
題しらす　前權僧正慈勝

影やとす野中のし水行かたのなきにも月は猶そなかるゝ
津守國夏
秋風にころもてさむみなか月のあり明の月をひとりみる哉
侍從辭退し侍ける秋のころ虫のこゑを聞てよめる
藤原爲隆朝臣
秋をへて我身ふりぬる鈴虫のよそになるにも音社なかるれ
秋のうたのなかに　藤はらの貞忠
ほのみつる海士のつり船かすそひて朝霧はるゝ浦のはつしま
藤原長周
山本はなをはれやらむ朝霧に梢みえ行三輪の神杉
平光平
分すくる野原は猶もたちこめて朝日にはるゝ峯の秋霧
遍正法師
秋風はおなしよさむのから衣まつたか里にうちはしむらん
津守國夏
かたをかのをしれ色付霜の上に秋の朝日の影そ寒けき
山家百首うたよみ侍ける中に菊を　入道親王尊
思ひ入山路のおくの菊の露打はらひてそ世をはのかれし
秋のうたの中に　彈正尹忠親王
はゝそ原かつちる山の秋風に雲もたえ／＼時雨てそ行
雨後紅葉を　源重泰
村しくれそめける程もうき雲のはれてしらるゝ峯の紅葉は
權律師淨弁
紅葉はに露をのこして村時雨今ひとしほの色やそふらん
嘉元百首うたたてまつりける時九月盡
前大納言實教卿

長月の日數にかへてみをさらぬ秋のこゝろをいつちやらまし

元亨元年十月龜山殿にて人々題をさくりて歌合つかうまつりけるとき時雨

いとゝまたなみたをそへて村時雨ふり行みこそ袖はぬれけれ

同し心を　兵部卿邦親王

物思ふなみたゝになを隙なきになにと時雨の袖にふるらん

內裏にて人々題をさくりてうたつかふまつりけるに

權中納言隆資卿

はれやらぬ涙をそへてうきなから世にふるともは時雨也けり

題しらす　道意法師

神無月時雨もいとゝしからきのとやまさひしき曙の空

藤原冬隆朝臣

うき雲をたえ〳〵さそふ山風に日影はみえて降時雨かな

宇治種政

すみなれしはの庵もあれぬれは袖に時雨のもらぬよそなき

津守國夏

立田川おちても水にうかふ也なに流たる峯のもみちは

源久嗣

我宿の軒はのこけやふかゝらむをとたにたてす散このは哉

從三位藤子

ふみ分て入にし人のあともなしつもるこのはの深き山路は

よみ人しらす

冬草のむすほゝれ行庭の面に木のはふきまく山の下風

田部善綱

ふきたつる嵐の音そよはり行霜置まさる庭の紅葉は

浦千鳥をよめる　藤原利尙

わたの原行舟もみえぬ夕暮の遠き波ちに千鳥鳴也

藤原信平朝臣母

もらすなよわかの浦はのさよ千鳥あとは昔の數ならすとも

宮內卿資明卿

もしほ草あとこそのこれ濱千鳥千代にあまれるわかの浦波

達智門院

しかの浦やこほる波まに鳴千鳥とをさかり行聲そさひしき

瀧水といふことをよませ給うける

今上御製

冬ふかみ山風さむき瀧つせの中なるよとやまつこほるらん

題しらす

二品法親王慈

さえまさるひら山颪吹からに氷りてけりなしかの浦波

式部卿恒親王

みやこにはふるともみえぬ初雪のとやまに白き今朝の朝あけ

尾張久重

おちはふく風にみたれて庭の面につもりもやらぬけさの白雪

平重棟女

ふく風もしはしはかりそはらひける雪ふりつもる高砂の松

後稱念院前關白太政大臣家讃岐

ふみわけん人のなさけもならはれはあとのみおしき庭の白雪

權大僧都雲禪

くれかゝるまかきは山とふる雪に猶もとまらて年やこゆ覽

入道親王尊

すてやらぬ心ひとつのやすらひにうきよなからに年も暮行

臨永和歌集巻第十

雑歌下

正中二年八月十五夜内裏にて人々題をさくりて歌合し
侍けるに月前露　前關白左のおほいまうちきみ
身にあまるめくみの露の袖上に光をそへてすめる月かけ

嘉元百首歌たてまつりける時月　前大納言實教卿
おほ空の月をはいかゝ宿すへきみはかすならぬ袖のせはさに

前大納言爲世卿よませ侍ける春日社三十首うたに　藤原行房朝臣
よしさらは月たにくもれかく計世に住かたきたくひともみん

題しらす　宰相典侍
たくひなき秋のあはれや是ならむひとりみ山の有明の月

平　有　時
松風の音よりも猶さひしきは同しおのへの入相のかね

藤原盛徳
呉竹の世をは遁れて木にもあらす草にもあらてみこそ老ぬれ

二品法親王覺
風渡る竹のはすゑにちる露の世にとまらぬは心なりけり
あとゝめて誰かはとはん山ふかみ我さへまよふ苔のかよひち

永福門院
山里の軒はにそよくしゐしはのしゐて浮世にいつ迄かへん

元亨四年二月後宇多院にめされける石清水三首のうた
合に山家眺望　權中納言爲實卿
軒ちかくたなひく峯の雲間よりたえ〳〵よもの空そ晴行

山家心を　彈正尹忠親王
をくら山このしたしはのしはしとて結ひし庵も年そへにける

前權僧正慈嚴
のかれこしみ山の奥のすみよささそ猶よにとまる心なるへき

はしめて山寺にすみてみやこなる人のもとに申つかは
し侍ける　よみ人しらす
すみそむる宿をうきよのかとてにて猶雲ふかき山を尋れん

かへし　源　重　泰
尋ぬへきあとをはのこせ雲ふかき山のいつくに思ひいるとも

題しらす　平　貞　宗
のかれくる身のかくれかの山里は煙のすゑもよそにしらるな

平　氏　村
さひしさをよのうきことに慰さめて住なれにける山のおく哉

元守法師
かきこもるみ山のおくの篠のいほよのうき事そよそに成ぬる

法印公順
あらましに思ひしまてそ山里はうきよの外のすまひ也けり

二品法親王覺
月にねぬをたのかり庵よころへて露もさなからをきあかす也

前參議爲實卿
あさてほすかとたの庵に宿かりて畔もる水のすむとしもなし

中原元宣
はるかなる田面の庵はみえわかて稲葉のすえに立けふりかな

覺玄法師
秋の田のかりねもさひしいなむしろしきたつ庵の曉の空

平維貞あつまより都へ登りける時寄月契後會といふこ

となよみ侍けるに　平貞俊

めくりあはんたのみはたれも有明の月よそれ迄面かはりすな

關路をよめる　藤原文重

あふみちを朝立行はほの〳〵と霞を越るあふ坂の關

旅のうたの中に　前參議爲實卿

心さへあくかれにけり朝あらしの時雨をくりしふた村の山

文保百首うたたてまつりける時　少將内侍

けふや猶ゆくへき末の遠からんあけぬよなからいそくたひ人

巴猿三叫曉霑行人裳といふことをよませたまうける　院御製

さよふかみみ山のさるのみさけひにたひ行人も袖やうるほす

文保百首うたたてまつりける時　權中納言爲定卿

やすらひに我ふる郷を出しよりやかて日數のつもる旅かな

二品法親王覺家の五十首うたに　法印公順

たひ衣立わかれてそふるさとは思ひしよりも戀しかりける

題しらす　よみ人しらす

都出し袖の涙もほさぬまにまた露はらふのちのさゝ原

平英時

里まてはまた行やらてあふひとにかれてやとゝふ夕暮の空

二品法親王覺

またしらぬ野山の嵐みにしみていくゆふ暮の宿をとふらん

藤原爲嗣朝臣

こまとめていさかりねせんたか嶋やうちのゝ原の草の枕に

遍昭法師

行末の宿をはしらす草枕こよひいかなるのへに結はん

田部資道

都にてみしよの月のそのまゝにともなひきぬる旅の空哉

崇意法師

みやこいてゝいくよかくさのかり枕結ひ定めぬ夢をみつらん

侍從忠定卿

さゝ枕ひとよはかりのふしのまは都にかよふ夢そみしかき

民部卿爲藤卿家に題をさくりてうたよみける時旅宿　藤原爲親朝臣

かれの音の聞ゆる里ははるかにてのへにそ結ふ草の枕を

旅宿風といふことを　前大僧正覺圓

ふる郷にかよふ夢ちもたえねとや今宵はいたく松風そふく

羈旅のうたとてよめる　能譽法師

都ひとかよふ夢ちやたとるらんよな〳〵かはる草の枕に

達智門院兵衞督

旅ねする夢はさなから都にてさむるうつゝはうつの山越

藤原盛徳

しけりあふつたの下道わくらはにあふ人もなきうつの山越

よみ人しらす

うつゝにはあふ人もなしうつの山夢てふ物にことやつてまし

文保百首うたたてまつりける時　春宮大夫公宗卿

聞馴しあらしの音をさきたてゝひとりそ越るさよの中山

心のほかなることにてみちのくにまかりけるにたけくまの松をみてよみ侍ける　よみ人しらす

ふる郷にいつか歸りてたけくまの松をみきとも人にかたらん

海路を　祖月法師

あまをふれをし明方の波間よりほのかにみゆる末の松山

源重泰

しるへする沖つふなちの鹽風にとを嶋みえてはるゝ朝きり

旅泊の心を　惟宗光吉朝臣

夢にたに都は遠きうきねかなならはぬ波の音はかりして

宮内卿資明卿

ふての海言葉のはやしとにかくにさかしき道に迷ふくるしさ

天台座主になりてはしめて山へのほりてよみ侍ける　前大僧正慈勝

今もなを五代ふりにしあとゝめて同しさかゆくみとそ成ぬる

龜山殿の月五十首歌に　前大納言爲世卿

たれかまた八十に近くこゝのよの君につかへて月をみるらん

述懷のうたのなかに　權大納言通顯卿

のほるへき我たらちねの位山今ひとさかを待そくるしき

兵部卿邦親王

おり〳〵に袖こそぬるれ何事を恨むるとしはなきみなれとも

寄月述懷といふことをよませ給うける　院御製

みこそ今くものかよひちへたつともなれにし月よ昔忘るな

のそみ申ことゝこほり侍ける比從一位定房卿もとによ
みて遣しける　爲明朝臣

今はよしきこえなあけそ蘆田つのすみえぬ澤に音をは鳴とも

述懷のこゝろを　源高氏

これのみやみの思ひ出と成ぬらん猶かけそめしわかの浦波

續千載えらはれける比歌をかきあつめて內裏へたてま
つらせたもふとてつゝみかみにかきつけられ侍ける　達智門院

玉ならぬわかの浦はのもくすをも君みかゝはとかき集めつゝ

御かへし　今上御製

みるからに心移りてわかの浦やみかける玉をわきそかれつと

前大納言爲世卿家にて題をさくりて歌よみ侍しに述懷　前大納言實教卿

いとはんとむかしたに世を思ひしに老ては何か猶忍ふ覧

たいしらす　平久義

身のとかに思ひなさすはいかはかりうきよに殘る恨ならまし

平重村

あらましのなをよの中に殘るこそうきみにこりぬ心成けれ

宰相典侍

ありてうき命もさてやをしからむ我あらましの末もとをらは

道意法師

うきは世にならひとたにも慰さまてたゝ我からとみを歎く哉

平氏村

あらましに心ひとつをなくさめて浮世をしらぬみとそ也ぬる

述懷のうたあまたよみて北野社にたてまつりける中に　前參議清忠卿

うき事の限りみぬまはさりともと我あらましにみをそ賴みし

述懷の百首うたよみ侍りける中に　前權僧正雲雅

うきことも年にそひてやまさるらん昔はかゝる物や思ひし

懷舊のこゝろを　今出川院近衞

むかしはと忍思はるゝ我袖はいつより後の涙なるらむ

藤原貞千

物思ふ涙に月を見る時そなをいにしへの秋はこひしき

公賀法師

何事か身の思ひ出ととふ人にかたるはかりもなき昔哉

平重棟

思ひ出はそのことゝなきよなれ共猶忍はるゝみのむかし哉
前權僧正慈慶

さすかまたおもひそ出る折々は戀しき迄の昔ならねと
前權僧正雲雅

題しらす

思ひしるかひこそなけれ世中をうしといひても背きはてねは
前大僧正道意

吳竹のよのことはりと慰めてみのうきふしもよしやなけかし
平守時朝臣女

いかにせん世のうきたひにいとへとも心の末の誠ならぬを
權大僧都雲禪

思へはそうきもつらきもなけかるゝわか身のあたは心成けり
前關白右のおほいまうち君

うつゝとも夢ともいつを思ひわかん昔も今も同しうき世を
春宮大夫公宗卿母

ぬるかうちの夢も變らぬ同しよは何をうつゝとわく方もなし
院御製

むは玉の夢てふ物は哀なるみぬむかしにもかよふと思へは
よみ人しらす

うつゝこそはかなかりけれむは玉の夢にはかへる昔なれとも
藤原敦秀

さめて後あたなる夢と思ふこそやかてはかなきうつゝ成けれ
源英嗣

古もぬるかうちにはみゆれともうつゝの夢そまたもかへらぬ
性仙上人

無量義經のこゝろをよめる

さしのほる朝日もけさは霞つゝち草もえ出る武藏のゝ原
入道親王尊

大日經住心品如實知自心

思ひ入みのりの道もとをからす心ひとつのまよひなけれは

前大僧正公證わかひとなかれすゝうけてとよめること
をおもひいてゝ
前大僧正桓守

むすひをくわかひとなかれかはらすは今もよにすめ谷川の水

元德二年二月中殿にて花契万春といふことを講せられ
ける時
藤原爲忠朝臣

吹風ののとけき春と咲花は万代かけてちらすもあらなん
左のおほいまうちきみ

祝のこゝろを

明らけき雲のうへ迄すむ月の千とせのかけを君そみるへき
新院御製

千早ふる神のたもてる我國のあまつひつきは今もたえせす
二品法親王尊

寄松祝といへることを

我君の千よをやちよと祈るまにみきりの松そとしふりにける

右臨永和歌集以橫田茂語本挍正

和歌部十二

藤葉和歌集卷第一

春歌

文保三年後宇多院に百首歌奉りける時春たつ心をよみ侍ける
後西園寺入道前大政大臣實兼
雲井より春たちくらし朝つくひ霞て出る天のかく山

元亨三年七月龜山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりける時
前大納言爲世
あし曳の山の端はれて春のたつ日影はけふもかすまさりけり

嘉元元年百首歌よませたまふけるに立春の心を
後二條院御製
春たつとおもひあへぬにのとけきは出る朝日や空にしるらん

おなしく後宇多院に百首の歌奉りける時春雪
後照念院關白前太政大臣冬平
空はなをふりにし年にかはられと積らぬ雪に春そしらるゝ

三十首歌めされし次に雪中鶯といへることをよませ給ふける
法皇御製
鶯のおのかなく音は春なれとねくらの竹をうつむ白雪

文保三年百首歌奉りける時
民部卿爲藤
呉竹の夜半のともし火殘るまにねくらあけぬと鶯そなく

三條入道前大政大臣
春來てはまたるゝものと鶯も人のためにや初音なくらん

後山本左大臣實泰
春やときまた花さかぬこすゑにも霞とすれは鶯の聲

春氷を
今出河院近衛
よし野川こほりとけゆく岩なみのはやくも今朝は春風そ吹

文保三年百首歌奉りける時
芬陀梨華院前關白內大臣內經
立かへりなを春さむし谷陰やうち出し淚のまたこほる迄

春雪をよみ侍ける
前大納言尊氏
咲梅の花はさなからうつもれて雪こそ匂へ軒の春風

嘉元元年伏見院三十首歌中に
永福門院
時しもあれ峯の霞はたなひけと猶山寒し雪の村消

題不知
二品法親王承覺
ぬきうすき霞の衣袖さえて風もたまらす淡雪そふる

元亨三年八月十五夜後宇多院に月五十首歌たてまつりける時
權中納言公雄
春の來てけふ三日月の山端にかすみそめたる夕くれの空

文保三年百首歌奉りけるとき
今出川前右大臣公顯
ふるとしの雪もけぬめりいましこそ若なつむらめ春日のゝ原

民部卿爲定

かつきゆるをちかた野への雪まより袖みえそめて若なつむ也
後西園寺入道前大政大臣
春のきる霞の衣なをさむみもとの雪けの雲そたちそふ
嘉元百首歌に霞をよませ給ふける　龜山院御製
おもかけやはるの空にもたちぬらんわけて霞の色は見えねと
春山といへる心を　法皇御製
山ふかみ霞のそこのあさほらけ宮古の春をふもとにそみる
春の歌とてよませ給ふける　後宇多院御製
山高み花よりさきの春の色をのとかにみせて立霞哉
家に五十首歌よみ侍ける時　二品親王覺助聖護院宮
もしほやく煙はそれと見えわかて霞にしつむ春のうら波
文保百首歌奉りける時　權大納言公宗母
よさのうらや霞わたれる夕なきにたえ〳〵みゆる天の橋立
前大納言俊光
雲の色はまた暮はてぬ空なから霞にきゆる遠の山端
龜山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりける時　民部卿爲藤
大井川岩間の浪のよとむ瀬もあさくは見えす立霞かな
柳を　彈正尹忠房親王中西宮
枝をそめ波をもそめて青柳の糸にそかゝる庭の池水
伏見院に三十首歌めしける時夕梅を
後照念院關白前大政大臣
色みえぬ軒はの梅もにほひきて夕へそ風のなさけをもしる
正二位隆教
咲そむる軒はひとつの梅か香をよもにやをくる春の夕風
二品法親王覺助
そことなくさそはれわたる梅か香もやとりさためぬ春の夕風
あつまにて歌合し侍ける時梅花遠薫といふことをよみける　藤原爲道朝臣
そことなき風にうかれて梅か香を袖になれぬる春の夕暮
前參議雅有
いつくよりさそひきぬらん我袖に梅か香うすく春風そ吹
三十首歌に行路梅といへることを　永福門院内侍
あかなくにえそ過きやらぬ道のへやあるし床しき宿の梅かゝ
龜山殿七百首歌中に　前大納言爲世
さきしより軒はの梅の匂ひをは花にもそへす春風そ吹
落梅　權中納言公雄
見るまゝに花のかゝみそくもりゆく木の下かけの庭の池水
霞間歸鴈といへることを　爲道朝臣
山のはに霞のとたえほのみえて數あらはるゝ春のかりかね
歸鴈を　前關白左のおほひまうち君
思ひ立雲の通路をからしあかつきふかくかへるかりかね
三十首歌よませたまふける中に　院御製
くれはてゝ色もわかれぬ花の上にほのかに月の影そうつらふ
春月を　淨妙寺關白前右大臣家基
みるたひに霞むは春のならひそとおもへとつらき月の影かな
同し心をよみける　前大納言實教
うき雲をへたつるかひもなかりけり霞めははれぬ春の夜の月
三十首歌奉し時　權中納言公蔭正親町
雪さそふあらしに空はなをさえて霞まぬ月は春ともなし
法皇御製
ふけぬるか霞にしつむ月影のそこも見えてかたふきにけり

春こまを

夕霞たちのにあるゝはなれ駒つなきかたしや春の心は　前大僧正實超毗沙門堂

題しらす　二品法親王寛尊大覺寺

たちのほる雲のとたえも見えわかて山端くるゝ春雨の空

後宇多院にさふらふ人々題を探て歌つかうまつりける

に春雨を　後山本左大臣

草木まてもるゝもあらし君かよのめくみあまねき春雨の露

伏見院に三十首歌たてまつりけるに庭春雨といへるこ

とを　前大納言爲世

わか草のみとりをこえて庭たつみなかれもゆかす春雨そふる

文保百首歌に　前參議雅孝

みなと江の浪よりうへにもえ出て末葉みしかきあしの一むら

題しらす　よみひとしらす

さすかまた春をかされて待なるゝ心つくしは花もしるらん

正中二年百首歌奉りける時　權中納言公雄

おもかけはまつさきたちてしら雲のたな引山に花を待かな

待花の心をよみ侍ける　左のおほいまうち君洞院

心あてに花かとみれはさかぬまはにほはてはるゝ峰の白雲

文保百首歌奉りける時　津守國冬

さきにけりいこまの山の櫻花雲をいとひし人に見せはや

題しらす　前僧正慈勝淨土寺

さきのこすたえまもあらは山櫻かされてかゝれ峰の白雲

嘉元百首歌中にはな　從三位爲信

咲つゝく花もかさなる峰こしにとを山たかくみゆる白雲

題しらす　よみひとしらす

いとゝまたわかてやみまし山櫻雲も匂ひのある世なりせは

わけゆけは山路そとをき程近くみえつる花の梢なれとも　法印實性

花の歌の中に　前中納言季雄

昨日まてまたれしものを山櫻花に日數をまたおしむかな

伏見院御製

匂へともそこともしらぬみやまへに花のしるへの風の嬉しき

元徳二年中殿にて花契万春といへることを講せられけ

る時　太宰帥世良親王河端宮

百敷のみかきの櫻咲にけり万代までの春のかさしに

民部卿爲定

九重の大内山そよはふなる花咲春はつきしとそおもふ

次の年の春西園寺に行幸侍て庭花といふことを講せら

れける次に　後醍醐院御製

宿からは花も心にとまるかな代々のみゆきのあとゝ思へは

後光明照院關白前左大臣道平

世々をへてみゆきたえせぬ此宿の花そ千とせのかさし也ける

龜山殿七百首歌に　民部卿爲定

いとゝしくあかぬ心を山櫻なれてしらるゝ花のかけかな

惟宗光吉朝臣

なのみして山はあらしもふかぬ日に梢の櫻のとかにそ見る

嵐の山の花みて又の日人のもとより花につけてさかの

やまわけしきのふの梢にもかゝるたくひの花や見つら

んと申送り侍ける返事に　前大納言尊氏

分入し昨日の山のこすゑにもかゝるたくひの花はみさりき

春風といふことを　伏見院御製

あすやいかにけふのなかめもあかぬまの夕の花に風たちぬ也

題しらす　榮子内親王

花にのみつらさしらせて吹としもよそにはみえぬ庭の春風

花の歌に　昭慶門院一條

さきしより心も花にうつろひてめかれぬ庭に春風そふく

前大納言公泰

うつろふもあたなる花のかり衣さのみ心をいかてそむらん

法印隆淵

心こそ外にうつられ色も香もおなしむかしの花の下かけ

花隔月といふことをよみける　丹波忠守朝臣

いとはしよ月をへたてゝかゝるともよしやよしのゝ花の白雲

家に歌合しける時春夜といふことを　前大納言爲兼

かつちるもこすゑもいまを盛にて月もる庭の花の下陰

題しらす　左兵衛督直義

なかめ侘ぬ雨にしほれて風にちる花はあす迄あらしと思へは

二品法親王尊胤

春風のさそふは同し梢にも先咲かたの花やちるらん

藤原冬隆朝臣

風吹はなみそたちそふ瀧の上の朝のゝ櫻いまかちるらん

永仁二年三月内裏三首歌に山路落花を　伏見院新宰相

こすゑよりちりかふ花を先たてゝ風の下行志賀の山道

卅首歌よませ給ふける時に　院御製

吹みたる花のしら雪かきくれてあらしにまかふ春の山道

題しらす　入道二品親王尊圓 青蓮院宮

ふりそはゝ道やまよはんよしの山またひとへなる花のしら雪

文保百首うたに　法印定爲

みよしのゝ尾上の櫻うつろひぬ空にあまきる春の山風

題しらす　崇明門院

うつろふを花のつらさになさしとてさそふ嵐やなさけなる覽

伏見院三十首うためしける時惜花心を

圓光院入道前關白大政大臣

春ことになれて久しき花なれは老てなこりのおしくも有かな

嘉元百首歌よませ給ふけるに　龜山院御製

命にもかへはやと思ふ心をはしらてや花のやすくちるらん

暮春花といへることを　後二條院少將内侍

おもほえす春そくれぬるあくかれし花に幾日の日數へぬらん

元德三年三月盡日内裏にて三首歌つかうまつりけるに

暮春落花といへることを　藤原爲明朝臣

春もはやくれなはなけの色見えてうつらふ花をさそふ山風

文保百首うたに　前權僧正雲雅

山吹の色にならはていかなれは井出のかはつの音にはたつ覽

池ふちを　侍從爲親

水の面にうつるを花のちるとみて咲よりおしむ池の藤なみ

權中納言公雄よませ侍ける北野社五首の歌に　前中納言公脩

咲ましる花かともみん松か枝に十かへりかゝれ池のふちなみ

暮春うたとて　彈正尹邦省親王 花町宮

花をみし日かすのほとはわすられて今さらおしむ春の暮哉

位におまし〳〵ける時うへのおのこ共三首歌つかうまつりける次に暮春曉月といへることを

伏見院御製

ゆく春のなごりをさへはそへしはや月たにあるを有明のころ

題しらす　權中納言公雄

しはしたにかすまてみせよ行春の別やいかゝあり明の月

くるゝ春の心をよませ給ふける　院御製

花もちり梢の鳥もこゑ老てあはれもことしも春のくれかた

藤葉和歌集卷第二

夏歌

更衣のこゝろをよみ侍ける　民部卿爲定

春過てけふぬきかふる唐衣身にこそなれね夏はきにけり

家に五首うた講しける同し心を　前大納言尊氏

昨日にも空はかはらてもろ人の衣の色に夏は來にけり

文保百首歌奉りける時　後西園寺入道前大政大臣

花もちり霞もきえし昨日けふ青葉の山の峯そまちかき

前大納言爲兼家の歌合に夏朝を　從二位爲子

夏あさき青葉の山の朝ほらけ花にかほりし春そ忘れぬ

卯花を　前大納言爲世

いとゝなを老のそらめに卯花をたそかれ時は月とこそみれ

左のおほいまうち君の家歌合に同し心を　權中納言公蔭

わすれては雪かとそみる卯花のかきれとかつは思ふものから

三十首歌めされし次に里時鳥といふことをよませ給ふ
ける　法皇御製

あし曳の山ほとゝきすなれをまつ里をはかれすこと問やせぬ

元亨三年七月龜山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりける時浦時鳥を　前中納言季雄

しをたれてまつとはしるや時鳥心つくしのすまのうら人

題しらす　藤原行朝 二階堂信濃入道

そのころとせめてたのめよ時鳥なかぬ夕へは心つくさし

郭公を　權大納言師賢

人つてになくともきかし時鳥我身にもらす初音ならすは

嘉元百首歌たてまつりける時同し心を　正二位隆教

鳴ぬやとくらせるよひは時鳥ねんかたもなくなをまたれけり

龜山殿七百首歌中に夢中時鳥といふことを　權中納言公雄 小倉祖

おもひねの心つくしの夢路にはみれともきかぬ時鳥かな

永仁七年四月後宇多院に三首歌講せられける時待郭公
を　前參議經宣 中御門

有明のつれなき月のかけよりもなを侍出ぬほとゝきす哉

夏歌の中に　前大納言資名 日野

夕くれの月より待しほとゝきす有明まても猶そつれなき

文保百首歌の中に　二品法親王覺助

待わひぬ心をしりて時鳥君のねさめにはやもなかなん

題しらす　恒雲法親王 城興寺宮

時鳥おいて待へきものそとはねさめよりこそ思ひしりぬれ

高階師直 武藏守

尋ね入山のかひあれ時鳥なく音はまたき里なれすとも

左兵衛督直義

かくはかりつれなきものを時鳥なくや五月とたれかいひけん

文保百首歌奉りける時　後照念院關白前大政大臣

それかとはまつきゝそめぬ時鳥さたかなる音を猶やまたまし

後西園寺入道前大政大臣

つれなさのたくひならしと有明の月にしもなく時鳥かな

題しらす　善成 王四辻少將

有明のそらになかすは時鳥月につれなき名をやのこさん

法印淨辨

建武二年内裏にて講せられける千首歌の中に夏動物を

よめる　民部卿爲藤

郭公なきて過行山端に今一聲と月そのこれる

元應元年内裏詩歌合に　大僧正賢俊三寶院

忍ひ音は雲間の月にあられとも空よりもらす郭公哉

題しらす

天の戸もまた明やらぬ深きよにしはしやすらへ山郭公

按察使親房家に詩歌を合せ侍りけるに夏朝を

ふちはら爲明朝臣

よひ〳〵に恨みなれたるつれなさを今朝はかたらふ時鳥哉

禁中時鳥といへることを

二品法親王承覺

郭公大内山をいてやらてはつ音は雲のうへになくなり

龜山殿七百首うたに野時鳥

前大納言經繼

時鳥しはしなすきそ武藏野はなきて入へき山のはもなし

關郭公を

按察使公敏

關の戸を明かたになく時鳥夕つけ鳥にいつならひけん

題しらす

中臣祐親

あけわたる卯花山のほとゝきす空にしられぬ月になく也

後醍醐院に三首歌講せられけるに時鳥を

民部卿爲藤

時しらぬみ山かくれはほとゝきす出て五月の音をや鳴らん

文保百首うたに

津守國冬

時鳥しのふのみたれかきり有て鳴や五月の衣手のもり

法印定爲

くれかゝる雲のはたてのたてぬきに聲のあやなる時鳥哉

たいしらす

ふち原爲嗣朝臣

あくるよの月かけしたふ時鳥聲さへ雲のいつこなるらん

三十首歌人々にめされける次に

ふし見院御製

かきくらし雨はふれとも時鳥雲ゐにたかき聲はしほれぬ

前參議爲實

かりそめの軒のあやめのしつくたにあまりて落る雨の夕暮

嘉元百首歌たてまつりける時盧橘を

前參議雅孝

むら雨のなこりの露やのこるらん風に玉ちる軒のたち花

三十首歌よませ給ふける時に同し心を

院御製

心にはちかきまもりの橘のたちなれし世そとをさかり行

龜山殿七百首歌講せられける次に

後宇多院御製

橘のにほはさりせはほとゝきす昔なからの宿もしられし

題しらす

前關白左のおほいまうち君

はかなしや花橘にしたひてもしらぬむかしの袖のにほひは

正中二年百首歌奉し時

前大納言實教

おなしくはうへけん人の袖のかをのこしてにほへ軒の立花

盧橘を

前僧正慈勝

ふるさとの軒のたち花いにしへに我をしのへと誰かうへけん

文保百首歌に

津守國冬

河やしろゆくせの水をせきかけて衣もほさすとる早苗哉

早苗を

彈正尹邦省親王

五月雨のはるゝをひまと小山田に此夕くれやさなへとるらん

五月雨をよみ侍りける　藤原冬隆朝臣

夏草もなみの下にやくちぬらん野しまかさきの五月雨の頃

よみひとしらす

鹽木たくけふりのすゑも見えわかすあこきか浦の五月雨の頃

兼好法師

もかみ川はやくそまさる天雲ののほれはくたる五月雨のころ

頓阿法師

名のみして山はあさひのかけもみすやそうち川の五月雨の頃

瀧五月雨を　中臣祐殖春日正預

さらしえぬ色かとそみる五月雨ににこりて落る布引の瀧

嘉元百首歌奉りける時五月雨を　従三位爲信

石はしる浪もをとせぬ山川のあさきせ見えぬ五月雨の頃

圓光院入道前關白太政大臣

五月雨は日數へぬれとしかま川うみにいてゝは水もまさらし

題しらす　前大僧正桓守

けふいくかふるからをのゝ五月雨にもとみし道も水の白浪

二品法親王尊胤梶井宮

おのつからはれまとみゆる五月雨の露ふきおとす松の下風

伏見院三十首歌めしけるとき　永福門院

かけしけきこの下やみのくらきよに水の音して水鷄なく也

水鷄を　春宮大夫實夏

夢をたに結ひもあえぬみしかよになにと水鷄のおとろかす覧

照射歌とて　藤原賴清朝臣

ともしするほくしのまつも徒にもえたにはてぬみしかよの空

夏月を　前大納言實教女

待わひてふけ行ほとに明にけり山端しらむみしかよの月

従三位吉子

なにはかたみしかきあしのよの程になかめはすてし夏の月影

夏曉山を　贈従三位爲子

有明とおもひそわかぬ山端はまたよひなから出る月影

題しらす　今出川院近衞

むら雲は空に跡なき夕立のなこりにつゝく宵のいな妻

遠夕立を　爲道朝臣

うき雲は風の便にさそはれて猶里遠き夕立の空

夏うた講せさせ給ふけるに　伏見院御製

一かたに木々のこのはをふき返し夕立をくる風そすゝしき

文保百首うたに　前大僧正道順

夕立の雲はありまの峯こえて露こそのこれいなのさゝ原

後山本左大臣

夕くれは澤へにしける夏草の葉すゑを渡る風そすゝしき

三十首歌めされし次に江螢を　法皇御製

あししける入江の水のくらきよにおのれまかはすとふ螢哉

おなし心を　よみ人しらす

難波江やあまのいさり火たくなはのうちはへもえて行螢哉

丹波忠守朝臣

ひろひける玉かとみえて伊勢の海の清きなきさに飛螢哉

權中納言公雄人々によませける北野社三首歌に螢を

前中納言公脩

雲井まてかよふ螢のかけをみて神もむかしや猶しのふらん

嘉元百首歌奉りける時同し心を　前參議雅孝

月かけもおよはぬ草の下葉まて照らす光はほたる也けり

文保百首歌の中に　二品法親王覺助
池水にさくや蓮の花の色もにこりにしまぬかけそ凉しき
夏のうたの中に　從一位禖子
しほれてそ猶色深きむら雨の露よりなひくなてしこの花
龜山殿七百首歌に庭瞿麥を　侍從爲親
くれなゐの色こそまされ夕附日さすやかきねの大和なてしこ
扇風秋近といへることを　昭慶門院一條
手にならすねやの扇のいかにしてまたき秋なる風さそふらん
贈從三位爲子
またきより秋のやとりやしりぬらん凉しき風をさそふ扇は
前大藏卿重經
吹風はまた秋ならぬ袖の上にならす扇のかれてすゝしき
夏の旅といふことを　左のおほいまうち君
ゆきかゝる木の下かけの夕すゝみ夏はいそかぬ山路なりけり
前大納言爲世
凉しさに幾木かけにか旅衣行すゑしらて立とまるらん
納凉のこゝろを　右近大將公淸
しみつくむ松の木かけに立よれは夏もわすれぬる哉
三十首歌めされし次に　法皇御製
夏山のしけき緑をへたてにて照日およはぬかけそ凉しき
文保百首うたの中に　後光明照院關白前大政大臣
なく蟬の聲より外は夏そなきみやまのおくの杉の下陰
前中納言爲相
谷ふかきまきの葉かくれなかれ出て日かけ移らぬ水そ凉しき
野納凉を　入道覺譽親王聖護院宮
雲かゝる夕日は空にかけろふのをのゝ夏草風そ凉しき

嘉元百首歌よませ給ひける次に納凉の心を　龜山院御製
凉しさやかつ〳〵したにかよふらん岩こす水の秋のこゝろは
河夏祓を　前大納言公泰
みたらしや河せになかすあさの葉のよるへもしろく秋風そ吹
權中納言宗經
みそきして凉しきせゝのあすか川あすをもまたて秋風そ吹
文保百首歌の中に　後西園寺入道前大政大臣
けふしはやかへるさ凉しみそき川夕浪かけて秋や立らん

藤葉和歌集卷第三

秋歌

立秋の心をよませ給ふける　伏見院御製
秋といへはやかて身にしむけしき哉思ひ入ても風はふかしを
文保百首歌奉りける時　芬陀梨華院前關白內大臣
明わたる外山の松に吹かへて秋つけそむる風そ身にしむ
嘉元百首歌にはしめの秋を　民部卿爲藤
いつも吹おなしときはの松風はいかなるをとに秋をしるらん
後照念院前關白大政大臣
今朝もはや身にしむ計なりにけり夕へもまたぬ秋のはつ風
文保百首歌中に　前中納言爲相
昨日まて人にまたれし凉しさをおのれといそく秋の初風
後山本左大臣
心をはかすともなしに七夕のよそのあふせにくれそまたるゝ
元德二年七月內裏にて三首歌つかふまつりけるに七夕

風

前中納言公脩

彦星の妻待空に先たちてくるれはかよふあきの初風

建武元年七夕七首歌講せられける次に七夕月をよませ給ふける

後醍醐院御製

わすられぬほとは雲井の月の秋めくりあひける星合の空

七夕衣

民部卿爲定

けふといへは五百機たてゝ七夕のをるともなをや衣かさまし

題しらす

藤原爲基朝臣

今朝みれは秋とはかりに置てけり花はまたしき草の上の露

藤原爲秀朝臣

我袖のぬるゝはもとの涙にて草木はかりや秋のしら露

秋夕を

權中納言重資綾小路

夕くれの露と風との外にまた雲にも秋の色はみえけり

文保百首哥に

大僧正道順

雨はるゝ夕の山はほのみえて殘る雲よりてらすいなつま

後光明院關白前左大臣

なかめわひ何ゆへかゝる涙そと我さへたとる秋のゆふくれ

永仁元年八月十五夜十首哥中に秋夕のこゝろをよませ給ふける

伏見院御製

ものことに哀すゝむる夕くれの秋のけしきに詠め侘ぬる

秋の哥中に

民部卿爲定

風吹はまつおとつるゝ荻の葉やよもの草木に秋をつくらん

題しらす

前關白左のおほいまうち君

なをさりに吹過てゆく秋風にやすくこたふる軒の荻原

藤原宗親長江

聞侘ぬ身はならはしの夕とも思ひなされぬ荻のうは風

雨後草花を

前中納言惟繼

さらに又露置そへて村雨のあともしらるゝ庭の萩原

建武二年内裏にて講せられける千首哥に秋植物

法印隆淵

宮城野の露わけきつる袖よりも心にうつる萩か花すり

文保百首哥に

今出川前右大臣

秋風に露もたまらすおれふして庭にそ移る萩か花すり

前中納言爲相

ゆきてみる人をもまたて高圓のみやのゝ小萩ちりかすき南

後西園寺入道前太政大臣

秋はまつたかなみたより結ふらんかりかれをそき萩の上の露

秋風に尾花かなみのかけうつる袖ふきかへすまのゝかや原

永仁元年八月十五夜十首哥奉りけるとき秋風を

前參議雅有飛鳥井

をちかたの尾花なひくとみるからに袖に吹くる野への秋風

伏見院に三十首哥奉りけるに草花露といふことをよみ侍ける

二品法親王覺助

咲ましる花のえことにそめかへてをのか色なき草の上の露

前大納言家雅

心とはおきもかへぬを色々の花に染なす野への夕露

九條左大臣女

夕くれの野邊吹過る秋風にちくさをつたふ花の上の露

乾元二年伏見院めしける哥合に秋の露を

前大納言爲兼

すゑなひく千種の花の色をそめすかたをなすも秋の白露

秋哥中に

左兵衛督直義

月影のいるのゝすゝきうちなびきあかつき露に鹿そ鳴なる
　題しらす　藤原爲守女
しら露や風よりさきにみたるらん鹿のたつのゝ秋の夕暮
　夕鹿をよみ侍ける　權中納言公雄
我はかりゆふへはもろき泪かはきけは尾上の小男鹿の聲
　伏見院三十首哥に野鹿をよめる　前大納言俊光
はるく\と野邊ふきおくる秋風にさそはれきたる棹鹿の聲
　秋哥中に　淨妙寺關白前右大臣
秋風の吹ぬる野邊になく鹿は色かはりゆく妻やこふらん
　鹿をよめる　春宮大夫實夏
妻戀にたへぬ思ひや小男鹿のよそにつゝまてれをはたつらん
　建武元年八月十五夜内裏にて五首歌講せられけるに夜
　月聞鹿といへることをよみ侍りける　藤原爲明朝臣
すむ月に心のくまもあらはれて忍かたなく鹿やなくらん
　題しらす　藤原盛徳
あくるよの山路のきりに立わかれ稲葉の風におしか鳴なり
　藤原實遠朝臣
おとろかす人やなからん秋深きかり田の面に鹿そ鳴なる
　永仁元年八月十五夜十首歌中に秋山　前大納言爲兼
ふかくなる山路の秋をたつぬれは木の葉しくれて棹鹿の聲
　秋鴈　後山本左大臣
風さはきたゝよふ空のうき雲にまきれて渡る天つ鴈かれ
　文保百首の歌の中に　後照念院關白前大政大臣
かせさむき老のれ覺に聞なれて秋をかさぬる衣かりかれ
　彈正尹忠房親王
しらとりのとは山まつの秋風に田面さむけき初鴈の聲
　題しらす　中臣祐茂
しつのおかおしれかりかれ鳴なへに田つらの庵も夜寒也けり
　權中納言宗經
深草や我ふる里も幾秋か野となりはてゝうつら鳴らん
　秋歌とて　左近中將彦良[忠房親王息]
夕霧のへたてやうすくなりぬらんとを里見えて秋風そ吹
　文保百首歌に　權大納言公宗母
たちのほる煙や空にまかふらんむろのやしまの秋の夕霧
　永仁元年八月十五夜十首歌に秋浦といふことをよませ
　給ふける　伏見院御製
もしほやく煙ひとつにたちそひて外よりふかき浦の秋霧
　題しらす　天台座主承胤親王[梶井新宮]
霧深きふもとに夜をはのこせとも峯よりあくる横雲の空
　前中納言基成
有馬山みれの朝霧晴ぬれとまた露深きゐなのさゝ原
　藤原秀長[中條備前守]
逢坂の關路吹こす秋風になを立のほるきり原の駒
　元徳二年八月十五夜内裏五首歌に　權大納言公明
くるゝより心も空にまたるゝは秋のなかはの山の端の月
　侍從爲親
おのつからひかりはかりは峯こえて出るそをそき山端の月
　題しらす　惟宗時俊朝臣
出ぬれは光はこゝにさやかにてとをきもちかき山端の月
　元亨三年八月十五夜]五十首歌たてまつりける時
　二品法親王覺助

風わたる尾上の霧のたえ〳〵にうきていさよふ秋の夜の月

月出山といへる心を　讀人しらす 前坊御製

山鳥の尾上さやかに出そめてまつをへたつる秋の夜の月

八月十五夜三首歌講せられし次におなし心をよませ給ふける　院御製

雲もなき夕の山を出るよりこよひもしろくすめる月哉

中納言資明

出そむる月は尾上にほのめきて光はかりそ空にあまれき

從三位經有

空にすむ光そおそき峰こえて松原つたふ秋のよの月

住吉社にまうでゝ讀侍りける　前大納言經繼

山端は軒はの松にへたゝりてこすえよりこそ月は出けれ

題しらす　法印淨弁

杉たてる門田の面の秋風に月影さむき三輪の山もと

山月を　前大納言經賴

風にはれ風にそくもる山ふかみ槇の葉しのきすめる月影

秋歌中に　前中納言實前 滋野井

津の國やなにはの秋の空晴て伊駒の嶽を出る月かけ

前大納言俊光女

おもひやれ千里の外の秋までもへたてぬ空にすめる月影

前僧正慈勝

一むらの雲のあとより出にけりかけは千里の秋のよの月

大江經親 長井

秋のよのしくれてわたる浮雲にたえ〳〵のこる山のはの月

伏見院に月十五首奉りける時　爲道朝臣

吹はらふあらしのまゝにあらはれて木のまさためぬ月の影哉

建武元年八月十五夜五首歌講せられける次に月前秋風といふことをよませ給ふける　後醍醐院御製

あきらけき時しあれはと久かたの雲井の月に秋風そふく

月照草花　前中納言季雄

九重や風おさまれる萩か枝に露もさかりとやとる月かけ

內のおほいまうち君 三條

月影もまれく袖にややとるらん野邊の尾花の秋の白露

從三位實名

露ふかき秋のさかのゝをみなへしその名にめてゝやとる月影

八月十五夜仙洞に三首歌講せられし時野月といふことを　從三位雅宗

野邊に咲萩のにしきのたてぬきにをりえて今宵すめる月哉

藤原爲忠朝臣

宮城野のこの下やみもはれぬらし空行月のよその光に

題しらす　大江貞重 長井縫殿頭

うつりゆく今宵は秋の半天にひかりみちたる月のさやけさ

藤原基任 齋藤左衛門太夫

秋のよの衣手うすきさむしろに霜をかされてさゆる月影

嘉元百首歌に月を　正二位隆教

それをたに身のおもひてとなくさめて秋の幾よか月をみつ覽

伏見院月十五首歌中に　民部卿爲藤

いとゝなをうちもねられす秋のよの長きにつけて月をみる哉

月の歌とてよみ侍ける　前大納言尊氏

うたゝれも月には惜き夜半なれはなか〳〵秋は夢そみしかき

詩歌を合せられける時九月十三夜をよませ給ふける

後二條院御製

なにしあふ秋の半は過ぬれとこよひも月はためし也けり
浦月を　　彈正尹邦省親王
須磨の浦やしほくむあまの袖にのみよな／＼やとる月の影哉
同し心をよめる　　津守國冬
月ははやいてみの濱の浦風にましはのけふり心してたけ
　　津守國道
もしほやく海士人つらき月のよにけふりなみせそ浦の松原
題しらす　　權僧正靜伊
よさのうみやいり鹽たかくよる浪に松原こえて月そかたふく
　　中臣祐春
いほ原のみほのうら風よさむにて清見かさきに月そさやけき
秋歌とて　　右のおほいまうち君二條
秋はなを月にや人のとまるらん關やはあれしふはの中山
今上位におはしまして後護持僧にくはゝりて二間にま
いりてよみ侍りける　　二品法親王尊胤
祈りきてつかふるよひの秋もはやなれてみとせの雲の上の月
月歌に　　恒雲法親王
雲の上のよひのかけにはなれもせて今有明の月をこそみれ
龜山殿にて五首うた講せられける次に河曉月をよませ
給ふける　　後宇多院御製
大井川山かけくらき岩間よりすゑになかるゝ有明の月
秋歌中に　　大藏卿隆博
秋をへてなるゝ枕のきり／＼すしるやいそちの涙そふとは
　　伏見院御製
露深きまたあさ明の草かくれ夜のまの虫の聲そのこれる
永仁元年八月十五夜十首歌たてまつりける時秋虫を
明ぬるかまた霜置ぬ秋草のかれなて虫の聲よはるなり
　　權中納言公雄
　　前參議雅有
たつれつゝわくる草葉に聲やみて跡にまた鳴野への松虫
　　後山本左大臣
色かはるをのゝあさちの露のそこにやゝうらかれて虫も鳴也
鈴虫をよみける　　法印實性
影闇きまかきの下のきり／＼すくるゝもまたてねをやなく覽
同し心を　　前大納言爲世
おのかねはうら枯まさるきり／＼す草のまかきに霜やおく覽
元弘三年九月十三夜內裏三首うたに月前擣衣といへる
ことを
里人のよさむの衣うつ音におとろかされて月をみるかな
里擣衣を　　二品法親王承覚
おしなへて同しよさむの秋風にさとをかれすや衣うつらん
同し心を　　紀俊文朝臣
今よりはしのふの里も秋風の音にたてゝや衣うつらん
　　前大納言尊氏
うちもねぬ砧の音におのつからよそなる里のさむさをそしる
二品覺助法親王家の五十首歌に　　頓阿法師
里はあれて秋風さむみすか原や伏見のくれに衣うつ也
題しらす　　源頼數土岐氣良藏人入道
あすか風みにさむからしたをやめの手そめの衣今宵打也
正中二年內裏にて五首歌講せられしに連夜擣衣を
　　惟宗光吉朝臣
あし曳の山のさゝやの秋風にさむく夜ことに衣うつなり

題しらす　今出川院近衛
初霜のなくての山田もる庵にかりそめなから衣打也
秋歌中に　前中納言有忠
さゆれとも夜半のさ衣打かたの袖には置ぬ秋の初霜
後醍醐院御製
一入のみねのもみちは立田姫またなりはてぬ錦なるらし
龜山殿にて五首歌講せられける時雨後紅葉といふことを　左のおほいまうち君
染まさる色こそみゆれはゝそ原今朝の時雨のあとの一しほ
題しらす　行蓮法師
秋ははやふるさとさむく鴈なきてはゝそ色つくさほの山風
よみ人しらす
なと計しくるゝ松のあらしには色しまさらぬ峯のもみち葉
松間紅葉を　左近中將家房女
木間もる夕日のかけもうつろひて松も色つく峯の紅葉は
入道覺譽親王
露霜の色にはみえぬ紅にいかて染ける木葉なるらん
藤原伊俊朝臣
千しほまていつの人まに染つらんめかれぬ庭の秋の紅葉は
後醍醐院位におましくける時上のおのことも三首歌つかうまつりけるに暮秋の紅葉を　民部卿爲藤
立田姫そめものこさぬ紅葉はの千しほや秋のかきり成らん
前中納言實任
いつくなか我ふるさとゝ紅葉はのにしきたちきて秋の行らん
元德二年九月十三夜三首歌講せられける次に月照菊といふことをよませ給ふける　後醍醐院御製
月夜には星まれらなる雲の上にそれかとまかふ白菊の花
中務卿尊良親王
影やとす月に千とせや契らん君かかさしの白きくの花
權大納言公宗
あきらけき雲井の月にみかきそへて露の玉敷庭の白菊
後光明照院關白前左大臣
置そむる霜かとみれは月かけにうつろはてさくしら菊の花
秋歌の中に　守子内親王
色かはる秋も末野の霜枯に移ひ殘るしらきくの花
惟宗光之
長月の有明の月の影たにも空に殘らぬ秋の別路
藤原基祐
年々にめくりあふへきならひとも老にはしらておしき秋哉
暮秋夢といふことをよめる　權大納言實敎
したひえぬ名殘を夢にみつる哉ぬるか中にも秋や行らん
秋歌中に　權中納言公雄
とゝむへきしからみもかな早瀨川日數なかるゝ秋の別路

藤葉和歌集卷第四

冬歌

三十首歌よませ給ふけるに朝時雨といふことを　院御製
けさの朝け木葉時雨のふる里に物さひしかる冬はきにけり
伏見院三十首歌中に　永福門院

いつしかと冬をや告る初時雨庭の木のはに音信てゆく

初冬時雨の心をよめる　前大納言實教

定めなき空とはいはし冬きぬと思へはやかてふるしくれかな

三條入道前大政大臣家歌合に時雨を　權中納言公雄

神無月しくるゝ雲の風まぜにけふも幾たひはれくもるらん

同し心を　藤原冬隆朝臣

山風は又ふきかはるたよりにもしくれてかへるうき雲の空

題しらす　右近大將公淸室

朝日かけ出ぬとみつる時のまに時雨てかはるうき雲のそら

前中納言公有

山端に朝ゐる雲のたえ／＼に日影もり來て空そしくるゝ

後宇多院に十首歌奉りける時時雨を　彈正尹忠房親王

夕つく日うつろふ山の嶺つゝき雲をも染てふるしくれ哉

權僧正道家

山のはにゆきかふ雲の晴くもり一かたならすふるしくれかな

題しらす　生阿法師

むら時雨おなしつゝきの山をたにめくりもはてすはるゝ浮雲

正三位敎氏

しくれ行あとにうつろふ山端の夕日へたつるむらくもの影

二品覺助法親王家の五十首うたに時雨

津守國冬

旅人のうち出のはまの朝ほらけ時雨てむかふひらの山かせ

龜山殿七百首うたの中に　前大納言經繼

淸見かたなみの關守ひまはあれと猶袖ぬらす夕しくれ哉

時雨を　權律師慶運

軒はなるならのひろはの村時雨ふるほとよりも音そはけしき

元亨元年十月龜山殿にて歌をあはせられし時同し心を

前中納言季雄

染のこす秋の紅葉の色そへてたえすしくるゝ冬の空かな

同しき後番の歌合に松下落葉を　民部卿爲藤

ときはなる松はしくれぬ色なから染てこかけにちる紅葉哉

惟宗光吉朝臣

ちりてこそ雨ともいとゝまかひけれ紅葉をさそふ松のした風

源顯氏 細川陸奥守

立田川浪間もみえすしくるゝや神なみ山の紅葉なるらむ

冬歌中に　前大納言爲世

大井川ともに流るゝ紅葉はをいせきにとめてこゆるしら浪

殘菊をよみ侍りける　藤原實遠朝臣

うつろへは秋みしかけもかはりけり花のかゝみの菊のした水

同し心を　大藏卿隆博

したふかな秋のかたみを白菊のまかきに殘る色をこひつゝ

題しらす　藤原朝尹朝臣

かれはてゝ秋にはかへる色もなし霜の下なる野邊の葛原

左大臣家にてよみ侍ける三首歌中に江寒蘆　従三位實名

難波江やあしのかれ葉に朝霜のおきつしほ風さえまさるらし

題しらす　藤原實敎

更ゆけは浦風さむし難波江のあしのかれはに霜や置らん

冬の歌中に　權大納言尊氏

吹まさる霜よのあらし聲さえてほしのひかりも曉そそふ

冬風を　法皇御製

起て見る朝けの軒は霜しろし音せぬ風は身に寒くして

文保百首歌に
篠分る袂に風は音さえてしられすむすふ野への夕霜　前三議雅孝
題しらす
殘りつる峯の日影もくれはてゝ夕霜寒し岡のへの里　紀淑文朝臣
霜を
眞砂には置ともみえぬ夕霜の木の葉に白き山かけの庵　左兵衛督直義
冬山といふことをよませ給ふける　法皇御製
冬かれの木葉さはらぬ高ねよりこほりて出る月そまちかき
元亨元年龜山殿歌合に山家冬月　前中納言有忠
影寒き月はくもらて出にけりふらぬ時雨や軒の松かせ
前大僧正桓守すゝめ侍ける日吉社三首歌合に冬月を　祝部成久日吉禰宜
つくは山はやまの木の葉ちりはてゝさはる影なき冬のよの月
前大僧正實超
眞野の浦や入海寒き冬枯のおはなの波に氷る月かけ
左のおほいまうち君
かれ殘るしのゝ小笹のよもすから置そふ霜にさゆる月影
名所あまたよみけるに松浦を　入道二品親王尊圓
松浦姫ひれふる袖や氷るらん月かけさゆるやへのしほ風
題しらす　權中納言重資
庭の面の霜にこほれる影見えて空にもさゆる冬のよの月
嘉元百首歌中に冬月　從三位爲信
冬のよのふけてさえたる月かけは水なき空のこほり也けり
題しらす　法印淨讃今熊野
ふくるよの霜をかされて袖の上にやとるも氷る月の影かな
源頼隆土岐美濃入道
影うつる木の間の月のたえ〳〵に氷のこれる山川の水
文保百首うたに　三條入道前大政大臣
池水のこほれるかけもひとつにて同しかゝみとすめる月哉
吹上のはまのまさこの鹽風にみきはの千とりあとものこさす
浦千鳥を　二品法親王寬尊
浦風の吹上のはまのともちとりよさむにたへぬれをや鳴らん
德治元年人々にめされて歌をあはせられける次に曉千
鳥といへることをよませ給ふける　後二條院御製
浦とをくわたる千鳥も聲寒し霜の白洲の有明の空
伏見院に卅首うた奉りける時浦千鳥　前參議爲實
浦風のいり鹽たかく吹こせは空に聲してゆく千鳥哉
題しらす　前權僧正圓伊
うら遠きひかたの鹽やみちぬらん跡なき浪に鳴千とり哉
實敎に申おくり侍し　二品法親王尊胤
和歌の浦にさそふとならは友千鳥まよふ我身の道しるへせよ
返し　前大納言實敎
しるへともいかゝたのまん友千鳥我たにまよふ和歌の浦路に
前大納言尊氏家に三首歌よみ侍けるに江水鳥を　源頼數
うきれせしもとの蘆間や氷るらん入江をかへて鴨そなくなる
龜山殿七百首歌に曉水鳥を　民部卿爲定
影やとす有明の月を池水にうきれこほると鴨やなくらん
題しらす　鴨祐夏禰宜
さゆる夜はしたやすからぬ通路もこほりにたゆる池の水鳥
文保百首歌中に　從一位祺子

山川のあさせにむすふ薄氷しつむ木の葉の色そかくれぬ
伏見院三十首歌に河氷を　伏見院新宰相
瀧津瀬はせきとめかたく行水のよとむそ氷るしるし也ける
題しらす　了雲法師
霜はらふあしのかれ葉の風さえてひまなくこほるこやの池水
中臣祐殖
打わたす駒のひつめにくたくるはひのくま川のこほりなり鳧
龜山殿七百首歌に田氷　藤原爲明朝臣
春來てはまつせきかけしなはしろの田中のゐともこほる比哉
竹霰を　後宇多院御製
さゆるよのねさめの床におとつれて竹の葉そよきふる霰哉
詩歌をあはせられける時冬夕といふことをよませ給ふ
ける　院御製
ふりそむる今朝の雪より雲さえてみそれになれる夕暮の空
野雪を　右近大將公清
高ねにはけぬかうへにや積るらんふしのすその丶今朝の初雪
題しらす　前權僧正眞榮
時しらぬふしのしら雪ふもとまて積るや冬のしるしなるらん
源頼定土岐伯耆入道
水鳥のかもの神山さえくれて松の青葉も雪ふりにけり
前大僧正桓守す丶め侍ける日吉社三首歌合山雪　法印長舜
宮古には風のみさえてふらぬ日も雪になり行ひゝの山端
森雪を　民部卿爲定
ふる雪のかさなる色も白妙の袖とや見えむ衣手のもり
松雪といへることを　法皇御製

ふりをやむ雲間の夕日山はれて雪やいたゝく松のかす〳〵
嘉元百首うたの中に雪　後西園寺入道前大政大臣
月のころ眞木のと山の明ほのに光ことなる嶺のしら雪
卅首歌よませ給ふけるに　院御製
木葉にも道はたえにしよしの山かされてうつむ雪のふるさと
題しらす　前僧正道性阿閑井宮
ふれは且たまらすきえて鹽のみつ磯邊の雪そみらくすくなき
冬歌に　藤原重能上杉伊豆守
なみかくるしつえにきえて磯の松梢はかりにつもる白雪
按察使公敏
さゝ浪やしかのうらはもさむからし雪吹をくるひらの山風
雪のうたに　淨妙寺關白前右大臣
舟とめし跡こそ見えね橘の小嶋かさきにつもるしら雪
藤原盛德
坂こえて今こそみつれはる〳〵とあへの田面につもる白雪
中臣祐親
とはるへきひまこそなけれ蘆のやに餘りふりしく今朝の白雪
よみひとしらす
下をれのそともの竹のよのほとに今朝は雪もてかこふなか垣
連日雪を　前中納言惟繼
とふ人のあとたえにける日數さへつもればふかき庭の白雪
雪歌とて　源高國畠山上野入道
今朝はまつたか跡つけてとはれましひとりみるよの庭の白雪
狛秀房大原野神主
うつもれぬ夢路もたえぬ白雪の古里さむき夜半のね覺に
藤原行朝

ふみわくる人しなけれはふる里はつもるまゝなる庭の白雪
嘉元百首歌に雪　民部卿爲藤
よしさらは雪をもめてし徒につもれは人のをとつれもせぬ
雪似花といへることをよめる　惟宗光之
けぬかうへになをふる雪は春よりも盛ひさしき花とみゆらん
題しらす　大江廣秀長井大膳太夫
みかりするかたのゝ雪の夕くれに袖ふきかへす天の川かせ
二品尊胤法親王家にて炭竈をよめる　兼好法師
炭かまもとしの寒きにあらはれぬけふりや松の爪木なるらん
文保百首歌中に　今出川前右大臣
ふけぬるか霜よの空に星見えて庭火のかけになひくゆふしで
嘉元元年卅首歌めしける次に夜神樂といへることをよ
ませ給ける　伏見院御製
星うたふこゑや雲井にすみぬらん空にもやかて影のさやけき
後伏見院御製
霜にきゆる庭火のまへの笛の聲雲井にきゝし夜はそ忘れぬ
題しらす　榮子内親王
しのはるゝ昔も遠くなりぬへしくれ行としのなこりのみかは
權中納言宗經
身の上につもる月日をおしまるゝくれぬと計思ふとしかは
二品覺助法親王家五十首歌に歳暮の心を　從三位爲理
行末のたゝあらましにはかなくそおしまぬ年の身に積るらん
文保百首うたに　前大納言俊光
いかなれは流れてはやくゆく年のかへりて人の身に積るらん

藤葉和歌集巻第五

戀歌上

文保百首歌奉りける時　權中納言公雄
涙川いかにせくへきなかれともならはぬ物を袖のしからみ
初戀の心を　藤原冬隆朝臣
またしらぬ戀の道芝ふみそめてまよふ心をたれにとはまし
正中二年八月十五夜五首歌講せられける次に寄月戀と
いへることをよませ給ける　後醍醐院御製
はてはまた月にもうとくなりやせんやとる涙を忍ふあまりに
元亨三年内裏三首歌に忍不逢戀をよみ侍ける　前中納言季雄
つれなさを人にいひても慰まんよそまてつゝむ思ひならすは
前中納言隆長
つれなさもしゐてかこたぬ中なれはしのふそつらき契也ける
題しらす　前中納言公有
すくもたく磯屋の煙下にのみくゆる思ひをしる人そなき
文保百首うたに　津守國冬
すくもたく新しま守かゆふ煙きくたにあへす身をこかしつゝ
題しらす　よみ人知らす
假初のみるめたになきにほの海のふかき思をいかてしらせん
道元法師
にほの海や矢橋のおきの渡し舟おしても人にあふみならはや
藤原公凞
ちらはうし忍ふの岡の下紅葉したにこかれておもふこゝろを

中臣祐同（春日社司）
しられしな忍ふのおくの摺衣みたれてふかき思ひ有とは
法印俊譽
もらさしとわきて忍ふの衣手にいかゝはすへき露のみたれを
法眼澄基
おもふよりやかて色にそ出ぬへきまたせきなれぬ袖の涙は
二品法親王尊胤
忍ふてふこゝろの底をもらされは涙計と袖やしるらん
暹伊法師
もらさしと心の内におさふるは袖にもつゝむ涙也けり
源敦有朝臣
心ある泪なりせはかくはかりつゝむ袖にはあまらさらまし
龜山殿五首歌に忍久戀　前大納言爲世
せきかへす泪にたへていくとせか袖はつれなくくち殘るらん
戀歌中に　左兵衛督直義
つらからて人めはかりをつゝまはや袖の涙もうきよりそもる
源氏重（佐々木）
せきかぬる袖の泪のいかなれは我うき名をもおしまさるらん
法印隆淵
あらはれん後をはしらす朽はつる袖を限りにせく泪かな
題しらす　前大納言尊氏
つゐにわか心や色にあらはれんしはしはつゝむうきなり共
蓮智法師（宇都宮遠江入道）
身にあまる思ひなりともうき人の心もしらすいかゝもらさむ
法印慈靜（公敏卿息）
しはしこそ人めもつゝめ袖にはやあまるはかりの我涙かな

卜部仲量（重イ）（梅宮神主）
おさふとも袖は色にや出なまし心にせかぬ涙なりせは
よみひとしらす
せき返しおさふる袖も朽はてゝうきなもらすは涙なりけり
藤原公頼（佐藤左衛門）
おもへとも人にはいはぬ忍ひねの枕にもるやなみたなるらん
三善爲連（飯尾左衛門入道）
枕さへうきぬはかりになりにけりよるは人めをゆるす涙に
源頼春
よそまてはもらさんものか敷妙の枕のみしる夜半の涙を
伏見院に三十首歌奉りける時　前參議雅孝
人めをも思はさらまし夢路よりしらするたより有世なりせは
題しらす　法印長舜
あしかきは人めはかりの隔てにてかよふ心のさはらすもかな
文保百首歌中に　彈正尹忠房親王
いひ出てつれなからすは年月を忍ひきつるやくやしからまし
題しらす　壽成門院備前
人しれすおつる涙にしられけめ忍ふにたへぬこゝろ也せは
民部卿爲定
かこつへき方こそなけれ涙せく袖よりもるゝあたしうき名を
忍待戀の心を　紀俊文朝臣
ふけてなをとはれやするとまたるゝは忍ふる中の頼也けり
戀のうたに　藤原重能
とはるやとたのみしころそ忍はるゝまたて戀しき夕暮の空
龜山殿七百首歌中に寄水戀　民部卿爲藤
ともすれは岩間つたひに行水のとゝこほりてもぬるゝ袖哉

題しらす　よみ人しらす
身にかへてしのひけりとは戀しなん後にや人の思ひしらまし
寄筏戀を　紀淑氏朝臣
杣人の下すいかたの瀬をはやみさほとるまにも戀そ忘れぬ
題しらす　藤原家氏氏忠卿息
うき中のつらきへたてと也にけりいもせの山の峯の白雲
寄雲戀といふことを　鴨祐夏
いつ迄かよそにのみしてあま雲のへたつる中に戀わたるへき
三十首うた奉し時　權中納言公蔭
あま雲のたえま〳〵を行月のみらくすくなきいもを戀つゝ
法皇御製
哀をもかはさぬ君か詠には夕の雲も何とかはみん
おなしくよませ給ふける時寄煙戀　院御製
我おもふ身よりけふりもたちれたゝあはれと人のなひく計に
題しらす　按察使公敏
いかゝせんあまのすくもの下にのみくゆる思ひのたえぬ煙を
藤原行尹朝臣
浦風はたゆむ鹽瀬のゆふ煙なひかぬ中にそふ思ひかな
法印淨讃
なひかすはかひやなからん富士のねの煙にたくふ思ありとも
權律師有淳
きえねたゝ思ひのけふり立とてもなひかぬ人は哀とも見し
源基親朝臣
祈るともかひやなからんおほぬさのひくてによらぬ人の心は
祈經年戀を　前大納言公泰
あふことはなをかたそきの神垣に同しつらさを幾よ祈らん

祈不逢戀心を　入道二品親王尊圓
いかならんみそきかうけんあふさかの關もる神の心つよさは
題しらす　左近中將家房女
戀わひてみをは淵せにしつむとも誰かは水のあはれとはみん
守子内親王
むすひ置契はあさし我袖の涙の川は淵となれとも
從三位吉子左大臣女
としふれと逢せはしらぬ涙川うきなのみこそよとまさりけれ
源頼直土岐
うき名のみよそになかれて涙川思ひにしつむみとそ成ぬる
祝部成國
うき中の關もりなくは逢坂のなもむつましき山路ならまし
權律師憲助
おしからぬ我命さへうき人のこゝろににてやつれなかるらん
度會貞香
なからへてつれなきものはあふことをゆるさぬ中の命也けり
文保百首うたの中に　後西園寺入道前太政大臣
なからへてあらは逢よはさもあらてうきゝはみつる我命かな
尋戀心を　權中納言公明
ことゝへとこたへぬやとの杉の門つらき契りのしるし也けり
よみ人しらす
契てし人はこぬ身のうら風に松に音して聞かひもなし
龜山殿七百首うたに　彈正尹忠房親王
契りても心をはなをなくの海のふかくは人をたのむ物かは
題しらす　源觀法師
せめてなとしちのまろねの百よともたのめぬ中の契なるらん

せめてたゝ一夜計と思ひしはあひみぬさきの心なりけり　權律師信聽

僞りなき中川のなかれこそ末までたえぬ契り成けれ　源頼春細川刑部大輔

元亨元年九月盡日内裏にて三首うたつかうまつりける
時契經年戀の心を　前大納言爲世

なをもよにありてそ頼む水無瀨河つゐに逢せの契計を　後醍醐院御製

あやむしろをになるまでの年月もくちぬは人の契也けり　前大納言公脩

僞にかはるもしらて幾とせか契しまゝの身をたのむらん　加茂在康

契不逢戀といへることを

なをさりの契をたのむ命かなあはすはさても思ひきえなて　藤原長盛

題しらす

契りをく人の心の行末をまちみるまでのいのちともかな　藤原親貞

後の世のたかむくひとかなりやせんこれを初の人のつらさは　權僧正靜伊

さきの世の我僞のむくひまて思ひしられてうき契哉　權律師慶運

こひしなてしとふをいとふ心にやまつ後の世と契りをく覽　法眼源意

遂にさてつれなき中に戀しなはあふにもかへぬなをや殘さん　權律師宗賢

いつか我人のためにはつらかりしむくひによらぬ身の契かな　藤原宗重朝臣

前の世のむくひをしらぬ契こそなをあふことのたのみ也けれ　法印良兼

たのまれぬ後のよまてのかね言に命のうちもうたかはれつゝ　權大納言公宗母

文保百首うたの中に

うかるへき後世しらてつれなきやむくひ思はぬ心なるらん　藤原宗雅朝臣

題しらす

とはるへきたのみも過て年月のうきにはよはる我こゝろかな　民部卿爲藤

龜山殿七百首うたに寄松戀

逢ことをまつとしならはことのはもかはらぬ中の契ともかな　後宇多院御製

同し歌の内に寄桐戀といふことをよませ給ふける

契しもたかはさらまし桐のはをきさみし人の有世なりせは　今出川院近衛

夏待戀といふことを

うき人に初音をおしめ時鳥待くるしさを思ひしるやと　前參議雅有

永仁元年八月十五夜十首歌奉りける時秋戀を

詠め侘ぬ秋たにつらき夕暮にたのめて人のとはす也ぬる　中務卿尊良親王

元德元年三月盡日内裏にて人々三首うたよみ侍けるに
毎夕待戀といふことを

おのつからまたぬ夕もありなまし僞をうきものとしりなは　後光明照院關白前左大臣

更てこそ僞そともおもひしれ契れはまたぬ夕くれそなき　權大納言公明

聞わひぬおなし夕の僞りにつらさかはらぬいりあひのかね　藤原爲明朝臣

とへかしな我のみたえぬあらましにまつを契の夕くれの空

前中納言有光
偽もたえぬは人のなさけにて幾夕くれをたのみきつらん

藤原爲冬朝臣
僞のうきにもたへてまたれけり身はならはしの夕くれの空

乾元二年伏見院めしける歌合に　前大納言俊光
今更になに歎らん僞はもとよりなれし夕くれの空

法眼寛暹
たのめつゝ同しつらさの僞をまつとはさのみ人にしられし

藤原基敎齋藤
我ためにつらき夕の僞は誰に契れるまことなるらん

よみひとしらす
いかなれは同し契りを我はまち人はわするゝ夕なるらん

祝部行氏
頼めぬにとふへきものとまたるゝはいつならひける夕成らん

藤原時親
夕暮は猶そまたるゝおのつからとひしむかしの心ならひに

寄雨待戀を　藤原爲秀朝臣
玉ほこの道ゆ人めもひま有てなか〳〵雨をたのむくれ哉

戀うたとて　二品親王寛尊
聞もうしおもひたえたる夕とて昨日にかはる庭のまつ風

民部卿爲定家にて連夜待戀のこゝろをよめる　頓阿法師
一夜にもうき僞りはしらるゝをなにのたのみにたへて待らん

待戀のこゝろをよみ侍ける　民部卿爲定
僞のかきりはいつとしらぬこそしゐて待よの頼み也けれ

同し心を　よみ人しらす
いかにせん頼めしくれの松の戸をさゝすはよその人や咎めん

權大納言公明女
そま川の淺きせにこそうき人の心もひかぬくれは見えけれ

權律師則祐赤松
たかしまのみほのそま木をとる人も思ふかたにや心ひくらん

題しらす　中臣祐殖
思ひわひせめて空しくふくるよは頼めぬあすのくれそ待るゝ

戀うた中に　よみ人しらす
さりともとなにをまたまし僞のことのはをたに頼まさりせは

藤原貫敦
むすふともいかゝたのまんあた人のなさけ計の露の契は

源仲教村上
はかなしや人の契の淺ち原あたなる露のなさけ計は

よみ人不知
契しは誰ことのはのすえなれは露の情もかけすなるらん

藤原長範柴嶋
待佗てぬるよのとこはせめてけに夢はかりなる契ともかな

惟宗光之
思ひねの夢路はかりにあふことは人もゆるさぬ契り也けり

題しらす　藤原利行女齋藤
ことの葉を猶やたのまん僞にましるまことのありもこそすれ

媄子内親王
たのめすはたゝ一かたに恨みましとはぬは同しつらさなれ共

丹波長氏朝臣
とはれぬをさのみは如何恨むへき我もつれなき名をも社とれ

戀歌に　藤原伊俊朝臣

徒にふけなはかなしこぬ人をさそひて出よ山端の月

入道親王覺譽

うき人の面かけならぬ月にしもなれて幾夜か物おもひけん

都にすみ侍ける女のもとへ申遣しける　紀淑文朝臣

よひ〳〵におもひよそへてまたれけりそなたの空の山端の月

後宇多院めされける三首うたに月前戀といふことをつかうまつりける　惟宗光吉朝臣

つれもなき人をもさそへ夕くれにまたれて出る山端の月

題しらす　圓通法師

うき人の袂にやとる月ならは我こゝろをやそへてみせまし

よみ人しらす

有明の月に契りし名殘とやまつよも人のつれなかるらん

源忠直

更にけりこんと契し僞も空にしらるゝいさよひの月

源頼季

つれなくて今夜もこすは有明の月には人をまたしとそ思ふ

よみ人しらす 四辻姫君イ

待わひて今宵といひし玉章を猶まことかと月に見るかな

左のおほいまうち君

哀れわか月みんほとは戀しさの忘れて晴るゝなみたとも哉

伏見院三十首歌中に　永福門院

さやかなる月さへうとくなりぬへし涙の外にみるよなければ

催馬樂妹と我といふ心をよめる　前中納言冬定

いもと我いるさの山の月影そ同しよとこのかたみとはなる

元德二年八月十五夜内裏五首うたに月前契戀の心を　前大納言爲世

よもすからともにみてこそ契りしか心かはらは月をうらみむ

前中納言實任

めくりあはむ契りもいさや頼まれす空行月のしるへならては

藤原爲忠朝臣

めくりあはむ月にと人のたのむるはうはの空なる契也けり

前中納言公脩

おのつからめくりもそあふうき人に月のころとや猶契らまし

題しらす　達智門院

變るよのかれてしらるゝ物ならはさのみは人に契らさらまし

伏見院三十首歌中に　永福門院

ともし火のかけとともにそ消ぬへきこよひもさてや曉のとこ

正中百首うためされける次に　後醍醐院御製

たのめおく後の契りもいさや川まつよむなしきとこの山風

龜山殿七百首うた中に晝戀　侍從爲親

物思ふ涙の露をおきそへてひるまもしらすぬるゝ袖哉

題しらす　源頼隆 吉見大藏少輔

戀佗る袖の涙をそのまゝにほさてかたしく夜半のさむしろ

元仁元年八月十五夜十首うた奉りける時秋戀　後山本左大臣

いかにせん夕の露にかこちてもことはり過てぬるゝ袂を

懸命戀を　賀茂在藤朝臣

いける身の爲とそおもふあふ事を命にかへてかひやなからん

寄川戀を　民部卿爲藤

我泪よしやよしのゝ河となれよとまぬほとも人にしられは

遇戀の心を　藤原爲明朝臣

とけそむる我下帶はさきの世にたかむすひける契なるらん

題しらす　法印實性

さのみなとつらくて人のすくし叙あひみるほとの契有身に

藤原行朝

別るへきつらさをかれて思ふにそ重ぬる袖もまつしほれける

隔夜逢戀を　法印實勝

自からさはる一[五イ]夜のへたてをも身のおこたりに人やなすらん

永仁六年龜山殿の五首うた合に來不留戀の心をよみ侍ける　正二位隆教

おのつから來てもたのます涙せく花色衣かへりやすさは

待逢戀といへることを　贈從三位爲子

さすかまた限りありける契とや命つれなくたのみきつらん

藤葉和歌集卷第六

戀歌下

元德二年九月十三夜內裏にて三首うたよみ侍けるに稀逢戀のこゝろを　前大納言爲世

おのつから待えて今夜はらふとも枕のちりはまたやつもらん

題しらす　彈正尹邦省親王

うきに猶たへてかひなき命ともあはすはいかて思ひあはせん

戀歌中に　大藏卿隆博

はかなくやいのちとなして賴らんあふよまれなる契はかりを

忍別戀といふことをよみ侍りける　賜從三位爲子

關守はあかつきはかりうちもねよ我通路を忍ふ別に

別戀の心を　讀人不知

したひわひあくるをまたぬ別路にうかりしよひの關守もかな

源　賴蔭

またとたに契りもをかて別路をいそくやかはる心なるらん

大江親定

またいつと契をかすは別路のうきや命のかきりならまし

亘範法師

せめてたゝ後の世とたにいひてましみしを限りの別と思はゝ

性嚴法師

むつこともまた盡ぬよのかれの音を別になして聞そかなしき

伴經清[門員彈正忠]

かきくらす涙をしらて別路を猶よふかしとしたふはかなさ

題しらす　藤原賴成[上杉藏人入道]

なにとたゝ涙はかりはのこるらん人はとまらぬ袖のわかれに

和氣音成朝臣

したひつる人はとまらて我袖のなみたにのこる有明の月

藤原有親

あすしらぬ命ならすは別れ路をこれそ限と思はさらまし

文保百首うたに　後西園寺入道前大政大臣

泪かと見るしも悲しわきもこかかへるあさけの道芝の露

後朝戀の心をよめる　惟宗光之

なこりをもおしまぬけさの別路はなかく後のたのみ也けり

中臣祐茂

若草のにゐ手枕の朝れかみ我たはつけてけふみつる哉

前大納言尊氏家にて同し心をよみ侍りける　藤原爲貫

思ひやれあしたの床の面かけは夢にみてたにおきうかりしを

元德三年九月十三夜內裏三首うたに別戀を　後光明照院關白前左大臣

まてしはし又夕くれと契ともなをなくさまし今朝の別路

後朝戀といへることを　左のおほいまうちきみ

きぬ〳〵の床にきえなは白露の起てもかゝるうさはなけかし

題しらす　よみひとしらす

うき人の心もしらてたちかへる今朝の別にのこるをもかけ

源顯氏

逢みんとなにいそき劔ほともなく今朝はつらさにかへる別路

戀うたに　源賴數

山の井のあかて別し契こそむすひもあへす袖はぬれけれ

變戀心を　前中納言爲相

我袖のなみたの色のかはるさへ人の契のしるへかほなる

題しらす　藤原宗秀長沼

猶暫しうきをもうきになしはてしかはる心のかはりもそする

戀歌中に　從三位實名

かはりゆく人の心の末の露もとのしつくや涙なるらん

達智門院

大かたにさためなきよのうたかひはやかてそ人の心なりける

前大納言兼敎

つらくなる人の心のはてなれやあまのすむてふ里のしるへは

法印道惠

くり返し猶かこたはやうとくのみ鳴海の浦のあまのうけなは

二品法親王寛尊

今ははや靡くとみえし煙たによそになるみのうら風そ吹

中臣祐成

徒にあまのかるものけふりたに思はぬかたになひきもやする

前中納言隆長

立かへりよとむもしらて思ひ川わたりそめぬと何頼らん

逢不遇戀心を　藤原親定

ふみそめて後にもまよふ戀路をはまた立かへり誰にとはまし

戀うたに　岩藏姫君

いかゝせん待とせしまにねられねは夢を賴の夜な〳〵もうし

壽成門院按察

あふとみる夢もうつゝに變られはしはし慰さむ宵のうたゝね

源和氏細川阿波守

思ひねにしはしなくさむ夢をたにゆるさぬ夜半のかねの音哉

題しらす　前關白左のおほいまうち君

思ひねの夢も待れすをのつからまとろむ程のよ半もなけれは

寄夢戀といへることをよみ侍ける　兼好法師

打とけてまとろむとしもなき物を逢とみつるやうつゝ成らん

和氣嗣成朝臣

あふことの稀になり行よな〳〵はあたに思ひし夢そまたるゝ

嘉元百首うたに不逢戀　後西園寺入道前太政大臣

驚す夕附鳥よ夢にたにゆきあふ坂の關なへたてそ

題しらす　紀俊文朝臣

夢路をはせきもる神やゆるすらんぬるよに通ふあふ坂の山

よみひとしらす

いかにせん短き夜半のうたゝねにあふもほとなき夢の契りは

高階仲直朝臣

うたゝねにあひみる夢のさめぬるや明るもまたぬ別なるらん

夢戀を　權大納言師賢

あくるをもまたぬ契のかなしきはあふとみしよの夢の別れ路

同じ心を　二品法親王承覺

あふとみてかさぬる袖の移り香の殘らぬにこそ夢としりぬれ

藤原實吉朝臣

あふとみる面影まではかはらぬを夢には殘るうつり香そなき

前大納言俊光女

戀うた中に

うつゝにてつれなき中は思ひねの夢にも疎き契也けり

よみ人しらす

題しらす

見てもまたさむるうつゝにまよふかなあふよ稀なる夢の通路

藤原賴淸朝臣

逢みしか夢なるへくは戀しさもうきもうつゝに殘らすもかな

前中納言實任

戀うたとて

うつゝなる同じつらさを嘆くかなさめてくやしき夢の枕に

源　高國

龜山殿七百首うたに夢戀

うつゝにはまた渡るへき道もなし見しを限りの夢のうきはし

前中納言有忠

同し心をよみ侍ける

今もなをさめてうつゝにかなしきは心にのこる夢の面かけ

大僧正覺圓（南都東北院）

思ひ出る人の心の末ならは我みる夢もうれしからまし

前大納言爲世

戀の歌中に

我ためにつらき心をおもひねのねさめにそふは涙也けり

狛　秀房

契久戀心をよめる

たのますはよもなからへし今こんといひしは人の命なれと

法印淨弁

題しらす

さりともとおもふ頼みを契りにて心なかきは命なりけり

源賴世 齋田（世良イ）

同し世にありときくこそ嬉しけれ巡りあふへき時はしられと

左のおほいまうちきみ

かくけかりうきにたへたる命こそ人の心にそへてつらけれ

藤原藤成（上杉宮内少輔）

報ひある世とも思はすとし月をうき身はかりにたへて忍へは

よみ人しらす

いかにして報ひある世の習ひともつれなき人に思ひしらせん

安部良宣朝臣

つれなさも世のむくひそと思はすはなにと慰む戀ちならまし

民部卿爲藤

厭戀を

うきをなをしたふへき身の心ともしらてや人のいとひそめ劔

元亨三年九月盡日內裏にて五首歌に恨戀の心を

前中納言爲相

それもなをいとふ便りとなりやせん積るうらみの數を語らは

民部卿爲定

龜山殿七百首うたに片思を

心かへするよなりともかくはかり我をも人のえやはおもはぬ

源　親　憲

題しらす

つれなくはさても心のこりもせて思はぬ人をなにしたふらん

中臣祐任

いかにせんうらみてもなをつれなさのもとの儘なる人の心を

法印實承

なにとたゝおなし軒はの草の名の忘れし人を猶忍ふらん

藤原基祐

飛鳥川かはるあふせはつらくとも現はれはつるせゝの埋れ木

權律師尙俊

なかれてはいかゝたのまんよしの川早くもかはる人の契を

思はすよ逢瀬たえぬる水無瀬河ありて月日をすこすへしとは　権律師祐禅浄土寺門跡

川嶋の水のなかれはかはられとうきせそ見ゆる人の心に　大中臣宣名饗庭因幡守

戀歌中に　権大納言師賢

さても又いかに契りて末の松うきとしなみのさのみこゆらん

あひなれ侍ける女の許より日數へて花をおこせたりけれはさらてたにわするゝまなき俤をそへてみせたる花もなつかしとされとその朝臣人にかはりて申遣しける

返しに　よみ人しらす

花にそふ面かけなくは山櫻ちりなん後はわすれもやせむ

題しらす　前大納言經任女

風にちる花よりもなを移りゆく人のこゝろそとめんかたなき

よみ人しらす

わすられぬ面かけのみと思ひしにまた身にそふは涙也けり

なれしよのかたみなりせは涙にもくもらてやとれ袖の月影

物申ける女遠き所へまかり侍と聞て申遣しける　浄妙寺關白前左大臣

めくりこは又もあふやと頼てもいかに待へき月日なるらん

題しらす　弾正尹邦省親王

あひみぬを一よ二よと數へしはうきとし月のはしめ也けり

よみ人しらす

あらはあふ契もしらぬ同し世になからへてうき身をかこつ哉

欲絶戀の心をよみ侍りける　大藏卿隆博

たえ／＼に竹のかけひを行水の心ほそくもなる契かな

絶戀を　藤原懷通朝臣

おのつから通ひし中のわすれ水たえてもなにと袖ぬらすらん　前僧正慈勝

つらくともいひたらぬへき契りとは思はぬ中のよそに成ぬる　今出川院近衛

題しらす

はかなくそあしたの露の命もてこの世とのみは契置ける

龜山殿七百首うたに老戀といふことを　権中納言公雄

今はよもあふにもかへしいたつらにおしまてすてん老の命は　源氏綱福野部

題しらす

あふことにかへんとなにかいのり叙今はたさらにおしき命を　藤原宗親

戀しなん煙のすゑを我ゆへの思ひとたにもいかてしらせん　從三位爲子

嘉元百首うた中に

見せはやと思ふ泪もことのはも恨みそめてはえこそとゝめれ　前大納言實教女

題しらす

いつまてかよそにも聞し我方に吹けるものを葛のうら風　藤原頼成

今更にかくる契りをうらむるやうきにならはぬ心なるらん　前大納言爲世

龜山殿にて五首うた講せられける時恨絶戀の心をよみ侍ける

うき中も心のまゝにうらみすは絶てそ猶もなからへなまし　慈願法師

題しらす

うらむとや人はみるらんみのうさにあまりておつる袖の涙を　藤原綱世宇都宮弾正少弼

うらみ佗身のうきをまたなけきても猶ぬれそふは袂也けり　後宇多院新兵衛督

とはぬまのたえまをうしと恨しく[illegible]たつらからぬ契也けり

よみ人しらす 忠房親王女

おもへとも人はつれなき契りゆへいとゝうらみの數や増らん

西華門院宮內卿

つれなさをうらみ盡してことのはもなく〳〵なけく身の契哉

平宗和

思ひ侘恨盡してははてはまたわか方よりや人をしたはん

從三位親敎

心から恨はてにしいにしへを我身のとかにまたなけくかな

春宮大夫實夏

つらからん人こそあらめみをしれは我さへわれを恨みつる哉

榮子內親王

今ははやもにすむ虫のなをさへに忘れて人をうらみつる哉

戀うたとて　よみ人しらす

うらみ侘思ひこかれて遠さかる身をすて舟のよるかたもなし

恨戀のこゝろを　法印隆淵

恨てもかひなきものは下帶の下にはとけぬ心なりけり

源光政 秋山藏人

題しらす

我をこそ忘れはつとも後の世のむくひをなとか思はさるらん

よみ人しらす

ひたすらに忘るゝきはを見えしとや月日にそへて遠さかる覽

加茂在藤朝臣

忘れしといふきの山の草のなのさしもかれゆくをのはそうき

法眼聖承

いかなれは忘られはせていとゝなをうき俤の月にそふらん

八月十五夜仙洞にておのことも題をさくりて歌つかうまつりしに戀月といふことを　藤原爲嗣朝臣

忘られし秋の心のつらけれと月を名殘にしたふ面影

龜山殿五首うた合に　前參議爲實

哀なと春やむかしの月ゆへに俤かすむ宿をとふらん

建武元年八月十五夜內裏にて五首歌講せられける時見月增戀の心をよみ侍りける　前中納言季雄

いとゝうき面かけそへて我爲の秋とや月の空に見すらん

藤原季繼朝臣

みるからになをかきくらす涙かな月にもつらき影やそふらん

侍從爲親

涙さへ袖のひまなくなりにけり人のうきをや月はみすらん

藤原雅朝朝臣

わすられぬ我心にそのこりけるともにみしよの有明の月

正二位隆敎

うきなから待しものをとしのはれて僞まてそ月に戀しき

右藤葉和歌集以橋本公勝本挍合

群書類從卷第百五十八

和歌部十三

玄々集

和歌者。本朝之風俗也。源流起二於神代一。雅詠盛二于人世一。是以延喜御宇之時。紀貫之奉レ勅。玄之亦玄三百六十首。其外撰集之家往々有レ之。今予所レ撰者。永延已來寛德以往篇什也。不レ知二當時之褒貶一。只憶二向後之消沒一之故也。上自二王后一下至二士女一。粗擢二其門之上科一。聊叙二此道之中輿一而已。

玄々集

圓融院御製二首

　わかな

春日のにおほくの年をつみつれと老せぬものは若菜なりけり

　堀川の后のうせたまひけるに

思ひわひなかめしかとも鳥部山はては煙もみえすなりにき

花山法皇四首

　御修行のとき樹下に行道し給ひて

木のもとをすみかとすれはをのつから花みる人に成ぬへき哉

宿ちかく花たちはなはほりうへし昔をこふるつまとなりにき

心みに外の月をもみてしかな我宿からのあはれなるかと

わかやとの櫻なれとも散ときは心にえこそまかせさりけれ

前一條院一首

　はしめの春の比承香殿女御に

よとゝもにこひつゝ暮す年月はかはれとかはる心ちこそせね

中務親王二首

　月夜にまいりたりける人のをそくいてさせ給ひけれは

世にふれは物思ふとしもなけれとも月にいく度なかめしつ覽

　かへりけるにつかはしける

うらめしく歸りけるかな月よにはこぬ人をたに待とこそきけ

入道殿二首

　前一條院の京極殿に行幸せさせ給けるに

君か代にあふくま河の底きよみよゝを重ねてすまむとそ思ふ

　四條大納言致仕の時つかはしける

谷の戸をとちやはてつる鶯のまつにをとせて春の過ぬる

傅大納言道綱一首

　七月七日女のもとに

七夕にけさひく糸の露をゝもみたはむ氣色をみてやゝみなん

同大納言母七首

　大入道殿よへ門はなとあけたまはさりしとのたまはせたりけれは御返事

歎きつゝひとりぬる夜の明るまはいかに久しき物とかはしる
わかやとの柳の糸はほそくともくる鶯はたえすもあらなん
都人れてまつらめやほとゝきす今そ山へを鳴てすくなる
大殿よりやへ山吹をたてまつらせたまひけれは
たれかこの數はさためし我はたゝとへとそ思ふ山ふきの花
備中守爲雅普門寺にて千部經法花經供養しけるにあひてまたの日かへりけるに花のいとおもしろく咲たりける所に車をとゝめて
薪こるとはきのふにつきにしをいさおのゝえを爰にくたさむ
ふくぬきける日
ふち衣ぬかむ泪のかはみつはきしにもまさる物にそ有ける
ふる雨のあしともおつる涙かなこまかにものを思ひくたけは
道信中將三首
ふくぬきける日
限りあれはけふぬき捨つ藤衣はてなき物は泪なりけり
いかてとおもふ女人にあひぬときゝて
嬉しきはいか計かは思ふらんうきは身にしむ物にそありける
よのはかなくみえたるころ
朝かほをなにはかなしと思ひけむ人をも花はさこそみるらめ
されかた中將三首
さ月やみくらはし山の郭公おほつかなくも鳴わたるかな
いかてがは思ひあるともしらすへきむろのや島の煙ならては
圓融院うせさせ給ひての比粟田殿にて
この春はいさ山里に過してむ花の都はおるも露けし
爲基二首
眺むるにもの思ふとのわするゝは月はうきよのほかよりや行

ある所にある女をしのひておもふとて
思ふことなくて過ぬる世中に終に心をとゝめつるかな
清胤僧都一首
爲もと攝津國の任はてゝありける所におくりける
君すまはとはまし物をつの國のいく田の杜の秋の初かせ
重之五首
はしめの春
よしの山みれのしら雪いつきえて今朝は霞の立かくすらむ
風をいたみ岩うつ浪のをのれのみくたけて物を思ふ比かな
筑波根のこのもかのもの紅葉はゝ秋はてぬれとあかすも有哉
花の色にそめし袂のおしけれは衣かへうきけふにもあるかな
陸奥守信明の京へ上ときわさつのにかれをいれてとらせけり
此ころは宮木のにこそましりいれ君をおしかの角もとむとて
惠慶法師五首
たませに神にみてくらたてまつるとて
たませとは思はさらなんわたつみの涙の心は神そ知らむ
天原そらさへさえやわたる寬氷とみゆる冬のよの月
高砂のおのへにたてる鹿のれにことの外にもぬるゝ袖かな
山ふきの花の盛りにゐてにきて此里ひとゝ成ぬへきかな
高遠大貳一首
あふ坂の關のいはかとふみならし山立出るきりはらの駒
師綱
もろつなの朝臣一首
閑院大納言のもとへまかりける人にとはせたまはゝかく申せとて

さすらふる身をいつくそと人問はゝ遙けき山の峽にとをいへ

小大君三首

岩橋の夜のちきりもたへぬへし明るわひしきかつらきの神

七夕にかしつと思ひしあふことをそのよなきなの立にける哉

わつろふころ參河入道をよひて戒受たるにほとなくてしにけれは

長きよのやみにまとへる我をゝきて雲かくれぬる空の月かな

有國卿大貳一首

任はてゝ京にのほるとき香椎社にて

五とせはしるしの杉につかへてき今年は梅の花のみやこへ

宣孝右衛門權佐一首

いとみける女の甲斐守にあひぬときゝて

かひかれをみるとか聞はまとにやよごおりふせるさやの中山

源時明讃岐守一首

東三條院にさふらひけるたきゝといふ人のもとに

世をすてゝよゝを昔のひちりたに薪はかりはひろふとそ聞

參河入道一首

唐にわたるとて

留まらむ留まらしともおもほえすいつくも終の住家なられは

實因僧都一首

五月五日

たなはたのこゝちこそすれあやめ草年に一たひ妻とみゆれは

明圓聖人一首

房の前に女郎花をうへたりけるに院源座主聖人のはうにをみなへしをうへたりけれとたはふれけれは

なにならむと思ふ〳〵そほりうへし女郎花とはけふそ聞ける

出雲守相如一首

あはたのおとゝうせたまひける比

夢ならて又もあふへき君ならはねられぬいをも歎かさらまし

四條大納言六首

屛風

山家

むらさきの雲とそみゆるふちの花いかなる宿のしるし成らん

春きてそ人もとひける山さとは花こそ宿のあるしなりけれ

少納言きむまさか出家して近江に侍けるにつかはしける

さゝ浪やしかのうら風いかはかり心のうちのすゝしかるらん

閑院大將の五節の所にありける女に

あまつ空豐のあかりにみし人のなをおもかけのしゐて戀しき

一度は思ひたえにし世中をいかゝはすへきしつのをたまき

父殿うせたまひて

いにしへをこふる心にくらされておほろにみゆる秋のよの月

前齊院二首元曆皇女也

前一宮より龜のかたをつくりて一眼なとありて奉り侍りけれは

思へ共いむといふなる事なれはそなたに向てねをのみそなく

罪深きみたらし河のかめなれはのりのうき木にあはぬ也けり

帥大臣一首

つくしよりかへりたまひて

つれ〳〵とあれたる宿をなかむれは月影のみそ昔なりける

皇后宮一首
一條院御時皇后宮につかうまつりける女日向に下ける
につかはしける
茜さす日にむかひても思ひやれ都はゝれぬなかめすらんと
爲頼一首
世中にあらましかはと思ふ人なきかおほえもなりまさる哉
橘道時一首備中守仲遠男
くにへくたるとて
しなかとりいなの渡りに旅れしてきひの中山いつかこゆへき
長能十首
あられふるかたのゝみのゝ狩衣ぬれぬ宿かす人しなけれは
水上の山のもみちはちりにけりしからみかけよしら河の水
ひくらしにみれともあかぬ紅葉葉はいかなる山の嵐なるらん
月も日もかはり行ともひさにふるみむろの山のとこ宮ところ
河霧はみきはをこめて立にけりいつく成らむ千鳥なく也
わかくはのいもかてなれぬ夏衣かされもあへす明るしのゝめ
とりつなけみつのゝ原のはなれ駒淀の川霧あき立にけり
御狩するすゑのにたてる一松とかへるたかのこひにかもせむ
いつくにかこまをとゝめむ紅葉葉の色なるもの（なみたイ）は心なりけり
雨の夜萩をおもふ
ぬれ〳〵もあけはまつみむ宮城のゝ元あらの小萩萎れしぬ覽
源爲憲一首伊賀守
おほつかないつく成らむ虫の音を尋ねは花の露やこほれむ
みあれの宣旨二首
大てらの入逢のかねのこゑことにけふも暮ぬと聞そかなしき
宮古にてこしちの空をなかめつゝ雲ゐと聞しほとにきにけり

清照（靜照イ）法橋一首
みな人のむかし語りになり行をいつまてよそにきかむとす覽
あはたとのゝうへ一首
しのへとやあやめもしらぬ心にも長からぬよのうきにうへ劔
四條宮二首
まいらむと申ける人なくなりにけるときかせたまひて
悔しくそきゝなしてけるなへて世の哀とはかりいはまし物を
わつらひたまひける比
よそにみしお花の末のしら露はあるかなきかの我身也けり
馬内侍三首
うつろへは下はゝかりとみし程にやかて秋にも成にけるかな
あきのふ但馬にありけるに月をみていひやる
今宵きみいつれの里の月をみて都に誰をおもひ出らむ
いしなとりの石を中宮にたてまつりける人にかはりて
すへらきのしるへの庭の石そこれ思ふ心ありあゆるまてとれ
以言一首
宇治にて
網代には沈むみくすもなかりけりうちの渡りに我やすまゝし
承香殿女御一首
一條院うせさせ給ひて月を御らむして
大かたのさやけからぬか月かけは泪くもらぬ人にみせはや
觀教僧都一首
水うみに秋の山へのうつれるははたはりひろき錦とやみむ
かたのゝ女一首
前齋院兵庫陸奧守みちさたかゝよひけるかれ〳〵にな
りて後かたのゝ馬のはなれけれはとりてやるとて

あふことを今はかたのにはむ駒は忘草にもなつかさりけり
中將尼一首
あきのふか會〔ふ〕ことありける比
しかみけるすきの杉むらすきぬれはそならぬをも忘れぬる哉
兼澄一首加賀
わきもこか袖ふりかはし移香の今朝は身にしむ物をこそ思へ
祐擧二首駿河守從五位上
春立てあしたのはらの雪みれはまたふるとしの心ちこそすれ
むれはふし袖は清見か關なれはけふりも涙も立ぬ日そなき
種村[材イ]一首壹岐守
しのひてあふ女のかみきられたりときゝて
千早振かみもなしとかいふなるはいふはかりたに殘らすや君
すけさた一首
きのかみあふひにをくりける
難波江の年ふるよりはきの國のしらゝの濱のかつきめにせん
孝宣一首儒者
爲義朝臣人つてによはせけれは
こひしくはきてもみよかし人つてにいはせの杜のよふこ鳥哉
橘爲義一首左衛門佐
君まつと山のはいてゝ山のはに入まて月をなかめつるかな
賴光一首但馬守
中々にいひも放たて信濃なる木曾路の橋のかけたるやなそ
喜言四首
山深みおちてつもれる紅葉々のかはけるうへに時雨ふる也
ひくらしに山路のきのふ時雨しは富士の高ねの雪にそ有ける
屛風に山路をゆくひとある所に
山みれは近くきぬるを故鄕はいつともしらて待やわふらん
かこ山のしら雪かゝる峯にてもありしたかはて月はみえける
正言二首
ふるさとをわかるゝとき
思ひ出よ名にふる里の山なれとかくれてゆかは哀なりけり
故鄕の花の都にすみわひてやくも立てふ出雲へそ行
曾禰よしたゝ二首
ほりかはとのに行幸ありけるに
みなかみのさためてければ君か代にふたゝひすめる堀河の水
わかせこかきまさぬよひの秋風はこぬ人よりも恨めしきかな
公誠一首周防守
こひ
逢ことや泪の玉のをなるらんしはしたゆれはおちて亂るゝ
輔親三位一首
あし曳の山郭公里なれてたそかれ時になのりすらしも
佐忠辨三首
むれゐたる鴨の靑葉もみえぬまて庭しろたへに雪ふりにけり
くらふへき駒もあやめの草もみなみつの御牧にひきてける哉
陸奥守にのりみつの朝臣ㇳりけるに
とまりゐて待へきみこそ老にけれ哀わかれは人のためかは
安法法師かいもうと一首
後三條院東宮と申けるときひさしくとはせたまはさり
けれは

よのつれの秋かせならは荻のはにそよと計りの音はしてまし

藤はらの爲時二首越中守

水邊松

池水にうつれる千世のかけをみてすゑの松山思ひこそやれ

かたらひける人のもとにくしの箱をおきたりけるをそのひとなくなるとてたしかにゆひなとしておこせたるをみて

なき人のむすひをきたる玉櫛笥あかぬかたみとみるそ悲しき

戒秀一首

春ことに心を空になすものは雲井にさける櫻也けり

道濟五首

行すゑのしるしはかりに殘るへき松さへいとゝ老にけるかな

こひ

しのふれと泪そしるきくれなゐにものおもふ袖は染へかり㒵

楊貴妃

思ひわひ別れしのへをきてみれは淺茅か原に秋風そふく

子日

ひめこ松おひたるのへにねの日して千世を心にまかせける哉

故鄕柳

故鄕のみかきのやなきはる〳〵と誰そめかけし朝みとりそも

爲政一首河內守

うちにて月をみて

九重のうちたにあかき月かけにあれたる宿を思ひこそやれ

公資一首遠江守不見字叉須補任

ことありてあふみにこもり侍けるころ

ことしけき世中よりはあし引の山のうへこそ月は清けれ

源登平一首土佐守從五位下正五位下加賀守爲憲男

山さくら手ことに折てかへるをは春の行とや人のみる覽

橘則長一首越中守

十月はかりに女に

あふことを何にいのらむ神な月おりわひしくも分れぬる哉

源賴孝一首山城守

思ひわひきのふの空を眺むれはそれともみゆる雲たにもなし

淸少納言一首もとすけか女

よしさらはつらきは我にならひけり賴めてこぬは誰か敎へし

ふちはらの廣業一首參議有國男

いよのかみにてくたりけるに

都にておほつかなきをならはすは旅ねをいかて思ひやらまし

水無瀨女一首

人のうきせ見えにけりといひをこせたりけるに

うきなから浮世を人にみえにけり遠近しらぬみこそつらけれ

道命阿闍梨一首

熊野にまいりて月を見て

宮こにてなかめし月のもろ共に旅の空にも出にける哉

增基二首いほぬし

朝な〳〵鹿のしからむ荻のえのうきはの露のありかたのよや

我思ふとのしけきにくらふれはしのたの杜のちえは物かは

和泉式部六首

書寫聖人におくりける

暗きよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山端の月

有明の月みすひさにおきて行人の名殘になかめしものを

まつ人の今はきたらはいかゝせむふまゝくおしき庭の雪かな

道貞みちのくにへくだるをきゝておくりける・
もろともにたゝまし物をみちのくの衣の關をよそに聞哉
小式部内侍に右衞門督の白河へ花みになむまかるとい
ひいれたまへりければ
春のこぬ所はなきにしら河のわたりにのみや花はさく覽
保昌にわすられてのち備中守かれふさ世のなかをはい
かゝおもふとありければ
人しれす物おもふとはならひにき花にわかれぬ春しなければ
衞門六首赤染
まさひらなくなりて又のとしのはる
去年の春ちりにし花も咲にけりあはれ別のかゝらましやは
丹後にくだりて
思ふともなくてそみましよさの海のあまのはしたて都なりせは
院に申ことありけるころ
おもへきみかしらの雪をはらひつゝ消ぬさきにしいそく心を
たかちかわつらひけるに
かはらむと思ふ命はおしからてわかれん程そかなしかりける
まさひらいなかに妻まうけゝる比
我宿の松はしるしもなかりけり杉むらならは尋ねきなまし
式部みちさたにわすられてほとなく一宮にまいるとき
きていつみのかみなりしころ
移ろはてしはししのたの森をみよかへりもそする葛のうら風
たかまつとのゝうへ二首
深く入てすまはやと思ふかく山をいかなる月の出る成らん
菖蒲のれなかきを殿よりたてまつらせたまへりければ
長しともしらすやれのみなかれつゝ心のうちにおふる菖蒲は
女院二首當時上東門院
後一條院春日行幸せさせたまひ侍るに母后にて御とも
におはしましけるに
みかさ山さしてきにけりそのかみのふるき御幸の跡を尋ねて
このうたは前一條院の行幸ありければ也。
天王寺かめゐを御らむして
濁りなき龜ゐの水を結ひあけて心のうちをすゝきつるかな
小一條院一首
旅鴈
春は行秋はうちくる鴈かれは花にもみちをまさるとやおもふ
關白殿三首
たなはた
契りけむ程はしられと棚機のたえせぬけふの天のかはかな
ありまにおはしまして
いさやまたつゝきもしらぬ高ねにてまつくる人に都をそとふ
心在秋山
有明の月まつ人にあられ共こゝろは秋の山にそ有ける
堀川の大納言一首
關こゆる人にとはゝや陸奥のあたちのまゆみ紅葉しにけり
民部卿一首家長
北方の服したまひたりけるぬくとて
きしよりもぬくそかなしき君かためそめし衣の色そ思へは
入道中納言一首四條定賴
和泉のさかゐといふところにて
おきつかせ夜半に吹らしなにはかたあか月かけてなこり立也

左京大夫道雅一首

諸共に山めぐりする時雨かなふるにかひなきよとはしらすや

兼房一首備中守

いかなる女にありけむ

まとにや人のくるにはたえにけんいくのゝ里のなつひきの糸

資業二首

たかさこ

紅にたつしら浪のみえつるは山のあなたの入日也けり

故郷を思ふ

ふなてしていくかになりぬ故郷は山みゆ計りけふそきにける

俊平一首加賀守

八月十五夜

秋はまた過にしはかり有物を今よひの月をきはとみる哉

家經一首木工頭

かさこしの峯のうへにてみる時は雲はふもとの物にそ有ける

大輔一首すけちか三位女

いにしへのならの都の八重さくらけふ九重に匂ひぬるかな

さかみ一首きんよりか女（妻イ）

夕暮はまたれし物を今はたゝ行らむかたを思ひこそやれ

長國一首大隅守外記

月にむかひて友をおもふ

月にこそむかしのこともおほえけれ我を忘るゝ人にみせはや

中將乳母一首前齋院人

そのかみにおなし院にさふらひし人の今の院にまいれるにみそきの日

御祓するかもの河なみ立かへりはやくみしよに袖はぬれきや

弁一首一品宮出羽

忍ふるにくるしかりけり數ならぬ人は泪のなからましかは

侍從内侍一首

あかつきかへりける人にあめのふりけれは

かつきせむ袂は雨にいかゝせしぬるゝはさても思ひしれかし

弁（乳イ）女一首まさとき女

戀しさはつらききにかへてやみにしを何の名殘かかくは悲しき

なりたゝ一首大和守義忠也

年をへて吉野の山に住なれし目にめつらしきけさのしら雪

齋慶法師一首

思ひいてもなくてや我みやみなましおは捨山の月見さりせは

尾張守範永

遍昭寺の月をみて

住人もなき山里の秋のよは月の光もさひしかりけり

以上二首以二他本一書二入之一。

本云

寶治二年暮春之天下旬之比令二書寫一畢。被レ催二志之深一。不レ知二老耄之及一而已。

今撰和歌集

春

前大宮大亮清輔

いつしかと數まさりせは音羽山をとはかりにや春をきかまし

上西門院兵衛

新しくかはれる年と思へともかへりし春のきたるなりけり
宇治入道殿にて雪中子日といふことを　故北政所新少將
めつらしきためしにひかむ雪ふれはれのひの松も花咲にけり　左京大夫入道教長
子日する人なき宿のひめこ松かすみにのみやたなひかるらん　仁和寺御室
鶯の夜半のねくらはあるなれとけさは霞のへたてしてみえ　兵衞
鶯のうたとて
鶯の谷のといつるこゑすなりとしの明るといかてしるらん
春の日山里に侍けるに都よりいかにうくひす鳴らむと申てはへりける返事に　左京大夫入道
うくひすはみな宮こへと出はてゝ初音きゝし春の山さと
二條大宮にて雨中鶯といふことをよみ侍ける　肥前守爲眞入道
うくひすの梅のはなかさちりぬれはふる春雨にそほれてそ鳴
さぬきの院人々百首哥めしけるに　顯廣
むめか枝にまつさく花や春の色身にしめ初るはしめなる覽
梅花をよめる　資隆
袖にみな垣ねの梅は散にけり花にはとまる香やなかるらん　前石見介祝部成仲
梅のはな匂ふさかりは山かつの賤の垣ねもなつかしきかな　御室
題しらす
いかはかりかつ散色をおしまゝし立枝につほむ花なかりせは　散位平實重
曉呼子鳥
行人のすかたもみえぬあけくれに誰ともしらすよふこ鳥かな

　　　片岡禰宜賀茂政平
こしときも歸る空にもなく鴈はいつこをしのふ思ひ成らむ
柳をよめる
年をへて花なき里は青柳の糸にや春のくるをしるらん　御製
百首歌よませ給ひける中に花を
ほともなくなにゝほふらむ櫻花なか〳〵ひとの心つくしに　御室
題不知
夜もすから花のにほひを思ひやる心や峯に旅ねしつらむ　阿闍梨賢智
あはれにも春をわすれす匂ふかなあたなる花の心と思ふに
世中にこもりゐてさそひ侍けれは白河にまかりて人々歌よませ侍りけるに　侍從師光
いさやまた過る月日もしらぬ身は花の春ともけふこそはみれ
保安二年花見御幸に　太政大臣
あすもこむけふもひくらしみつれ共あかぬは花の匂ひ也けり
いにしへもかゝる御幸はなかりきと花もかへりて君をみる覽　大夫典侍
待賢門院仁和寺殿にて年々見花といふ事を人々によませさせ給ひけるに　兵衞
花の色はいつれの春もかはらしをやとからまさる匂ひなりみえ
仁和寺へあからさまにまかりけるに上西門院のわか人とも花見てあそひけるところに人々にいさなはれて見にまかりてかへりなむとしけるにとらへよいかにも花をみすてゝはなといひてとゞめけるによみてつかはしける　僧顯昭
わりなしや外にも花のなくは社一木かもとに日をもくらさめ

年ころもろ共に華みるともたちの花見にゆくときゝて
つかはしける　大夫典侍
いかはかりさそはぬを人を恨みまし花みし春の心なりせは

爲眞入道
春くれは峯つゝき咲さくら花かさしにさせるみよしのゝ山

讃岐院御時うへの人々歌よませさせ給ける
右大臣
あつさ弓春の心にいるものは高まと山の櫻なりけり

ならの花林院の歌合に花のこゝろを人にかはりて
二條大宮式部
花さかり雪かとそみる年をへて吉野の山は冬はふたゝひ

冬ころともたちのもとにて雪みてあそひ侍りてつきの
としの春よみてつかはしける　或所女房肥前
梓弓はるの花にそ思ひいつるおもしろかりし雪の圓ゐは

落花をよめる　政平
たれゆへにちらさしと思ふ華なれはしぬ計にはおしむ成らん

師光
何せむに命をおしとおもひけむあらすは花の散をみましや

御室
千載
はかなさを恨みもはてし櫻花うき世は誰も心ならねは

爲業
又もこむ春もみるへき花なれと散はかきりの心地こそすれ

左京大夫入道
櫻花いかなる風にさそはれておしむ人をはしらぬ成らむ

水上落花　頼政
風雅
よしの川いはせの浪による花や青ねか峯にきゆる白雲

白河にて落花をみて　新少將
櫻花散ぬるときやしら川のわたりと人の名つけそめけむ

春駒　心覺
雲雀あかるすかのあらのゝ離駒たはれにけりな手には溜らす

山寺歌合し侍けるになはしろを　前律師俊宗
みな人の爭ひ引けはなはしろの水は心にまかせさりけり

閑庭菫菜　前少將公重朝臣
ぬしなくてあれにし宿の庭の面にひとりすみれの花咲にけり

百首歌よませ給けるに　讃岐院
老ぬれはわか紫にかさゝれてふちにも松はかゝる也けり

女御殿にてはしめて和歌ありけるに藤花久匂といふこ
とを　式部少輔雅光
咲そむるわか紫のふちの花にほひは千代の春もかはらし

春殘二日といへる事を　頼政
〔ふけぬ頼政集〕
おしめとも今宵も過ぬ行春をあすはかりとやあすはなかめむ

三月盡のこゝろを　右馬權頭實清入道
華ならで心なくさむかたもなき人こそ春はせめておしけれ

侍從有房
しぬはかり暮行はるのおしけれは命もけふや限り成らん

夏

讃岐院人々百歌首めしける中にころもかへのこゝろを
四條宰相入道
ぬきかふる花の袂のうつりかはかほるや春の名殘なるらん

晩卯華　三位中將實房
夕月夜ほのめくかけも卯花のさける垣ねはさやけかりけり

みあれの日政平人のもとへあふひをつかはせて侍けるに
つけていひつかはしける　豐後守賴輔
なをさりの言のはにたに葵草かけてとはれぬ身こそつらけれ
題不知　大殿弁
郭公まつさよなかの一こゑはまとろまれ共おとろかれけり
旅宿郭公　少將脩範
ほとゝきすまた里なれぬはつ聲は我さへ旅の空にてそ聞
片岡祝部成保入道
たひ寢してけふ聞そめつ郭公くさの枕はあたに思はし
海路時鳥　權律師章實
一聲をきゝては過しほとゝきす風にまかせぬふなて成せは
杜郭公を　政平
ゆふかけて鳴そあやしき郭公こは神なひの杜にこそきけ
郭公聲遙といふ題を　淸輔
かさこしを夕こえくれは時鳥ふもとの雲のそこに鳴なり
さぬきの院人々に百首歌めしける中に時鳥を　顯廣
ほとゝきすなき行かたにそへてやる心いくたひ聲を聞覽
內裏歌合百首の中に　重家朝臣
郭公くものうへにてかたらへはうはの空には誰かたのまむ
郭公歌とてよめる　覺忠
ほとゝきすかたらひかれて過ぬなり誰か名殘のこゑを聞らん
賴輔刑部卿
年をへて同しこゑなる郭公きかまほしさもかはらさりけり
公重
いかにして思ひしらせむほとゝきす老はつるまてあかぬ心を
淸輔
あかてのみ此世つきなは時鳥かたらふ空の雲とならはや
讃岐院
えたになく山ほとゝきすすへなから花たちはなを手折して哉
御製
羽かせには花たちはなを匂はせてやさしくも鳴ほとゝきす哉
盧橘夜薰　登蓮
袖ふれて花たちはなのにほふかな秋風よりも身にそしみける
題不知　源通淸
いにしへをしのふにしける妻にしも花橘のにほふなるかな
御室
長きねのなへてならぬはあやめ草えも言ぬまにひきやしつ覽
阿闍梨印性
あやめ草枕にむすふ今宵より我宿なから旅こゝちすれ
雨中早苗　僧勝信
五月雨に門田のさなへ水こえてまたおひたゝぬ心地こそすれ
讃岐院人々百首歌めしけるに　兵衛
とり〳〵に山田のさなへいそくめり穗に出む秋もしらぬ命に

秋

百首歌よませ給けるに　御製
雲はみな嶺のあらしにはらはせてさやけく月のすみのほる哉
讃岐院人々に百首歌めしけるに　兵衛
暮ぬとは入相のかねにきゝつれとひろかとそみる秋のよの月
左京大夫入道
いつとても月にあく夜はなけれ共秋としなれはれられさり覓

二條の大宮にて毎夜月明　大貳永範
いかなれは秋の空とはいひなから一夜も月のくもらさる覽
八月十五夜を　御　室
名にたてる今夜と人はつけれ共月のけしきそいふにまされる
月のうたとてよめる　賴　政
夜もすから空行月を山のはにをくりつくるは心なりけり
隔雲望月　脩範朝臣
うす雲のたな引よはの月影はかたふきぬらん程もしられす
家の歌合しけるに　清　輔
千世の秋一よになして眺むともあかてや月のいらむとすらむ
題しらす　顯　昭
きよみかた月は雲ゐにわたるとも影をはとめよ浪の關もり
水上月　政　平
水の面にうつれるかけをみる程に空なる月は忘られにけり
月有遠情　顯　昭
なかむれは思ひやられぬ里もなき月やむかしのしろへ成らむ
題しらす　顯　廣
なくさむと誰かいひけむなかむれは月こそ物は悲しかりけれ
讃岐院御時藏人にて侍けるに月照竹といふことを　寂　超
吳竹のさえた洩くる月ゆへにおもはぬをみのころももそきる
擣衣のこゝろを　顯　廣
うつ音はよその枕にひゝききて衣はたれになれむとすらん
高野へまいらせ給ける道にて　御　室
秋のよの旅のねさめそ哀なるをかのかやねのむしのこゑ〳〵
題不知　刑部卿範兼
聲たてゝ虫そなくなる世中を我もうけれはいはてこそ思へ
百首歌よませ給ける中に鴈を　讃　岐　院
鴈かれのかきつられたる玉章をたえ〳〵にけつ今朝の朝霧
海路聞鴈　刑部卿入道
しほみてはせとより出る船人もひかたのかりも聲さはくなり
旅泊聞鹿　右馬權頭隆信
とまりするいなのみなとに聞ゆなり鹿の音おろす峯のまつ風
鹿聲有野　中將實家
小萩はら錦をしけるのへにこそ立わつらひて鹿はなきけれ
山家秋興　隆　信
うつしうへて都にもみる花なれと朝たつしかの聲はなかりき
霧間野花　成　範
みるになをたくひなきかな秋霧の立のこしたる萩のにしきへ
朝尋野華　登　蓮
いつかたにこはきさくらむ秋霧のたえまもみえす野原しの原
をみなへしをよめる　二條宮右衞門佐
ひとりのみふしみののへの女郎花つゆけさ增る秋の夕くれ
散位憲盛
あたしのゝ風のこゝろやつらからむなひきもあはぬ女郎花哉
題不知　刑部卿入道
をのつからをとなふ物は庭の面にあさち波よる秋のゆふ暮
關路紅葉　近衞院因幡
もみちする衣のせきをきてみれはたゝかたつまを染る也けり

冬

落葉隨風　或所女房美濃

山里は庭の木葉をときのまにはらふもしくもあらしなりけり
題しらす　齋院中將
くれなゐにやしほ染たる紅葉々をおろす嵐のねにかへる哉
湖上落葉　刑部卿入道
さゝ浪やひらの高ねの山おろし紅葉を海のものとなしつる
時雨　寂然
かきくらしものそかなしき神無月なかむる空にうち時雨つゝ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　基[阿闍梨]濟
名殘なくしくれの空のはれぬれは宿には月そもりかはりける
冬月を　藤原家明卿
久かたの月は秋にもかはらぬにうつりし水はつらゝゐに見
旅宿千鳥　顯昭
なるみかたしほかせ寒みね覺する涙の枕にちとり鳴也
中院入道右大臣家にて行路霰といふことを　俊惠
たかまとのゝちの篠原かせさえてたまくろ袖に霰たはしる
百首御歌の中に雪をよませ給ける　御製
冬のよはさゆるにしるしみよしのゝ山のはつ雪今そ降らし
雪の歌とてよみ侍りける　資隆
霜かれのまかきのうちに雪ふれはきくより後の花も有けり
　　　　　　　　　　　　　　　　　　顯昭
ふる雪にゐしまの松もうつもれてまた色とらぬ心ちこそすれ
賀茂にて社頭雪　或所女房備前
榊はにあらぬ梢もゆきふれはみなしらゆふをかけてける哉
旅宿雪　爲業
ふるゆきを山のはしろく明ぬとてまた夜深くもたちにける哉

題不知　公重
降雪にしつのふせやも埋もれて煙はかりそしろし成けり
さぬきの院人々百首歌めしけるに　清輔
きゆるをや都の人はおしむらん今朝山さとにはらふしら雪
　　　　　　　　　　　　　　　　　　刑部卿入道
冬ふかみ山里さひし松かえのつちにつくまて雪は降つゝ
大原にすみ侍ける比さひしさはいかになと人のいひて侍けれは　寂然
氷とく風よりさきに山さとの垣ねの梅は春めきにけり
佛名心を　讃岐院上野
みよまての佛の御名をきゝつれは年のせめてそ嬉しかりける
讃岐院人々百首歌めしけるに歳暮の心を　兵衛
身に積る年のかすをはしらすして花みむ春を待そはかなき
　　　　　　　　　　　　　　　　　　四條宰相入道
暮はつるとしの行衞を尋ぬれは我みにつもる物にそ有ける
除夜心を　前律師俊宗
一年ははかなき夢の心地して暮ぬるけふそおとろかれぬる

戀

忍戀心を　御室
思ふことくみてしれかし水莖のかきなかしては人もこそしれ
題しらす　賴政
おもへともいはて忍ふのすり衣心のうちにみたれぬる哉
　　　　　　　　　　　　　　　　　　源大納言[雅通]
よとゝもに人めをつゝむみなれ共をくるゝ物はなけき也けり

内裏百首　通能
いさゝらはほのめかしてむと計りを心にのみそいひ合せける
未對面戀　顯廣
人しれぬ心やかれてなれぬらんあらましごのおもかけにたつ
賢智
いつしかと色に出しと思へともみるらむ物をたへぬけしきは
題不知　顯昭
人つてにさしもやはとはおもふらんみせはや我かなれる姿を
前中務少將季經
思ふあまり色にいてぬる言のはゝちるとも何か苦しかるへき
よかはのふもとなる山てらにこもりゐて侍けるにいと
なまめかしきわらはのはへりけるによみてつかはしけ
る　阿闍梨仁昭
世をいとふはしと思ひしかよひちにあやなく人を戀わたる哉
としころいかてとおもへける人のもとより琴をかりに
つかはしたりける返事に　僧增俊
人知す思ひかけてしことのをのいつゝまなれてあはむとす覽
聞琴彈戀といふ題をよませ給ける　御製
ことの音にまよひそめにし心かな松ふく風にあらぬみなれと
はしめて文つかはして又をともせさりける人のもとへ
つかはしける　齋院中將
程もなく思ひかへるにしるき哉さもあらぬ道の踏たかへとは
戀のこゝろを　權僧正快修
同しくはみなもえなはや我こひのなにむれをのみこかす成覽
夏の戀　左大辨宰相雅賴
こひすれはもゆる螢も鳴せみも我みのほかのものとやはみる

内裏百首　重家
玉藻かるいせおのあまの袖ならはぬるとも人は咎めさらまし
題　顯昭
おもはしと思ふにたかふなみた哉こひは心の外にやあるらむ
參川内侍
朽はつる袖こそ今はおしまるれきみゆへかゝる涙とおもへは
兩人をこふるこゝろを　俊惠
わか戀はふたかみ山のもろかつら諸共にこそかけまほしけれ
寄鹿戀　大宮宰相
笛によるし秋のをしかのこゝちして戀には身をもかへつへき哉
百首歌よませ給ける　讃岐院
武藏鐙ふみたにもみぬものゆへに何に心をかけはしめけ
兵衛佐
いにしへはちから車に積けるを我こひしさはやるかたもなし
顯廣
おく山のいはかき沼のうきぬなは深き戀路に何みたるらむ
範綱入道
みるめ社おふの海とはきゝしかとあふことなしの花も咲けり
中納言宗成卿歌合に　中宮大夫顯保
いかならむとのはにてか靡くへき戀しといふはかひなかり見
大殿にて戀歌よませさせ給けるに　爲眞入道
あふことのなきをうきたの杜にすむよふこ鳥こそ我身也けれ
題しらす
あちきなく君をしらせし人をさへつれなきたひに恨みつる哉
題しらす　中納言實國
先の世につらくや人にあたりけむ報ならすはかゝらましやは

顯　廣
つれもなく人は思ひも捨られて憂身のみこそなけまほしけれ
家基入道女子
命こそをのか物からうかりけれあれはそ人をつらしとはみゐ
俊宗權律師
人心つらきに今はものなれてうらめしとたにいはれさりけり
賴　政
かくはかりつれなき人と同し世に生れあひけむ事さへそうき
實　清
心にはわか心たにまかせねはことはりなれやひとのつらきは
乍恨戀　顯　廣
恨みても戀しきかたやまさる覽つらきはよくゐ物にそ有ける
題しらす　宗忠法師
難面なさを思ひしらすはなけれ共我とはいかゝ人を忘れん
百首歌よませ給けるに　さぬきの院
いかてくく歎きをつみしむくひにてあひみて後に人を忘れん
宮つかへしける女のはつかころにいてむをまてといひ侍けれは　中御門宰相中將宗家
なをさりのそらたのめとは思へ共はつかの月の出るをそまつ
契不會戀　四條宰相入道
戀しなて心つくしに今まてもたのむれはこそいきの松原
題不知　俊　惠
君こすはれやへもいらしはらひつゝ床のおもはむとも恥かし
被返戀　上西門院大貳
きなれけむわかみのみしそから衣なにかはかへす人を恨みむ
内新宰相
いかにせむかゝる例はかたし貝ならひふせれとあはて止ぬる
内記藤原能資
逢坂の關はいかにと人とはゝこゆとや言んこえすとやいはん
曉推留戀　御　製
明ぬなりかへれといへといかゝせむこれ計こそ君にたかはめ
登　蓮
けさよりそ戀する身には成にけるあはぬにぬれし袖は物かは
時々あふこひ
いつそやとおほめく程にあふ中はかきたえたりといはぬ計そ
題しらす　女御殿宰相
忘らるゝ我身のうさはわすられて忘るゝ人のわすられぬかな
實　重
絶はつる心あさゝにくらふれはふかゝりけりな山の井の水
題しらす　登　蓮
あひみても又もやあふと思はすはおしかるへくもなき命かな
初疎後思戀といふことを　内讃岐
今更に戀しといふもたのまれすこれも心のかはるとおもへは
旅の戀のこゝろをよませ給ける　御　室
夢にみて草の枕におとろけはいつら都の人とれたらむ

雜

祝のこゝろを　賴　政
君か代はちひろの底のさゝれ石も鵜のゐる岩と現るゝまて
百首御歌中に　御　製
白雲に羽うちつけてとふたつの遙に千世のおもほゆる哉
院のくらゐにおはしましけるときやそしまのつかひに

て侍けるにすみよしにて人々歌よみけるに
紀伊二位
すへらきの千代の御影にかくれすはけふ住吉の松をみましや
あひしれる人のひさしくをとせさりけるに
近衛院大納言典侍
をのつから思ひいつやと待程に我さへとはて日ころへにけり
内裏にて湖上曉月といふ事を人々つかうまつりけるに
重家朝臣
まのゝ浦をこき出てみれはさゝ浪やひらの高ねに月傾きぬ
成範
我ために有けるものをしもつけや室のやしまに絕ぬ思は
配所よりかへりて後正月七日よめる　實淸入道
題しらす　讃岐院
なゝくさの若菜につけてかそふれはやとせ歎きを積てける哉
ほとゝきす夜半に鳴こそ哀なれやみにまとふはなれ獨りかは
いかなる事かありけむ四月計に人のもとにさしをかせ
侍ける　參河內侍
郭公けしきことなる世のうさにまつ忍ひれはわれのみそなく
題しらす　顯廣
栞するならの葉しはにちる露のはら〳〵と社れはなかれけれ
陵園妾の心を　登蓮
まきの戸をさしてかへりしその日より明る夜もなき物思かな
敦賴
いつとても身のうきとはかはられと昔は花をなけきやはせし
袖にすみのつきたるを人のたれかこふるならむなとと
ふらひけれはいひける　左大臣家卿

なからへて有はつましき世中になにとすみつくわか身成らん
題しらす　宰相入道
れ覺して思ひつくこそ悲しけれ我この夢をいつまてかみん
さぬきの院人々に百首歌めしけるに
兵衛
いつまてとのとけく物を思ふ覽ときのまをにしらぬ命に
顯廣
世中を思ひつられてなかむれはむなしき空にきゆるしら雲
四條宰相入道
あたに置草葉の露のきえぬるを哀よそにや人のみるらむ
上覺
しての山いかにさかしき道なれはこえぬさきより苦しかる覽
歸鴈をきゝて　大夫典侍
故鄕へかりそ行なるかなしきはまたもかへらぬ分れ成けり
賴實僧都かくれて後又のとしの春禪定院の花さかりな
るをみて　權僧正尋範
宿もやと花もむかしにゝほへともぬしなき色は淋しかりけり
ふくに侍ける時やよひのつこもりに　大監物惟俊
夏くともぬきかふましきふち衣我身ひとつの花のかたみか
五月のころはゝうせ侍りにける又のとしのおなし月に
左京大夫かくれ侍りにけれはよめる　顯昭
あやめ草ひきつゝけたるうきれかなこそも今年も同しさ月に
待賢門院うせさせ給て後法金剛院にわたらせ給てむか
しをおほしいてられてものかなしくおほえさせ給ける
おりほとゝきすの鳴けれは

故鄕にけふこさりせは郭公たれとむかしをこひてなかまし　御室

近衞院うせさせ給て後この院にかへりける人のもとへつかはしける　寂然

いかはかり心のやみにまとふらん月かくれにし雲のうへひと

母の身まかりにけるころ月のいるを見て　中原時元

山のはに入ぬる月と思ひせはめくりあふよもあらまし物を

刑部卿忠盛かくれて後人のもとにつかはしける　登蓮

秋かせの身にしむ秋のね覺には哀といひし人そこひしき

忠能卿うせはへりて後　長成母

いにしへをこふるなみたのひまなさに露置そふる秋の夕くれ

近衞院御さうそうにまいりてかへるとて　實重

思ひきや虫のねしけきあさちふに君をみをきて歸るへしとは

故北政所の御はてに法性寺殿にまいりけるにことしもはてゝたかきいやしきちり〳〵に成たまふに木の葉のあらしに散をみて　清輔

今はとて散々になる故鄕は木のはさへこそとまらさりけれ

待賢門院うせさせ給て御いみはてかたにかへらせ給ひける日　讃岐院

限りありて人はかた〳〵別るめり涙をたにもとゝめてしかな

美福門院御服宣旨にて程なくぬくとて　源大納言

こゝろさしふかく染つるふち衣きつる日數のあさくも有哉

題しらす　顯廣

うき身をは我こゝろさへふりすてゝ山のあなたに宿もとむ也

法師にならむとおもひけるころ　寂超

有明の月よりほかはたれをかは山路の友とちきりをくへき

九條大納言光賴卿出家のときつかはしける　源大納言

おもひたつ心は誰もある物をうらやましくもいつるや哉

世をそむきてつきのとしの春　寂然

この春そ思ひもかへすさくら花むなしき色にそめし心を

尼になりて後人のもとよりむかしの宿に月はみるやと申て侍けれは　大宮式部

いつとてか月みる事のかはるへき世に有明のかけしたえれは

出家のゝち高野にて人々月の歌よみけるに　左京大夫入道

しら鶴のその衣毛の心地して今宵の月はすみ染もなし

みあれの日あふひをかけなからきひすとて佛供養しける人をみて　中宮兵衞內侍

千早ふる神のしるしにかくれともけふは御法にあふひ也けり

折菊供佛といふことを　左京大夫入道

朝な〳〵佛のために折きくの露とゝもにやつみもきゆ覽

さぬきのゐむ人々百首めしける中に花嚴のこゝろを　前權律師俊宗

普賢十願中請佛住世心を

はかなくそみ世の佛と思ひける我身ひとつに有としらすて

寶篋印陀羅尼をくやうして往生をれかふよし歌人々よ

山端にかたふく月をいかてなをとゝめてなかき闇にまとはし

みけるに　伏見上人
けふひらく寶のはこのをしてこそ西へ行へきしるしなりけれ
心經　小侍従
色にのみそめし心のくやしきをむなしとゝける法そ嬉しき
無量義經の心を
さま〳〵になかるゝ法の水なれとその水上はひとつ也けり
序品未寤睡眠の文のこゝろを　皇后宮權大進季廣
昔よりまとろむ事もなき物をいかにうき世を夢とみるらん
信解品　さぬきの院
數ふれはとをちの里におとろへていそち餘りの年そへにける
五百弟子品
ゑひのまに情かけゝる白玉をしらてはかなくまとふへしやは
提婆品
ふたつなき法の契を千とせまて谷の水にや結ひをきけむ
勸持品　清輔
をはすての山のけしきのしるけれは今さらしなにてらす月影
壽量品　顯輔
常にすむわしの高ねの月なれは出るも入も人めはかりそ
嚴王品　心覺
なつかしき梢のかせにさそはれて華の都を出にけるかな
勸發品　寂然
よそにては匂ひにあかぬ花なれはちる木のもとを尋てそみる

一本奥書云
以妙法院覺胤親王眞跡之本令書寫則挍合了
右今撰和歌集以村井敬本書寫得一本挍正

柳風和謌抄巻第一

春歌

立春のこゝろをよみ侍りける　右衛門督爲相卿
いつのまに霞の色となりぬらん昨日は雪のふる年の空
永仁(伏見)のころうへのをのことも歌つかうまつりける
とき霞　權中納言爲兼卿
春といへはいつも霞の時にあれと猶山端の夕あけほの
海邊霞といへる心を　式部卿のみこ
磯山の霞のしたに里みえて涙ははれたる浦の朝なき
はるの歌の中に　前大僧正道瑜
春もなを霞のうへに立こえてまかはぬふしの夕けふり哉
式部卿親王家藤大納言
うき雲は行かたみゆるなか空に風をしらせぬ朝かすみかな
家に十首の歌よみ侍りけるとき竹間鶯といふことを
平貞時朝臣
窓ちかき竹のは風も春めきて千世のこゑある宿の鶯
鶯の歌の中に　大江宗秀
春をしる初ねは谷を出ぬれとまた古巣をはさらぬ鶯
右衛門督爲相卿
宿ちかくめくれる竹をふるすにて谷よりまたぬ鶯のこゑ
平宣直
雪のうちに春やをそきとさく梅の花にまたれて鶯そなく
權中納言爲兼卿

むめかゝは枕にみちて鶯のこゑよりあくる窓のしのゝめ

人のよませ侍りける歌の中に梅風　式部卿親王家一條

梅かゝをさそはゝせめて春のかせ我宿よりと人にしらせよ

永仁のころ式部卿親王家和歌所の歌合に雪中若菜といふことをよみ侍りける　右衛門督爲相卿

春日のゝわかなは雪のしたなれや我ふみ分る跡よりそつむ

從三位親基卿

うす氷とくる野澤のゑくのはをつまぬにあらふ水の白浪

餘寒の心を　式部卿のみこ

つほみつる花も心やかはるらむまた立かへる風の雪けに

題をさくりて歌よみ侍りけるに　大江貞廣

かつめくむわか葉はいまたみしかくて枝のみ風になひく青柳

夕春雨といふことをよみ侍りける　從三位兼輔卿

空の色あめのけしきも暮ぬかとおもふ夕に春は久しき

おなしこゝろを　權中納言爲兼卿

春雨は霞める空にふりくれてをとしつかなる軒の玉水

春月の心をよみ侍りける　中務卿親王家三河

いく里の夜半のけしきにかよふらんおなし霞の袖の月かけ

平朝直

大かたのならひとしりてみる時そ霞める月の影も恨みぬ

春のうたの中に歸雁　藤原宗秀

ふく風のつらさもしらし咲はなのちらぬに歸る春の雁金

藤原貞藤

花もいまた咲ぬ木すゑの朝かすみ春もさひしき山の色かな

待花のこゝろをよみ侍りける　平宣時朝臣

我のみと心つくさし山さくら花もさくへきころは待らむ

題をさくりて歌よみ侍りけるとき名所花といふことを　右衛門督爲相卿

咲まさる花のひかりもみよしのゝたま松かえも春の一しほ

最明寺のはなのさかりに人々歌よみ侍りけるついてに　貞時朝臣

ふく風のおさまれる世を山櫻しらせかほにもちらぬ花かな

花のうたあまたよみはへりける中に　前大僧正源忠

さそはれむつらさ思はて花のかををくるはかりの嵐なりせは

式部卿のみこ

思ふことありともなをそ忘られむ花にむかへる春の心は

曉月法師

うきもみな花に忘れてみる程の心によはれ春の山かせ

權中納言爲兼卿

さそふかせも情をしるやよきて散花しつかなる春の夕くれ

名所の花といへる心を　式部卿親王家藤大納言

思ひやる都の春のおもかけに昔をもみるしかの花その

池邊花　平直俊

うつれ共なをかけ清きいけ水やちらぬ櫻の鏡なるらむ

正三位實遠卿

池水にちりしく花のひま見えて殘る櫻のかけそうつろふ

落花心を　藤原範秀

ふき過る木すゑの跡にしはし猶かせをゝくりて散櫻かな

實文朝臣

庭にのみたゝともすれはかさなりておしむ梢にそふ花そなき

院百首歌の中に　右衛門督爲相卿

立ならふみれの木すゑを吹風に松よりもちる山さくらかな

ちる色をはなのうきにはなさしとてふかぬ嵐をなをかこつ哉　藤原重顯

夜落花　藤原基秀

明てふけやみはあやなし散花の行衞もみせぬ夜半の春かせ

當座千首歌の中に古寺花　式部卿のみこ

ところから霞の色も哀なり初瀨のてらの花のゆふくれ

暮春の心をよみ侍りける　藤原賴重女

いつよりも永しと思ふはるの日のやよひの末そやすく暮ぬる

くれの春のこゝろをよみ侍りける　平　時光

花のためうかりしまゝの日數にやつらさをそへて春の行らむ

三月盡に藤の花をみて　右衞門督爲相卿

暮殘る春のひかすに咲そめてさかりは夏にかゝる藤浪

柳風和歌抄卷第二

夏歌

首夏のこゝろをよみ侍りける　權中納言爲雅卿

春ちかきみとりの山の朝くもり雲もかすみの色はなしけり

時鳥待心をよめる　平　時　高

ほとゝきす夕くれたのむ山端に心をわけて月そまたるゝ

侍從爲守女

人つてのまたしき程に郭公はつれ聞つと我かたらはや

藤原賴氏

鳴て出るその山のはをほとゝきす歸らむかたと又や待まし

右衞門督爲相卿

とやまより出るかと聞はつこゑを里まてなかぬ郭公かな

おなし宿にすむ人なからほとゝきす聞ぬも殘る今の一聲　大江貞廣

月よりもまつさきたちて郭公ゆふ山いつるむら雲の空　權中納言爲兼卿

また人のきくともいはぬ一聲はわれもうたかふ郭公かな　曉月法師

歌あまたよみ侍りける中に寐覺時鳥といふことを　前大僧正源忠

ねさめにそ聞さためつる郭公夢もまことの初ね也けり

おなしこゝろを　右衞門督爲相卿

ほとゝきす我ねさめにはつれなくて待ぬいつくの夢に鳴覽

貞時朝臣の母の家の障子の歌に菖蒲　式部卿親王家藤大納言

情あるけふのあやめにひかれてそ我ことのはも人にしらるゝ

おなし障子のうた　貞時朝臣

こゝを今なかき住家とあやめ草おひてさかふる宿の池水

院百首歌の中に五月雨　右衞門督爲相卿

みなと河なかれも早くこすなみにしほまてにごる五月雨の比

五月雨送日といへるこゝろをよめる　丹治盛直

をのつから雲のとたへの日かけをもいつみし儘そ五月雨の空

夏のうたのなかに　寂惠法師

また宵とみえつるかけもかたふきて枕にあくるうたゝねの月

夏夜の心を　源　賴　貞

みしか夜はあか月いそく鐘のをともあまた殘りてしらむ空哉

當座千首歌よませ侍りけるついてに　式部卿のみこ

いかてさは鳥のやこゑも鳴つらむ宵を殘して明る東雲

野亭夏草といふことをよめる　藤原基隆女
夏ふかき野中の庵の草かくれあるじもしらぬ庭のかよひち
夏のうたの中に　平公篤
暮かゝる尾上の雲にちかつきて入日すゝしき松のかけかな
山家納涼　前大僧正道瑜
しつかなる心にかよふ秋かせの人にしられぬ山のおくかな

柳風和歌抄卷第三

秋歌

初秋の風といふこゝろをよみ侍りける　大江宗秀
ふきなれぬをとよりやかて悲しきは夕の荻にあきの初風
權中納言爲兼卿
いつくよりをくともしらぬ白露のくるれは草のうへにみゆ覽
秋歌の中に　式部卿親王家藤大納言
した荻のすゑこす風に散露の袂にとまる宿のゆふくれ
藤原基秀
夕暮はたゆむまもなき秋風に殘りありける袖の露かな
侍從爲守女
きゝしらてあらはやしはし心から身にしむ風の秋にふくこゑ
平宗泰
はかなくそ草葉ををのかやとりとは秋風しらて露も置ける
權中納言爲兼卿
風のをとの哀そふにもなかりけり吹よはるしも秋のゆふ暮
藤原政連
なにゆへにかなしき秋の夕そと思ひわかてもぬるゝ袖かな
秋歌の中にむしをよめる　金刺盛久
鳴虫のなみたのうへの草のはにこと露そふる宵のむら雨
題をさくりて歌よみ侍りけるに草花露　藤原長宗
露ちれはなひかぬ風のえたすきて咲花かろき庭の萩はら
右衞門督爲相卿家に歌合し侍りける時三日月　曉月法師
有明のすゑにまちかきなこりとて面影にたるよひのみか月
宣時朝臣
やとるへき露をはのこせよひのまの月待ほとののへの秋風
權中納言爲兼卿
月になる秋の心のいつくより我さへしらぬなみた落らむ
院百首歌の中に　右衞門督爲相卿
風すさふかきほの草の下葉まておつれは露をしたふ月影
家に歌よみ侍りけるに月漸昇といふ心を　貞時朝臣
秋のよのなかき程をやたのむらん出ていそかぬ山端の月
雲間月　曉月法師
うき雲にはやくちかひて行月のはれまになれは影そしつまる
寂惠法師歌合し侍る時木間月　藤原重顯
吹分て木のまをみする秋かせのよはるかたにはもらぬ月かけ
右衞門督爲相卿家に歌合し侍けるに海邊月といへる心をよめる　藤原賴氏
ひくしほのかはきもはてぬ跡なれや浪の外にもやとる月かけ
老の後月をみてよめる　寂惠法師

おいぬれは昔はかりもなれみぬを心かはると月やおもはん

藤原基隆女

うき世とはいふへくもなき月影をいかになかめて涙落らむ

うれふることありてあつまにくたり侍ける秋月をみて

よみ侍りける　爲實朝臣

つかへつゝ人よりちかくなれし身を思ひ出すや雲の上の月

權中納言爲兼卿

いかなりし人の情か思ひ出るこしかたかたれ秋のよの月

出家の後月の歌の中に　貞時朝臣

かはりける袖ともいかにいとはてや猶ね覺とふ秋のよの月

世をのかれて後あつまにすみ侍りてよめる

曉月

住わひて出しかたとはおもへとも月にこひしき故郷のあき

人々あまたものかたりし侍りけるによゐのほと月のく

もりたりけるか人しつまりて後はれたりけるをひとり

ゐのこりてよみ侍りける　右衞門督爲相卿

ふけてかく晴ける月をくもるとてねやに入つる人につけはや

家に歌よみ侍りける時曉霧といふことを

貞時朝臣

空まては立ものほらて有明の月にをよはぬみねの秋きり

初鴈越嶺といふことを　式部卿のみこ

なかめこすみねのうき雲色くれてかすかにきゆる初鴈のこゑ

藤原成房

枕なるむしのうらみはきゝなれて遠ちのしかに殘る夢哉

平時高

里ちかきのへにはいまた出やらて鹿のね遠き夕くれの山

尊親法師

なかきよの聲のたゑまやなく鹿のわか身にまくる思ひ成らし

藤原行貞

山風のさそはぬかたによはるなり梢をこゆるさをしかのこゑ

右衞門督爲相卿

嵐にも夢はかよひし山里のねさめとなるはさをしかの聲

中務卿親王家參河

鹿のねにいかゝ涙もおちさらむ老のね覺の秋のくれかた

擣衣の心を　平久時

はらはねと夜半のさころも打かたの袖には露や結はさるらん

荒木田繼顯

里遠きつてもまちかくふくる夜のあらしをころにうつ衣哉

寂惠法師

かくはかりよをなか月のから衣人やかはりてうちあかすらむ

秋のうたの中に　前中納言俊光卿

しくれねとぬれて色こき木のはかなみ山の秋の霧の深さに

前大僧正源恵すゝめ侍ける北野の社の歌合に古寺紅葉

右衞門督爲相卿

しくれ行木すゑにこもるはつせ山入あひの鐘のこゑそ色つく

藤原宗秀

ゆく秋はいくかもなきをきり〳〵すなを先たちてよはる聲哉

暮秋のこゝろを　權中納言爲兼卿

木葉おち草はしほるゝ秋の雨になかむるすゑも夕暮のそら

柳風和歌抄巻第四

冬謌

家に歌よみ侍りけるとき夕時雨といふことをよみはへりける　右衛門督爲相卿

たか里としらぬ夕もあはれなりしくるゝ雲の遠き一むら　實文朝臣

山めくる雲のしはしの跡までも袖をゆるさすふるしくれ哉　大中臣定忠

月前落葉　右衛門督爲相卿

暮し春の別れに花をさきたてゝ木のはゝ冬それにかへりける

ちりくもる嶺の木のはの風の上に月はしくれぬ有あけのそら　右近少將爲成

徒らにぬらすはかりのむらしくれ庭のおちはにそふ色はなし

内裏百首歌の中に　權中納言爲兼卿

きりに見し面影よりもさひしきは霜にこもれる野への明ほの

庭朝霜といふことをよみ侍りける　右衛門督爲相卿

朝またき日かけをそふる庭の松の枝のすかたに殘る霜かな

百首歌よみ侍りけるに懸樋水　藤原重顯

世の程は氷るかけひのけさ解てきのふの水の流れをそ聞

冬夜のこゝろを　平久時

むすはすよかりねの枕さえわひて袖もしもなる曉のゆめ　雅孝朝臣

ふりけるもまさこの上はみえわかて落葉にしろき庭のうす雪

山初雪　宣時朝臣

ふしのねはいつもかはらぬなかめにて麓にふるやけさの初雪

初雪の心をよみ侍りける　右衛門督爲相卿

ふりぬへきよひの曇りをなかめをきて明ぬにむかふ初雪の庭　式部卿のみこ

さえくれし雲の行ゑやいかにとて明る窓より雪そふりいる

雪歌の中に　大江宗秀

つもれともこほらぬ程は山風のふくかたうすき松のしらゆき　從三位兼輔卿

梢にはかつつもれとも庭の面の氷らぬほとはうすき雪かな　權中納言爲兼卿

庭は月こすゑは花のおもかけに春めきかよふ雪のあけほの

雪中杉といふことを　式部卿のみこ

杉はみえす花こそふたき殘りけれふるかはのへの雪ゝ明ほの

海邊雪　藤原時顯

うちよする涙の姿に雪きえてなきさはもとのうらちとそなる

歳暮に梅花さきたりけるをみてよみ侍りける　平時春

雪のうちに春まちかれてさく梅のはなさへいそくとしの暮哉　寂惠法師

數ふれは今年もすてにくれはとりあやなくつもる老そ悲しき

柳風和歌抄巻第五

戀歌

忍戀のこゝろをよみ侍りける　爲實朝臣

ことのはゝいはしと思にしたかふをなと心なき涙なるらん　中務卿親王家三河

忍ひかねきえむ夕の露もなをこけの下まてうきなもらすな

雅孝朝臣

度會行忠

忍戀の心を

藤原範行

袖にたにしはしはつゝめ心こそ泪にまくるうきなゝりとも

初尋緣戀といへるこゝろをよめる

藤原貞藤

つゝむ身に泪のはてもいつ迄と聞なくさめて忍はましかは

寄山戀

從三位頼基卿

よそなから尋ねもゆかてせめてそのあたりの事を知人も哉

大中臣定忠朝臣

あふさかと聞をたのみに尋ねつる山しもなとか關路成らん

不逢戀の心を

平顯實

忍ひても年月へしを思ひかねいふをはしめと人やしるらむ

曉月法師

かひなしや人もゆるさぬあふ事をかへむと頼む命なりせは

藤原賴氏

かへはやと思ふ命を同世になからへよとて人やつれなき

源頼貞

逢まてと思ひし命なからへてつらきにかへん名社おしけれ

待戀の心を

荒木田氏之

我を思ふ故なりけりとせめてたゝしられはかくて堪む命に

戀歌の中に

右衛門督爲相卿

たのめてもふくれはよもと思ふこそ我さへかはる心也けれ

明融法師

契りをかはそれを命と頼むへきいつはりをたになと惜む覽

右少將爲成

またれつる心つくしもいつはりに思ひはてよとふくる月影

荒木田長興

待侘るけしきをよそにみる人の未たふけすと云もはつかし

人のよませ侍りける歌のなかに 月前にまつ戀といふことを

式部卿親王家一條

こぬまても待になくさむ心とてなさけに人やたのめをき劔

右柳風和歌抄殘缺以ニ織部正乘尹藏本一挍合了

群書類從卷第百五十九

和歌部十四

新撰和歌序

玄番頭從五位上紀朝臣貫之上

昔延喜之御宇。屬ニ世之無爲一。因ニ人之有レ慶。令レ撰ニ進(集イ)萬葉(集イ)外古今和歌一千篇一。更降ニ　勅命一抽ニ其勝一矣。傳レ勅者。執金吾藤納言。奉　レ詔者。草莽臣紀貫之。貫之未レ及ニ抽撰一。分レ憂赴レ任。政務餘景。漸以撰定。抑夫上代之篇。義尤幽而文猶質。下流之作。文偏巧而義漸疎。故抽下始レ自ニ弘仁一至ニ于延長一詞人之作。花實相兼上而已。今「今」之所レ撰玄之又玄也。非下唯春霞秋月。漸ニ艷流於言泉一。花色鳥聲。鮮中浮藻於詞露上。皆是以動ニ天地一感ニ神祇一厚ニ人倫一成ニ孝敬一。上以レ風化レ下。下以レ諷刺レ上。雖ニ誠假ニ名於綺靡之下一。然復取ニ義於教誡之中一者也。爰以ニ春篇一配ニ秋篇一。以ニ夏什一敵ニ冬什一。各各相闘之。兩兩雙書焉。慶賀哀傷離別羇旅戀歌雜歌之流。各又對偶。惣三百六十首。分爲ニ四軸一。盖取ニ三百六十日一關ニ四時一耳。貫之秩罷歸日。將ニ以　上獻一之。橋山晩松愁雲之影已結。湘濱秋竹悲風之聲忽幽。傳レ　勅納言亦已薨逝。空貯ニ妙辭於箱中一。獨屑ニ落涙于襟上一。若貫之逝去。歌亦散逸。恨使下絶艷之草。復混中鄙野之篇上。故聊記ニ本源一以傳ニ末代一云爾。

新撰和歌卷第一

春秋幷百二十首

袖ひちてむすひし水の氷れるを春立けふのかせやとくらん
秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそ驚かれぬる
春霞たてるやいつこみよし野のよしのゝ山に雪はふりつゝ
わき(かせ古)も子か衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋のはつ風
春毎にかそへこしまに人ともに老そしにけるみねの若まつ
きのふ社早苗とりしかいつのまに稻葉そよきて秋風そふく
とふ人もなき宿なれとくる春は八重葎にもさはらさり鳬
荻の葉のそよく音こそ秋風の人にしらるゝはしめなりけれ
梅花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそ有ける
いつはとは時はわかれと秋の夜そもの思ふ事の限り成ける
ときはなる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけり
紅葉せぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらむ
春やとき花やおそきと聞わかむ鶯たにもなかすも有かな
戀々て逢夜はこよひ天川霧立わたり明すもあらなん
花の香を風のたよりにたくへてそ鶯誘ふしるへにはやる
こよひこむ人にはあはし七夕のひさしき程に待もこそすれ
雪のうちに春は來にけり鶯のこほれる涙いまやとくらむ

秋風に夜のふけゆけは天河川瀬のなみのたちゐこそまて
梅かえにきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ
ちきりけん心そつらき七夕の年に一たひあふはあふかは
春の夜のやみはあやなし梅のはな色社みえねかやは隠るゝ
年毎にあふとはすれと七夕のぬる夜の數そすくなかりける
あすからは若菜摘むとしめし野に昨日もけふも雪は降つゝ
木のまより（もり古）おちくる月の影みれは心つくしの秋は來にけり
春日野のとふ火の野守出て見よ今幾日ありて若菜つみてん
うつろはん事たにをしき秋萩にをれぬはかりもおける白露
梓弓おして春雨けふ降ぬあすさへふらは若菜つみてむ
よをさむみ衣かりかねなくなへに萩のした葉も色つきに鳧
君か爲はるの野に出てわかなつむ我衣手に雪は降つゝ
我ためにくる秋にしもあらなくに虫のねきけは先そ悲しき
春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん
秋の野に道もまとひぬ松虫の聲するかたにやとやからまし
わかせこか衣春雨ふることに野へのみとりそ色まさりける
ひくらしのなく山里の夕くれは風よりほかにとふ人もなし
春霞たつをみすてゝゆくかりは花なき里にすみやならへる
春かすみ霞ていにし鴈かねは今そなくなる秋霧のうへに
今年より春しりそむる櫻花ちるといふことはならはさら南
あき萩の下葉色つく今よりや獨ある人のいねかてにする
櫻花咲にけらしな足引の山のかひより（もイ）見ゆるしら雲
秋の露うつしなれはや水鳥のあをはの山のうつろひぬ蘭（ける古）
みよし野の山邊にさける櫻花しら雲とのみ（雲かとのみそ古）あやまたれつゝ
白雲のなかにかくれて行かりの聲はとほくもかくれさり鳧
山高み雲ゐに見ゆるさくらはな心の行てをらぬ日そなき

しら雲にはねうちかはし飛鴈のかすさへ見ゆる秋の夜の月
山さくらわかみにくれは春霞峯にもをにも立かくしつゝ
誰ためのにしきなれはか秋霧のさほの山邊を立かくすらん
みてのみや人にかたらん山櫻手ことに折て家つとにせん
山のはにおれる錦をたちなからみて行過んことそくやしき
見る人もなき山里の櫻花ほかのちりなん後そさかまし
玉かつら葛城山のもみち葉はおもかけに社見えわたりけれ
見わたせは柳さくらをこきませて都そ春のにしき成ける
おなしえにわきて木の葉のうつろふは西社秋の初なりけめ
さくら花雫に我身いさぬれんかこめにさそふ風のこぬまに
千早振神なひ山の紅葉はに思ひはかけしうつろふものを
はなの色は霞にこめて見せすともかをたにぬすめ春の山風
戀しくはみても忍はん紅葉はを吹なちらしそ山おろしの風
いさけふは春の山邊にましりなん暮なはなけの花の陰かは
神なひの三室の山を秋ゆけはにしき立きる心ちこそすれ
あさみとり糸よりかけてしら露を玉にもぬける春の柳か
さをしかの朝たつをのの秋萩に玉とみるまておけるしら露
青柳の糸よりかくる春しもそみたれて花のほころひにける
いもかひもとくと結ふとたつた山今そ紅葉の色まさりける
古郷となりにし奈良の都にも色はかはらす花は咲けり
久かたの月のかつらも秋はなを紅葉すれはやてりまさる覽
櫻色に衣はふかく染てきん花のちりなむのちのかたみに
雨ふれは笠とり山のもみち葉は行かふ人の袖さへそてる
櫻色にまさるいろなき春なれはあたら草木も物ならなくに
白露の色はひとつをいかなれは秋の木の葉をちゝにそむ覽
世中にたえて櫻のなかりせは春の心はのとけからまし

さほ山のはゝその紅葉ちりぬへし夜さへ見よと照す月影
櫻花ちらは散なんちらすとも故郷人のきても見なくに
女郎花おほかる野へに宿りせはあやなくあたの名をや立南
春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみたるへらなれ
霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のおれはかつちる
をしと思ふ心はいとによられ南ちる花毎にぬきてとゝめん
秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくもの糸すち
ちる花のなくにしとまる物ならはわれ鶯におとらさらまし（きしやは古）
立田川もみち葉なかる神なひの三室の山に時雨ふるらし
駒なめていさ見にゆかむ古郷は雪とのみこそ花はちるらめ
秋ならてあふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬ物故
櫻ちる木のした風はさむからて空にしられぬ雪そ降ける
見る人もなくて散ぬるおく山のもみちは夜のにしきなり鳧
行水（わ後）にみたれてちれる櫻はなきえすなかるゝ（そこのみるめも後）雪とみえつゝ
浪かけて見るよしもかなわたつ海の沖の玉もゝ紅葉散やと
櫻はな散ぬる風の名殘には水なき空に波そ立ける
我きつる方もしられすくらふ山木々の木の葉の散とまかふに
櫻花みかさの山のかけあらは雪と降ともいかにぬれめや
啼わたる鴈の涙やおちつ覽もの思ふやとのはきの上の露
春毎になかるゝ川を花とみてをられぬ水に袖やぬれなん
山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉也けり
年ふれは齢は老ぬしかはあれと花をしみれは物思ひもなし
をり人のこすのまに／＼藤はかまうへも色こく綻ひにけり
蛙なく神なひ川にかけ見えて今や咲らん山ふきのはな
ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千歳を我は經にけん
春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山ふきのはな

露なから折てかさゝむ菊の花老せぬ秋のひさしかるへく
折ても見をらすてもみん水無瀬川みなゝかけてさける山吹
秋風の吹上にたてるしら菊は花かあらぬか波のよするか
かはつなく井出の山吹咲にけりあはましものを花の盛りに
心あてにをらはやをらん初しものおきまとはせる白菊の花
吉野川きしの款冬ふく風にそこのかけさへうつろひにけり
秋をおきて時社有けれ菊の花うつろふからに色のまされは
我やとに咲る藤なみたちかへりすきかてにのみ人のみる覽
咲そめし宿しわかねは菊のはなたひなから社匂ふへらなれ
よそに見て歸らん人に藤の花はひまとはれよ枝はをるとも
きても見む人の爲にとおもはすは誰かからまし我やとの草
緑なる松にかけたる藤なれとおのかこゝろと花は咲けり
ひともとゝ思ひしはなを大澤の池の底にも誰かうゑけん
花の散ことやわひしき春霞たつたの山にうくひすのこゑ
いろかはる秋の菊をはひとゝせに二たひ匂ふ花かとそ見る
さくか上に散もまかふか櫻花かくてそこそ（は古）も春はくれにし
紅葉はを袖にこきいれてもていなむ秋を限りと見ん人の爲
櫻ちる花のところは春なから雪そふりつゝきえかてにする
もみち葉のなかれてとまる湊にはくれなゐふかき波や立覽
花もみな散ぬる後は行春の古郷とこそなりぬへらなれ
道しらは尋もゆかむ紅葉はをぬさと手むけて秋はいにけり
年毎になきてもなにそ呼子鳥よふにとまれる花ならなくに
龍田川もみちみたれてなかるめりわたらは錦中やたえなん
聲たえすなけや鶯ひとゝせに二たひとたにくへき春かは
夕月夜をくらの山になくしかの聲のうちにや秋はくるらん

新撰和歌巻第二

夏冬并四十首

わかやとの池の藤なみ咲にけり山郭公いまや（いつか古）來なかむ
龍田川にしきおりかく神無月しくれの雨をたてぬきにして
五月まつ山ほとゝきすうちはふき今も鳴なんこそのふる聲
神無月しくれも未たふらなくにまたきうつろふ神なひの杜
さつきこは啼もふりなん時鳥またしきほとの聲をきかはや
神無月時雨の雨ははひなれや木々の木の葉を色にそめなす
五月まつ花たちはなのかをかけは昔の人の袖の香そする
深山には霰ふるらし外山なるまさきのかつら色つきにけり
卯花もいまたちらぬに時鳥さほの川原にきなきとよます
神無月しくれとゝもに神なひの杜の木の葉は降にこそふれ
いそのかみふるき都の郭公聲はかりこそむかし成けれ
古鄕はよし野の山し近けれは一日もみゆきふらぬ日そなき
思ひ出るときはの山の郭公からくれなゐのふり出てそなく
冬さむみ氷らぬ夜半はなけれ共吉野の瀧はたゆるよそなき
足引の山郭公けふとてやあやめの草のねをたてゝ鳴
梅花（花の色は古）雪にましりて見えすともかをたに匂へ人のしるへく
夏の夜はふすかとすれは時鳥なく一こゑにあくるしのゝめ
雪ふれは木ことに花そ咲にける何れを梅とわきてをらまし
めつらしき聲ならなくに子規こゝらの年をあかすもある哉
夕されはさほの川せの河霧に友まとはせる千鳥なく也
夏衣たちきるものを逢坂の關の清水の寒くも有哉
浦ちかくふりしく（くる古）雪を（は古）しら波のすゑの松山こすかとそみる
ほとゝきす待に夜ふけぬこの暮の時雨におほみみちや行覽
冬くれはあやしとのみそまとはるゝ枯たる枝に花の咲れは
つれもなき（ね後）夏の草葉におく露を命とたのむ蟬のはかなさ
降雪は枝にもしはしとまらなむ花も紅葉もたえてなきまは
つれ〳〵となかめせしまに夏草は荒たる宿にしけく生に鳧
くらふ山こすえも見えて降雪に夜半にこえくる人は誰そも
夏の夜をあま雲しはしかさならむみるほともなく［　　　］
白雪のふりてつもれる古鄕にすむ人さへやおもひきゆらん
夏のよに霜やふれると見るまてにあれたる宿をてらす月影
雪のうちにみゆる常磐は三輪の山道のしるへの杉にや有覽
蟬の聲きけはかなしな夏衣うすくや人のならむと思へは
けぬからへにまたもふりしけ春霞たちなはみ雪稀に社みめ
今さらに山へかへるなほとゝきす聲のかきりは我宿になけ
冬こもり春また遠き鶯のすのうちのねのきかまほしきを
常夏の花をしみれはうちはへてすくす月日の時もしられす
きのふといひ今日と暮して飛鳥川なかれてはやき月日也鳧
夏の夜はまた宵なから明ぬるを雲のいつくに月宿るらむ
行年のをしくもある哉ます鏡見るかけさへに暮ぬと思へは

新撰和歌巻第三

賀哀并二十首内一首不足

我君は千世にやちよにさゝれ石の巖となりてこけのむす迄
なく涙あめとふら南わたり川水まさりなは（命イ）かへりくるかに
わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ君かちとせのあり數にせん
ちのなみた落てそ瀧つ白河は君か代までの名に社有けれ
しほの山さしての磯にすむ千鳥君か御代をはやちよとそなく

うつせみはからを見つゝもなくさめつ深草の山煙たにたて
龜の尾の山のいはねをとめておつる瀧の白玉千代の數かも
ねてもみゆねてもみえ鳬大方はうつ蟬の世そ夢には有ける
古にありきあらすはしらね共千とせのためし君にはしめむ
あすしらぬ我身と思へと暮ぬまのけふは人こそ悲しかりけれ
ふして思ひおきてかそふる万代を神そしるらん我君のため
花よりも人社あたになりにけれ何れをさきに戀ぬ(む古)とか見し
忘かたきよはひをのふと菊の花けさ社露のおきてをりつれ
なき人の宿にかよはゝ郭公かけてねにのみなくとつけなん
春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふ心は神そしるらん
かすか〳〵に我を忘れぬものならは山のかすみを哀とはみよ
露をなとはかなきものと思ひけむ我身も草におかぬ計りを
見えわたる濱の眞砂や蘆田鶴の千とせをのふる數となる覽
さきたゝぬくひのやちたひ悲しきは流るゝ水の歸りこぬ也

別旅幷二十首

立わかれ稻葉の山のみねに生る松としきかは今かへりこん
天の原ふりさけみれは春日なるみかさの山にいてし月かも
音羽山こたかく啼てほとゝきす君かわかれを(は古)をしむへら也
夕月夜おほつかなきを玉手箱(匣集)ふたみの浦をあけてこそ見め
人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていさ歸なん
わたの原八十嶋かけて漕出ぬと人にはつけよあまのつり船
かつこえて別もゆくかあふ坂は人のためなる名に社有けれ
都出てけふみかの原いつみ川河風さむし衣かせやま
夕暮のまかきは山と見えなゝん夜はこえしと宿りとるへく
かりくらし七夕つめに宿からむ天のかはらにわれは來に鳬
別をは山の櫻にまかせてむとめむとめしは花のまに〳〵
此たひはぬさもとりあへす手向山もみちの錦神のまに〳〵
あかすして別る涙瀧にそふ水まさるとやしもは見ゆらん
名にしおはゝいさことゝはむ都鳥我思ふ人は有やなしやと
夜をさむみおく初霜をはらひつゝ草の枕にあまたたひねん(ぬ古)
別るれとうれしくも有哉今宵よりあひみぬ先に何を戀まし
むすふ手の雫に濁る山の井のあかても人にわかれぬるかな
唐衣きつゝ馴にし妻しあれははる〳〵きぬる旅をしそ思ふ
いのちたに心にかなふものならはなにか別の悲しからまし
北へ行鴈そなくなるつれてこし數はたらてそ歸るへらなる

新撰和歌巻第四

戀雜幷百六十首内二首不足

しのふれはくるしき物を人しれす思ふてふこと誰に語らむ
人しれす思ふこゝろは春霞たち出て君かめにも見えなん
久かたの天つ空にもあらなくに人はよそにそ思ふへらなる
誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
音にのみ菊の白露よるはおきて晝は思ひにけぬへきものを(あへすけぬへし古)
我うへに露そおくなる天の川とわたる舟のかひのしつくか
吉野川岩なみたかく行水のはやくそ人を思ひそめてし
世中にふりぬる物は津の國のなからの橋とわれとなりけり
足引の山下水にうつ(こかく古)もれて瀧つ心をせきそかねぬる

ぬきみたす人こそあらし白玉のまなくも散か袖のせはさに
郭公なくや五月の菖蒲草あやめもしらぬ戀もする哉
たか御祓ゆふつけ鳥かから衣立田の山におりはへて鳴
津の國の室のはやわせひてす共綱をはやはくもるとしるへく
難波かたしほみちくれは蜑衣たみのゝしまにたつ鳴わたる
夕されは雲のはたてに物そ思ふ天津空なる人をこふとて
天津風雲のかよひち吹とちよをとめの姿しはしとゝめむ
たちかへり哀とそおもふよそにても人に心をおきつ白波
こきちらす瀧のしら玉ひろひ置て世の憂時の涙にそかる
川の瀬になひく玉藻のみかくれて人にしられぬ戀もする哉
幾はくもあらし我身をなそもかく海人の刈藻に思ひ亂るゝ
住の江の波にあらねと夜とゝも（しはし〳〵も古）に心を君によせわたるかな（かも古）
和田の原よせくる波の立かへり見まくのほしき玉津嶋かな
あさき瀬そ波は立らんよし野川ふかき心を君はしらすや
わたつ海のかさしにさせる白妙の波もてゆへるあはち嶋哉（山古）
心かへするものにもかかた戀はくるしき物と人にしらせん
みな人は心々にあるものをおしひたすらにぬるゝ（に古）袖かな
みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人を戀や渡らむ
かつみれと疎ましき哉月影のいたらぬ里のあらしと思へは
我戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれとも行かたもなし
ふたつなきものと思ひしを水底に山のはならて出る月かな（け古）
なぬかゆく濱の眞砂と我戀といつれまされりおきつ白波
我見ても久しく成ぬ住よしのきしの姫松幾代經ぬらん
わたつ海の底の心はしらね共人をみるめはからむとそ思ふ
思ひきやひなの別に衰へてあまのなはたきいさりせんとは

つれなきを今はこひしとおもへとも心よわくもおつる涙か
世中のうきもつらきもつけなくにまつしるものは涙なりけり
我戀を忍ひかねては足引の山たち花の色に出ぬへし
色なしと人やみる覽むかしよりふかき心にそめてしものを
起もせすねもせて夜をあかしては春のものとて眺め暮しつ
なよ竹のよの（なか古）うきふへに初霜のおきゐて物をおもふ比かな
哀てふことたになくは何をかも（け古）戀の亂れのつかねをにせん
世中は昔よりやはうかりけん我身ひとつ（のみこそ古）のためになれるか（め古）
我戀は人しるらめやしきたへの枕はかりそしらはしるらむ
玉ほこの道にはつねにまとはなん人をとふとも我と（か古）思はむ
戀しきに命をかふる物ならはしにはやすくそ有へかりける
侘ぬれは身を浮草の根を絶て誘ふ水あらはいなんとそ思ふ
こむ世にもはやなりなゝむめの前につれなき人を（れぬあなう古）昔と思はん
しかりとて背かれなくに事しあれは先歎かるゝ哀れ世の中
あしかもの騒く入江の白浪のしらすや人をかくこひんとは
わたつ海の沖津潮あひに浮ふあはの消ぬ物から（ゐた古）よる方もなし
そこひなき淵やはさわく山川の淺き瀬にこそらは波はたて
山里は物さひしかる（のさひしき古）事社あれ世のうきよりはすみよかりけり
木のまより影のみ見ゆる月草のうつし心はそめてしものを
雁のくる峯の朝霧はれすのみ思ひつきせぬ世の中のうさ
夕されは宿にふすふる蚊遣火のいつまて我身下もえにせむ
我心なくさめかねつさらしなやをは捨山にてる月をみて
君といへは見まれみすまれ富士のねの珍しけなく燃る我戀
風吹はおきつしら波立田山夜半にや君かひとりこゆらむ
あやなくてまたき浮名の立田川渡らてやまむ物ならなくに

天川雲のみをにてはやけれは光とゝめす月そなかるゝ
綱手ひく響の灘のなのりその名のり初てもあはてやまめや
都まてひゝき聞ゆるからことは波のをすけて風そひきける
あふ事の渚にしきる浪なれはうらみてのみそ立かへりける
あかすして月の隠ろゝ山里はあなたおもてそ戀しかりける
人しれぬ思ひのみこそわひしけれ我歎をは我のみそしる
あかなくにまたきに月の隠るゝか山のは逃ていれすもあら南
石上ふるとも雨にさはらめやあはんと妹にいひてしものを
思ふよりいかにせよとか秋風になひく淺茅の色ことになる
あな戀し今も見てしか山かつの垣ほに生るやまとなてしこ
あれにけり哀いくよの宿なれやすみけん人の訪つれもせぬ
村鳥の立にし我名今さらにことなしふともしるしあらめや
蘆たつのたてる河へを吹風によせて歸らぬなみかとそみる
人しれす止なましかは侘つゝもなき名そとたにいはまし物を
古郷の野中の清水ぬるけれともとのこゝろをしる人そくむ
人しれす物を思へは秋の田のいなはのそよといふ人もなし
難波かたおのか袂をかりそめのあまとそ我は成ぬへらなる
それをたに思ふ事とて我やとをみきとないひそ人のきかくに
こゝにして我世はへなんすか原や伏見の里のあれまくもをし
鹽みては入ぬる磯の草なれやみるめすくなくこふらく多し
思ふとちまとゐせるよの唐錦たゝまくをしき物にそ有ける
人はいさ我はなき名の惜けれは昔も今もしらすとをいはむ
我身からうき名の川となかれつゝ人の爲さへ悲しかるらむ
雨雲のよそにも人の成行かさすかにめには見ゆるものから

いつくにか世をは厭はん心社野にも山にもまとふへらなれ
月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふら南わひつゝもねん
逝く出る月にもあるかな足引の山のあなたもをしむへら也
露たにもなからましかは秋の夜を誰と起ゐて人をまたまし
なかれてもなを世中をみよし野の瀧の白玉いかてひろはん
今はとてかれなん人もいかゝせむあかす散ぬる花と社みめ
光なき谷には春もよそなれは咲てとく散もの思ひもなし
色見えてうつろふものは世中の人の心の花にそありける
海士のすむ里のしるへにあらなくに恨みむとのみ人の云覽
いろもなき心を人にそめしかは移ろはむとは思はさりしを
古郷はみしこともあらすをのゝえの朽し所そ戀しかりける
有磯海の濱の眞砂とたのめしは忘るゝ事の數にそ有ける
住よしの岸の姫松人ならは幾世かへしとはまし物を
行かへり千鳥啼なりはまゆふの心へたてゝおもふものかは
住よしと蜑はいふともなかゐすな人忘れくさおふと云なり
武士の八十宇治川の網代木にたゝよふ波のゆくへしらすも
忘らるゝ身を宇治川の中たえてこなたかなたに人も通はす
今そしるくるしき物と人またむ里をはかれすとふへかり鳧
忘草なにをかたねと思ひしをつれなき人のこゝろ也けり
おほあらきの杜の下草老ぬれは駒もすさめすかる人もなし
秋の田の稲といふともかけなくにおらしとなとか人の云覽
うつ蟬の世にしもすまし霞たつみ山の影によはつくしてん
石のかみふる野の道も戀しきをしみつく日にはまつも歸覽
神無月しくれ降おけるならの葉のなにおふ宮のふる事そ是

またはなをよりつかね共玉緒のたえてたえねは苦しかり鳧
なかれくる瀧のしら糸よわからしぬけと亂れておつる白玉
世中にたえて僞なかりせはたのみぬへくも見ゆる玉章
誰ために引てさらせる（布古）糸なれはよをへてみれとゝる人もなし
今更にとふへき人もおもほえす八重葎して門させりてへ
わくらはに問人あらは須磨の浦に藻鹽たれつゝわふと答へよ
我いほは三輪の山本戀しくはとふらひきませ杉たてるかと
嬉しきをなにゝつゝまむ唐衣たもとゆたかにたゝまし物を（てといはましを古）
秋くれは野にも山にも人くたつたつとぬるとや人の戀しき
我せこかきませりけりなかく宿の草もなひけり露もおち鳧
おく霜にねさへ枯にし玉かつらいつくらんとは我は頼まむ
我宿の一むら薄かりかはん君か手なれの駒もこぬかな
あさなけに世のうき事を忍ふとて眺めし儘に年そ經にける
哀てふ事にしるしはなけれ共いはてはえ社あらぬものなれ
世中のうけくにあきぬ奥山の木の葉に降れる雪やけなまし
淺ち（あさ古）ふのをのゝ（と古）篠原しのふとも人しるらめやいふ人なしに
山彦の音つれしをそ今は思ふわれか人かとたとらるゝよに
侘はつる時さへ物のかなしきはいつれをしのふ心なるらん
身は捨つ心をたにもはふらさし終にはいかゝなるとしるへく
伊勢の海のあまのたく繩打はへて苦しとのみや思ひわた覽
かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾上に立る松ならなくに
思ふ共こふとも逢んものなれやゆふてもたゆくとくる下紐
哀てふことの葉毎におく露はむかしをこふるなみた成けり
おもひやる心や行て人しれす君か下紐ときわたるらん
ありはてぬ命まつまのほとはかりうき事しけく思はすも哉
あひみぬもうきも我身のから衣思ひしらすもとくる紐かな

我しなはなけゝ松むし空蟬の世にへし時の友としのはん
思ひ出るときはの山の岩つゝしいはねは社あれ戀しき物を
忘られは時しのへとそ濱千鳥行へもしらぬあとをとゝむる
道しらは摘にもゆかん住の江のきしにおふといふ戀忘れ草
ほの〳〵と明石の浦のあさ霧に嶋かくれ行舟をしそ思ふ
岩の上に立る小松の名ををしみことにはいはす戀社わたれ
逢坂のあらしの風のさむけれは行へもしらす侘つゝそゆく
哀てふことこそうたて世中に思ひはなれぬほたし成けり
足引の（みよしのゝ古）山のあなたに家もかな世のうき時のかくれ家にせん
戀々て枕さためぬかたもなしいかにねしよか夢に見えけむ
都人いかにとゝはゝ山たかみはれぬ雲ゐにわふとこたへよ
つゝめとも袖にたまらぬしら玉は人をみぬめのなみた成鳧
主や誰とへとしら玉いはなくにさゝはなへてや哀と思はん
戀しきも心よりあることなれは我よりほかにつらき人なし
海人のかるもに住虫の我からとねを社なかめ世をは恨みし
千早振賀茂の社のゆふたすきひと日も君をかけぬ日そなき
今こそあれ我も昔は男山さか行ときもありこしものを
久しくも成にけるかな住の江の松は千とせの物にそ有ける
風の上にありか定めぬちりの身は行へもしらす成ぬへら也
戀せしと御たらし川にせし御祓神はうけすも成にけるかな
若菜つむ春日の野へは何なれやよしのゝ山はまた雪のふる
三輪の山いかに待見ん年ふとも尋ぬる人もあらしと思へは
いく代經し磯邊の松は（も）むかしより立よる波やかすを知らん
白玉かなにそと人のとひしとき露と答へてきえなまし物を
流れてはいもせの山の中におつるよし野の瀧の（川古）よしや世中

金玉集

倭歌得業生柿本末成撰

春

凡河内躬恒
春たつと聞つるからに春日山消あへぬ雪の花とみゆらん
壬生忠岑
春立といふはかりにやみよしのゝ山も霞て今朝はみゆらん
源重之
みよしのゝ山の白雪いつきえてけさはかすみの立かはる覽
中務
鶯の聲なかりせは雪消ぬ山里いかて春をしらまし
源まさすみ
谷風にとくる氷のひまことにうち出る波や春のはつ花
みつね
春の夜のやみはあやなし梅の花いろ社みえねかやは隠るゝ
讀人しらす
我せこにみせんと思ひし梅の花それ共みえす雪のふれゝは
たゝみ
子日する野へに小松のなかりせは千世のためしに何をひかまし
よしのふ朝臣
千とせ迄かきれる松もけふよりは君にひかれて万代やへん
紀貫之
ゆきてみぬ人も忍へと春の野のかたみにつめる若菜也けり
しけゆき
やかすとも草は萠なむ春日野をたゝ春のひにまかせたら南
花山院御製
木のもとを住家とすれはをのつから花みる人となりぬへき哉
みつね
山たかみ雲ゐにみゆる櫻はな心の行てをらぬ日そなき
つらゆき
櫻ちる木下風は寒からて空にしられぬ雪そ降ける
業平朝臣
世の中に絶て櫻のなかりせは春の心はのとけからまし
躬恒
わか宿の花みかてらにくる人は散なん後そくるしかるへき
讀人しらす
春のゝにあさるきゝすの妻こひに己か在家を人にしれつゝ
春日の社にて　貫之
思ふこと有てこそゆけ春霞みちさまたけに立かくすらん
遠き處よりかへる道にて人にあへる　伊勢
散ちらすきかまほしきをふる鄕の花みてかへる人も逢なん
中納言小野家にて　一條左大臣
いにしへは散をや人のをしみけむ今は花社むかしこふらし
よみ人しらす
春きてそ人もとひける山里は花こそやとのあるしなりけれ
貫之
花もみな散ぬるやとは行春のふる里とこそ成ぬへらなれ

夏

源公忠朝臣
ゆきやらて山路くらしつ郭公いま一聲のきかまほしさに
忠見
小夜ふけて寝覺さりせは郭公ひとつてに社聞へかりけれ

秋

あふさかの關の淸水に影みえていまやひくらん望月の駒　貫之

逢坂の關の岩かとふみならし山たちいつるきりはらの駒　大貳高遠

かりにくときくに心のみえぬれは我袂にもよせしとそ思ふ　いせ

河霧の麓をこめて立ぬれは空にそ秋の山はみえける　讀人不知

紅葉せぬときはの山に住鹿はおのれ鳴てや秋をしるらん　能宣

見る人もなくて散ぬるおく山の紅葉はよるのにしき也けり　つらゆき

暮て行秋のかたみにおく物は我もとゆひの霜にそ有ける　平兼盛

冬

心あてにをらはやをらん初霜のおきまとはせるしら菊の花　みつね

龍田川もみちはなかる神なひのみ室の山に時雨降らし　よみ人しらす

夕されはさほのかはらの河霧にともまとはせる千鳥鳴也　紀友則

思ひかねいもかりゆけは冬のよのかは風寒み千鳥鳴也　貫之

夜を寒みねさめて聞はをしそ鳴はらひもあへす霜やおく覽　讀人知らす

み山にはあられ降らし外山なるまさきのかつら色つきに烏

みよしのゝ山のしら雪つもるらしふる里寒く也まさる也　坂上是則

かそふれは我みにつもる年月を送むかふと何いそくらん　兼盛

戀

我戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれとも行かたもなし　讀人しらす

こひせしとみたらし河にせし御祓神はうけすも成にける哉　業平

我こひはゆくへもしらすはてもなし逢を限と思ふ計そ　躬恒

人しれすたえなましかはわひつゝもなき名そとたにいはまし物を　伊勢

今こむといひし計に長月の有明の月をまち出つる哉　素性法師

あふことの絕てしなくは中々に人をも身をも恨さらまし　中納言朝忠

うは玉の闇のうつゝはさたか成ゆめにいくらも増らさり烏　讀人しらす

雜

ほの〳〵と明石の浦の朝霧にしまかくれゆく舟をしそ思ふ　人麿

赤人
和歌の浦に汐みちくれは潟をなみ蘆へをさしてたつ鳴渡る
讀ひとしらす
藻かり船今そなきさにきよすなる汀の田鶴の聲さわくなり
沙彌滿誓
世中を何にたとへむ朝朗(開カ)こきゆく船のあとのしら波
安倍仲麿
もろこしにて月をみて
天の原ふりさけみれは春日なる三笠の山に出し月かも
村上の帝のおゝきさいの御賀せさせ給はんとてありけるをきさいうせ給にけれはそのものともをもて御八講おこなはせ給とてわかなのうた　村上御製
いつしかと君にと思ひし若菜をは法の偽にそけふは摘つる
小野の宮の大臣
あつとしの少將なくなりて後あつまの方より少將にとて馬を奉けれは
中務
またしらぬ人もありけり東路に我も行てそ住へかりける
子におくれて
菅原贈大政大臣
忘られてしはし慰さむ程たにもいつかは君を夢ならてみむ
小野篁
君か住やとの梢をゆく〳〵もかくるゝ迄もかへりみしはや
隱岐國に流〔さ〕れて侍て
和田の原八十嶋かけて漕出ぬと人にはつけよ海士のつり舟
齋宮女御
野のみやにて庚申によるのこと松風に似たりといふことを
琴のねにみねの松風かよふらしいつれのをより調へ初けん
橘直幹
白雲千里外
思ひやる心はかりはさはらしを何へたつらん峯のしら雲
傳のとのゝ母
ふち衣なかす涙の川水は岸にも増るものにそありける
人のめのこと心あるよしをいへりけれはその女にかはりて
小野篁
思はむと賴めしことは有ものを何なはたてゝたゝに忘す
高光少將
かくはかりへかたく見ゆる世中にうらやましくも澄る月哉
藤原信直
月の宴のついて勅有て
こゝにたに光さやけき秋の月雲のうへこそ思ひやらるれ
伊勢
男とはす成にけれは父のやまとの守に成てくたるにくしてまかるとて
三輪の山いかに待みん年ふとも尋る人はあらしと思へは
小大君
按察大納言まうてきて明日迄いてさりけれは
岩はしの夜の契も絕ぬへしあくる詫しきかつらきの神
安法法師
すみよしの社にて
あまくたるあら人神のあひおひを思へはひさし住よしの松
よしのふ朝臣
産の七夜にまかりて
君かへむ八百萬代を數ふれはかつ〳〵けふそなぬか也ける
藤原もと輔
藏人所のこれかれ歌侍りけるに
年ことの春の別をあはれとも人におくるゝひとそ知ける
藤原仲文
東宮の藏人所にて月待心を人によませけるに
有明の月の光をまつ程にわかよのいたく更にけるかな
遊女しろめ
別歌
命たに心にかなふものならは何か別の悲しからまし

世中は夢かうつゝか現ともゆめともわかす有てなければ　讀人しらす

あひしれりける女の爲中にいきたりけるほとになくなりにければ歸きて聞ければそのあねの許にいひつかはしける　仲文

流てとたのみしことは行末のなみたの川をいふにそ有ける

屏風の繪に白川のせきにいる人かきたる處に　兼盛

便あらはいかて都に告やらんけふ白川の關は越ぬと

なにらかなすへき事ありて東より京にまうてきて侍けるに俄におほやけことにかゝりてことかたのしをきにつかはしけるにあれにかはりて　藤原輔照

またしらぬ舊鄕人はけふまてやこんと賴めし暮をまつらん　中務

待つらん都の人に逢坂の關まてきぬと告やゝらまし　讀人しらす

風吹はおきつしら波たつた山よはにや君かひとり行らん　伊勢

津の國のなからの橋もつくる也今は我身を何にたとへむ　貫之

大はらやをしほの山の小松はらはやこたかかれ千代の影みん　源したかふ

戀しさを何につけてか慰まんぬるよなければ夢にたに見す

右金玉集以二立原萬本一挍合畢

三十六人撰

四條大納言公任卿

柿本人丸十首　紀貫之同　凡河內躬恒同
伊勢同　大伴家持三首　山邊赤人同
在原業平同　遍昭僧正同　素性法師同
紀友則同　猿丸太夫同　小野小町同
兼輔卿同　朝忠卿同　敦忠卿同
高光少將同　源公忠同　壬生忠岑同
齋宮女御同　大中臣賴基同　藤原敏行同
源重之同　源宗于同　源信明同
藤原淸正同　源順同　藤原興風同
淸原元輔同　坂上是則同　藤原元眞同
小大君同　藤原仲文同　大中臣能宣同
壬生忠見同　平兼盛十首　中務同

人丸十首

きのふこそ年は暮しか春霞かすかの山にはやたちにけり

明日からは若なつまむと片岡のあしたの原はけふそやくめる

梅花それともみえす久かたのあまきる雪のなへてふれゝは

郭公なくや五月の短か夜もひとりしぬれは明しかねつも

あすか川紅葉はなかるかつらきの山の秋風ふきそしぬらし

ほの〳〵と明しの浦のあさ霧に嶋かくれゆく船をしそ思ふ

賴めつゝ來ぬ夜數多に成ぬれはまたしと思ふそ待にまされる

足引の山鳥のおのしたりおのなか〳〵し夜を獨りかもねん

わきもこかねくたれ髮をさる澤の池の玉もと見るそ悲しき

ものゝふの八十うち川の早きせに漂ふ浪のよるへしらすも

貫　之十首

とふ人もなきやとなれとくる春は八重葎にもさはらさり鳧
行てみぬ人もしのへと春の野のかたみつめる若菜なりけり
花もみな散ぬるやとは行春のふるさとゝ社成ぬへらなれ
夏の夜のふすかとすれは郭公なくひと聲にあくるしのゝめ
みる人もなくて散ぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり
櫻ちる木のした風はさむからて空にしられぬ雪そふりける
こぬ人をしたに待つゝ久かたの月を哀といはぬ夜そなき
思ひかねいもかりゆけは冬の夜の川風さむみ千鳥なくなり
君まさて煙たえにししほかまの浦さひしくも見え渡るかな
あふ坂の關の清水にかけ見えて今やひくらんもち月のこま

躬　恒十首

春たつと聞つるからに春日山きえあえぬ雪の花と見ゆらん
かをとめて誰おらさらむ梅のはなあやなし霞立なかくしそ
山高み雲井にみゆる櫻花こゝろの行ておらぬ日そなき
我やとの花見かてらに來る人は散なん後そこひしかるへき
けふのみと春を思はぬ時たにもたつ事やすき花のかけかは
時鳥よふかき聲は月見るとゐもねてあかす人そ聞ける
たちとまりみてを渡覧紅葉葉は雨とふるとも水はまさらし
心あてにおらはやおらん初霜のをきまとはせるしら菊の花
我戀は行衞もしらす果もなしあふをかきりと思ふはかりそ
ひきうへし人はむへこそ老にけれ松の木高く成てける哉

伊　勢十首

青柳のえたにかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそみる
千とせふる松といへとも植てみる人そ數へてしるへかりける
年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをや曇るとみるらん
散ちらすきかまほしきを古郷の花みてかへる人もあはなん
いつくまて春は行らん暮はてゝ別れしほとは夜になりにき
二聲と聞とはなしに郭公よふかくめをもさましつるかな
三輪の山いかに待みん年ふとも尋ぬる人もあらしと思へけ
うつろはん事たにおしき秋萩におれぬはかりもをける白露
人しれす立なましかは侘つゝもなき名とたにもいはまし物を
難波なるなからの橋もつくる也いまはわか身を何に例へん

大伴家持三首

新玉の年たちかへるあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ
さをしかの朝たつをのゝ秋萩に玉とみるまてをけるしら露
春の野にあさるきゝすの妻戀にをのか有かを人にしれつゝ

赤　人三首

明日からは若菜つまむとしめしのに昨日もけふも雪は降つゝ
我せこにみせんと思ひし梅の花それ共みえす雪のふれゝは
わかの浦に鹽みちくれはかたをなみ芦へをさして田鶴鳴渡る

業　平三首

世中にたえて櫻のなかりせは春のこゝろはのとけからまし
たのめつゝとはて年ふる僞にこりぬ心を人はしらなむ
今そしる苦しきものと人またむ里をはかれすとふへかり鳧

遍　昭三首

するの露もとの雫や世中のをくれ先立ためしなるらん
我やとは道もなきまて荒にけり難面き人を待とせしまに
たらちねはかゝれとて社烏羽玉の我黒髪をなてすや有けん

素　性三首

今こむといひしはかりに長月の有明の月を待出つるかな
見てのみや人にかたらん山櫻手ことに折て家つとにせむ

みわたせは柳櫻をこきませて都そ春のにしきなりける

友則三首

夕されはさほの川原のかは霧に友まとはせる千鳥鳴也

雪降は木ことに花そ咲にけるいつれを梅と分てをらまし

秋風に初かりかねそ聞ゆなる誰玉つさをかけてきつらん

猿丸太夫三首

遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かな

日くらしの鳴つるなへに日は暮ぬと思へは山の陰にそ有ける

おく山の紅葉ふみ分鳴鹿の聲きく時そ秋はかなしき

小野小町三首

花の色はうつりにけりな徒に我身世にふるなかめせしまに

思ひつゝぬれはや人のみえつ覽夢としりせは覺さらましを

色見えてうつろふものは世中の人の心のはなにそ有ける

兼輔三首

青柳のまゆにこもれる糸なれは春のくるにそ色まさりける

夕月夜おほつかなきを玉くしけ二見の浦はあけてこそみめ

人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道に迷ひぬるかな

朝忠三首

万代のはしめとけふを祈をきて今行末は神そかそへん

くら橋の山のかひより春霞としをつみてやたちわたるらむ

逢事のたえてしなくは中々に人をも身をも恨さらまし

敦忠三首

かりにくと聞に心の見えぬれは我袂にもよせしとそ思ふ

あひみての後の心にくらふれは昔はものをおもはさり鳧

高光三首

けふの日のくれさらめやはと思へともたへぬは人の心也鳧

春すきて散はてにける梅の花たゝかはかりそ枝に殘れる

かくはかりへかたくみゆる世中にうら山しくもすめる月哉

みても又またも見まくのほしかりし花の盛はすきやしぬ覽

公忠三首

行やらて山ちくらしつほとゝきす今一聲のきかまほしさに

万代もなをこそあかね君か爲おもふ心のかきりなけれは

玉匣ふたとせあはぬ君か身をあけなからやはあはんと思ひし

忠岑三首

春立といふ計にやみよし野の山も霞てけさは見ゆらむ

時しあれは秋やは人の分るへきあるをみるたに戀しき物を

春はなをわれにてしりぬ花さかり心のとけき人はあらしな

齋宮女御三首

琴の音に峯の松風かよふらしいつれの緒より調へそめけん

かつみつゝ影はなれ行水の面にかく數ならぬ身をいかにせん

雨ならてもる人もなき我やとをあさちか原とみるそ悲しき

頼基三首

ひとふしに千代をこめたる杖なれはつくともつきし君の齢は

我こまとけふはあひくる菖蒲草おひをくるゝやまくる成覽

つくは山いとゝしけきに紅葉さへ道もなきまて散やしぬ覽

敏行三首

秋きぬとめにはさやかに見えねとも風の音にそ驚かれぬる

久方の雲の上にてみる菊はあまつほしとそあやまたれぬる

こゝろから花のしつくにそほちつゝ鶯とのみ鳥のなくらん

源宗于三首

ときはなる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけり

つれもなく成行人のことの葉そ秋よりさきの紅葉なりける

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

信　明三首

かきりなく思ひ

こひしさはおなし心にあらすとも今宵の月を君みさらめや

あたら夜の月と花とをおなしくは心しられん人にみせはや

藤原清正三首

子の日してしめつる野への姫小松ひかてや千世の影を待まし

天津風ふけゐの浦にゐる田鶴のなとか雲ゐに歸らさるへき

枝なから見ゆるにしきは神無月また山風のたゝぬ成けり

源　順三首

水のおもにてる月なみを數ふれはこよひそ秋の最中成ける

ちはやふる賀茂の河霧たつなかにしるきはすれる衣成けり

我宿のかきねや春をへたつらん夏來にけりと見ゆる卯の花

興　風三首

契りけん心そつらきたなはたの年に一たひあふはあふかは

誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

君こふる涙の床にみちぬれは身をつくしとそ我は成ぬる

元　輔三首

秋の野の萩のにしきを我宿にしかの音なからうつしてし哉

うきなからさすかに物のかなしきはいまは限りと思ふ成鳧

音なしの川とそつゐに成ぬへきいはてもの思ふ人の涙は

是　則三首

みよし野の山のしら雪つもるらし古鄕寒く成まさるなり

山かつと人はいへとも郭公まつ初こゑは我のみそきく

深綠ときはの松の陰にゐてうつろふ花をよそにこそみれ

元　眞三首

年毎の春のわかれをあはれとも人にをくるゝ人そしりける

人ならはまてといふへき時鳥また二こゑとなかて行らん

君こふとかつは聞つゝふる程をかくてもいける身とやみる覧

小大君三首

岩はしのよるの契もたえぬへし明る侘しきかつらきの神

七夕にかしつと思ひしあふ事のそのよなきなの立にける哉

かきりなくとくとはすれと足引の山井の水はなをそ氷れる

仲　文（三首）

有明の月の光をまつほとにわかよのいたく更にけるかな

なかれてとたのめしことは行末の涙の上をいふにそ有ける

思ひしる人にみせはや夜もすから我床なつにおきゐたる露

能　宣三首

千とせまて限れる松もけふよりは君にひかれて万代や經ん

紅葉せぬときはの山に立鹿はおのれ啼てや秋をしるらん

昨日まてよそに思ひしあやめ草けふ我やとのつまとみる哉

忠　見三首

子の日する野へに小松のなかりせは千世の例に何をひかまし

さよふけてねさめさりせは時鳥人つてに社聞へかりけれ

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日に任せたら南

兼　盛十首

かそふれは我身につもるとし月をゝくりむかふと何急く覽

みやま出てよはにやきつる郭公あかつきかけて聲の聞ゆる

山櫻あくまて色をみつるかな花散へくも風ふかぬ世に

望月の駒ひきわたすをとす也せたのなかみち橋もとゝろに

暮て行秋のかたみにおくものは我もとゆひの霜にそ有ける

たよりあらはいかて都へつけや覽けふ白川の關は越ぬと

ことし生ひの松は七日に成にけり殘れる千代だ思ひ社やれ
朝日さす峯のしら雪むらきえて春の霞はたなひきにけり
わかやとの梅の立えやみえつらむ思ひの外に君か來ませる
みわたせは松の葉しろき吉野山きえすつもれる雪にか有覽

中　務十首

忘られてしはしまとろむ程もかないつかは君を夢ならてみん
鶯の聲なかりせは雪きえぬ山里いかて春をしらまし
いそのかみふるき都をきてみれは昔かさしゝ花咲にけり
更科にやとりはとらしおは捨の山まててらせ秋のよの月
さやかにもみるへき月を我はたゝ涙に曇る折そおほかる
まちつらん都の人にあふ坂の關まてきぬと告ややらまし
我やとの菊のしら露けふことに幾代つもりて淵と成らん
したくゝる水に秋こそかよふらしむすふ泉の手さへ涼しき
咲は散さかねは戀し山さくら思ひたえせぬ花のうへかな
天河かはへすゝしき七夕のあふきの風を猶やかさまし

後六々撰

刑部卿範兼卿

泉式部十首　相摸同　惠慶法師八首
赤染衛門同　能因法師同　伊勢大輔同
曾禰好忠六首　道命阿闍梨同　藤原實方五首
藤原道信同　平貞文四首　清原深養父同
大江嘉言同　源道濟同　道雅卿同
增基法師同　公任卿三首　大江千里同
在原元方同　輔親卿同　高遠卿同
馬内侍同　藤原義孝同　紫式部同
道綱卿母同　藤原長能同　定頼卿同
上東門院中將同　兼覽王二首　在原棟梁同
文屋康秀同　藤原忠房同　菅原輔昭同
大江匡衡同　安法法師同　清少納言同

泉式部十首

春霞たつやをそきと山川の岩間をくゝる音聞ゆなり
さひしさに煙をたにもたえしとて柴折くふる冬の山里
津の國のこや共人をみるへきにひま社なけれ蘆の八重ふき
黒髪のみたれもしらす打ふせはまつかきやりし人そ戀しき
かるもかき臥猪の床もいを安みさ社れさらめかゝらすも哉
捨はてむと思ふさへ社悲しけれ君になれにし我身と思へは
ものをのみ思ひし程に悲しくてあさちか原によは成にけり
もの思へは澤の螢も我身よりあくかれ出る玉かとそ見る
もろ共に苔の下にはくちすして埋れぬ名をきくそかなしき
くらきよりくらき道にそ入ぬへき遙かにてらせ山のはの月

相　模十首

見わたせは波のしからみかけてけりうのはな咲る玉川の里
五月雨の空なつかしく匂ふ也花橘に風やふくらむ
五月雨はみつの御牧のまこも草かりほす程もあらしとそ思ふ
都には初雪ふれは小野山にまきのすみかまたきまさるらん
難波かたあさみつしほに立千鳥浦傳ひする聲聞ゆなり
逢事のなきよりかねて辛けれはさそあらましにぬるゝ袖哉
あやしくも現れぬへき袂かな忍ひねにのみぬらすと思ふに
眺めつゝ事ありかほに暮しても必す夢にみえはこそあらめ
昨日けふ歎くはかりの心地せはあすに我身やあはしとす覽
恨みわひほさぬ袖たにある物を戀にくちなむ名社おしけれ

惠慶法師八首

あさち原ぬしなき宿の櫻花心やすくや風にちるらむ
山吹の花のさかりにゐてにきて此里人に成ぬへきかな
松風のいはひの水をむすひあけて夏なき年と思ひける哉
八重葎しけれるやとのさひしきに人社とはね秋はきにけり
徒にすくる月日を七夕のあふ夜のかすとおもはましかは
荻の葉もやゝうちそよく程なるをなと鹿のねのをとなかる覽
すたきけん昔の人もなき宿もたゝ影するは秋のよの月
天のはら空さへさたやわたるらむ氷とみゆる冬のよの月

赤　染八首

紫の袖をつらねてきたるかな春立ことはこれそうれしき
歸る鴈雲井はるかになりぬなり又こむ秋もとをしと思ふに
なかぬ夜もなく夜も更に郭公まつとてやすきいやはねらるゝ
こよひこそよそに
越はてはみやこも遠く成ぬへし關の夕風しはしすゝまん
恨むとも今はみえしと思ふ社せめてつらさのまさる成けれ
かはらんと祈る命はおしからてさても別れん事そかなしき
我計りなからのはしもくちにけりなにはの事も深く悲しき

能　因八首

心あらん人にみせはやつのくにの難波わたりの春の景色を
世中をおもひ捨てし身なれとも心かへしと花にみえつる
わかやとの梢の夏になる時はいこまの山そみえすなり行
時鳥來なかぬよひのしるからはぬるよも一夜あらまし物を
いかな覽今宵の雨にとこなつのけさたに露のおもけ成つる
あらし吹み室の山のもみち葉はたつたの川のにしき成けり
主なしとこたふる人はなけれ共宿の景色そいふにまされる
都をは霞とゝもに出しかと秋かせそ吹しら川の關

伊勢大輔八首

いにしへの奈良の都の八重櫻けふこゝのへににほひぬるかな
聞つともきかすともなし郭公心まとはすさよのひとこゑ
小夜更て衣してうつ聲きけはいそかぬ人もねられさりけり
めもかれすみつゝくらさむ白菊の花より後の花しなけれは
けふくるゝ程まつたにも久しきにいかて心をかけてすき劒
みるめこそあふみの海にかたからめ吹たに通へしかの浦風
いにしへにふり行身こそ哀なれ昔なからの橋をみるにも
なき數を思ひなしてやとはさらんまた有明の月まつものを

好　忠六首

みしま江につのくみ渡るあしのねの一夜の程に春はきにけり
榊とる卯月になれは神山の楢の葉かしはもとつはもなし
みたやもりけふは五月に成にけり急けや早苗おいも社すれ
なけやなけ蓬かもとのきり〴〵す過行秋はけにそかなしき

我せこかきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしき哉
あちきなし我身に優る物やあると戀せし人をもときし物を

道　命六首

花みると人は山邊に入はてゝ春は都そさひしかり（る歟）けり
あし引の山ほとゝきすのみならす大かた鳥の聲もきこえす
郭公まつほとゝこそ思ひつれ聞ての後もねられさりけり
古郷は淺ちか原と成はてゝ夜すから虫の音をのみそ鳴
思ひ餘りいひ出る程に數ならぬ身をさへ人にしられぬる哉
忘るなよわするときかは三熊野の浦のはまゆふ恨かさねん

實　方五首

五月やみくらはし山のほとゝきす覺つかなくも鳴わたる哉
なにせんに命をかけて誓ひけんいかはやと思ふ折も社あれ
契ありて此世に又は生るともおもかはりしてみもや忘れん
うら風に靡きにけりな里の海人のたくもの烟心よはさは
忘れすよ又わすれすもかはら屋の下たく煙したむせひつゝ

道　信五首

近江にか有といふなるみくりくる人苦しめのつくまえの沼
歸るさの道やはかはる變らねととくるはまとふけさの朝雪
明ぬれはくるゝものとはしりなから猶恨めしき朝ほらけ哉
朝顏を何はかなしと思ひけん人をも花はさこそ見るらめ
限りあれはけふぬき捨つ藤衣はてなき物はなみた成けり

貞　文三首

今よりはうへてたにみし花すゝきほに出る秋は侘しかり鳧
秋風の吹うらかへすくすの葉のうらみてもなを恨めしき哉
ありはてぬ命まつまのほとはかり憂事しけく歎かすもかな

深　養　父四首

夏の夜のまた宵なから明ぬるを雲のいつくに月宿るらん
雲ゐにも深き心のをくれねはわかると人にみゆるはかりそ
心をそわりなきものと思ひぬるみる物からや戀しかるへき
戀しなはたか名はたゝし世中の常なきものといひはなす共

嘉　言四首

梅か香を夜はの嵐の吹ためて槇の板戸の明る待けり
いつかたと聞たにわかす郭公たゝ一こゑの心まとひに
忍ひつゝやみなんよりは思ふ事あり鳧とたに人にしらせん
君か代は千世に一たひゐるちりの白雲かゝる山となるまて

道　濟四首

いとゝしくなくさめ難き夕暮に秋とおほゆる風そ吹なる
あさほらけ雪ふるさとを見わたせは山のは毎に月そ殘れる
ぬれ／＼も猶かりゆかむはし鷹のうはけの雪を打拂ひつゝ
行末のしるしはかりに殘るへき松さへいたく老にけるかな

道　雅四首

柳葉のゆふしてかけて其かみにをしかへしてもにたる比哉
あふさかは東路と社聞しかと心つくしの關にそ有ける
いまはたゝ思ひたえなむとはかりを人傳ならて云よしも哉
涙やは又もあふへきつまならんなくよりほかの慰めそなき

増　基四首

冬の夜に幾たひはかりね覺してもの思ふ宿のひましらむ覽
都のみかへりみられて東路を駒のこゝろにまかせてそ行
山からす頭もしろく成にけり我かへるへき時やしるらん
ともすれはかりの山邊にあくかれし心に身をも任せつる哉

元　方三首

年の内に春はきに鳧一年をこそとやいはん今年とやいはむ

たちかへり哀とそ思ふよそにても人に心をおきつしら波
人はいさ我はなき名の惜けれは昔も今もしらすとをいはん

千　里三首

月みれはちゝに物社悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねと
芦田鶴のひとりをくれて啼こゑは雲のうへまて聞えつか南
うへし時花待とをにありし菊うつろふ秋にあはむとやみし

公　任三首

春きてそ人もとひける山里は花こそ宿のあるし成けれ
朝またき嵐のかせのさむけれは散もみち葉をきぬ人そなき
霜をかぬ袖たにさゆる冬の夜の鴨のうは毛を思ひこそやれ

輔　親三首

いつれをかわきておらまし山櫻心うつらぬ枝しなけれは
あし曳の山郭公さとなれてたそかれ時になのりすらしも
いかて〳〵こふる心を慰めて後の世まてにものを思はし

高　遠三首

沼水にかはつ鳴なりむへしこそ岸の山吹さかりなりけれ
逢坂の關のいはかとふみならし山たちいつる霧はらの駒
戀しくは夢にも人をみるへきに窓うつ雨そめをさましつゝ

馬内侍三首

とゝまらぬ心そみえむかりかねは花の盛を人にかたるな
こよひ君いかなる里の月をみて都に誰をおもひ出らん
かきくもれ時雨とならは神無月心そらなる人やとまると

義　孝三首

つらからは人に語らんしきたへの枕かはして一夜ねてきと
君かためおしからさりし命さへなかくもかなと思ひける哉
今はとてとひわかるめる村鳥のふるすにひとり眺むへき哉

紫式部三首

みよし野は春のけしきに霞めともむすほをれたる雪の下草
世中をなに歎かまし山さくら花みるほとのこゝろなりせは
めつらしき光さしそふ杯はもちなからこそ千世もめくらめ

長　能三首

身にかへてあやなく花を惜むかないけらは後の春も社あれ
さはへなす荒ふる神とをしなへて今日はなこしの拂ひ成鳬
雪をうすみ垣ねにつめるからなつななつさはまくのほしき君哉

定　頼三首

櫻花さかりになれは古郷のむくらのかともさゝれさりけり
水もなく見えこそわたれ大井川きしの紅葉は雨とふれとも
かりそめの別と思へとしら川のせきとめかたき涙なりけり

上東門院中將三首

思ひやれ霞こめたる山里の花まつほとの春のつれ〳〵
此頃は木々のこすゑも紅葉して鹿こそは鳴秋の山さと
おもひやれとふ人もなきやま里のかけひの水の心ほそさを

兼覽王二首

けふよりは荻の燒はらかき分て若菜つみにと誰をさそはん
立田姫たむくる神のあれはこそ秋の木の葉のぬさと散らめ

棟　梁二首

春たてと花もにほはぬわかやとは物うかるれに鶯のなく
秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖とみゆ覽

康　秀二首

春の日の光にあたる我なれとかしらの雪となるそ侘しき
吹からに野への草木のしほるれはむへ山風を嵐といふらん

忠　房二首

きり〳〵すいたくな鳴そ秋の夜の長き思ひは我そまされる
なをさりの涙なりせはから衣忍ひに袖のしほらさらまし

輔　昭二首

春風はのとけかるへし八重よりもかさねて匂へ山ふきの花
またしらぬ古鄕人はけふまてやこむとたのめし我を待らん

匡　衡二首

逢坂の關のあなたをまた見ねは東のこともしられさりけり
川舟にのりて心のゆく時はしつめる身ともおほえさりけり

安　法二首

夏ころもまたひとへなるうたゝねに心してふけ秋の初風
天くたるあら人神のあひおひを思へはひさし住よしの松

淸少納言二首

夜をこめて鳥のそらねははかる共世に逢坂の關はゆるさし
よしさらはつらきは我に習ひ皃たのめてこぬは誰か敎へし

新三十六人撰

それあかつきのかねのほのかにひゝけとも。無明の眠いまたさめす。夕の枕いたつらにそはたてゝ。妄想の夢いよいよかさなる。つたなき身のありさまを思ふに。むかし花洛にすむへき里をはなれて。いまは桑門のさひしき道にそ入りぬる。爰に六十餘廻の霜の色。まゆのうへにつもるといへとも。三十一字の露のことのは。心の底にとゝまれり。往事をおもへはきのふのことし。後榮を期すれは山のはの月よりかたふき。狩場のきゝすよりもつかれたり。つら〳〵おもへは。かしこきもとゝまらす。をろかなるもさりき。その中になさけ有はわすれかたく。藝あるは忍ひかたし。しかあるを。絲竹はみゝをよろこはしむる遊なれとも。そのこゑ風をつなかぬかことし。廻雪は目をおとろかす物なれとも。そのすかた影をとゝめぬに似たり。時うつり事へたゝりぬれは。さらに目に見え。耳にきく事あたはす。いにしへをかゝみ。いまをかゝみるに。たゝ柿本のふるき跡。藻思のあたらしきことのはのみ也。かの嘉陵原の春の夜。おほろ月を詠し。あかしのうらの秋のそらに。ゆく舟をなかめけむも。まのあたりに見るこゝちするものなれは。むへならし。後の今をみん事。いまのいにしへを見るか如しとかゝれたる。かしこからさるにあらす。されは河竹の代々につたはりて。そのなかれをくむ人。たかきいやしきいまにたえさるなるへし。かれは玉樓金閣のみきりには。ちかつく事なけれとも。仙雲のをよはぬいろをあふき。神明佛陀のちかひはいとふかしといへとも。こと葉の露落散事。たとへは晴天の月の光のさゝれ水にう

つれるを見るかことし。又はにふのこやにすむ人。苔の袖をそむるやから。下賤の心はせかたしけなく。上聞ををよふよすか。ひとへにこのことわさにあり。たとへは深谷のひゝきの高根にことふるかことし。雲霞千程の堺あつまもろこしをへたてたれとも。一首の中に千萬のおもひをあらはして。きかぬを聞。見さるをみる心ちせらるゝ事。和歌にさきたつはなし。たたしあつさ弓世のをす所。人のゆるすへきにはあらされとも。みちにふけるかゆへに。かしこき建久(後鳥羽)のむかしのすへらきよりはしめ奉りて。正元(後深草)のいまのみこにいたらせおはしますまて。おほむ歌をうかゝひたてまつるのみにあらす。博陸槐門より下。いやしきつかさまても。みかさ山その名たかく。天のしたにその名ふりぬるを。三十六人にかきりて。をの〳〵十首を記することあり。是和歌の浦のもしほ草は。はしめて書あつむるにあらす。なからの橋のはし柱。ふるき跡とをきを聞わたりてなり。抑代々の御製におそれて。いれたてまつらさらは。ゆらのみなとのきよきなきさの玉をみかき。つくは山のしけき木の葉をひろふ心さし物らく。本意にたかひぬへきゆへに。ひそかにこれをのせたてまつれる成へし。さるはおほ船のまかちとりたてたる見所もなかるへし。もとより性つたなけれは。十にしてひとつもうる事かたき物なから。とまらぬ年のより竹は。心にそむる一ふしもかつはわすれぬれは。さこそはあやまりしけく侍らめなれとも。世のためにしてあつめす。人のためにしてえらはす。おりたつ田子のみつからか心はかりをやしなはむかためにせり。かるかゆへにふところの中にかくしもちて。あさ夕のもてあそひものにせんとてなり。いはかきしみつもらさすして。さは田のみしめ引しのふへければ。難波江のよしあしとも。誰かこれをほめそしらむ。于時正元ふたつのとしの中春五日ならし。

作者三十六人次第

後鳥羽院	土御門院
順徳院	太上天皇(後嵯峨)
六條宮雅成親王	鎌倉宮宗尊親王
入道二品親王道助	式子内親王
後京極攝政太政大臣良經公	光明峯寺入道攝政道家公
西園寺入道前太政大臣公經公	後久我前太政大臣通光公
富小路前太政大臣實氏公	鎌倉右大臣實朝公
九條前内大臣基家公	衣笠前内大臣家良公
慈鎭和尚	前大僧正行意
堀川大納言通具	權中納言定家
八條院高倉	俊成卿女
宮内卿	藻壁門院少將
權大納言爲家卿	參議雅經卿
正三位家隆卿	正三位知家卿
大藏卿有家朝臣	右大辨光俊朝臣
左京大夫信實朝臣	侍從隆祐朝臣
左近衞權少將具親朝臣	前但馬守源家長朝臣
鴨長明	藤原秀能

後鳥羽院御製

ほの〳〵と春こそ空にきにけらし天のかく山霞たなひく

さくら咲遠山鳥のしたりおのなか〳〵し日もあかぬ色哉
みよしのゝ高根の櫻咲にけりあらしもしろき春のあけほの
吉野山さくらにかゝるうす霞花も朧の色はみえけり
秋の露や袂にいたくむすふらんなかき夜あかすやとる月影
露は袖に物思ふ頃はさそなをくかならす秋の習ひならねと
秋ふけぬなけや霜夜の蛬やゝかけさむしよもきふの月
頼めすは人をまつちの山なりとねなまし物をいさよひの月
我戀は槇のしたはにもる時雨ぬるとも袖の色に出めや
袖の露もおらぬ色にそ消かへる移れはかはる歎きせしまに

土御門院御製

雪の中に春はきぬともつけなくにまつしる物は鶯のこゑ
埋木の春の色とや殘るらん朝日かくれの谷のしら雪
伊勢の海やあまのはらなる朝霞空にしほやく煙とそみる
みわたせは松もまはらに成にけり遠山櫻咲にけらしも
秋もなをあまの河原に立浪のよるそみしかき星合のそら
秋の夜もやゝ更にけり山鳥のおろのはつ尾にかゝる月かけ
をしなへて時雨るまては難面くて霰におつるかしは木の杜
あはてちる涙のすゑやまさる覽いもせの山の中のたきつせ
春の花秋の紅葉のなさけたにうき世にとまる色そすくなき
しら雲をそらなるものと思ひしはまた山こえぬみやこ成鳬

順德院御製

かせ吹は峯のときは木露おちて空よりきゆる春のあは雪
花鳥のほかにも春はありかほに霞てかゝる山のはの月
白雲や花よりうへにかゝるらん櫻そ高きみよしのゝ山
難波江のしほひのかたや霞むらん蘆まにとをきあまの釣舟
あすか川淵瀬もえやはわきもこかうちたれ髪の五月雨の比

曉とおもはてしもやほとゝきすまた半天の月に啼らん
明石かた蜑のとまやの煙にもしはしそ曇る秋のよの月
風さゆる夜半の衣の關守はねられぬまゝに月やみるらん
水くきの岡のやかたのきり〳〵す霜のふり葉や夜さむ成覽
一すちにうきになしてもたのまれすかはるに易き人の心は

太上天皇御製

しきしまややまとしまねの朝霞もろこしかけて春や立らん
いさけふは小松か原に子日して千代の例に我世ひかれん
色もかもかさねて匂へ梅の花こゝのへになる宿のしるしに
みても猶おくそゆかしき蘆垣の吉野の山の花のさかりは
紫の藤江のきしの松か枝によせてかへらぬ波そかゝれる
里なれて今そ鳴なるほとゝきすさつきを人は待へかりけり
月もなをなからにくちしはし柱有とやこゝにすみ渡らん
白雪のいやかたまれる庭の面をはらひかねたる伴の宮つこ
忍ふともうはの空にやしられまし戀に烟の立世なりせは
こぬ人によそへて待し夕へより月てふものは恨みそめてき

六條宮雅成親王

はなもまたなかき別をおしむらん後の春とも人をたのまて
いささらは涙くらへん時鳥われもうき世になかぬ日そなき
空晴て月すみのほる遠山の麓よこきる夜半の白雲
いかにして身をかへてみん秋の月涙のはるゝ此世ならねは
秋の田のおしね色つく今よりやねられぬ庵の夜さむ成らん
むは玉の夜風をさむみ古里にひとり有人の衣うつなり
世中は淵瀬もあるをよし野川われのみ深きみくす成けり
ねても夢ねぬにも夢の心地して現つなる世をみるそ悲しき
終にゆく道よりも猶かなしきは命の中のわかれ成けり

世をうしと思はさりけむ昔こそ此比よりもはかなかりけれ

鎌倉宮

春雨はふりにけらしな遠津江のあと川柳ふかみとりなり
ときはなる松にもおなし春風のいかにふけはか花の散らん
都をは住うしとてや人やりの道ならなくに鴈の行らん
たえ／＼に影をはみせてあすか井のみま草かくれ飛螢かな
なみたには秋の夕へもつけなくに哀しらする袖のうへかな
秋の夜の月そなかるゝさくら川花はむかしのあとのしら波
しなかとりゐなのしは山雲きえて湊にきよき秋のよの月
丹生の山あらしのなかす紅葉はにしくれぬ槇も色つきに鳬
古郷の河原の千鳥うらふれてさほ風さむし有明の月
時雨にはつれなき松もあるものを涙に絶ぬわかたもとかな

入道二品親王道助

春日野にまたもえやらぬ若草の烟みしかき荻の燒はら
しら露の玉江のあしのよひ／＼に秋風ちかくゆく螢かな
おきの葉に風の音せぬ秋もあらは涙の外に月はみてまし
しら露の色に出ゆく秋萩や物思ひ草の袂なるらむ
契をく山ちのおくのあかつきをなをうき物と鹿そなくなる
我やとの菊の朝露色もおしこほさて匂へにはの秋風
とゝめはや流れて早き年波のよとまぬ水はしからみもなし
雲ふかき岩のかけ道日數經て都の山も遠さかりつゝ
君かすむあたりの草に宿してもみせはや袖にあまる白露
初瀬山あらしの道の遠けれはいたりいたらぬ鐘の音かな

式子内親王

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ／＼かゝる雪の玉水
なかめつる今日は昔に成ぬ共軒端の梅よ我をわするな
ふくるまて眺むれはこそ悲しけれ思ひもいれし秋のよの月
なかめ侘ぬ秋よりほかのやとも哉野にも山にも月やすむ覽
桐の葉もふみわけかたく成にけり必らす人を待となけれと
玉の緒よ絶なはたえねなからへは忍ふる事のよはりもそする
わすれてはうちなけかるゝ夕かな我のみしりて過る月日を
夢にてもみゆらむ物を歎きつゝうちぬる宵の袖のけしきは
いきてよもあすまて人は辛からし此夕暮をとはゝとへかし
逢事をけふ松かえの手向草幾よしほるゝ袖とかはしる

後京極攝政太政大臣

みよし野は山も霞て白雪のふりにし里に春はきにけり
空はなを霞もやらす風さえて雪けに曇る春の夜の月
難波江にさくやむかしの梅の花いまも春なる（なイ）うら風そ吹
むかし誰かゝる櫻の種をうへてよし野をはるの山となし劔
雲はみなはらひはてたる秋風を松に殘して月をみるかな
さらぬたに更るはおしき秋の夜の月より西にかゝる白雲
人すまぬ不破の關屋の板ひさしあれにし後はたゝ秋の風
いはさりき今こむまての空の雲月日へたてゝ物思へとは
いつもきくものとや人の思ふらんこぬ夕暮の松風のこゑ
天の戸をおし明かたの雲まより神代の月のかけそ殘れる

光明峯寺入道攝政

うちきらし猶風さむし石上ふるの山邊のはるのあは雪
霞しく荻の（のイ）燒原ふみ分てたか爲春のわかなつむらん
いはと明て面白しといふためしにや天のかく山月は出らむ
あまの川水かけ草の露のまにたま／＼きても明ぬこのよは
伊勢嶋や和歌の松はら見わたせは夕しほみちて秋風そふく
河波をいかゝはらはむ舟人のとわたるかちの道はみえねと

つくはねのそかひに立るさを鹿のつま吹風に聲もおします
我戀のもえて空にもまかひなは富士の烟といつれたかけん
老の後また思ふことはなき物を人の心になを歎くかな
岩そゝくたるひとや見む瀧川の瀬のほる月の影こほるなり

西園寺入道前太政大臣

たちそむる霞の衣うすけれと春きてみゆる四方の山のは
高瀨さす六田のよとの柳はらみとりもふかく霞む春かな
白雲の八重山さくら咲にけりところもさらぬ春のあらしに
ほとゝきすなをうとまれぬ心かななかなく里のよその夕暮
ほしあひの夕へ涼しき天の川紅葉のはしをわたる秋風
風寒きよはのねさめのとことはになれてもさひし衣うつ聲
あすよりの名殘をたれにかたらましあひも思はぬ秋の別ち
つま木とる山路もいまやたえぬらん里たに深き今朝の白雪
和田の原波もひとつにみくまのゝ濱の南は山のはもなし
いかはかり曇りなき代を照す覽名にあらはるゝ月よみの杜

後久我太政大臣

みしま江や霜もまたひぬ蘆のはにつのくむ程の春風そ吹
まかふとていとひし峯の白雲は散てそ花のかたみ成ける
あけぬとて野邊より山に入る鹿の跡吹をくる萩のしたかせ
むさし野やゆけとも秋のはてそなきいかなる風の末に吹覽
立田山夜半にあらしの松ふけは雲にはうとき峯の月影
入日さすふもとの尾花うちなひきたか秋風に鶉なくらん
かきりあれは忍ふの山の麓にもおちはからへの露そ色つく
浦人の日も夕暮になるみかたかへる袖より千鳥なくなり
なかめわひぬそれとはなしに物そ思ふ雲のはたての夕暮の空
幾めくり空行月も隔てきぬ契し中はよそのうきくも

富小路前太政大臣

わけゆけはそれともみえすあさほらけ遠きそ春の霞也ける
さもこそは春はさくらの有ならめうつりやすくも行月日哉
よし野川なかるゝ水に散花のかへらぬ春をなにおしむ覽
むら雨に秋の露かる玉篠のみしかき夜半はあかつきもなし
むしの音もうらかれ增る淺茅生にかけさへよはる有明の月
しかの浦やこほりのひまな行船に波も道ある世とやしる覽
あらはれて年ふる御代のしるしには野にも山にも積る白雪
忘れめやつかひのおさを先たてゝわたる御階に匂ふたち花（ふら新勅）
心こそうき世の外に出ぬともみやこを旅といつならひけん
あきつはのすかたの國に跡たるゝ神のめくみや我君のため

鎌倉右大臣

みふゆつき春しきぬれは青柳のかつらき山に霞たなひく
玉藻かる井堤のしからみ春かけて咲や川瀨の山ふきのはな
夕されは衣手さむしたかまとの尾上の宮の秋のはつ風
和田の原八重のしほちに飛鴈のつはさのなみに秋風そ吹
鴈なきてさむき朝けの露霜にやのゝ神山いろつきにけり
風さむみ夜のふけゆけは妹か嶋かたみの浦に千鳥鳴なり
ものゝふの八十宇治川をゆく水のなかれてはやき年の暮哉
世中はつねにもかもな渚こくあまの小舟のつなて悲しも
しらま弓いそへの山の松の色のときはにものを思ふころ哉
箱根ちを我こえくれは伊豆の海の沖の小嶋に波のよるみゆ

九條前内大臣基家公

おしますはあたなる事もつらからしなにしか花を思ひ初劍
啼ぬへきゆふへの空を郭公またれんとてやつれなかる覽
霞しく袖のみなとの浦風にはるさへ波のうつころもかな

雁かねも今やこゆ覽やましろのいはたの小野に月傾ふきぬ
愚かなる心のまゝにあくかれてよしや浮世の月をたにみむ
大伴のみつの濱邊を見わたせは有明の月にたつ鳴わたる
たへ（しりイ）かたき命のほともかへりみすいつ迄とまつ夕なるらむ
みかの原なかるゝ川のいつみきと覺えぬせにもぬるゝ袖哉
山のはのあり共きかぬわたつ海の浪のあなたにかゝる白雲
神代より明るならひのいまさらに天の戸つらき夜半の月影

衣笠前内大臣

櫻はなおちても水のあはれなとあたなる色に匂ひそめけん
つれなさのつらき別はこりもせてなとしたはるゝ春の鴈金
わかれての後しのへとやゆく春の日數に花の咲あまるらむ
宮城野の木のした露は雨なれと（から）空行月は曇らさりけり
むら時雨いくしほ染てわたつ海のなきなの森の紅葉しぬ覽
伊勢の浦や蜑のしわさのもしほ草けさかきたえて雪は降つゝ
山のはゝ天のかはらの嶋なれや月のみ舟もこきかくれつゝ
我ために心かはらぬ月たにもありしにゝたる影をやはみる
いかにせん涙の袖に海はあれとおなし渚による船もなし
こぬ人のつらき契にまちかへて夜かれぬものは山のはの月

慈鎭和尚

いつまてか涙曇らて月は見し秋まちえても秋そ戀しき
野邊の露は色もなくてやこほれつる袖よりすくる荻の上風
ふけゆかは煙もあらししほかまの恨みなはてそ秋の夜の月
霜さゆる山田のくろのむらすゝきかる人なしに殘るころ哉
思ふ事なとゝふ人のなかるらんあふけは空に月そさやけき
たゝたのめたとへは人の僞をかさねてこそは又もうらみめ
みな人のしりかほにしてしらぬ哉必しぬるならひ有とは
おほけなく浮世の民におほふかな我たつそまにすみ染の袖
ねかはくはしはし闇ちにやすらひて揭けやせまし法の燈火
我たのむ七の社のゆふたすきかけても六の道にかへすな

前大僧正行意

伊勢の海はるかにかすむ浪まより天の原なるあまのつり船
春くれは袖のこほりもとけに鳧もりくる月の宿るはかりに
ほしあへぬころも經にけり川社しのになみこす五月雨の比
すゝか川ふりさけみれは神路山さか木葉わけて出る月かけ
春日山やまたかゝらし秋霧のうへにそ鹿の聲はきこゆる
山しろのときはの杜の夕しくれそめぬ緑に秋そ暮ぬる
くるゝよりおなし笆のきり〳〵すちかつく聲に夜や更ぬ覽
七たひの吉野の河のみをつくし君か八千代のしるし共なれ
さすらふる心に身をもまかせすは清見か關の月をみましや
いたつらに四十の坂は越にけり都もしらぬ歎きせしまに

堀川大納言道具卿

梅のはな誰袖ふれし匂ひそと春やむかしの月にとはゝや
あはれ又いかに忍はん袖の露野はらの風に秋は來にけり
かけやとす露のよすかに秋暮て月そすみけるをのゝ篠はら
野邊にをく露のなこりも忍はれぬあたなる秋の忘れかたみに
霜こほる袖にも影はやとりけり露よりなれし有明の月
霜むすふ袖のかたしき打とけてねぬよの月の影そさやけき
木の葉ちる時雨やまかふ我袖にもろき涙の色とみるまて
せき返しなをもる袖の涙かなしのふもよその心ならぬに
今こむとちきりしことは夢なからみしよに似たる有明の月
冬の夜のねさめならひし槇のやのしくれの上に霰ふるなり

中納言定家

春の夜の夢のうきはしと絶して峯にわかるゝ横雲のそら
花の色にひと春まけよ歸る鴈ことし越路のそらたのめして
夕暮はいつれの雲の名殘とてはな立花に風の吹らむ
なきぬなり夕つけ鳥のしたりおのをのれにもにぬ夜半の短さ
見わたせは花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕くれ
忘れなん待となつけそ中々にいなはの山のみねのあきかせ
明はまた秋のなかはも過ぬへしかたふく月の惜きのみかは
こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくや藻鹽の身もこかれつゝ
あちきなくつらき嵐の聲もうしなと夕くれに待ならひけむ
歸るさのものとや人のなかむらん待夜なからの有明の月

八條院高倉

一聲はおもひもあへす郭公たそかれ時の雲のまよひに
過はてぬいつらなか月名のみしてみしかかりける秋の程哉
いかゝ吹身にしむ色のかはるかなたのむる暮の松風のこゑ
曇れかしなかむるからに悲しきは月におほゆる人のおも影
あふ事をまたはいつともなきものを哀もしらぬ鳥のこゑ哉
忘れしのたゝひと事をかたみにて行もとまるもぬるゝ袖哉
浮世をは出る日毎に厭へ共いつかは月の入〔る〕さを(かた)をも見む
我庵はをくらの山の近けれはうき世を鹿となかぬ日そなき
なへて世をかりの宿りと思はすはすみよかるへき草の庵哉
とに角に身のうき事の繁ければひとかたにやは袖もぬれ(ける)

俊成卿女

梅の花あかぬ色香もむかしにておなしかたみの春のよの
恨みすや浮世を花の厭ひつゝ誘ふ風あらはと思ひけるを
面影のかすめる月そやとりける春やむかしの袖のなみた

いにしへの秋のそらまて角田川月にこととふ袖のつゆかな
おしむとも涙に月もこゝろからなれぬる袖に秋をうらみて
色かはる露をは袖に置まよひうらかれてゆく野邊の秋風(かな)
ふりにけり時雨は袖に秋かけていひし計をまつとせしまに
霜枯はそこともしらす(見えぬ)草のはらたれにとはまし秋の名殘を
あたにちる露の枕にふしわひてうつら鳴なり床のやま風
夢かとよみしおもかけも契しも忘れすなから現ならねは

宮内卿

かきくらしなをふる里の雪の中に跡こそ見えね春けきに鳬
花さそふ比良の山風吹にけりこきゆく船のあと見ゆるまて
片枝さすおふの浦なし初秋になりもならすも風そ身にしむ
心あるをしまの海士の袂かな月やとれとはぬれぬものから
月をなをまつらんものか村雨の晴行雲のすゑの里人
まとろまてなかめよとてのすさひ哉麻のさ衣月にうつこゑ
霜をまつまかきの菊の宵のまにをきまかふ色は山のはの月
立田川あらしや峯によはるらむわたらぬ水もにしきたえ鳬
からにしき秋のかたみやたつた山散あへぬ枝に嵐吹なり
聞やいかにうはの空なる風たにも松に音する習ひありとは

藻壁門院少將

たえ〳〵にたなひく雲のあらはれてまかひもはてぬ山櫻哉
なにと又吹はならひの春風に人やりならぬはなのちるらむ
こゝろとはみ山も出し時鳥またれてのみそ初音なくなる
啼虫のこゝろの色には出ねともうきは身にしむ秋のゆふ暮
をのか音につらき別のありとたに思ひもしらて鳥の鳴(やイ)らむ
僞とおもひとられぬ夕へ社はかなきものゝかなしかりけれ
たえすひく網のうけ繩うきてのみよるへ苦しき身の契り哉

かへりみるほとは雲ゐのおほえ山いく野の道や末に成らん
逢事のたえまかちなるつらさかな思ひし程の契たになし
すむ海士の哀をしるや煙たつをのか住家の夕くれのそら

權大納言爲家卿

里人やわかなつむらん朝日さすみかさの山は春めきにけり
あたになと咲はしめけん古の春さへつらき山さくらかな
わひ人はさつきの雨のなにならしさもはれまなくふる涙哉
音たてゝ今はたふきぬ我やとのおきのうは葉の秋のはつ風
逢坂の鳥のそら音の關の戸もあけぬとみえてすめる月かけ
冬來ては時雨る雲の絶間たに四方の木の葉のふらぬ日そなき
うらむるも戀る心のほかならておなし涙のせくかたそなき
あしひきの山の山鳥おのへなるはつ尾のたれお長くこふらし
みしめひくみわの杉村ふりにけりこれや神代のしるし成覽
たらちねのなか覽跡の悲しさをおもひしよりも猶そ戀しき

參議雅經卿

尋ねきて花にくらせる木のまより待としもなき山のはの月
ほとゝきす鳴やさ月の玉くしけ二聲きゝてあくる夜もかな
移り行雲にあらしの聲すなりちるかまさきのかつらきの山
秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらに木枯の風
から衣すそ野もふかしはし鷹のとかへる山の峯のしら雪
いかさまに秋の夕へを慰まん世をそむけ共もとの身にして
神無月しくるゝ比といふ事はまなく木の葉のふれは成けり
時雨にはぬれぬ木の葉もなかり鳬山は三笠の名のみ成らし
年くるゝ鏡のかけもしら雪の積れは人の身さへふりつゝ
昔思ふたかの山のふかき夜にあかつきとをくすめる月影
あふ坂のゆふつけ鳥も我ことや越行人のあとに鳴らむ
これも又なかき別に（とイ）成やせんくれを待へきいのちならねは

大藏卿有家朝臣

朝日かけにほへる山の櫻花つれなくきえぬ雪かとそみる
久かたの天津乙女の（か新古）なつころも雲井にさらす布ひきの瀧
さらてたに恨むとおもふわきも子か衣のすそに秋風そ吹
大淀の月にうらみてかへる波まつはつらくも嵐吹よに
花をのみおしみなれたるみよし野の梢におつる有明の月
もの思はてたゝ大かたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を
行年ををしまのあまのぬれ衣かさねて袖になみやかくらん
いはかねの床にあらしをかたしきて獨やねなんさよの中山
我なからおもふかものをとはかりに袖にしくるゝ庭の松風

右大辨光俊朝臣

春の雨のあまねき御代をたのむ哉霜に枯行草はもらすな
梅の花さけるをみれはわかやとにあさ風かほり鶯そなく
きえねたゝ忍ふの山の峯の雲かゝる心のあともなきまて
恨みしな難波のみつに立けふり心からやくあまのもしほ火
曉の鴫のはねかきかくはかり涙かすそふねさめやはせし
なれ〳〵てみしは名殘の春そともなとしら川の花のした陰
秋の夜の月にいくたひねさめしてもの思ふ事の身に積る覽

正三位家隆卿

谷川のうち出るなみも聲たてつ鶯さそへ春のやまかせ
いかにせんこぬ夜あまたの郭公またしとおもへは村雨の空
思ひ出に誰かねことのすゑならんきのふの雲のあとの山風
ことしより花咲そむる立花のいかて昔のかに匂ふらむ
風そよくならのを川の夕くれは御秡そ夏のしるし成けり
下もみちかつ散山の夕しくれぬれてや鹿のひとり鳴覽

なかめつゝおもふもさひし久かたの月のみやこの明方の空
又や見むまたやみさらん白露の玉をきしける秋はきの花
和歌の浦や沖つしほあひに浮ひ出る哀我身のよるへしらせよ
須磨の海人のまとをの衣夜や寒き浦風なから月もたまらす

正三位知家卿

ちらは又思ひや出ん身のうさを見るにわするゝ花櫻かな
此春のわかれやかきりとまる身のおいて久しき命ならねは
なかむれはみし世の秋も忘られす月に昔のかけやそふらん
逢坂は人のわかるゝ道なれはゆふつけ鳥のなかぬ夜もなし
かゝる身になにかばと社思ひしにしたかふものは涙なり鳬
思ひやれなへて世にある人たにも涙おつといふあきの初風
いかにせんしなはともにと思ふ身のおなし限の命ならすは
露ふかき小篠ましりの（ちか續後）した蕨さも折ふしにぬるゝ袖かな
みてもうし春の別のつらけれはやよひの月の有明の空
見えぬ覽心のうちのかなしさもくちぬる袖のこけの亂れに
眺むるにこけのたもとのしほるゝは月やうき世の涙なる覽
（イ老）なからへて老すはけふの花さかり
昔にはあはれ心のかはるかな老て今見る秋のよの月

右京大夫信實朝臣

よる波のすゝしくも有かしき妙の袖しの浦の秋のはつ風
ものをのみえも思はするさきの世のむくひや秋の夕へ成覽
秋風につままつ山の夜をさむみさこそ尾上のしかは鳴らめ
曇れとや老の涙にちきるらん（りけ續後）むかしよりみる秋のよの月
晴くもり時雨る空はしらねともぬれて千入の秋のもみち葉
紅葉は（を）風に任する手むけ山ぬさも取あへす秋はいぬめり（くれけイ）

けさよりの時雨は雪に成にけりさてたに松の色かはれとて
我中のよしなき袖にやとりきてうらみにましる月の影かな
衣々のたもとにわけし月影は誰なみたにかやとりはつらん
深き夜にまつひとしきり聲立てゆふつけ鳥は又寢してけり

左近衛權少將具親朝臣

難波かたかすまぬなみも霞けりうつるも曇るおほろ月夜に
あしの葉もまたうら若き津の國のこやの隔は霞なり鳬
時しもあれ田のもの鴈の別さへ花ちるころのみよし野の里
しきたへの枕のうへにすきぬなり露をたつぬる秋の初風
月の秋は名のみそ夜のもしほ草かくかきたえてみる夢もなし
晴曇る影をみやこにさきたてゝ時雨るとつくる山のはの月
眺めよとおもはてしもや歸るらん月まつ波の海人のつり船
さよ千鳥湊吹こすしほ風にうらよりをちの友したふなり
今よりは木の葉かくれもなきものを時雨に殘るむら雲の月
なにとかは又もわくへき奥山に入なはとちよこけのした道

侍從隆祐朝臣

くれなゐのこそめの糸の村しくれ山の錦をおらぬ日そなき
世中になをあり明のうき身をやつれなき物と月はみるらん
いかにせん暮をまつへき命たになを頼まれぬ身を歎きつゝ
水上の氷をくゝるしかま川うみに出てやなみはたつらん
けふまては（はなを續古）都もちかしあふ坂の關のあなたにしる人もかな
此世にはよし言とはし隅田川すみえぬかたの鳥の名もうし
限りあれはかすまぬ浦の波まより心ときゆる海士のつり船
吹風に煙やとをくなひくらん里なき浦もしほやきけり
かるもかくゐな野のはらの草枕さてもねられぬ月を見る哉
ゆく月のみふねなかるゝ天川山より西やみなとなるらむ

前但馬守源家長朝臣

春雨に野澤の水はまさらねともえ出るくさそふかく成ゆく
梓弓いそへのうらの春の月あまのたく繩よるもひくなり
秋の月しのにやとかる影たけて小篠かはらに露ふけにけり
秋の月なかめ〳〵て老か世も山のはちかくかたふきにけり
もみち葉の散かひ曇る夕時雨いつれか道と秋の行らむ
けふは又しらぬ野はらに行暮ぬいつれの山か月はいつらむ
衣々のつらきためしに誰なれて袖の別をゆるしそめけん
いつくにもふりさけ今や三笠山もろこしかけて出る月かけ
もしほ草かくともつきし君か代の數によみをく和歌の浦浪
いこま山よそになるおの沖に出てめにもかゝらぬ峯の白雲

鴨長明

なかむれは千々にもの思ふ月に又我身ひとつの峯の松かせ
なかめても哀と思へ大かたの空たにかなし秋の夕くれ
松しまやしほくむあまの秋の袖月はもの思ふ習ひのみかは
はつせ山かねのひゝきにおとろけはすみける月の明方(ありあけイ)の空
夜もすからひとり深山の眞木の葉に曇るもすめる有明の月
たのめをく人もなからの山にたに小夜ふけぬれは松風の聲
袖にしも月やとれとは契をかす涙はしるやうつの山こえ
みれはまたいとゝ涙のもろかつらいかに契てかけはなれ劒
いかにせんつゐの烟の末ならて立のほるへき道もなき身を
住侘ぬいさゝは越んしての山さてたに親のあとをふむやと

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江の芦のわか葉をこゆるしら波
あし曳の山ちの苺の露のうへにねさめよふかき月を見る哉
草枕ゆふへの空を人とはゝなきてもつけよ初かりのこゑ
山里の風すさましき夕暮に木の葉みたれて物そかなしき
月すめは四方のうき雲空にきえてみ山かくれを行あらし哉
した紅葉うつろひゆけは玉ほこの道の山風さむく吹らし
もしほやく蜑の磯屋の夕けふり立名もくるし思ひきえなて
袖の上に誰ゆへ月は宿るそとよそになしても人のとへかし
今こむとたのめし(ちぎりイ)ことを忘れすはこの夕暮の月やまつらん
露をたにいまはかたみの藤ころもあたにも袖を吹風かな

いそのかみ。ふるき歌のおもしろきに。ふけるのみならす。秋の田の。いなみかたきめいにより。もしほくさ。かきつくるあとの。ひさしくとゝまらむ事。はつかしけれとも。難波江の。よしあしをいはすみれは。やかて。その人にむかふ心地するものなれは。たとひ。かいらうのちきりふかくとも。さためなき世のならひ。おなしかきりの いのちなるへきたらねは。露の身のさきたちて。きえなん後にも。をのつからわすれす。しのふなかたちとなり侍れとて。元亨はしめのやよひの中の三日。これをうつしとゝめむといふ事しかなり。

群書類從卷第百六十

和歌部十五千首一

爲家卿千首 貞應二年八月

詠千首和歌

春二百首

年の内に春やたつらん降積る雲まそかすむ逢坂のやま
春たつとけさは岩まの谷水もとくることほりをいつるはつ風
うちつけに花かとそおもふ春たつと聞つるからの山の白雪
さほ姫の霞のまそてふりはへて春たつ野へに雪やけぬらん
けふは又春たちぬらしみよしのゝ山のみゆきに跡はなく共
隙まに檜原もいまたこもり江の初瀬の山も春やたつらん
和田の原かはらぬ浪に立そひてやそしまかけて春やきぬ覽
わたつ海やかすまぬ空もなかりけり天の戸よりや春は立覽
けふよりも又みのしろ衣春たつとなをうちきらし雪は降つゝ
乙女子か袖ふる山の春霞けふやころもにたちかさぬらん
君か代の千歳のかけもあらはれて子日ののへに消るしら雪
我君のためしにひかんものなれや子日の松のちよのけしきは
手にみてる野へのちとせの小松原ひくへき春も限なきかな
子日していはふ野はらの姫小松ちとせをこめてたつ霞かな
春きぬと聲めつらしきうくひすのはつねののへに急く諸人
いかて先春くることをわきもせむやかて立そふ霞ならては
かつらきや高まの山はかすめとも梢の雪の色そつれなき
いつのまに春もきぬらんほの／＼と霞そめたる天のかこ山
降つみし松のしら雪いつのまに消ても春の霞たつらむ
鶯の聲もきこえぬ山さとにはつ春つくる朝かすみかな
花さかぬときはの山の朝霞さてたに松の色をしれとや
あしのはのつのくみわたる難波かた浪もみとりにたつ霞哉
みくまのゝ浦行舟の夕かすみよそにへたつる春はきにけり
春のののおきのやけ原かすむ日にありかもしるく雉子啼也
時しらぬふしのしら雪をのれさへかすめる色に春は消つゝ
今朝はまたそれかとはかり殘るかな霞にうすき淡路嶋山
武藏野やはつ若草のつまこめてやへ立かくす朝霞かな
わたつうみや色なき浪のかすむより浦の笘やも春や知らん
あつさ弓はるはきぬらしまきもくのあなしの檜原霞たな引
夕くれは幾重霞のへたつらんうつもれはつる松のむら立
浦近くよせくるまゝにあらはれて霞そこもる沖つしら波
消わたる雪の下露ふく風に猶みたれそふ朝かすみかな
すみわふる宿のけふりのしるしたに霞にたえて誰かとひこん
かすむ日のみほのうらへに漕船のいとゝ跡なき浪のうへ哉

かすみゆく末の松山跡たえてこゆともしらぬおきつしら波
春きぬと涙はかりやとけぬらん谷の雪まをいつるうくひす
をそしともみるへき花はなけれとも春やときはのもりの鶯
またさかぬ軒端の梅に尋來てほつえもよほす鶯のこゑ
ちる雪にぬふてふ笠のをそけれはぬれて木つたふ春の鶯
草も木もあらたまれとも鶯の聲こそもとの昔なりけれ
昨日こそおしみし年は呉竹のひと夜にきゐるうくひすの聲
たくへてもさそはむ花はにほはぬにまたれぬほとの鶯の聲
はつ聲は都に今や松かきのましはのかれ葉ならす鶯
鶯のまちこし野へに春のきて萩のふる枝そあさ緑なる
春ののにとむる若菜はもえやらて袖のみぬるゝ萩の燒原
冬枯のしのゝをすゝきうちなひき若菜つむ野に春風そふく
わか菜つむ我衣手もしろたへにとふひののへは淡雪そふる
鶯の聲する野へにちる雪もたまらぬほとの若なをそつむ
若菜はやつみてかへらん春ののに道ふみまとふ花も社ちれ
歸るさの道やたとらむ淡雪のちりかふ野へに若菜つみつゝ
磯なつむ天の羽衣春の來てまとをにかすむ浦のはま松
小山田のゐくつむ澤のうす氷とけてや袖のぬれまさるらん
雪消は若菜つみてん春日のとふひの野守こととはすとも
朝日山のとけき春のけしきよりやそうち人もわかな摘らし
春は又さらに來にけり白雪のふりかくしてし道はなけれと
しからきや外山のみゆき消かねて春より後も冬そ久しき
深山には霞はかりやへたつらんきえねとうすき松の白雪
鶯のふる巣は雲につけをきて道わけいつる谷のしら雪
しろたへの雪の玉水たま〳〵に道ふみそむる春の山さと
降つもる雪たにきえぬ山端に春はいつしか花そまたるゝ

殘るとはさらにもいはしふしの山猶時しらぬ峯のしら雪
春きぬと梢はかりは消はてゝひはらか下に殘るしらゆき
春くれと軒端のつらゝ猶さえて朝日かくれに殘るしら雪
深山には雪たにきえし鶯のふるすを何にわきて出らん
ふりくらし梢の雪もとけやらて猶春寒し窓の梅かえ
いつ迄か花の名たてといとひ劔雪よりもろき軒の梅(か)枝
なをさりに折つる軒の梅の花とかむはかりの袖のかそする
宴ならぬ賤かいほりの梅花たか袖ふれしなこりなるらん
消やらぬ雪にまかへるむめの花にほひをわきてきゐる鶯
咲花むかしの春そしのはるゝこゝろもしらぬ宿にさけとも
むめの花おられぬ水の影きよみ底もひとつに色そうつろふ
ちらは又よそにそみまし梅花うたて袂に香のとまりける
梅の花たちよるはかり春風のありかしらするゆふやみの空
くれなゐの夕日にまかふ梅の花色をも香をも風やわくらん
淺みとり柳か枝のしら露に玉ぬきとめぬ春風そふく
草も木もおなしみとりの色に出て先みえそむる青柳の糸
くちにけるむつたの淀の川柳かたえはかりに春そのこれる
うちたえて人もはらはぬ我庵はなひく柳にまかせてそみる
ゐる鷺のをのかみの毛もかたよりに岸の柳をはる風そふく
青柳のきしのふる根はあらはれてしつ枝そ水の行せ也ける
なかめやるをちの末のゝ柳かけ梢あらはに春かせそふく
しつえひつ岸の柳のをのれのみ糸もてかくる水のしからみ
道のへにくちてやみぬるふる柳もとのこゝろに春や忘れぬ
春のひの光も永し玉かつらかけてほすてふ青柳の糸
春の日のかけのゝわらひ徒にもゆるもしらぬ淡雪のふる
春とたに消あへぬ野への雪まよりわれ折かほにもゆる早蕨

山人の妻木に春はつけてけりゆきゝの谷のみちのさわらひ
春の野にもゆるわらひの折しもあれけふりと見ゆる朝霞哉
岩かねのしたの枯葉にましりやゝわかすみかとや萌る早蕨
かつらきやさかぬ櫻のおもかけに先立ならすみねのしら雲
うへをきていつしか春とまたれこし庭の櫻のはなをみる比
今は又ゆきゝをしのへたつた山まちしさくらの春のはつ花
みよしのゝ深山は雲にうつもれて尾上に匂ふよものはる風
あれなとあたにうつろふ花の色に櫻をわきて思そめ劔
おもかけはよそなる雲にたちなれしたかまの櫻花咲にけり
櫻花うへけん時はしら雲のなへてかゝれるみよしのゝやま
あさ日かけさすやとやまの櫻花うつろふ色そかねてみゆ覽
移りゆく花こそ春の山さとをとはれぬ身とは何からうらみん
龍田山花のにしきのぬきをうすみ亂れてもろき春風そ吹
古のしかの花その跡たえてみゆきは春やふりまさるらん
まちわふる外山の花は咲やらて心つくしにかゝるしら雲
足引の尾のへの櫻咲しよりまかひし松の色はもりにき
足引の山さくら戸のあけたてはにしきをりはへ鶯そなく
山櫻いさゝは風にまかせてんおしめはもろき花の色かと
櫻花こゝろつくしの色をたになかめもあへす春風そふく
さけはかつさそふ風をやうつせみの世よりもあたに散櫻哉
櫻花よしのゝおくにたつぬともちるてふ事のうきは隔てし
うつり行色はうらみし山櫻人のこゝろの花をみるにも
春かせやまなく時なくさそふらんかつらき山の花のしら雪
山櫻年にまれなる色なからなを又花にたれまたるらん
山里の花のしら雪道もなしけふこむ人の跡見えぬまて
色かはるたかねの櫻あすは又雪とや風にうつりはてなん

高砂やつれなき松の色もみす尾上の花の雪とふるまに
山さくらおちても水のあはれ又しはしとゝめぬ瀬々の岩浪
あたにちる花をはおしむ心かな風も吹あへぬ世とはしれ共
龍田山にしきをりはへ白妙のゆふつけ鳥そ花になくなる
くもるとて木のまもいかゝいとふへき櫻に更る春の夜の月
たえて世にさかすはなにを櫻花あたにうつろふ色も恨みん
春をへて人こぬ山のさくら花たれしら雲とわきたにもせし
みよしのゝおのへの櫻風吹は故郷かけて雪そちりかふ
あたにのみならはす花の夢の世を思ひもしらぬ身をや恨ぬ
ちりちらぬ里をかたらむ山櫻またみぬ人におりはやつさし
ことゝはむあすは雪とやさくら花つま木にそへて歸る山人
あちきなく櫻につくす心かな花のためともむまれこぬ身を
山端の花ふく風のすゑの松さくらの浪のこえぬまもなし
さりとても風はのこさし櫻花わかものかほになにおしむ覽
なへて世の花のさかりを吹風にかさゝぬ袖もなを匂ふなり
われとのみちらはつらきを山さくら花のためとや風も吹覽
よしの河岩ねにこゆるしら浪は雪けの水に雨やそふらん
春雨にまつ急かるゝこゝろかなあらそひかぬる花はみね共
青柳のみとりの糸のをゝよはみ玉ぬきちらす春雨そふる
片岡のあしたの原の春雨におなしみとりも色そそひ行
をしなへてかすめる空のうす曇降ともしらぬ春の雨かな
雪消るひらの高ねのあさ緑色そめそへてはるさめそ降
春日野やおなし草葉のみとりたにぬれて色こき春雨の空
廣澤や池のつゝみの柳かけみとりもふかくはるさめそふる
春雨の空吹はらふ風に又をのれもはるゝ花のしら雲
春雨のふるのゝ草の數々になへてみとりそあらたまりける

水たまる小田の若草ふみしたきかことかましき春駒の聲
をく露はつめたにひちぬ若草のつまやあらそふ澤の春駒
春くれはみつのみまきの若草にあれ行駒の聲そはなれぬ
はるは又こし路にしたふ明ほのをたれ初かりと待て聞らん
ならひつゝ霞のよそに行かりをかへすは花と如何らみむ
うつり行色やかなしき櫻花ちらぬわかれにかへる鴈かね
山さくら霞の袖をおほひ羽の鴈のはかせに花もこそちれ
歸るさのたかきぬ〳〵を涙とてをのかねにかる春の鴈かね
花の色にたのむの鴈もねにたてゝあかぬ別を月に鳴也
かへる鴈はねうちかはすしら雲の道ゆきふりはさくら成鳧
歸る鴈霞もきりにおもなれて啼行かたの道もまとはす
咲はなにをのかわかれをねにたてゝたかため歸る春の鴈金
春きても霞の衣かりそ啼かへる山路のかせや寒けき
ゆく末は霞も雲もひとつにて空に消ぬる春のかりかね
暮ゆけはたれをかわきて呼子鳥たつきもしらぬ山の遠方
とひとはぬおほつかなさやよふこ鳥更行までのねには立覽
花ゆへに尋るものを呼子鳥われまちかほに山になく也
苗代の山田のあせの水をあさみすみかゝほにもなく蛙かな
そこにこるなはしろ小田のたまり水猶すみえてみゆる月哉
春にあふ賤か山田の苗代に國さかへたる御代そ見えける
古の田の苗代水のひき〳〵はわきてもいはし此世ならすや
此程は小田のなはしろさま〳〵にもと行河の水やすくなき
庭草のしけみの下のつほすみれさすかに春の色に出つゝ
むさし野や草のゆかりの色なから人にしられす咲すみれ哉
菫つむいはたのをのゝをのれのみ草葉の露を袖にかけつゝ
あれにける宿の菫そあはれなるあたなる花に名を殘しつゝ

菫さくをのゝしはふの露しけみぬるゝま袖につみてかへ覽
とゝめあへす庭の櫻はちり果て殘るみとりに春風そ吹
山風も誰ゆへとてか忍ふらんふかすはもとの花もみましを
山櫻ちりにしまゝのふるさとを花より後は春とやは見る
八橋の汀にさけるかきつはた昔の色をこひわたるかな
春ふかき淺澤をのゝかきつはた霞や色をたちへたつらん
ちらはちれ暮行春の色もらし浪よせかくるたこの浦ふち
ふる里のかすかのをのゝ藤の花いつより人の折てかさゝん
春なから山ほとゝきすかね　又まつにやかゝる池の藤なみ
くれはつる春の色とはしりなから咲て久しきやとの藤浪
みやこまてかさしてゆかんたこの浦底さへ匂ふ藤のはつ花
咲そむる池の藤なみ立かへりしはしや春も思ひわふらん
いはし水かさす雲井の藤のはな萬代かけて神やまもらん
さくとみて歸らん春を藤のはなをかけとめよ枝はおる共
今更に松のみとりの色もなし　枝かす藤の花にさく比
はる雨にぬれて色こき藤花しゐてかたみになをやおらまし
まつ人はこしまの崎の春風にちらはちらなむ山ふきの花
いはぬ色はうらみかねてや咲つらんとまらぬ春の山吹の花
山ふきをなかるゝ花にかけませて春のいろなるよしの河哉
くちなしのあかたの井戸の花の色にをのれ獨となく蛙かな
かみなひの岸の欵冬ちりぬらしいはぬ色なる瀨々の河波
草ふかき庭の山吹ひとへたにかたみのこさぬ春風そふく
啼とめぬ梢の櫻ちりはてゝうくひすきゐる庭のやまふき
露なから手折てもみん春雨にしほるゝ庭の山ふきの花
浪かくる清瀧川のいはこえて花もたまらぬきしの山ふき
あれわたる庭の山吹をのれのみむかしも今の色に見えつゝ

あともなくちらはちらなん山櫻かへるや春の道もまとふと
山さくらちらても春の物ならしわかれは花の色にまかせむ
おしめともけふやかきりの春の日も猶くれかゝる藤の下影
鳥のねも花の色香もなれ〳〵てゆくかたみせぬ春そ悲しき
なきとめぬ春の別れのけふことに身を鶯の音をや立らん
たかために惜みし花の色なれはよそけに春のけふは行らむ
槙の戸にさすや夕日の光まてしはしとつらき春のくれかな
山風にちりかふ花の跡もなくさためぬ春の行衞しらすも
とにかくに心を人につくさせて花より後にくるゝ春かな
けふは又沖津しら浪漕分てひとりや春の立かへるらむ

夏百首

ぬきかふる蟬の羽ころも薄けれとふかくも春をしのふ頃哉
暮はてし春よりつらきわかれかな花に染こし袖の匂ひは
かたみとてそめし櫻の色をたにけふぬきかふる夏衣かな
月影はかき根はかりや出ぬらん初卯花のゆふやみの空
山里の庭のうのはな跡たえて衣手ぬれぬ雪そ降ける
消かての雪かとみれは山賤のしつか垣ねにさける卯花
かけてほす誰しろたへの夏衣おりも忘す咲けるうの花
春の色をへたて果てや卯花のかきねもたはにふれる白雪
猶も又あならうのはなの色に出て別れし春をこひわたる哉
けふまつるかもの卯月の葵草八千代をかけて君やてらさん
一すちに何からうらみむ郭公まつ人からにもらす初音を
五月まちまたしきほとの郭公たゝ一聲の忍ひねもかな
子規また出やらぬ峯におふるまつとはしるやおしむ初聲
有明の月に啼也ほとゝきすいつれか先に山はいてつる
啼やせむまたてやねなん槙の戸をいさよひあかす郭公かな
有明の月たにいつる山のはにつれなさまさるほとゝきす哉
いまは又なきやふりぬる郭公まちしさ月の夕くれの空
たちかふる蟬の羽衣をりはへて誰かまさると啼ほとゝきす
郭公それかあらぬかふるさともあれにし後の夕くれの聲
となみ山とひこえてなく時鳥都にたれか聞なやむらん
喚鳥をのかさかりのさつきゝてすかのあら野の雨になく也
うちしほれ鳴や雲まの郭公行かたしらぬ五月雨のそら
ゆふつく日さすや岡邊の時鳥松もや夏をわきてしるらん
聞つとていかゝたのまむほとゝきす夢うつゝ共わかぬ一聲
夏ふかきいはせの杜の子規下草かけてとふ人もなし
時鳥涙や露にかる草のつかのまもなくねにはたてつゝ
古き根の軒のしのふのひまたえてふくともみえぬ菖蒲草哉
おく山の沼のいは垣けふとても人にしられぬあやめ草かな
はかなしなあやめの草の一夜たにみしかき比にちきる枕は
郭公なくやさ月のみたやもりいそくさなへもおいやしぬ覧
小山田にひくしめ繩のなかき日にあかすや賤の早苗とる比
早苗とる山田の水やまさるらん空にまかする五月雨の頃
早苗とる山田のたこのあさ衣いとゝさつきの雨にぬれつゝ
とることにすむやさなへの淺綠おりたつ小田の水の濁れる
足引の山田にぬるゝ賤の女か笠かたよりにとるさなへかな
袖ひちてうふるさなへの小山田にいつしか秋の風そ待るゝ
五月雨の雲の八重たつ岩根ふみかさなる山はとふ人もなし
かれはつる軒のあやめのけしき迄しめり果たる五月雨の空
しけりこしよもきか末はみかくれて浪こす庭の五月雨の空
須磨の蜑の苅ほす磯の玉もたにさらにしほるゝ五月雨の空

限あれは雪もけぬらしふしの山はれせぬ雲のさみたれの空
五月雨は雲まもみえす山のへのいそしのみゐも水まさりつゝ
さゝかにの雲まれなる五月雨に玉ぬきかくる宿や絶なん
あしのやのうなゐをとめの濡衣ころも久しきさみたれの空
にはたつみ數そふやとの五月雨にをのれもうきて蛙啼也
五月雨のはれせぬまゝにみよしのゝ山下水も音まさるなり
さみたれのこのした露も數々ににこりておつる山の谷かは
津の國のあしのやへふき五月雨はひまこそなけれ軒の玉水
五月雨にぬれて鳴也郭公かみなひ山の雲のをちかた
むらさめのしつくも猶や匂ふ覽玉ぬくやとの軒のたち花
時鳥猶たちかへりたち花のはなちる里は聲もおします
遠さかるむかしやしのふ郭公花たちはなのかけになく也
ふるさとはたか袖ふれしかたみとてむかししらする軒の橘
立とまりしはしやとゝむ橘のかけふむ道は花もちりけり
古郷はすみけん人の袖のかも花たちはなに殘るおもかけ
大井川幾せこゆらん鵜飼舟ほたるはかりのかゝり火のかけ
暮ゆけはかくれぬものを草の原ましる螢のおもひありとは
暮るよはうきて螢の思ひ川うたかた誰にきえはかぬらむ
難波江やあまのたく火にまかへてもみたれてしるく行螢哉
貴布禰河岩こす浪のよる／＼は玉ちるはかりとふ螢かな
夏深き河瀬にくたるうかひ舟くるゝほたるも猶こかるなり
飛まかふ汀の螢みたれつゝあしまの風に秋やちかつく
とふ螢かりにつけこせ夕まくれ秋かせちかし芦のやの里
山里の賤かさゝやにかひたてゝすみけるしるき夕けふり哉
あた人の契りやしたにうらむ覽くるれはむせふ宿の蚊遣火
かやり火の烟をさへに立そへて木のはかくれの月そ曇れる
足引の山のわさ田の夕まくれふすふるかひのけふりみゆ也
蚊やりひの烟はかりやしるからんはやまか峰の柴のかり庵
人とはぬ宿のかやり火しはくへて夏もみやまの庵そ淋しき
ともしするさやまかしたに亂れつゝ光そへても飛ほたる哉
池水ににこりにしまぬ色みえてしけるはちすにみかく白玉
夏の池のはちすのたち葉風過て玉こす浪の色そ涼しき
池水のしたにや魚のすたくらんはちすの上の露そこほるゝ
短かよのふけ行山の松の葉にいかにせよとか月もつれなき
此ころは色なき草葉浪こえて月にみかける野路の玉川
月かけはふすかとすれは明ぬ也雲のいつこにひとりすむ覽
短夜は月なまたれそ山のはのいさよふ程にあけもこそすれ
夏刈のあしのふる根のみしかよに待れて出る月もうらめし
大あらきの杜の下草いたつらにあまねき影は月そもりこぬ
五月雨の雲のほかゆく月かけもさすかにしるき夏のよは哉
ゆふたちの晴ゆく雲の風はやみあらぬかたにも急く月かけ
せきかけし谷の下水あたりまて涼しさかよふひむろ山かな
かけしけみ世をへてこほる氷室山夏なき年やをのれ知らん
手にむすふいはねの水の底きよみ下より秋やかよひそむ覽
すみなれてかへるさしらぬ板井哉夏の外なる日を過しつゝ
短か夜の入ぬる月の名殘にもならすあふきそかたみ成ける
夏山の梢もしけく鳴せみの涙やしたに秋をそむらん
なく聲は梢にたえぬ蟬の羽のうすき衣に秋そまたるゝ
我ものと露やおきぬるゆふ日かけくるゝ草葉の常夏の花
あはれともたれに見せまし山里の日もゆふかけの撫子の花
夏草はなへてみとりのなてしこにひとり色つく野への白露
御祓川ゆく瀬もはやく夏くれて岩こす浪のよるそ涼しき

夏はつるみそきをそする河風によるへすゝしき浪や立らむ
けふは又なこしの原へ夏はてゝ河瀬のかせに秋やたつらむ
御祓するそて吹かへす河風にちかつく秋のほとをしるかな
あすよりはほに出ん秋の荻のはにかつ〳〵むすふ庭の白露
色みえぬ夏のゝ草にかくろへて秋まちかぬるむしの聲かな
夏はつるあふきのさきにをきそめて草葉ならはす秋の白露
夏と秋とゆきゝのをかの小篠原あけん一よの風をまつかな
秋やくる夏やすきぬる小夜更てかたへ涼しき風のをとかな

秋二百首

あたしのゝ草葉をしなみ秋風のたつやをそきとおつる白露
かたしきの衣手すゝしこのねぬる夜のまにかはる秋の初風
今朝かはる風より秋や立ぬ覽めにさやかなる色はみえねと
夕まくれ秋くるかたの山のはに影めつらしくいつる三日月
吹かへすうらめつらしき秋風にまくすか原の露もたまらす
木のはちる秋の初めをけふとてや身にしみそむる峯の松風
跡もなく八重しけりゆくむくらふの今はし宿も秋はきに鳬
ならしこしたつたの河の柳はら秋やきぬらん風そみにしむ
風の音も秋たちぬとやたかまとの野もせの草も色にいつ覽
初秋のたつたの山の夕つく日しくれぬさきも色をしれとや
ちるやいかにうらめつらしくをく露も玉まく葛の秋の初風
銀河やすのかはらに舟出してたなはたつめのけふやあふ覽
織女のゆきかふくれのあまの川かはへすゝしき風わたる也
まちえても夜や更ぬ覽天の川よそのわたりの淺瀬ふむまに
彦星のとしに一夜の天川なかれてたえぬ契とそ見る
あまの川秋かせさむみ織女の雲の衣やけふかさぬらむ
一とせにけふまちえたる織女の天の河門はあけすもあら南
うちなひくゆふかけ草の秋の露たなはたつめの涙とそみる
七夕の雲の衣のきぬ〳〵にかへるさつらきあまのかは浪
天の川てたまもゆらにをる糸のなかき契りの秋はかきらし
咲初るいはせのをのゝ眞萩原しはしも風にいかてしらせし
色にいてゝうつろふ庭の小萩はらま袖にかけてとふ人も哉
枝なからおれるはかりに白露をみたれてぬける野への萩原
ひくま野に匂ふ萩原露なから濡てうつさむかたみはかりに
秋の野の萩のしら露よをさむみひとりや色のまつかはる覽
宮城のゝもとあらのこ萩うつるより風さへ色に出にける哉
濡つゝも誰かわくらん秋はきの咲ちる野への夜半のしら露
あたにをく露さへもろきけしきかな風にたまらぬ萩か花摺
野邊毎に誰にみせむとさゝかにのつらぬきかくる萩の白露
武藏野やなへて草葉の色にみよいつくか秋のかきり成へき
秋風はわきてもふかし野へ毎にをのれとなひく女郎花かな
花かつみおふるさはへの女郎花みやこもしらぬ秋やへぬ覽
いたつらにたのめし人やまつち山秋をわすれぬ女郎花かな
女郎花はなのたもとの白露はたか秋かせを思ひしるらん
くちなしの色に咲けるをみなへしいはてもぬるゝ秋の露哉
女郎花をのか名にこそ手折つれ袖ふれにきと露もちらすな
明わたるあしたの原の女郎花おきゆく露のいかにぬるらん
秋はまたあさゝゝはら(淺小竹原)の女郎花幾よな〳〵を露のをくらむ
秋かせの吹しく野へのをみなへし心となひくかたをみる哉
秋かせのおはな吹こす白露をわか身にしめて啼らつら哉
花すゝき草のたもとのしら露も夕やわきてしほれはつらん

秋のゝのすゝきをしなみ吹風にほむけやきえぬ雪とみゆ覽
露すかる草のたもとの秋のほ野歟をしのにをしなみわたる夕風
秋に今はあふ坂山のしのすゝき忍ひもはてす露やをくらん
草秋の花のゝすゝきをのれのみほにいてす共色にみえなむ
かり人のいるのゝ野への初尾花分行袖の數やそふらむ
穗に出る野原のすゝきかたよりにまねくは風のしるへ成覽
野へみれはおはなか末にもす鳴て秋に成行世のけしき哉
白露もみたれてむすふ秋かせに下葉さためぬ庭のかるかや
三室山しくれぬさきのもみち葉にまたきならはす夕附日哉
秋くれはたかかよひちと吹風にみたれてなひく野への篠原
夕くれは涙も露もかるかやのみたれてわふる秋のけしきに
うらかるゝをかのかるかやうち靡きはやくも過る秋の風哉
しら露のこほれて匂ふ藤はかま秋はわすれぬ色とこそみれ
野へにきてぬきけん人はしら露のかたみ久しき藤袴かな
なへて世の今年のゝへの藤はかまわきてもいかて露の置覽
ぬしやたれいさしら露の蘭わすれかたみに秋かせそふく
うち靡きくる秋ことにふちはかまいく野を風も匂ひゆく覽
音そよく軒端の荻に吹そめて人にしらるゝ秋のはつかせ
行年も半にすくる風の音に聲たてそむる庭のした荻
たへてふく四方の草木の秋かせも荻のはよりそ時雨初ける
夕くれの露のした荻そよさらにたまらぬほとの秋風そふく
わきてなと軒端の荻のそよくらんいつれの草も秋の初かせ
吹むすふまかきの荻の秋かせに思ひしよりもぬるゝ袖かな
軒ちかき笋つはわたる秋かせになをうたゝねの夢そ殘れる
おきのはの音信そむる夕かせに袖まておつる秋の露かな
あはれ又秋はきにけり今よりやねさめならはす荻の上風

久かたの雲ゐの鴈もねにたてゝ色にいて行庭の萩原
夜をさむみはつ鴈かねの涙とやあしたの原も色かはるらん
歸るさはきのふと思ふを春かすみ霞みていにし鴈そ鳴なる
をしなへて色なる山もかたをかのあしたのはらの初鴈の聲
秋山のみねとふ鴈の涙よりまたきしくれの色やみゆらん
久かたのあまとふ鴈のおほひ羽にもりてや露の秋をそむ覽
かけてくるたか玉章のあともなくいや遠さかる秋の鴈金
さゝかにのいとはやもなく初かりの涙を玉にまつやぬく覽
天川とわたる鴈のなみたとやもみちのはしも色にいつらむ
すきかてに鴈そなくなる秋の野の尾花か末や色にいてぬる
秋の野に朝たつしかのなみたにやぬれてうつろふ萩か花摺
なかき夜を妻こひあかすさを鹿のむねわけにちる眞萩の花
はしてめにみぬしかの涙ゆへ袖ほしわふる秋の山さと
さをしかのなみたを露にこきませて朝ふすをのに秋風そ吹
をく露もたえぬ思ひに鳴しかのをのか草ふし色かはる迄
風わたるあたのおほのゝ葛かつらなかき恨にかりそ鳴なる
とにかくにをとにや秋は高砂の松ふく風に鹿もなくなり
色かはる山のした草ふみ分てひとりや鹿のよはになくらん
露なから刈ほす小田のいねかてに鹿なく夜半は夢も覺つゝ
草も木も涙にそめてつまかくすやのゝ神山しかそなくなる
しら露のたえぬ草はとしりなからなと秋風に契置けん
鹿の聲かりの涙も數々にをくへき秋の草の露かな
をきとめて風もや露によはるらん四方の草葉の秋の夕くれ
草のはもしほれ果ぬるけしきかなくるゝ野はらの秋の白露
色かはる草葉もわかすしろたへの露にまかする秋の夕暮
をく露はこゝろのまゝに結らしおもる草葉にぬけるしら玉

夕くれは草木の外も袂まてしほるはかりにおもる露かな
ほしあへぬむくらの宿の濡衣たえすすむへき秋の露かは
秋の田の稲葉の風のかたよりにほむけの露そ先なひきける
しほれつる夜のまの露のひるまたに草葉やすめぬ秋の村雨
秋の日の山のはうすきむら雨にやかて木末の色そまたるゝ
露しくれそめて色なきわたつ海の浪さへ霧に秋をしれとや
とひこゆる峯の朝きり跡たえて數もしられぬ初鴈の聲
あま人の汐やくけふりいたつらにたつともしらぬ浦の朝霧
野へはみなあさけの霧の立こめて心もゆかぬ秋のたひ人
うきてのみたつ河霧の色みれは秋くるほとそ空にしらるゝ
秋の野の草の袂もうつもれてまねくもしらぬ朝霧の空
村雨の雲やはれぬる秋きりのたえまにうすき朝日かけかな
我宿の軒端の草の色をたにへたて果たる秋のあさ霧
明渡るあかしのとより見渡せはうら路の霧に嶋かくれつゝ
たちかへる野へにしほるゝ槿はおきうき露やならひ初らん
朝顔のはかなき露の宿りかないつれかさきにあたしのゝ原
をのつからをのか葉隠れ殘るらしよはる日影もみゆる朝顔
あつまちやいくしら露に濡過てあふさかこゆる望月の駒
あふ坂やけふまちえたる秋のよをふけぬといそく望月の駒
初秋のゆふかけ草のしら露にやとりそめたる山のはの月
照月のかつらの枝の色に出て秋になり行ゆふくれのそら
わか宿の軒のした草をく露の數さへみよとてらす月かな
あまをふれ初瀬のひはら白妙につもらぬ雪と月そみえける
白露のふる枝にさける秋はきのわすれす月の影も見えけり
限なき草葉の露のむさし野に猶あまりある月のかけ哉
秋きてもあしのは分のさはりおほみした行浪は月そ稀なる

白露の岡へにたてる松のはにうつるや月の色に出つゝ
秋の夜のあらゐのさきのかさしまにさし出る月は草影もなし
ほしわふる露よりかけやうつる覽草のたもとの秋の夜の月
くもらしなみかさの山はゐる雲に影さしのほる秋の夜の月
すかの根のなかきよわたる月艸のうつろひやすき秋の露哉
吹とてもまたてはいかゝ秋の夜のいさよふ月の山のはの雲
しら露の玉まつかえの秋の月よそのもみちをいくよかす覽
いつことはわかぬ空ゆく月たにも秋にはあへす變るかけ哉
ものゝふのやなくゐ草のふちたにもいつまて宿す秋の月哉
露むすふむくらの宿に明さすはひとりや月の影はぬれまし
人すまてあれ行やとのしら露は庭もまかきも秋のよの月
よを重ね小田のかりほの露の上にとこなれいつる秋の月影
立かへるいしまの水に影みえてあかすもあくる秋の月かな
色かはる山鳥の尾のなかしてふ夜わたる月の影のさやけさ
もしほくむあまの磯屋の袖の月やとさしとても浪になれつゝ
秋の夜はすそのゝ月もしろ妙にふしの高根の雪もわかれし
月かけに宇治の川長さしかへりこほれる浪は舟もさはらす
秋はみな草葉にかきるけしきかなむなしく露にやとる月影
虫のねも猶長月の月影に露やかさねてよさむなるらん
ふたみ瀉あけゆくおしき秋のよの月ふもとむる浦風もかな
初せのやゆつきか下のしら露もかくろへはてぬ秋の月かけ
かた山のすこか竹垣あみめよりもりくる秋の月のさひしさ
白露もたまにぬかすはさゝかにの宿をは月にいかてわかまし
誰か又秋もくれぬる長月のありあけの月のかけをなかむる
なかむれはまたみぬ雲の外までもおもかけさそふ秋の月哉
いさゝらは忘れてねなん秋の月なかむるからの袖の露かと

野も山も身にそふ露やしたふらん袖にはなれぬ秋の夜の月
あらへ共月やはかはる岩かねにひとりくたくる與つしら浪
みよしのゝ山下風に雲きえて高根の月のかけそさやけき
秋風にころもかりかね啼ときそ賤かきぬたも打はしめつれ
砧の夜の月をかさねていそくらしやゝ霜さむき麻の小衣
今よりはよのまの風の寒けれはやむ時もなく衣うつなり
行秋の末のゝ原のさゝのやによやさむからし衣うつこゑ
衣うつ音こそちかく聞ゆなれよや更ぬらん山のへのいほ
山かつのあさの衣をうちたえてねぬよもしるく明る月かけ
くれゆけは吹秋風をしるへにて人こぬやとに衣うつなり
なかき夜にうつてふ賤かきぬ〳〵に曉露やおきわかるらん
衣打里のしるへや身にちかくきにける秋の夜半の山かせ
長月や有明かたのねやさむみおとろく夢に衣うつなり
我ためにくる秋わふる虫の音に草葉の床の露や數そふ
片糸をよるをく露やさむからし秋くるからに虫のわふれは
何國をかわきては旅にすゝむしの草の枕によはかさねつゝ
秋ののにはたをる虫の糸すゝきくり返してもよるや悲しき
秋ふかきすそのゝ露の玉かつらたゆる時なく虫の鳴らん
今更に何うらむらんいつとてもとはれぬ宿の松むしの聲
かけ草に露そふやとのきり〳〵す猶夕くれやねをも立らん
枯わたるをのゝ淺茅のをのれのみたえぬ思ひに虫や侘らん
日暮しのなくゆふかけのなてしこに秋も淋しくをける露哉
山かつのつゝりさせてふきり〳〵すよ寒の風に鳴てつく也
咲匂ふ菊の長濱しろたへの礒こす（ちよ歟）浪に色そわかれぬ
行末も猶長月のきくの露つもらんうみの秋そ久しき
まつ人はおもひもよらす白妙の袖にまきるゝ庭の村菊

うへ置て秋まちえたる菊のはな思しまゝに折てかさゝん
菊のはなおいせぬ秋をせきとめて幾よかすまん山河の水
長月やまかきの菊は咲にけり植こし時はきのふと思ふに
露なからうつろひそむる菊の花かつ〳〵おしき秋の色かな
をく霜にうつろひはつる白菊をことしの花の限とそ見る
きくの花暮行空は久かたのあまつ雲井のほしかとそみる
長月や暮なは秋のかたみかな霜にくちぬる庭のしら菊
しき嶋のやまとにはあらぬ紅の花のちしほに染るもみち葉
吹つよる高ねの風のさむけれはもみちにあける龍田河かな
初時雨からくれなゐのふりいてゝ幾入しらぬ四方の紅葉々
しら露をならしの岡のうす紅葉かつ〳〵秋の色やそふらん
時しらぬ松の梢もあるものを秋にはあへぬ蔦のもみち葉
秋も今やくれなゐあける神なひのみ室の木のは色そ異なる
露霜のやのゝ神山くれなゐに匂ひそめたる峯のもみち葉
時雨ふるもみちの錦たてもなくぬきも定めぬ玉そこほるゝ
かつらきやまなく時雨のふるまゝに爭ひかぬる峯の紅葉は
龍田姫かけてほすてふ紅葉はのやしほの衣雨に染つゝ
もみち葉のちりなん山の夕時雨何をか秋のかたみとはみむ
色かはるもみちの山の夕附日うつろひはつる秋のかけかな
跡もなく降かくしつる紅葉はに道もまとはす秋や行らん
夕つく日小くらの山は秋くれてこよひはかりと鹿やなく覽
暮て行色はさやかにみえれとも入あひの鐘に秋そつきぬる
おしめとも秋はこよひとくれはてゝ人もしくるゝ小倉山哉
露霜のうつろふ色をかたみにてまかきの菊に秋そ暮ぬる
夕日かけさすや深山の谷の戸に明なは冬やこからしの風
色かへぬをさゝか露もなれ〳〵て一よに秋やくれんとす覽

草も木もあたなる色に染すてゝをのれつれなくくるゝ秋哉

何方へゆく覽秋も見るへきにちりもさためぬ峯のもみち葉

長月も暮ぬる野への花すゝき明なは秋の袖とやは見む

冬百首 一首闕

足引の山の木のはの色にいてゝしくれもあへす冬はきに鳧

あれにける門田のいほの村しくれ秋もとまらぬ冬はきに鳧

夜のほとに冬はきにけりかた山のならの下風聲さはきつゝ

もみち葉はふりみふらすみ色添てしくるゝ山は冬やきぬ覽

神無月野はらの草のたもとまてうらかれはつる冬の空かな

散殘る峯の紅葉の一村は暮にし秋のいろしのへとや

色々の草も冬野にかれはてゝあれ行けさの風の音かな

しくれの雨いかにふるらし常盤木の爭ひかぬる色みゆる迄

吹誘ふみねの嵐にさきたちて雲にはふらぬ夕時雨かな

降すさふ音を木のはにまかへつゝ板屋の軒にゆくしくれ哉

かきくもりしくるゝ雲のたえ〱に虹たちわたる遠の山本

めくりゆく時雨にすける遠山の松には色のわかれやはする

つれなさはことし計りの色かほに何とふり行松のしくれそ

染かねししくれにつよき竹のはを猶こりすまにをける霜哉

たかためにうつろひはてし色なれは忍ひかほなる菊の朝霜

野も山も秋みし色はなかりけりなへて枯葉の霜にまかせて

朝日かけ霜置まよふ道のへのおはなかもとにかゝるしら露

さえわたるまかきの霜の白妙に殘るを菊のかたみとや見ん

さを鹿の妻とふあとは絶はてゝ岡への小田にをける朝しも

霜まよふ山の下草朽はてゝならの枯葉に風そよくなり

深山にはあられ亂れてさゝのはのさやくや夜半の風そ烈しき

ぬく人はとへとしら玉みたれつゝあられそ落る野への道芝

あられ降かしまの崎の夕まくれくたけぬ浪も玉そ散ける

日をへつゝ梢むなしき冬枯は庭にあられの音のみそする

さら〱に落るあられの玉川によせくる浪や碎そふらむ

さえわたる峯の村雲ちる雪のわつかにたまる山のした草

吹こほる夜のまのかせのなこりとて初雪しろし庭の村草

けぬかうへにつきてふりしけ山里のけさ珍らしき庭の初雪

降雪は枝にも葉にもしらかしの道ふみまとふ冬のやま人

霜枯の草はそしはしたまりける庭にきえ行けさの初雪

道もなくふりにし庭のもみち葉に雪をかさねて冬はきに鳧

時雨にはつれなく過し松か枝のつちにつくまて雪は降つゝ

ふれはかつ梢にとまる松影のあさちかうへは雪ももりこす

やたのの淺茅か原もうつもれぬいくへあらちの峯の白雪

白妙のふしの高ねのいかならんさらぬ山ちも雪とちにけり

あまをふねとませの山も白妙に檜原の雪の道見えぬまて

跡たゆる庭のしら雪降はへてとはぬ人さへけふはまちつゝ

降つみてけふりをたにも山陰のましはの庵の雪のさひしさ

いはかねのすかのはしのき奥山にいくよか雪の降かくす覽

あしかきのよしのゝ山に降雪は雲のあなたに春やまちかき

今はまた人めも春もまちもせす道分かたき雪のけしきに

ふるまゝにはらひもあへすおもるらし深山の松の雪の下折

ひと夜ふる垣ねの竹の下折に野へもへたてすつもる白雪

かれ渡る芦のした折よはけれはこやもあらはにつもる白雪

霜枯のみきはにたてるあしつゝのひとへはかりに降る白雪

汐かせのあらき濱おきいたつらに浪おりかくる冬そ淋しき

冬きては難波のあし火たゆまねは汀はそよく枯葉たになし

霜かるゝ芦のほすゑのをのれのみまねくもしらぬ冬の夕暮
難波かた入江のあしに聲たてゝかれはの霜に渡るうら風
湊入の舟もやいとゝさはるらん汀のあしの雪のしたおれ
こやの池折ふすあしをたよりにて水まてたまる冬の白雪
冬きては霜かれはつるあしのはにあれ行風の聲そすくなき
明わたるさほのかはらに鳴千鳥ともなひかはす聲も寒けし
さゆる夜のちとりしはなく白妙のたか手枕もあけやしぬ覽
しかの浦や松ふく風の寒けれは夕なみちとり聲たてつ也
うちわたす河風さむみ鳴千鳥たかゆく袖の夜半に聞らん
はま千鳥あれゆく浪のたちかへり跡なきかたに友よはふ也
眞砂地に跡ふむ千鳥をのつから浦うつ浪のかたみとやみん
うちわひて千鳥鳴也いつみ川よわたる風の身にやしむらん
池水のさえはてにける冬のよは氷をたゝくあしの下かせ
とちはつる谷の小河のうすこほり下に岩まの聲むせふ也
さゆる夜は玉ゐのいはま音閉てもりこし水につらゝゐに鳧
谷河の汀やとをく氷るらん雪よりほかの水そすくなき
冬さむみかけ見し水の氷るより空さへさえて月やすむらん
冬きては木のはかくれもなかりけり月の桂の色はしらねと
降すさむ雪けの雲のたえまより猶白妙の月そもりくる
冬の夜の月をやしたふ濱千鳥かたふくかたのかけになく也
乙女子か袖ふきとめぬあまつかせわたる雲非は月そさやけき
水鳥の青羽はかりや殘るらん汀の芦のよものしもかれ
池水のさむき夕にすむ鴨の羽かひの霜やふりまさるらん
あちのすむすさの入江の芦の葉も緑ましらぬ冬はきにけり
こほれ共下やすからぬ冬河のうきねのかもは音のみ鳴つゝ
池水にすむ鳰鳥のみちたえてこほりにとつる冬の空かな

さゆる夜はいかゝこほらぬをし鴨のあたりの水は思ひ有共
こほりゐるかりちの池に住鳥もうちとけられぬねをや鳴覽
網代木にいさよふ浪のよる〳〵はをのれもこほる宇治の河水
風さゆるなかき霜夜やふけぬらんかすかになりぬ閨の埋火
千早ふる神のみ室のさか木葉に變らぬ千世をうたふ諸人
冬のよの庭火のかけはほのかにて雲ゐにさゆるあさくらの聲
けふうたふやそうち人の榊葉のときはかきはゝ君かまに〳〵
立かへる庭火のかけに御手洗やこほれる袖もうちとけぬへし
ふる雪にうたのとたちはうつもれて歸るさしらぬ冬の狩人
狩くらす鳥立か原のはし鷹の白ふをそへてをけるゆふ霜
冬くれは狩場のましは音たてゝかたのゝ原に渡るこからし
みしまのやくるれは結ふやかたをの鷹もま白に雪は降つゝ
冬かれのましはふみわけとかりする末のゝ原にふれる白雪
冬くれはとかりのましはたえすのみ聞ゆる野への鈴の音哉
降うつむをのゝ炭かま雪とちて煙もみえぬ冬のさひしさ
おく山に炭燒賤の麻ころもさえゆく霜をいとひやはする
すみのうへにふる白雪を頂きておひてそ出る小野の里人
降雪は炭やくけふり立むせひいくへかうつむ大はらのさと
降雪もつもれる年のけふことに明なは春となにいそくらん
おしみこし花も紅葉の色もみな雪にこもりてくるゝ年かな
幾かへり暮行けふをおしみてもおなしさまなる年をこゆ覽
あすよりは稀にこそ見めかきくもり猶もふりしけ庭の白雪
あはれ又春をあすとやしら玉の年をそへてもくるゝ空かな
春をまつ庭のしら雪それなから我身につもる年の暮かな
あけぬくれぬ送りむかふといそきても我身の外に積る年哉
おりふしの花と月とのなこりたにわすれておしき年の暮哉

戀二百首

いつしかと思ひ初つるむらさきの色の深さを誰にしらせん
戀すてふあたのうき名はたつ浪の跡なしとても袖は濡つゝ
きのふまてよそにか聞しなみた川［　　　　　　　］
扨も又あはしを何にかた糸のをのれ亂ておもひよりけん
しらせてもいかに鳴海の濱ひさきしほるゝ浪に袖をまか（へイ）せて
我故にぬるらんとたにしらなくに乾かぬ袖よ人にとはるな
浦にたくあまのすくものしたにのみ煙なたてそみは焦る共
浮草のうへはしけれる山水のせきても戀のうき名もらすな
しられしな夏のゝ原のしの薄穂にいてぬ袖の露の深さを
むらさきのねすりの衣色にいつとしたの亂は人にしられし
ちらすなよ涙かたしく枕より外には戀をしる人もなし
霧はれぬ裾のゝはらの花すゝきほのかにたにも誰にしらせん
したむせふ煙を雲にまかへてもたえぬはふしのねのみ流て
消ねたゝ忍ふの衣ちる玉の亂れはこひのうき名もそたつ
我袖は忍ふこゝろやあやにくに影もる夜半の月たにもなし
三輪の崎あら磯もみすかゝるてふ浪よりまさる袖や朽なん
うしとみし有明の月を忍ふかなかへるさしらぬ曉のそら
大かたの秋をく露はほしもせす身にしむ比の葛のうら風
しられしなうつ墨繩の一すちによる方もなく君をこふとは
うら風の磯やのしほの煙たにまつ吹かたになひきやはせぬ
いかにせん心はさても忍ふれとまきれぬものは涙なりけり
さても又あふをたのみのはてもなし戀はいのちそ限成ける
からあゐのやしほの衣ふりぬともそめし心の色はかはらし
つれもなく猶有明のおもかけをうきにはたへて忍ひつる哉

あはれともとはれぬ物を夏虫の身をいたつらに幾世もゆ覽
あふ事のしのひしまゝに絶はては人めとまては恨やはせん
さそとたになとしら浪の風をいたみ思はぬかたに立渡る共
ありてうき身の數ならぬ思ひ故恨むとたにも如何しらせん
稀にのみあふさか山のいはし水いはねとさきにぬるゝ袖哉
はては又わすれん後の人めさへうきかね事の忍はれそする
忘るへき今は我身の涙たに心にかなふゆふくれそなき
時雨降立田の山にましりてもちりなは袖を何にまかへん
いかゝせむそをたに後と賴むとも人の心のかはりはてなは
あはれ又いつくを忍ふ心とてうきをかたみにぬるゝ袂そ
東雲やゆふつけ鳥の聲よりも我もあけぬとねにはたてつる
片糸のあはをにぬけるたま〳〵も逢すは何のよるとまたまし
おくの海の汐干のかたに尋てもかひなき戀に身をや盡さん
我袖の涙に影のなれてたに月のかつらは手にもとられす
今は又たかゆく道と成ぬらんかよひし野への露のさゝはら
あしたつの鳴ねをたてゝいもか嶋つらきかたみの恨てそぬる
なからふる玉のをことの己のみ辛きにたへぬ音をそ立つる
せきかぬる袖さへかけてみつしほに入ぬる磯の草に戀つゝ
思ひのみ深き入江にこく舟のひとりこかれて世をやわた覽
逢事はたゝかた時のうつゝたになきねの夢も定かにやみる
うち絶てかへるさしらぬ鳥のねそうかりしまゝの涙也ける
我獨り忘れすとてもうき人のたのめし暮はいふかひもなし
うしとても人の心はいかゝせむ我身のとかに思ひなりなて
一すちにならぬ心も如何見ん忘れしまゝのうきにたへすは
忘られてまたぬ夕も有なましつらきひとつの心なりせは
今は又思ひそめけん身のとかは心になしてかこちつるかな

あさはのゝ露のしらすけ打絶てかくれて長きねにそ鳴ぬる
せく袖のいはまほしさにわきかへりしつ心なき思ひ河かな
志賀のあまの燒しほ煙たつとたに人にしらする浦風もかな
伊勢の海士の汐やき衣なれてたにつらきまとゐの袖そ悲しき
まちなるゝ夕への空はむかしにて我身ひとつの秋はきに鳧
我袖の涙の河に尋ても人をみるめはおもひたえつゝ
まつ人は幾よつれなし竹嶋のかはかぬ浪は袖にかけつゝ
み室山いのる心もしらゆふのかけてもなかくこひ渡るへき
今そしる袖にかつちるしら玉はちきりし中のをたえ成けり
八聲なくかけのたれおのをのれのみなかくや人に思亂れん
我こひは風にまかする白雲のはてなき空に思ひきえつゝ
我戀は朝氣の風に雲もなくなきたる空に身をやつくさん
我こひは難波をとめかこやにたくすくもの煙下燃にのみ
仇にのみ移ろふとみし宮城野のもとあらの萩の色もつれなし
いたつらに泪にそへてしほるかなゆきてはかへる道芝の露
きても猶たのまぬものを夏ころもうすく成行人の心は
あらし吹四方の草葉の秋の露をきところなく戀わたる哉
思はしと思ひなからに思ふかな思ひし筋は思ひわすれて
たつ浪もくれなゐ深き布妙の袖こそ秋のとまりなるらめ
さそとたにえやしら雲のをのれのみ消行空に色しみえねは
色深く思ひそめてしことのはに君か常盤は猶そつれなき
袖も又はらへはあはとうきしまのまつとせしまの床の泪は
うき夢をみさりし程は一筋につれなしとこそ恨わひけめ
ふらぬ夜の心は雨にはつれとも月はまちても慰みなまし
あたにのみさのゝふなはし年をへてかけてや人を戀渡り南
朝霧にぬれにきとおもふ衣手のやかて涙にしほれぬるかな

玉くしけあけまく惜みみつる夜のはかなき夢にぬるゝ袖哉
うき人をまとろむ程の夢にたに忘れすこそはみても忍はめ
しけり行ましはの垣の青つゝらひまなき戀そ苦しかりける
戀衣いかになるとのみつしほに玉もかる蜑も袖はほすらむ
秋萩の遠里をのゝすり衣うつりし色にまさる袖かな
あふことはなたかの海士の濡衣ぬれてかひある恨ともかな
いかにしていかほの浪のねぬ繩のねぬに浮名の立初めけん
田子の浦のあまとやさらはなりなまし濡そふ袖の浪に任せて
いつ人に又もあふみのやす川のやすき時なくこひ渡るらん
立かへり浪まにみゆる淡路嶋のあはぬ戀路によをや盡さん
うき人のきなれの山はなく鳥の聲はかりこそかたみ成けれ
信樂や外山の松にしくるともつれなき色はえやはみるへき
あし曳の山端こゆる初かりのいやさをさかるねにそ啼ぬる
曉はさてしもつらき別かなあふをかきりとなに頼みけん
いつまてかあふくま川の朝こほりそこなる影も隔はてつゝ
風はやみ杜の下草いたつらに人こそしられねしけき歎を
今は又たかみし夢になくさめてやみのうつゝの限成けん
此まゝに程なき世をやつくはねの峯よりおつる淵そ悲しき
ほし侘るうきはうつゝの袂かなみしをは夢に思ひなせとも
契りしをたのめはつらし思はねは何をいのちの慰めそなき
夢にたもかたしく夜半の袖なくは誰とか浦の浪はたゝまし
うきをしる心はこひにまけはてゝたゝ俤にぬるゝ袖かな
わたつ海やおきつ浪まのそこたにも淺くそ人に戀渡りぬる
わすらるゝうきは物かはとはかりにこりぬ心の猶くたく覽
とにかくにたのまぬものゝ悲しきはいひて別れし名殘成鳧
移り行人のためとはいひもせてうき身のとかを何もとむ覽

身をこかす思ひのけふりあらはれは淺まの嶽も都ならまし
忍ひあへす猶曉そうかりける恨し程におもひなせとも
あふ事をいつともしらす過しこし今宵を元の月日ともかな
けふ結ふにゐ手枕のわか艸にさてしも露そ袖はぬれける
中々に情をなにゝたのみけんねなは一夜の夢も見てまし
眺めつゝ宵のまゝなるとりのねにうき俤はかへりたにせす
戀をのみ志賀のうらはにあさりてもみるめ渚の浪に濡つゝ
思ひわひつらき心にうちそへて見さりし時を戀わたるかな
浪かくるしほ燒衣とにかくになれすはあまの何にぬれまし
もえわたる身は蜻蛉のをのれのみ苅てふ草の束のまもなし
戀せしと祈るみむろのますかゝみ移りし影をいかて忘れん
雲ゐなるふしの高ねの烟たにあらはにもえは及はさらまし
我身こそ涙の海にこく舟のゆたのたゆたにぬるゝそてかな
自からいかにねし夜の夢をたにまとろまは社見ても忍はめ
今は又思ふとたにもしらせまし人の心の情ありせは
いつしかと色に出行なみたかな心にさそと思ひそむとも
忘るとて人をはえしも恨みねは憂身のとかにいとゝそひ行
よる浪のおきつ嶋もりことゝけん我衣手といかゝぬるゝと
身のほとは思ひしれともみし人のうきをならひに恨つる哉
白露も身にしる物を秋かせにをのれうらむる虫の聲かな
今は又わすれんとおもふ心さへいとゝもよほすわか泪哉
頼めつゝうきあた人のいつはりに眺めしと思ふ夕暮もかな
我なから思ひもしらぬ夕かな待へきものといつならひけん
ひとりのみあかせる夜半の鳥のねは恨なれにし俤もなし
かたしきの枕なかるゝ涙河ゆめはかりたにえやは見えける
いたつらにあふにはかへて命さへたゝ戀しなは身社惜けれ

はかなしやたか僞りのなき世とてたのめしまゝの暮を待覽
頼めても猶こぬ人をまつ島やをしまのあまの袖もかはかす
鹿の蜑のあさるうらはの釣のをのうけひく人もなき戀ち哉
猶そ思ふ人の心は山かせにわかるゝみねの雲にしれとも
あふ事を松のうきねのあらはれてたか名を立と難面かる覽
うき身にはたかふ心もみるはかりなと忘よと契らさりけん
人しれぬ下のみたれやかよふらんまのゝかや原ほと遠く共
忘られしまのゝ入江のみをつくし朽なは袖のしるし共みよ
しかの蜑の釣の漁り火うきてのみ幾よの浪にもえかわた覽
あさてかるあつまをとめの玉たすきかけても人を忘やはする
よしさらはこぬみの濱のうら松のとはに浪こす袖も忍はん
とにかくにかはる心そをのつから待るゝかたの頼み也ける
音にたつるゆふつけ鳥の別れより人のためさへ曉そうき
人しれぬ鴉のした道はては又こほりにけりな冬の池みつ
河の瀬にさてさす賤のぬれ衣ほすは我身のこゝろなるらん
いつのまに憂に馴たる心かなまつへき暮となかめたにせて
はては又たかならはしと思ふさへかたみかてらにぬるゝ袖哉
つのくにのすくもたく火のかひやなき名には立ぬる夕煙哉
板ひさしさすやひかけにたつ蜑の數かきりなく戀や渡らん
驚けはいやはかなゝる現にてたのむ夢ちそみるかひもなき
さむるまてぬるゝ袖たにある物をなとあふ事の夢計りなる
うき人に濡ぬる袖そ今は又わかものからのかたみなりける
しるらめやはつかの月のはつかにも見し面影に戀渡るとは
あはれ又したに思ひしはな薄いかなるかたに靡きそむらん
憂事のおほのかはらのみこもりに茂るま菰の亂れてそ思ふ
いたつらに行かふ道の朝かすみ何しか人のへたてはつらん

逢ことのかたのおほしまいたつらに心盡しのなみに消つゝ
有とても何そは露のかひもなしつらきになかき仇の玉のを
露なからさゝわけし秋の衣手もかゝる袂の色にやはみし
秋山に峯まてはへる葛かつらなかくや人をうらみ果まし
かくとたに岩かき紅葉いたつらにしくるゝ色をとふ人もなし
なからへて我身にかはる涙哉うらみんとたに思ひやはせし
しるやいかに身をうき草のをのれのみ茂れる淵の底の心は
夏ふかき杜のした草ひまもなくぬれゆく袖をとふ人もかな
浦浪のたかしの濱の松かねのあらはれもせよぬるゝ袂は
心ひくしなのゝまゆみ末までもよりこは君をいかゝ忘れん
淡路嶋まつほのうらに燒鹽のからくも人をこふるころかな
身をしれは哀れもみちの立田何たか袖よりか流れそめけん
いかにして辛き心に身をかへてさり鳬とたに人にしらせん
わすれゆく心はいはす今は又かよひし道の跡たにもなし
見しまゝに我またしのふ夕くれは思ひもしらし心ならひに
思ひいてゝ忍ふときくもいか計り心をみすは嬉しからまし
忘らるゝ言葉うき身にしらるれとちらさは如何恨さるへき
よしさらは忘らるゝみは情からす人の名たてに人に語らん
いとゝ又なけかんためや拂ふらん人なき床のあきのゆふ風
はては又たのむ心のうたかひにうらみぬをさへ恨つるかな
つらからて嬉なからにわすられはたえて命のたれ恨むまし
行かへりいつを限にあふことの渚に浪のよるもねられす
さても猶何にか袖をしほるらんみるめにあけるいせの蜑人
時のまもわすれやはする山賤のかきほの花の色に出なん
哀れ共いかにいふへき草のなのさしも思ひにもゆる我身を
思ひこし我かね事の夕暮はあらぬかとたに身をもたとらす
契りしをまつとはなくて年もへぬたか僞かいのち成らん
かたをかのむかひのみねの椎柴の難面き色に幾よこふらん
俤のうきにまきれはをのつからわするゝことも慰みなまし
憂人を恨かてらにわすれなはいとゝや中のうとく成なん
今更に何とか人を恨むらんかねて忍ひしうき身ならすや
月影をありしにもあらすうらむれは我さへ變る心とや見る
我身をも厭ひしほとはいとひてき忘るゝ時そ忘れかねぬる
たのみつゝ待し夕の空にたによそにはきかぬ秋のあらしを
みし人はたゝ露はかりかりこものいかにせよとか亂れ初劔
あた人の秋の限と紅葉はの色こきいるゝ袖を見せはや
ひとりのみ涙かたしくとことはにかよひし人は昔なりけり
こよひもや又いつはりに明はてんねよとのかねも聲聞ゆ也
契りたに短きよゝのあしへよりみちくる汐に猶そ戀ぬる
うき人のこすのまとをる夕月夜おほろけにやは袖は濡ける
夕暮はいつまて人にまたれけんたゝ一すちに月をまつかな
よそならす思へはかなし沖つ浪つれなき岩にくたく心は
消ねたゝ袖にかつちる玉かつらおもかけたえぬ夕暮もなし
わたつ海とあれにし後は敷たへの枕のしたも藻汐たれつゝ
をのつからとはれし儘の情たにたえて軒端の草そはかなき
恨つゝそをたにうきかなくさめに猶夕くれの空そまたるゝ

雜二百首一首闕

とにかくになれる我身の心かなねさめの床の有明のそら
いたつらに今宵も早く明ぬ也をとなふ鐘のつく〳〵として
すむとても心ほそしな雲まよりやゝ影うすき有明の月
白露もよすから袖にやとしつるかけ別行ありあけの月

月たにも猶澄よはる有明につれなく人のよをたのむ哉
なかきよの有明の月もかたふきぬ旅行人や道いそくらん
明ぬるかをちかた人の袂まてあらはれわたるよとの河きり
深き夜のたけたかはらのよとくるま曉かけてをと聞ゆ也
なかめはやかさ木の光さしそへて今はといてん曉のそら
君か代の千とせの松のかけしけみ榮へますへき春はきに鳧
住よしの岸の濱松神さひてゆふかけわたす興つしらなみ
春秋の花ももみちもふりはてゝ友こそみえね高砂の松
いく秋の時雨もしらす過ぬらんきさ山かけの松の夕風
時わかすつれなき松の色なくは紅葉も花もなにゝしらまし
古郷の志賀のうらはのひとつ松幾よみとりの年かへぬらん
花の色になへてなり行みよしのゝ玉松かえそ緑つれなき
いはしろのよもの草葉もむすほゝれ野中の松に嵐吹也
とふ人のきなれの里は名のみして浪よるしまの松そ淋しき
白浪の磯邊の小松ふりにけり幾世をかけて誰かうへけん
萬代をみかきの竹のこめをきて雲ゐしつかに君そたもたむ
流つゝすむ川竹の葉をしけみ万代しるき君かかけかな
吳竹のふしみの里は名のみしておきゐて露もあかしつる哉
わか宿のいさゝ村竹打なひき夕くれしるき風の音かな
いかにせんまかきの竹の世中にうきふししけき物としる共
今は又ふしうしとても山里の竹のすかきのなかきよの空
柴の戶の竹のあみ垣明暮はおなしさまなる嵐をそきく
今更に世をうくひすの何と又音にたてゝなく宿の吳竹
山賤のへたてにひしく竹垣のわれくたけても世をや過まし
山里のさかひになひくにか竹のにか〳〵しくて世をや過南
龜のおの瀧つ岩ねにむす苔のうちゝる玉は千世の數かも
おく山の木たかき松のさかり苔おなし緑に年やふりぬる
ふる里のしのふにましる軒の苔みとり色こくおつる白露
庭深き草の下なるこけにさへ露より月の影そみえける
ちる花を苔のむしろに敷かへて靑ねかみねに松かせそふく
谷深く住ける宿のしるへかな一すちのこすこけの通ひち
えそ染ぬ身をおく山の苔衣思へはやすき身とはしれとも
ふりはつる杉の梢は苔むしてかみさひにけり三輪の山もと
よひ〳〵にかたしく岩の苔枕いく山かせの袖になるらん
君か代を空にしれとや雲もなくなきたる朝に田鶴の鳴らん
わかの浦に聲さはく也あし零の汀をこえてしほやみつ覽
淋しさは霜かれはつる草香江の入江にあさるあしたつの聲
冬さむみたつそ鳴なるうち渡すたけたの原の長きよの空
色かへぬ松にすむつるわか君の千世にちとせを重ねてや啼
むしろ田のいつぬき川にたつ浪も万代かけてたつそ鳴なる
數しらぬ濱の眞砂にすむつるは君か八千代の跡やとむらん
あはれ也このうちに鳴つるたにも子を思ふ道に聲たてつ也
さゆるよのねさめの床にかよふ也さはへの田鶴の明方の聲
風わたる澤へのあしのさむき夜は鶴の毛衣霜やかさねん
つくはねのは山しけ山いたつらに夜渡る月は影や少なき
時しらぬふしの高ねの白妙にいつともわかす雪はふりつゝ
春秋もいつとかわかんはし鷹のとかへる山の峯のしゐしは
たてをきし鏡の山の曇なく君かみかけそ千世はてらさむ
み吉野の山のあなたにたくへても憂に我身そやる方もな[ぬイ]き
尋ね入秋のみ山のわひしらにゝとゝましらの音をそ鳴なる
をのつからちらぬ下葉やみむろ山色染のこす時雨なりせは
心のみうきたひ毎にたつね行みやまの谷やところなるらむ

憂たひに人もいかなるみよし野の山やこのよのへたて成覽

よにしらぬわしのみ山の秋の月くらき闇路のうきに返すな

いつみ河行瀬の浪のいたつらにはやく憂世も過ぬへきかな

さても猶なかれてすめる我身かな秋津の河のあき果し世に

ことのみそよしのゝ河の岩浪のうつし心はもつ人もなし

夢結ふとこの山なるいさや河いさやうつゝの憂身ともなし

世中はころもかすかのよろしかは事もよろしく濡る袖かな

流れては海に出たるしかま川しかしこの世はあるに任せん

かきくらすあまの河瀬の夕かせに一夜やとかす人やなか覽

おち瀧つはつせか原の渡し守いそくといかゝとはて過へき

久かたの月のかつらの名にたてゝ川瀬の浪も色そうつろふ

白妙の尾花か袖もうちなひきくろゝ野原に風わたる也

宮城野やよもの草葉も村雨にうつろひはつる萩か花摺

秋の夜はなへてをけ共しら露の野への草葉や猶しほるらん

深き夜の明やしぬ覽あふみちのうねのゝ田鶴も今そ鳴なる

ぬれぬ共みかさはとらし宮城のゝ木の下露に袖を任せて

よしとたに人にはえこそいはれのゝ萱か下葉にいさ亂れ南

哀れ又秋くるからにむさしのゝ草はみなから露そこほるゝ

世中をしはしそ忍ふ秋のゝになくてふ虫の音にやたてゝん

秋のゝのいつくに露の身をゝかん人の心の嵐ふくよは

おほつかな夏のゝ草の露なから何ことをかは思ひみたるゝ

つかへつゝいく代も君にあふ坂の關のしみつの流たえせす

播磨路の須磨の關屋はあれにしを板まの月そ獨りもりぬる

なみかくる清見か關のあま衣ほさていくよかしほれはつ覽

わか君を關のふち河今も又よろつ代たえす猶祈るかな

白妙の衣のせきは下ひものとけてねぬよの名にこそ有けれ

夢をたにとをさゝりけりあしからの關ふく夜半の峯の嵐は

色々に秋の時雨もふりはへて鈴鹿の關にそむるもみち葉

あつま地のあふさか山のはしり井のはしる如くに行月日哉

陸奥のなこその關のなこそとも思はねと又とふ人もなし

雲かゝるいふきの嶽をめにかけて越そかねぬるふはの關山

跡たにもなからの橋のふりはてゝ何をかたみに戀渡らまし

葛城やわきてもいはし岩橋のたか浮世にか渡りはつへき

年へぬるいたゝの橋はふり果てけたよりゆかむ道たにもなし

千早振やそうち川の橋柱いさよふ浪のいくよへぬらむ

下くつるきそのかけ橋たえ／＼に危うくてのみ世を渡る哉

よる浪の音を梢に吹なしてはまなの橋をわたるまつ風

旅衣はる／＼きぬる八橋のむかしのあとに袖もぬれつゝ

いそのかみふるの高はしいとゝ又昔やとをくなり渡るらん

谷深み板打わたすひとつはしたか世に過る道となるらん

何をかはわけつるかたになかめまし跡なき浪のおきつ舟人

いかはかり袖こす浪もしほるらん世をうみわたる興津舟人

はりまなる室のしほちの朝なきに風をたよりにいそく舟人

浦にふく風やしるへにたのむらん遙にいつるさとのあま人

はる／＼と漕くる波の跡もなしひなのなかちのおきつ鹽風

舟とめしゐしまの月を見てゆかん急くしほちの風はよく共

行末はさためぬ浪をしるへにてもろこし舟の跡もはかなし

いく手（出てさてイ）にかほなはつくらん風はやみみほの浦はに過る舟人

よせかへり浪うつ舟のとまやかた浮ねは夢もえやは見えける

一夜たにならはぬうらの笘ひさしさしもや浪の音にたゆ覽

わすれしよあしやか沖に舟とめてさためぬ浪にみつる月影

里遠き野中にをくる鳥のねに又おきすつる草のかり庵

むさし野や都は山にみしものを草のはわけて月をみるかな
武蔵野やたかやとしむるしるへとて草の末葉に煙立らん
旅衣つま吹かせの寒き夜にやとこそなけれ猪名のさゝ原
かへりみるかたみに忍ふ山のはに都をとをみ雲なかさねそ
なかめつゝ思へはおなし月たにも都にかはるさやのなか山
うつの山わけてしほるゝ袂かな昔とまては思ひいらねと
あさはのにたつみわこすけ布たへの枕にしても一夜明しつ
一夜ねぬあさてかりほすあつまやのかやのこ莚敷忍ひつゝ
旅衣きつゝ馴ゆく（にしイ）かひもなし日をへてまさる山のあらしに
幾へまて都を遠くへたつらん越行山の峯のしらくも
雲ゐゆく月もつけこせふる里にならはぬ袖は露にしほると
浪かくる蜑のとまやの一夜たにかくてはふへき心地社せね
立かへり猶すきかてにみつる哉なこえのはまによする白浪
行くれて宿かる庵の杉はしらひと夜のふしも忘やはせん
月はかりみし古郷の光にてをくりともなふ山のをくかな
程もなく立かへるとも白妙の袖のわかれは猶そかなしき
山のはにまたてや消ん白雲のこなたかなたに立別れなは
さても猶人やりならぬ道なから別るゝ程はぬるゝ袖かな
とゝめあへす朝たつ袖のしら露もすかるなくのゝ秋の萩原
あふ坂は行もかへるも別路の人たのめなる名のみふりつゝ
かけふかき端山の庵の板ひさし空のまゝなる月をやはみる
あさゆふに我ふむ山の谷の道人とひけりと人や見るらん
かけわたす竹のわれ樋にもる水の絶々にたにとふ人そなき
柴垣のうへはひかゝる青つゝらとひくる人やたえてなか覽
山里はとはれんとやはすみそめしをとせぬ人を何うらむ覽
山際の柴のあみ垣吹風のをとより外に人もまちみす

尋はや世のうきよりは奥山のかけひの水やすみよかるらん
あか棚の花の枯葉も打しめり朝きりふかしみねの山寺
秋は又憂世にまさるすまゐかなねさめの山のさをしかの聲
とへかしな杉の葉分に窓あけて結ふいほりの心ほそさを
われとせぬもとの谷川やり水に石たてわたすおく山のいほ
里人のゆきゝならてはをのつから音なふものもなき山ち哉
岩に落る瀧はまくらにひゝきつゝね覺かちなる山のおく哉
山深く年ふるほとそしられぬる鹿も小鳥も人になれつゝ
秋くれは軒端のくりもうらやまし心にいかにさはゑまる覽
山里の柴のまろやはとにかくに時雨も風も音をたてつゝ
こそいれし水のふる跡ほりあけて賤か垣ねにいそく苗代
雨すくるふしみのをたの郭公なくやさつきの早苗とるなり
小田ちかきねさめの床に夢さめていなはの風に秋そしらるゝ
夕日さす門田の鳴子吹かせをゝのかならひにたつ雀かな
霜うつむ刈田の庵のいたつらにわれひとりとや月のもる覽
何と又門田のひつちおひぬ覽あきはてぬへき此世と思ふに
冬深み田中の庵の山かせによはき我身の世を過るかな
庵結ふ田中にたてるそほつたにうき世を秋の露に濡つゝ
をしねほす小田の刈穂の笘をあらみ流る計りにをける露哉
霜さゆるかり田の面に聞ゆ也ねさめもよほす鳴のはねかき
くりかへし幾たひ月をなかむらん昔を忍ふ夜半のねさめに
いにしへは我たに忍ふ秋の月いかなるよゝに思ひいつらん
いたつらにみぬ昔のみしのはれて過る月日をなけく比哉
ありふれはいとゝうき世になりはてゝ恨しをさへ猶忍ふ哉
あれわたるふるやの軒の忍草人の心やたれとなるらん
うれしきもうきもつらきもむは玉の夢より外の慰めそなき

賴むへきうつゝも夢をみるからにいやはかなゝるよはの床哉
とにかくにうつゝにもあらぬ此世には夢こそ夢の夢は有皀
夢とたにみぬをうつゝに賴むかな仇なる人のよとはしれ共
思へたゝふすかとすれは明る夜のそのほとたえぬ夢の短さ
ぬるからうちの夢に現をみつるかな何れをあたの物と定めん
むは玉のよはのさ衣かへしても賴めはみえぬ夢のはかなさ
夢やゆめうつゝや現一すちにわかれぬものは此世なりけり
をのつから戀しき人をみし夢のわすれやしぬる又も結はぬ
短かよの夢計りなる此世たにあはてやなかき闇にまとはん
風わたる草葉の露の數々に消のこるへき人のうき世か
はかなさは舟をか山の夕まくれしはしもたえぬ煙にもしれ
人の世のはかなき程はよそならしいはまにきゆる水の白玉
あらし吹とやまの峯のさくら花ちらてはつへき此世共みす
たのまれぬ人のうき世にくらふれは沖こく舟の跡は有けり
定めなき世の習ひ社哀なれ日をへてまさる野へのそとはに
月たにも猶かくれぬる浮雲のきえて跡なき身とはしらすや
あはれこそありとたにみれ谷川のゆく瀨に浮ふ哀れよの中
ちりはつる浮世は誰もゝみち葉をしらす顏にも猶惜みつゝ
人のみはさてもやいかに末の露もとの雫は思ひしれとも
とに角にさしてそ賴む三笠山峯にもおにもしるしあらはせ
何と又おなし浮世を賴むらんあるへきほとは思ひしれとも
身のほとを思ふ行衞のとにかくにかはるはおなし心なり皀
世中を人なみ〳〵にすくせ共よるへきかたのなきそ悲しき
よの中は何事をしてなにことにいかにとすへき我身なる覽
しはしたに誰かあはれといはしろのまつ行末もしらぬ我身は
あはれ也かけちにわたす丸木橋あやふまれてや身は過す覽
心より外に心はなきものを我身にも似ぬ身をいかにせん
今はみを心にたにもいとふかな誰かはまして哀ともみむ
よにふれは我身の程をしるものをしらす貌にも人やみる覽
久かたの空ものとかに朝日かけくまなくてらせ君か千歲に
わたつ海のよもの浦浪君か代の千とせのかすに沖つ嶋もり
夕附日むかひの岡のたま松のいつともわかし君かちとせは
我君は數もかきらしやをかゆく濱のまさこに千代をよみつゝ
ふしことに八千代をこむる吳竹の變らぬ影は君かまに〳〵
春日山今もおひそふわか松のはかすに君かちよをこめつゝ
伊勢嶋や渚によするしら浪のくたくる玉や万代のかす
わたつ海のしらぬ浪まに住龜のよもきか嶋も君かためとそ
君か代は數もしられし久かたのあまてる月のすまん限りは
三千年になるてふもゝの百かへりひらけむ花は君か代の爲

貞應二年八月五ケ日間詠之。
二百首一日
二百五十首一日
二百廿首一日
二百首一日
百三十首一日

一本云
朱點定家〔今以━━示之〕
黑點慈鎭〔今以┃┃示之〕

右中院禪門千首以ニ異本一挍合畢。按ニ井蛙抄雜談一云。中院禪門廿五歲依ニ慈鎭和尙敎一。五日詠ニ和歌千首一。此卿不レ墮ニ父祖之業一蓋起ニ于此一。然則是一卷可レ謂ニ珍書一。惜哉以ニ類本不レ多。不レ能ニ悉正誤補闕一而已。因曰。按ニ公卿補任一。貞應二年中院禪門廿六歲也。而謂ニ廿五一。疑傳聞之誤耳。且跋文云。黑點慈鎭。井蛙抄云。京極黃門一覽之後命曰。可レ示ニ壬生二位一。未レ知ニ孰是一乎。

群書類從卷第百六十一

和歌部十六千首二

詠千首和歌

正二位行權大納言兼春宮太夫大學頭
藤原朝臣師兼

春二百首

元日立春
あら玉の年立かへるけふしもやおなし道にと春のきぬらむ

春自東來
東路の道のはてより立春のいかて都にけふは來ぬらん

雪中春來
雪積る庭のかよひちあともなしいつくは春の立名はかりに

春到氷解
春のくる跡社みゆれ分てまつとくるかたある池のこほりに

貴賤迎春
なそへなく高きいやしきをしなへて春を迎へるやまと諸人

早春天
年ことにかよひ馴てや久かたの雲路たとらす春のきぬらん

早春日
出る日の影にもしるしいましやはのとけかるへき春の光は

早春風
風の音も一よのほとに吹かへてけさのとかなる春の色かな

早春雲
いとはやも霞にけりなきのふまて雪けにさえし山端の雲

早春霞
春のきる物ともしるくけさよりは霞のころも立はしめつゝ

山早春
打なひき春やきぬらん青柳のかつらき山そはやかすむなる

關早春
久かたの雲路はるかにかすむ也岩戸の關を春やこゆらむ

河早春
山河の岩間の氷とけぬらん春の音そふみつのしらなみ

浦早春
もしほやく煙を春のしるへにて浦の苫屋や先かすむらん

都早春
いそのかみふるき都に立かへりまた新玉の春そきにける

野子日
君か代のためしふれとそ春日野の松をさなから引盡しつる

子日松

たか千世のためしに引て殘しけむ木高きのへの松の老木は

遠山霞

をはつせの山はそこともみえぬ迄伏見のくれに立霞み哉

連峯霞

立わたる霞もさそな百重山峯のつゝきのみえす成ゆく

杜間霞

おほあらきの杜のしめ縄春かけて霞たな引明ほのゝ空

原外霞

みよしのゝ山には雪も消なくにみかきか原そはやかすむ也

野徑霞

古の野中のし水くむ人も道まとふまて立かすみかな

關路霞

春といへは立名もしるし東路や霞にとさすせきのあら垣

橋邊霞

松風の音を殘してかすむ日にわたすやいつこ天のはし立

海畔霞

海原や遠き磯へは見えわかて霞によする沖津しら波

江上霞

すみの江の松や霞のみをつくし深き淺きもほとはみえつゝ

孤嶋霞

かすむ日はそこともみえす住吉のきしのむかひの淡路嶋山

古渡霞

明ほのや波路たとらて出にけりふかき霞のよとの河舟

水郷霞

宇治橋やかよふ行ても中たえむ霞にたとるまきの嶋人

霞籠遠樹

ふりつみし梢の雪は消ぬれと霞にこもる峯の松原

霞隔行舟

こき過る跡よりやかて霞めはやみえすなるおの沖の友舟

晩霞映日

夕つく日さすや岡への薄霞それとも分ぬ松のいろかな

初聞鶯

をのつから春とはかりに鳴初てまた里なれぬうくひすの聲

鶯辭巣

春といへはふるすを出て飛鳥のあすかの里に鶯そなく

竹裏鶯

葉かへせぬ君か御垣の吳竹に千世をならせる鶯のこゑ

野亭鶯

あさな〳〵鳴ねもなれぬ野へちかき庵の軒の春のうくひす

鶯知春

いかてしる物ともわかぬ身の春を我にをしへよ宿の鶯

鶯求友

數ならぬ身と思へはや鶯も我をはよそに友もとむらむ

鶯閑中友

たにふかみ鳴鶯も出ていなはいとゝうき身の友やなからん

雪中若菜

踏分る跡なかりせは白雪のふる野の若菜いかてつまゝし

野若菜

立なるゝとふ火の野守をのつから心ならても若なつむらし

澤若菜

たれかまたわかなつみにと分つらん澤邊の雪に跡そ殘れる

田若菜

引しめし小田のしめなは春くれは又あとたえす若菜摘つゝ

路若菜

いつよりか若菜つまゝしみよし野の猶春寒み雪のふる道

水邊若菜

けふもまた若なつむとて足引の山澤水に袖はぬれつゝ

獨摘若菜

我のみや若菜つまゝしけふも猶雪間をめくる人もなきのに

岡邊殘雪

かすみたついつより春の色ならんまた雪ふかし岡のへの里

松下殘雪

風寒み何をか春といはしろや雪たにとけぬ松のした陰

垣根殘雪

こゝろなき賤か垣ねは春來ても猶時しらて殘る雪かな

餘寒風

谷河の打出しなみは聲たえてまたさえかへる山颪のかせ

餘寒水

はる風のわたれは猶やこほるらんさえかへる頃の庭の池水

二月餘寒

たをやめの衣の袖は雪おちて猶春寒き二月の空

暗夜梅

あやなしと思ひもはてす吹風に梅かゝかほる春の夜のやみ

山家梅

山ふかみわか待人はとはすとも折もつくさし軒の梅か香

故郷梅

里はあれてふりぬる園の板間おほみ枕にきほふ梅の下風

行路梅

たひ人のゆきゝの袖にうつしてもなを深くのみ匂ふ梅かえ

簷端梅

たのめこし軒はの梅の花盛香をとめてやは人のとひこぬ

若木梅

散なれしつらさもしらて咲初るわかきの梅を哀とそみる

老木梅

なかめこしたか世の春か思ひ出る花も老木の宿のむめか香

依風知梅

梅かえに風のしるへのなかりせはまたみぬ花をいかて尋ねん

梅香薫枕

むめかゝはれ覺の床にかほりきて月影うすき春の手枕

梅散待客

とふ人のあるにつけてもかこ川や散にし梅のあとの山かせ

杜柳

春をへて柳の糸のぬきをうすみをるや霞の衣手の杜

池柳

しま宮の池の堤の柳かけうつれはかはる世々のはるかな

河柳

立田河なみにあらへる青柳のうちたれかみを夕風そふく

門柳

身の春よいつとかまたんわか門に代々へしものな青柳の糸

柳靡風

吹たゆむ隙こそなけれ青柳のなひくにしるし庭の春かせ

柳帶露

青柳のにしきの糸のなかりせは何をか露の玉のをにせん

柳似眉

あさ緑まゆかきたるゝ青柳は遠き山邊の色かとそみる

柳無氣力

春風のさそふをゝのか力にてわれとなひかぬ青柳の糸

野外春草

色に出ていつあらはれんとふひ野やのもせの草の雪の下萠

池邊春草

庭の池の汀の草はもえ出て覺けむ夢の跡をしそおもふ

樹陰早蕨

いかにして日影もゝらぬおく山の木の下蕨春をしるらん

樵路早蕨

み山へやゆきゝの道の早蕨は賤かつま木のたよりにそをる

暮天歸鴈

いつくにか宿をはとはん夕くれの雲のはるかにかへる鴈金

月前歸鴈

誰しかも其間にもとやとゝめけむ月待出てかへる鴈かね

深夜歸鴈

ことはりや春の哀も深夜の月になく／＼かへる鴈かね

遠峯歸鴈

はるかなる嶺とひ越て行鴈の聲のかきりはなをなかめつゝ

海邊歸鴈

あまのすむ里のしるへの誰なれは恨てのみも鴈のゆくらん

歸鴈知春

歸るへき時とは誰にならひてかくる春ことに鴈のゆくらむ

歸鴈迷雲

それとたになかすはみえしほの／＼と霞雲ゐをかへる鴈金

歸鴈成字

ぬしや誰えそしら雲のよそめのみ書つられたる鴈の玉章

歸鴈不駐

しゐて猶したひやせましかへる鴈惜むにとまる春も有やと

江上春曙

心なき人しもあらし難波江や霞むしほせの春の明ほの

水郷春曙

あかてゆく水かさも今や水無瀨河やま本かすむ春の明ほの

古寺春曙

鐘のをとも明かた近し初瀨山峯のよこ雲花にわかれて

幽栖春曙

さひしさは秋たにたへし宿そとも思ひなされぬ春の曙

遠村春曙

ほの／＼とはや見えそめて山もとのかすみに續く峯の横雲

春夕月

霞つゝ暮ゆく山の高ねよりそれかとはかり月のほのめく

春曉月

さたかにも霞める空はみえわかすそれかあらぬか在明の月

山春月

山の端に待出るかけもかひそなき霞にこもる春のよの月

關春月

川口のせきのあちかきあらけれと霞める月の影はもりこす

浦春月

すまの蜑のもしほの煙心せよさらてもかすむ月のなたてに

旅春月

うき旅の涙や空に古郷のはるにも過てかすむ月かな

春月幽

契りきやあるにもあらす霞む夜の月をうき身の類なれとは

朝春雨

よもすから霞とみつる月影の名殘しらるゝ今朝の春雨

夕春雨

ふかくのみ霞むとみつる夕くれの空よりやかて春雨そふる

夜春雨

靜なるね覺ならすはふるとしも聞たにわかしよはの春雨

野春雨

かすか野やまたもえやらぬ若草の綠もよほす春雨そふる

庵春雨

うき身世にふるとはなしの物そおもふ草の庵の軒の春雨

牧春駒

都には秋のこよひや立出ん春も最中の望月のこま

原春駒

さすか又まかひやはするいとゆふの遊ふ野原にあさる春駒

春駒嘶

霞たち日影のとけき春のゝにいはゆる駒は今あさるらし

山寒花遲

さかぬまはまたさえあれて花をのみいとふにたる春の山風

漸待花

いましはやそれかとまかふ雲の色も心にかゝる山さくら哉

遙尋花

いかにして尋つくさむ三吉野やこれよりおくの花のしら雲

老栽花

うへをくも老ぬる身には哀なりいまいく春と花にたのまて

花初開

待侘る山路の櫻咲にけりまたみぬ色のくもそかゝれる

花方盛

なへてはや花咲ぬらししら雲のかゝらぬ方もなき山路かな

靜見花

徒になすこともなき身ならすは長閑に花の色もみましや

獨翫花

花も分て哀をかはせ我ならぬ人もすさめぬ宿のさくら木

曉花

有明のかたふく山のさくら花つれなき色にまかひやはせぬ

曙花

入やらて月も別やしたふらん外山の花のよこ雲のそら

朝花

夜の程も明しかねつる槇の戶をゝし明かたの花もめかれぬ

夕花

とてもわか家路わするゝ花の陰くるとな告そ入相のかね

夜花

はても猶あかぬ色かをいとせめておしきよのまの花盛り哉

糸櫻

さほ姬のはつるゝ袖の糸櫻風にみたれて散ぬ日そなき

八重櫻

名にしあふ其神かきの八重櫻八雲の色もさそまかふらん

山花

さらてたにまたすしもあらぬ山櫻おもかけそへて懸る雲哉

嶺花

さくら花咲そむるかとみしほとにやかて高根にかゝる白雲

岡花

もろ人のゆきゝのをかにさく花は風をもまたて折や盡さむ
杜花
さほひめの花のしらゆふかけそへて手向おほかる杜の影哉
野花
みよし野やみゆきかさなる春をへてなかめ馴ぬる花の影哉
瀧花
常よりも増るとみゆる瀧津せの音かはらぬや花のしら浪
河花
立田河ちらぬ櫻も影みえてまたきにいそく水の音かな
浦花
わたつ海のかさしの花の色そへて磯山さくら今さかりなり
里花
三吉野や嵐のつても里つゝき梢もしらぬ花をみるらん
庭花
あかすなを哀とそ思ふさくら花みるらん後の宿の春まて
禁中花
九重の雲の上なる花なれはまたまかふへき色やなからん
社頭花
何とたゝ風に任せてみよし野の神もまもらは花もちらしを
古寺花
初瀬山ふりにし世々の春まてもみる心ちする花の色かな
故郷花
たちかへり又みんとこそ頼めしか思ふもかなし故郷のはな
遠村花
たつねはやとをちの里の見わたしに霞てかゝる雲の一むら
閑居花
うたて我心とゝむる山さくら捨はてにきとおもふうき世に
名所花
咲花はうつりにけりな立田山高根の雲そ色ことになる
雲間花
しら雲の夕ゐる山の櫻はなうつろふ頃は花もまかはす
霞中花
花のかや霞の袖にあまるらんつゝみもあへすにほふ春風
月前花
明るまも頼まれぬ物を櫻花うつろふ色は月にかもみん
風前花
かりにたにあてしとそ思ふはな盛いとふにはゆる春の風哉
雨中花
さほ姫の衣はる雨ふるさとの花のした紐とけやしぬらん
松間花
松かえは埋れはてゝ高砂のおのへにたてる花のしら雲
花似雲
かつらきや咲そふ花の色も猶よそめはおなし峯のしら雲
花似雪
降としもよそにはみえす花の雪木のもとはかり冬籠りして
花留行客
見捨てはえそ過やらぬ花のかけ關とはきかすみよし野の山
花下忘歸
なをさりに待らん物か都人はなに家路は忘れぬる身を
對花思友
山陰は雪にのみやは思ひ出んとへかし人のはなのさかりを
對花問昔

我はかり心をそめし人やあると昔なからの花にとはゝや
心未飽花
八千世見て後もあかしを櫻花なと待とをに咲はしめけむ
花枝散
春風の吹もふかすも山櫻うつろふころはしつこゝろなき
花漸稀
をしなへて雲にうもれしみよしのゝ山もあらはに花そ成行
落花満庭
跡たえてかよはぬ庭の苔むしろかさねて花の色そ散しく
落花埋路
歸るさの道はまとひぬ尋つる外山の花のちりのまかひに
落花處々
一もとにせめて心を盡さはやよもに亂れて散さくらかな
春日遲
暮かたき日影を春の習ひとも花ありてこそおもひ知ぬれ
簾外燕
玉たれのひまもる風も寒からて春日うらゝになく燕かな
野遊到暮
のとかなる春の心のあくかれて家路わするゝのへのくれ哉
天外遊絲
をのつから絲もをのか色ならぬ空に染たる春のいとゆふ
三月三日
言のはのもしをいくよか行水にめくりきぬ覽花のさかつき
桃花不言
咲桃の花ものいはゝとひてまし入けむ山のおくはいかにと
山路春雉
かすみ立山路の春のつまこめに鳴やきゝすの聲はかりして
春雉思子
人のおやの心もくみて知るゝはやけのゝきしの子を思ふ聲
野雲雀
永き日もさすかくれ行淺ちふのをのゝしはふに雲雀おつ也
路雲雀
いそのかみふるのゝ道の夕雲雀あかりなれにし跡にまとふな
雲雀揚
春の野の霞を分て鳴こゑのいや遠さかる夕ひはりかな
山喚子鳥
山ひこのこたふる山のよふことり友よひかはす聲かとそ聞
夕呼子鳥
さらぬたに山のおくにと思ふ身を夕はわきてよふこ鳥かな
河邊苗代
けふいく日なはしろ水にまかすらん濁もやまぬ春の山かは
山田苗代
ますらおか山田のくろにしめはへて苗代水をいまか引らし
雨後苗代
雨過る門田の面は水こえてゆたにみえたるしつか苗代
池蛙
いひ出ぬ池の心もあるものをねに立てのみなく蛙かな
田蛙
心なき賤か門田になく蛙あはれとたにも誰かきかまし
野亭菫
春といへはすみれつみにとくる人の便またるゝ野への假庵
故郷菫

あれまさる籬ものらのつほすみれ昔の春のかたみにそつむ
閑居菫
さけはとて誰かは爰にこ紫ひとりすみれの色そかひなき
橋杜若
八橋やむかしの跡のかきつはた今も涙はおち増りつゝ
沼杜若
さらぬたにそこともみえぬかくれぬを咲てへたつる杜若哉
樵路躑躅
岩つゝし花をつま木に折そへてむへも心ある遠つ山人
巖上躑躅
咲初る山の岩ねのいはつゝしいはねとしるき花のくれなゐ
河款冬
いはぬ色をそこにふかめて思ひ河春をやおしむ山ふきの花
嶋款冬
尋ねつゝ又もこしまと契る哉えそたゝにては山吹のはな
里款冬
春も今いく日もあらし山吹の花もてはやせゐての里人
路款冬
人とはゝいかゝなのらん打わたすをちかたのへの山吹の花
籬款冬
さきぬとも人にはいはて山吹の花のまかきを我のみやみむ
山藤
かすか山北の藤なみよゝかけてかはらぬ春の色にさかなむ
池藤
吹たひに汀の松の枝こえて風にそさはく池の藤なみ
岸藤
松に咲藤えのきしの春の浪立かとみえてうら風そふく
江藤
住の江や松をうら風ふかぬまも梢にかゝる春のふち浪
浦藤
時わかぬ浪にも春の色みえてうつろひにけり田子のふち浪
兼惜春
いかにせむ有明の月に花ちりてまたき別の春のふるさと
暮春月
かすめたゝ春のわかれの袖の月とても涙にくもりやはせぬ
暮春雲
歸るさの雲のいつこと詠めても行ゑしられぬ春の別路
暮春霞
よもの空けふをかきりとかすませて哀いつくに春の行らん
暮春雨
なへて世にしたふ涙か暮て行春のわかれのむらさめの空
山暮春
なれ〳〵し鳥もふる巣にかへる也山ちや春のとまり成らん
關暮春
こしかたに又立歸る春ならはけふあふ坂の關やこゆらむ
河暮春
惜めともとまらぬ春の早瀬川しからみかけてせく方もなし
三月盡夜
久かたの天の岩戸に關もあらは今宵はかりの春をとゝめよ
三月盡曉
ゆく春の別は鐘を限りにて思ひつきせぬあか月の空

夏百首

竹亭夏來
けふよりはまたるゝ物と軒近き竹のしけみに風かよふなり
杜首夏
神まつる卯月になれやけふしはやしめさしわたす杜の下陰
朝更衣
ぬきかふる習ひならすは夏衣けさとて何かいそきたゝまし
更衣惜春
なれきつる花色衣立かへてけふこそ春に別れはてぬれ
尋餘花
春くれぬとはかりいひて尋ねすは青葉に殘る花もみましや
餘花似春
暮果し春こそ更に忍はるれかはらぬ花の色をみるにも
谷餘花
谷陰や人もすさめぬ花の色は春にをくれて咲かひもなし
新樹妨月
冬かれに月のくまとてみしほとの影たにもらぬ夏木立かな
卯花初開
月影にまかふはかりはいつのまに咲ならひけん庭のうの花
卯花廻菴
山ふかみおり立雲と見ゆるまて垣ほのよもにさける卯花
卯花夾路
わけ過る遠かた人の跡はかり雲間とみゆる野へのうのはな
卯花作垣
をのつから宿の隔と成にけり荒るまゝなる庭のうの花
遙望卯花
玉河のゐてこす浪やまかふらんさけはかつ散岸のうのはな
賀茂祭
僞をたゝすの宮の神ならはけふのみあれに君忍ふらし
山葵
故郷はかけはなるともあふひ草猶そのかみの山かつらせむ
待郭公
さのみかく心つくさしほとゝきす頼めてきなく初音也せは
尋郭公
尋ねてそ聞かへりけるほとゝきすとはぬをうしと何恨みけむ
人傳郭公
我にのみつれなきおとは郭公よそに鳴つと聞てこそしれ
聞郭公
忘れては夢かとそ思ふほとゝきすねぬよなからのよその一聲
郭公未遍
さのみやは恨みもはてむ郭公また里なれぬころのはつねは
郭公何方
いつかたと聞たにわかぬほとゝきす只一聲の雲のまきれに
郭公數聲
おちかへり今こそきなけほとゝきす忍ひしうさも忘る計に
曉郭公
待あかす雲路の月の有明に心あるへきほとゝきすかな
曙郭公
ほとゝきす神代なからのこゑす也天の岩戸のあけほのゝ空
朝郭公
みやまをは夜半に出たるほとゝきす明る雲路に初音鳴なり

夕郭公
よそにはや鳴とは聞つほとゝきす此ゆふ暮や恨みはつへき

夜郭公
まつ宵の更ゆく鐘のうさまては恨もあへぬほとゝきす也

雲外郭公
よこ雲のたな引かたに過ぬなりたゝ一こゑの山ほとゝきす

月前郭公
こよひたに心盡さしほとゝきすなかてやむへき月の影かは

雨後郭公
むら雨の過行あとのほとゝきす雲のいつくに晴間まつらん

夢中郭公
かたらふも我思ひねの夢なれは恨つきせぬほとゝきすかな

山郭公
都より住よけれはやほとゝきす雲の八重たつ峯に鳴らん

岡郭公
五月さへ忍の岡のほとゝきすいつもらすへき初音なるらむ

杜郭公
きく人もなきさの杜の郭公たゝいたつらにねや盡すらん

關郭公
時鳥鳴て過ゆく音羽山せきもる人やはつねきくらむ

野郭公
をのか名も唯なのらめやほとゝきす野へに先聞聲を尋ねん

渡郭公
ほとゝきすさのゝ渡にさのみなと聞人もなきねをはなく覽

里郭公
待たゆむ隙こそなけれほとゝきす芦やの里の忍音のころ

郭公幽
をしかへし猶や恨みむほとゝきすかたらふ聲も定かならねは

郭公稀
ほとゝきす鳴音まとをに成比そ忍ひしよりもうさ増りける

雨中早苗
晴間なき頃としれはや五月雨にぬれても田子の早苗取らん

民戸早苗
山賤のふせやの早苗とり〳〵にいそくもしるき田子の諸聲

早苗多
けふいく日とれと盡ぬはいか計り多かる田子の早苗成らむ

五月五日
あやめ引さ月の色かいつ迄かあらぬねをさへ袖にかけまし

沼菖蒲
引人もなくてやつゐにかくれぬの菖蒲は時をしらて過まし

檐菖蒲
けふはかり菖蒲かりふく故郷もあれまくしらぬ軒のひま哉

愛牡丹
あさなけにそむる心もふかみ草植しかひある花のいろ哉

樗誰家
あふちさく宿はいつくとしらねとも尋やせまし花の主を

故鄕盧橘
誰か又哀むかしと忍ふらん住こしまゝの宿のたちはな

盧橘薫袖
橘のにほひをうつすわか袖に山ほとゝきす宿はからなむ

對橘問昔
いにしへのたか袖のかに殘るらんこしかた語れ軒の橘

山五月雨
五月雨は重る雲の浪こえて晴ぬなかめのするの松やま

袖五月雨
いたつらに宮木朽ゆく五月雨に雲そたなひくみほの袖やま

橋五月雨
五月雨はかよふたゝちも波越て晴ぬ日數をふるの高橋

河五月雨
廣瀬河袖つくはかり淺きせもふちと成ぬる五月雨の頃

瀧五月雨
さみたれはみかさそ高き山姫のさらせる布も數やそふらん

湖五月雨
さみたれは遠き渚にみし松も猶浪こゆるしかのからさき

閑居五月雨
つれ／＼の詠の末も埋もれて谷陰くらき五月雨の頃

古屋五月雨
住人や袖もしほたの宿ならん軒端朽そふさみたれのころ

連日五月雨
五月雨の晴ぬ日數をかそへてもおもへはおしき月のころ哉

五月雨欲晴
かせかはる後さへしはし晴やらて名殘おほかる五月雨の雲（空イ）

夜水雞
槇の戸は明なからのみ明すよにいつくをたゝく水雞成らん

山陰鵜河
大井河山かけくらき夕やみに影さしのほる瀬々のかゝり火

瀬鵜川
早せ河鵜舟のたなはらちはへて波まにたえぬかゝり火の陰

連夜照射
小倉山ともしの松のよをかさねおなしたちとに鹿や待らむ

野夏草
かよひこしのへの夏草をのつから下にや道はまた殘るらむ

徑夏草
夏草のふかき心もまたしらすいかゝ分みむしき嶋のみち

庭夏草
今たにもかるゝ人めを歎けとやしけりはてぬる庭の夏草

瞿麥露
これにしく色しあらめや白露の置まとはせる床夏の花

翫瞿麥
色といへはこきもうすきも撫子の花の籬を哀とそみる

雲間夏月
夏のよは一村過るうき雲のとたえまつまに明る（更イ）月かけ

水邊夏月
みるまゝに涼しかりけり山水をせき入てうつす宿の月影

竹間夏月
風かよふ軒端の竹のかけなから袖にみたるゝ夏のよの月

枕上夏月
またよひのうたゝねなから明にけり枕にうすき夏の夜の月

夏月易明
夏といへはまたきも月のかくるゝか山のあなたの人そ待らし

遠村蚊遣火
里人の月をはめてぬすさひかな遠山もとの夜半のかやり火

垣夕顏
賤の女か垣ほにさける夕顏の花の契りもうきにやはあらぬ

蓮露似珠
さらぬたに玉とあさむく蓮葉の露の光をみかく月かけ

野螢
かすか野や霜に朽にし冬草の又もえ出てゆくほたるかな

澤螢
雨降れはもゆる螢の思ひさへ常よりまさる淀のさは水

橋螢
ゆく螢もえてよわたる光さへをたえの橋のあけほのゝ空

河螢
みたらしや河せにもえて飛螢神さへうけぬみそきすらしも

江螢
難波江の芦の葉分にとふ螢見えみみえすみ影そみたるゝ

螢知夜
消かへりひるや思ひのまさる覽もえてつゝまぬ夜半の螢は

螢過窓
行螢まてことゝはむみな人はいかゝあつめて身を照すそと

螢點叢
草の上の露を尋てゆく螢をのかおもひのなみたにやかる

氷室忘夏
ときは木のかけしけり行氷室山夏なき年のおほくも有哉

夕立風
夕立のなこりの風を吹とめてしはしは涼しならの下かけ

夕立雲
一むらとみえつる雲の程もなくよもにみちゆく夕立の空

山夕立
あらち山嶺たちのほる浮雲のなひくとみれはゆふたちの雨

野夕立
なる神も又音たてゝ高嶋やみほのかち野のゆふたちの空

湊夕立
夕立の雲のたえ／＼見ゆるよりやかてみなとにさはく浦風

山裏蟬
山かけや木のはうこかぬ夏の日に暑さ催すせみのもろ聲

遠村蟬
風わたると山の松の枝なから靡くかたあるせみのもろこゑ

閑中扇
さよふかき閨の扇をならしつゝ秋まつほとのかせそ涼しき

夕納涼
ひさ木生る山下陰の夕すゝみ秋におとろく風の音かな

松下待風
松にふけみ山の里の秋の風いまいく日あらはいとふ計りに

對泉避暑
すゝしさは秋をも何か松かねの岩もる水を手に結ひつゝ

樹陰隣秋
日にそへて秋風近くならのはの木陰に夏や暮始むらん

河風祓
秋風になひくや麻のゆふは河夕浪かけて御祓すらしも

秋二百首

風告秋使
天つ空たかことつてとしらねとも秋とそ告る荻の上かせ

閑中秋來
さはらすや秋のきぬらん八重葎しけれる宿は道みえねとも

愁人迎秋
秋にさへ又そ成ぬるさらてたに身には愁のたえぬ夕を
初秋風
蟬のはのうすき袂はかはらねとすゝしき風に秋や立らむ
初秋雲
けさよりは秋や立らん天のはらきのふにかはる雲の色かな
初秋露
秋きぬと我たにしらぬあかつきの袖より露や置初めけん
初秋泪
古の誰ならはしに置初て秋にはあへぬなみた成らむ
山初秋
いつしかと身にしむ風の音羽山嵐のあなたも秋を知らし
杜初秋
けふしはや秋風吹ぬ大荒木の杜の下草露そみたるゝ
海初秋
さよ姫のひれふる袖にかよふらし松浦の沖の秋の初かせ
殘暑如夏
夏はつる扇も更に置あへす殘る暑は所せきまて
待七夕
思ひ絶て有しより猶たなはたのけふの暮るを待や侘らん
七夕風
さそな又枕のちりも拂ふらんけふ待えたるあまの河かせ
七夕雲
隔とし恨もさこそ晴ぬらん天津星合の空のうき雲
七夕橋
かさゝきのよりはの橋に秋かけて契絶せぬけふのほしあひ
七夕衣
ひこ星の雲の衣の妻戀も今夜はかりや絶間成らん
七夕舟
眞梶とりさそ急くらむ彦星のけふのこよひの妻むかへ船
七夕別
七夕のけさのわかれや在明の月にかこたぬつらさなるらん
田上稻妻
露ふかき秋の山田のかりそめに契りかむすふよひの稻妻
曉荻
夜を殘すね覺を秋の習ひともおきの葉風の音よりそしる
朝荻
いつくにか秋よりさきは宿りけむけさ音たつる荻の上風
夕荻
心さへ亂れもゆくかおき原や末こすかせの秋の夕くれ
夜荻
うちそよく軒はの荻の音までも我身ひとつのよはの秋かせ
獨聞荻
をのつから枕ならふる人もあらはかくうからめや荻の上風
荻催（もイ）泪
いつしかとおつる泪か秋風のうら吹そむるおきの上かせ
荻似人來
荻の葉にたのめぬ風の音するをとはれにけりと驚かれぬる
栽萩
うつし植て後さへ野邊のゆかしきは鹿の音そはぬ庭の秋萩（萩原イ）
萩半綻
咲そはゝ又是ほとの花やみむかた枝秋なる庭の萩原

野外萩
末なひくふるからをのゝ萩の露もとの雫もさそなひくらん
行路萩
秋はきの花すり衣露なからほさてそ歸るみる人のため
古郷萩
鴈かねの鳴つるなへにふる郷のもとあらの萩の露そ數そふ
萩移袖
紫のねすりの衣それならて袖にそ萩の色はうつれる
萩散風
風にちる庭の眞はきの花の枝におはなか袖の匂ふかひなさ
山女郎花
さはりある花のなたてそ女郎花いかてたか野の山に咲らん
野女郎花
なひく風おほかるのへの女郎花あなたのみかた心よはさは
蘭薫枕
哀にそ又かほりぬるふちはかま見えけむ夢をおもふ枕に
荒籬蘭
ぬししらぬ色はのらの藤袴ほころひぬとも誰かきてみん
薄未出穗
立よりて我袖かさん秋きてもまたほに出ぬしのゝをすゝき
風前薄
白妙の袖のしら露置あへす野へのお花に秋かせそふく
行路薄
秋の野のおはなをしなみ吹風に又袖かへるをちのさとひと
古砌薄
一もとゝ見し古郷の花すゝき庭もせにのみしけるあきかな

薄似袖
きぬ〳〵に誰なきぬらす袖ならんお花の露に有明のかけ
苅萱亂風
夕くれの心みたるゝ秋かせにさこそはたへね庭のかるかや
槿不待夕
とくるかとみるほともなく朝かほの夕影またぬ花のした紐
草花露
色までもあたにうつりて秋の野の花の千種に露そ染ゆく
淺茅露
いつよりか淺ちか原と成ぬらんとはれし庭にあまる白露
蓬生露
露分し人はかれゆくよもきふのもとの心にかよふ秋かせ
苔徑露
しきみつむ山路の苔の秋の露世のうきよりも袖はぬれけり
草庵露
うき世をはいとひ果にし草の庵に猶袖ぬらす秋の露かな
袖上露
夕暮の草はやをのか宿ならぬわか袖ゆるせ秋のしら露
枕邊露
しきたへの枕に殘る露はあれと夢をとゝめぬ秋の風かな
關路秋風
こえぬより思ふも悲し白河の關のあなたの秋の初かせ
幽居秋風
通ひこし宿の道芝露ふかみ跡なき庭に殘る秋かせ
閨中秋風
時しもあれさるは夜寒の秋風に獨ねつらき閨のさむしろ

秋風滿野
秋風の至らぬ方やなかりけんなへて殘らぬ野邊のしら露

秋風入簾
玉すたれ隙もとめてや入つらむね覺かなしきとこの朝風

尋虫聲
いつれをか分て尋ん露ふかき野もせの秋の松むしのこゑ

虫聲滋
なく虫のなみたにからは置露も猶しけからしをのゝしの原

雨後虫
夜の雨のしはし降やむ垣ほより又音つるゝ松むしのこゑ

深更虫
あき風もふくれはいとゝ鳴虫の聲になりゆくよもきふの庭（宿イ）

旅店虫
うき旅の哀はしらし大かたの秋とはかりに虫やなくらん

叢底虫
露ふかき草のしけみをたよりにて聲もむらある松虫のこゑ

床下虫
あれまさる軒の板間に月もりてよとこね寒し虫の聲々

枕邊虫
哀とて物おもふ夜半の手枕におなし音をなくきり〳〵す哉

虫思
きり〳〵す思ひやなれもおなし野のお花かもとの草に鳴覽

虫怨
かれ增る恨を君にかこつらし眞葛か原の松むしのこゑ

深山秋夕
世をうしと何思ひけんみ山へやましはのかせのあきの夕暮

海邊秋夕
さひしさのいつくはあれと鹽かまの浦のひかたの秋の夕暮

羇中秋夕
ふる鄕のおも影そはぬ昔たに夕は秋のなかめせし身を

秋夕傷心
わきてなと身にしむはかり物思ふ夕にかきる秋ならなくに

秋夕催涙
我涙かならす袖にかゝれとはちきりかをきし秋の夕暮

秋田風
秋風のたえすはらへと小山田の稻葉の雲そ行方もなき

秋田露
よとゝもに庵もる露に隙もなきとは門のをしね色かはる頃

草庵秋雨
露たにもたまらぬ草の庵なれは袖もほしあへす秋のむら雨

秋雨打窓
さよ深きね覺の窓に音たてゝ泪ふりそふ秋のむらさめ

山鹿
暮かゝる山の尾上の鹿の音は月影なからすみのほりつゝ

谷鹿
光なき谷陰のみに鳴鹿は月見て明すよはもあらしな

野鹿
夜を寒み妻戀すらしから衣すそのゝをしか聲うらむ也

田鹿
もる人もいとふ心よいかならん田面の秋のさをしかの聲

磯鹿
さても猶見るめはからししかの浦や磯間の鹿の妻戀のこゑ

寢覺鹿
わきてうき時をはなれもしれは社ね覺に鹿の鳴まさるらめ
鹿聲遠
月殘るとをつ尾上の鹿のねをほのかにをくる夜半の秋かせ
鹿聲近
淋しさもねにはたてしと忍ふるを唯こゝにしも鹿そ鳴なる
鹿聲兩方
秋山のこなたかなたに鹿の音をいつれ哀と妻は聞らん
鹿聲何方
秋風にかたも定めすさをしかの鳴はいつくの山路成らむ
鴈初來
けふしはや鳴てきぬ也いつくにも同し夜寒の衣かりかね
風前鴈
かねてよりふかはと待し秋風にさそはれわたる初鴈のこゑ
雲端鴈
此暮とたかたのめやることのはそ雲のはたての鴈の玉章
霧間鴈
さらぬたに思ひつきせぬ夕くれの霧とひ分て鴈は來に鳬
雨中鴈
常世出て都の空になく鴈の涙にゝたる夕くれのあめ
河上鴈
いつみ河かは風寒く更る夜に衣かりかね聲もおします
葦邊鴈
芦の葉にむすほゝれたる玉章やみなとをわたる鴈の一つら
南北鴈
こしの海の波にしほれてこし鴈の都の月に今そなくなる
朝暮鴈
夕暮にいまた旅なる鴈かねは今朝き鳴つるつらやはなれし
遠近鴈
一つらは雲のはたてに鳴過て又聲ちかき秋の初かり
關駒迎
關こえてけふや都に出ぬらんうらやましきは望月の駒
八月十五夜
名にしあふ秋は今夜と詠むれは我世もいまそ中空の月
三日月
今よりの心つくしよいかならん木のまほのめく三日月の影
不知夜月
みちぬれはかくる習ひの有世とも空にしらるゝ十六夜の月
廿日月
更るまて待てそみまし秋もはや今ははつかの山のはの月
在明月
長月も有明に影ふけぬめりみる人のみや老と成ける
未出月
おしむらん山のあなたの里人も我ためつらき夜半の月かな
初昇月
吉野山雲なき峯を出るより光ことなる秋の夜の月
停午月
夜半月はや半天に成ぬらし軒端の松の影そすくなき
漸傾月
さよ深き枕の上に影みちて窓より西に月そ成ゆく
欲入月
今は世にあきはつる身のしるへせよはや入方の山の端の月

山月
秋風は夕ゐる雲をまきもくの檜原の山に月そいさよふ
嶺月
三よし野はみね高からしよそよりも先出そむる月をみる哉
谷月
まかねふくきひの中山雲晴て細たに河にすめる月影
杜月
しけりあふ杜は三笠の名にふりてよそに影さす秋のよの月
關月
もるかひも波路の月のきよみかた關にとまらぬ秋のたひ人
野月
ふか草やさなから露のかすみえて野さ成増る秋のよの月
原月
いとふへきふしのけふりは風に消て月影きよし浮嶋かはら
橋月
松陰も夜わたる月のくまならて浪間にしつむ天のはし立
池月
名にしあふ池の玉もにすむ月も秋やます田の光なるらん
沼月
月にたにすむとしられぬかくれぬの水の心は誰かくみけん
澤月
さやけさや常よりことにまさる覽月も名にあふよとの澤水
瀧月
夜とゝもに月の光もきよ瀧や亂ておつる瀬々のしら糸
河月
初せ河たきつ岩浪音ふけて月もゐてこす夜はの秋かせ
湊月
影うつす袖の湊のよはの月たか涙よりやとりなれけん
湖月
さゝ波やせゝふく風に霧はれて月すみわたるしかのから崎
浦月
須磨のあまのもしほの煙立のほり月もまとをの袖の秋風
江月
こきかへる棚なし小舟よもすから同し江にのみ月やみる覽
礒月
影やとす月さへ松をこゆるきの礒への波に浦風そふく
渚月
みる人もなきさなれはやすむ月の光もわきて淋しかるらん
崎月
玉もかる蜑の袖にややとるらんいちこか崎の秋のよの月
嶋月
月かすむあまのとまやはあれにけりをしまか崎の秋の浦風
瀉月
きさかたやあまのと山のあれしよりたくもの煙月も曇らす
泊月
梶まくら我もうきねの波の上にこゝそとまりと月や澄らん
渡月
ゆらのとを渡る船人よとゝもにおきつ波間の月や見るらむ
里月
詠めてもなくさみぬへき身のうさを思ふもつらし更科の月
禁中月
契りこし末たかはすは立かへりまたやみはしの秋のよの月

社頭月
やはらくる光なれはや神垣のよるへの水に月はすむらむ
古寺月
めくりあはむその曉のしるへせよ高野の山の有明の月
故鄕月
忍はるゝ秋やむかしのかたみさへ草にやつるゝ軒の月かけ
水鄕月
河風も夜寒の床にふし佗て月に馴ゆくまきの嶋人
山家月
山賤の眞柴のけふり立のほり月もすみえぬ世とや知らん
田家月
いねかてに小田もる賤は夜をかさぬ心ならても月やみる覽
閑閨月
ひとりねの涙の袖をやとりにてよ寒のねやに月そあらそふ
荒庭月
庭の面に詠し秋は昔にて淺茅かはらにあり明の月
舟中月
難波かた芦間こき過て行舟はさはるくまなき月やみるらん
依月客來
とはるゝも月見かてらの便とはやみのよころや恨はてまし
每秋馴月
人しれす物思ふ秋をあまたへて泪になるゝ袖の上の月
愁人對月
なくさむる雲ゐの月の影なくは秋の心にいかてたへまし
老後恨月
なからへて後の秋とも賴まねは老てめかれぬ夜半の月かな

月旅人友
はるかなる山路を月のをくらすはひとりやこえん足柄の關
野分風
吹しほる風に千種のおとろへて野分の後の秋そすくなき
野鶉
里はあれて野への淺ちふ露深みたかうき秋を鶉鳴らん
江鶉
吹たひにをのかふしとも浪こえて入江のかたにたつ鶉かな
寢覺鴫
物思へとするわさなれや曉のね覺催すしきの羽かき
澤鴫
夕くれを何かいひけん鴫のたつ澤邊の月の明かたのそら
驛路霧
あき霧に音はかくれぬ鈴鹿山こえゆく人や道まとふらん
梯上霧
くれかゝる峯のかけはしとたえして霧にほのめく秋の山端
霧底筏
霧のうちにくたす筏のみなれ竿なれてまよはぬ浪の通路
霧隔帆
みすもあらす見もせぬ舟のほの〳〵と霧にまきるゝ波の遠方
霧隱袂
花すゝき草の袂もしほるらしわけて入野の秋の夕霧
秋夜長
秋のよのさすか明ぬとみえつるも闇もる月の光成けり
深山擣衣
しら雲のかゝるみ山のおくにたにすめはそ人のころも打覽

海邊擣衣
もしほくむ須磨のうら人夜や寒き浪かけ衣うちもたゆます
野亭擣衣
衣うつ音にてしりぬ野邊遠み又住人の庵ありとは
遠村擣衣
秋風の夜寒の衣うつたへにねぬほとしるきをちの里人
待人擣衣
こぬ人をまつよ更行なくさめに心ならてもうつころもかな
對月擣衣
よそ人もねて明せとや秋のよの月には人の衣うつらん
連夜擣衣
三日月の影みしよゝり有明の空になるまてうつころもかな
寢覺擣衣
さらぬたに秋のね覺の長きよを思ひしらすもうつ衣かな
擣衣妨夢
よひ〳〵の夢路にたれか關すへて此宿ちかく衣うつらん
擣衣處々
何處にも夜寒變らぬ秋そとはよものきぬたの音にてそしる
野草欲枯
けふよりやかれはしむ覽淺茅生のをのゝしの原霜むすふ也
九月九日
千世までも光さしそへ九重に昔をうつすきくのさかつき
禁庭菊
ちかふへき君のかさしに手折らん九重にさく[なイ]庭のしら菊
籬下菊
昔おもふまかきのきくも白妙の袖ふりはへて人のとへかし
水邊菊
しらきくの色もにほひもうつるらし花のかけそふ谷河の水
岡葛
何ゆへに秋はうらみのまさるそとはゝや露の岡のくす原
垣葛
たかあきにあらぬ物ゆへ山賤の垣ほのまくすなに恨むらん
行路葛
うつの山時雨ぬ袖の軒までもうつれはかはる蔦の下道
林葉漸變
見れはやや色とる木々に風立て時雨をいそく秋の山のは
山紅葉
うすくこき紅葉に秋の手向山神の廬もさそ染るらん
嶺紅葉
きのふみし高ねの梢しくる也いまや千しほの秋のもみちは
杜紅葉
秋ふかき常盤の杜は名のみして時雨にたへぬ木々の紅葉葉
河紅葉
立田河かたへのもみち影みえて［　］
里紅葉
はつ時雨ふるさと寒きさほ山の柞のこするゑ色かはるらし
松間紅葉
山路には時雨ふるらし高砂の松もまはらに紅葉しにけり
紅葉一樹
色かはる庭の一木の初もみちよその梢にぬこそうつらね
紅葉深淺
わきてやはおなし山路もしくるらんいたり至らぬ秋の色哉

紅葉添露
をくら山時雨ぬ先のもみち葉は秋とはかりに露や染らむ
紅葉增雨
照まさるもみちはあれと足引の山かきくもり時雨ふるなり
紅葉待霜
たつた山またふかゝらぬもみち葉の殘の色は霜や待らん
紅葉滿山
山はゝや染ぬ梢もなき物をあかすは何に又時雨るらん
紅葉映水
影うつす紅葉やいろにいつみ河浪をは染ぬしくれなれとも
紅葉如錦
露霜をたてぬきにして織かくるしつはた山そから錦なる
秋將暮
うつりゆく日數な空にかそへても我身にきほふ秋の暮かな
暮秋風
花しほれ木葉時雨とふるさとは風こそ秋のわかれ成けり
暮秋雲
木葉ちる嶺のよこ雲立まよひこなたかなたに秋そ別るゝ
暮秋露
ことはりや秋にはあらぬ別たに露やはなかぬきぬ〳〵の袖
暮秋霜
長月や末のゝ霜の朝ほらけいまはた秋のおも影はなし
暮秋雨
いとゝしくわか袖ぬらす時雨かな秋の名殘を思ふね覺に
暮秋霧
よしこよひ霧立わたりあけすとも鐘より後に秋は殘らし

惜九月盡
今年まてよもなからへし行秋にかふる習ひの命なりせは
九月盡夕
けふ暮ぬいつらは秋の長月よ人たのめなる名のみとゝめて
九月盡夜
くれはてし春に心はつくしてき今宵の秋よいとゝおしまむ

冬百首

山館冬至
散つもる木葉も庭に嵐ふく宿のかよひち冬やきぬらん
初冬木枯
あらし山きのふの秋の色なから時雨てわたる峯のこからし
薄暮時雨
一むらの雲のたよりに音つれて嵐にきほふ夕時雨かな
深夜時雨
さよふかき閨の板間をもる時雨さらてはぬれぬ袖の上かは
幽居時雨
音たてすとふしもつらきしくれかなこの山陰の心ほそさを
旅宿時雨
都にて聞し時雨のまゝならはたたひねの袖もかくはしほれし
屋上時雨
秋まてはたえ〳〵聞し枝の屋まになくしくるゝ神無月哉
枕邊時雨
もるほとはしくれぬ夜半の手枕にあへす涙の落にける哉
舟中時雨
晴くもる時雨をいたみいくたひかとまふきおほふ沖つ舟人

時雨廻山
今朝のまはまた里なれぬ時雨かな嵐のつてに山めくりして
時雨晴陰
夕附日さすかとみつる外山より又しくれ行村雲のそら
時雨易過
ふきまよふ風にまきれて過ぬ也時雨をゝくる峯のうき雲
曉落葉
有明の月はつれなき高ねより風に殘らす散木葉哉
朝落葉
朝またきおき出みれは足引の山もあらはにちる木のはかな
夕落葉
たに陰や木葉吹まく風の音も我身獨の宿の夕暮
夜落葉
槇の屋にもらてもぬるゝ袂かなこの葉時雨るよはのね覺に
靜聞落葉
木葉ちる音を時雨にまかひしやまたふかゝらぬね覺なる覽
落葉隨風
露時雨染し木のはをいかにして風の心にまかせ初けん
落葉混雨
ねやにもる時雨とのみそ思ひつる木葉の音におつる涙を
落葉窓深
ひとりねの覺の枕夢絶て夜ふかき窓に散木葉哉
落葉滿庭
今はまた庭に嵐の音すなり殘る木葉の枝になけれは
落葉掩水
行水は音はかりしてふくかせに木葉なかるゝ冬の山河

外山椎柴
はし鷹のと山吹こす木枯に堪てつれなき嶺のしゐ柴
岡邊寒松
岡のへやそれともみえぬ木からしに殘れる松の色そ寒けき
野徑霜
たひ衣すそのゝ草はかれはてゝ露分し袖に結ふ霜哉
板橋霜
朝またき過ける駒の跡はかり霜に殘れる枝の板はし
冬田霜
霜うつむ賤かあら田のあせつたひ秋こし道は跡も殘らす
谷殘菊
谷ふかみ霜のおよはぬほとはかりまたうつろはぬ白菊の花
庭殘菊
うつろはぬ心の色を世中の人にをしへよ庭のしら菊
枯野篠
初霜のふるのゝ末の草かれにひとりつれなき篠の一むら
原寒草
冬かれの野原の薄うちなひき霜にしほるゝ袖の寒けさ
杜寒草
大あらきの杜の梢の冬かれに下草かけてむすふ霜哉
庭寒草
一むらの垣ねの草のうすみとり枯殘りしも色のさひしさ
江寒草
みなと江や夕霜はらふしほ風のよはれはこほる芦のむら立
潟寒草
難波かたうら吹風は聲やみて霜にそさはく芦の一村

岩間氷
ゆきなやむ水のよどみを便にて岩間にこほる冬の山川

芦間氷
冬枯の芦まの浪や氷るらん浦こく舟のまたさはり行

掛樋氷
山里の筧の水もこほりゐて音つれぬさへ心ほそしや

水氷無聲
やま風のさゆるにつけて谷河の岩もる水は音そ絶行

氷閉瀧水
今はたゝ氷そとつる山姫のさらすやいつこ布引のたき

寒夜月
降つもる庭のしら雪ふかき夜は空なる月もさえ増りつゝ

寒山月
更ぬれと猶山のはを出やらて松の木のまにこほる月影

寒床月
白たへのかた敷衣霜さえてねぬよの床に月そ寒行

寒夜難曙
さゆるよの夢の通路行かへりいくたひしてもあけぬ空かな

霜夜殘鴈
霜さゆるかり田の面に月落て聲すみのほる鴈の一つら

池水鳥
夜を寒み玉もの床や氷るらんみきはにうつる池のをし鳥

江水鳥
なれのみや霜にもかれて殘る覽しけき入江のあしかもの聲

曙千鳥
明ほのや河せの千鳥鳴別れたかゝへるさの涙そふらむ

夕千鳥
おきつかせあら磯さきの夕千鳥なみの立ゐに聲らむなり

河千鳥
みよし野や清き河原の月影に聲すみわたるさよ千鳥哉

潟千鳥
風さむみよの更行はなるみかたしほ干の千鳥聲もおします

浦千鳥
しほなれて世々ふるわかの浦千鳥昔のあとをいかて殘さむ

湖千鳥
にほの海やみるめなきさのさよ千鳥みぬ妻戀に恨てそなく

濱千鳥
吹上や鹽風寒〱更る夜に聲さへなひくむら千鳥かな

夜網代
迷ふへき暗をもしらすあしろ守さのみやひをのよるを待覽

河網代
浮て世をふるみもつらし吉野河網代のひをのよるせしらはや

橋邊霰
橋姫のかたしく袖に玉ちりて霰みたるゝ宇治の河かせ

篠上霰
霰ふるを篠か原のかり枕さらぬよはたにねられやはする

霰驚夢
さえわひてみるとしもなき夜の夢をいやはかなにも降霰哉

豊明節會
神まつるとよのあかりのをみ衣あはぬ恨を身にやのこさん

初雪淺
あといとふ程やは積るいとゝなをこぬ人つらし今朝の初雪

庭雪深
踏わけてとはるはかりの雪ならは猶しもいかに人の待れむ
連日雪
つきてふる日數やいくへしら雪のつもる笆を山となかめて
曉山雪
山はみなかゝみをかけて在明の月にみかける峯のしら雪
暮村雪
をしなへて埋れはつる雪の中に里とひ侘るをちの旅人
夜窓雪
あつめこし窓のしら雪いたつらに身の光なき年そ積れる
關屋雪
降雪はあるゝ關屋の隙もりて埋もれ果ぬ板ひさし哉
野亭雪
うちわたす遠かた人の跡たにもたえていく日の野への白雪
驛路雪
鈴の音は埋もれはてすふる雪による山こえていそく旅人
磯邊雪
梓弓いそへの松をこす浪の立もかへらてつもる雪かな
孤嶋雪
けさそ猶さやかにみゆる淡路嶋こほらぬ波に積るしら雪
花洛雪
花の色もさなからあらて散まかふ都の雪は風もにほはす
禁中雪
とのもりの頭の雪を打はらひ朝きよめする袖の寒けさ
社頭雪
をしほ山雪のしらゆふかけてけりあけの玉かき色みえぬ迄
古寺雪
小初せやおのへの寺は埋もれて雪よりひゝく鐘のをと哉
故郷雪
むかしたに跡たえはてしふる郷にけふはいくへの庭の白雪
閑居雪
み山への賤かつま木の道たにも猶跡たえてつもる雪かな
旅宿雪
ふるさとにかよふ夢路の跡たえて草のまくらにつもる白雪
名所雪
芦垣の吉野の雪の冬こもりさくや此花春もまちかし
松頂雪
夢路さへ今や絶なむみ山への梢におもる松のしらゆき
竹間雪
うれをおもみ絶すや雪の積るらん軒はの竹のよはの下折
舟中雪
こき出る沖つ舟人けふは又空にのみふる雪やみるらん
馬上雪
駒とめて打出のはまの朝ほらけはらひもあへす袖のしら雪
雪朝望
けさは又いつくかいつくしら雪の高くつもるや山路なる覽
雪後雨
なかめつゝうき身わすれてふる雪の雨に成ゆく夕暮の空
連日鷹狩
なら柴の嵐を寒みけふいく日おなしとたちに狩暮すらん
野外鷹狩
みかりはや交野のきしの草かくれそれ共みえす雪は降つゝ

狩場欲暮
日の影のかたふくまてを限りにて鳥立尋るうたの御かりは
里炭竈
ますらをか炭やく頃は打はへてけふりたえせぬをのゝ山里
爐邊閑談
こしかたを語り合てさよ中に更るもしらぬうつみ火のもと
寒閨衾
さゆる夜はねやの衾を重ねてもあらぬ事のみかつたとりつゝ
杜神樂
神のます杜のしめ繩うちはへて此ころたえぬ朝倉のこゑ
佛名至曉
有明のかたふくまてにとなへても佛の御名や猶殘るらん
年内早梅
またきより時そとにほふ梅の花何をか春のしるしとは見む
歳欲暮
はかなくて過し月日のつもりきて今年も又や暮るとすらん
歳暮如流
なかれ行年の光もあすよりは春くるかたにさそいそくらん
老人惜年
けふ暮ぬはかなやされは老か世は今幾年もあらしと思ふに
學者惜年
移り行かけたにおしとおもふ身の學ふる道に年のくれぬる
家々除夜
宿ことに今宵はさこそおしむらめしかもとまらて年の行覽

戀二百首

初尋縁戀
いりそめてまよふ山路のしるへせよかよひ馴にし峯の松風
未出言戀
今はまたつらさもしらすいひそめて後にや人の心をも見ん
難言出戀
山高みおよはぬ枝の秋の色に袖のしくれももらしかねつゝ
欲言出戀
色に出て今はかくとや知せましつゝみ果へき涙ならねは
初言出戀
けふは又つらさを添て歎く哉ねたくそ人にもらしそめぬる（つイ）
返書戀
いかにせむをのか物からかたみともおもはぬ中に返す玉章
忍通書戀
忍ひ侘かきたにはてぬ言のはを淺きになして人や見るらん
知身忍戀
人なみに思ふ身ならはさのみかく涙の河はせかすもあらまし
爲人忍戀
數ならぬ身の爲おしきうき名かはつゝむ涙も哀れとや見ぬ
相互忍戀
かひなしや忍はかりをゝのつからおなし心とたのむ契りは
忍親昵戀
武藏野の草葉なりともしらすなよかゝる忍ふの亂れ有とは
依忍增戀
せけはこそ淵と成らめ泪河こゝろのまゝにもらしてやみむ
依忍難逢戀
なれはよも人に忍はし何とたゝとたえかちなるさゝかにの絲

忍切戀
誰かさは哀とたにもきくの露もらさぬさきにあへす消なは

忍久戀
いひ出て後うからはのやすらひに思ひみたれて年そへにける

忍涙戀
朽殘る袖よりほかのしからみもなく／＼つゝむ我なみた哉

遠聞戀
音にのみきくのはま風はる／＼とかよふ心も人はしらしな

近見戀
しほかまの浦のみるめもかひそなき笆の嶋のつらき隔に

尋失戀
これをさへ人のうきにやなし果ぬ契し物を鵙の草くき

不逢戀
わかみまつ逢みぬさきに戀しなは契りを後の世にも頼まし

馴不逢戀
朝夕につらき心をみるもうしよそなからたに人を戀はや

祈不逢戀
今は又いかゝいのらんわか戀はいつれの神もみゝなれぬ覽

依戀祈身
行末の身をさへかけて祈かなありへはと思ふ頼はかりに

契春戀
あたにちる花に先立身とならは契し春もかひやなからん

契夏戀
何そ此ねぬに明ゆく短夜をわきてたのむる人のこゝろは

契秋戀
時しもあれ木葉ふり行秋かけていひし計の人は頼まし

契冬戀
秋はつる契しらるゝ身のうさにしくるゝ冬をかけてまてとや

契明夜戀
僞にあらさらめともおなしよにいきはやあすの暮も頼まん

契行末戀
忘れしの行末遠く契りてもあすしらぬよのうしろめたさよ

契來世戀
かゝりける中としらすは後の世を契をきてもかひやなか覽

人傳契戀
人傳の言のはならぬくれもかな契りかはらはかこつ計りに

老後契戀
頼ましな長かるましき老か身のゆくすゑかけて契をくとも

幼年契戀
淺からぬ程をは知やつゝ井筒ゐつゝにかけし中のちきりは

憑誓言戀
すゑまてと猶こそたのめゆふ襷かけし契は世々にくちめや

頼僞戀
僞にこりすそなをもたのまるゝたかならはしの夕ならねと

不憑戀
なをさりに契る夕のいつはりもならはぬほとや猶たのみ劒

疑眞僞戀
一すちにたのまれぬへき言のはようき我からに疑はれぬる

相互疑戀
いつはりに契なれたる心からわかことの葉を人も頼まし

薄暮待戀
さりともと契をたのむ夕くれの心のうらにまさしから南

深夜待戀

更ぬとも思ひは絶し山のはに待れてのみそ月もいてける

連夜待戀

暫しこそさはるにかこつ中ならめさのみはよもと猶待れつゝ

待空戀

別をや僞なくはなけかましまつよなからのあかつきのかれ

臨期變約戀

さりともとおもふ夕の空たのめ契らぬよりは苦しかりけり

從門歸戀

さしもこそ契りし宵の松の門立かへるへきかたもおほえす

隔我聞他戀

すまの蜑のもしほの煙一かたになひかぬさきを何歎くらん

來不留戀

我袖にやとりははてす三日月のほのめき渡る影もうらめし

初逢戀

涙のみをさへし袖に今は又あふ嬉しさをつゝみかへぬる

不通夜戀

鳥かねをまつほともなき別にそ夜かれぬ方の有もしらるゝ

逢不實戀

さても猶ゆるさぬ關のうき中はあふ坂山の名さへかひなし

邂逅逢戀

たまさかにわか待えたる夕暮をつらきよかれと誰かこつ覽

夜深逢戀

更ぬとてまたすはいかてとはぬよの心盡しも人にしられむ

短夜逢戀

うかるへき世のならはしそ夜をかさね逢みる中の又と絶なは

旅宿逢戀

又いつとしらぬかりねの草枕かはすにつけて露そこほるゝ

夢中逢戀

心たにかよふと思はゝ逢とみる夢路もいかに嬉しからまし

逢後増戀

歸るさは雨とふりてや泪川わたりしせより水増るらむ

兼厭曉戀

きぬ〳〵のつらさを兼て思はすは逢夜計りも袖やほさまし

欲別戀

しはしとて袖引とむるきぬ〳〵の哀もしらぬ鳥の聲かな

曉別戀

せめてその俤をたにとゝめをけつらきわかれの有明の月

遠別戀

めくりあはむ程は雲ゐの月たにも馴ぬる袖に秋なわすれそ

後朝戀

今朝は猶袖そぬれそふあか月のおきうかりつる露の名殘に

歸無書戀

別れつるけさの袂に引かへていそかぬもうき人のたまつさ

移香増戀

いとゝしく忘れぬつまと成にけりかたみもつらし袖の移香

逢不逢戀

引とめしおも影もなを忘れねは袖こそ人のかたみ成けれ

隔一夜戀

此まゝに遠さかりなはいかゝせむ一夜はかりと思ふ隔ても

限一夜戀

忘れねははしめもしらす果もなき一よの夢に殘るおもかけ

欲顯戀
今はわか涙せきあへすもる袖のうき名流さぬしからみもかな
名立戀
いかにせむちりならぬ名の立田山つもる思ひも雲かくる迄
無名立戀
里のあまの心からなる袖ならてわか濡きぬもほす方そなき
依泪顯戀
よひ／＼に宿かる月やもらしけむ人は知へき涙ならぬを
顯後悔戀
世にもらは後うかるへき我名ともしらてや人に逢見そめ劍
片　思
かひなしや人もおしまぬ同し世にあれはと頼む命はかりは
相　思
ともにこそ此世つきなめをくれては誰も有へん命ならねは
等思兩人
二つなき我身そつらきいつくにも通ふ心はよかれやはする
隱名戀
淺からぬ心の色をみてのちや我なりけりと人にしらせむ
惜人名戀
なのりそのかるてふかたに船よせよ我身の浦は浪高くとも
忘住所戀
うき人の宿をあやなくたとる哉かよひし道にしをりせましを
不知在所戀
枯はてゝ跡しもみえぬ草の原露のやとりよいつく成らむ
隔遠路戀
よな／＼は雲もいくへの峯こえてかよふ心のさもそ苦しき
隔河戀
さても猶わたらぬ中のよしの河よしやいもせの山もかひなし
初疎後思戀
うき中はうす花衣いま更にそむるこゝろの色もたのます
戀爲後世妨
戀侘て消ん煙の後迄もくるしかるへき身の思ひかな
漸稀戀
身の秋も今は心のつくは山隙みえそむる峯の木枯
稀驚戀
おもひ絶てあらまし物を折々の言のはさへにうき契かな
被厭戀
つれもなき命と今はいとふとも逢にしかへは又やおしまむ
厭身戀
今は唯つらきも人はつらからて厭はるゝ身を厭ふはかりか
被厭賤戀
身をしれは人を恨みん方そなき思ふもくるし賤のをた卷
被忘戀
さすかよも忘果しとなをさりに頼みけるさへ今ははかなき
恨身戀
立歸り身をこそかこてかく計り我うからすは人もうからし
互恨戀
かれぬへき契しられてまくす原たか秋風も吹はよはらし
恨久戀
つらしさは早いひふりぬいさゝらは言のはかへて人を恨みむ
人傳恨戀
歎き弱る身のありさまもみるはかり人傳ならて恨てしかな

恨後悔戀
枯はてはいかにせんとかあまのすむ里のしるへを尋ね初劒

不絶戀
うくつらき人の心の玉たすきかゝるしも社くるしかりけれ

欲絶戀
うき人の心の秋の霜ふりてかれ〳〵になる宿の道しは

絶不忘戀
あひ思はて枯にし軒の忘草身にはとるへき宿やなからん

絶後驚戀
枯はてゝなかはゝ霜の萩の葉に又をとたつる風はうらめし

絶後悔戀
何とたゝくひの八千度歎くらむ心とたえし中川のみつ

絶經年戀
かけてたに思ひやよりし白糸の絶ぬる中に年をへんとは

絶後形見戀
ひたすらに絶なはたえねうき中の忘れかたみに殘るおもかけ

寄天戀
わきて猶哀やそはん大空もおなしなかめの夕とおもはゝ

寄日戀
何とたゝ暮る日影のまたる覽とはれむと思ふ我ならなくに

寄月戀
人そうきうはの空行月たにもめくり逢よはなき習かは

寄星戀
いつよりか我身の秋と成ぬらんよそに聞し星合の空

寄風戀
うかりける其よの夢の面影よしなとの風にたくへてしかな

寄雲戀
知やいかに此夕くれの空の雲むねのけふりのゆくゑ成とは

寄煙戀
たてそむる我下もえの煙たにあらぬかたにはなひかすも哉

寄霞戀
戀しなはかすまむかたの空をたに消しけふりの行衞とはみよ

寄雨戀
いとゝしく袖もほしあへすたまさかに我待くれの村雨の空

寄露戀
色かはることの葉ことに秋みえて人の契りや淺茅生の露

寄霜戀
今ははや人の心の秋の霜ふりはつる身そ置ところなき

寄雪戀
おなし世に猶ふる雪の消やらてつもる思ひも知人やなき

寄曉戀
あひはこそ別もしけれ曉をつらき時とはいかゝかこたむ

寄朝戀
わすれめや別の袖にみたれつるねくたれかみのけさの面影

寄夕戀
わきてしも袖ぬらせとや契置し夕暮はかり形見かほなる

寄夜戀
夜をかさね待もよはらす僞のつらさにこりぬこゝろ長さを

寄春戀
春のよの夢にまさらぬ逢事をたゝ現とて猶しのふらむ

寄夏戀
をしか行夏野の薄しのひ侘ほにたにこひぬころのくるしさ

寄秋戀
ことの葉のうつろふころそ秋になり人の心の色もみえける
寄冬戀
さえわひて獨ぬる夜の袖の霜むすはぬ夢に殘るおも影
寄山戀
たゝ山の岩もとすけのねはみねとなかくそ人に亂そめにし
寄峯戀
かつらきや峯の白雲よそなからほのみし人にかけて戀つゝ
寄岡戀
岩代の岡の松かえいつまての心もとけぬ人にこひまし
寄杜戀
たのみこしはてよ歎の杜の露かゝれとしもは契らさりけり
寄原戀
いつかわか隔つる中の關こえてあはつの原の露はらはまし
寄野戀
いかにしていはたのをのゝ花薄ほに出すへくもあらぬ思ひを
寄關戀
逢坂は人たのめなる關なれは我うき中にかよひちもなし
寄橋戀
その儘にわたしもはてぬ我中のためしもつらきくめの岩橋
寄池戀
いひ出ぬ思ひなれはや池水のそこの心をしる人もなし
寄瀧戀
年をふる涙は袖に落瀧つたきの水上いつかあせなむ
寄河戀
たえて又渡るとなしに年もへぬわか中河の淺瀨しらなみ

寄湊戀
芦間行みなとの小船さしもなとさはりかちなる中の契りに
寄海戀
鹽みたぬこれや志賀津のあまな覽みるめも波に袖は濡つゝ
寄浦戀
人しれす思ふもくるしますか鏡みぬめの浦のあまのたくなは
寄潟戀
哀れ又よそになるみとかこちても袖にひかたの有世也せは
寄崎戀
今は又人のこゝろもいかゝ崎いかゝなり行しほのみちひに
寄嶋戀
立そめしむねの煙のくやしさに浦嶋か子の心をそしる
寄江戀
難波かた入江になひく亂れ芦のしけき下根は知人もなし
寄水戀
いかにせん水ならぬ身はけちしらてたえす焦るゝ下の思ひを
寄石戀
ことゝひしみつのしはも其まゝにしつみ果ぬる身を歎つゝ
寄初草戀
野はいまた雪間もなきを初草のはつかにたにもいつか逢みむ
寄月草戀
月草の花さへつらしうつり行人のこゝろの色に似たれは
寄思草戀
見せはやな名にあふ草もしけり行(のイ)お花かもとの露の亂れを
寄薦戀
かりそめにあひみしま江のまこも草かくやは人に亂れ果へき

寄菅戀
うは玉の黒かみ山のやますけのやみにみたるゝ心とをしれ
寄葛戀
數ならぬ恨は末もとをらねはありしにかへるくすの秋かせ
寄芦戀
置露の玉江の芦のねたくこそ程なきにしも亂そめしか
寄蓬戀
をのつからもとこし駒にまかせすは誰かはらはん蓬生の露
寄淺茅戀
秋深きあさちか末の露をみようつろふころはかく社有けれ
寄海松戀
きかさりきいせをの蜑の袖たにもからぬ海松に濡るゝ物とは
寄竹戀
呉竹の一夜はかりの契りたに□うきふしを殘さすもかな
寄松戀
をのつから哀をかけよおきつ浪松の下根のあらはれすとも
寄杉戀
其まゝに又もあひみぬはつせ河さやは契し二もとのすき
寄檜戀
數ならぬみわの檜原のしかはかりつれなき色に何しくる覽
寄桐戀
一葉おつる軒はの桐の音よりもうき身に秋そ先しられける
寄柏戀
さてのみやふるからをのゝもと柏もとの契りは絕はつる世に
寄椎戀
はし鷹のとかへる山のしゐて猶契りし末をたのみこそせめ
寄槇戀
時雨行と山にたてる槇のはのつれなき色もしほれやはせぬ
寄宿木戀
うらやましつれなき山の松たにも猶やとり木の枝かはす覽
寄鹽木戀
鹽木つむあこきか浦の浦人にからき思ひにこりすやはあらぬ
寄埋木戀
流れてもうき世語の名取河身は埋木と朽もはてなて
寄鷄戀
うくつらき人の心のなくはこそ別にとりの音をもかこため
寄鴈戀
雲井とふ鴈の玉つさいつよりか我身の秋にかきはたえけん
寄鶉戀
あれ增る床は草葉の露ふかみとはれぬ暮を鶉なくなり
寄鴫戀
あかつきの鴫の羽かきかきたえてこぬよの數のつもる頃哉
寄鴛戀
池水のそこの心を人もしれうき名はをしの音にたてすとも
寄鷹戀
とやこもる忍ふの鷹のかりにたにこひに心の離れやはする
寄鳰戀
下にたに通はゝこそは賴まれめにほの浮巢を身の類ひとも
寄山鳥戀
心さへ隔てゝや山鳥のおのへひとつの歎きせしまに
寄馬戀
秋の夜の月毛の駒の足うらもおもはぬ中にふみまよひける

寄鹿戀
あき霧の隔も果ぬ妻をたに猶うき物と鹿やなくらむ
寄猪戀
身にそしむとはれぬ暮の露散てひとりふすゐの床の山風
寄螢戀
君かすむ宿にかよはゝとふ螢あくかるゝ身の玉と告こせ
寄蟬戀
此よにてつらき心はうつせみの身をかへてともえ社契らね
寄蛬戀
長きよを音に鳴明すきり〳〵す物思ふ身のたくひとそきく
寄松虫戀
在明の月もつれなき閨のうちにいひしはかりを松虫のこゑ
寄鈴虫戀
あた人の心の秋に成しより涙ふりそふすゝむしのこゑ
寄蛛戀
人はなを契りもをかぬ夕暮を又たのめとやくものふるまひ
寄蜻蛉戀
しられしなあるかなきかにかけろふのもえて夕の空を待共
寄璽戀
しつのめかひく山まゆのいとせめて亂そむとも知人やなき
寄玉戀
かくてさへ猶玉のをの永らへは絶ぬといひし末やたかはむ
寄鏡戀
移り行人のつらきに戀侘てかはるかゝみの影もうらめし
寄櫛戀
君とわれ別のくしのさしもなとふたゝひあはぬ中と成けむ

寄枕戀
たえて又とはれぬ床のあれ枕夕はわきて露そみたるゝ
寄席戀
かたしきの床のさむしろ打はらひ妹戀しらにわれ獨ぬる
寄衣戀
うき中はうす花衣何にたゝ涙のいろのこさまさるらん
寄帶戀
とけそめし花田の帶の色よなと思ひかへせとのへらさる覽
寄紐戀
から衣下ゆふひもの末終にとけても又やむすほゝるらむ
寄笛戀
うきふしにさ社はならめ笛竹の元のふるねをよそに漏すな
寄箏戀
かひなしな玉のを箏のかけてたにかよふ心も人のしらすは
寄弓戀
かはり行人の心はしらま弓をしかへしても又や恨みむ
寄車戀
うしやたゝ別しまゝにをくるまの行廻りても逢よなき身は
寄舟戀
わたの原浪間にちかふはや舟の逢かとすれと遠さかりぬる
寄繩戀
いせの海のあまのうけ繩絶ぬとも恨みはせゝに朽ん物かは
寄糸戀
わきもこか手引の糸のとにかくにとたえ勝なる中の苦しさ
寄注連戀
神かけてちかひし中も絶はてゝいかゝみかきの森のしめ繩

寄木綿戀
逢まてと祈る命はなからへてさてもなひかぬ麻のゆふして

寄秋麻戀
わかくたによるへ定めは大幣のひくてはよしやあまた成共

寄貝戀
いせの海の浦のしほ貝拾ふてふあまりに袖の濡てかはかぬ

寄鐘戀
入相の鐘のひゝきはかはらぬをまちしやいつの夕なるらむ

雜二百首

關路鷄
逢坂の夕つけ鳥の初こゑにこのよ明ぬといそく旅人

社頭烏
みよしのやかつての宮の山烏神につかふる身もふりぬなり

河邊鷺
山河の淺瀬に立るしらさきのみのけしほるゝ夕くれの雨

原上鷹
はしたかの末野の原のをしへ草いくとせ同し跡をとひけむ

澤畔鶴
をのかねを天津空まて聞あけて澤への田鶴そよはに鳴成

溪樵夫
谷陰や夕は北に吹かへてつま木の道ををくる山かせ

野隱士
わか君の夢には見えよ今もなをかしこき人の野へに殘らは

濱漁翁
おきなさひ濱へにあさるあま人も君かみかりの時や待らん

市商客
くちぬ名をたつの市人ゆきめくりふみみし道（跡イ）も尋てしかな

泊遊女
こく舟の跡も定めすうかれ妻いく浦波にうきねしつらん

歸雲藏（籠イ）樹
み山へや暮れはかへるしら雲のよそになり行みねの松はら

夜雨滴闇
降雨の音しつかなる閨の中はもる程よりも袖そぬれそふ

晩鐘何寺
里とをき山路の末に行くれぬ寺はいつくそ入相のかね

樵笛聲幽
笛の音もしつかになりぬ賤のおかつま木の道や遠さかる覽

扁舟暮歸
あしのやのなたのしほちの夕浪に船をしかへし歌ふあま人

漁火連浪
しかの浦やあまのうけ縄うちはへてよる波をやく篝火の影

窓灯欲曙
かゝけても光なき身のたくひかなあれ行窓に殘るともし火

興遊日暮
綾莚たゝまくおしきまとゐかなまねくに返る日影なけれは

拜趨年久
哀とは君みさらめや怠らすつかへなれても年經ぬる身を

老人夜長
みしかしと誰かいひけん夏も猶おいのね覺は夜をや殘さん

山椿
神路山しら玉椿君か代にいくたひ影のあらたまらまし

嶺榊
白妙に衣さらせりかこ山のみねのま榊雲かゝるらし
岡椎
あらし吹岡へにしける椎柴のそよやうき世の夢もさめにき
麓柴
庵しむる麓のましは折々に絶ぬ人めを猶いとはめや
杜杉
年へぬる杜は老曾の名もしるし陰ふり増る杉の一むら
浦松
あらはれて磯の松かね世々はへぬ我名もかけよわかの浦波
窓竹
すなをなる心は我もならひけん友としちきれ窓の呉竹
沼薦
思ふ事猶かくれぬのまこも草みたれなきよと治めてしかな
池蘋
風ふけはさそはぬ水にねをたえてたゝよはれ行池のうき草
巖苔
さゝれ石の昔や遠く成ぬらん山の岩根は苔むしにけり
山家春
花見にと人はとひくる谷陰をなと鶯のなきて出らん
山家夏
山里のそともの梢陰しけみ心すゝしき瀧のをとかな
山家秋
かくしつゝ浮世かはらぬ宿なれや又この山も秋の夕くれ
山家冬
風の音はきゝ習にしみやまへにとは又何そ雪の下をれ
山家朝
たに陰や竹のあみ戸の明かたに雲こそうつめよもの山のは
山家夕
やとりとるみ山からすも聲やみてしつかにくるゝ松の下庵
山家夜
松風もきゝならひにし身ならすは［　　　　　　　　］
山家風
住馴て後こそあらめしはしかくふかすもあれな軒の松風
山家雲
身を捨て思ひ入にしみ山へは雲や浮世のへたてなるらん
山家梯
山ぶかく入にしまゝに年ふりて又もわたらぬ谷のかけはし
山家路
路しあらは人もこそとへ山里はよしやつま木の跡たえぬ共
山家水
足引の山井の水を結ひてもすみえぬものはこゝろ也けり
山家巖
いかにせむ巖の中を尋ねても猶うき事のたえぬ身ならは
山家隣
山ふかみ庵ならふる人にたにとはれすとはて年をへし哉
山家草
庵とて草引結ふやま陰も浮世よりはとおもふはかりそ
山家竹
いとふみの友とみ山の呉竹もうきふしゝけき世とやしる覽
山家木
とはるゝをいとふうきみの隠れ家にうたて名立る宿の松風

山家鳥
庵さす山へに馴てうときかなふかき梢のふくろふのこゑ
山家獣
さひしさをましらなゝきそ山里は世をうきにこそ尋入しか
田家送年
かくてのみ賤かふせやに年をへは庵もる人と人もこそ見れ
田家客稀
おもほえすいつならひてかとふ人の待れもすら覽小山田の庵
田家興遊
忘れめや秋の田面のいな莚しくものもなきけふの圓ゐは
田家遠情
かりねする賤か山田のいねかてに思ふも遠し世々のふる事
田家幽思
とへかしな田面の露に袖ぬれて庵もる暮の心ほそさを
古寺嵐
はつせ山ひはらの嵐夢絶てうきよ別るゝみねのよこ雲
古寺松
今はゝやかはらの松も陰ふりぬいく世かはへししかの山寺
古寺鐘
かねの音も今はと告よ高野山共あかつきを松の戸ほそに
故郷路
故郷となしても出るみよしのやよしなくならす岩のかけ道
故郷庭
みちの面は蓬か杣と成にけり哀いくよの宿のまさこち
故郷籬
庭にたにまれにそみてし故郷のまかきは苔のむし所かは

故郷檐
日にそへてあれのみ増る故郷はしのふそ軒のいたま也けり
故郷杜
さても我誰にゆつりて故郷のまきの柱に立わかれけん
名所山
三笠山神のしるへに任せてやのほりし世々の跡は尋む
名所嶺
名もしるく不二の高根に跡たれて我君守る神ならは神
名所杣
うかりけるきのふの山の杣人よひとり朽木の名をは殘すな
名所杜
おもふ事ちえに數そふ身のはてよいかゝしのたの森の下露
名所野
うき身世にかくてふるのゝ草に置露も心のとまりやはする
名所原
いせ嶋やおきつしほ風小夜更てたつそ鳴なるわかの松原
名所關
僞もなき世中にあふ坂の關路の鳥はそらねならしを
名所瀧
今も又昔のあとを宮瀧や古きにかへる水のしらなみ
名所河
よろつ代もつたへて絶し藤河の一つなかれのすゑも久しく
名所橋
をはたしの板田の橋のいたつらになす事なくて世をや渡覽
名所池
ふれはかく身の上うきぬ池にすむをしとは何に思ふへき身そ

名所湊
明ほのや猪名の湊のかち枕なみにわかるゝ夢のかよひち
名所湖
おきつ風さよふけゆけはみほか崎まなかの浦にたつ鳴渡る
名所浦
浦遠きなにはのみつの鹽かれにをりはへあさる蜑の乙女子
名所濱
忘れめや高師の濱のおきつ浪かけしたもとは今もしほれて
名所磯
あれにけりをしまの蜑の笘やかたあらき磯への浪に任せて
名所嶋
するまても此道守れ玉津嶋神のちかひも世々にくちせす
名所崎
しからきの外山の霧の絶間より俤みゆるから崎の松
名所里
いとゝしくひらきをそへて白玉のをことの里にかよふ松風
名所市
身にかへて世の治らん道もあらは死ん命よかるの市人
羇中春
過來つる山はそこともみえわかす霞の中やふるさとのそら
羇中夏
風かよふ木下ことに駒とめて末いそかれぬやまかけの陰〔道イ〕
羇中秋
をのつから都の友と見る月もくもるなみたのうきわかれ哉
羇中冬
さえあるゝ嵐を寒み旅ねして夢路たえ行さよの中山

羇中曉
そのまゝのかたみの影や殘るらん在明の月に出しふるさと
羇中朝
都とふ涙なからやみたるらんさゝわくる朝の袖の白玉〔露イ〕
羇中夕
草枕夕は露のとことはにをきまとはせるゐなのさゝ原
羇中夜
つゆかゝる蓬の圓ねかりそめと思ふよはたに袖はぬれしを
羇中風
岩代やかやかしたねのかりまくら松風寒み妹ゆめにみゆ
羇中雲
日にそへてふるさと遠くへたて行山もいくへの路のしら雲
羇中煙
たちのほる煙を里のしるへにて山のあなたに宿はとはまし
羇中雨
降すさふ夕の雨におもふかないくへの雲のよそのふるさと
羇中山
いはねふみかさなる山のたひ衣日も夕くれは都こひつゝ
羇中野
たひ衣朝立の〻のつゆ涙袖ほすひまもなく〳〵そ行
羇中河
更に又都もこひし隅田河人たのめなる鳥の名たてそ〔にイ〕
羇中海
みやこ思ふ涙なからやうきねする枕の下に海はあるらん
羇中里
行とまる里はあまたにかはれとも夕そ旅の宿り成ける

羇中衣
かり枕よるの衣をかへしてやみやこにかよふ夢もみるへき

羇中枕
こよひわかかりねのゝへの草枕たれか結んあすの夕暮

羇中舟
浪のうへやうきねの床の浦かせに夢路たえ行遠つ舟人

遠離別
あまさかるひなの長路の末迄もそふる心はをくれしもせし

近離別
さためなき世にや惜んけふ別れあすはあふみの名殘成とも

山路眺望
人やとすおのへの末の一つ庵まつめにかけてゆく山路かな

野外眺望
さすか又限そみゆるむさし野や草の原には月もいらしな

河邊眺望
雲ゐより一葉おつるとみえつるや河上くたすうちの柴船

海畔眺望
うなはらや夕日うつろふ浪間より沖のつり船漕かへるみゆ

江上眺望
住の江や松の木のまを渡る也あはちの嶋にかよふ舟人

寄玉述懐
玉も石もわく事かたき世にしあれは其山人もねにやなく覽

寄鏡述懐
みかくへき心は猶そ增鏡くもらぬ世々のあとを見るにも

寄錦述懐
ふるさとを立別にし唐錦きて歸るへき世とそ待るゝ

寄衣述懐
數ならてふるもわか身のから衣世には恨をいかゝ殘さむ

寄糸述懐
おさめこし昔の道もしら糸のみたれてふへき世とは歎かす

寄枕述懐
なれそけにしらはしる覽學ふ身に枕たにせてすくる月日は

寄莚述懐
身のうさを思ひつゝけていたつらにねぬ夜重さる床の小莚

寄書述懐
ふみゝてし世々の昔の跡なくはまなふる道に猶やまよはん

寄筆述懐
あらさらむ我世のゝちのかたみとも誰か忍はむ水くきの跡

寄琴述懐
うき事のねにたてつへき時しもあれ歎きくはゝる峯の松風

寄笛述懐
今は身に忘ぬふしと成にけりくもゐになれし夜半の笛竹

寄扇述懐
入はつる月に扇をたとへても心のやみははれかたの身や

寄塵述懐
我門にふりぬるちりを思はすは數ならぬとて身を歎かめや

寄弓述懐
君か代もはや引かへせものゝふのとるや眞弓の末も違はす

寄車述懐
捨やらて猶世にめくる小車の我からつらき身を歎きつゝ

寄舟述懐
哀れ又つなかぬ舟のうき身よによるへ定ていつまてかへむ

寄筏述懐

杣川の早瀬をくたすいかたしのよとみもあへすゆく月日哉

寄濺盡述懐

なへて世の民の愁のふかき江に身を盡してもすくひてし哉

寄燈述懐

かゝけても世々につくへき光りかは愚かなる身の窓の燈火

寄鐘述懐

いかにせむ昨日も過ぬ今日もくれあすしらぬ身の入相の鐘

雨夜懐舊

古をおもはぬたにも袖ぬれしふるやの軒の夜半のむら雨

閑居懐舊

うき世をも住わひてこそ厭しに何かむかしの絶す戀しき

夢中懐舊

こしかたも現にのみそ忍はまし夢の直ちのなきよなりせは

寢覺懐舊

ね覺こそ袖ぬらしけれいにしへを忍ふ心は時もなけれは

老後懐舊

徒に老ゆく身こそ歎かるれむかしの遠くなるに付ても

懐舊催涙

思ひ出る折々ぬるゝ袖のみや親のいさめのなこり成らん

懐舊非一

忍はるゝ身のおもひてはあまた有をいつれに落る涙成らむ

閑談往事

哀とも聞たにいれし數ならぬ身の思ひてのとはすかたりは

獨思往事

かたりても慰ぬへきいにしへのこととふ人はなとなかる覽

往事如夢

さたかなる夢よりも猶はかなきは過こしかたのうつゝ成鳧

春夢

思ひつゝたゝうたゝねの夢のまにいく山こえて花をみつ覽

夏夢

夕すゝみねやへもいらぬうたゝねの夢ちほとなく明る東雲

秋夢

ひとりねは秋の夜なかき夢の中にいくたひ人の夢にみえ劔

冬夢

さえ侘てぬるともなきにいかにねていかにみえつる夢路成覽

曉夢

鳥の音に驚かされて夢路さへあかつきかたや別れ成らむ

寄地無常

苔の下をつゐの栖とおもふにもなへての山のあはれなる哉

寄水無常

河なみの瀧つはやせにめくるあはの消る待とも定なの世や

寄火無常

はかなしやみる程もなし石の火の光のうちによせる此身は

寄風無常

草のはにをかぬ計りそ露の身にかせ待ほとのかりの宿かは

寄空無常

空せみの空しき世そと聞しより有をありともえこそ頼まね

寄日神祇

ちかひあれは神路の山を出る日も曇らぬ君か代を照すらし

寄月神祇

石清水おなしなかれに影とめて月もいく世かすまむとす覽

寄風神祇
をしほ山跡たれ初し神代さへ心にうかふまつかせのこゑ
寄雨神祇
三笠山さしてそ仰く春雨のふりぬる跡は神も忘るな
寄露神祇
春日野やいかに待みん身の程にあまる計りの露のめくみを
寄榊神祇
榊葉の變らぬ色をしるへにて君をちとせといのる神かき
寄椿神祇
玉つはきときはの色も我君のためしなれとや神はうけゝむ
寄松神祇
祈こししるしよいかゝすみよしの松とは告よおきつしほ風
寄杉神祇
跡たれししるしは杉の名に立て幾世かふるの神のみつかき
寄檜神祇
三わの山ひはらの梢いく千世か神に手向てかさし折けむ
寄玉神祇
名にしおはゝ光をそへよ玉津嶋もくすなりとて神も捨めや
寄鏡神祇
曇なき君の光もいとゝしくますみのかゝみ世をてらすらし
寄挿頭神祇
舞人のかさしの櫻春をへてかはらぬ色は神やうけゝむ
寄秡麻神祇
おほぬさのひく手にしるし我いのる君しそ神も心よせける
寄木綿神祇
神よいかに御手洗河のそのかみに祈しかひもなみの白ゆふ
寄四手神祇
瑞籬やしてに風ふく三室山神の惠のなひくとそみる
寄注連神祇
あめか下三笠の杜にさすしめのみたれなき世に早かへさ南
寄手向神祇
白玉の光にあける神にしもかゝるもくつをいかゝ手向けむ
寄塵神祇
何ゆへに神は光をましゆらん拂はぬちりのいとはしき世に
寄燈神祇
ちかひある神の御前にともす火の光の内に身をもゝらすな
不殺生戒
いせ嶋やしほひのかたに漁りせは清き渚のかひやなからむ
不偸盗戒
おきつ浪何とたつ田の山櫻さそふあらしの常ならぬ世に
不邪婬戒
かさねとしつまたにあるを花衣う（人イ）へこと色に心うつすな
不妄語戒
あた人にしらせてしかな僞のつらきむくひは朽ぬならひを
不飲酒戒
かけてたになさけしらすなみな人の醉る心は亂れやすきに
不說四衆過罪戒
なへて世の人の迷も難波江の芦とやさのみいひしほるへき
不自讃毀他戒
我のみを深きになして杣川や人を淺瀨にいかゝくたさむ
不慳貪戒
おしましなちるはならひの櫻花たゝ春風の吹にまかせて

不瞋恚戒
彼岸によすへき舟のいかり繩かけてよふかき江には沈むな
不謗三寶戒
世中の人の願ひを三つの法かりにもいかゝなきになすへき
火宅喩
まよひ入思ひの家の出かてに三の車もやるかたそなき
窮子喩
みかきをく玉の臺のあるしとも知すまよひし程のはかなさ
雲雨喩
わきてしも時雨は染ぬ草木さへをのかさま〳〵色かはり行
化城喩
むさしのは猶末遠しかりそめの草の庵にこゝろとゝむな
繫珠喩
夢にたに有こもいさやしら玉のかゝる衣のうらめしきかな
頂珠喩
もとゆひの中なる玉の光そふ法の花ふさ又うへもなし
醫師喩
をろかなるこの世の闇を悲しみてわしのみ山の月は入にき
空　諦
なへてみなむなしとゝける法なくは迷ひ悟を分てこそみめ
假　諦
色も香もたゝかりそめとみる花ややかてさとりを開く成覽
中　諦
雲もつき霧もはれ行中天にこゝろの月そひとり限なき
寄天祝
すなをなる道を守らは天津神君に心をさこそよすらめ

寄日祝
岩戸明てさやけかりけん神代より天照日かけ世々に曇す
寄星祝
大空にたゝしきほしの位もて治れる世のほとをしる哉
寄風祝
おさまれる我君代の風にのみなひくや民の草はなるらん
寄雨祝
君か代に民のふせやもうるふなりめくみの雨やよもに普き
寄國祝
亂れなきむかしにかへせあとたれしとよ芦原の國津もろ神
寄郡祝
千世ふへき君にはさこそ備ふらめ鶴の郡の民の御調は
寄都祝
君か代はゑそか千嶋の外までも都のつとにさそいそくらん
寄巖祝
年をへていはほの中に住人も出てつかふる御代のかしこさ
寄道祝
をのつからふみやなれ南敷嶋の道ある君か代にしすまへは

右師兼卿千首以二本比挍了

群書類從卷第百六十二

倭歌部十七 千首三

詠千首和歌

中務卿宗良親王

春二百首

立春朝

朝戶あけてまつ社みつれ四方の空いつくに春は立初むらむ

立春天

ほの〳〵とあくる雲間のその儘に霞たなひく春(きイ)はきにけり

立春日

いとはやも霞ていつる日影哉山のあなたも春やたつらむ

立春風

春たては霞にしるき峯の松花やにほふと風や吹らむ

立春霞

猶さえて山は雪ふるころなれと都はかすみ春そたちける

立春雲

春たてと同し雪けの空の雲くもるとやみんかすむとやみん

立春雪

山里は春くることもたれかしる殘る雪けに風はさえつゝ

立春氷

春風やとくる氷のぬきをうすみあやなくみたす池のさゝ波

立春水

氷とけ岩間の水も聲々にをとつれそめて春は來にけり

立春都

立そむる霞のをちはしらねともけふは都に春そきにける

早春山

はるといへはみやはとかめぬ淺間山烟にまかふ峯の霞を

早春關

逢坂の關路をとをみよるこえて治れる代の春はきにけり

早春河

吉野川行としなみも岩こえてはやくも春の立にけるかな

早春湖

けふははやにほのさゝ波立かへり國つみ神の春そ來にける

早春浦

昨日まて浦風さえし難波江のあしまさはらす春はきにけり

野子日

春毎によはひを野への姫小松なを引そへむ千世も八千代も

子日松

一本の松の子日も千世ふなりいく木かひかむ明ぬためしに

子日祝

ゆく末を遠里小野にしめをきて君か子日にすみ吉のまつ

山　霞
いつもたつ烟にまかふ富士のねはめつらしけなき朝霞哉

嶺　霞
春霞峯にも尾にもたゝはたてまた花咲ぬみよしのゝ山

野　霞
行するも中々ちかし武蔵野や春の霞を限にはして

關　霞
しるしらす春には誰も逢坂や關路にかすむ杉のしたみち

徑　霞
行するはちかつくまゝに空暮て跡のみふかき夕かすみかな

橋　霞
駒のあしのふみとゝろかす音すなり霞のうちやせたの長橋

江　霞
浪間よりいつくをそれとみつの江や浦嶋霞む春のあけほの

瀧　霞
水上のかすみ吹とく山風にむすほゝれ行瀧のしらいと

河　霞
たえすたつ霞の底の水無瀬川あかて行ともみえぬ波かな

海　霞
あま人のみるめなきさに浪かけてわか身をうらと立霞かな

湖　霞
しかの海士の釣する船はみえわかて霞の袖に歸る浦かせ

濱　霞
濱風の吹上にたてる夕霞鹽くむ海士の袖かあらぬか

嶋　霞
しはつ山うち出てみれは霞むなり朝日影さすかさゆひの嶋

渡　霞
明ほのやゆらのわたりを漕舟の跡は霞に嶋かくれつゝ

里　霞
住吉の松の梢もかすむ也遠里小野はいつくなるらむ

舊巣鶯
ふるす出る谷の鶯心から咲てとくちる花になれめや

初　鶯
僞のはつねならましうくひすの涙の氷とけてなかすは

雪中鶯
鶯の羽かせに雪をちらしてや花なき里の慰にせむ

曉　鶯
さらぬたにくらすはなかき春の日を曉いそく鶯のこゑ

朝　鶯
人はこぬみ山の里の朝戸出にかたらひそむる鶯の聲

夕　鶯
暮ぬともよしやほかゝは軒はなる花のねくらにかへる鶯

里　鶯
鶯もさとをはかれす鳴てきぬ春待人はなへてもれしな

山家鶯
山ふかみいかゝとそ聞鶯のなけともわか身春をしらねは

竹　鶯
花よりも園生の竹の春やとき外には鳴かぬ宿のうくひす

寢覺鶯
春のよのさめ行夢の手枕にうつゝともなき鶯のこゑ

野若菜
いつしかも君か爲とや住吉のあさゝは小野にわかなつむ覽

原若菜
雪も消日ものとけしと君かすむみかきか原に若菜つみつゝ
澤若菜
霜雪にうつもれてのみ見し澤の若菜つむまてなりにける哉
水邊若菜
消は猶水やまさらん若菜つむ野さはの雪間またすしもあれ
田若菜
朽のこる去年のいなくきかき分てふるのわさ田に若菜摘也
岡残雪
松に降雪も消ぬに誰かまた春をいまきの岡といふらむ
草残雪
奥山の岩本小菅春きても猶そのまゝの雪の下くさ
木殘雪
冬木には中々春もとくしりてちらぬ檜原に殘る白雪
餘寒月
ふりとけぬ月の雪けに風さえて猶春あさき袖の白妙
餘寒風
太山には松の風たに猶さえて霞そかぬる峯の明ほの
餘寒氷
とけそめし雪の下水猶さえて軒のたるひに春かせそふく
梅雪
白雪のかゝれる枝も消あへぬにあやなくさきそ梅の初花
梅風
梅かゝのにほはぬ隙もなかりけり風のやとりや軒はなる覽
夜梅
心あてにおらはや夜半の梅の花かほる軒はの風を尋ねて

故郷梅
ふる郷の雪の埋木花さきて春にあひぬるむめかかそする
里梅
春ことにとはれし里の梅の花さたかにありと匂ふはるかせ
庭梅
盛りよりまつさそひをく梅かかのつもるもみえぬ庭の春風
簷梅
あやなくも香をやうつさむ忍草おふる軒はの梅の下風
隣家梅
風かよふつゝきの里の梅かかを空にへたつる中垣そなき
梅移水
ちらぬまの梢の梅のかけうつす池のかゝみは曇りやはする
梅薫枕
いささらは花の香とめむこよひより梅さくやとに新枕して
梅香
色よりも香をやあはれとさそふらむ花にとまらぬ梅の下風
折梅
かさせとも花はかくさて梅の花いとゝかしらの雪とみえつゝ
若木梅
はる〳〵のあかぬ色香を契かなはな咲そむる梅の若木に
紅梅
ふりにける大津の宮のいにしへをみな紅に匂ふ梅かえ
落梅
今更に花とみなれし宿の梅ちれはや雪に又まかふらむ
柳露
白露の玉の緒にして青柳をかたいとによる春の夕風

池　柳
いささらは池の柳のあさねかみ我はけつらて風にまかせん
門　柳
我門のはいりにたてる青柳の糸はなひけとくる人もなし
岸　柳
河岸に老てかたふく青柳のしつめるかけは春としもなし
河　柳
枝くちし川そひ柳又めくむそのねはかりの春をしれとや
路若草
たひ人の分つる跡をそのまゝにやかて雪間ともゆる若草
岡早蕨
今はとて雪も消ゆくかた岡のあしたの原にもゆるさはらひ
樵路早蕨
つま木にも又折そへてかへるさのわらひや賤かすさみ成らむ
山春月
山のはもみえぬ夕の霞かないつくの空に月をまたまし
關春月
東路の關の名たてによもすから霞を月のもりあかすかな
江春月
さやかにもおもほえぬ哉難波江の霞にしつく春のよの月
春曉月
おもかけもいとゝ霞て有明の月にわかるゝ春のよの夢
春月幽
曇なき御代のひかりにくらへてや春は朧の月とみゆらん
朝春雨
つねよりも出る日影の朝くもりかすむとみえて春雨そ降る
夕春雨
棹姫の霞の衣いたつらにほさて暮ぬる春さめの空
谷春雨
谷川や岩間にあらふあさみとり苔の衣に春雨そふる
野春雨
はる雨のふるのゝ草はそれなから下より染るみとり成けり
菴春雨
かくてよにふる身ならねは柴の戸に音をもしのへ軒の春雨
春　駒
わつかなる草の若葉につなかれて所もさらぬ野への春駒
岡　雉
きゝすたにねに現れて雪きゆる忍ひの岡はかくれ家もなし
野雲雀
雲にあかり煙におちてあはつ野の荻のやけ原ひはり鳴也
路雲雀
のとかなる野への雲雀の聲までも雲井にあかる道は迷はす
歸鴈知春
いつしかと花なき里にいそく鴈をのれ歸りて春やしらする
曉歸鴈
歸鴈花こそとまれ有明の月はともなふ別なりけり
夕歸鴈
かへる鴈こゆへき山やなかるらん峯もたいらにかすむ夕は
夜歸鴈
夢かとも思ふへけれと歸る鴈聲はねさめの枕にそきく
歸鴈連雲
鴈かねの忘かたみの花の色やかへる翅にかゝるしらくも

峯歸鴈
秋霧に峯のかすみをたちかへてはれぬ思ひの鴈のわかれ路

海歸鴈
はる〳〵と鳴かくれして行舟やをのか常世にかへる鴈かね

遠歸鴈
忘なよとはかり花に鳴すてゝ程は雲井にかへるかりかね

歸鴈似字
たのめこし人の玉札人はこてかへすにたるはるのかり金

歸鴈幽
花をまつ外山の梢かつみえてわかれもゆくか春の鴈かね

春山
人よりも花そむかしと思ひ出て今年はとひつみよしの山

春野
尋ても誰かはとはむ春ふかくなりぬる野へのもすのくさ莖

春關
浦風ものとけき春は淸見かた波の關もるひまやなからん

春川
いもせ山うつろふ花の中におつる芳野の川よ浪かあらぬか

春海
玉もかるあまの小舟も出ぬらし春の日かけのうら〳〵の波

野遊
我のみや春に心はあくかるゝ霞ものへにたゝぬ日そなき

遊絲
絲ゆふのあるかなきかの身にたにもしりける物を春の光は

待花
哀けに花も僞のある世かなたのめしころは峯の白雲

栽花
うつしうへし昔の勅も忘れねは君をかしこみみよしのゝ花

尋花
我宿とたのむよしのゝ山なれはしほりせすとも花は尋ねん

初花
よそめまてそれとはみえし山櫻けふそかた枝の花も咲ける

見花
くるとあくとみるめにあかぬ磯の花散なよあまのすさみ成共

翫花
四十まてたひの野山に家居して歸るさしらぬ花をみし哉

折花
けふさくら風より先に手折哉うつろひぬへき色のみゆれは

交花
たちましろ霞の袖のわかならはをよはぬ枝の花はあらしな

曉花
暮ぬとて歸し人にしらせはや哀ははなに有明のそら

朝花
朝日いてゝ長閑き峯の山櫻花も久かたの光なりけり

夕花
家路をもわするゝ我とおもへはや心とけたる花の夕はへ

夜花
みし夢の思ひ出らるゝ花の香にさそふ面影春のよの月

山花
山たかみはれぬ雲ゐのさくら花いかに嵐の吹をわふらん

峯花
恨しな花は麓に散はてゝふくにとかなき峯の春かせ

谷花

いつくにかせきとめてみん山櫻散なん後の谷のした水

岡花

ゆきてみん霞かくれのかた岡にうつろふ花の春の梢を

杜花

花にあかぬなけきの杜はこれなれや嵐吹たつけふの夕暮

野花

嵐ふく野守か庵の花さかり今いくかとかいてゝみるらむ

關花

めに見えぬ春の行衞はさもあらはあれ散なはとめよ花の關守

瀧花

瀧にそふ花のしらあはおちたきり岩こす波に春風そ吹

禁中花

百敷や花もあひおもふ色香にて君な此春みよと待らん

社頭花

ちかひあるかつての神の名を聞は花に爭そふ風もふかしな

古寺花

幾春の入相のかねをうらむらんなからの山の花の古寺

故郷花

花ゆへそ恨なれぬるあまのすむ里の知へやしかの山こえ

里花

世間をいとへと人の諫めしはよしのゝさとの花をみんため

山家花

山里のさくらは世をもそむかねはとはれぬ花や物うかる覽

庭花

わか物と猶こそおもへ春の風ちりつむ庭の花なさそひそ

閑居花

うき世にはましらぬ人もましりけり春の山への花の下庵

花雲

咲ぬれは櫻こきませ青柳のかつらき山にかゝるしら雲

花雪

辛けれと花ともみせしよしやたゝけふこぬ庭のあすの白雪

花梢

櫻花空にのみして散ことは四方の梢の風はやみなり

花枝

枝かはすかひなからまし山櫻松より風のふきてちらさは

花本

あはれとも君そみるへき朽はてゝ枝なき花の老木一もと

花根

めくりあはむ春としられは契らまし花は木毎に根に歸る共

花挿頭

君をのみたのむよしのゝ宮人の同しかさしはさくら成けり

花手向

手向山あらしはぬさとたゝはたて我身はいかゝ花を散さむ

花麻

芳野川花の大ぬさなかるめりなみのよる瀬はいつくなる覽

花袂

ゆたかにもたつ物ならは散花にわか袂をやまつおほはまし

花衣

しかもせぬ花の下紐風にとけてうらめつらしき雲の衣手

花鏡

立よりて又みん花のかゝみ山かならす春にあふみなりせは

花錦
はな咲は都の春とみし物をよもの山へも錦なりけり
花匂
山守もおるをそいとふさくら花立よる袖の香をはとかめし
花色
それとなくかすめる山の花の陰心も色の千種にそしむ
花便
たよりにもとはゝとはなん故郷の花に爭ふあるしならねは
花主
もとかしや我身を花の主にせはおもはぬ風に任せさらまし
花面影
青葉なる櫻にそはぬ面影をよそにそのこす峯の白くも
花形見
花よりもけにはあたなる形見哉なかむる空に消る白くも
惜花
散はなをなを中空に吹たてゝ風もさすかにおしけ成かな
落花
みれはまた風の宿りもほかになし花ちる里をきては恨みよ
殘花
猶のこれ青葉の下の八重櫻ひとへつゝこそちらはちるとも
三月三日
唐人のやよひの春のゑひにのりて浮へし船のあとを尋ねん
桃花
みれは猶哀そふかきもゝの花春紅の色にさきけり
梨花
みつしほの汀さしおほふ浦梨のかた枝は浪の花とみえつゝ
山田苗代
これそ此春の物とて小山田のなはしろ水にひく心かな
路苗代
賤かすむかきねつゝきの苗代は道こそたゆれ水はたえせす
河邊苗代
春毎になかるゝ河とみゆる哉苗代小田のかきねつゝきは
夕蛙
わか門のいさゝ小川にさそはれてかはつ鳴なり雨の夕くれ
田蛙
鳥のねも暫しともなへ水にすむ小田の河つは春ならぬかは
野菫
なつかしなおもへは誰か里ならん菫ましりの野への若草
庭菫
つみにくる人しなければ故郷にひとりすみれの庭そ淋しき
摘菫
すみれ草おほかるのへにけふはきてなかき春日を摘暮す哉
松下躑躅
山人のかけちにくれてともす日は松の下てるつゝし成けり
躑躅紅
春ふかみ岩根のつゝし咲にけり紅くゝる谷かはのみつ
池杜若
杜若へたてゝさける池水に人かけなしと鳥やゐるらん
澤杜若
咲ぬれはさはへもみえすかきつはた霞はよそのへたて成皃
欵冬露
朝なへゐてこす浪にしほたれて花の露ひぬ岸の山ふき

夕欵冬
山吹の花のかけにや宿とはんあかたのゐとにけふも暮しつ
路欵冬
うちわたす遠かた人のいはぬ色をなにとかみつる山吹のはな
池欵冬
春ふかくなりぬる池のみくさにも猶色のこす山ふきのはな
河欵冬
吉野川岩こす浪のいはぬ色も底にうつろふ山吹のはな
嶋欵冬
船とめしこ嶋かさきのことゝへは猶山吹のいはぬ色なる
岸欵冬
幾春を花の命とたのむらんねをもはなれぬ岸の山ふき
里欵冬
ことはりやさこそはいはぬ色ならめ忍ふの里にさける山吹
庭欵冬
櫻花ちりなん後と契しもおもひやる手の庭のやまふき
籬欵冬
めにちかくみれともあかす山ふきの八重の籬の花の盛りは
夕藤
松の葉の色も匂ひて夕つく日かけさす枝にかゝる藤なみ
岡藤
時しらぬ岡の松とはふりぬとも哀はかけよ春のふしなみ
池藤
うちなひき藤さく比は庭の池の汀にあまる波やたつらん
江藤
いかはかりふかき江なれは難波かた松のみ藤の浪をかく覽
浦藤
紫の藤江のうらの夕霞かけのちしほに波そうつろふ
岸藤
神代にもきくやきかすや紫の藤なみかゝる住よしの岸
松藤
さきぬれは水なき松の梢にも浪をりかくる藤の初はな
春欲暮
花ちれる山には春もなく鳥のかへる雲さへかすみくれつゝ
暮春月
めくりあはむ春ともしらぬ老か身の袂にかすむ有明の月
暮春雲
春のゆく空をそなたとしらねともまつ暮かゝる山のはの雲
暮春霞
せめてたゝへたてなはてそ夕霞又もみるへきはるの空かは
暮春鐘
春くるゝ入逢のかねの聲ことに老は涙を袖にをくかな
留春不駐
又とたにたのまぬ老のわかれとて春をはけふそ恨み果たる
惜三月盡
散はてゝ春ともわかぬ花の陰なにそ心にけふのおしきは
三月盡夕
雲霞たちて分るゝ夕くれの春のゆくゑを知人そなき
三月盡夜
いかにせむ秋なりとてもあるへきに彌生のけふの春のよの夢
閏三月盡
暮といへはけふもつらきをあかすとて何處にそへし春の日數そ

夏百首

首　夏

神祭る卯月のいみをさす日より夏のさかひもはやしられつゝ

朝更衣

夏衣きて身にそはぬ花の色をぬきかへかてら今朝や恨みん

夏衣惜春

かへすとも人なとかめそおきなさひことし計の花染のそて

餘　花

もろこしのよしのゝ山の遅櫻あやなく春にをくれぬる哉

新　樹

夏木立しけらはきなけ郭公櫻か枝に春をわすれむ

路卯花

ねぬにみし夢のたゝちの雪の色又卯花のかけにわするな

籬卯花

河とみて夜はこえしな卯花の浪折かへる里のまかきは

田家卯花

せきいれし小田のかきねの山水も浪こす色や庭の卯花

卯花似月

名にしるき里とこそみれ卯花の垣ねや月の桂成らん

卯花似雪

時ならぬうつ木かきねの冬籠さくや此花雪とみえつゝ

葵

百敷の大宮人も打むれてあふひをかさすかもの神かき

待郭公

郭公鳴くへき空のしるけれはあらぬもそれと聞やなさまし

尋郭公

雲路をもしらは問てんほとゝきす尋る山のおくはつくしつ

始聞郭公

うつゝにもかくこそ有けれ郭公夢をあやなくなに思ひけん

人傳郭公

よそにまつ鳴と聞つる郭公わか待聲は初音ならしな

郭公未遍

今更に我におしむな郭公六十あまりのふることゐそかし

月前郭公

ほとゝきす明方しるき山のはに雲間の月のをちかへりなく

雲外郭公

天津空我思人か郭公雲のはたてに聲の聞ゆる

雨中郭公

よしさらは涙にからん郭公鳴夜の袖は雨にぬるとも

曉郭公

誰夜妻おなしたくひそ郭公鳴て別の有明のそら

曙郭公

一聲の名殘の雲のほとゝきす花にかきらぬ明ほのゝ空

朝郭公

道とをみ鳴て行とや郭公雲に朝たつ聲聞ゆらん

夕郭公

夕くれの空に過行ほとゝきす宿のまかきをやまとみせはや

夜郭公

夏の夜も名のみ成けり郭公きかては更にあかしかねつゝ

山郭公

みよし野の山郭公鳴まてと花みし人をとめやをかまし

杜郭公
郭公忍ひれならは心せよひとにいはせのもりもこそあれ
岡郭公
いたつらに待よはきかて郭公今きの岡の明ほのゝころ
野郭公
郭公菅のあら野に打いてゝかたらひなれし聲忘れめや
原郭公
跡たれし神代もしるや郭公山田の原のおのかふる聲
關郭公
郭公たゝ一聲に關の戸を明ぬと告るあふさかのやま
浦郭公
一聲をつりするあまにことつてゝ八十嶋すくる郭公哉
渡郭公
たち花のこ嶋か崎のほとゝきす猶なつかしみ鳴渡る哉
夢中郭公
おもひねの夢とてなかは時鳥いま一聲も聞へき物を
寢覺郭公
寢さむへき時ともいかてしりつらん老になれたる郭公哉
獨聞郭公
何事をなれは鳴らん郭公うきをきかしと思ふ山路に
郭公幽
時鳥夏六月の空くれて山邊にかへる聲かすかなり
田家早苗
賤のおか垣ねのうちにまきし種おひにけらしな早苗取まて
忩早苗
さなへとる時とそいそく郭公鳴や五月の雨のゆふくれ
早苗多
つきもせすさ社とるらめ君か世にゆたか成へき民の早苗は
池菖蒲
ふる郷は池のあやめそたのまるゝ草葉につけて人も問やと
沼菖蒲
浮草の上にしけりてみゆれともあやめは根さす沼の岩かき
苅菖蒲
からすとも枕にやせむあやめ草わかよとのともこゝを思はゝ
盧橘薫風
夢そ猶さめてもかよふ手枕の花たちはなの風のまきれに
雨中盧橘
風かよふ花たちはなに雨過て猶ふることを身にのこす哉
簷盧橘
にほふとも誰袖のかとしられしな主さたまらぬ軒のたち花
樗
さ月山なを雲ふかき木すゑ哉雨にあふちの花もしほれて
夜五月雨
手枕に晴ぬ雫やかゝるらんねくたれかみのよるの五月雨
山五月雨
消はせてもゆるあさまの山なれや煙も雲も五月雨の比
杣五月雨
五月雨は河音たてゝ高嶋や朽木のそま木ひく人もなし
橋五月雨
八橋のくもてもしたに水こえて浪やかへらん五月雨のころ
江五月雨
難波江のみらくすくなき芦のはも波の下にや五月雨の比

瀧五月雨
さらすへき日影もみえぬ五月雨に音はかりそふ布引瀧
河五月雨
山川やおとそふ浪の岩こすけ葉するゑも下に五月雨のころ
湖五月雨
五月雨はしかのうらはに水こえて波間にひたるから崎の松
浦五月雨
五月雨は遠つうらはに雲おりてやかぬ鹽瀬に煙たつなり
古宅五月雨
待人もとはてふるやは五月雨のなかめにまさる庭たつみ哉
夜水鷄
槇の戸をさゝすなりにし故郷にくゐなたれはや猶たゝく覽
夏　夜
ふすほともなくて明行夏のよは八聲の鳥も一聲そなく
雲間夏月
中空にやかて明へき月なれはかたふくかたの雲はいとはし
水上夏月
夏苅の芦間の水の凉しきに月影もりて浦風そふく
樹陰夏月
明やすき波路のするは山もなし月のやとかせ興津嶋松
夏月凉
身にしみて月そ凉しき白妙の袖のひとへや夏のよの霜
夏月易明
中空に影をのこして夏のよはいつも有明の月をこそみれ
瞿麥露
塵をたにはらはんと思ふ床夏にあやなく露のやとりぬる哉
庭瞿麥
哀とも問人なくはいかゝせん種まきをきし庭の瞿麥
夏草露
秋をゝきてなにとて露の亂る覽風たに音はしのゝをすゝき
杜夏草
老ぬとてさのみなわひそ秋もこは花になるへき杜の下草
野夏草
まれにみし若菜もなにゝ蒔出てはや夏草のふかきのへ哉
徑夏草
しけくとも又ふみ分は蓬生のもとみし道は忘れしもせし
庭夏草
庭草に村雨ふりて夏のよの雲間の月も露にやとりぬ
夏　山
夏ふかきふしの柴山高ねなる雪をよそけにしける頃かな
夏　野
草のはら蓬かするもしけりあひてたか故郷の野とは成らん
照　射
ともしする林の陰にたつ鹿は秋の黄葉の色とやはみる
鵜　川
いつまてと闇のうつゝのうかひ舟夢にまさらぬ世を渡る覽
夜　螢
五月やみ晴間ありとはみえねとも雲ゐのほしと飛螢かな
橋　螢
八橋のくもてもをのか思ひとやもえて螢の飛わたるらん
水上螢
行水のあはれきえせぬ思ひゆへよるはみたれて飛螢哉

池螢
さても猶消ぬ思ひにもえわひていく田の池に飛螢哉

江螢
五月やみ難波入江にすむあまのからぬ芦火は螢成けり

澤螢
やかて又ひかりみえさす螢哉さは邊の草やしけりあふらん

浦螢
風かよふうらのあしかきこよひより秋をまちかく飛螢かな

草螢
またきよりつゆもみたれて秋なるは庭の薄の螢成けり

螢似露
分ゆけは袖にみたるゝ草の露もぬれぬやよはの螢成らん

螢似玉
難波江にもゆる螢の光をもけたすて玉とよする波哉

蚊遣火
いとゝなをそともの梢しけりあひて煙にくるゝ里の蚊遣火

垣夕顔
誰をかはわきて思はん夕顔のほのみえわたる垣ねつゝきに

池蓮
池水の蓮の花のすゝしきにつゆのうき身をいつかをくへき

氷室
とし〳〵の勅をかさねて氷るらしとけぬ氷室の千世の松陰

夕立風
夕立の雲吹おつる山風に庭の草はの露は殘らす

夕立雲
なる神の音もそなたに聞ゆ也いな妻のこる夕立のくも

山夕立
夕立は猶山めくる程なれやはるゝ日かけの又くもりゆく

河夕立
けふも又夕立しけりみむろ山龍田の川の水にこるまて

夕立早過
夕立のふりて又てる夏の日にぬれてほすまの袖そ涼しき

杜蟬
涼しさに鳴蟬のはのうす紅葉秋にもにたる杜のかけ哉

樹陰蟬
吹おろす松の下風涼しきに麓に蟬の聲そ聞ゆる

松下水
岩井くむ袖の雫やむすふらんまつこぬ秋をまつの下露

夕納凉
夏ふかき太山の里の通路もかたへ秋なる松の下風

樹陰納凉
松かけや立よる計りありしよりまたきも秋の風そ身にしむ

納凉忘夏
野中なる木陰に夏をわすれ水しはしかきやる袖そすゝしき

六月祓
夕かけてあさのはなかすみそき川夏もみなとに成にける哉

秋二百首

立秋朝
今朝の間はまた白露も置あへぬ袖にそかよふ秋の初かせ

立秋天
秋風の身にしむからになかむれは空さへかはる雲の色かな

立秋日
あかねさす今朝の日影やいつしかと秋たつ空の紅葉成らん
立秋風
浅ちふの小野のしの原風そよき人しるらめや秋立ぬとは
立秋露
白露の玉まく小野のくすかつら風よりさきに秋やくるらん
初秋曉
さ夜ふかく寝覺さりせはきかましや人よりさきの秋の初風
初秋夕
風の音の荻のはすさむ今よりや秋を夕とおもひそむらん
初秋夜
なかしとも思ひそはてぬさゝ枕一夜二夜の秋のはしめは
初秋雲
夕暮の雲のはたてやしるからんけふよりかはる秋の詠に
初秋衣
いつしかも恨みむとはたおもはねと衣吹かへす秋の初かせ
待七夕
棚機の待まやいかに久方の空たのめせぬ契りなれとも
七夕雲
詠れはおもふさまなる雲そ立これやあふせのあまの川なみ
七夕霧
あまの河霧のたえまに袖みえて棚機つめも今渡るらし
七夕橋
秋くれは絕てもたえぬ契かな又やよりはのかさゝきのはし
七夕衣
七夕のいほはた衣いかなれはひと度きつゝ夜をはかさねぬ
七夕船
波とともにはや漕よせよ天川秋たつ空の妻むかひ舟
七夕後朝
棚機の今朝の別の袖になく露はかはかしあはむ秋まて
曉露
夢路には篠分しとも思はぬに寝覺の袖のなとや露けき
朝露
今朝はまつ秋しる袖そしほるなる人は草はの露ならね共
夕露
宮城野の露に吹しく夕風に木々の雫もをきそはりつゝ
夜露
秋の野の草はことにや結ふらんきやとる人のつゆの手枕
野露
ぬしやたれとへとしら玉いたつらに結ひ捨たる野への露哉
原露
をく露を忍ふか原の下紅葉うつろふ草に秋風そ吹
徑露
袖の露そわくれはまさる旅衣すそのは草のあさみ成けり
故郷露
わすれなく秋とふものは故鄕の蓬かつゆをはらふ夕かせ
庵露
をく露の玉のうてなとみかく哉はなもてかさる萩のかり庵
庭露
庭もせに置ける秋の露そとは夜鳴むしの聲にこそしれ
草露
朝霧の晴てくもれる草の上に夕露いそく野への秋かせ

浅茅露

おしからぬ浅茅なれはやみたすらん花なき草の庭の白露

苫露

秋の色にそまらぬ苫のふかみとりわきて露置かひやなか覧

袖露

身の秋はいにしへとてもうかりしに置そはりたる袖の露哉

枕露

手枕の露をはつゆとみせもせて哀落そふわか涙かな

夕荻

我爲にくる秋ならはかとさしてとはれさらまし荻の夕風

夜荻

物思へとするわさなれや終夜夢たにみせぬ荻のうはかせ

江荻

住の江や波よる岸の秋風に聲うちそふるまつの下おき

庭荻

うき事のかきりとせむる風の音に心みたるゝ庭の荻はら

簷荻

軒ちかき荻のはかせに誘はれてそこはかとなき袖のつゆ哉

野萩

夕日かけうつろふ小野の萩か花後みむ爲におらてかへりぬ

行路萩

ほさはやな秋のはき原今朝たちて片敷まゝの袖の花すり

河萩

紫の色なる波もくゝるらし萩ちる頃ののちの玉かは

崎萩

眞萩さく野嶋か崎のあま衣ほさていくしほ花に染らん

庭萩

花の色はあたに散とも庭のはき露の下葉を猶染てみん

女郎花靡風

風にのみなひくとみれは女郎花さそな心を露も置らん

野女郎花

いにしへの野中ににほふ女郎花もとの心の秋もつらしな

徑女郎花

名のるへき花の名ならぬ女郎花遠方人もいかゝこたへむ

岡薄

白妙のゆきゝの岡の花すゝき袖ふりはへて誰まねくらん

原薄

しつかうへぬ山田の原の村すゝきこれも秋とてほに出に皃

徑薄

信濃なるほやのすゝきも打なひきみかりののへを分る諸人

苅萱風

さゝかにの糸をはすへに刈萱は風の亂れのつかねをやなき

岡苅萱

秋ことにつゆを岡への宿とてや風もかるかや音のたえせぬ

庭苅萱

先なひく上葉のつゆは風に落て下みたれなる庭のかるかや

蘭薫風

主しらぬ風のにほひを尋きてそれかとみつる蘭かな

蘭露

藤はかま嵐のくたくむらさきは花より落るつゆにそ有ける

野蘭

ふしはかま綻ひにけりさゝかにのいとや野毎にかけ渡す覧

籬槿

みすもあらすみもせぬ色のあやしきは霧の籬の花の朝かほ

曉虫

秋ふけぬをのかたのみも長月や有明の月を松むしのこゑ

夕虫

日はくれぬと思ふは山のかけ野よりまつなき初る松虫の聲

夜虫

夜やさき〔さむきイ〕み衣やらすきとにかくに思ひ亂るゝはた織のこゑ

野虫

秋の野の錦にあけるきり／＼すたかためとてかつゝりさす覽

原虫

しるらめやをのゝ篠原忍ひあへすねになく虫の思ひ有とは

徑虫

むまやちや風のよさむになるまゝに鈴虫鳴て秋そ過行

菴虫

むしの音よあなかしかましうき事はきかしと思ふ草の庵そ

庭虫

虫のねのおもひたえゆく淺茅生に世はうしときく庭の松風

閨虫

聲よはるねやのあたりの蛬枕のうへのそこともなし

聞虫

床はあれてたか秋ならぬ虫の音をふるき枕の下に聞哉

曉初鴈

幾里のね覺の空をわたるらむ夜さむをつくる初鴈の聲

夕初鴈

夕くれのかりの涙やいとゝしく遠かた野への萩の上のつゆ

夜初鴈

いまこんといひてわかれし鴈かねの思ひ出てや月に鳴らん

雲間初鴈

雲わくる衣かりかね月にきて秋のこよひにあはむとやする

山初鴈

鴈金のきこゆる空もたひなるに秋風わたるさよの中山

峯初鴈

ふしみ山松ふく風にみねこえて田面におつる初鴈の聲

遠初鴈

秋風を月にたくへてうしろより鴈金さそふしるへにそやる

近初鴈

山田もる賤か庵に家居して秋そなれ行初かりのこゑ

初聞鴈

あやにくによきてと思ふ鴈金のまつ我宿を鳴渡るかな

初鴈幽

秋風にたゝよふ霧のほのかにも鳴はいつくそ初かりのこゑ

朝鹿

朝霧になほ妻こめてなく鹿はをのか別やしたひわふらん

夕鹿

身の秋と思ひそめにし夕暮をたかしらせてか鹿も鳴らん

夜鹿

いつよりか我もしかとはしられ劒なけは鳴るゝ秋のね覺を

山鹿

聞わひぬあらしの風も鹿の音も今は野山のちかきしるしに

谷鹿

みむろ山夜半の谷風吹まゝにみねよりおろす棹鹿の聲

岡　鹿

水くきの岡邊の眞葛吹風にうらみてのみや鹿も鳴らん

野　鹿

おほつかな野に鳴鹿の妻こめにやへかきつくる秋霧のうち

原　鹿

しなか鳥ゐなのふしはらふしわひて今宵も鹿や鳴あかす覽

海邊鹿

はりまかたすまの浦風波こえてあはちのせとを渡る鹿のね

田　鹿

つれもなき人をたのもの秋風も身にさむきよと鹿そ鳴なる

野　鶉

おはなちる野風を寒みよもすからとふしかくふし鳴鶉哉

江　鶉

まのゝ浦尾花かもとをたつ鶉床もや波の入江なるらん

里　鶉

ふか草や住こし里は秋ふりて夜半の鶉そ床めつらなる

曉　鴫

あかつきの鴫の羽音にねさめしてみぬよの夢の數そ積れる

澤　鴫

鴫のたつさはへの霧のへたてにて羽音計そそこと聞ゆる

田　鴫

人やねぬ田面の鴫も立にけり庵守月の明かたの空

秋田風

よしさらは風に任せよみたやもり吹は鳴子の音のみそする

秋田露

秋の田は涙ならても置露をいなおほせ鳥におほせつる哉

秋　雨

雨やまぬ草の庵のなかきよは思ひのこせるいにしへそなき

山　霧

いとゝ猶問へきかたもしられぬは霧立くもる秋の山もと

野　霧

宿や猶分つる方に有間山いなのゝ末はきりのゆふくれ

關　霧

霧深きとや／＼鳥の道とへは名にさへまよふむや／＼の關

河　霧

しからきや山さへ霧にへたゝりて水上とをきうちの川音

浦　霧

すまの浦はあまの苫屋もへたゝりて霧の絶まに海少しみゆ

駒　迎

東より今やひくらむ曇なき御代のためしの望月のこま

八月十五夜

すゐちかき老は何とかなかめまし秋は半の中空の月

夕　月

下ひものゆふへの山の高ねよりめくりあひても月の出らん

夜　月

なかめつゝ更行月の影なれやわかもとゆひの秋のよの霜

曉　月

月は猶ふくるもしらぬ手枕に曉しるきかねの聲かな

山　月

これにます都のつとはなき物をいさといはゝやをは捨の月

嶺　月

みよしのゝかさなる山の峯ことに幾度まちて月をみつらん

谷月

月に見るきひの中山雲はれてほそ谷川の影もさやけし

杣月

杣人も心有けり秋は猶月もれとてや宮木引らん

岡月

あかしかた浦ちは月に問なれつすまひゆかしき岡の家かな

杜月

秋の色を月に殘して終夜木すゑをはらふ木からしの杜

野月

分のこす草葉のすゑは明そめて月にはてあるむさしのゝ原

原月

忘れすよ一夜ふせやの月の影なをその原の旅心ちして

關月

都にてかすみし月もさやけきに秋風のみか白川のせき

徑月

月そ猶くもらさりける宮城のゝ木の下道は雨にぬるれと

橋月

よさのうみや松の梢に風ふきて月すみわたるあまの橋立

水邊月

山の井のにこれはかけも曇けりわか手に結ふ月ならね共

池月

秋は猶影をます田の池なれや曇ぬ月はいつもすめとも

澤月

ふしのねの雲井に消ぬ雪の色も今宵や月になるさはの水

沼月

奥山の岩かき沼にやとる月の光をせはみあかぬ夜半かな

江月

波たてはやとりそかぬる芦鴨のさはく入江の秋のよの月

瀧月

瀧つせの中にもよとゝみえつるはなかれぬ月のやとる成息

河月

初瀬川わたる瀬さへに月そすむ秋行水はにこらさりけり

湊月

影やとす袖は涙の湊かとつきの御舟のよるそしらるゝ

浦月

もしほやく煙もなくてしかの浦のにほてる月はさそな澄覽

濱月

さ夜なかと夜さへふけゐの浦風に興津波間の月をみる哉

磯月

更ぬれは人もこぬみの濱風に月よよしとはあまやみるらん

汀月

名殘なく入ぬる磯の月影を猶こふらくのなみのをとかな

崎月

すみなれていくよになりぬ天川遠き汀の秋の夜の月

嶋月

からさきの月や波間をめくるらんふくれはかはる松の陰哉

潟月

秋はすむ月そ嶋もりあらすなよ波と風とに人めたゆとも

泊月

影あれはまさこも露になるみかた月にほされぬ鹽ひ成けり

からことの泊しられぬ月のよに音吹たつるうらの松かせ

渡　月

家なしと聞そあやしきかくはかり月はすみけるさのゝ渡を

田　月

早苗とる人とや我な思ふらん月の爲こそねられぬ物を

都　月

野への露磯の波にもやとらしな都の月はいかゝすむらん

禁中月

あきらけき雲井の月をみし秋も思へは君か光成けり

社頭月

神かせやみもすそ川の秋の波すまむ限は月もくもらし

古寺月

うはそくかをこなひ置し跡とへはよしのゝ寺に有明の月

故鄕月

故鄕の軒もる月のかけなれや詠る袖の忍ふもちすり

村　月

秋のよのあくるもしらぬ月かけに鳥のねつらき里の一村

里　月

此さとに旅ねしつへしさら科や月を都のおなし空とて

山家月

瀧音松の嵐もさもあらはあれすめはすまるゝ月にまかせて

庵　月

人はなし都のたつみ月そすむ世をうち山も秋の庵は

庭　月

夜な〳〵の嵐の庭に影みれは淺茅をしなみ月そうつろふ

井　月

あさしとはたれか思はんすむ月の影もうかへる山の井の水

閨　月

ひとりぬるわか手枕の雫ゆへ月も露けき閨の秋風

隣　月

今こそは隣の人もめはさませ我のみ月にねぬよしられて

閑居月

槇の戸に月を深山の影ならてまた待出る友もなき哉

舟　月

住よしのほそ江こき出るあま舟の芦間あらそふよはの月影

惜　月

有明の月の名殘も大原やさそなをしほの山の秋かせ

里擣衣

秋さむみつねにあらしの吹里は砧の音そ隙なかりける

夜擣衣

つゆにたにあてしとおもひしから衣霜とおきゐて幾よ打覽

聞擣衣

聞にこそ哀も月も色まされ秋の爲とや衣うつらむ

遠擣衣

野か山か里ともなき秋風の空にたくひて碪うつ聲

近擣衣

秋風や夜半の枕にさそひきてたゝこゝもとの砧うつらん

秋夜長

いくよろついく千たひして賤かうつ衣のつちの夜を明す覽

野　分

野分せし風の名殘のそのまゝに草も朝臥つゆのしの原

葛　風

色うすきみねの葛葉やかへすらん錦にあける秋の山風

径　葛
枯そむる草はも根にやかへるらん秋行道の葛の下かせ

垣　葛
しかりとて又かへるへきうきよかは小篠か垣の葛の秋かせ

野草欲枯
風の音もをのれかれてそかはり行秋ならうらみそ小のゝ葛原

栽　菊
枯はてむ後の爲とそ植置しあさちにまちる庭の白菊

菊　露
菊のうへに置てそみまし秋草の花ゆへ名たつ露のあたもの

山　菊
もみち葉のふりかへしてし山路より尋てみつる菊の一もと

谷　菊
仙人の住家やこゝとしらきくの花のかけみる谷川のみつ

水邊菊
池水に咲てうつろふ菊の花天の河原のほしかとそみる

尋紅葉
いささらはふかきかきりを尋みむ紅葉の色も秋の山路も

初紅葉
立田山木々の梢の初紅葉今朝の時雨にまつそおほゆる

蔦紅葉
うつの山わくれは錦中絶て袖にもかゝるつたの紅葉は

柞紅葉
秋にあへすうつろふとみし梢よりやかてかつちる柞原かな

櫨紅葉
ゆく雲の外山にうすきはし紅葉猶おくみせぬ秋の色哉

山紅葉
初時雨降さけみれはみかさ山名にもかくれす紅葉してけり

峯紅葉
秋ふかき色を日ことにつくは山峯の紅葉や猶時雨らん

谷紅葉
照日ともこれをやみまし谷陰の岩かき紅葉色しふかくは

岡紅葉
夕あらし又時雨行片岡のもみちの色をあすはきてみん

杜紅葉
もみちはの色に心を染置て散はなけきの杜そさひしき

行路紅葉
あすもみむたつた初瀬の初紅葉時雨と友に山めくりして

瀧紅葉
山姫も瀧のしらいとくりためて紅葉の錦いまやをるらん

河紅葉
陰うつす紅葉は色にわかねともふかきあさきは瀬々の河波

岸紅葉
河岸に半さしおほふ紅葉はのしつくの色は浪やそむらん

古寺紅葉
古寺のかはらの松は時しらて軒端の蔦そ色ことになる

遠村紅葉
山本の秋の木すゑをみわたせはたゝ一村のにしき成けり

里紅葉
色もしるしさそやしくれも秋篠や外山の里に染るもみち葉

垣紅葉
山かつの柴のかきほにあやしくも紅葉かさねの袖の出つる

庭紅葉

庭の紅葉秋のかたみの色なれはこきもうすきも哀とそみる

簷紅葉

秋の山木下庵は枝なからもみちをふける軒はとそみる

松間紅葉

高砂の尾上にましる下紅葉松ならなくに折てかさゝむ

竹間紅葉

呉竹のは山かくれの下紅葉時雨は猶も秋をわけけり

紅葉染雨

いかなれは時雨はそむる木々の色を立秋霧のうすくみす覧

紅葉映日

日にもほし風にもほしつ紅にそむるもみちの千しほもゝ入

紅葉移水

大井河ちらぬ木すゑの影なれや流れもやらぬせゝの紅葉は

紅葉如錦

たつた姫松にもみちをこきませて都の外の錦とそみる

暮秋風

草も木もしほれはてぬる山風に秋をとめてもあきやなか覧

暮秋雲

あすよりはしくれんとする浮雲のしはしくれまつ秋の空哉

暮秋露

はかなしや思へは露のあたものを秋のかたみと袖にをきつる

暮秋雨

曇れかし夕の雨にことよせて今宵はかりの秋をとゝめん

暮秋霜

霜置は浅茅か原もむしの音も秋よりさきに枯そはてぬる

九月盡夕

小倉山入あひのかねの聲のうちに麓の秋は暮やはつらん

九月盡夜

さてもぬる人や有らんかくはかりおしと思ふよの秋の別に

九月盡曉

えそしらぬ曉かたの袖のしも秋の名殘か冬のはしめか

冬百首

初冬曉

曉の峯のあらしに冬のきて秋に分るゝよこくものそら

初冬朝

このねぬる朝けの霜のをきてみれは跡なき庭に冬はきに鳧

初時雨

にわかにも何か思はん神無月つき日さためし今朝の時雨を

山時雨

あし引のやまかきくもる今朝のまやまた里しらぬ時雨成覽

峯時雨

雲かゝる峯の嵐やしくるらむふもとの日影はれくもりする

谷時雨

むら時雨ふりとふりぬるまゝなれや照日もしらぬ谷の下影

杜時雨

枝もはもうつろふ杜の初時雨はては立よるかけやなからむ

關時雨

いねすきく關やの軒の村時雨さてもすきなはもるかひやなき

野時雨

木下や風にきほひてしくる覽みかさとりあへぬ宮城のゝ原

河時雨
みかさそふほとはふらしなしくる共猶舟いたせ淀の川をさ
里時雨
あまつ空風こそかはれこの里はいつくの雲の時雨成らむ
閨時雨
ねやにふる時雨の音は過つるにさのみもるへき床の上かは
曉落葉
有明の月をかたみの手枕に秋をたつねてちる紅葉かな
朝落葉
終夜窓うつ雨と聞つるをけさこそ四方の木のはとはしれ
夕落葉
ゆふ嵐雲のはたてやさそふらん天つ空より散木のは哉
落葉隨風
久方の月のうへよりこく船は風になかるゝ紅葉なりけり
落葉混雨
木のは吹風のゆきゝや變るらむぬれぬ時雨そ山めくりする
山落葉
いつくより紅葉を風のさそふらん山には秋もなしと聞しに
谷落葉
谷ふかみいかにちれとか山風の紅葉吹あけ吹おろすらん
路落葉
紅葉はの散なはいとゝうつの山うつもれやせん蔦の下道
橋落葉
ふきやまは中やたえなん紅葉はを風のかけたる谷の浮はし
庭落葉
吹立る風にくもりて月影の木のはかくれを庭にみる哉

野霜
色かはるかたちのをのゝ霜枯に秋みし花の面影もなし
田霜
霜さやく音こそのこれ山かせの吹やかり田の跡のひつちは
庭霜
朝また庭の小さゝに置霜の葉分の風の音の寒けさ
草霜
庭の面はあさけの霜のふるよもきたかわけ侘し跡とかはみん
篠霜
朝またき霜にしみつゝ玉さゝのかれせぬ色も青葉とはみす
谷寒草
いかはかりてる日もよそと霜ふかき谷のかけ草風さやく覽
岡寒草
朝日かけもりこぬ松のしけ岡に猶風さやく霜の下くさ
野寒草
鶉たにふさすなりにしふかくさの霜をくのへをとふ嵐哉
原寒草
霜さやくいなのさゝ原中々にかれぬもさむき風の音哉
庭寒草
ふる郷はとはれし跡も今みえてはたれ霜ふる庭の村草
池寒蘆
汀なるあしのしけみも枯はてゝその名しらるゝ廣澤の池
江寒蘆
うへは霜下は入江の氷にていやかたまれるあしの一むら
湊寒芦
しほれあしのおちはましりに氷とちて猶わけかぬる湊舟哉

谷氷

氷とちて谷のひゝきはなけれとも岩間にむすふ松の下風

瀧氷

石はしる瀧もこほりて山人のましは折くる道はさはらす

湖氷

すはのうみや波ものこらす氷鬼神のみわたり今宵すらしも

田氷

里とをき田な井のし水人はこて氷そむすふ朝な夕なに

縣樋氷

今はたゝよそのかけひと成にけり氷のしたをくゝる水音

冬寒月

ふけはちる紅葉になれて木の間より落たる月をはらふ山風

冬月冴

秋たにもよさむすゝめし月影をあらしの庭に宿してやみん

曉千鳥

おきつかせさゆるうしほに月おちて鳴や千鳥の曉のこゑ

夜千鳥

よもすからかよふ夢ちの友千鳥さむる枕にあとやのこさん

河千鳥

名にもきくいも瀨の河のさ夜千鳥鳴音を寒みいつち行らん

浦千鳥

わかのうらの波に跡なき友千鳥立かへらはと御代や待らん

濱千鳥

濱千鳥むかしの友の跡みてもひとりなきさけ音社なかるれ

池水鳥

岩のうへに旅ねやす覽こほる池の波にかさねぬをしの毛衣

河水鳥

なつみ川こほりかねたる早きせを浮ねの床と鴨そ鳴なる

夜網代

河なみのよるこそみつれ網代木にひをまつものと何思ひ劔

網代寒

とけてぬるひまはあらしな網代守氷の床のよはかさぬとも

竹霰

なよ竹の夜なかきうへに玉霰ふるをとさむみい社ねられね

篠霰

さえにけり霰みたれてこきちらす玉の小さゝのよはの山風

柏霰

時雨より音もあられの玉かしは猶冬ふかきしるしとそきく

屋上霰

散このはふりし時雨は音たえてあられさゝめく篠のやの上

ね覺霰

音はあられ袖は涙の氷にて心くたくる我ねさめかな

初雪

いままてに花やをそきと待みれはよしのゝ山の冬の初ゆき

山雪

こえぬ間はこしの白山しらさりつかくまて雪の積るもの共

峯雪

限あれは空にも今朝やつくは山つもりて高き峯の白雪

谷雪

日をへつゝかくのみ雪のふりつまは深き谷をも淺くなし南

袖雪

袖やまやたへぬひはらの雪折はたかひきおろす宮木なる覽

杜雪

老ぬとも今こそみゆれおほあらきや雪をいたゝく杜の下草

野雪

四方にみし峯もたいらに埋れて野原の雪のかきりなき哉

關雪

うちもねす關はもりけり逢坂や山路あとなき雪の明ほの

河雪

なつみ河かは音しるき山かけの氷のうへに雪さへそふる

朝雪

ひらの山うみ吹風のよこきれは空にも雪のさゝ波そたつ

浦雪

とはるへきあまのとまやは道たえて雪そ積りの浦風そふく

濱雪

今朝そみる昨日はなみの色なれやなに降そむる雪の白濱

嶋雪

すみよしの松のひまにも白雪のつもるとみゆるあはち嶋山

田雪

朝またき雪のふるたに成ぬれは氷にのこるいなくきもなし

都雪

けぬからへに猶降つもれ庭の雪都のふしとみゆるはかりに

禁中雪

九重の庭の雪間と成にけり衞士のたく火のあたりはかりは

社頭雪

神かきやとよをかひめの手向して空よりかくる雪の白ゆふ

古寺雪

すゝわけし吉野のたけに跡たえて思ひのみゆる雪の古寺

故鄉雪

みよしのや峯より花のちりくめりとおもふは風の雪の故鄉

里雪

かち人のふみわけし跡も今はなしこはたの里の雪の朝明

閑居雪

跡たえてとふ人そなき山里は雪やうきよのへたてなるらん

松雪

十かへりの千とせやゝとにつもるらん松も花咲庭の白ゆき

竹雪

山守もいふへき花の枝ならはいかにかせまし竹の雪おれ

杉雪

とへかしなつもるもしるきわか宿の雪に木高き杉の木末を

檜雪

いにしへも雪をや花と三輪の山ひはらに人のかさし折けん

狩場風

けふも又かりやのこさんはしたかの末のゝましは嵐たつ也

夕鷹狩

狩くらすかたのゝみのゝあまの川河風寒しやとはなくして

野鷹狩

御かりのゝしけみ草とるはしたかのをのか羽風も雪拂ふ也

炭竈烟

山にたつ烟をみてそ炭やきの里にいつへき日はしられける

遠炭竈

大原や雪ふりつみて道もなしけふはなやきそ峯の炭かま

爐火

山かつのたきすさみたるほたの火の殘すくなくくるゝ年哉

神樂

いつくにもこの頃たえぬ里かくら神の御國の記しなるらし

佛名

身に積る罪はのこらすきえぬ覽三世の佛の御名をつくして

年内早梅

難波津や冬こもりせぬ御代なれはいまも此花春にかはらす

年欲暮

とし月のうきはかへるも惜まれしうれしき春の近く成なは

夜歳暮

さむしろやふりそふ雪をかたしきて春待あかすうちの橋姫

山歳暮

足曳のこなたかなたにたつぬれとくれ行年の道はなき哉

路歳暮

取もあへす過る年とはしられ鳧をのれも急くしつか行きに

河歳暮

早せかは月日のよとはありてふを暫とまらぬ年なみのうさ

歳暮松

片岡の松きるしつかをのゝをとに年くれはつる限をそしる

山家歳暮

山里のとしのくれこそあはれなれ人のたてたる門の松かは

閑居歳暮

年月の行衞もしらぬ柴の戸はをくりむかふるいとなみもなし

老後歳暮

まことにや老てはいとゝ物うきと我身に年の暮をとへかし

惜歳暮

おしとのみ思へはいとによるとしの心細くもくゝるけふ哉

戀二百首

寄天戀

そなたともたかゆふ暮の空なれは戀しきたひに詠やるらん

寄日戀

つらからは誰もさてこそ山のはに思ひ入日の影をかくさめ

寄月戀

月もいさ我にまたるゝ物なれはふくるを人のとかと思はし

寄星戀

うき身にはいみそかねぬる今はたゝ一夜も星の契と思ひて

寄風戀

うき人やあつらへつけて吹風のたよりたに猶我をよくらん

寄雲戀

君かあたり霽く雲よその儘に消ははつともたちなはなれそ

寄煙戀

一つにやけふりの末は成ぬ覽むろの八島も身のたくひとて

寄霞戀

はれすのみそなたを思ふ我心やらは霞のたつ空とみよ

寄霧戀

知らめや今はかきりのあしたより曇りふたかる秋の空とは

寄露戀

たのましな秋のすさみの露はかりむすひ置ける人の契は

寄雨戀

我袖はこぬにそぬるゝいかにして雨をさはりと人のいひ劒

寄霜戀

霜をかぬ床のよかれもさえわひぬましで跡なき庭の道草

寄霞戀
よもすから玉ちる袖はねやの上に音なくてふるあられ成鳬

寄雪戀
人をのみ思ひこしちの果なれや身を白雪のつもるらみは

寄稲妻戀
たのまめや我を秋田の露の上に又いな妻のほのめかすとも

寄曉戀
曉のなくて別はうき人の心つからと猶やかこたむ

寄朝戀
わかれつる朝の床に又ねして昨日の夢のさめやらぬかな

寄晝戀
まつゆふへかへる朝はさそとなく袖のひるまは涙ならすや

寄夕戀
あた人になれすはたれか定めましけにこそ秋の夕なりけれ

寄夜戀
むはたまのよるしも人に逢そめてね〔た歟〕きくも夢にはからるゝ哉

寄山戀
山端のまつに心のかゝるかなゆふゐる雲のそらたのめゆへ

寄峯戀
いつよりか思ひつくはの峯のくもはるゝまもなき心なる覧

寄谷戀
あたしなの立をたまきとなりやせん猶谷ふかき心なられは

寄岡戀
わすれめや夢にも人をみつくきの岡の朝けにはへる面かけ

寄杣戀
かくはかりしけき泉の杣なれやなけきこるへき果そ知れぬ

寄杜戀
恨みよとしくれし色も秋かせも身にそおいその杜の言のは

寄野戀
馬はあれとかちのゝ道のをさゝ原忍ひにかよふ程の露けさ

寄原戀
あた人のふせやといひし里故に猶その原をわけまよひつゝ

寄關戀
あつま路に行かふ身とはなりしかとしらすよ君に逢坂の關

寄徑戀
よひ〳〵の我かよひちに草おひぬよしや關守たえぬ共みよ

寄橋戀
あふ事はこよひもなをやかたしきの袖に波こすうちの橋姫

寄水戀
そなたにも晴ぬ思ひときゝつれはましてそ思ふ庭のまし水

寄池戀
心をはうつさゝらめや池みつの鏡にたにも人□みなは

寄沼戀
ぬま水の今こそふかく契るとも流れてたのむはてやなか覽

寄江戀
難波江の下になかるゝ芦のねのたえぬ心をいかてしらせむ

寄瀧戀
をろかなる涙と人にみゆはかりせかはや猶も袖のたきつせ

寄河戀
やせわたるかはとのみ見て流るれと袖に逢瀬のなと流る覽

寄淵戀
逢瀬なきつらさそ積るみなの河身なくはかりの戀の淵とて

寄瀬戀
涙川せかるゝ程はせきためつ袖より外はあさせともみよ
寄湊戀
たちさけく涙の袖のみなと船わか心からよるへなきかな
寄海戀
味氣なや君に心をそくの海よえそなつさはぬゑそかち島も
寄浦戀
こりつまに恨もえ社果られね人にくからぬあまのみるめは
寄江戀
あしとても何か難波のうらみぬに其名やかふる伊勢の濱荻
寄磯戀
つれもなき人の心のあらいそにかけては波のなをやくた劒
寄汀戀
いさしらし契なきさの松の風波のよるとて聲さはくとも
寄崎戀
玉藻かるいらこか崎のなのりその名さへかひなき波の下草
寄嶋戀
戀といへは仇なる波のたはれ嶋たはふれにゝき迄にかけつゝ
寄潟戀
なるみかたさしくる鹽のいやましにふかき心と人はしら南
寄泊戀
こかれゆくはて社しられねあま小船いつくか戀のとまり成覽
寄渡戀
心あらは猶やすらひにふなてせよ人をうるまの渡ならすや
寄岸戀
河きしの松の心やいかならん契も波のかけてとはすは

寄巖戀
逢事のかたき岩ほに種まきて心からこそまつもつらけれ
寄砂戀
やをかゆく濱の眞砂をなゝかへりとる共盡しつらき數には
寄田戀
秋の田のいたつらいねと思ふとも猶かりにこし人やちき覽
寄都戀
思ひきやみし都ちにふみたえて戀のしるへを立ぬへしとは
寄石戀
たかなかすなみたの川そかく計り石となる迄かたき逢せに
寄禁中戀
あひおもはぬ人の心のへたてにやみしもゝ敷の遠さかる覽
寄社頭戀
我祈るちきのかたそきかたからはゆきあひの間の名をも賴まし
寄寺戀
なにを我いふ事とてか足引の山のこてらもつれなかほなる
寄里戀
蛩のすむ里のしるへのつらけれはいさや忍ふの恨しもせし
寄庵戀
山ふかみ庵も人のとへはこそゆふへの風の松にふくらめ
寄門戀
さしてこそ契らぬいもか門にたに杉はつれなき知し成けり
寄戸戀
わきもこかかとての姿ほのかにもみし面影そ月におほゆる
寄垣戀
八雲たつその八重垣の神代たにすむなる物を妻こめのため

寄籬戀
やまかつの柴のまかきもくるしきは人めを忍ふ道の通ひち
寄庭戀
置まよふ霜のふりはの跡なから猶やかたみの水くきのをか
寄井戀
深しとも思ひをいかゝ比ふへきほりかねの井の底をしらねは
寄屋戀
東路の埴生のこやに如何せんとはて日をふる程のいふせさ
寄柱戀
契のみあさきの柱我なからうらみしふしそ今はくやしき
寄簷戀
心から人を軒はのふるさとも思ひ出てやまたまつのかせ
寄窓戀
明そむる窓のすき間もつらき哉しはしと思ふ今朝の別に
寄床戀
はらひても又こそつもれ塵ひちの山も心も思ひ寝のとこ
寄閨戀
あれまさるねやのすき間の山風やこぬよもしらす塵拂ふ覽
寄隣戀
吹かはす木末の風もいたつらにしるへとならぬ我中そうき
寄簾戀
玉たれのこすはこすとてやむへきに心にかけて猶や待らん
寄初草戀
あさましや人の思ひのはつ草もいまそ雪間にもへ出ぬへき
寄忍草戀
しられしな軒はに朽る草の名よこは忍ともいはゝ社あらめ
寄忘草戀
うき人の心よりまくたねなれは冬もかれせぬわすれ草哉
寄思草戀
かくろへて尾花にましる草のなの思ひはいかゝほに出すへき
寄下草戀
そむるとは時雨もしらし露もみしらうへはつれなき松の下草
寄月草戀
はかなしやわか身はこゝろ月草の花すり衣人にうつして
寄葵戀
今そうきけに其かみの契ならはあふひ空しき挿頭ならめや
寄菖蒲戀
珍らしき今日の軒はの菖蒲草ふりにしつまと誰かみるへき
寄薦戀
とへかしな露のやとりのまこも草かりねはあたの契なれ共
寄菅戀
うしとのみいはもと小菅うちはへて幾夜ねかたき人を待けん
寄葛戀
これも又恨みよとてのしわさ哉まくつか風のかへす言の葉
寄萱戀
白露の玉をかやのかりにたに亂れそむとは人にしられし
寄淺茅戀
やたののあさちか末そ色かはる人やあらちの秋のやま風
寄蓬戀
よもきふのふるき例もあるものを思ひなたえそ庭の通ひち
寄芝戀
みち芝のつゆわけわひし朝の袖あはてこしよといはぬ計そ

寄苔戀
よしやその苔の下までしるへせよ此世にかきる戀の道かは
寄蘋戀
さそはるゝ身のうき草もあたなりや思はぬ水の流成せは
寄藻戀
早きせに根さしとゝめぬ流れもの流れてのみや亂れわふへき
寄沼縄戀
またきよりよそにいはれの池に生るねぬなはさ社苦かるらめ
寄海松戀
假そめの蜑とそせめてなりなまし人をみるめに慰むやとて
寄松戀
しなはしね心つくしの松原よいきては人をおもふものかは
寄椿戀
うき事もしら玉つはき花咲は二たひちきれあらたまるかと
寄榊戀
神かきにさしていのりし榊はのいつとも知ぬ色そかひなき
寄杉戀
尋ねつゝなとかは人も三輪の山しかもかくさぬ杉の木梢を
寄檜戀
つれなしとみえしひはらも老ぬれは悲しむ色の絶ぬとをしれ
寄槇戀
幾度もしくるとみせて峯の雲つれなき槇の名をやたてまし
寄椎戀
しいかもとふかき契をしるへにて猶立よらぬ陰はかはるな
寄桂戀
おりそへし桂の枝をかさしても猶そのかみのあふひ忘るな

寄楢戀
今はうき心のあきにならしはのならしかほなる風の音かな
寄柏戀
玉かしはたまさか人をあひみても忘られなくに忍はるゝ哉
寄桐戀
松にふくゆふへの風はむかしにて桐のは落るふる里のあめ
寄柞戀
秋といまいはたのをのゝいはね共ことのはしるき柞原かな
寄櫨戀
うき名をも今はたち枝のはし紅葉これを初めの秋の色とて
寄楸戀
おもふ事いはてありその濱ひさき久しくならは朽やはて南
寄常盤木戀
鹿の音もまたしき杜のときは木に今や人こそ秋をしらすれ
寄杣木戀
ひかれつる心のつなていかはかり戀の山なる杣木ならまし
寄宿木戀
やとり木のかりの契と思ふなよかれなてねつく物と知なん
寄鹽木戀
徒にこりつむあまのしほ木哉またきもからき思ひをそしる
寄朽木戀
いはてのみ心くち木となるものを今更いかゝ花になすへき
寄埋木戀
山河のあさせにしつむ埋木もあらはれぬへきあた波そたつ
寄鶯戀
鶯となく音にたえぬ我身かなよそには春のさかと聞共

寄雉戀
春ののにとひたつ雉もたれゆへに鳴てほろゝと涙おつらん
寄郭公戀
身にしれはまちてもきかし時鳥人をう月の夜半の忍ひ音
寄水鷄戀
忍ひ妻まちならひたる槇の戸をあなかまくひな何たゝく覽
寄鴈戀
かくはかりうき秋風のをとつれに鴈かも鳴て涙そふらん
寄鶉戀
今はたゝ人をも身をもうつらとやいはれの野への秋の夕風
寄鴫戀
あはぬよの辛きかすをは曉のしきのはかきもかき盡さめや
寄鵙戀
尋ぬへき人はありともかひなしやもすの草茎そこと知ねは
寄鳩戀
今きけはうとかるへきもうとからす有しかのよの家鳩の聲
寄千鳥戀
戀わひてなくねにまかへ友千鳥思ふかたよりせめて通はゝ
寄鳰戀
あしねはふみきはかくれのにほ鳥の下の通路猶さはれとや
寄鴛戀
いかにせんねにゆくをしの契たにうちとけかたき池の氷を
寄鴨戀
ぬるかものあしのいとなき薄氷さのみやくたく心ひとつを
寄鵜戀
篝火の影には水もぬるまねと人をうふねそ波にこかるゝ

寄鷺戀
鷺のいるゐくひにかゝるあた波もおり立て社淺しとはしれ
寄鵲戀
時しもあれ詠る空にあやしきはそなたをさして渡かさゝき
寄鷹戀
あふことも又やなからむかり人のたはなす鷹の心しらねは
寄山鳥戀
倍てぬるよるの隔てはいかゝせんたちたによらぬ山の山鳥
寄鷄戀
しらせはや鳥の八聲は過ぬれと猶なきぬらす今朝の涙を
寄鶴戀
うらみはやねを鳴たつのすり衣今日計りとは契らさりしを
寄熊戀
うつほ木の中のすみかよさらす共心のくまをしる人やある
寄虎戀
唐國のとらのためしは聞つれと戀に身すつる人はあらしな
寄馬戀
今も又へたつときけは故郷にもとこし駒もかひやなからん
寄猪戀
あらちをのかるやのさきに猛る猪も人の戀にそ身をはかふなる
寄鹿戀
色かはる小萩かもとにうらふれていつしかのねに鳴と聞覽
寄蝶戀
おもひわひぬせめて小蝶の夢も哉心の花のたのしみにせん
寄蛙戀
明やすき夜はの門田の通ひちに鳴て歸るの名さへうらめし

寄螢戀

なにせむに袖の螢をつたむ覽さらてはもえぬ我思ひかは

寄蛬戀

ねにたてゝ人にきかるな蛬枕のみしるおもひならすや

寄松虫戀

松むしの聲するかたにやとも哉つれなき人も我をとふやと

寄鈴虫戀

戀をのみ猶鈴虫の音に鳴てけにうきことはふりかたのよや

寄織促戀

身のうさも人のつらさも立ぬきに思ひみたるゝはた織の聲

寄蛛戀

頼めすはたのまさらましさゝかにの糸かく計りつらき夕を

寄甕戀

頼ますは親のこふこの果をみよかく社つゐに二こもりすれ

寄我柄戀

淺ましや人をも如何かこつへきもにすむ虫と身はしほれつゝ

寄玉戀

いかにせんみかけとさすかきよからぬ涙の玉の袖にみえなは

寄鏡戀

かひなしな人のかたみのます鏡わか影ならぬかけは寫らす

寄匣戀

かたみさへ今は涙のみくしけよしやふりぬる身とて返さん

寄櫛戀

今はさはなにゝ心をつくし櫛くさして待れし頃もすきにき

寄鬘戀

我のみや心なかくも玉かつらかけて契のすへをまつへき

寄本結戀

いつしかとはつ元結のこむらさき色に出つゝ打とけねかし

寄枕戀

君くやとまつうちはらふ手枕の塵につけつゝたつうきな哉

寄席戀

すきぬれはうつゝを夢にすか席おもかけ計しき忍ふ哉

寄衾戀

年月は君とふすまの床なれてこぬよをのみそ夢かとは思ふ

寄裳戀

今はよし忘れもせはや忘られぬせこかもひきのあかぬ姿を

寄衣戀

よゝとなく泪のいろやくれなゐの八入の比も忍ふならても

寄紐戀

かひなしやさそと心をいれひもの人にむすひし契とけすは

寄帶戀

よしさらは人をは戀しひたち帶のむすふ契を神にまかせて

寄書戀

かへりけんその道芝や露ならし今朝ふみみつる袖もぬれ鳧

寄繪戀

君か邊りさらぬのみかはゑに書る鳥は浮寢も立しとそ思ふ

寄硯戀

いはゝやと思ひたつよりかきくれてすゝりの水にそふ涙哉

寄筆戀

とりをきしことのは毎に今みれはかはらぬ物そ水くきの跡

寄笛戀

たのましな一夜にかきる笛竹のそのうきねをは調へかふ共

寄箏戀

いかにせむかきなす事のするのをの絶なんとする心細さを

寄弓戀

するまてもいかゝたのまん梓弓ひく手によらぬ心つよさを

寄箭戀

さりともと頼みしものをものゝふのもろや空しき我契哉

寄扇戀

うかるへき人の心の秋風をねやのあふきやならしそむらん

寄蓑戀

ふる雨のみのしろ衣かひなしやきても涙のひるましらねは

寄笠戀

よしさらはぬる共ほさし雨にきる我袖かさと人にしらせて

寄絲戀

あちきなやうき一すちに白糸のいかなる節な思ひわけけむ

寄錦戀

あらはれはいとゝ我身の唐錦たゝまく惜き名とはしらすや

寄挿頭戀

たか爲もたゝは浮名そつまにおふる事なし草は我もかさゝん

寄手向戀

あはれとは神もみよとて袖にちる涙の玉を手向つるかな

寄秡麻戀

かつなひく神の心のおほぬさはたのまれすともまつや祈覽

寄木綿戀

榊葉のつれなき色にかけつれはいさしらゆふの靡く共みす

寄四手戀

神かきやしてに風ふくあさな〳〵人もなひけと祈りつる哉

寄注連戀

神やみしいはせの杜のいはてこそ心のしめはつゐに朽ぬれ

寄車戀

おもひやれその小車のくるまたに心にかゝるよその人めを

寄船戀

恨てもわひてもはてぬおなし江のたなゝし小船漕はなれ南

寄揖戀

あらいその波にかちとる舟人のひまなきものは戀ち成けり

寄帆戀

戀わひてなくねほにあくる物ならは舟路を遠み通はさらめや

寄碇戀

波におろす港の船のいかり繩くるしやつゐに身を沈めつも

寄苫戀

しらせはやとまのしつくに袖ぬれて舟こす波のかゝる恨を

寄網戀

遠つ浦にあことゝのふる聲す也ひけはよりくる戀の道かは

寄綱戀

契しになにをまさきの綱とてかかけてはたえぬ物といふ覽

寄繩戀

打はへて苦しとそ思ふ今よりはなかき恨のあまのたくなは

寄泛戀

なみにうくあまのうけなはくり返し契し末そ猶定めなき

寄筏戀

おほつかな早瀨さしこす筏師のとゝこほるへき今日の暮かは

寄篝戀

篝火にあらぬ我身の思ならは浮世にもえてきえさらめやは

寄濈盡戀

浪速なる名にはたつとも身を盡し何かは深きしるし有へき

寄貝戀

あら磯やあふこと波のうつせ貝さのみ心を何くたくらん

寄斧戀

まてと云しわか中にしもあちきなく斧のえくたす山や有劔

寄答筲戀

たのましや人の心の花かたみめなろふかたに移りやすさは

寄燈戀

徒にかゝけつくしつなかきよは物思ふ身のともし火のかけ

寄鏡戀

まつもうしわかれもつらし聞たひに心つきぬる鐘の音哉

雜二百首

山榊

おとこ山峯の榊のはをしけみさかゆく君か影そあまねき

峯椿

千とせをやかす〳〵峯の玉つはき又あらためむ影そ久しき

澗槇

おりふしのうつるもいさや谷ふかみ槇の梢の色しわかねは

麓柴

ましはおふる山の麓をたつねはや妻木とるへき宿もある覽

杣檜

杣やまやしけきひはらの中をみよ老木も人の引ぬ物かは

杜柏

今ははや時雨も杜のもと柏梢のちりて後そうつろふ

岡椎

わきていつの嵐を寒み散ぬらんもみちせさりしをかの椎柴

濱楸

七十年の波おりかへる濱ひさきひさしや我身汐たれてのみ

礒松

吹おろす風になひきて礒の松のをよはぬ枝も波はかけけり

門杉

のかるへき人たにあらは数をかんうきよの外に杉たてる門

窓竹

名にしける園生の窓の竹の子よ元のねさしも数ならぬよに

籬草

故郷は庭もまかきもしらつゆのやとる草はと成にける哉

庭苔

いはほとはまたならね共故郷は庭のまさこに苔そむしける

簷忍草

忍ふ草おふる板間はみえね共葉末もりくる軒の雨かな

岸忘草

住よしの神代ひさしき岸にしもうたておひける忘草哉

野篠

我宿はさゝわくる野を道にしてあさゆふはらふ袖の上の露

路芝

古郷の庭のしはくさ今はまた忍ひてかよふ道もたえにき

沼芦

隱ぬにみかゝれなから芦のはの猶よにあれやこと茂くして

江菅

みなと風ふく度毎にうちなひき入江によする波のしらすけ

河藻

河のせの玉もにふかくみかくれて岩こす波の音もきこえす

名所山

位山身にのほるへきうへもなし老のさかさへ峯をきはめて

名所峯

行するゑをくらふの山の峯の松君か千年に數はまさらし

名所岡

水くきの岡のやかたは名もふりぬみて忍ふへき跡やなか覧

名所杣

あさな〳〵あつさの杣木たなひけは峯の嵐の聲あはすらん

名所杜

身につまむ物とはさらにしらさりきよそにうき田の杜の下草

名所野

春日のゝとふひのゝもりいとまあれや治れる世の光のみ見て

名所原

かす〳〵にそのなをとはゝ語らなむ幾代の人にあふの松原

名所關

玉ほこの行來とかめぬ此頃やふはの關やもいとゝあるらん

名所路

通ひこし方はいつくそあつま山雪にうつめるみほの中みち

名所橋

名所池

はち□や魚の心もおのつからさそ廣澤の池のみなそこ

名所澤

あかつきとふしみの澤に聞物は身のうきかすを鴫の羽かき

名所沼

あしねはふ玉江の沼のぬま水は底ゐもしらす茂りあひに鳧

名所瀧

君まては五代かさねて龜山の名たかき瀧の響をそきく

名所河

君かよをなかれて我やまつら川なゝせのよとの波にぬれ〳〵

名所海

いつて舟早きよすらしあなし吹するかの海のみほの沖つに

名所湊

ふなてせよこの世はあけぬさゝ波や八十の湊に田鶴鳴渡る

名所湖

みるめなきいそまに掛るさゝ波も月ややとさぬしかの浦風

名所浦

浦にすむ思ひやなそとあしかきのたえぬ烟をとふ人も哉

名所濱

はし立やよさの浦わの濱千鳥鳴てと渡る暮のさひしさ

名所磯

こゆるきの磯なつまむと出にけり主もみえぬとまやかた哉

名所汀

玉拾ふ淸きなきさも及はねはつたのみるめをかきそ集める

名所崎

浦にみつしほはなくともから崎の松や波間にいつもみゆ覽

名所嶋

山とのみまかきの嶋のみゆる哉たつしら波のよるこゆれ共

名所潟

立歸り誰かは又もきさかたやあまたにあらす浦のとまやを

名所泊

おほつかな舟路いつこそから泊この芦原の名ともおほえす

名所渡

たよりあらはいかになるとの渡共ゆくゑしらせよ出し舟人

名所田

うち返し昔を今に忍ふれはふるのわさ田も我身成けり

名所里

夢さめてふしみの里にやとすかなをはつせ出る有明の月

名所市

武士のたけき名をのみたつの市は人の情に身をやかふ覽

羇中山

草枕ゆふ山風のさむけれは今宵はさらにねんかたもなし

羇中峯

旅人は峯の雲にやましるらん夕風立ぬをちのやきもとなし〔衍歟〕

羇中野

旅ねにはつらきところやおほえ山夢もいく野の草枕して

羇中原

忘れすよ一夜伏やの月のかけなをその原の旅心ちして

羇中關

わすれめやきよみかいその旅ねにも心をとめし波の關守

羇中路

ゆふつくよほのかになくれ玉ほこの遠近たとる人も社あれ

羇中橋

今よりも行すへくれはいかゝせん夕日傾ふく峯のかけはし

羇中河

かちかへす人もあらなんすみた河こしかた遠き渡り成けり

羇中湊

はかなしなしらぬ港のかち枕一よはかりとたのむよるへは

羇中海

いせの海や波たかき浦の泊舟おほろけにやは夢をたにみし

羇中湖

旅人はけさからさきの舟とめていそきやすらんしかの山越

羇中浦

住吉のうらはの松のふかみとり久しかれとや神もうへけん

羇中濱

うきねせし袖をはほさて今宵さへ波におりしくいせの濱荻

羇中磯

それよりそ憂もしるはのいそねして波に袂をしほり染にし

羇中汀

うきをしる人は汀のとまやにも旅のあはれは波そかけける

羇中嶋

今は身にこゝもかしこも旅なれと名にしたはるゝ都嶋かな

羇中瀉

跡よりやまた夕しほのなるみかた遠き浦ちをいそく旅人

羇中渡

河の名もことゝふ鳥もあらはれて角田川原は都なりけり

羇中泊

すゑしらぬもゝ夜の旅の舟路哉こゝそ泊とけふはこけとも

羇中里

すか原やふしみの里の夕くれにそゝろにのみも宮古戀しき

山家春

しかりとて花やはにほふ山さとは雪さへきえて春そ淋しき

山家夏
よしさらはさらてもねなん山里の竹のあみとの明やすきよを
山家秋
山にても猶うきときや秋ならむみねの朝霧晴ぬ詠に
山家冬

山家曉
山深き寢覺にそしる鳥のねをきかても夜半のあくる物とは
山家朝
日のかけはむかひの山にまつみえて朝もおそし松の下かけ
山家夕
暮ぬとて峯よりおろす山風に竹のさけとをまかせてそみる
山家夜
たえすふけ夜はの枕の松の風ねてはうきよの夢もこそみれ
山家風
うきよをはわすれんと思ふ山里に人たのめなる松の風哉
山家雲
峯たかく柴のいほりをむすはすは夕ゐる雲の宿もあらしや
山家烟
よそに人いかゝみるらん山里はさひしきにこそたつる烟を
山家雨
さらぬたにくもりふたかる柴の戸に何を詠と袖ぬらすらん
山家路
さとひたる庭のみち哉朝夕にひろふつま木の跡を殘して
山家水
山深みせきいれて落す谷水のすむとはすれと末もしられす

山家庵
奥山の花みかてらにとひしいほち南後としめてましかは
山家草
庭に生る岩もとこすけうちはへて浮世の道やかくしはつ覽
山家苔
露しつく草の庵にかはらぬは岩やも軒にこけやむすらん
山家木
庭にたつならのひろはもあはれ也これも一木の影と賴めは
山家鳥
我友と聞へきならはまれに鳴み山からすもひとつれはうし
山家虫
山里はいつなくとても淋しきに今朝よりしつる日暮しの聲
田家春
ますらをはをのか門田をうち侘て春の心ものとけくはなし
田家夏
山ちかみなかるゝ水をせきかけて秋まつ小田の庵そ涼しき
田家秋
秋田もるかりほのしつか藤衣ぬるゝならひの露そひまなき
田家冬
いほあるゝ冬田のあせのしもくつれ道絶ぬとて問人もなし
田家風
露はらふ山田の庭のいな席からても秋の風そ吹しく
田家雲
あせつゝくとを山もとは雲とちて淋しき小田のひとつ庵哉
田家烟
するほそき山田のいほの烟かなかりほすほとやゆたか成劔

田家雨
あれはてゝすむ人もなき小山田に猶も庵もる雨の音哉
田家鳥
かりにくる人そまたるゝ我門のいなをゝせ鳥の鳴につけても
田家虫
松むしをいほにやとしていなはもるしつか心の色にも有哉
春夜夢
かくはかり醒てあやなき春のよの夢の中には悲しとそ思ふ
夏夜夢
さめて後思ひしる社はかなけれそもうたゝねの夏のよの夢
秋夜夢
さま〳〵の夢をみはてゝなかむれは猶手枕になかきよの月
冬夜夢
冬のよの枕の氷床のしもむすひつゝけて夢さめにけり
曉夢
ねてもみえねてもみえつる夢なれは曉とても何かさむへき
短夢
うたゝねの夢にみえつる七十年のむかしを永く何思ひけん
夢驚
驚ろかす人なき夢も覺にけり法のさとりのかゝらましかは
山眺望
信濃ちやみつゝわれこしあさま山雲は煙のよそめ成けり
野眺望
山かくす霞も雲もなけれ共さかひしられぬ野への末哉
海眺望
いほさきや松原しつむ波まより山はふしのね雲もかゝらす

雨中懷舊
かす〳〵に昔をかたるわか袖は雨も涙もふりやそふらん
深夜懷舊
更くるまて猶なに事を語るらん昔おほゆる夜半のまとひに
菴懷舊
昔たにむかしを忍ふ草の庵にわか袖ぬらす雨のをと哉
閑居懷舊
忍ひこそ今はせさらめいにしへののこる心を何いとふらむ
夢中懷舊
よしさらはうつゝなきよになしはてゝ昔も今も夢と思はん
寢覺懷舊
夢かとも思へは老のねさめなりなにそむかしのうかふ心は
懷舊涙
いかにして昔忘れて老か身はさても涙のもろきかとみん
獨懷舊
おなしくは友にみしよの人も哉戀しさをたに語りあはせん
老後懷舊
世かたりにたれつたふ覧老か身のたゝめのまへに過し昔を
懷舊非一
哀てふ事につけつゝ口のはに我たらちねのかゝらぬはなし
寄日述懷
おしましな光もみえぬ曇り日のはてはかたふく身の齢とて
寄月述懷
やよやさて月もうきよにすみわひは入山のはに道連をせん
寄星述懷
われまほる今年のほしもおほつかないかにかてらす光成覽

寄風述懷
今は世に嵐の風のはけしさもうき身をせむる音とこそ聞
寄雲述懷
風をいたみ空にのみしてたつ雲のやとり定めぬ山のはも哉
寄煙述懷
あはれとや今日まて人を夕煙たちをくるへき我身ならねは
寄露述懷
身の秋はなとをき所なかるらんうらやましきは野への白露
寄雨述懷
頼むかけたちをくれにし昔より雨にぬるへき身とは思ひき
寄霜述懷
いかにせむふりをける身の袖の霜君か光のいてゝけたすは
寄雪述懷
かひなしな年のみふりて積れともゆき歸るへき方を知らねは
寄山述懷
世のうきにかへてすむへき山ならは吉野の奥も淺かりぬへし
寄關述懷
わか身をもわれそとめける思ひたつ道には更に關守もなし
寄道述懷
はる／＼ときそのかけ橋君ゆへやあやうき老の身を忘れ劔
寄橋述懷
旅人の駒のあをともとゝろきて橋に行かふ袖あまたなり
寄沼述懷
誰爲に芦まの沼のみくりなは身をくるしめて世にましる覽
寄江述懷
これも又身をうき船のよるへとは猶頼まれぬ江に社有けれ

寄河述懷
君か代に又あひみんと思はすは何か年へんふる川のすき
寄瀨述懷
あすか川あすをもしらぬ老か身に世の淵瀨をはいかゝ頼ん
寄海述懷
いせの海に沈まは沈め身の果よ釣のうけなるさまも恨めし
寄浦述懷
すまは又これそうきよもはなれたる浦の小嶋の笘の假いほ
伊勢
いすゝ川その人なみにかけす共たゝよふ水のあはれとも哉
石淸水
ちかひをきし言のはいかに石淸水人のひと共思ふへきかは
加茂
ことはりをたゝすの神にねきかけて猶さりともと世を頼哉
松尾
跡たれしむかしもとをし末も久し神にあひをひの松尾の山
平野
いにしへのなにはの事を思ふにもふりぬは神の誓ひ成けり
稻荷
さりともといなりの山の瀧の水かへりてすまん世を祈る哉
春日
大和ちにあゆみはこひて程近き三笠の山はふりさけもみす
三輪
つねにすむわしの高ねの月影はこゝにも三輪の杉の木隱れ
布留
身にたくふふるの社のみしめ縄朽ぬちかひそ猶たのみ有

大原野

大原やをしほの山をしめしより松の千とせも神のまに〳〵

吉田

ちかひあるよしたの宮にいのりてや民のかまとも豊なる覽

住吉

住よしの神のしるへにまかせつゝ昔にかへるみちはこの道

日吉

七十年のよはひをたもつこれや此なゝの社のめくみなる覽

梅宮

咲やこの神も名におふ梅の宮御代の春へにあふはうれしな

祇園

代々かけてまもらさらめや昔より神のそのとはしら川の波

北野

九重の北のゝ神にいつはりのなきよとてこそ君まもるらめ

貴布禰

きふね川玉ちる波のかす〳〵に祈しことよあはれかけなん

出雲

そのまゝに神よも遠くへたゝりて跡やふりぬる出雲八重垣

玉津嶋

神の名を猶もたのまむ玉つ嶋かきをくもくつ光なくとも

熊野

たのむ神われみしまのゝ浦ならは哀をかけよ波のたよりに

如是相

綿つうみの深き御法をしりぬれは假染ならぬ蚕のみるめを

如是性

はれくもる光は雲のしわさにてもとより月は有明の空

如是躰

春の花秋のもみちをみつる哉をのかさま〳〵有にまかせて

如是力

河上のちひきの石も流れけり波はいくらのちから成らん

如是作

むかし誰つもりなしけんうこきなき山又山の岩の姿を

如是因

たねをまきなはしろ水を引までも秋のたのみを思ふ成けり

如是縁

難波なる蘆かり小舟かりそめの世の謗もえにはよらすや

如是果

色々の心の花はみな散てなれることのみは佛ならすや

如是報

花のうてな玉の飾にあける身をうくろも世々の報とをしれ

如是本末究竟等

いかてかは古いまといひわけむめくれはをなし月日成けり

地獄界

いかはかり重き罪とて沈む覽ひまもならくの底のくるしみ

餓鬼界

手に結ひ身になつさへは味きなく凉しき水も胸をやくなる

畜生界

燈のひかりにふける夏虫は身をやくことをしらぬ成けり

修羅界

雲をおろし波をたつるも山風のあらき心のしわさならすや

人界

うけかたき人の數には生れきてさとる心のなとなかるらん

天界

たのしみを空にきはめて雲の上にとひや立らん天の羽衣

聲聞界

たちのほる煙の末もをのつから猶のこさしと山風そふく

緣覺界

花を眺め紅葉をみてそ知れける風も吹あへぬ世のはかなさは

菩薩界

人わたす誓ひの舟のなかりせは波の底にやしつみはてまし

佛界

六のまよひ三のさとりの外のみは何かまことの佛なるへき

寄天祝

君か代は猶行すゑも久かたのあめにはしめし神のまに〱

寄日祝

かしこくそてる日の本と名つけゝる曇らぬ君を主にはして

寄月祝

君か代はめくみに秋の月なれはわか家々のひかりとそみる

寄星祝

北にすむ七のほしそくるとあくとめかれす君を猶守るなる

寄雨祝

時の雨いまそほとこすゆたかなる袂にうけて民やうれしき

寄風祝

此頃はこゝのかさねのうちのみか野山も風の音そ聞こえぬ

寄國祝

あし引のやまとの國をふみ分てすみはしめしも我君のため

寄郡祝

君かすむよしのゝ郡名にふりてそのかひ有と今そしらるゝ

寄都祝

たて初し宮この名にそしられける君たいらかにすめと成鳧

寄道祝

玉鉾の道の道なる御代にこそ我しきしまはいとゝさかふれ

寄水祝

君か代にいつみの水のたえすしていく千とせへん松の下影

寄巖祝

さゝれ石の巖となれる苔の上に生そふ松のはてしやはある

寄苔祝

この頃は波うつ岩にこけふかしつゝみの瀧の音やきこえぬ

寄竹祝

君すまはなをしけらなん九重にみしよをのこす庭の吳竹

寄松祝

十かへりの千歲の松を庭に植て花まちとをに君そみるへき

寄椿祝

千とせふる君か御かけの玉椿うへてなたゝるやとゝなら南

寄榊祝

八度をく霜の後にそあらはるゝかれぬ榊の君かめくみは

寄杉祝

ときはなるかけとそ頼む君か代にあふさか山の杉の青はを

寄鶴祝

鳴たつの千とせの數をみつ鹽の跡にみせたるわかのうら哉

寄龜祝

逢かたき御代にあふてふ龜なれはをのかこふをや君に讓覽

天授二年の夏の末つかた。山風もしつかにふきて。しけき梢

も枝をならさす。日くらしの聲ものとかに聞えて。大宮人もいとまある頃なれはにや。內春宮二御かた千首御歌あそはさるへしとて。關白なとを初として。面々おなし題にて。歌奉るへきよし仰こと有しかとも。いさゝかさはる事はへりて。みなのかれ申はへりき。そのゝちいくはくの日數もなくて。みなみなよみいたさせ給とて。淸書なとせらるゝよしきこえしかは。いつのほとにやと。ふしきにそはへりし。二御かたならひに關白歌は。おなしつらにかきなへつゝ。わさと御名ともをもかくされて。よしあしなとくはしく申させんとの御心はへなるへし。數々給おきて見侍しに。さら〳〵卒爾の御沙汰ともおほえす。五句の玉をつらね。三十一字の金をみかかれり。おろかなる老のみしかき心。さらにさとりかたし。さりなから。かしこけれは仰のまゝに。いさゝか心のそこをものこさす。後みん人の嘲をもわすれて。しるし申侍りし。あまりに感興ふかくはへりしにたへす。點なとつけ侍りしも。今は又くいの八千度そ覺る。是によりて。いとはれし命なかさもかひある心地し侍りて。かゝることともを申ても。濱千鳥の跡にともなはさらんは。ことに和歌のうらみふかゝりぬへく侍るを。又おくれて師兼卿經高卿なとたてまつるとて。いつれも點めされしかは。かやうの人々にたくひても。猶おひ〳〵のかすにもや入とて。おもひたち侍るなり。たゝしこの御歌とも心にうかひて。別の風情いてきかたし。大かた此御歌すこし墨付侍るたくひは。いにしへにもならひ。今の世にも過てそ見及ひ侍。さのみおほえ侍られは。春夏秋冬戀雜に一首つゝかきいたし侍る也。

御製には

ありへての後をはしらす櫻花散てそ人にうきめみえける
見ても又ほとなく明る東雲にやかてまきるゝむら雲の月
小倉山みねの朝霧立ならしおもひつきせぬさをしかの聲
雲迷ふあらしの音のさき立てまたきしくるゝ嶺の松原
夕けとふつけの小櫛もひく方に思ひなされて待そはかなき
思ひつゝぬれはみし世に歸る也夢路やいつもむかし成覽

春宮御歌

みよしのゝ瀧のしら玉數そひてかつちる花に春風そふく
なりはひにたのむ所や多か覽日をへてつきすとる早苗哉
尋ねはやうきをそむける住ゐにも世は忘られぬ月の影哉
鶯のなかぬはかりそ年のうちに春や遲きとさける梅かえ
物思へはにほのうきすもよそなれや沈む計りのみを歎哉
やともなく月に行へき道なれやさのゝわたりの秋の旅人

關白左大臣

櫻花古さと人はとはすともちらはちれとはいかゝ思はん
山のはのつらさをしらて夏のよはなか空にのみ殘る月哉
月たにも軒のしのふをもりかねてすます成ぬる秋の古里
里よりは時雨とみつる山端に雪をのこしてはるゝうき雲
ます鏡人はとゝめぬおもかけのみる度每になとうかふ覽
難波江のみを盡してもつかへきぬ深き心のしるし表はせ

師兼卿

花はちり月は有明になる頃の春の別れそいはんかたなき
しのふへき初音なりとも郭公雲間の月に物わすれせよ
世中のうけくに秋の月をみて淚くもらぬよはそすくなき
曉のね覺の千鳥なれをしそ哀とはおもふ友なしにして
蓬生のもとの雫となりやせん契りし末の露もかはらて